

ハイスクールD×D～チートが転生させたそうですよ？～

夜叉猫

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

暗闇から引き上げられた少年。

自らの魂はどうやら特別なモノだったようで……？

——キミ、転生してみない？——

その言葉から始まる第二の人生。

バグキャラ？

男の娘？

変態が弟？

……とりあえずは楽しく過ごそうか……

少年は一体どんな物語を紡いでゆくのでしょうか……？

ボーイズラブ、ガールズラブ、アンチ・ヘイトは念のため付けさせて頂きました。

※TSキャラが登場することもありますのでそれはご了承ください。  
い。

## 目次

ネタバレ注意	
キャラ設定【1】	1
転生無敵のシオリ	
プロローグ	7
ひとまずの確認	21
予想外だそうですよ？	26
誓いの時	33
旧校舎のディアボロス	
原作始まりました	40
面倒なことになりました	48
顔合わせしました	56
説明しました	66
出会いました	73
戦いました	83
遭遇しました	91
乗り込みました	103
決着つきました	115
エピローグです	126
戦闘校舎のフェニックス	
何やら始まりそうです	137
話し合いました	148
修行開始しました	161
試練与えました	172
休息しました	181



第68話

第67話

第66話

第65話

第64話

第63話

第62話

第61話

第60話

第59話

第58話

第57話

第56話

第55話

第54話

第53話

第52話

第51話

〜停止教室のヴァンパイア〜

〜エピソードです〜

〜『女の幸せ』返しました〜

〜白と出逢いました〜

〜失言しました〜

〜怒りに震えました〜

〜至りました〜

600

586

571

561

549

539

531

522

516

511

505

496

489

481

473

467

460

448

440

432

424

416

410

401

第80話	第79話	第78話	第77話	第76話	第75話	第74話	第73話	第72話	第71話	冥界合宿のヘルキャット	第70話	第69話
689	680	673	668	661	650	645	637	632	627		620	609

# くネタバレ注意く キャラ設定【1】

## 【名前】

『兵藤 士織』

## 【見た目】

デート・ア・ライブ 『五河 士織』

## 【所有神器】

『フェアリー・エンジェル  
精霊 天使』

↓デート・ア・ライブに登場する精霊の力を使うことができる。

☒ バランス・プレイヤー 禁手 ☒

『デイセント・オブ・セフィロト  
現界せし天魔の奇跡』

↓背後に複数個の果実を出現させる。

齧った果実によつて使える能力が異なる。

『ヤハウエ・エロヒム  
神威霊装・神番』

↓黒の袴に藍色の羽織。

二本の刀を腰に携え、首には漆黒の長布が巻かれている。

所謂士織のための霊装。

『ファウンダー・エレメント  
世界を構成する者』

↓五大元素を操る能力。

☒ バランス・プレイヤー 禁手 ☒

『???』

↓不明

## 【能力】

『エンジェリック・スベル  
妖精の魔法』

↓アニメ『フェアリーテイル』の魔法を使うことができる。





↓『赫龍帝の四皇鎧』の形態のひとつ。

左右の腰辺りに二丁のレールガンが装備され、両肩には原作に出てきた『龍牙の僧侶』時のビーム砲。

両腕には二丁のビームライフルを持ち、背後には剣の刀身部分を彷彿とさせる四対八機のドラグーンが出現する。

【備考】

原作の兵藤一誠とは違って極度の変態ではない。

士織と同様に家族、仲間を大切にしている性格である。



【名前】

原作↓『木場 祐斗』（男性）

本作↓『木場 祐奈』（女性）

本名↓『イザイヤ』

【見た目】

原作13巻で登場する女体化した木場祐斗と同じ見た目。

【所有神器】

『魔剣創造』  
ソード・パース

↓自らの想像した魔剣を創り出す能力。

どのような性能になるかは使用者の実力に比例する。

今作品では『剣』よりも『刀』を創造するのが多い。

☒亜種禁手☒

『双覇の聖魔剣』  
ソード・オブ・ビトレイヤ

↓『聖』と『魔』という本来混じり合うあはずのない力を併せ持つ

聖魔剣を創造する能力。

本来は亜種の禁手なのだが、通常の禁手が書かれていないため、実質こちらが通常の禁手のような扱いになっている。

【備考】

原作では男性だったが、今作品では女体化した士織のヒロインの1人。

士織から魔改造とまではいかないが鍛えられたため、戦闘スタイルが原作とは変わっており、刀系統の魔剣による『抜刀術』などを使った戦い方をする。



【名前】

原作↓『レイナーレ』

本作↓『夕麻』

【見た目】

原作と差異なし。

【備考】

兵藤家に住む堕天使4人娘のひとり。

士織たちの母親の葵泉とともに家事に精を出している。



【名前】

原作↓『ミツテルト』

本作↓『美憧』

【見た目】

原作と差異なし。

【備考】

兵藤家に住む堕天使4人娘の1人。

アーシアと仲が良く、よく買い物に行っている。

———が、その描写は書かれていない……。



【名前】

原作↓『ドーナシーク』

本作↓『緬奈』

【見た目】

けんぷファー『瀨能 ナツル』  
髪を黒く染め、つり目になっている。

【備考】

兵藤家に住む墮天使4人娘の1人。  
アザゼルの『ちよつとした実験』に協力した結果、何故か女体化してしまった。

本人は全く気にしていないようだが、最近では精神が身体に引っ張られているようで、女性らしくなっている。

士織の眷属であり、「兵士」の駒を持つ。



【名前】

原作↓『カラワーナ』

本作↓『華那』

【見た目】

原作と差異なし。

【備考】

兵藤家に住む墮天使4人娘の1人。  
士織たちの父親の賢夜と共に修行するのが趣味。



【名前】

『兵藤 賢夜』

【見た目】

長身でがっちりとした鍛えられた肉体をしている。  
イメージキャラは今のところなし。

【備考】

士織たちの父親。

ただの人間にも関わらず、堕天使4人娘との修行もこなすことができ、コカビエルからイリナを守ろうと戦ったこともあったが死にはしなかった。



【名前】

『兵藤 葵泉』

【見た目】

ネトゲの嫁は女の子じゃないと思った？ 『玉置 亜子』

【備考】

士織たちの母親。

家族が大好きで、何処か子供っぽい性格をしている。

く転生無敵のシオリく  
くプロローグく

黒い黒い底知れない闇が辺りに広がる。

——嗚呼、寒い……。

目が、耳が、口が、鼻が、身体が、本来の機能を果たさない。

しかし、感じる——『寒さ』。

——嗚呼、怖い……。

何も感じない筈なのに襲ってくるこの『寒さ』。

それがとてつもなく『怖い』。

そもそも何故こんなことを考えられるのかも分からない。

機能を果たさない筈の自分の身体。

なのに思考という行為を行うことが出来る。

——嗚呼、助けて……。

誰でも良い。何処でも良い。

それこそ地獄でも良いから此処から連れ出して……!!!

此処に居たら……自分が自分でなくなってしまう気がするから  
……。

——そしてそんな時、眩い一条の光が差した。

黒い黒い底知れない闇の中にも関わらずその光は弱まることなど  
無く力強くその存在を主張し続けている。

——嗚呼、暖かい……。

機能を果たさない筈の身体。

しかし、自分は確かにその光に向かって手を伸ばした。

——そこに『俺』を連れて行って……!!!

差し込む光の原点。

『俺』はそこに向かって一心不乱に手を伸ばした。

——暗闇は嫌だ……『俺』は陽だまりに行きたい……っ!!!

届かないのは分かっているが『俺』は諦め切れない。

どうしても陽だまりに行きたいのだ。

——嗚呼、神様……。

——『俺』の願いを聞き届けて下さいますか……？

——最初で最後のお願いですから……。

『俺』は必死に手を伸ばしながらそんな言葉を頭に浮かべた。

——『良いよ。そのお願い叶えてあげる』

突然響いた優しい声。

それと同時に今まで感覚の無かった自分の手に暖かい何かが触れ

た。

その瞬間『俺』は引つ張りあげられる感覚を感じた。

そして『俺』は――

---

---

「はっ……!?!」

引つ張りあげられる感覚を感じたのも束の間、俺は目を開いた。

視界に映るのはそこはかたなく安心感を感じる和室。

静かだが微かに揺れる風鈴の音が聴こえる。

口が開き、懐かしい香りが鼻をくすぐる。

脚に力を入れれば立ち上がることも、腕を組むことも、首を回すことも何の問題もなく出来る。

――嗚呼、嗚呼、嗚呼。

目が、耳が、口が、鼻が、身体が、本来の機能を果たしている。

「……嗚呼、なんて素晴らしい事なんだ……」

ツウつと頬を涙が流れた。

『普通』とはなんと素晴らしい事なのだろう。俺はそんなことを思った。

「――感動しているところ悪いんだけど……良いかな?」

「っ……!?!」

突然背後から声を掛けられる。

俺は直ぐに後ろに視線を向けてその声の主を確認した。そこには

---

「ああ、そんなに警戒しないで良いよ。

別に危害を加えるつもりは無いからね」

——ここにこと笑う一人の少女がいた。

和服を着こなし羽織りを纏っている少女はそう言うのと俺の前に腰を下ろした。

「……君は一体誰だ？」

「それを語るのも吝かじゃないけど……まずひとつ聞かせてくれないかな？」

少女は真面目な表情を浮かべると、ひとつ息を吐いて口を開いた。

「——キミは自分が『死んでいる』と自覚しているかい？」

「……え……??」

一瞬思考が止まった。

俺が『死んでいる』……？

この少女は何を言っているのだろうか……？

「……その様子だと自覚していないみたいだね……」

少女は頭に手を当てると呟く様にそう言った。

「それじゃあ、俺の正体云々の前に今のキミの『立ち位置』についてを話すことにしようか」

少女は立ち上がるとこぼんと咳払いをして説明をし始める。

「まずそもそもなことだけど、キミは既に死んでいるよ？」

その証拠に——自分の事を思い出してみて？」

俺は少女に言われた通りに自分の事を思い出そうとする。

しかし——

「——あれ？何にも思い出せない……？」



自分の名前も歳も家族も友人も何も思い出せない。  
俺が何故?という思いを込めて少女を見詰めると、

「死者の魂にはしばらくの間は記憶が刻まれている。だけどそれは本当にしばらくの間だけなんだよ。」

記憶は時期に薄れていき、完璧に消える。

そうなってしまうとその魂は真っさらの状態となり、次の輪廻の環に乗ることになる」

淡々と少女は語った。

何と言うか、難しい話であったが何とか理解することが出来る。

「キミがいた暗闇の空間はそんな輪廻の環に乗る寸前の魂が集まる場所だよ?」

「ということは俺が俺でなくなる寸前だったのか……危ない危ない……」

俺は胸に手を当て、ほっと息を吐き少女の言葉に安堵する。

「キミ、自分がどれだけ特殊なのか分かってるかい?」

少女は俺の方を真剣な目で見詰めながらそう言った。

「え?何が?」

「……キミがいたのは輪廻の環に乗る寸前の魂が集まる場所だよ?」

ということとは、記憶が無くなり真っさらの状態の筈なんだ。

なのにキミは自分の『意思』で『考え』であの場所から出たいと『願った』。

普通の魂ならまず自分の『意思』を持つことすらできない……」

「……えっと、つまりどういうこと?」

「簡単にいえばあそこではただ魂が浮いているだけの筈なのに君だけは生きている時と何ら変わらない事をする事が出来たということだよ。」

まあ、流石に記憶は消えていたみたいだね……」

少女はよく意味が分からなかった俺にわかり易く説明をしてくれる。  
つまりは俺は少女から見れば異常なのだろう。

「まあ、ともかくキミの立ち位置は『不思議な魂』って事だよ」  
少女は再び俺の目の前に腰を下ろして最後にそう締めくくった。

### 閑話休題

「そろそろ君についてと此処は何処なのかについて教えてくれないか？」

とりあえず俺が死んだって事はどういう形にしろ納得はしたからさ」

俺は少女に向かってそういった。

何となく分かったような気はするが一応確認も兼ねて直接聞いた方が良さそう。

「ん。そうだね。」

それじゃあ、簡単な自己紹介でもしようかな」

少女は俺の言葉にそう反応するとゆっくりと間を開けて口を開いた。

「俺は俗に言う『神様』という存在だね。」

まだ神様になってから日は浅い方だけど一応最強の神様として君臨している。

そして此処は俺の……【神の間】。

簡単に言えば俺の作った俺の為の空間みたいなモノだよ」

少女は淡々とまるで当たり前前のようにそう語った。

まるで夢物語のような内容に俺は我が耳を疑う。

「神様って……何それ冗談？」

「うん……そんな反応が妥当だろうね……」

——でも事実なんだよ。

少女は苦笑いを浮かべながらそういった。

「というよりキミ、記憶を完全に無くしてる訳じゃないみたいだね……それなら修復できるかも……待ってて……」

少女はそう言う俺の額に手を当てると目を瞑った。

その整った顔立ちにどぎまぎしたのは秘密だ。

——しばらくの後、俺の頭の中に何かの流れ込んでくるような感覚を感じた。

少女はその感覚が収まると成功したみたいだねと言ってにこりと魅力的な笑みを浮かべる。

「そうみたいだね……」

何と言うかちよつと変な感じはするけど……」

何と言うのだろうか、記憶を辿るとそれはまるで映像を見ているような感覚がするのだ。

「まあ、記憶が突然流し込まればそんな感覚もするだろうね……」

「ちよつと混乱するけど……ありがとう俺の記憶を直してくれて」

俺は少女に頭を下げる。

何せ大切なモノを俺に返してくれたのだから。

「記憶は元々キミのモノだからね。」

それに思い出は……大切な宝物だよ」

少女は昔を懐かしむかのようにそう言った。

しばらく沈黙が続き、突然少女がパンと拍手を打つ。

「さて、物は相談なんだけど……キミ、転生してみる気は無いかな？」

首をこてんと倒しながら少女はそう言った。

「転生？」

「そうそう転生。」

実は俺誰かひとり転生させてくださいって他の神様から言われててね……。一応その転生させるのに相応しい人をとつか魂を探してたんだ」

少女は腕を組むと難しそうな顔をしてそう口にした。

「そんな時にキミが現れたって訳だ」

「……えつとつまりタイミングがいいから君転生しない？つてことか？」

「タイミングが良いっていうのもあるけどキミなら転生させても良いなって俺が思ったからだよ」

少女は俺を指さしながらウインクをひとつした。

(しかし、転生……所謂【神様転生】って感じかな？)

確かに俺が生きてた頃はそういうのが大好きだったみたいだけどもさか自分が体験するなんて思いもしなかった……。

とういか俺の記憶を辿つてるとなかなかオタクだったんだなって思わせられる……。

ん？もしかして……)

俺は少女の容姿をしつかりと確認する。

「どうかしたかい？」

少女は俺の視線に気がついたのか疑問の表情を浮かべながらそういった。

「いや、ちよつと自分の記憶を辿つてたら君の姿を見た気がしてね、よくよく考えたら君の姿って【空の境界】の両儀式と同じじゃないか」

「あはは……まあ、姿はそうだけど気にしないで？一応別人だから」

少女は苦笑いを浮かべながら俺の言葉に返す。どうやら少女も【空の境界】を知っているようだ。

「それでそろそろ答えを聞きたいんだけど……？」

「あ、ああ、答えね。」

それなら——良いよ。

むしろさせてもらいたいところから頼みたいくらいだ」

俺がにっと笑いながら言うとう少女は良かったという表情を浮かべて口を開いた。

「そうかい！

それなら話は早い。

早速色々なことを決めていこうか！」

そういった少女はぱちん、と指を鳴らす。すると周りの風景が一瞬にして変わり、辺り一面真っ白な空間になった。

俺が辺りをキョロキョロと見回していると、

「流石にあの場所は俺のプライベートルームだからね。」

転生とかいう真面目な話は本来の場所で話さないと」

少女が親切にもそう言ってくれた。

「さて、まずはキミの転生する場所だけど……勝手ながら俺が決めさせてもらうよ。」

転生先は「ハイスクールD×D」の世界。

内容は……知ってるかな？」

「あ、うん。」

大丈夫だ。その小説なら俺が生きている時に大好きだったヤツだから」

「そうかい。なら原作知識は要らないね……。」

おっと、先に言わせてもらうけどもしかしたら原作知識というものは役に立たないかもしれないからね。

キミが行くのはあくまで「ハイスクールD×D」の世界に似た場所だからさ」

それから少女は世界についてのことと俺の立ち位置について親切に説明してくれたのだった。

「なるほど、つまりはあんまり原作知識を頼りにしていると失敗するかもしれないんだな？」

「……簡単に纏めたね……まあ、簡単に言えばそう言う事だよ」

少女はそう言うのと少しだけ溜め息を漏らした。

どうやらあんな親切に説明をしたのにまさか此処まで短くされるとは思わなかったのだろう。

「ちなみに俺って何か転生特権とか貰えるの？」

流石にごくごく普通の一般人である俺が何の能力もなくあの世界に行ったら軽く死ぬる気がするのだ。

「勿論だよ。」

ちなみに聞くけどキミは無双してみたい人かな？」

「無双ね……確かにしてみたいな……。」

こう、強いキャラを軽く捻るってみたいなのは正直やってみた  
い。

「ん。分かったよ。」

じゃあ、キミのスペックと能力はこんなものでどうかな？」  
少女はそう言うと言をぱちん、と鳴らして虚空から紙を出現させた。

○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

容姿

【デート・ア・ライブの五河 士道】

身体能力

【世界最強と同じ程度】

魔力などの力

【一応無限だがリミッターを掛けるのは自由】

能力

【五大元素を操る能力】

【デート・ア・ライブに登場する精霊の力を使える能力】

【FAIRY TAILの魔法の知識】

備考

もしリクエストがあるのならどうぞ。

○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

「チートだねえ……」

俺はその紙に書かれた事を読み上げるとつついそんな言葉を漏らしてしまった。

「キミが無双してみたいと言ったからね」

「それもそうだね……」

確かに自分が言ったことだがまさか叶えてくれるとは思わなかったのだ。

「ちなみにだけどこれに変更を加えることは可能か？」

「良いけど流石に行き過ぎだと思ったら俺が止めるからね？」

「了解。んじやまずは——」

俺は少女を交えて自分の魔改造について話し合い始めた。

~~~~~

「よし。とりあえずはこんなものだな」

「結構悩んだみたいだけどイイ感じにバグキャラになったね」

「まあ、無双したいのならバグキャラにならざる負えないだろう?」

俺が少女に向かって笑いながらそう言うと、少女は瞳を閉じてふっ、と笑った。

「それじゃあ、そろそろ転生してもらおうかな……。」

ちなみにキミはいつの時間軸にどんな条件で送られたい?」

「そうだな……その辺は任せるよ。」

俺が変に指定しても失敗しそうだしな」

「ん。了解したよ。」

それじゃあ、今から送るけど何か言いたいこととかあるかい?」

俺のリクエストを何も言わず叶えてくれる少女はそう言って俺を見詰めた。

「そうだな……じゃあ、最後に君の名前教えてよ」

「ん?ああ、そう言えば名乗って無かったね……良いよ教えてあげる」

少女は咳払いをすると俺を見詰めながら口を開いた。

「俺は【神々シラヌイを司る神】。またの名を【不知火しらぬい 夜鶴よづる】。

一言でいうなら——

——愛すべき者を幸せにする神様って所かな？」

「ワアオ……なんだか凄い神様なんだな。

何はともあれ、ありがとう夜鶴。

これからも宜しくな」

俺が少女——夜鶴——にそう言うのと俺の身体は白い光に包まれる。

そして、意識は暗いながらも暖かいところへと落ちていった。

「ふう……初めて転生させたけど……まあ、意外と疲れないものだね」

俺はそう言いながら首をこきつと鳴らす。

そして、いつも通りの和室の空間に戻した。

「ん……!!」

やっぱり此処が落ち着くね」

畳の上に寝転がり、背伸びをする。

ほのかに香る畳の匂いと風鈴の音は癒しを運んでくれる。

「後は此処に——」

俺は自らの愛する者たちの顔を浮かべる。

しかし、そんな中でもやはり彼女が頭の中で一番最初にそして長く浮かび続ける。

「——私が居れば完璧ですか？」

突然俺の頭の上から声が聞こえた。



俺はにやける顔を隠そうともせず起き上がるとその声の主を抱えて自分の胡座の上に座らせる。

「正解だよ——オーミ」

そしてその頭を優しく撫で、彼女という存在を愛でる。

「ふふふつ……。くすぐりたいですよ夜鶴。

でもやっぱり気持ちいいです……」

そう言つてオーミは俺の胸に擦り寄る。

「やっぱりオーミが一番だね……」

俺はそんなオーミを抱きしめてそうつぶやいた。

そして、先ほど転生させたばかりの少年のスペックを書いた紙をひとまず放るとオーミとのひと時を存分に堪能するのだった。

~~~~~

○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

容姿

【デート・ア・ライブの五河 士織バージョン】

身体能力

【世界最強と同じ程度。

しかし、基本的にはリミッターで上級悪魔よりも強いレベルで制限している】

魔力などの力

【一応無限だがリミッターを掛けるのは自由】

能力

【五大元素を操る能力】

【デート・ア・ライブに登場する精霊の力を使える能力】

【FAIRY TAILの魔法の知識】

【不知火式の知識】

備考

・【神々を司る神】とのコンタクトを取ることが出来る。

・成長限界が無い



くひとまずの確認

「……うん……」

ゆつくりと意識が浮上してくる。

目を開ければそこはベッドの上。

身体を起こして辺りを見回せば何処にでもありそうなシンプルな部屋が広がっていた。

耳を澄ませばカチ、カチ、カチ、という時計の針の動く音のみが聴こえてくる。

置いてある家具からして今の自分が幼子ではない事を認識した。

都合のいいことに部屋には姿見が置いてあったため俺は現状を確認するためにそこに歩み寄って行った。

「……あれ？」

そして気がついた。

背をくすぐる位にまで伸びた暗めながらも美しい青髪。

中性的——否、最早少女のような顔立ちを歩けば大半の人を振り返らせる程のモノだろう。

今の自分は所謂『美少女』というカテゴリーに分類される程の容姿だ。

つまり——

「姿のチョイスをミスったあああああつっ!!!」  
何が悲しくて男から男の娘にジョブチェンジしなければならないのだろうか。

しかも声が高くなってた事も地味に俺を傷つけた。

「……というより本当に俺の性別は男なんだよな……?」

まさか恐怖の性転換とかしてないよな?!

急に恐ろしくなって自分の身体を触ってみる。

胸は——無い!!

下は——あるっ!!!

ホツと息を吐き、冷や汗を拭う。

どうやら性転換という洒落にならない変化は起きていなかったよ  
うだ。

## 閑話休題

時計の針が指し示す時間は午前五時。

起きた時にちらりと見た時計は確か午前四時を示していたため、俺は姿の確認と落ち込みから復活するために1時間も要した事になる。

「……ひとまずは俺の今の扱いを確認したいんだけど……」

どうしたものか、と考えながらベットに腰掛けると俺の横、枕元に一通の封蝋された手紙が置いてあるのに気がついた。

おそらく夜鶴が寄越したものだろう。

俺はその手紙を手にとると何のためらいもなく開封した。

『男の娘への仲間入りおめでとう』

「第一声がそれかよ?!」

しかもご丁寧にも紙を1枚使い無駄に達筆で書かれているのが腹立たしい。

とにもかくにも、これを読まないで色々と分からないので我慢しな

がら読み進めていくことにする。

『……とまあ、冗談はさて置き、無事に転生出来たみたいだね。

俺自身誰かを転生させるのは初めてだったからうまく行ってホツとしてるよ。

ひとまずキミの今の立場なんかを説明させてもらうね？

キミは「ハイスクールD×D」における主人公、兵藤 一誠ひょうとういつせいの双子の兄という立ち位置にさせてもらったよ。名前を「兵藤 士織ひょうとうしおり」。

今は原作スタートの約二年前。

中学三年の時となっているよ。

容姿どころか名前まで女性みたいだけどキミはしっかり男性だから安心して欲しい』

「……夜鶴……せめて名前は男だと分かるものにして欲しかった……」

一枚目……いや、二枚目の手紙を読み終えた俺は無意識にそう呟いてしまっていた。

兵藤 士織って……絶対女だって間違われるだろうに……。

しかも主人公の……あの煩惱の塊みたいなのが俺の弟なのか……。

俺は今後どれほど苦勞するのだろうかと頭を悩ませながらも手紙を更に読み進める。

『次にキミに転生特権についてだけど、少しだけこちらで手を加えさせてもらったよ。

まず初めに「五大元素を操る能力」、「デート・ア・ライブに登場する精霊の力を使える能力」は2つとも神 器セイクリッド・ギアになっているよ。

名前を「世界を構成する者」、ファウンダー・エレメント「精霊天使」フェアリー・エンジェル。

そして、残りの2つ「FAIRY TAILの魔法の知識」と「不知火式の知識」には手を加えた。

「FAIRY TAILの魔法の知識」はその量が膨大だから「検索魔法」としてキミの頭の中に刻み込んだよ。

使いたい魔法はその【検索魔法】を行使して探してみてくれるかな？

勿論、魔法を使うにはある程度の慣れが必要だよ？

【不知火式の知識】についてだけど……これは俺の使っている武術だ。おそらく知識だけでは使うことは難しいと思っただからね……ある程度の武術への才能を与えておいたよ。

勿論、知識にある【業】を使ってもいいけど……出来ればキミだけの【業】というものも作って欲しいな』

「おお……夜鶴って優しいんだな……」

「ここまで俺にしてくれるとは……」

正直、全てを神器にしていなくて良かったと思う。確か神器の力を無効化する敵が居たはずだから……

俺は次に夜鶴に会ったら全力で感謝しようと心に決めた。

そして、最後の手紙へと目を移す。

『長くなっただけどこれが最後だよ。』

今キミがいるのはあくまで【ハイスクールD×D】に似た世界だ。

原作の物語があるからと言ってキミの行動の選択肢を狭めないで貰いたい。

せっかくの第二の人生だ。

どうか楽しく、そして道を間違えることのないように生きて行って欲しい。

それでは、キミの人生に幸福あれ……』

「道を間違えたりは絶対にしないさ……」

人生は正しく楽しく……が一番だ！」

俺は夜鶴からの手紙を綺麗に折りたたむと元の状態に戻し、大事に引き出しの中へと仕舞った。

気がつけば既に時間は午前六時。

一体手紙を読むだけでどれほどの時間を使っているのだと言いた

いがそれは置いておこう。

ひとまずは夜鶴からもらった能力の確認位は一通り終わらせたいものだ。

「まずは……比較的やりやすそうな知識の整理からかな……」

俺はそう呟くとベットに腰掛けながら【検索魔法】を行使するのだった。

く予想外だそうですよ?」

「どうも、兵藤 士織だ。」

俺が転生してから早くも半年。

これと言って特筆するものもなくただただ平凡な毎日を通じている。

「おゝい士織起きてるか?」

「起きてるよ……。」

何か用?一誠」

俺はドア越しに聞こえてきた一誠の声に反応する。

「ん〜……まあ、ちよつとした相談事……なんだが……。」

歯切れの悪い一誠の言葉に俺は不自然さを感じた。

腰掛けていたソファから立ち上がり部屋の入口まで歩み寄ると、ドアを開けて一誠と対面する。

「とりあえず立ち話もなんだし……入る?」

俺は自分の部屋へと一誠を招き入れてソファに座らせた。

何処かそわそわしている一誠。

俺は自分のベットに腰掛け、口を開く。

「それで?相談事って何?」

「ん?……ああ……言うより見てもらった方が早いだろうから見てくれねえか?」

そう言った一誠はおもむろに立ち上がると目を閉じて左腕を突き出した。

すると、一誠の左腕が光を放ち始める。

光は次第に形を成していき、左腕を覆っていく。

光が収まった時、そこには赤い籠手が装着されていた。

「……なんか最近トレーニングしてたら出てきちゃってよ……コレ、なんだと思う?」

一誠は頬をポリポリと掻きながら俺を見詰めてきた。

（ブーステッド・ギア赤龍帝の籠手）!?

なんでこの時期に出現してるんだ!?)



転生してから半年。

早くも原作ブレイクしていました。

「……っていうか一誠トレーニングとかしてたんだ？」

俺は一誠の発言にふと、疑問を抱きそう口にした。

「まあな。」

というかきっかけは士織だぞ？」

「……え？俺がきっかけなの？」

「そうそう。」

半年位前だったかな……？

士織が『お前鍛えたらいい線いくんじやないか？』って言ったから  
今まで頑張ってるんだぜ？」

まさか俺が何気なく言った言葉がきっかけで原作ブレイクしてしまっているとは……。

つつい苦笑いが浮かんでしまう。

「あれから半年……っ！

毎日、筋トレとランニングを頑張った……」

一誠は瞳を閉じながら思い出すかのようにしてそう語り、拳を握った。

そしてかつ、と瞳を開くと、

「——これで俺もモテるかな?」

きらきらとした瞳を俺に向けながらそう言った。

「無理だ」

「即答?」

俺のぼつさりと切り捨てるかのような言葉に一誠はそう言うところから崩れ落ちた。

「まずはその変態根性を何とかしろ。」

話はそれからだ……」

そんな一誠を見た俺は頭に手を当てながらそう言う。

全く……我が弟ながらこの変態は……。

「とりあえずはその変態さを隠せ。」

無くせとは言わないからせめてオープンにするな……」

「……うう……そしたらおれモテるかな……?」

泣きながらそう言う一誠は真剣そのものだった。

普通なら無理だと切り捨てる所だが少しくらい慰めてあげてもバチは当たらないだろう。

そこで俺は嘘ではないが真実ともまた少しだけ違うことを口にする。

「……わからない。」

まあ、とりあえずお前は顔はいいんだからその変態さを無くせば女の子の友達くらいなら直ぐにできるんじゃないか?」

「……おお……!!」

分かったぜ!俺はこの情熱を隠す術を身につけてやる!!!  
拳を掲げて一誠はそう言った。

全く……一体どれだけ無駄なことに気合いを入れているのだろうか……。

「ハーレム王に俺はなるっ!!!」

……その夢はもうこの頃から抱いているんだね……。

最早苦笑いを浮かべるしかなかった。

## 閑話休題

「……で、この赤いやつ何なのか分かるか？」

一誠は自らの左腕を指しながら疑問符を浮かべる。

「ああ……よし、一誠。」

俺の今から言うことは嘘偽りのない真実だが現実味がない話だ。

そして、この話を聞けばお前ももう後には引けなくなる。

——それでも聞くか？」

俺は至って真面目な表情で一誠の瞳を見詰めながらそう言った。  
すると、一誠はゴクリと生唾を飲み口を開く。

「——ああ。聞く。」

士織はもうその後には引けなくなる場所に居るんだろ？

だったら俺もその場所に立たせてくれ」

——士織を護れるようになるのが俺の目標だからな。

ニカツ、と人懐っこい笑みを浮かべ、一誠は恥ずかしげもなくそう  
言った。

「あはは……弟に護られる兄はちよつと勘弁願いたいね……。」

ともかく、一誠がそういうのなら話そうか。

——この世界の真実を」

そして俺は語り出す。

この【ハイスクールD×D】という世界に広がる真実という名のお  
話を。

「……えつとつまりは何だ？」

この世界には悪魔と天使と墮天使が居て基本的にドンパチやって  
るよ。」

「まあ、簡単に言えばそうだよ。」

悪魔と天使と墮天使はそれぞれ三棘みの状態を太古の昔から続けているんだ」

「ああ〜……信じられねえわ……」

一誠は頭をガシガシと掻きながらそう呟いた。

「確かに信じ難い話だよな。」

——— だけど真実だ」

「ああ。それは分かってるよ。」

俺は士織のこと信じてるし」

一誠はそういいながら俺の方を向いてにこりと笑った。

……やっぱり一誠って変態が無かつたらモテるんじゃないかな……。

俺はそう思いながらも口には出さない。

何故ならば、確実に一誠が調子に乗るからである。

「とりあえずはその話は置いて、この赤い籠手は何なんだ？」

さつきから士織の話を聞いていると所々出て来た【セイクリッド・ギア神器】ってやつなのか？」

一誠はソファアーの上で胡座をかきながらそう聞く。

「ああ……。物分かりが良いように助かるよ。」

そうだ。一誠の赤い籠手は【セイクリッド・ギア神器】と呼ばれる言わば規格外の力の結晶だ」

「へえ〜……」

一誠は俺の説明に相槌を打ちながら熱心に聞き入ってくれる。

「しかも、一誠の持っているその赤い籠手は【ブラス・テッド・ギア赤龍帝の籠手】と呼ばれる【ロンギヌス神滅具】の一つ。」

扱い用によれば魔王や神ですら殺せるモノだ」

「スゲエんだな〜……って神ですら殺せる!？」

コレってかなりやばい代物じゃないか?!」

「かなりやばいな。」

能力としては十秒ごとに所有者の力を倍加させるモノだ。

まあ、所謂チート武装だな」

俺は【赤龍帝の籠手】についての率直な意見を述べる。

「そんなモンが俺に宿ってたんだなあ……」

しみじみと言った風に一誠は呟く。

「ひとつ言うが一誠。」

この話を聞いたからにはこれからもっとトレーニングしてもらおうぞ?。」

「はあ!? な、なんでだよ……?。」

「当たり前だろう?。」

お前の持つているモノは神ですら殺せる可能性を秘めたモノだぞ?。」

当然それを奪おうとしたりするやつが必ず現れる。

そんな時に弱くて勝てませんでしたじや話にならん」

実際原作では弱すぎて下級墮天使に殺されてるからな……。」

もう既に【赤龍帝の籠手】を目覚めさせているのなら強くしておいても悪いことは無いだろう。

「……ちなみにだが一誠?。」

「なんだ士織?。」

一誠は【赤龍帝の籠手】を触りながら俺の方に視線を向けた。

『ウエルシュ・ドラゴン赤い竜の帝王ドライグ』にはもう会ったか?。」

「なんだそれ?。」

一誠は頭に疑問符を付けながら首を捻った。

ドライグにまだ会っていない……?。」

ということは一誠の【赤龍帝の籠手】はまだ半覚醒状態なのか……。」

そのことを確認した俺は一誠に言い渡した。

「ひとまずは今まで通りのトレーニングを続けてくれ一誠。」

そして、当面の目標は『ウエルシュ・ドラゴン赤い竜の帝王ドライグ』に会い、【赤龍帝の

籠手】を完全に覚醒させることだ」

「オッス!!!」

一誠はそう気合いをいれて言うのとニカツ、と笑った。

(こりや俺ももっと強くならねえとな……)

心の中でそう呟くとこれからのトレーニングメニューを頭の中で

組み立て始める俺だった。

——原作開始まであと2年。

く誓いの時く

「どうも、兵藤 士織だ。」

一誠の【赤龍帝の籠手】ブーステッド・ギア 覚醒からおよそ半年。

『赤い竜の帝王ドライブ』と一誠の邂逅は思いのほか早くに済ませることが出来た。

未だに禁 バランストレイカー 手には至っていないが基本的スペックは底上げすることができたと思う。

「一誠!!そっちに行つたぞ!」

「了解!行くぜドライブ!」

『Exploration!!』

その掛け声と共に一誠は空を舞う巨大な蝙蝠に向かって魔力波を打ち出した。

ちなみにだが今の俺と一誠ははぐれ悪魔を狩っている所だ。

魔力波は蝙蝠に当たるとそのまま赤い閃光と共に炸裂した。

「うっし!撃破!」

一誠は嬉しそうにそう言う俺の方を向いて拳を突き出した。

(倍加5回であの威力か……まあ、順調かな……)

そんな一誠に向かって俺も拳を突き出し笑みを浮かべる。

「お疲れ様一誠。」

さっきの技は初めて見たけど練習してたのか?」

こちらに小走りで向かってきた一誠にそう言うのと、瞳を輝かせながら楽しそうに口を開いた。

「そうだぜ!」

俺って魔力の量が極端に少ないからな……。

ドライブの倍加を使えば強くなるんじゃないか?と思つて練習してたんだ!

ちなみにどうだった?!

期待したような眼差しでこちらを見る一誠。

俺はついくすりと笑つてしまうが、素直に一誠を褒める。

「なかなか良いと思うよ。」

一誠が試行錯誤して作ったんだろ？

それだけでも大きな進歩だ」

ポン、と頭を優しく叩いて俺はニコツと笑みを浮かべる。

「ひとまずは家に帰ろうか。」

そろそろ帰らないと明日からは忙しくなるからな」

「おう!!」

にしても楽しみだなく!

明日から俺たちも高校生か!」

そう言った一誠は締まりのない顔をする。

十中八九エロい事でも考えてるのだろう。

「分かったからその締まりのない顔を何とかしろ。」

それに、俺たちの通う高校は結構特殊だからな……」

俺は一誠の頭に手刀を落とし、真剣な顔でそう呟いた。

すると、一誠も頭を抑えながらだが真面目に口を開く。

「痛てえよ土織……。」

えつと何だつけ?

確か魔王の妹が通ってるんだったか?」

「自業自得だ。」

そうだ。しかも二人も居る。

くれぐれも目をつけられるな?

後々面倒な事になる……。」

俺は戦闘のために結っていたポニーテールを解き、背伸びをする。

「ああく!!!」

なんでポニーテール解くんだよ土織!!」

すると一誠がこちらを指さしながらそう叫ぶ。

俺はさして髪型にこだわりがあるわけでも無いので淡々と事実を

述べる。

「ポニーテールにしたのは動くときに邪魔になったら駄目だからだ。」

戦闘も終わったんだし楽な髪型の方が良いだろ?」



「くうっ!!せっかく土織のポニーテール姿を堪能してたのにつ!!」  
一誠は涙を流しながら悔しそうにそう言った。

「……一誠……もしBLそっちの道なんざに進んだらその首叩き切るぞ……?」

俺は抑揚のない声で一誠にそう言った。

一誠はその声が心底恐ろしかったようで一歩後ずさると引き攣った笑みで、

「そ、その必要は一生ないから安心してくれ……!」  
そう言ったのだった。

(はあ……我が弟の行く末が心配だ……)

俺はもう慣れてしまった長い髪を弄りながら帰路を二人で歩んで行った。

---

## Side 一誠

オツス!俺は兵藤 一誠!

皆は親しみを込めて『イツセー』と呼んでいる。

土織は頑なに『一誠』と呼ぶが……

「何でだろうな?ドライブ」

『そんなもの俺が知ったことか……』

俺の目の前に座る巨大な赤い鱗を持つドラゴン。

その名を『赤い竜ウエルシュ・ドラゴンの帝王ドライブ』。

【赤龍帝の籠手】に封印される二天龍のうちの一匹だ。

『というより相棒。』

相棒と土織は兄弟なんだよな?

俺から言わせれば全く似ていないのだが……?』

「兄弟だよ!!」

俺が弟で土織が兄!しかも双子!」

『それにしても似てい無さ過ぎじゃないか?』

「ま、まあ確かに……」

よくよく考えてみれば俺と士織で似ている所なんてあるのだろうか……?

見た目は……言わずもがな全然違う……。

士織は美少女と言っているいい見た目だし。

言動は……士織の方が大人っぽいな……。

というかこう考えると俺と士織って正反対のような気がする……。

『相棒みたいに助平では無いしな』

「う、うるさいやい!」

最近はおープンにはして無いだろ!!」

『その代わり内ではかなりの変態さだな』

「くっ……!!否定できねえ……!!」

ドライグの言葉に反論の余地も見いだせない俺であった。

## 閑話休題

「それはそうとドライグ。」

禁手にはまだなれそうにないか?」

『スペース的にはもう禁手に至ってもおかしくは無いが……何か劇的な事でもあつたら至ると思うぞ?』

「マジか!」

俺はまだまだ禁手なんて出来ないであろうと思っていたのだがドライグの言葉に心が踊った。

『士織に感謝しろよ?相棒。』

アイツのトレーニングと模擬戦やぐれ悪魔狩りで経験を詰めなければ相棒は禁手どころか俺を覚醒させることすらままならなかったぞ?』

「そんなこと——分かってるさ」

俺は『弱い』。

過去の赤龍帝たちと比べても足元にも及ばないほどの強さしか

いのは分かっている。  
士織を護るだなんて、まだまだ烏澁がましい夢だろう。  
だからこそ俺は――

「最高の赤龍帝になって士織を護るんだ……!!!」  
俺はそう胸に誓った。

『相棒……決意を固めてるところ悪いが……。』

相棒はなんでそこまでして士織を護りたいんだ？』  
ドライグは心底分らないと言った風に言った。

「そうだな……何でだろうな……。」

これと言った理由はあんまりないんだけど……。  
ひとつ上げるとしたら『好きだから』……かな？』

俺がそう言うのとドライグは一步後ずさり慌てたように口を開いた。

『あ、相棒?!早まるな!』

その道に進んだら士織のやつから殺されるぞ!?

B Lの道に進んだ為に殺されるだなんて俺は御免だからな!!!?』

「ち、違えよ!!」

あくまで俺のは兄弟として、兄として士織が好きなんだよ!!!

憧れと言っても良いぞ!!!」

『憧れ……?それまたどうしてだ?』

俺の言葉にドライグは首を傾げながらそう言った。

「俺って土織に護られてばかりだろ？」

『そうだな。』

初めの方なんか最早足手まといだったな』

「くっ……!!悔しいけどドライグの言う通りだ……。」

俺は足手まといだったよ……。」

しかもそのせいで1回土織に怪我させちゃったしな……。」

初めてのはぐれ悪魔狩りの時、俺は敵であるはぐれ悪魔に捕まって

……それを助けるために土織が怪我をしちゃった……。」

『俺が覚醒したのもその時の相棒の怒りだったな』

「あの時は自分あまりにも無力で情けなかったからな……。」

俺は今でもその時の事を思い出せる。

そして、それがあつたからこそ俺は今まで頑張つて来れたんだ。

「あのはぐれ悪魔を狩った後の土織の言葉を覚えてるか？ドライグ」

『……確か、「お前は護りたいモノを探せ。そしたらお前はまだまだ強

くなれる」……だったか？』

「ああ……。」

その時一番初めに思い浮かべたのは土織だったんだよ」

そう。俺は他の誰でもない。

兄である土織のことを思い浮かべたのだ。

『なら相棒。』

相棒に他にも護りたいモノが出来たら……どうするんだ？』

ドライグは真面目な声色で俺にそう問うてきた。

俺は一瞬瞳を閉じると、ニヤリと笑いドライグに宣言した。

「んなもん。全部護るに決まってるだろ?」

今まではハーレムハーレムと言ってきたがそうじゃない。  
俺は大切なモノを護れるようにしたいのだ。

「その為にはお前の力が必要だドライグ。」

力、貸してくれるよな? 相棒?」

俺がそう言って拳を突き出すとしばしの沈黙の後、

『アハハハハハ!!!』

良いぞ! 今代の相棒は面白い!

相棒はそうでなくてはな!』

大きな笑い声と共にそう言った。

そして、その大きな竜の手を握り拳を作ると、とん、と俺の拳に当たってくる。

『勿論力は貸してやる。』

なつてやろうではないかその最高の赤龍帝とやらにな! 相棒!』

「ああ!! 必ずだ!!」

俺はこの日新たに誓った。

——大切なモノを護れる最高の赤龍帝になつてみせると——

——原作開始まであと1年。——

く旧校舎のディアボロスく  
く原作始まりましたく

どうも、兵藤 土織だ。

あれから時が経つのも早く、俺と一誠は高校2年生となった。  
そう。原作開始の時期だ。

「一誠！早くしないと置いて行くぞ」

「待ってくれよ土織！」

一誠はどたどたと慌ただしく廊下を走り玄関まで出てくる。

「遅いぞ一誠」

「そ、そんなこと言われたって……仕方ねえだろ？」

母さんがうるさいんだよ……」

疲れたように溜め息を漏らす一誠。

「まあ、良いだろ？」

ちよつと親馬鹿だがいい親には変わらない」

「……だな」

そう言っただけ俺と一誠は笑いあつた。

「一誠ちゃん！土織ちゃん！」

何話してるの〜？」

台所から飛び出してきた俺たちの母親——ひょうどう兵藤 あおい葵泉——は

人懐っこい笑顔で俺たちに話しかけてくる。

まるで女子高生のような容姿をしており一緒に歩いていけば良くても姉、普通なら妹にしか間違われれないというびつくりの母親である。

「母さんはいい親だなんて話をしてたんだよ」

「そうそう」

俺と一誠は素直にそう答える。

すると、母さんは嬉しそうに笑って俺と一誠に抱き着いた。

「ありがとう2人も〜!!!」

「か、母さん!!？」

「恥ずかしいから!!」

一誠は慌てた様子でばたばたと動く。

「そうだな。」

母さん、そろそろ行かないと駄目だから……ね?」

俺は苦笑いを浮かべながら母さんにそう告げる。

すると、母さんは頬を膨らませながら不満そうに、

「仕方ないなあ……」

言って渋々といった感じに離れていった。

「それじゃあ母さん……」

「行つてきます」

俺と一誠は声を揃えてそう言うのと玄関のドアを開け、学校に向かつていった。

——私立駒王学園。

言わずもがな原作の舞台となる学校だ。

俺と一誠は此処に通っている。

この学校は数年前まで女子校だったせいか、男子生徒よりも女子生徒の割合が多い。

学年が下がる事に男子生徒の比率は上がるが、それでもやはり全体的に女子生徒が多かった。

発言力も未だ女子の方が圧倒的に強く、生徒会も女子生徒の方が多

く、生徒会長も女性だ。

男子が強く出られない校風で過ごしにくいかと思っていたのだが

———それでもない。

実際、変態ではなくなった我が弟、一誠も元の顔が良かった為か結構多くの人気を勝ち取っている。

しかし———

「おはようイツセー君、土織ちゃん♪」

「おっはよう！イツセー君、しおりん♪」

「おはようございますイツセー君、土織様」

「何故俺だけ名前の呼ばれ方がおかしい!?!」

俺の事を君付けで呼ぶ生徒が圧倒的に少ないのだ。

呼び捨てならまだいいだろう……しかしちゃん付けは地味に傷付くのだが?!

俺はこのことを無駄だと分かっていながら一誠に相談した。

すると、至極真面目そうな顔で、

「土織ってどう考えても見た目美少女じゃん。

普通に男扱いされるのは難しいんじゃないか?」

と、告げられた。

その日の夜に枕を濡らしたのはちよつとした黒歴史である。

## 閑話休題

とまあ、関係のない事を語ったが本題はこれではない。

此処、駒王学園に通い始めてから2年目。

一向に俺と一誠のことに気づく様子のない悪魔の御一行様方。

はぐれ悪魔を何体も狩っているというのにそれに気付いた素振りすら見せない。

要するに———



「無能……?」

俺と一誠が声を揃えてそう言ってしまうほどなのである。

ちなみに只今の一誠の実力だが……正直な所眷属にすることはできないんじゃないか? そう思わせるほどの実力を付けている。

しかも驚いたことに煩惱を何処かに捨ててきたのか? というほど真面目になつていた。まあ、変態さが無くなつたわけでは無いと思うが……。

その証拠に、不本意な方法でだがしっかりと禁バランスブレイカー手にも至り、更には亜種の禁手にも目覚めている。

亜種の禁手と不本意な方法に関しては……後に語るとしよう。なにせもうすぐ俺たちの教室に到着してしまうからな。

俺と一誠は自分の教室へと足を踏み入れる。

「死ねえええ! イッセーええええ!! 土織いい!!」

それと同時にクラスメイトである元浜と松田が飛びかかって来た。

松田の方は俺が腹にアッパーカット喰らわせ、元浜の方は一誠が顔を蹴る。

「かふっ……っ!!?」

「ぶふっ……っ!!?」

そして仲良く床に沈んだ。

「全く……元浜も松田も学習しろよ……」

「毎朝俺と土織にやられてるくせによ……」

俺と一誠は互いに頭を抱えて溜め息を吐いた。

この二人は俺のことを呼び捨てで呼んでくれる数少ない人間で親友だが……やはり変態、エロさがどうも……。

「うるさいぞ!!! お前たちのせいで俺たちがどれだけ酷い扱いを受けていると思ってるんだ!!!」

「自業自得だろ」

俺と一誠は声を揃えてばっさりと切り捨てた。

すると、涙を流し始める元浜と松田。

「……なあ、士織……こいつらなんか可哀想になってきたんだけど……」

素の自分がこうなっていたかもしれないと考えたのだろう。一誠は俺に向かつてそう言ってきた。

「……で？俺にどうしろと？」

元浜と松田も期待の眼差しで一誠を見詰めている。

「いや、これと言って何かをしてやってくれとは言わないが？」

「だってこいつらの自業自得だし？」

「悪魔めえええええつ!!!」

「何を言うか人聞きの悪い！」

一誠はそう言つて元浜と松田の頭に手刀を落としていた。

「ほらほら、ホームルームを始めるぞ！」

早く席につけ！」

ちようど教室に入ってきたクラス担任が教卓に立ちながらそう言ったのだった。

「ひよ、兵藤 一誠君ですかっ!?!」

放課後、校門を出ようとしたその時一人の少女が飛び出して来た。

——綺麗な黒髪をした素直そうな少女。

それが俺の第一印象だ。

「あ、あの……その……」

もじもじとしながら俯く少女に一誠は首を傾げている。

やはり変態さが隠れてしまうと鈍感系主人公になるんだな……一誠って……。

「ひ、一目惚れしましたっ!!!」

わ、私と付き合ってくださいっ!!」

顔を真っ赤にしながらそう言った少女。

一誠は少女の突然の告白に驚いているようだが嬉しそうである。

「君、名前は?」

比較的落ち着いた一誠の声。

以前までの一誠なら裏返った声で即刻OKを出していたことだろう。

「ゆ、夕麻……天野あまの 夕麻ゆうまですっ!!!」

名乗られた名前にやはりと思う俺。

墮天使の力を感じた時からおそらくとは思っていたが……。

彼女が原作の一誠を殺した墮天使——レイナーレ……か。

「夕麻ちゃんか……良いよ。」

俺なんかで良いなら宜しくお願いします」

「ほ、本当ですか!?!」

一誠の言葉にはあっと、輝くような笑みを見せるレイナーレ……い

や、天野 夕麻。

その姿はまるで——

「ああ。本当だよ」

「よ、良かったあ〜……！」

—— 本当に恋する乙女のようにだった。

~~~~~

突然の告白事件からしばらくして。

俺と一誠は家の近くの道を歩いていた。

「なあ、士織……」

「何だ？一誠」

「……夕麻ちゃんから堕天使の気配を感じなかったか？」

神妙な面持ちで一誠はそう問うてきた。

「ああ……感じたな」

「……やっぱりか……」

……夕麻ちゃんも俺の神器を狙ってんのかな……？」

悲しそうに呟く一誠は何処か弱々しく見えた。

辛いトレーニングの時にでもこんな弱々しい姿は見せなかったのに……だ。

「……かもしれないな。

でも、それにしても——

——堕天使の気配を必死で隠しすぎだ……」

「だよな……俺も一瞬普通の女の子かと思っただぜ……う？」

そう。天野 夕麻は堕天使の気配を隠しすぎているのだ。

まるで——

「——自分を普通の女の子だと思って欲しいみたいに……隠している……」

俺が言おうとした言葉を一誠が続けた。

「それは俺も思っただよ……」

俺がそう言った後、二人の間に沈黙が広がる。

「―――よし。悩むのなんて俺らしくねえよな。」

士織、今度夕麻ちゃんとデートしてみるよ。

そこで見極める。

夕麻ちゃんが神器を狙っているのか……それとも……」

一誠はその後には続けなかった。

俺はふっ、と一瞬笑うと口を開く。

「ああ。そうしろ。」

少なくとも俺には―――恋する乙女に見えたぞ？」

言うことだけ告げた俺はスタスタと歩き、目前にあつた自宅のドアを開け、中に入っっていった。

俺から少し遅れて家の中に入ってきた一誠の顔は何時も通りの元気なモノになっていた。

―――原作と幻作の歯車は今、噛み合う。

く面倒なことになりましたく

S i d e 一誠

オツス、兵藤 一誠だ。

墮天使の夕麻ちゃんから告白されて数日。

俺は彼女を見極めるためにデートに誘った。

その時の夕麻ちゃんの顔はとても嬉しそうな笑顔が浮かんでいたのを俺は忘れない。

「ご、ごめんなさい一誠君！

待たせちゃった……よね……」

待ち合わせ時間から5分過ぎた頃、夕麻ちゃんは慌てている様子で来るとしゅんとした表情を浮かべ、そう言った。

「大丈夫。そんなに待ってないから」

月並みだがそう夕麻ちゃんに返す。

5分遅れたくらい遅刻のうちにも入らないのに中々律儀な娘だ。

「ともかく行こうか？夕麻ちゃん」

俺は夕麻ちゃんに自らの右手を差し出してそう言った。

すると、夕麻ちゃんは嬉しそうに笑い俺の手を取った。

そこからのデートは……まあ、ごくごく普通の高校生らしいデートをすることができたと思う。

洋服の店をいくつか回って夕麻ちゃんが気に入ったらしい服を着だがプレゼントした。

ペットショップで猫と戯れる夕麻ちゃんの姿はとても幸せそうで見ているこちらが癒された。

食事は高校生らしくと言ったらおかしいかも知れないがファミレス。

それでも夕麻ちゃんは美味しそうにチョコレートパフェを食べていた。

(……昔の俺だったらこんな風に余裕を持ってデートも出来なかった

んだろうなあ……)

士織や周りの皆に性欲の塊、変態、エロガキと言われていた頃の自分を思い出しつついつい苦笑いが浮かぶ。

本質は変わってないのだろうが、その代わり俺は常識というものを身に付け、オープンにすることを止めた。

そして極めつけは——あの日の覚悟。

これが俺を変えた大きな理由だろう。

(おつと……こんなこと考えてないでデートを楽しまないとな……)

俺は今まで考えていたことを止め、デートに集中する。

……とは、言っても既に辺りは夕陽で赤く染まっており、デートの終わりも近い。

俺と夕麻ちゃんは夕暮れの公園にやって来ていた。

「一誠君。今日はとっても楽しかったよ」

夕陽を介して綺麗に輝く噴水の前で夕麻ちゃんは笑う。

「……ねえ、一誠君……」

「ん？何？夕麻ちゃん」

夕麻ちゃんはふう、と息をひとつ吐き、何かを決心したかのようにして口を開く。

「あのね……私たちの記念すべき一回目のデートってことで……ひとつ、私のお願い聞いてくれる……?」

赤く染められた頬。

それは夕陽のせいか、あるいはそれ以外か。

俺は未だ明確な答えは出していなかった。

いや、出せなかったというべきだろう。

「……良いよ。お願い、言ってみて?」

俺は優しく夕麻ちゃんに言葉を掛ける。

夕麻ちゃんはギュツと手を握って恥ずかしそうに口を開いた。

「わ、私とキス——」

しかし、その言葉は最後まで聞くことは出来なかった。

背後から飛来する光の槍。  
俺はそれを――

――喰らってしまったから。

「かふっ……………っ!!!?」

「い、一誠君っ!!!?」

「倒れる俺の身体を抱き抱える夕麻ちゃん。

その表情は今にも泣き出しそうで、壊れそうだった。  
夕麻ちゃんは非難するような表情で空を見上げる。

「――ドーナシークっ!!!  
なんで一誠君を……………ツツ!!!」

「――ふん……………貴女がもたもたしているからだろう?」

空から男の声が聞こえてくる。

掠れる視界に捉えたのは黒い翼を背から生やしたスーツ姿の男。

「……………堕……………天使……………か……………」

「ほう、私たちの存在を知っているのか人間……………」

まるで嘲笑うかのようにいうドーナシークと呼ばれた男。

「テメエ……………さっきの……………槍、夕麻ちゃん……………ごと……………殺ろうと、した  
……………だろ……………!」

声を無理矢理絞り出して、男に言う。

「何を言っているのか分からんな」

白々しくスーツを直しながら男はそう返した。

その時、俺を支える夕麻ちゃんの手に入力が入る。



「……良いから帰りなさいドーナシーク。

これ以上一誠君に何かすると言うのなら……殺す……！」

瞬間、夕麻ちゃんの背に男と同じ……いや、男のモノと比べるのは鳥澁がましいほど綺麗な黒翼が出現した。

「……ふん……どうせその人間は死ぬのだ……勝手にしろ……」

ドーナシークと呼ばれた男は鼻で笑うと翼をはためかせ何処かへと飛びさって行った。

(ああ……やばい……意識が朦朧とする……)

血を流し過ぎたせいだろうか……くそ……こんなことなら倍加しておくんだった……。

俺は自らの油断とも言える行いに後悔する。

俺には【ブーステッド・ギア赤龍帝の籠手】がないとただちよつと強い一般人だ……。

光の槍を蹴り砕くだなんて士織のようなマネは、俺には出来ない……。

だから、夕麻ちゃんを護るには俺が盾になるしかなかった……。

「……ごめんね……ごめんね……一誠君……っ!!」

涙を流しながら俺の身体を抱き締める夕麻ちゃん。

「痛かった……よね……苦しかった……よね……っ」

涙でぐちゃぐちゃになった夕麻ちゃんの顔が掠れる視界に映り込む。

「!?誰か……来てる……」

俺の胸で泣いていた夕麻ちゃんはぴくつと、顔を上げるとそう呟く。

そして、とても悲しそうな顔で俺を見詰めると――

—— チュツ。

俺の唇に自分の唇を重ねて、

「さようなら……私の愛しい人……」

そう言い残して飛び立って行った。

(……ああ……悪い……土織……俺、死ぬかも……)

薄れる意識の中、俺はそんなことを思っていた。

せつかく護るって決めたのに……。

俺の決意……無駄になっちゃうのかなあ……。

もつと——

—— 生きたかったなあ……。

「—— あなたね、私を呼んだのは」

突然、俺の掠れ、ほとんど見えていない視界に誰かの影が移り込み、

そして声を掛けてきた。

「死にそうね。」

傷は……へえ、面白いことになってるじゃないの。そう、あなたがねえ……。本当に面白いわ」

人が死にかけなのに面白いとは……。

いつもなら苛立ちが湧くはずだが……その余裕すらない。

(こいつ……絶対……碌な奴じゃねえ……)

その言葉を胸に抱き、俺の意識は途絶えた。

Side Out

~~~~~

Side 紅髪の少女

「どうせ死ぬなら、私が拾ってあげるわ。あなたの命。私のために生きなさい」

私は目の前に倒れ、死にかけの少年に手に持つチェスの駒を――

「他人の弟に何しようとしてるんですか？グレモリー先輩？」

――与えようとした瞬間、誰かの声が聞こえてくる。

私はゆっくりと立ち上がり、声の主の方へと顔を向ける。

そこにいたのはひとりの少女。

否、少女のような風貌だが彼は男。

私の通う駒王学園に在学している確か――

「兵藤 士織ですグレモリー先輩。」

以後お見知りおきを……」

まるで私の思考を読んだかのような自己紹介。私はつい警戒してしまう。

「そんなに警戒しないで下さい。」

それと、そこどいてもらえません？

俺の弟本当に死んじゃうんですけど？」

敵意のない笑みを浮かべ、そういう少年——兵藤 士織——。  
私はもう手遅れだと告げようと口を開くが……。

「うわあ……手痛くやられたね一誠……。」

まあ、治すけどね……。」

「……ツツツ!!！」

彼はいつの間にか私の横で弟と呼んだ少年を治療していた。

(い、いつの間に……移動を……!?)

気付かなかった……気付けなかった……。

しかも、驚くべきことに、彼が治療を始めるとポツカリと空いたお腹の穴が見る見るうちに塞がって行く。

「まさかあなたも神セイクリッド・ギア 器を……!!!」

傷を完全に治してしまった彼は無表情のまま、

「その話はまた後日。」

そうですね……明日の放課後でどうでしょうか？」

そう言った。

聞きたいことが山ほどある。

しかし、今此処で聞いても彼は答えないだろう。

私は彼の申し出に首を縦に振ると明日使いを出すという旨の話をして、肯定を表した。

「それではまた明日、放課後にお会いしましょうグレモリー先輩」

彼はそう言い残して怪我の治療をした少年を抱えると、その場から姿を消した。

「彼は……一体……」

明日の放課後が待ち遠しい。

Side Out

~~~~~

Side 土織

「はあ……面倒なことになった……」

俺は一誠を抱えて自分の家に転移したあとそう呟いた。

まさか一誠がやられているとは思わなかったが……何かイレギュラーがあつたと考えるのが妥当だろう。

もし、普通に戦闘していたのなら一誠の負けは万が一にも無いのだから……。

「明日はあのリアス・グレモリーとの話し合いか……」

そう思うと気分が悪くなる。

テンションだだ下がりとは今のことを指すのだろう。

俺は一誠をベットに寝かせると自分の部屋に戻りソファアに腰掛ける。

「どこまで話したのかなあ……」

正直な所俺は自分の神セイクリッド・ギア器について話したく無いが……。

「……仕方がない……ひとつだけ教えておくか……」

本音はひとつも教えたくないが、教えないではあのリアス・グレモリーは納得しないだろう……。

「はあ……全くもって面倒くさい……」

明日の話し合いに酷く憂鬱になる俺だった。

く顔合わせしましたく

Side 一誠

「ん……………」

公園で意識を失った俺が次に起きたのは自室のベットのの上だった。時を刻む時計の音が聞こえる。

『やっとききたか相棒』

「……………ドライブか……………」

何処かホツとしたようなドライブの音が聞こえてくる。

「……………悪魔にはなってねえみたいだな」

『ああ。土織の奴が相棒を悪魔に転生させる前に助けていた。

一歩遅かったら相棒も眷属悪魔の仲間入りだったぞ?』

「それは勘弁願いたいな……………」

苦笑いを浮かべながら俺はドライブに言う。

『そ、それよりだな……………相棒』

「ん?なんだよドライブ」

歯切れが悪そうにドライブが何かを言う。

そして、何かを察知したかの如く、

『っ……………まあ、頑張れ。』

それと、感謝だけは忘れるな!』

そう言っつて神器の中に引っ込んでいった。

「ん?変なドライブだったな……………」

俺はそう呟くと寝返りを打つ。

「んう……………すうすう……………」

「……………?」

そして、驚愕する。

そこに居るはずのないものを見たから。

俺の目の前に居るのは少女——否、少女のような我が兄様だった。

(……………え?……………え?どういうこと?……………どうということなのドライブ?)

『……………そう取り乱すな隣に居るのは兄だろう?』

なら問題は無いではないか』

神器の中から引きずり出したドライブが言ったのはそんな言葉だった。

(馬鹿なの?…ねえ馬鹿なの?)

士織は紛れもなく俺の兄だけど見た目こんなだよ?

なにこれ可愛いっ!!)

シートを握りながら寝息を立てる士織。

一応そっちのけは無いが流石にこれは刺激が強い。

今はマシになっているが素は煩惱の塊だった俺。些か目に毒である。

『相棒……………死ぬぞ……………?』

(安心しろドライブ)。

この可愛い癒されると言う意味の可愛いだ……………。

それくらいなら許してくれる……………はずだ)

などと言っているが俺の身体ががくがくと震え始めた。

(やべえ……………無意識の恐怖で俺の体が震えてやがる……………!)

『……………何を馬鹿なこと……………を……………』

(どうしたんだドライブ?)

いきなり言葉を詰まらせるドライブ。

『……………死ぬな……………相棒……………』

「……………?」

俺はその言葉に目の前の兄にしっかりと視線を向ける。

「……随分と面白い思考してるな一誠……？」  
瞳を開きジト目でこちらを睨む兄様の姿がそこにはあった。

(あ、俺死んだわ……………)

俺はそこに死を覚悟し、瞳を閉じた。

「——全く……………心配させるんじゃないやねえよ……………」

コツン、と俺の頭にほんのりと痛い衝撃が加えられる。  
どうやら拳で軽く突かれたようだ。

「……………悪い……………士織」

士織の声は心から俺を心配する声だった。

どうやら俺は——

——良い兄も持ったようだ。

## 閑話休題

「そう言えばなんで俺と一緒に寝てたんだ？士織」

ベットから身体を起こし背伸びをしている士織に俺はそう声を掛けた。



「ん？ああ……母さんだよ。」

『一誠ちゃん心配だから土織一緒に寝てあげて!!』……つてうるさかったからな……」

げっそりしたような顔で言う土織。

母さんがどれだけ頼んだのか良く分かる顔である。

「あ、あはははは……ご苦労様だな……」

「……本当だぞ……」

二人して苦笑いを浮かべる。

「とりあえず……早く着替えろ一誠。」

学校に遅刻するぞ?」

時計を見ればいつもなら既に家を出ている時間だ。

土織は俺にそう言うどベットから降りて、おもむろにパジャマを――

『『ちよ、ちよつと待て!!!』』

まさかのドライグとシンクロして土織を止める俺。

「ご、此処で着替えるのか!？」

「当たり前だろ?時間が惜しい……」

『ま、待て土織!!』

それは相棒には些か刺激が強すぎる!』

「……なんだ一誠……まさか……」

ドライグの言葉に突然目を座らせてこちらを睨み始める土織。

「ぼっ……!!!んなわけねえだろ!？」

俺は女の子が大好きだよ!!!」

俺は慌てながらそう言う。

しかし、土織はそのままこちらを睨んでいる。

もう駄目か……そう思ったそのとき――

「——冗談だ。」

そこまで元気があるならもう心配は要らないな……」

士織はそういいながら俺の部屋を出ていった。

まるで嵐のように俺を翻弄する兄。

怪我人に対しての当たりではないような気がした。

『……命があるだけマシだろう……』

「……だな……」

俺はドライグとそんな言葉を呟き、大人しく学校の制服に着替え始めるのだった。

Side Out

~~~~~

Side 士織

朝に一誠をからかったという事くらいしか特に何も無く無事学校も終わり、時は放課後。

——そう、リアス・グレモリーとの話し合いの時間が迫っていた。

「なあ、士織。」

使いの人が来るんだよな？」

一誠が暇そうに机に座って言う。

「そうだ。」

おそろく来るのは——」

俺がその名前を言おうとした時、教室のドアが開く。

「兵藤 士織さんと兵藤 一誠君は居るかな？」

——木場 祐斗。

予想通りの男がそこには居た。

「此処に居るぞ」

俺は自分の席から立ちながら名乗りを上げる。

すると木場 祐斗はにこりと微笑みながらこちらへと近づいてきた。

廊下、教室の各所から黄色い歓声が沸く。

「リアス・グレモリーの使い……でいいのか？」

俺が率直にそう尋ねるとそうだよ、と言って頷いた。

「で？俺たちはどうしたら良いんだ？」

一誠が木場 祐斗に向かってそう言う。

いつの間にか机からも降りて俺の横に来ていた一誠。

「僕に着いて来て欲しい」

木場祐斗がそう言うのと、今まで静かだった女子生徒が声を上げた。

「き、木場くん？兵藤くんのカップリング!!」

「しかもそこに土織様もいるわ!!」

「なるほど、木場くんと兵藤くんが土織様を……!!」

「薄い本が厚くなりますな……!」

「……………」

これには流石の木場祐斗——いや、少し親しみを込めて木場——

も参ったようで引き攣った笑みを浮かべていた。

一誠の顔なんてまるで福笑いのようになっている。

「と、ともかく早く出ようぜ!」

一誠は福笑いから復活して口早にそう言った。

「そ、そうだね……」

木場もそれに賛同し、俺たちは教室を足早に出ていったのだった。

……腐女子は苦手だ……。

~~~~~

「此処に部長が居るんだよ」

そう言った木場に連れられて来たのは校舎の裏手にある現在使われていない旧校舎。

見た目は古いが何処も壊れておらず、綺麗にしてある。

二階建ての木造校舎を進み、階段を登る。

さらに二階の奥まで歩を進めた。

そして木場はとある教室の前で歩みを止めた。

戸にかかるプレートには『オカルト研究部』と書かれている。

「部長、連れてきました」

木場が中にそう確認を取ると中から「ええ、入って頂戴」というリアス・グレモリーの声が聞こえてくる。

それにしても『連れてきました』……か……。

些か礼儀がなつて無いのでは無いだろうか。

ともかく、それ置いておくとして。

俺と一誠は木場の後に続いて部屋の中に足を踏み入れた。

「……うつわ……」

俺たちは中の様子について声を漏らしてしまった。

一言で言えば悪趣味な内装。

だって考えてもみて欲しい。

部屋中面妖な文字を書き込まれ、魔法陣で纏めてみましたなんていう部屋を悪趣味と言わずして何と言うのだろうか？

## 閑話休題

「それでグレモリー先輩は何処に？」

俺はそう呟き辺りを見回す。

ソファーには少女がひとり腰掛け黙々と羊羹を食べている。

俺が小さく会釈すると食べるのをやめてしつかりと返してくれた。

(塔城 小猫……)

この学校ではマスコットキャラクターのように扱われる1年生

だったはずだ。

(……リアス・グレモリーは……)

やはり原作と同じなのだろうか……。

俺は落胆の表情を浮かべながら部屋の奥を見る。

「部長、これを」

部屋の奥。

カーテン越しにリアス・グレモリーとは違う女性の声が聞こえてくる。

「ありがとう、朱乃」

そしてリアス・グレモリーの声。

と、言うより彼女は何故シャワーを浴びているのだろうか……？  
来客があるにも関わらずこの時間を選んだというのならあまりにも失礼である。

「……先輩、食べますか？」

と、俺がリアス・グレモリーへの評価を落としているとき、隣から小さなお皿を差し出された。

その声の主を見てみると先程まで無言で羊羹を食べていた塔城小猫であった。

「良いのか？」

こくり、と小さく頷く塔城小猫。

俺はその発言に甘え、差し出された羊羹をひとつ摘み口にする。

いい塩梅の甘さが口に広がり今までの苛立ちが少しだけだが解消されていく。

「お、土織良いな……俺も貰って良いか？」

そんな俺の姿を見た一誠が塔城小猫——塔城——にそう言った。

「……………どうぞ」

しばし考えるようにした塔城は仕方がないという風にお皿を差し出した。

「サンキュー♪」

一誠は嬉しそうに羊羹を摘み口に放り込んだ。

「ごめんなさい。」

昨夜少し用事があつてシャワーを浴びていなかったから、今汗を流していたの」

カーテンを開き出てきた制服姿のリアス・グレモリーはこちらに向かって微笑みかけるとそう言った。

そしてもう一人。

黒髪のポニーテールをしたニコニコと笑う女性。

彼女はこちらを向くと深々とお辞儀をして、

「あらあら。」

初めまして、私、ひめじま 姫島 あけの 朱乃と申します。

どうぞ、以後お見知りおきを」

丁寧に自己紹介をする。

リアス・グレモリーよりもしつかりしていると思うのは俺だけ……いや、一誠も思ってるみたいだな。

「……俺は、兵藤 士織。」

こんななりをしているが一応男だ。

「一応宜しく頼む」

「どうも。俺は兵藤 一誠。」

士織の弟してます。

「一応宜しくお願ひします」

俺は無表情に、一誠はにこにこ笑いながら簡単な自己紹介をした。

「これで全員揃ったわね……。」

兵藤士織君、兵藤一誠君。

いえ、士織、イツセー」

「「………呼び捨て………」」

俺たちはいきなりの呼び捨てにボソリとそう呟いた。

親しくもない間柄なのにいきなり呼び捨ては……。

「私たち、オカルト研究部はあなたたちを歓迎するわ」  
一拍開け、リアス・グレモリーは、

「悪魔としてね」

——キメ顔でそう言った。

く説明しましたく

「粗茶です」

「お構いなく」

「あつ、どうも」

ソファアに腰掛けた俺と一誠に姫島朱乃がお茶を淹れて渡してくる。

ちょうど喉が渴いていたということもあり、湯呑を傾ける。

「良い腕をしていますね」

「確かに、うまいですよ」

熱過ぎず、冷た過ぎず。

香りの良いお茶に、俺と一誠は素直な感想を述べる。

「あらあら、ありがとうございます」

うふふと嬉しそうに笑う姫島朱乃——姫島先輩——はお盆を抱えながらこちらを見詰める。

「朱乃、あなたもこちらに座って頂戴」

「はい、部長」

テーブルを挟んで反対側のソファアに座るリアス・グレモリーは姫島先輩にそう声をかける。

姫島先輩もそれに従ってお盆を別の場所に置くと、リアス・グレモリーの隣へと腰をおろした。

視線が俺と一誠に集まりしばしの沈黙の後、リアス・グレモリーが口を開いた。

「——単刀直入に言うわ。」

私達は【悪魔】なの」

その発言に俺と一誠は顔を見合わせる。

この人は馬鹿なのではないか……？

(……やっぱり気が付いていなかったみたいだな……)

(流石『無能王』のあだ名を持つ人だな……)

アイコンタクトをとりながら俺たちは苦笑いを浮かべた。



「信じられないって顔ね。」

まあ、仕方がない——」

「いや、あなた方が悪魔だということは駒王学園こまおうがくえんに来る前から知っていましたよ」

俺はリアス・グレモリーの言葉を途中で遮り、そう告げる。

「ちなみに生徒会の面子も悪魔ですよね？」

一誠は俺の言葉に続くようにそう口にする。

俺たちの言葉にリアス・グレモリー——グレモリー先輩——は勿論此処、オカルト研究部の面々も驚愕の表情を浮かべた。

「……なんで知っているのかしら……？」

グレモリー先輩は警戒したような雰囲気でこちらを見詰めるとゆっくりと口を開いた。

「以前も言いましたがそう警戒しないでください。」

もし俺たちが敵なら——既にあなたたちはこの世に存在していませんよ……？」

笑みを浮かべながら俺は言う。

「「……っ?!」」

それと同時に……いや、少し遅いくらいの反応で、オカルト研究部の面々はソファアから立ち上がった。

「どうかしましたか?いきなり立ち上がったたりして」

どう見ても臨戦態勢に入っているが——別段驚異にもならない。

「とりあえず座ったらどうですか？」

話し合いをするために俺たちは此処に来たんですから……」

そう言って、再びお茶をすすする。

しばしの静寂に包まれる部屋。

何もしない俺たちに安心したのかオカルト研究部の面々は臨戦態勢を解くと、ゆっくりとソファアに腰をおろした。

「……ごめんなさい。」

恥ずかしい所を見せてしまったわね」

しかし、まだ動揺を隠せないグレモリー先輩。

まあ、それも仕方がないことだろう。今まで一般人だと思っていた相手が自分たちの正体を知っており、更に重圧まで掛けてきたのだから。

「改めて聞かせてもらおうわ……。」

——あなたたちは一体何者……？」

俺たちのことを見定めるような視線を送りながらそう問うグレモリー先輩。

俺と一誠は軽く目を合わせると、事前に打ち合わせしていた話を話し始める。

「俺はちよつと変わった魔法を使う一般人ですよ」

『俺は』……？』

俺の発言に眉を顰めるグレモリー先輩。

そしてその視線は一誠の方へと集まった。

「士織……その言い方だと俺にばかり注目が集まるだろう……？」

「俺は事実を言ったまでだ」

一誠の非難するような声にさらっと返す。

勿論これも打ち合わせした会話である。

「全く……。」

……俺はちよつと変わった神セイクリッド・ギア 器を持った人間ですよ」

渋々といった風に一誠はそう言った。

「そう……。」

あなたたちの使う魔法と神セイクリッド・ギア 器を見せて貰ってもいいかしら？」

俺たちの話を聞いたグレモリー先輩は興味深そうにそう言うってくる。

その目は良い物を見つけたというような目であった。

「……良いですよ。」

まず、俺が使う魔法は「妖精の魔法」エンジエリック・スベル という俺独自の魔法です」

「あなた独自の魔法……？」

「はい。」

この魔法は俺の俺による俺のための魔法です。

よって、誰かが真似できる代物ではありません」

俺がそう説明し終わると次は一誠が口を開いた。

俺の魔法の話で姫島先輩が残念そうにしたのは彼女が魔術師ウィザードタイプだからだろうか？

「次は俺の番だな……」

俺の神セイクリッド・ギア器は……これです」

そう言つて、左腕を突き出した。

一誠の腕は光を発し、その光はすぐさま形を成す。そして現れたのは燃え盛る焰のように赤い籠手。

「これが俺の神器。

ブーステッド・ギア

【赤龍帝の籠手】……」

つまり俺は——」

——今代の【赤龍帝】です。

一誠の言葉にその場にいた俺と一誠を除いた全員が息を呑んだ。

(掴みは上々……だな……)

~~~~~

「あなたたち私の眷属にならないかしら？」

「お断りします」

俺と一誠の説明を聞き終えたグレモリー先輩は唐突にそう申し出てきた。

予想の範囲内ではあるが……まさか俺たちの話を聞いた上で言ってくるとは思わなかった。

「っ……」

な、何故か理由を聞いてもいいかしら？」

「そもそもあなたの実力じゃ、どの駒を使つても俺たちを転生させることはできませんよ」

「俺は単純な事実を述べる。」

原作の一誠を転生させるのに『<sup>ポーン</sup>兵士』の駒を8つも使ったのだ。

今の一誠を転生させるなんて不可能だろう。俺は……言わずもがな無理だ。

「な、なんですって……！」

そんなのはやってみなければ分からないでしょう！」

グレモリー先輩は怒ったようにそう言うと言おうとチェスに使うような駒を取り出した。

しかし、どの駒も反応することはなく、グレモリー先輩は驚愕の表情を浮かべる。

『<sup>ポーン</sup>兵士』8つでも転生出来ないなんて……」

「……ともかく、俺は今のところ悪魔に転生するつもりは無いですよ」「俺もですね」

俺と一誠は淡々とそう述べた。

すると、先程まで沈んでいた様子のグレモリー先輩はしばらく何かを考えるような仕草をして、顔をあげる。

「じゃあ、せめてオカルト研究部には入ってもらおうわ。」

あなたたちという存在を知ったからには私たちの目の届く範囲に居てもらわないと困るのよ」

上から目線な命令するような内容に俺は、

「——悪いが断らせてもらう」

今までの敬語もやめ、いつも通りの口調でそう言った。

「……なんですって？」

グレモリー先輩は怪訝そうな顔をして俺を見詰める。

おそらく、口調や雰囲気が変わったこと、そして何より俺の言った言葉に反応したのだろう。

「生憎と監視されるのは好きじゃないからな」

「そうはいかないわ。」

もしかしたらという場合もある。

この土地の責任者としてあなたたちを野放しには出来ないわ！」  
立ち上がり、こちらに向けて指を指す。

グレモリー先輩はキメ顔でそう言った。

「……はあ、分かったよ。

オカルト研究部には属してやる。

ただし、基本的に俺は眷属になるつもりはないというのをしっかりと忘れないでくれ」

「士織が良いのなら俺も良いですよ。

それと、今のあなたには魅力を感じないので眷属になるつもりはありませんのであしからず」

しばしの沈黙の後、俺はそう言った。

心底嫌だが、これ以上話しても平行線だろう。此処は俺が折れてやる方が楽だ。

グレモリー先輩の監視程度なら無いに等しい。

これについては一誠も同じ考えのようだ。

「分かったわ。

宜しくね士織、イツセー」

グレモリー先輩は満足そうに頷くとにこりと微笑んで俺たちの名前を呼んだ。

### 閑話休題

「それじゃあ、改めて自己紹介と行きましょう」

グレモリー先輩がそう言うとオカルト研究部の面々は自己紹介を始めた。

「僕は木場……祐斗。

クラスは違うけど兵藤さん達と同じ2年生です。

えーっと……僕も悪魔です。

宜しくね」

自分の名前を言うときに躊躇ったが何かあるのだろうか……？

「……1年生。……塔城小猫です。」

宜しく願います。……悪魔です」  
小さく頭を下げる塔城。

やはり原作通り【塔城小猫】を名乗っているらしい。

「3年生、姫島朱乃ですわ。」

一応、研究部の副部長も兼任しております。

今後とも宜しくお願いします。

これでも悪魔ですわ。うふふ……」

姫島先輩は礼儀正しく頭を下げると微笑みを浮かべた。

こちらも原作通りのようだ……。

「そして、私が彼らの主であり、悪魔でもあるグレモリー家のリアス・グレモリーよ。」

家の爵位は公爵となっているわ」

紅い髪を揺らしながら堂々とそう言った。

俺たちは一度自己紹介を終えているが皆自己紹介をしているという事でその流れにのり、口を開いた。

「兵藤士織だ。」

一応魔法と武術を得意としている。

勿論だが人間だ」

「兵藤一誠です。」

一応最高の赤龍帝を目指しています。

士織と同じく人間です」

ああ……面倒な事にならなければいいのだが……。

俺は話していない俺の神器がバレた時のことなどを少しだけ心配した。

く出会いましたく

オツス、兵藤一誠だ。

最近悪魔の仕事というものを手伝いながら日々を過ごしているせいか少々寝不足気味だ。

俺と同じようにやっている士織がどうしていつも変わらず過ごせているのか……。

「……士織の奴化物か……？」

『……相棒、殺されるぞ……？』

俺の呟きにドライグがそう言った。

そもそもなんで俺と士織が悪魔の仕事を手伝っているのか。

それは俺の一言が原因だった。

『今のあなたには魅力を感じないので眷属になるつもりはありませんのであしからず』

その言葉を聞いたリアス先輩は俺たちに悪魔の仕事をやってみないかと勧めてきたのだ。

なんでも、仕事を通して自分たちを知ってもらいたいらしい。

「……まあ、それは良いとして……夜中は辛いな……」

欠伸を噛み殺しながらそう呟く。

ちなみに今は表向きの部活動を終え、家路についているところだ。

「はわうう!!」

後方から突然女性の声と同時に何か路面に転がる音が聞こえてきた。

振り向いてみると、そこにはシスターの姿があった。

……一応記しておくが妹ではない。修道女である。

手を大きく広げ、顔面から路面へ突っ伏している。

「……だ、大丈夫？」

俺は倒れているシスターの元へ近寄ると、声をかけながら手を差し伸べた。

「あううく……。なんで転んでしまうのでしょうか……。ああ、すみません。」

「ありがとうございますうう……。」

(……フランス語……)

俺はシスターの使う言語に少し戸惑いながらもその手を引いて起き上がらせた。

「ありがとうございます……きやつ！」

シスターがお礼をいう途中、一陣の風が吹きヴェールが飛ばされる。

それに伴い、ヴェールの中で束ねられていたであろう金色の長髪がこぼれ、露になる。

ストレートブロンドが夕日に照らされてキラキラと光ってた。

そしてシスターの素顔に俺の視線が移動する。

整った顔立ち、そして何より目を惹かれたのはその瞳。

グリーンの双眸はまるでエメラルドのように澄んだ輝きを持っていた。

「あ、あの……。どうしたんですか……。？」

訝しげな表情でシスターは俺の顔を覗き込んでくる。

「ああ、ごめん。」

君の瞳が綺麗だったからつい見入っちゃった」

「あ、ありがとうございますうう……。」

恥ずかしそうに俯くシスター。

どうやら俺の使ったフランス語は間違いではなかったらしい。

(士織には感謝だな……)

俺は飛ばされたヴェールを拾うとシスターに差し出しながら口を開いた。

「旅行かな？」

「いえ、違うんです。」

実はこの町の教会に今日赴任することとなりました……。あなたも



この町の方なのですね。

これから宜しくお願いします」

シスターはそう言うのとペこりと頭を下げた。

「この町に来てから困っていたんです。

その……私って、日本語うまく喋れないので……道に迷ってたんですけど、道行く人皆さん言葉が通じなくて……」

困惑の表情を浮かべながらシスターは胸元で手を合わせる。

「じゃあ、俺が教会に送ってあげようか？」

「ほ、本当ですか!!」

あ、ありがとうございますうう！

これも主のお導きのおかげですね!!」

涙を浮かべながら俺に微笑むシスター。

(……あの教会はもう使われていなかったはずだけど……)

俺は少し不審に思いながらも、ひとまずシスターを連れて教会を指した。

教会へ向かう途中、公園の前を横切る。

「うわああああああん」

その時間こえてきたのは子供の泣き声。

「だいじょうぶ、よしくん」

母親がついているから大丈夫だろう。

どうやら転んだだけのようだし。

俺は再び足を進めようとするが、突然シスターが公園で泣いている子供のもとまで向かった。

「……おいおいおい」

俺もそのシスターの後を追って公園へと入る。

「大丈夫？男の子ならこのくらいの怪我で泣いては駄目ですよ」

シスターが子供の頭を優しく撫でる。

言葉は通じていないだろう。

しかし、その表情は優しさに満ち溢れていた。

——聖女。

彼女がシスターだからだろうか。

その姿はまるで聖女のようにだった。

シスターはおもむろに自身の手のひらを子供が怪我をした場所にかざす。

シスターの手のひらから淡い緑色の光が発せられ、子供の怪我を治してゆく。

(……セイクリッド・ギア神 器か……)

あの治療スピードからしてかなり珍しい神器なのではないかと思う。

「はい、傷は無くなりましたよ。

もう大丈夫」

シスターは子供の頭をひと撫ですると、俺の方へ顔を向ける。

「すみません……つい」

シスターは舌を出して小さく笑う。

目の前で信じ難い現象が起きたためか、子供のお母さんはしばらくきよんとしていた。

その後シスターに頭を垂れると、子供を連れてまるで逃げるかのようになさっていつてしまった。

「ありがとう！お姉ちゃん！」

遠くから先ほどの子供の声が聞こえてくる。

俺は日本語のわからないシスターに翻訳して伝える。

「ありがとう、お姉ちゃん。だつてよ」

シスターは嬉しそうに微笑んだ。

「……その力……」

「はい。治癒の力です。

神様から頂いた素敵なものなんですよ」

そう言つて微笑むシスター。

しかし、その微笑みは何処か寂しさを感じさせた。

「本当に……素敵な力だな……」

俺はシスターの頭を優しく撫でた。

こんなに優しいシスターはそう居ないだろう。

「さて、教会に向かおうか。」

もうすぐ着くから後少し頑張ろう」

「はいっ！」

俺とシスターは再び教会を目指して歩み始めた。

「あ、ここです！」

良かったあ……」

地図の書かれたメモと照らし合わせながらシスターが安堵の息を吐く。

少し遠目に見えている古ぼけた教会。

そして感じる——墮天使の気配。

(……怪しいな)

俺は目を細めながらその協会を見詰める。

(……少し調べた方が良いか……)

ともかく一度帰って士織と話した方が良いと判断した俺は、踵を返して口を開く。

「じゃあ、俺はこれで帰るよ」

「待ってください！」

別れを告げて帰ろうとした俺をシスターが呼び止める。

「私をここまで連れてきて下さったお礼を教会で……」

「ん〜……それは魅力的だけど……今回は遠慮させてもらうよ」

「……でも、それでは……」

困ったような表情を浮かべるシスター。

俺はそんなシスターに口を開く。

「俺は兵藤一誠。周りからはイツセーって呼ばれてるから、イツセーでいいよ。」

シスターさん、君の名前は？」

俺が名を名乗ると、シスターは笑顔で応えてくれる。

「私はアーシア・アルジェントと言います！アーシアと呼んでください」

い！」

「じゃあ、シスター・アーシア。

また今度会えたら良いね」

にこりと微笑みながらそう言う俺。

「はい！イッセーさん、必ずお会いしましょう！」

深々と頭を下げるシスター……いや、アーシア。

俺も手を振りながら別れを告げて帰路へと着いた。

(まずは……土織に報告だな……)

何故墮天使がいるのか。

それを確かめなければ。

もしかしたら——

俺はあの日のことを思い出した。

『さようなら……私の愛しい人……』

——夕麻ちゃんのことかわかるかもしれない。

俺の歩みは心なしか早歩きになっていた。

~~~~~

——イッセーとアーシアが出会う前まで時間は遡る。

「……………」

「……………」

オカルト研究部での部活を終えた俺は息抜きに散歩をしていた。しかし、今は一人の小柄な少女と向き合い、立ち尽くしている。

(凄いやつに会っちゃったな……)

「——我、ウロボロス・ドラゴン【無限の龍神】オーフィス」

黒いゴスロリ服に身を包んだ少女はそう名乗った。

「【無限の龍神】が俺に何か用か？」

「我、おまえが気になる」

オーフィスは俺を見詰めながらそう言った。

「我とグレートレッドに等しい強さを持つ人間……おまえ、何？」

首をこてん、と横に倒しながらそういうオーフィス。

というより俺ってそんな強さだったんだ。

オーフィスから告げられることで自分のバグキャラ加減を思い知った俺。

「俺は兵藤士織。」

ただの人間だよ」

オーフィスはしばしの沈黙の後口を開いた。

「……しおりん……」

「違う、士織だ」

「……失礼、噛みました」

「いいや、わざとだ」

「噛みまみた」

「わざとじゃない!？」

「我、噛んだ？」

「何故そこで疑問系?!」

そんな、やりとりをした。

何故かやり遂げた感を感じる俺。

オーフィスも心なしか満足げである。

「……………」

「……………」

俺とオーフィスは無言でサムズアップをした。

閑話休題

「士織、我と同じ位強い。」

だから、グレートレッドを倒すの手伝って欲しい」

真剣な眼差しで見詰めながらオーフィスはそう言った。

「……なんでグレートレットを倒したいんだ？」

「我、故郷の次元の狭間に戻り、真の静寂を得たい。

だからグレートレットを倒さなければならぬ」

なるほど、この世界の龍神様もホームシックらしい。

「悪いけどその頼みは聞けないな」

「そう、残念……」

しゅんとした風になるオーフィス。

俺はそんなオーフィスの頭を撫でながら口を開いた。

「でもオーフィス。

静寂なんて寂しいだけだろ？」

「……？」

頭の上に疑問符を浮かべながら俺の手を受け入れるオーフィス。

何処か小動物めいた可愛さがある。

「じゃあ聞くが次元の狭間には何があるんだ？」

「……何も……ない」

「オーフィスはそんな所に戻りたいと言うが……意味はあるのか？」

「それは……」

オーフィスは言葉を詰まらせる。

しばしの沈黙の後、手を握り締めて口を開いた。

「……私の帰る場所あそこしかない……」。

あそこ以外我は知らない……」

その言葉を聞いて俺は思った。

なんて寂しい目をしているんだろう。

泣きそうな目はしかし、涙を流さない。

俺はオーフィスの頭ではなく、その小さな頬を撫でた。

「……あったかい」

オーフィスは俺の手に頬擦りしながら幸せそうにそう呟く。

「……なあ、オーフィス」

「何？土織」

「俺がお前の——居場所になってやる」

俺がそう言うのとオフィスは頬擦りするのを止めて俺の顔を見詰めてくる。

「土織が我の居場所……？」

「ああ。」

俺がオフィスの居場所だ」

オフィスは数回瞬きをすると、

「……それ、良い。」

このあつたかい手、いつも感じられる」

そう言つてオフィスは再び俺の手に頬擦りをした。

「そう言えばオフィス。」

君には仲間は居るのかい？」

「いる。」

我、グレートレッド倒すために組織作った。カオス・ブリゲード【禍の団】」

少し誇らしげにその名前を言うオフィス。

俺は一体どうしようと考え、ひとまず真実を告げてみることにした。

「オフィス。」

そいつらはグレートレッドを倒すのに協力なんてしてくれないぞ？

ただオフィスの力が欲しかっただけだ」

「……我、騙された？」

心なしか悲しそうな表情を浮かべているオフィス。

「簡単に言えばそうだな。」

だから、そこは早くに抜けた方が良い」

「ん。分かった。」

土織がそう言うなら、我、抜ける」

オフィスはそう言うと少し残念そうに俺から離れた。

「我、そろそろ行く。」

早く私の居場所に帰るために」

「おう。」

待ってるぞオフィス。

全部終わらせてひと段落ついたら、俺の所に帰ってこい。

そんなときは歓迎してやる」

「分かった」

そしてオフィスはにこつと——笑った。

(……可愛いじゃん……)

不覚にも俺はその笑顔に見惚れてしまったのだった。



く戦いましたく

どうも、兵藤士織だ。

オーフィスと別れた後、一度家に帰った俺はやけに真剣そうな一誠と話をした。

内容は教会に墮天使がいるが目的がわからない、というものだ。

……原作通りならアジア・アルジェントの神器の摘出が目的なのだが……。

天野夕麻——レイナーレ——を見た感じそんなことをする奴には見えない……。

それにいざとなれば俺と一誠が行けば対処は容易いだろう。

そう考えた俺は一誠に調べておくから安心しろという旨の話をしておいた。

そしてその日の夜。

今度はオカルト研究部の裏の面。

つまりは悪魔の仕事のために旧校舎の部室を訪れていた。

「……土織先輩一緒に食べませんか？」

「ん？今日は何かがあるんだ？」

「私おすすめのシュークリームです」

そう言った小猫は何処からともなくシュークリームが入った箱を取り出した。

「おお、良いな。」

「じゃあ、お言葉に甘えて……」

「どうぞ」

そう言っただけ俺は小猫の隣に腰を下ろす。

そして、小猫からシュークリームを受け取ると一口齧り付く。

「美味い……」

流石小猫。こういう物にハズレはねえな」

「……喜んでもらったなら嬉しいです」

小猫はそう言うと自分もシュークリームを手に取って幸せそうに

頬張った。

「というか士織って小猫ちゃんと仲いいよな」

一誠がソファでぐったりしながら俺の方を向いてそう言う。

「確かに小猫ちゃんと仲がいいね……」

小猫ちゃんにしては珍しいけど……何かしたのかい？」

それに続くように木場が俺の方をいつものものにこにこフェイスとはどこか違う様な顔で見詰めながら言った。

「これと言って何もして無いんだが……」

強いて言うなら最近小猫とはスイーツを食べて回ってたから仲良くなつたのか？」

俺はそう言いながら2個目のシュークリームを小猫から貰い、食べる。

「士織先輩はいいお店を知っていますから……」

「へえくそうなのか。」

なあ、士織。今度俺も連れて行ってくれよ」

「一誠と行くと悪くてカップル良くて姉弟にしか間違われぬから断る」

以前一誠と一緒にカフェに入ったらカップルと間違われ、カップル専用のメニューが出てきたのを思い出し、即座に断った。

「そんなこともあったな……」

まあ、仕方ないか……」

なら木場く今度男2人で虚しく飯喰いに行こうぜ」

一誠は更にぐったりとした様子でソファに沈むと、木場を誘う。

「……………」

「木場く？」

流石に無視は傷付くぞ？」

「ん？……ああ、ごめんね兵藤君。」

少し考え事していたから……」

そう言った木場は何時も通りのにこにこフェイスを浮かべて一誠と話始めた。

あちらはあちらで仲良くしているようなので俺も小猫との親睦を

深めるとしよう。

「なあ、小猫。」

俺は料理が得意だな。

たまにお菓子を作ったりするんだが……食べるか？」

「食べますー！」

俺の言った言葉とほとんどタイムラグのない即答。

小猫の瞳が輝いているのは俺の見間違いでは無いだろう。

「そ、そうか。」

なら今度作ってきてやるよ」

俺は小猫にそう言うのと頭を軽く撫でてやった。

小猫は名前の通り猫っぽいからな……って、そーいや猫だったな……。

最近原作の知識をうっかり忘れてたりするのは少々問題があるだろう。

「土織、私も食べてみたいのだけれど……駄目かしら……？」

いつものソファアに座ったグレモリー先輩はコーヒークップを傾けながらそう聞いてきた。

「別に良いぞ？」

「ありがとう土織。」

楽しみにしているわね？」

俺の言葉にグレモリー先輩はそう言うのと何処か嬉しそうに笑う。

これはますます下手なものは作れないな……。まあ、子猫が食べる時点で下手なものは作れないけど……。

「あらあら。仲がいいのですわね」

「姫島先輩か……こんばんは。」

取り敢えず気配を消して近づいても俺を脅かすことは出来ませんよ……」

俺の背後に立つ姫島先輩にそう言うのと残念そうにあらあら、と笑った。

「こんばんは、姫島先輩。」

土織を脅かしたいなら気配を消すじゃなくて気配を無くさないと

駄目ですよ。

まあ、それでも気付かれそうですけど」

ソファアーに仰向けに沈んだ一誠は少しだけ顔を上げるとそう言っ  
て再び顔をソファアーに埋めた。どうやら眠たいらしい。

「朱乃、どうかしたの？」

「はい。」

大公から討伐の依頼が届きました」

「……はぐれ悪魔か……」

一誠がボソツと呟いた。

どうやら面倒ごとの予感だ。

~~~~~

【はぐれ悪魔】

この世界にはそう呼ばれる存在がいる。

眷属である悪魔が主を裏切り、または殺し、主無しとなる事件が極  
希に起こるのだ。

はぐれ悪魔……つまりは野良犬のようなモノ。野良犬は害を出し  
てしまう。

見つけしだい主人、もしくは他の悪魔が消滅させなければならな  
い。それがルールであり絶対。

【はぐれ】と呼ばれるモノは他の存在でも危険視されており、天使側墮  
天使側も見つけしだい殺すようにしているようだ。

「……血の臭い」

小猫はそう呟くと制服の袖で鼻を覆った。

場所は廃墟。辺りは背の高い雑草が生い茂り暗い雰囲気醸し出  
している。

「確かに嫌な臭いだ……」

「ん〜……眠たいな……」

俺は小猫の言葉に同意し、一誠は欠伸を噛み殺しながら呟いた。

グレモリー先輩は腰に手を当てながら堂々とした態度を取ってい

る。

「士織、イツセーいい機会だからあなたたちの力を見せてもらってもいいかしら？」

不意に俺たちの方を見詰めながらグレモリー先輩はそう口にした。確かに俺も一誠もオカルト研究部のメンバーに戦闘を見せた事はなかったな……。

「俺は別に良いけど……一誠はどうする？」

「あ……俺は眠たいから遠慮させてくれ」

「……了解。」

——というわけで……グレモリー先輩。

今回は俺だけ戦わせてもらうけど良いか？」

一誠の言葉を聞いた俺はグレモリー先輩の方を向き直りそうだった。

「ええ……。」

残念だけど今日は仕方ないわね……」

グレモリー先輩はそう言ったが何処か嬉しそうな顔をした。

……どうやら本音は俺の実力が見たかったらしい……。

まあ、それもそうだろう。一誠は二天龍と称された『ウエルシュ・ドラゴン赤い竜の帝王ドライグ』が封印された「赤龍帝の籠手」を宿しているのだからそこそこのスペックを予想することはできるだろう。……当たっている訳はないが。

しかし、俺は例外的なモノを使っているからその実力は未知数。

知っておけるのなら早いうちが良いのだろう。

(……まあ、本気なんて出すわけ無いけど……)

しばらくの間、神器を使うつもりはないのだから。

グレモリー先輩の歩みが止まる。

俺たちの前にひとつの影が近づいて来るのがわかった。

「不味そうな臭いがするぞ？でも美味そうな臭いもするぞ？」

「甘いのかな？苦いのかな？」

「耳障りな低音が響く。」

その声の主は月明かりに照らされ姿を現した。  
女性の上半身と化物の下半身を持つ形容しがたい醜悪な姿。

両の手には得物らしき槍が一本ずつ握られている。

確かに大きな凶体をしているがそれだけの見掛け倒しのようにしか見えない。

ケタケタケタケタ……という笑い声も耳を汚す音でしかなく早く消し去りたいものだ……。

「はぐれ悪魔バイザー」。

主のもとを逃げ、己の欲望を満たす為だけに暴れ回るのは万死に値するわ。

グレモリー公爵の名において、あなたを消し飛ばしてあげる！」

そんな中、グレモリー先輩ははぐれ悪魔に対してそのような啖呵を切る。

「小賢しいiiiiiiii！小娘の分際でえええ!!」

その紅の髪のように、お前の身体を鮮血で染め上げてやるわああああ!!!」

怒りの雄叫びをあげるはぐれ悪魔。

グレモリー先輩はそれを鼻で笑うと俺の方をちらりと見た。

「……あなたの実力、見せて頂戴」

「……了解……」

その言葉と共に俺は一步踏み出した。

「なんだあ？」

この貧弱そうな小娘は……」

ニヤニヤとした笑みを浮かべるはぐれ悪魔。俺を馬鹿にしているようだ。

「……まずは様子見」

これくらいは耐えてくれよ?」

そう言っ手手のひらに拳を叩きつける。

魔力を流し込み、発動させるは氷の造形。

「【アイスメイク……<sup>ッラ</sup>突撃槍<sup>ッス</sup>】」

無数に現れた氷の槍ははぐれ悪魔に向かって飛翔する。

俺が指定した氷の槍の数は百。

その全てが狙いを外すことなく命中した。

「があっ……!!?!」

腕を交差させガードの体勢に入っていたはぐれ悪魔はしかし、貫く氷の槍に苦悶の表情を浮かべる。

人を見た目で判断するからこうなるのだ。

「これくらいじゃ死なないよな？」

次は強力なやつ行くぞ……」

そう言つて、俺は両の手に異なる魔法陣を展開させる。

右には雷の造形魔法陣を。

左には氷の造形魔法陣を。

「魔法陣を融合させるとどうなるか知ってるか……?」

眩き、両の手を合わせた。

異なる魔法陣は互いに反発し合いながらも混ざり、混色の魔法陣を形成する。

「オーバー・メイク混合造形…… //スピア・レイ雷光・氷刃槍」

俺の周りに雷光を纏った氷刃槍が出現する。そしてそれは先ほどの突撃槍とは比べ物にならないほどのスピードで射出され、はぐれ悪魔を貫いた。

「ぎやアアアあああアツツ!!?!」

身体に穴を開けられ悲鳴をあげるはぐれ悪魔。

しかし、まだ死にはしない。それは悪魔であるが故の肉体の強靭さによるものだろう。まあ、俺が手加減をしていると言われればそれまでだが……。

俺は止め用に魔法を構築させる。

はぐれ悪魔は逃げようと必死に身体を引きずっているが最早意味をなさない。

はぐれ悪魔に向かって手を突き出すと構築させた魔法を発動する。

魔法陣が5つ並び重なる。

それぞれ属性の違う5つの造形魔法陣だ。

「【真・混合造形】…… // 反発・象」

重なり合う魔法陣から吐き出されたのは無色の球体。  
それはゆらゆらと漂いはぐれ悪魔に命中した。

——瞬間。

閃光が弾け、突風が吹く。

俺と一誠以外のメンバーは顔を覆い隠してそれから身を守った。  
そして、それが収まった後、はぐれ悪魔のいた場所を見てみると、そこには小さなクレーターが残っているだけで何も存在しなかった。

「……なんて……威力、なの……」

グレモリー先輩はそれを見ると予想外だという表情を浮かべる。  
他のメンバーも驚愕の表情が張り付いていた。

「……俺の実力はこんなものだよ。」

お気に召したかな？グレモリー先輩……？」

俺の言葉に固まっていたグレモリー先輩ははっ、とした表情になり、口を開いた。

「……予想外よ……」

確かに此処まで強いのなら私が眷属に出来るはずが無いわね……」

「まあ、そう言う事だな」

言って、俺は欠伸を噛み殺した。

……実は俺もすごく眠たい。

その後、俺たちは後処理をして、そのまま解散となった。

後処理をしている時にオカルト研究部のメンバーから苦笑いを浮かべながら見られたときは何気に傷ついたので記しておく。



く遭遇しましたく

オツス、兵藤一誠だ。

はぐれ悪魔を土織が倒すという一件から次の日の深夜。

俺はいつも通り悪魔の仕事の一環として依頼者の居る一軒の家に訪れていた。

普通なら魔法陣によって行くはずなのだが、俺は魔力が極端に少ないため走って行くしかない。

インターホンを押そうと腕を伸ばすのだが、そこでひとつ奇妙な事に気が付いた。

玄関が——開いているのだ。

嫌な予感が頭を過ぎった。

(ドライグ……これは警戒した方がいいな……)

『ああ……そうした方がいい。』

それに相棒も気が付いてるだろうが……嫌な気配を感じる……』

ドライグは真剣な声でそう言う。

確かに感じるその気配は屋内で動いている。

「……行くか……」

眩き、玄関から中を軽く覗いてみる。廊下に灯りはついておらず、

二階へと続く階段にも同様だ。

唯一、一階奥の部屋にだけは淡い光が灯っていた。

頭を過ぎった嫌な予感が予感では無くなっていく。

(……ドライグ……力を溜めておいてくれるか?)

『任せておけ相棒』

『Boost!』という音声体が体内で聞こえてくる。どうやら

ドライグが配慮してくれたようだ。

足音を殺しながらゆっくと奥の部屋へと向かう。少しだけ開かれたドアから中へと視線を向けた。

(蠟燭……か……)

光を灯す蠟燭はゆらゆらと炎を揺らしていたのだ。

俺はドアを開き中へと足を踏み入れる。

見たところ普通のリビング。ソファやテーブル、テレビなどの  
んの変哲もない家具が揃っていた。

——しかし、そんな中、異色のモノがあった。

壁に死体が貼り付けられていたのだ。

「……酷い事を……しやがる……っ！」

恐らくはこの家の人なのだろう。

リビングの壁に逆十字の格好で貼り付けられた男性の死体。切り  
刻まれた体からは、臓器らしきものが溢れていた。

そして、その男性の死体の貼り付けられている壁には巨大な血文字  
が描かれている。

「これは——」

「——『悪いことする人はおしおきよ！』って、聖なるお方の言  
葉を借りたものさ」

背後から若い男の声が聞こえてきた。

振り返りその姿を瞳に捉える。

神父のような服に身を包んだ白髪の少年。

「ん……なんで人間がいるのかな？」

白髪の少年は俺を見ると首を傾げながら言った。

「……これ、お前がやったのか？」

「イエスイエス。」

俺が殺っちゃいましたか??

こいつ悪魔を呼び出す常習犯だったみたいだし？——  
殺すしかねえだろ?」

初めのうちは笑いながら言っていた白髪の少年だったが最後の一  
言だけは真顔であった。

「俺は悪魔エックンシストだからさ。」

こういう人の始末も仕事なんだわ……ってなんで一般人にそん  
なこと話さないと駄目なのかな?かな?」

「……いや、自分でペラペラと喋っただけだろ……」

俺はジト目で白髪の少年を見詰めながらそういった。  
すると、白髪の少年はハツとした表情を浮かべる。

「おおつと……俺としたことが口が過ぎちゃいました」  
大袈裟なりアクシヨンと共に口を開いた。

俺はどうしたものかと考えながら視線は外さずにいる。

「とりま……今日のごことは忘れちゃって早く帰りなよYOU」。

今は結構機嫌が良いから逃がしてあげるよ」

ニヤニヤとした笑みとともにそんなことを言ってきた。

(……どうしたら良いと思う……？ドライグ)

『俺は相棒のしたいようにやればいいと思うぞ？』

(……サンキュー)

俺はふう、とひとつ息を吐く。

そして――

「はいそうですか……」。

――なんて言うわけねえだろこの腐れ神父ツツ!!!」

「かふ……ツツ?!」

――白髪の少年に肉迫し、全力で拳を振るった。

ふらついた白髪の少年だったが、ニンマリと笑いこちらを睨んだ。

「何のつもりかなあ……？」

せつかく逃がしてやるって言ってるのによおく？」

「馬鹿かお前。」

俺はお前にムカついてんだよ……」

「はあ……？何言っちゃってるの??」

俺は拳を握り締め、白髪の少年を睨み付ける。

「人を殺しておいて……何も思わねえのか?」

「何言ってるの?人を殺して何も思わないのか?」

確かにただの一般人殺すのはちよつと躊躇うが……悪魔と取引した人間は別だ」

白髪の少年は憎むかの様な瞳をする。

そして齒を食いしばるような仕草をすると、勢い良く口を開いた。

「いいか?悪魔ってのはな最低最悪なんだよ。人の欲を糧に生きて居

やがる。

そんな奴らに頼ってやがる奴に碌な奴は居ねえんだよ。だからぶつ殺す。悪魔も悪魔に魅入られた奴も全部な」握り締めた拳で壁を殴り、白髪の少年は口を閉じる。

「……お前が何を思って殺してるのかはよく分かった……。

——だからこそ尚更お前を許さねえ……!!」

『悪魔は最低最悪』。

その一言を何故か俺は聞き流すことが出来なかった。

何より、理由が理不尽すぎた。

「行くぞドライブ!!」

『Boost! ! !』

十二回目の倍加の音声と共に俺の左腕は赤い籠手に覆われる。

「ヒヤハハハ!!」

「イイね!イイね!分かりやすい!

俺も武力行使の方がやりやすいよ!!」

白髪の少年は懐から、刀身のない柄と白銀の拳銃を取り出し、愉しそうに笑った。

刀身のない柄を力強く振るったかと思えば、そこから光の刃が現れる。

「俺的には一応一般人っぽい奴を殺るのは気が引ける気がするけど……まあ、気のせいだってことで!

行くぞ一般人クン!

取り敢えず苦しまないように殺してあげるぜ!!!」

白髪の少年はそう言うどまつすぐ俺に向かって駆け出す。

かなりのスピードでフェイントが混ぜられているからか、捉えにくい。

「——だからって関係無いけどな!!」

俺は横薙ぎに振るわれた白髪の少年の光の刀身をアッパーカットの要領で防ぐ。

「フェウ〜♪

中々やるね一般人クン!

でもこれでオシマイ♪ってことでバイちゃ♪」

拳銃を密着させて俺に撃ち込もうとする白髪の少年。しかし、俺は拳銃を握った腕を膝で蹴り上げて銃口を天井に向けさせる。

「なっ?!?どんな反射神経してんの一般人クン?!?」

白髪の少年は俺の行動に驚いたのか目を見開き言った。

銃声音もなく発射された弾丸は天井に風穴を空ける。

「とりあえずぶっ飛びやがれ!」

『Explosion!!!』

十二回の倍加の力を解放し、右ストレートを放つ。

白髪の少年はそれを危険と見たようで光の刀身と白銀の拳銃を交差させて拳を防ぐ。

しかし、俺の十二回の倍加の力はかなりの力だ。光の刀身と白銀の拳銃を破壊し、吹き飛ばした。

「がは……ツツツ!!!」

壁に叩きつけられめり込んだ白髪の少年。

口からは血を吐き出している。

「かあく……なんつう威力してんの一般人クン……」

死ぬかと思っただぜ……?」

ずるずると壁から地面へと倒れる白髪の少年。

「……いやいや、お前こそどんな身体してんだよ……」

普通なら身体貫通してんぞ?」

十二回の倍加の力を込めたのにも関わらず、白髪の少年は意識を保ち、更に立ち上がったのだ。

「残念ながら、まだ死ねないからねい……」

口の端から垂れた血を拭ってにやりと笑う。そして、壊れた自らの武器へと視線を移す。

「一般人クン一体何者?」

その力……異常だよ?」

「……【赤龍帝】……で分かるか?」

俺がそう言うと白髪の少年は一瞬目を見開く。そして俺の左腕を見ると愉快そうに笑った。

「そうかそうか！」

一般人クンがかの有名な【赤龍帝】か！

それならこの強さも納得納得」

白髪の少年はそう言うのと壊れた武器を投げ捨て、もう一度懐を探る。

「尚更興味が湧いてきたわ〜……もつと殺ろうぜ……？」

言って、二丁の拳銃を取り出し、構えた。

俺はそれに応じてファイティングポーズをとり、どう対応するかを考える。

しばしの沈黙。

そしてそれは――

「……イツセーさん？」

――予想外の人によって崩された。

「し、シスター・アーシア……？なんでこんなところに……」

俺が動揺を隠しきれずそんな言葉を漏らすと、白髪の少年は何処かしらけたような顔でアーシアの方を見た。それに乗じて構えられた拳銃も下げられる。

「おんや、助手のアーシアちゃんじゃないですかい……。どうしたの？ 結界は張り終わつたのかな？ かな？」

「は、はい……。結界は張り終え—— ツツ!?  
い、いやああああああつ!!!」

アーシアは壁に張り付けられた死体を視界に入れてしまったのだろう。悲痛な悲鳴を上げてその場でうずくまった。

「おおう……。いきなりの悲鳴ですか……。」

そつかそつか……。アーシアちゃんはこの手の死体は初めてですかねえ……。

それならちよつぱり悪いことしちゃつたかな?!

でもこれからはこーゆーのいっぱい見ることになるからさあ、馴れてねえ?」

白髪の少年はアーシアの頭をポンポンと叩いた。

アーシアはゆつくりと顔を上げると俺の方を見つめてくる。

「な、なんでイツセイさんが此処に……。?」

混乱したようなアーシアは若干震えたような声で言う。

「あれ? 赤龍帝クン、アーシアちゃんとお知り合い?」

まさか恋人同士だったりする?」

「うるせえぞ腐れ神父。」

シスター・アーシアとはこの間知り合つたばかりだ」

要らない事を言ってくる白髪の少年に俺は真実を伝える。

「そんでござんしたか。」

まあ、興味は無いんだけどね。」

カラカラと笑う白髪の少年。

その手にはまだ二丁の拳銃を持っているため警戒は解けない。

——と、その時、床が青白く光りだした。

「何事や?」

疑問を口に出す白髪の少年。

そんな彼にそれが何かを教えるのが如く青白い光は徐々にとある形を作っていく。

(魔法陣……リアス先輩たちか……)

床に描かれた魔法陣は眩い光を発する。その光が止むのと同時に、魔法陣の上には見知った顔が揃っていた。

「兵藤くん助けに来たよ」

腰に一振りの剣を差し、スマイルを送ってくる木場。

「あらあら。ナイスタイミングですわね」

「……神父」

姫島先輩に小猫ちゃんも臨戦態勢をとっている。

「ごめんなさいイツセー……まさかこの依頼主のもとに『はぐれ悪魔被い』の者が訪れるなんて計算外だったの……」

リアス先輩は申し訳なさそうな顔をしてそう言ってくる。

「全く……厄介事に巻き込まれんなよ一誠……」

そして、士織も面倒臭そうにしながらも白髪の少年を睨みながらそういった。

「……約一名違うけど……悪魔の団体……」

白髪の少年は瞳をギラギラと輝かせながらグレモリー眷属を睨む。そんな白髪の少年に睨みを聞かせながらリアス先輩は口を開く。

「何かしらはぐれ悪魔被いさん？」

「いやいや俺の獲物がいっぱい現れちゃったからさくちよつと興奮しちゃって〜。」

でもさく今は残念ながら武器が無いから……——————バイ  
ちや♪」

そう言った白髪の少年は煙玉を叩きつけた。

もうもうと立ち込める煙は部屋一面を真っ白に染める。

「……俺の名前は【フリード・セルゼン】だ。

じゃあね赤龍帝クン。

また会おう……」

俺の耳元でそんな言葉が聞こえた。



ぱつと振り返るがその気配はもう既に走り去っている。

煙が晴れた後には呆然と立ち尽くすアシアとグレモリー眷属、そして難しい顔をした土織の姿しか視界に入らなかった。

「！部長、この家に墮天使らしき気配が複数近づいていますわ。」

このままではこちらが不利になります」

「……仕方ないわ。朱乃、イツセーを回収して本拠地へ帰還するわ。ジャンプの用意を」

「はい」

リアス先輩に促された姫島先輩は何やら呪文のようなものを唱え始める。

どうやら転移魔法によって部室へと逃げるようだ。

俺はふいにアシアの方へと視線を向けた。

「リアス先輩！あの娘も一緒に！」

「……無理よ。あの魔法陣を通れるのは基本悪魔だけ。後は特別に組み込んだあなたと土織だけなの」

俺はその言葉を聞き、もう一度アシアの方へと視線を移す。

彼女はにっこりと笑う。

「シスター・アシア！」

「行ってくださいイツセーさん。」

また、またお会いしましょう？」

その言葉を皮切りに、朱乃さんの詠唱が終わり魔法陣が再び青白く輝き始める。

そして、俺は部室へと転送——

——される直前に魔法陣を抜け出した。

「イツセー!?!」

「すみませんリアス先輩。」

先に戻っておいてください。

すぐに俺も行きますから」

俺はリアス先輩にそう伝える。

その言葉が終わると同時にリアス先輩たちの姿は掻き消えていた。

「い、イツセーさん……なんで……」

「そんなの簡単なことだよ。」

——君を助けるために……ね？」

俺は笑顔でアーシアにそう言った。

「に、逃げてください！」

いくらイツセーさんでも死んじやいますっ!!!」

アーシアは泣きそうな顔でそう懇願する。

俺はそんなアーシアの涙を拭ってあげると、

「大丈夫。俺を信じて」

言つて、頭を優しく撫でる。

(さて……墮天使か……どうしたもんかなあ……)

『【禁手】を使えば良いだろう?』

(……それもそうだな)

俺はドライグとの対話を参考に、【禁手】による強行突破をすることにした。

「さて、取り敢えずいつときますか!

【禁手】

俺が【禁手化】しようとしたら矢先、頭をスパン!と何者かに叩

かれた。

「痛てえ!?何すんだ!!」

振り返ってみるとそこには——

「この馬鹿一誠。」

なんでも力押しでいこうとするな」

——仁王立ちする我が兄、土織の姿があった。

S i d e O u t

S i d e 士織

「な、なんで士織が此処に……?」

一誠は俺の姿を見るやいなやそんなことを口にする。

「俺もあの魔法陣から飛び出したんだよ。」

そんなことも気づかなかったのか?」

「い、いや……俺自身夢中だったからさ……」

そんなことをいう一誠に、俺はついつい溜め息を漏らす。

「修行が足りないぞ一誠……」

「……面目ない……」

しゅん、とした仕草をとる一誠。

全くもって情けない。

「あ、あの……」

と、一誠の、隣にいた少女——アーシア・アルジェント——

は俺を見ながら疑問の声をあげた。

「ああ、自己紹介がまだだったね。」

俺は兵藤士織。コイツ、一誠の、兄だ」

「お、お兄さんですか!」

お姉さんではなく……?」

酷く驚いたような表情を浮かべたアーシア・アルジェントは素直に  
そう言う。

「まあ、よく間違えられるけど俺は男だよ」

「そうなのですか……勉強になります……」

アーシア・アルジェントは何故かそんなことを言ってにこりと笑っ  
た。

(何の勉強になったのだろうか……)

「と、取り敢えず!」

力押しで駄目ならどうするんだよ士織」

「ん?そんなの決まってるだろ。」

——逃げるんだよ」

一誠の言葉に俺は少々得意気にそう言つてにやりと笑う。

そして、今までは使わなかった【神セイクリット・ギア器】を使つてみることにした。

「この力は内緒だからな？」

———【精霊フエアリー・エンジェル天使】モード【刻々ザアアアアフキエエエエエ帝】!!」

そう叫んだ俺の身を光の粒子が包み込む。

背後に巨大な時計盤が現れる手には歩兵銃と短銃が握られる。

そして俺は、握られた歩兵銃を真上に、短銃を時計盤の“1”の刻まれている部分に合わせて再び口を開く。

【一の弾アレフ】

その短い言葉と共に一誠とアシア・アルジェントに銃口を向け、撃つ。

撃ち終わると最後に自分自身にも一発撃つた。

【一の弾】とは、撃つた対象の時間を速めるといふ能力を持った弾丸である。

その為、それによる高速移動も可能とするのだ。

「ほら、走るぞ一誠、アシア・アルジェント」

「わ、わかった」

「は、はい!」

そうして、俺たち三人は家を後にし、部室を目指した。

ちなみに、一誠とアシア・アルジェントが自分たちの走るスピードに驚いていたのは何だかとても面白かったとだけ記しておく。

く乗り込みましたく

S i d e 一 誠

「なんて無茶をしたの……っ!!」

俺たちが部屋に帰ってくると、リアス先輩が若干涙目でそう言った。

「……すみません。」

気が付いたら体を動かしてました」

「あなたがいくら赤龍帝だとしても複数の墮天使を相手にするなんて……無謀なのよ?」

心配そうな瞳のリアス先輩。

しかし、その言葉は間違っている。

近づいて来ていた墮天使たちの気配からして、俺が敗ける可能性は限りなくゼロに近かったのだから。

「……心配させないでください土織先輩」

「そうだよ兵藤さん。」

いつの間にか居なくなってるんだから……」

「ああ、悪かったな……」

土織の方では小猫ちゃんと木場が何処か安心したような表情で話し掛けていた。

「……ひとまずは無傷だったことを喜びましょう……」。

残りの問題といえは……」

リアス先輩はアーシアの方を向くと黙り込む。

アーシアはシスター、教会側の人間だ。扱いに困っているのだから。

「あ、あの……あの……」

アーシアはリアス先輩に見つめられていることから慌てている。

わたわたと手を動かすアーシア。癒しとはこういうことを言うのだろうか。

俺はそんなアーシアの頭にポン、と手を置く。

「安心して下さいリアス先輩。」

「アーシアのことに關しては——俺たちが解決します」

俺の言葉にリアス先輩は目を見開き、慌てながら口を開いた。

「なっ?!」

相手は墮天使なのよ!?

もし何かあったら——」

「——その心配なら必要ないぞ」

リアス先輩の言葉に被せ、俺を援護する士織の言葉が聞こえてくる。

「……どういふことかしら?」

「その言葉のまんまの意味だが?」

何せ今この土地に來ている墮天使たちは独断で動いてるんだろ  
うしな……」

「そうなのか?」

俺は士織の言つた言葉に疑問を口にしてしまう。何せそれは俺も  
知らない内容だったのだから。

リアス先輩も士織の次の言葉を待っているようだ。

「ああ。」

おそらく……というか十中八九、狙いはアーシア・アルジェントの

セイクリッド・ギア  
【神器】だろうよ」

「わ、私ですか?!」

アーシアはその言葉にかなり驚いたらしく大きめの声をあげてい  
た。

まさかとは思っていたが本当にそうだったとは……。

「回復系神器としての能力に目を見張るものがあるからな。」

確か……【トワイライト・ヒーリング聖母の微笑】だったか?」

アーシアの方へ視線を移した士織は優しく問い掛けるような声  
音で言葉を発した。

アーシアは士織の言葉に首を縦にコクコクと振り、それが間違え  
ではないことを伝えている。

「まあ、何はともあれ。」

墮天使たちの狙いであるが故に助けなければならないアーシア・アルジェントは既に救出済み。

後はその件に関わっている墮天使たちに——お灸を据えるだけだ」

言つて士織は笑つたにこりと。

しかし、その笑みには何処か冷たさを感じた。

「……一誠に手を出しただけでも怒ってんのに……全く、懲りない奴らだ……」

「怒つてくれてたのか……」

士織の言葉についてそんな眩きが漏れてしまう。

「当たり前だろ？」

一応お前は俺の弟、家族なんだからよ」

「……士織……」

微笑む士織は何処か安らぎを感じさせてくれる。

糞う……そつちの気は無いが惚れちまいそうだけ士織っ!!!

『本当に殺されるぞ相棒……』

ドライグの言葉が聞こえてくると同時に背に冷たいモノを感じた。  
「……………」

半眼でこちらを睨む無言の士織の姿が視界に入る。

毎回思うことだが士織はエスパーか何かの類なのだろうか……？

俺の考えが筒抜けなような気がする……。

蛇に睨まれた蛙状態だった俺だがしばらくの後、士織からの無言の圧力も消えた。正直命の危険も感じていたのだが……。

「……取り敢えず……グレモリー先輩。」

今回の件に関してはウチの愚弟の言葉通り俺たちに任せてくれると助かる。

悪魔である先輩たちが下手に動くより俺たちが動いた方が都合がいいいな」

士織はそれを言い終わると一瞬で転移魔法を発動させ、その場から俺たちごと転移させた。

Side Out

~~~~~

Side 士織

一誠達ごと転移魔法により自宅の自室に転移した俺は、ゆっくり背伸びをする。ただそのまま口を開いた。

「……さてと、どうする一誠？」

「今から乗り込みに行くか？」

「……当たり前だろ」

「迷いのない即答。」

一誠の方を向いていないため、どんな表情をしているのかは分からない。しかし、その声音からどれ程の意気込みなのかは感じ取れた。俺はもう一度転移魔法を展開する。

「……アシア・アルジエント。」

「君はどうする？」

「オススメはこの家に居ることだが……」

「私も一緒に行きます！」

「こちら迷いのない即答。」

「自分の安全よりも優先すべき何かを見つけたのだろう。」

「まあ、分かってたけどな……」

「んじや、行くか……」

苦笑いが浮かんでくるのを感じながらも俺は転移魔法を行使した。  
(全く……家に転移したのが無駄になったぜ……)

「目指すは墮天使たちのねぐら——」

——廃墟となった教会だ。



辺り一面の静寂。

寂れた教会からは不気味なほど何の音も聞こえてこない。

俺と一誠、アーシア・アルジエントは教会の入り口前に立っていた。

「準備はいいか？二人とも」

「大丈夫だぜ？」

「は、はいっ!!」

一誠は「赤龍帝の籠手」を既に準備し、アーシア・アルジエントは緊張した面持ちでそう口に出す。

俺はそんな二人に軽く笑みを向けると、眼前にある扉に蹴りを放ち、入口をこじ開けた。

おそらく俺たちが此処に来たことはもうバレているだろう。

俺はそんなことを考えながら奥へと続く道を駆ける。現れた聖堂へと続く扉を開き、まずは俺が足を踏み入れた。

長椅子と祭壇、蝋燭の淡い光が聖堂内を照らしている。

廃墟だと言われているがなんともまだ使えそうな内装だ。

「侵入者三名確認……つと……」

俺が辺りを見回していると柱の物陰から一人の少年が歩み出てきた。

「フリード・セルゼン……」

俺の隣にいる一誠が少年の名前を呼ぶ。

白髪の神父服に身を包んだ少年——フリード・セルゼン——は一誠の呟きに嬉しそうな表情を浮かべる。

「赤龍帝クン覚えててくれたんだね」

ヘラヘラとした態度のフリード・セルゼンだったが隙を感じない。無防備に見えてかなりの警戒を敷いているようだ。

「あり？そっちのお嬢さんはどなたかな？かな？」

俺の方へと視線を向けたフリード・セルゼンは首を傾げながら興味深そうにする。

「俺はこいつの兄だよ兄。」

「姉じゃねえからな？」

「男性でござんしたか!？」

これは失礼失礼……」

頭を下げながら笑うがその瞳は闘争心に満ち満ちていた。

「取り敢えず……大人しく此処を通してくれる——わけないよな」

俺の言葉の途中でフリード・セルゼンは懐から刀身のない柄と白銀の拳銃を取り出し、そして構えた。

「士織、こいつは俺が……」

一誠が一步前に出てファイティングポーズをとる。

先程から何度目かの『Boost！！』という音声がかえってきた。

フリード・セルゼンも嬉しそうな笑みを浮かべて臨戦態勢をとっている。

「僕が相手をしてもらいたいかな？」

——刹那。

一誠とフリード・セルゼンの初動前に合われたかのように聞いたことのある声がかえってきた。

「き、木場!？」

なんで此処に居るんだよ!？」

一誠は驚きの表情で背後から現れた木場を見詰め、フリード・セルゼンは不満げな表情を浮かべる。

「加勢しに来たんだよ。」

ちよつと遅かったみたいだね」

木場は爽やかな笑みを浮かべて口を開いた。

俺はそんな木場を見ながら背後から近づく者を捕獲する。

「にやっ?!」

俺は捕獲した者の襟首を掴みぶら下げながら俺の前に移動させた。

「——小猫は一体何をしてるんだ？」

ぶら下げられる少女——小猫——は手を前に突き出す形で静止している。

「……私も加勢しに来ました」

「俺の背後から気配を消して迫ってくる意味は？」

「……テヘツ」

小猫は手を頭に当ててそんな仕草を取った。

「……恥ずかしいならするなよ小猫」

「は、恥ずかしくないです」

俺が何のリアクションもせず小猫を見つめているとまるで茹で上がったかのように顔を赤くした小猫は、俺の言葉を聞きそう返したが両の手で顔を隠す。

俺はそんな小猫を下ろしてやると不機嫌にこちらを見つめるフリード・セルゼンが視界に入った。

「……なんだいなんだい。」

俺と赤龍帝クンの邪魔をする奴がいると思ったら悪魔クンではないですか……」

その鋭い眼光は木場とそして小猫に向けられている。

「予定変更。」

悪魔クンが俺の相手をしてくれるんだよねえ……？」

「うん。」

僕がキミの相手をしよう」

「イイね！」

悪魔クンが相手なら……手加減は無用だ」

言って、フリード・セルゼンから感じるプレッシャーの質が変わった。

一誠に向けられていたのはライバルと純粋に闘いを楽しもうとする上で出てくるモノ。

しかし、木場に向けられるそれは憎悪と嫌悪の入り混じったモノだった。

フリード・セルゼンは右手に刀身のない柄を、左手に白銀の拳銃を持ち直した。

刀身のない柄からは光の刃が現れる。

「んじゃ、一丁断罪タイムと行こうか!!」

吐き捨てるようにそう言ったフリード・セルゼンはその場から飛び出し、木場に襲いかかって来た。

横薙ぎに振るわれる光の刃を木場は剣で弾き持ち前のスピードで回避を取る。

「ありり？」

この銃弾避けるなんてやるじゃん悪魔くん」

木場のいた所には三ヶ所の弾痕が刻まれていた。

「それを喰らう訳にはいかないからね」

そう言った木場はスピードを活かしてフェイント混じりの剣戟を繰り出す。

かなりのスピードを出しているがフリード・セルゼンはそれに遅れを取ることもなくさばいている。

「やるね。かなりキミ強いよ」

「そういう悪魔くんもやるねえ……」

【騎士<sup>ナイト</sup>】の駒かな？無駄の無い動きとその速さ……今まで相手してきた奴らの中でもかなりのモノだよ」

二人は鏝迫り合いを演じながらそんなことを言う。

「これは僕も出し惜しみなんて出来ないね……」

木場はそう呟くと瞳を閉じて再び口を開いた。

「喰らえ」

木場の低い声音が響く。

刹那、木場の剣から黒い靄が出現し、全体を覆いだした。

闇の剣。

一言で表すならそれだろう。

闇の剣は鏝迫り合いをするフリード・セルゼンの光の刃にその闇を延ばし、侵食しだす。

「ちっ!!」

悪魔クンも【神器】持ちか!!」

「ホーリー・イレイザー光喰剣」、光を喰らう闇の剣さ」

「なんとも相性の悪いモノをお持ちで!!」

フリード・セルゼンは苦笑いを浮かべながらその場から跳びず去る。

そして銃口を向けると連続して発砲した。

「無駄だよ!!」

木場はその弾丸を【光喰剣】で斬り払う。

苦い表情を浮かべながら着地したフリード・セルゼン。

光に絶対の効果を示す剣が相手ではフリード・セルゼンの持つ武装は無いも同然のようだ。

「ああ〜……武装の選択ミスったな……」

まさかそんな【神器】持つてる奴が居るとは思わなかったぜ……」

悔しそうに顔を歪めるフリード・セルゼン。

「ああ〜あ……最近逃げてばっかだなあ〜……」

まあ、死ぬよかマシか……」

そう呟いたフリード・セルゼンは懐から球体の何かを取り出す。

「逃がさないよっ!!」

それを見た木場は全速力でフリード・セルゼンに走り寄るが数瞬遅かったらしくフリード・セルゼンの持つ球体は地面に叩きつけられた。

瞬間、眩い閃光が辺りを覆う。

不覚にも俺もその閃光に目をやられ一瞬視界を奪われてしまった。

「ちっ……!」

ほんの一瞬だったにも関わらず辺りにフリード・セルゼンの姿は居なくなっていた。しかし、気配は何となく感じる……」

「今回もまた逃げることになったが……赤龍帝クン……今度こそ殺ろうね……」

そして……騎士クン。

今回は負けちゃったけど……今度は絶対に仕留めるから。

んじゃ、ばいちゃ♪」

その言葉を皮切りにフリード・セルゼンの気配は感じることもすら出来なくなってしまった。

「……逃げられちゃったみたいだね……」

木場はそう言うのと剣に纏わせた闇を霧散させる。

「逃げ足が速い奴だな……」

一誠は眉を顰めながらそう呟く。

「……あれ？そーいや小猫は？」

先程までの木場とフリード・セルゼンの戦闘で気付かなかったが小猫が一言も喋っていない。

「小猫ちゃんなら其処に居るぞ士織」

一誠は俺の後ろを指さした。

俺はゆっくりと振り返ってみる。

「……私はなんであんなことを……『テヘツ』って……『テヘツ』って……」

体育座りでそんなことをブツブツと言っている黒いオーラを身に纏った小猫の姿があった。

「こ、小猫……ちゃん……？」

木場は若干引き攣った顔で小猫に声を掛ける。

「……何ですか祐斗先輩」

「い、いや、なんでもないよ……」

若干目の据わった小猫の姿に木場も冷や汗を垂らして顔を逸らした。

「……どうしよう兵藤さん……」。

小猫ちゃんに恐怖を覚える僕が居るんだ……」  
木場はこちらを向くと震えた声でそう言った。

「安心しろ木場。」

——「あれは誰でも怖い」

言って苦笑いを浮かべた俺なのであった。

「……百歩譲って『テヘツ』と言うのはいいとして……仕草までなんで……」

うん。やっぱり怖い。

俺と木場は互いに小猫から顔をそらす。

と、そんな中我らが一誠が小猫に近づくとポンと肩を叩いた。

「そんなに気にするなよ小猫ちゃん。」

さっきの可愛かったぜ？

——「なあ、士織」

此処で俺に話を振るのか?!

俺はギギギギと小猫の方に顔を向ける。

「本当……ですか……?」

黒いオーラは何処へやら。

小猫は涙目で此方を見つめていた。シカモ高低差的に上目遣いもプラスされる。

「……ああ。可愛かったぜ?」

今の姿もかなり可愛い。

それに先程の『テヘツ』も可愛かったのは事実だ。

俺は意を決してそう小猫に伝えた。

「——さて、士織先輩行きましょう。」

早く墮天使たちを片付けるのです」

素早く立ち上がった小猫はきりっとした表情でそんなことを言った。

あまりの状態の変化に先程の小猫の姿が幻想だったのでは無いか  
と思ってしまう。

「……そうだな。」

早くに片付けて帰るか」

俺は苦笑いを浮かべながらそう呟くと墮天使たちが居るであろう  
場所を目指して足を進めた。

俺の後輩は可愛いけど怖いみたいだ……。



く決着つきましたく

S i d e 士織

フリード・セルゼンとの戦闘を終えた俺たちは祭壇の下に隠されていた地下階段を降りていた。

「……………」

誰一人として口は開かない。

先頭を黙々と突き進む一誠に置いていかれないようにただ進むのみだ。

階段を降り着れば奥へと続く長い一本道、そしてそれに隣接するようにな数多くの扉が存在した。

一誠はその隣接する扉には目も呉れず奥へと進んでいく。まるで自分の目的のモノの場所が分かっているかのように…………。

(…………いや、分かっているんだろうな…………)

迷いのないその歩みを見ているだけでそれが分かった。

最奥に設置された巨大な扉。その前に到達した一誠は一瞬歩みを止める。

そして、はあ…………つと息を吐くと顔を上げ、扉を押し開けた。

見えてくる部屋の中には光の刃を展開させた剣を手にしたたくさんの神父とその先頭にいる——四人の墮天使。

「——やあ、夕麻ちゃん。」

久し振り、元気だった？」

一誠は一人の墮天使に向けてそう言葉を発した。その顔には優しい微笑みが浮かぶ。

声を掛けられた墮天使は今にも泣きそうな顔で口を開く。

「——うん。元気だよ一誠君……」

それを聞いた一誠が再び口を開こうとしたがそれは隣の墮天使に遮られてしまった。

「これはこれはお初にお目にかかる。」

我が名は「ドーナシーク」という」

紺色のコートを身に纏った男性の墮天使は丁寧に頭を下げ名乗る。

「——さて、物は相談だが……ソレをこちらに渡してくれば貰えないだろうか？」

頭を上げた男性の墮天使——ドーナシーク——はアーシア・アルジェントの方を指さして言った。

「大人しく渡してくれば我々も手荒な真似はしないで置いてやろう」

「うわあ〜ドーナシーク甘々〜」

そんなの聞かずに無理矢理奪っちゃえばいいじゃん」

黒のゴスロリ服を着た金髪ツインテールの少女はアハハハと声を出して笑う。

「全くだ。」

ミッテルトの言う通りそんな面倒臭いことをするなドーナシーク」  
胸元の強調された黒いボディコンスーツの女性の墮天使は腕を腰に手を当ててにやりと笑う。

「そう言ってやるなミッテルト、カラワーナ。」

見てみる先頭の小僧に至っては俯いたまま動かぬではないか」

「うわあくダッサーい」

「怖がらせ過ぎたか？」

3人の墮天使は馬鹿にするような笑みを浮かべて笑う。それを見た木場と小猫は顔を歪め飛び出そうとした。

「……まて木場、小猫」

しかし、俺はそんな二人の肩を掴み行動を阻害する。

「なんで邪魔するんだい兵藤さん!!」

あんなに馬鹿にされておいて悔しくないのかい?! あなたの弟だろう!？」

「……流石にあればカチンとききました」

二人は俺の行動に反発し、何故そんなことをしたのか分からないようだ。

俺は瞳を閉じて、ゆっくりと口を開く。

「悔しい?何を言ってるんだ。」

俺には——負け犬の遠吠えしか聞こえてこないな」

「「……負け犬の遠吠え……?」「」」

俺の言葉に墮天使3人が反応する。

天野夕麻——レイナーレ——は目を閉じて微動だにしない。

「俺の弟——舐めんじゃねえぞ?。」

『Explosion! !』

——瞬間。

一誠から感じるオーラの質が跳ね上がった。

(このレベルなら……倍加20回分つてところか?)

俺はついつい微笑みが浮かんでしまう。

着々と強くなっているんだという思いが浮かぶのだ。

「な、なんだこの魔力の波動は?!」

「上級……いや、最早最上級の悪魔と……同等……?!」

「こ、これってヤバくね……?」

慌て始める堕天使たち。

レイナーレですら口に手を当てて驚いている。

「……ごちゃごちゃうるせえな……。」

俺は今機嫌が悪いんだ……。」

一誠は一步一步ゆっくりと進んでいく。一誠から感じるその魔力の波動は重圧となり堕天使たちを襲う。

堕天使たちは膝を付く程度で済んでいるがそれよりも下級の存在である神父たちは床に沈んでいる。

「今アジアを『ソレ』って言ったか?言ったよな?」

テメエらきちんと名前で呼べよ。何物扱いしてんだよ」

拳を握り締め、顔を前に向ける。

後ろから見ている俺にはその表情は見えないが恐らく憤怒に歪んでいるのだろう。

「しかも目的がアジアの【神器】を抜き取ることだと……?」

ふざけたこと言ってるじゃねえぞ!!!」

赤い————龍のオーラが一誠を包む。

堕天使3人はガクガクと体を震わせながら後ず去っていく。

「な、何なのだ貴様つ!!!」

ただの人間かと思えば最上級悪魔並の魔力の波動を……!!」

ドーナシックは顔を恐怖で歪めながら口を開く。ミッテルト、カラワーナに至っては互いの体を抱き合って震えていた。

一誠は立ち止まりバスケットボール大の魔力球を作り出す。

「————赤龍帝、兵藤一誠だ憶えておけ……っつ!!!」

一誠はそれを叫ぶと魔力球を殴りつけ、極太のレーザーを放つ。

レーザーは3人の堕天使を飲み込み、彼方へと消えていった。

——かのように見えた。

「……………」

実際は一誠の放ったレーザーは墮天使たちに当たる直前で上方にそれたのだ。

故に当たる事無くレーザーは消えていった。

しかし、墮天使3人はあまりの恐怖に気絶している。

一誠はそれで満足したのか首をコキコキツと鳴らすと  
ブーステッド・ギア  
【赤龍帝の籠手】を消してこちらへと踵を返してきた。

「ああ〜っ!!」

スツキリしたぜ……」

ニコニコとした人懐っこい笑みを浮かべた一誠。

全く……殺していない所が一誠らしい……。

こちらにやって来た一誠に小猫は無表情で口を開いた。

「……えげつないです」

「た、確かにあんな攻撃されたら……ね……?」

木場までも苦笑いを浮かべている。

「あ、当ててねえだろ?!」

「……当てていなかったとしてもアレはトラウマものです」

「少なくとも僕はアレを喰らった後兵藤君に平常心で会える自信がな

いよ……」

「酷え!!」

一誠は笑いながらそんなことを言った。

そして、今度は俺の方を向いてにやりと笑う。

俺はそれに対してふっ、と笑うと片腕を上にあげる。

「やってやったぜ!!」

「まあ、ナイスだったぜ……」

一誠は嬉しそうな表情を浮かべて勢い良く近づいてくると、俺の手を綺麗に叩き、ハイタッチを決めた。

—— 閑話休題。

「さて……やっとゆつくり話ができるね……夕麻ちゃん……」

一誠は今までただ立っているだけだったレイナーレに向けて声を掛けた。

レイナーレは顔を俯かせながらコクリと頷く。

「単刀直入に聞くけど……何の為にこんなことをしたの？」

一誠の言葉にレイナーレはびくつと体を震わせる。そしてゆつくりながら口を開いた。

「……私、弱いから……もっと、強くなりたかった……」

「だからって……」

「分かってるっ!!」

……でも、それしか考えつかなかったの……」

レイナーレは涙を流しながら言葉を続ける。

「初めは……何の躊躇いも無く出来ると思ってた……」

でも、アーシアちゃんを見ているうちに……アーシアちゃんと一緒にいるうちに……『ああ、駄目だ……』と思つたの……」

一誠は無言でレイナーレの瞳を見つめながら話を聞く。俺たちもそれを静かに聞き入れた。

「こんな優しい娘から【神器】を取り出して私の力にするなんて……出来なかった……」

でも引こうにも引けないところまで来てしまったの……」

レイナーレはそう言うのとアーシア・アルジェントの方へと近づいて行く。

「ごめんなさいアーシアちゃん……」

私……貴女を殺そうとして……っ!!」

深く、深く頭を下げて震える声で謝罪をしたレイナーレ。

「許されるとは思っていないわ……でも……」

「——頭を上げてくださいレイナーレ様」

アーシア・アルジエントは頭を下げているレイナーレに手を差し伸べて優しく口を開く。

「……私は今生きています。」

それにレイナーレ様が此処に連れて来てくれなかったらイツセーさんたちに会えませんでした」

レイナーレはアーシア・アルジエントの話を頭を下げたまま聞いていた。

「だから許します。」

私はレイナーレ様を許します」

まさに聖母の微笑。

アーシア・アルジエントの微笑みはそう言わしめる程の物だ。

「あり……がとう……っ！」

頭を下げたままレイナーレはそう口にする。ぽたぽたと流れる涙は床に落ちていった。

しばらく経ち、何とか涙を止めたレイナーレが一誠の元へと歩み寄る。

「……一誠君……」

「何？夕麻ちゃん」

優しい声音で返事をした一誠。

レイナーレは一誠の胸に顔をうずめ、震えた声で言った。

「私を——殺してくれる？」

場の空気が——凍った。

一誠は引き攣った顔で自分の胸に顔をうずめているレイナーレへと視線を落とす。

「な、何を……言っただ……？」

「……私たちは独断で行動してるの……。」

もし、【神器】を抜き取ろうとしていたことがバレたら……確実に処

罰を受けるわ……それも一番厳しいものを……」

一番厳しい処罰。

それはおそろく――

「――処刑か……」

「……ええ」

俺の呟きにレイナーレは弱々しい声でそう答えた。

「だから……どうせ死ぬのなら……愛しい人の腕の中で、死にたいわ……」

一誠の服をギュツと掴んだレイナーレ。

一誠はそんなレイナーレに迷うことなく、

「――断る」

はつきりとそう告げた。

「ツツ……!!!」

そ、そうよね……ごめんなさい一誠君……」

レイナーレは体をびくつと震わせるとそう言つて一誠から体を離れさせる。

そして、一歩下がると見ただけで無理矢理だと分かる笑みを浮かべた。

「さようなら一誠君……」

レイナーレはそれだけいうと一誠に背を向けて残りの3人の墮天使の元へ歩みだす。



「――何勘違いしてるの?」

一誠はそんなレイナーレを背後から抱き締めるとそういった。

「……え……?」

「断るとは言ったけどそれは夕麻ちゃんを殺すのを断ったんだよ?」

一誠はレイナーレを抱き締めながら言葉を続ける。

「夕麻ちゃん何もしてないだろ?」

だから死ななくて良い。

――俺と一緒に来ないか?」

レイナーレはその言葉を聞くと体を震わせた。そして少し頭を下げると口を開く。

「……一誠君を殺したわ……」

「それは夕麻ちゃんが殺したわけじゃない。やったのはドーナシークっていう墮天使だ」

「……アーシアちゃんを苦しめたわ……」

「ついさつき許してもらったよな?」

「……私墮天使よ……」

「俺は人間だな」

「……一誠君の方が先に死んでしまうわ……」

「なら俺は悪魔にでも天使にでも墮天使にでも、何にでもなっつてやるよ」

レイナーレの言う言葉を即座に返す一誠。

その言い合いを繰り返す度にレイナーレの体の震えは大きくなり、声は掠れた。

「何の問題も無いだろ?」

もう一回言う。

——俺と一緒に来ないか？」

レイナーレは一誠の回された腕を掴んで言った。

「はい……」

その声は涙で震えとても聞き取れるモノではなかった。しかし、何故か不思議ととても綺麗なモノに聞こえた。

レイナーレはその場に泣き崩れ、一誠はその震える体を優しく包み込んだ。

「あらあら、うふふ……」

何やらいい雰囲気ですわね……」

「……姫島先輩か……」

随分と遅かったな？」

俺の隣に巫女服に身を包んだ姫島先輩が現れる。

「うふふ……外にいた悪い子たちにお仕置きしてたら遅くなりましたわ」

「……さいですか」

俺はそう言ってもう一人の先輩にも声をかける。

「グレモリー先輩はそんなところで何をしているんだ？」

俺たちの背後——とは言っても入口の扉近くだが——

——でグレモリー先輩はこそこそとこちらを見ていた。

俺に声をかけられたからかびくと体を震わせるところちらに歩んでくる。

「な、なんでもないわ」

「まあ、取り敢えず……お疲れ様」

俺はそれだけいうとまた、一誠たちの方へと視線を戻した。

子供のように涙を流すレイナーレをあやすように一誠はその頭を撫でている。

俺と姫島先輩、グレモリー先輩は微笑ましいものを見るように、木場と小猫は何処か驚いたような、しかし、優しい瞳でそんな二人を見つめていた。

「……グレモリー先輩」

「何かしら？」

「あの堕天使たちを引き渡す時に——と言つて貰えないか？」

「……分かったわ。」

「あなたがそう言うのなら伝えておいてあげる」  
「助かるよ」

こうして騒がしい夜は明けていった。

イレギュラーはこれからも続くだろう。

くエピソードですく

オツス、兵藤一誠だ。

墮天使との一件から1週間が経った。

あの後夕麻ちゃん——レイナーレ——たちはリアス部長の監視の下、墮天使側に引き渡された。

初めはそれに関して俺は反発していたのだが、流石に夕麻ちゃんたちの無断行動を墮天使側に報告しない訳にはいかないということ、幾つかの条件を飲んでもらって俺は引き下がることにした。

その条件は至極簡単。あの三人の墮天使と夕麻ちゃんを殺さない、ということだ。

リアス先輩を通してその条件が飲まれたことも教えてもらっている。

「——つってももう1週間か……」

条件が飲まれたことは教えてもらったがどのような処罰が下ったのかまでは知らない。だからこそ心配になっているのだ。

俺はリビングのソファーに深く座るとハア、と溜め息を漏らす。

「辛気臭いぞ一誠。」

そんなに心配しなくても大丈夫だろうよ」

「ああ……土織か……」

声を掛けられたため、視線を移動させるとふたつのコーヒーカップを持つ土織の姿があった。

「ほら、お前の分も淹れてやったから飲め」

「……サンキュー土織」

土織から差し出されたコーヒーカップを受け取る俺。

最近どうも調子が出ない。無意識のうちに溜め息が漏れる。

そんな俺を見かねたのか土織が口を開いた。

「そんなに心配か？」

「まあ……な……」

どんな処罰を受けてるのかって考えたら気が気じゃない」

「ふうん……」

土織は俺の話に興味なさげな声を出すとコーヒーカップをテーブルに置いて背伸びをする。

そして、思い出したかのように、

「取り敢えず今日は来客があるからそのしみつたれた顔をなんとかしろ。」

お見せできないよ状態だからな」

少し楽しそうにそう言った。

……そんな俺は酷い顔をしているのか……。

俺は手に持ったままだったコーヒーカップをテーブルに乗せると、両の頬をパン！と叩き気を引き締める。

「まあ……ちつとはマシになったか……」

俺の方を向いた土織はそう呟いた。

俺はそんな土織に笑みを向け、テーブルの上に置いたコーヒーカップを取って一気に飲み干す。

程よい苦味が口の中に広がる。ああ……今の俺には丁度いい苦味だ。

「……あ、それ俺のコーヒー」

「ぶフツツ!!?!」

士織の眩きに吹き出してしまう俺。

……何とも格好の着かない朝である。

Side Out

Side 士織

「取り敢えず一誠は着替えて来い。」

そろそろ来るはずだからな」

飲み終わったコーヒーカーップを片付けた俺は未だにパジャマ姿の一誠にそう言葉を掛けた。

「了解。」

……ちなみに来客って誰が来るんだ?」

ソファーから立ち上がった一誠は疑問符を頭の上に浮かべる。

「ん〜……一応偉い人?」

「い、一応……?」

苦笑いを浮かべる一誠。

俺はそんなことよりも早く着替えて来いと伝え、一誠を自室へと向かわせた。

それと同時に少し遅れてか、家のインターホンの音が響く。

どうやら来客予定の人たちが来たようだ。

俺は小走り気味に玄関まで向かうと、ゆつくりとドアを開いた。

「——いらっしやいアザゼル」

玄関のドアの向こうに居たのは黒髪のちよつと悪そうな雰囲気を纏わせた浴衣の男性——墮天使の幹部組織【神の子を見張る者】のトップ、墮天使総督アザゼルその人。

この人が本日の来客だ。

「総督を付ける総督を……」

全く……俺への扱いが雑じゃねえか？土織」

「アザゼルはこの扱いがちようどいいだろ。」

取り敢えず立ち話もなんだし入ってくれ」

「おう。邪魔するぜ」

軽く言葉を交わした俺とアザゼル。

来客用のスリッパをアザゼルに履かせるとリビングへと案内した。

アザゼルはリビングに入った瞬間流れるようにソファアに座りくつろぎ始める。

「コーヒーで良いか？アザゼル」

「おう、ブラックで頼む」

「了解した」

アザゼルへの確認を終えた俺は手早く、しかし丁寧にコーヒーを淹れ、客人であるアザゼルに振舞う。

「お……中々美味しいじゃねえか」

コーヒーを一口啜るとアザゼルはそう呟く。

「まあ、簡単なものだけだな」

アザゼルに向かって苦笑いを浮かべながらそう言う俺もついでに淹れた二杯目のコーヒーを口に運ぶ。

「インターホン鳴ってたけどお客さんは——おっと、もうい

らっしやってるみたいだな」

パジャマから服を着替えてきた一誠はリビングに入ってくるとアザゼルの姿が目に入ったようで軽くお辞儀をした。

「土織、こいつが例の弟か？」

アザゼルは一誠をしばしの間見つめると俺の方へと視線を移動させてそう言う。

「そうだぞ？」

そいつが俺の弟で——今代の【赤龍帝】だ」

「へえ……？」

アザゼルはそれを聞くと再び一誠の方を向いて面白いモノを見るような表情を浮かべた。

……いや、どちらかというと新しい玩具を前にした子供のようだと  
言った方が適切だろうか……。

「え、えつと……土織、このちよい悪系の人は一体……？」

困惑の表情を浮かべる一誠。

しかし、話の内容から関係者であることはわかっているようだ。

一誠の言葉を聞いたアザゼルは楽しそうな表情はそのままに口を開いた。

「おおー悪い悪い！自己紹介してなかったな！俺の名は【アザゼル】——」

アザゼルの背から6対12枚の薄暗く、常闇のような黒翼が出現する。

「——堕天使の総督だ。」

これから宜しく頼むぜ？赤龍帝」  
にやりと笑うアザゼル。

何処かキザったらしいがやっているのがアザゼルだからか似合っていた。

—— 閑話休題

「そーいや赤龍帝」



「俺は 兵藤 一誠 です」

「んじや、一誠。」

「お前さんどれくらい強えんだ？」

「簡単な自己紹介を済ませたアザゼルは興味津々といった風に一誠を見つめて言った。

一誠は少し考える仕草をすると自嘲気味な笑みを浮かべる。

「俺なんてそこら辺の一般人に毛が生えた程度ですよ。」

「土織に歯も立ちませんしね」

「そうなのか……」

アザゼルは残念そうな表情をするとコーヒーを一口飲む。

「……どうやら一誠は勘違いしているらしい。」

「何言ってるんだ一誠。」

「お前は自分を過小評価し過ぎだ」

俺が一誠にそう言うといえっ？という表情になる。

アザゼルはコーヒーを飲みながら俺の言葉に耳を傾けているようだ。

「お前のあの【禁手】バランス・ブレイカーならアザゼルともいい勝負が出来るはずだぜ？」

「ああ……アレか……」

でもあれは消耗が激しすぎて使えねえだろ」

一誠は苦笑いを浮かべながらそう言った。

「まあ、魔力が少ないのが痛いよな……」

「だな……」

今の俺の魔力量じゃせいぜい3回つてところだしな」

俺と一誠がそんな話をしてしていると先程まで静かに聞いていたアザゼルが慌てたように話に入ってくる。

「おいおいおい！」

「お前らは一体何の話をしてるんだ?!

何だよ『あの【禁手】』ってよ!!」

「何って一誠の【赤龍帝の籠手】ブーステッド・ギアの【禁手】の話だぜ？」

俺が正直にそう言うのとアザゼルは顎に手を添えて一瞬目を閉じる

と真剣な声を発した。

【赤龍帝の籠手】の【禁手】つつたら【赤龍帝の鎧】か……？

……いや、だとしたら3回つてところが腑に落ちねえな……。

だったら考えつく答えはひとつ——

アザゼルは俺と一誠の方を向くと真面目な表情で問い掛けてくる。

「——【亜種】の【禁手】か？」

その言葉に声を発することなくゆっくりと頷く。するとアザゼルは拳を握り締めて身体を震わせ始めた。

「かっつ!!!」

【神滅具】の【亜種禁手】!?!何だそれ超興味あるぞ!!

おい一誠!今度【神の子を見張る者】に来て【赤龍帝の籠手】を調べさせろ!!」

興奮した様子のアザゼルは一誠に詰め寄ってそう言った。

あまりの迫力に一誠もたじたじである。

俺はアザゼルの頭を軽く叩くと咳払いをし、声を発する。

「その話はまた今度だアザゼル。」

……それよりも、『あの件』については大丈夫なんだよな?」

「痛えな土織……もちつと手加減しやがれ。」

『あの件』に関しては何の問題もねえ。あいつら自身も不満は言っていないし、寧ろ喜んでたぞ?」

叩かれた部分を手で撫でながらアザゼルはそう言い、少しの間を空けて言葉を続ける。

「なんなら今からでも大丈夫だがどうする?」

「ああ。早い方がいいだろうしな……。」

頼むぜアザゼル」

「あいよ、了解だ」

そう言ったアザゼルはパチン、と指を鳴らす。すると、アザゼルの座っているソファアの隣に魔法陣が描かれ、光を発した。一誠は何が

なんだか分かっていないらしく、その光景をただ見詰めている。

魔法陣からの光は徐々に収まっていき、その代わりに四つの人影が現れた。

——一人は黒いスーツに身を包んだ女性。

——一人は黒のゴスロリの服を纏った女の子。

——一人は漆黒のワンピースを来た少女。

——一人は紺色のコートを羽織った女性。

「……ッッ!!」

一誠の息を呑む声が聞こえてくる。

四人を見て思うところがあつたのだろう。

そして俺は、その四人を見て、

「……ッッ?!」

——違う意味で息を呑んだ。

四人——正確にはその中の1人——の姿が明らかに記憶と食い違っている。

俺はアザゼルの方を向くと口を開いた。

「あ、アザゼル？」

ドーナシークは一体——「私に何かようか？」……あ……う？」

俺の台詞に被せるように声が聞こえてくる。その声の主を確かめるために視線を移動させると、そこには俺が違和感しか感じなかった紺色のコートを羽織った女性の姿があつた。

しばしの間その女性を見つめた後、勢い良くアザゼルの方を向きなおすと冷静に言葉を吐く。

「……アザゼルどういうことだ？」

俺の頭がおかしくなった訳ではないのならドーナシークは男だつたはずだぞ？」

「ああ、そのことか。」

ドーナシークはちよつと俺の実験に協力してもらったから性別が変わつた」

あつけらかんとそんなことをのたまうアザゼルについて真顔になつてしまう。

俺は咳払いをひとつすると取り敢えず思った事を全て口にする。

「——アホかアザゼルツツ!!!」

お前の実験に協力したら性別が変わるのか?!何の実験してんだよ!!?

そしてドーナシークはなんで性別が変わったのにそんなに落ち着き払ってるんだ?!普通は怒るだろ!?!そして戻してもらうだろ!?!

あれか?墮天使は皆意外と呑気か?呑気なのか?!」

「別に性別程度で狼狽えることはないだろう?」

「そうだぜ士織」

何言ってるのコイツという視線を俺に向けたアザゼルとドーナシークはそういった。

「俺がおかしいのか……?」

その反応に俺は頭を抱える。

分からない……分からない……。

### —— 閑話休題

「……取り敢えず、一誠が混乱してるみたいだから説明すんぞ……アザゼル頼む……」

俺は若干の頭痛を感じながらもアザゼルに説明を求める。

「メンドクセエが……分かったぜ……」

当のアザゼル本人は気怠そうに頭を搔くと口を開いた。

「ああく……なんだ……簡潔に言うコイツら四人を今日から此処に住ませてやってくれ」

「えつと……住ませる分には多分……というか確実に大丈夫ですけど……良いんですか?」

一誠は恐る恐るといった風に問う。

「どうやら処罰に関して気にしているようだ。」

「ああ。問題はねえぞ。」

「一応硬っ苦しうと『兵藤家での一生無償労働』という処罰を下してるからな」

「そう……ですか」

素っ気ない言葉に聞こえるが一誠の顔はニヤけていた。やはり嬉しいらしい。

アザゼルはそんな一誠の顔を見るとおもむろに立ち上がり何処か悪い笑みを浮かべる。

「んじゃ、俺は忙しいんでなそろそろ帰るぜ？取り敢えず――」

――ヤリ過ぎには注意だぞ？餓鬼ども」

「余計なことを言っていないで帰るなら帰れアザゼルっ!!!」

俺はそう叫んでアザゼルの追い払った。

全く……アザゼルはなんであんなキャラなのだろうか……。

アザゼルの気配が完全に消えたのを確認するとくるりと背後に振り返る。そこには様々な反応をしている五人の姿が見受けられた。

「や、ヤリすぎ……?」

言葉を繰り返し首を傾げる黒のゴスロリの服を纏った女の子――

――ミツテルト。

どうやら外見の割にはそういう知識のない素直な娘らしい。

「は、ははは……総督も面白い事を言うな」

言いながら頬をほのかに紅く染める黒いスーツに身を包んだ女性

――カラワーナ。

意味は分ったようだが見た目通りのクールな性格らしくそこまで恥ずかしがっていない。

「総督はよく恥ずかしげもなく言えるものだ」

そう言いながら笑う紺色のコートを羽織った女性――ドーナシーク。

……男の時はこんなキャラだっただろうか……?

「いや、ヤリすぎ……」

漆黒のワンピースを来た少女――レイナーレと一誠は互いの顔を見てその顔を真っ赤に染めると俯いた。

……何と言うかこの二人……。  
俺はそんな二人に微笑みを向ける。

「一誠ちゃん？土織ちゃん？」

どなたかいらっしゃってるの？？」

「……騒がしいが誰か来たのか……？」

そんな両親の声が階段の方から聞こえて来る。ひとまずはこの場を落ち着けねえとな……。

「ほらほら皆！」

取り敢えずは落ち着け！」

ぱんぱん、と柏手を叩きそう言った俺。

どうやらまずは、四人を両親に紹介する所から始まりそうだ。

く戦闘校舎のフェニックスく  
く何やら始まりそうですく

S i d e 土織

「「「いただきます」」」

もう聞きなれた5人の女声がリビングに響く。

「はいはい♪たくさん食べてね♪」

「うむ。賑やかな食卓はやはり良いな」

母さんは嬉しそうに笑い父さんは満足そうに首を振っている。

「んじや、俺も食べるかな……いただきます」

「だな。いただきます」

俺と一誠も手を合わせてその言葉を発すると箸を手に取り食事を開始した。

5人の女性——レイナーレ、カラワーナ、ドーナシーク、ミツテルト、そしてアーシア——が家に住み始めてから既に1ヶ月。

あの日、堕天使の四人のことを話すと二つ返事で住むのを許可してくれた両親。更に後から来たアーシアまでも快く受け入れてくれた。

なんでも両親曰く、『賑やかになるのは大歓迎』だそうだ。

「葵泉さん、このお漬物の付け方今度教えてもらっても良いですか？」

「良いわよ夕麻ちゃん♪」

今度一緒に漬けましょうか♪」

「だ、だったらウチもやりたい！」

「わ、私もです!!」

「ふふふっ♪じゃあ美憧ちゃんとアーシアちゃんも一緒にしましょうね♪」

「本当ですか!!やった♪」

母さんはレイナーレ——夕麻——とミツテルト——美憧——

——、アーシアの三人と楽しそうに話をしている。

「賢夜殿、本日のお勤めは？」

「休みだ。」

「稽古でもつけてやろうか？ 絢奈」

「それは魅力的な申し出……ひとつお願いします」

「良いだろう。」

「今回も扱いてやる」

「稽古なら私も参加しても？」

「華那もか？」

「良いだろう。なら今日は本格的にやろう」

父さんはドーナシック—— 絢奈—— とカラワーナ—— 華那

——と食事後の計画をしているようだ。

そもそも何故ドーナシック、ミッテルト、カラワーナ、レイナーレの名前が違うのかと言うと、両親に四人を紹介したその日。母さんが何処かへ電話を掛けたかと思うと次の日には四人の新たな戸籍が完成していたのだ。それ故に現在四人はその時につけられた名前を今は名乗っている。

そして、付けられた名前を考えたのは俺たちの父親【兵藤 賢夜】。長身でがっちりとした肉体、そして厳しそうな見た目だがとても優しく強い自慢の父親だ。

「ごちそうさまでした」

俺は歓談する皆を見ながら食事を済ませると同じく食べ終わった一誠とともに食器をキッチンに運び声を掛ける。

「一誠は今日何するんだ？」

「俺か？ そうだな……実は士織に相談したいことがあったんだけど……大丈夫か？」

「今日は何をする予定も無かったし大丈夫だぞ？ 俺の部屋で良いか？」

俺がそう言うと、一誠はほっとした表情を一瞬浮かべ、直ぐに人懐っこい笑みになる。

「ああ。大丈夫だぜ」

「なら、先に行っててくれ。」

俺は皆に少し伝えてくるから」

「了解」



短くそう言った一誠は階段の方へと向かっていった。  
……さてさて、今回は何の相談かな？

俺はそんなことを考えながら俺と一誠の分の食器を洗うのだった。

~~~~~

「んで……今日は何の相談だ？」

皆に自分の部屋へ戻る旨を伝えた俺は、足早に階段を上り、部屋の扉を開けるやいなや、ソファーに腰掛けていた一誠にそう言葉をかけた。

後ろ手に扉を閉めるとそれを待っていたかのように一誠が口を開く。

「……土織は【封印魔法】とか使えたりするか？」

【封印魔法】？

使えるには使えるが……いきなりどうしたんだ？」

「……ちよつと悪魔にでも転生しようかなって思ったんだよ……」

一誠は簡潔に、そう呟いた。

一瞬の思考の後それがどう言う意味で、何故そういった考えに至ったのかが分かる。

「……つまり、今の一誠のスペックじゃ転生出来ないから転生出来るスペックになるまで自分の力を無理矢理抑え込むのか……」

「そう言う事だ」

無駄な説明が要らないから楽だな、一誠は苦笑いを浮かべながらそう言った。

「転生するからには主は決めてんのか？」

身近なら生徒会長の【支取しとり 蒼那そうな】——シトリー家の次期当主かグレモリー先輩のどちらかだが……」

顎に手を当てながら一誠に問う。

すると一誠はこくりと首を縦に振ると——懐から8つの紅い駒を取り出した。

「……8つ……【兵士ポーン】の駒か……」

つうことはグレモリー先輩を主として選んだのか……」

支取蒼那は既に【兵士】の駒を使っている。その為、8つ全てを持っているのならばそれはグレモリー先輩しかいないのだ。

「なんだかんだ言ってもリアス先輩には良くしてもらってるしな……。」

俺が『眷属にしてもらえますか?』っていきなり言ったのに『此方から頼みたいほどだわ』って言ってくれたんだよ

一誠はそう言うのと微笑みながら駒を手に握った。

そして俺の方を真剣な目で見つめてくる。

「……だから頼む士織。」

俺に【封印魔法】を教えてください」

頭を深々と下げながら一誠はそう言った。

【封印魔法】を掛けてくれるではなく【封印魔法】を教えてくださいと言ったのだ。

俺はそんな一誠が何処か微笑ましくて、優しい口調で声を発した。

「いいぜ、一誠。」

俺に任せとけ！お前の納得できるような【封印魔法】を教えてください

よー！」

「ま、マジでか!？」

ありがとう士織っ!!助かるぜ！」

人懐っこい一誠の笑顔。

最近ではこの笑顔を見ると心が暖かくなる。

……ブラコンでは決してない。

「ああ……疲れたな……」

一誠からの相談を聞いた後、俺は直ぐに一誠に合わせた【封印魔法】

を構築し、練習させた。

一誠は魔力が極端に少ないため、【封印魔法】を行使するには無駄を極限まで省かなければならない。そこさえクリア出来れば直ぐにでも使いこなせるのだが――

「……如何せん、一誠は不器用だからなあ……」

言いながら苦笑いが浮かんでくる。

俺は寝転がっていたベットから身体を起こすと、背伸びをして時計へと目を移した。

「ああ……もう1時か……」

俺もすっかり夜型になっちまったな……」

悪魔稼業を手伝っているかどうかどうしても夜に仕事をしなければならなかったため、昼夜逆転とまではいかないが夜は目が冴えてしまう。だからと言って朝、昼と眠たいわけではない。

俺は暇つぶしにまだ使ったことのない【魔法】を整理していく。

「うくん……一誠の魔力量はなんとかなんねえもんかな……」

多種多様の【魔法】は直ぐに把握出来る訳ではない。

少しずつ、少しずつ、時間を掛けてどのような【魔法】があるのかを確認して行かなければならないのだ。

――その時。

俺の部屋の床に光が走る。光は円状に広がると、見覚えのある模様を描いた。

「グレモリー眷属の魔法陣……?」

一体誰がなんのために俺の部屋へと転移してきたのだろうか。

俺は光が収まるのを待った。

そして、そこに現れたのは――

「……何のようですか?グレモリー先輩」

――一誠が主として選んだ、紅髪の女性、リアス・グレモリーがそこに居た。

グレモリー先輩は俺の姿を確認するとズンズンと詰め寄り、焦ったような表情で口を開く。

「士織、私を抱きなさい」

全く、持って、意味が、分からない。

俺がポカンと口を開けてグレモリー先輩を見てみると、更に近づいてくる。

俺をベットへと押し倒し駄目押しと言わんばかりに一言。

「私の処女を貰って頂戴。至急頼むわ」

思い詰め様な表情で着ている制服を脱ぎ始めるグレモリー先輩。俺は溜息を吐きながらそんなグレモリー先輩に話し掛けた。

「落ち着けグレモリー先輩。」

何がしたいんだアンタは……」

俺の上に乗っているグレモリー先輩は息を整えると反応する。

「私では駄目かしら……？」

「駄目だとか駄目じゃないとかそういう問題じゃねえよ……。」

一体どうしたんだ？」

「色々考えたのだけれど、これしか方法がないの」

……駄目だ。話が全然噛み合わない。

俺は頭を抱えた。

「既成事実ができてしまえば文句もないはず。

身近でそれが私とできそうなのはあなたしか居なかったわ……」

やはり浮かぶのは悲しそうな表情。

そこで俺はやっと思い出した。

この時期は——

——結婚騒動が起きる時期ではないか、と。

「……祐斗では駄目。根っからの騎士<sup>ナイト</sup>だし……それに……いえ、何でも無いわ。

そして、イツセーには夕麻がいる……。

だからこそ、土織しかいなかったの……」

そう言ったグレモリー先輩は更に服を脱ごうとする。

しかし、それは——

「止めろって言ってんだよこの馬鹿」

——俺が肩を押し、体勢を入れ替えることによつて阻止された。

「きや……っ」

グレモリー先輩に馬乗りになる形で俺は動きを制限させる。

「一体何をそんなに焦っているんだ？グレモリー先輩」

「それは……」

また、悲しそうな表情を浮かべたグレモリー先輩は口を噤む。

「ハア……。

取り敢えず聞けグレモリー先輩……いや、リアス・グレモリー。

アンタが何を悩んでるのは知らねえ。けどな、アンタは俺の弟が主として選んだ女だ。

そんな女が簡単に諦めてんじやねえよ！」

俺はグレモリー先輩の肩を掴み更に言葉を続ける。

「抗えーアンタがそれに従いたくないなら最後まで抗えよ！」

安心しろ、アンタにはもう——

——最強の兵士兵藤 誠がついてんだからよ」

微笑みながらグレモリー先輩の頭を撫でた。

それと同時に部屋の床が再び光り輝く。

広がるのは再びグレモリー眷属の魔法陣。

どうやらあの人が来るようだ。

光が収まった後、そこにいたのは銀色の髪をしたメイド服姿の女性。

銀髪のメイドは俺とグレモリー先輩の姿を確認すると、静かに口を

開く前に俺へと飛び掛ってきた。

「おっと……」

俺はそれを後ろに飛ぶことで躲す。

「こんなことをして破談へと持ち込もうというわけですか？」

俺の方へと明確な敵意を向けてメイドは淡々と言う。

それを聞いたグレモリー先輩は眉を釣り上げる。

「こんなことでもしないと、お父さまもお兄さまも私の意見を聞いてはくれないでしょう？」

「……このような野蛮で下賤な輩みさいわに操みを捧げると知れば旦那さまとサーゼクスさまが悲しまれますよ」

メイドは睨むような視線をこちらに向けながらグレモリー先輩を守るように手を広げる。

それにしても酷い。

いきなり襲われたかと思えば突然現れたメイドに『野蛮で下賤な輩』と言われるとは……。

俺は頭を軽く搔くと少々不機嫌気味に口を開いた。

「……いきなり来ておいてなんて物言いだよ……」

被害者はこっちだっていうのに……

……『巫山戯んなよ?』』

「……ツツ?!」

俺が自らに掛けた【封印魔法】を一段階だけ解き、言葉を発するとメイドから感じられる敵意が膨れ上がった。

「ま、待って頂戴グレイフィア!!」

士織は悪くないの!

私が自分から此処に来て士織をその……襲った……のよ……っ!!!」  
頬を赤く染め、恥ずかしがりながらメイドに向かって言葉を発する  
グレモリー先輩。

メイド——グレイフィアと呼ばれた——はその言葉に直ぐには反応しなかったが徐々に敵意を消していった。

「……申し訳ございません。」

お嬢さまが襲われていたのだと勘違いしてしまいました。

私はグレモリー家に仕える者です。

名を【グレイフィア・ルキフグス】と申します。以後お見知りおきを……」

謝罪の言葉を述べたグレイフィア・ルキフグスは簡単な自己紹介をして、頭を下げた。

「グレイフィア、あなたが此処へ来たのはあなたの意志?それとも家の総意?……それともお兄さまのご意思かしら?」

半眼で口をへの字に曲げたグレモリー先輩。年相応の女の子らしい反応は初めて見たため、新鮮だ。

「全部です」

グレイフィア・ルキフグスはそう即答した。それを聞いたグレモリー先輩は諦めたかのように深く息を吐く。

「そう。お兄さまの【女王】<sup>クイーン</sup>であるあなたが直々に人間界へ来るのだもの。そう言う事よね。分かったわ」

グレモリー先輩は脱ぎ掛けだった服を丁寧に着なおす。

正直もつと早くから着てくれれば嬉しかった。

「ごめんなさい、士織。」

さっきのことは……その……忘れて頂戴。

あなたの言葉で目が覚めたわ。

ありがとう」

「気にするな。

グレモリー先輩もあんなことは二度とするな？」

「ええ。わかってるわ」

柔らかな笑みを浮かべてグレモリー先輩はそう言った。

そして、グレイフィア・ルキフグスの方へと向き直る。

「グレイフィア、私の根城へ行きましょう。」

話はそこで聞かぬわ。朱乃も同伴でいいわよね？」

「【雷の巫女】ですか？」

私は構いません。上級悪魔たる者、【女王】を傍らに置くのは常ですので」

「——士織」

グレモリー先輩が俺を呼ぶ。

服をすべて着たのを見計らってなのか、そのまま俺の方へと近づいて、

——チュツ。

頬に触れる柔らかなナニカ。

「今夜はこれで許して頂戴。」

迷惑掛けたわね。明日、また部室で会いましょう？来てくれるわよね？」

「あ、ああ……。」

明日は行くつもりだったからな。

何の問題もない」

その言葉を聞くと、グレモリー先輩とグレイフィア・ルキフグスは魔法陣を展開し、そのまま転移していった。

一人残された部屋には時計の針が時を刻む音が響く。

俺は頬を軽く撫でると口を開いた。

「……シャワーでも……浴びるか……」



何となく、そんな気分だ。

く話し合いしましたく

S i d e 士織

グレモリー先輩襲来から次の日。

何の変哲もない学校生活も終わり、俺、一誠、木場、アーシアはグレモリー眷属の溜まり場——旧校舎の部室へと向かっていた。「なあ、リアス部長って何か悩んでるのか？」

一誠が突然そんなことを言い始めた。

我が弟ながら変なところで鋭い……。

「部長のお悩みか……。」

多分、グレモリー家に関わることじゃないかな？」

「なるほどなあ……。」

……最近リアス部長が『心ここにあらず』って状態だったから気になったんだけど……。」

一誠は呟くようにそう言う腕を組んだ。そして、少し首を捻ったかと思えばはつとした表情になる。

「朱乃先輩なら知ってるよな？」

「朱乃さんは部長の懐刀だから、勿論知っているだろうね」

木場は一誠の言葉に頷く。

「……取り敢えず部室に早く行くぞ……。」

俺は二人の歩みを促す。

既に旧校舎には来ているのだから早く行ったほうが良いだろう。

部室の扉前に到着したとき、やつと、木場がはつとした表情になる。

「……僕がここまで来て初めて気配に気づくなんて……。」

目を細め、顔を怖張らせる木場。

俺は溜息を吐きながら口を開いた。

「気づくのが遅すぎるぞ木場……。」

俺と一誠はかなり前から気づいていたのに……。」

「な……っ!？」

俺の言葉に木場が一誠の方を見る。

その視線には本当なのか？という意味が込められていた。

「ああ……気づいてたけどわざと反応してなかったのかと思ってたわ」

苦笑いを浮かべながら木場にそう言った一誠。  
対する木場は開いた口が塞がらないようだ。

「ほらほら、もう部室の前なんだからさっさと中に入るぞ」

俺はそう言うのと部室の扉を開く。

室内にはグレモリー先輩、姫島先輩、小猫、そして——銀髪のメイド、グレイフィア・ルキフグスが張り詰めた糸のような雰囲気  
をそれぞれ醸し出していた。

その雰囲気気圧されたのだろう、アジアは不安げな表情で一誠の制服を掴んでいる。

グレモリー先輩はメンバーを一人一人確認するとゆつくりと口を開いた。

「……全員揃ったわね。」

では、部活を始める前に少し話があるの」

「お嬢さま、私がお話ししましょうか？」

グレイフィア・ルキフグスの申し出を要らないと手を振っていなしたグレモリー先輩。

「実はね——」

それは言葉が続けようとした瞬間だった。

部室の床に描かれた魔法陣が光だし、転移現象を引き起こしたのだ。

魔法陣に描かれたグレモリー眷属の紋様が変化し、初めて見る形へと姿を変えた。

——なるほどこれが……

「——フェニックス」

木場がそう口から漏らす。

その紋様は俺の予想した通りフェニックスのものだったようだ。と、いうことは、これから登場するのはあの焼き鳥くんなのだろう。

俺は魔法陣からその焼き鳥くんが登場するのを待った。

魔法陣から発せられる眩い光。

その光が収まるのと同時に――

――魔法陣から炎が巻き起こる。

その炎を水の魔法で消そうかと思っただがそれは杞憂に終わった。

「――おっと、済まんな。」

炎の出力を誤ったようだ……」

炎の中で佇む男性のシルエット。そこから比較的落ち着いた声音が聞こえてくる。

そして、その男性が腕を横に薙ぐと、炎が霧散したのだ。

「ふう……人間界は久しぶりだ」

そこにいたのは赤いスーツを着た一人の男。スーツを見事に気崩し、胸までシャツをワイルドに開いている。見たところ二十代前半と言った風貌だ。

整った顔立ちに、何処か悪ガキっぽい影がある。木場を爽やかなイケメンとするならこの男は悪系のイケメンと言ったところだろう。

男は部屋を見渡し、グレモリー先輩を捉えると口元を少しだけにやけさせた。

「愛しのリアス。会いに来たぜ」

グレモリー先輩はそう言う男を半眼で見詰め、とても歓迎しているとは思えない対応をとっている。

そんな様子のグレモリー先輩になんとも言えないような表情を一瞬浮かべた男。何処と無く悲しそうだ。

「さて、リアス。」

来て早速だが、式の会場を見に行こう。

不本意ながら日取りを決められてしまったんだが……決めるなら早い方が良いだろう？」

言っつて、グレモリー先輩に手を差し出す男。

「……そんなこと知らないわ、ライザー」

低く迫力のある声でグレモリー先輩はその手を振り払う。その声音からグレモリー先輩が完全に怒っているのが分かった。

男——ライザー——は振り払われた手を見ると、苦笑いを浮かべる。

「……って言うか誰?」

一誠はライザーを見ながらポツリと呟いた。しばしの沈黙の後、

「ハハハハハッ!!」

そう言えば自己紹介がまだだったな……」

ライザーが声をあげて笑う。

そして、一誠の方を向くと両の腕を開いた。

「俺は『ライザー・フェニックス』。」

フェニックス家の三男、純血の上級悪魔だ」

ライザー・フェニックスはそう言うと、その背から炎の翼を出現させた。

「へえ……アンタ強そうだな」

「まあ、お前よりは強いと思うぞ?人間」

睨み合う一誠とライザー・フェニックス。

お互いにお互いが気になっているようだ。

「ライザーさま、兵藤一誠さま、お戯れは程々に……」

そんな二人へグレイフィア・ルキフグスは厳しめの声をかけた。

「心配しなくともただ実力を探りあってただけですよ。」

取り敢えず名前は?一応本人から聞いておこう」

ライザー・フェニックスはわざとらしく肩を上げグレイフィア・ルキフグスに言うと、今度は一誠の方を向いてそう言った。

「俺は兵藤 一誠だよライザー・フェニックス。」

一応リアス・グレモリーの【ポーン兵士】の予定だ」

「へえ……転生するのか……」

一誠の言葉に面白そうなものを見たかのようににやりと笑ったライザー・フェニックス。自らを呼び捨てにされたのにも関わらず気にしていない……いや、気づいていない。

「……ライザーさま、今日は何故此処に来たのか分かっておられますか?」

「おっと怖い怖い……。」

きちんと分かっていますよ」

苦笑いを浮かべながらそう言ったライザー・フェニックス。それを確認したグレイフィア・ルキフグスは咳払いをするとゆっくりと口を開いた。

「本日、此処に來た理由は単純です。」

——リアスお嬢さまとライザーさまのご婚約についてです」  
グレイフィア・ルキフグスの言葉に個々様々な反応を示した。

グレモリー先輩は眉をひそめ、ライザー・フェニックスは腕を組み、一誠は少しだけ目を見開く。特筆するべき反応はこのようなものだろう。

……さて、どのような結末を辿るのだろうか？

~~~~~

「リアスの【女王】<sup>クイーン</sup>が煎れたお茶は格別だな」

「痛み入りますわ」

ライザー・フェニックスの言葉にニコニコしている姫島先輩だが、そのニコニコも何処か演技のようなモノに感じる。

ひとつのソファァーに隣り合って座るグレモリー先輩と配送ライザー・フェニックス。

グレモリー先輩は我慢できないと言った表情で立ち上がると声を荒らげた。

「いい加減にして頂戴！」

ライザー、以前にも言ったけれど私は貴方とは結婚なんてしないわ」

「ああ、以前にもそれは聞いた。」

しかし、リアス、そういう訳にはいかないだろう？

キミの所の御家事情は意外にも切羽詰まってると思うし……何より俺が諦めきれない」

ライザーは真剣な眼差しでそう言う。

「そんなの余計なお世話よ!!」

私が次期当主である以上、婿養子だつてしつかりと迎え入れるつもりよ。

けどね、ライザー。——貴方とは絶対に嫌よ」

「……つまり俺と結婚する事はありませんか?」

「ええ。例え天と地がひっくり返ったとしてもありませんわ」

グレモリー先輩とライザー・フェニックスによる口論は次第に収まっていく。

グレモリー先輩は絶対に譲らない、と表現しているように腕を組み、対するライザー・フェニックスは静かに腕を組む。

このままでは話が見つからないだろう、そう思った俺は仕方なく口を挟んだ。

「このままじゃ何にも解決しないな……」

グレイフィア・ルキフグス、アンタはこの話を終わらせる手段、持つて来ているんだろ?」

「……そうなの?グレイフィア」

俺の言葉にグレモリー先輩は反応し、視線を移した。その視線と言葉に、グレイフィア・ルキフグスは仕方が無いといった表情を浮かべて口を開いた。

「兵藤士織さまのおっしゃる通りです、お嬢さま。」

正直申し上げますと、これが最後の話し合いの場合です。これで決着が着かない場合のことを皆様方は予測し、最終手段を取り入れることとなりました」

グレイフィア・ルキフグスは一瞬目を閉じると、息を整えてゆっくりと口を動かす。

「お嬢さまがどうしても自らの意志を押し通すと言うのでありましたら、ライザーさまと【レーティングゲーム】にて決着をつけるのはいかがでしょう?」

「——ッ!?!」

グレイフィア・ルキフグスの提案に言葉を失うグレモリー先輩。

それにしても最終手段として【レーティングゲーム】とは……いさ

さかフェアではない気がする。確かルールとして成人した爵位もちの上級悪魔が自分の下僕を戦わせるというゲームだったはず……。

「……リアス、ひとつ言っておくが俺は既に公式の「レーティングゲーム」を経験しているし、勝ち星も多い。」

もし、受けるというのならしつかりと考えた方がいい」

そう言うライザー・フェニックス。

グレモリー先輩は顔を悔しそうに歪めた。

やはり、ライザー・フェニックスはゲームを既に経験しているらしい……。まだ成熟した悪魔ではないグレモリー先輩とでは経験の差があるのだ。

グレモリー先輩はしばし俯き、考えるようにすると、パツと前を向き、口を開いた。

「……例え不利だったとしても、私は私の意思で生きていきたい……！」

その「レーティングゲーム」、受けるわ！」

ライザー・フェニックスに向けて指を突き出し、高らかに宣言した。「良いだろう。」

俺は手を抜くつもりはないぞ？リアス。

不本意ながら今回は敗ける訳には行かない……。っ!!」

「私だってそうよライザー！」

あなたを消し飛ばしてあげる!!!」

睨み合う両者。

一歩も引かない二人は凄まじい気迫を纏わせていた。

「承知いたしました。お二人のご意思は私、グレイフィア・ルキフグスが確認させて頂きました。」

御両家の立会人として、私がこのゲームの指揮を執らせて頂きます。宜しいですね？」

「ええ」

「ああ」

グレイフィア・ルキフグスの問いにグレモリー先輩、ライザー・フェニックスは了承した。



「分かりました。」

御両家の皆さんには私からお伝えいたします」

二人の了承を確認したグレイフィア・ルキフグスはペコリと頭を下げそう言った。

「……なあ、リアス。」

まさかとは思うがその兵藤一誠と兵藤……土織？だったか？ともかくその二人を抜いた此処に居る面子がキミの眷属なのか？」

ライザー・フェニックスの言葉に片眉を吊り上げるグレモリー先輩。

「だとしたらどうなの？」

「失礼だが率直に言わせてもらおう。」

——その眷属たちでは俺には勝てない」

そう言いながらライザー・フェニックスは指をパチンと鳴らすと、部室の魔法陣が光り出し、フェニックスの紋章を浮かび上がらせた。

そして部室には総勢十五人の眷属悪魔らしき者たちが現れた。

「対抗できそうなのは……そうだな、キミの【女王】である【雷の巫女】と——」

視線を俺と一誠に移すライザー・フェニックス。

「その二人くらいだろうな」

その言葉を聞いたグレモリー先輩は鋭い眼光をライザー・フェニックスに向ける。

「おおつと……勘違いして欲しくないんだが……決してキミの眷属が弱いわけではない。」

ただ言うとしたら——経験が足りない。その一言に限る」

ライザー・フェニックスの言葉に再び悔しそうに顔が歪むグレモリー先輩。

そんな時、一誠が一步前に出た。

「なら、俺が出るさ」

「へえ……俺としては別に良いんだが……お前まだリアスの眷属じゃないんだろ？」

「なら出られな——」

「——ならこの場でリアス・グレモリーの眷属になってやろうじゃねえか」

ライザー・フェニックスの言葉に被せながらそう言った一誠は足元にひとつの魔法陣を展開した。

「リアス部長にはまだ俺を眷属にできるほどの実力がねえ……」

展開された魔法陣。それは見間違う事なき俺の教えた【封印魔法】のそれだ。

「なら、俺のスペックを落としてしまえば良いんだよ。」

そして、眷属になった後、その都度開放していけばいい」

魔法陣は独特な光を発し、一誠の体へと収束していく。

そして、その光が完全になくなったかと思えば、一誠の手に握られた八つの【兵士】の駒が中に浮き、一誠の体に溶けるように消えていった。

「……イツセー……自分の力を封印してまで……」

グレモリー先輩は一誠に駒が溶け込んだのを見るとそう呟いた。

一誠はその背から悪魔の翼を展開させるとライザー・フェニックスを挑発するように口を開いた。

「お前には負けねえよ種蒔き鳥」

一誠はライザー・フェニックスの眷属が全て女だという点を見てそういったようだ。

さて、ライザー・フェニックスはどう返すか？俺はそう思っただけ視線を移す。

「た、種蒔き……鳥……」

吐血するライザー・フェニックスの姿がそこにはあった。

『ライザー様!?!』

眷属である十五人はその姿を見て叫びながら駆け寄った。

「ら、ライザー様!! しっかりしてくださいませ!!」

「ゆ、ユーベルーナ……すまないな……」

ふらふらとしながらライザー・フェニックスは立ち上がる。

「よくもライザーさまを馬鹿にしたなっ!!」

小柄で童顔な少女はそう叫ぶと武闘家が使うであろう長い棍を取り出し一誠に向かって突撃しようとする。

それに応じてか一誠も迎撃の構えを見せた。しかし、

「やめろ、ミミラ」

そんな少女の肩を掴みライザー・フェニックスが突撃を制止させた。

「しかし、ライザーさま!!」

止められたことに不満な声を漏らす少女。そんな少女に向かってライザー・フェニックスは、

「俺は「やめろ」と言った」

強い口調でそう言った。

「っ?! は、はい!」

申し訳ありませんライザーさま!」

少女は頭を下げ、棍を仕舞う。

そんな少女の頭を撫でながらライザー・フェニックスは口を開く。  
「すまん、少し強く言った」

「い、いえ〜だいじょうぶですう〜♪」

気持ち良さそうに頭を撫でられている少女。そんな姿を見た一誠は構えを解き、俺の方へと寄って来た。

「……なあ、ライザーってホントに悪い奴か？」

「……それは俺も思った」

コソコソと話しながら俺はライザー・フェニックスの方をもう一度見る。

柔らかな笑みを浮かべながら少女を撫でるライザー・フェニックス。ス。

撫でられている少女を羨ましそうに見詰める他の眷属たち。

「悪い奴じゃねえだろ……あれ」

俺と一誠は声を揃えてそう言った。

何故グレモリー先輩が毛嫌いしているのかが分からなくなった……。

## 閑話休題

「リアス、ゲームは10日後でどうだ？」

自らの眷属の後始末を終えたライザーはグレモリー先輩の方を向いてそう言った。

「……私にハンデをくれるというの？」

「いや、違う。」

ただ単に俺とリアスの眷属たちの調整をするのにはそれくらいあっても良いだろうという事だ」

ライザーの言葉にグレモリー先輩は文句も言わず黙って聞いていた。

「それにしてもハンデか……。」

俺とキミの間には経験の差があるというのは事実。そして眷属の数も違いすぎる……。」

ライザーは悩むようにそう呟く。

そして、俺と目が合った。

「……いい事を思いついたぞ。

ひとつ聞きたいんですが助っ人の参加は可能ですか？」

グレイフィア・ルキフグスの方を向いてライザーはそう言った。

「普段ならば許可出来ないですが……これは非公式の「レーティングゲーム」ですのでおそらく一人までならなんとかなるでしょう」

ライザーはグレイフィア・ルキフグスの答えに満足そうに首を振ると再びグレモリー先輩の方を向いて口を開いた。

「此処で提案だリアス。

今回のゲームにその少女を参加させないか？

そうすれば面白いゲームが出来るだろう」

その言葉は遠まわしに今の眷属たちでは敵わないと言っているようなものだ。グレモリー先輩は眉をひそめて口を開く。

「……ライザー……あなた私たちをどれだけ馬鹿にすれば気が済むのかしら……っ!!」

「馬鹿になどしていいないさ。

これは単純な事実。経験の差を簡単に埋められると思わない方がいい」

ライザーはそう言うと手を下に向けて魔法陣を再び起動させる。

「参加させるさせないはキミの自由だリアス。

俺はどちらになつたとしても決して敗けない。決して……な？」

それだけを言い残すと、ライザーは眷属と共に魔法陣の光の中へと消えていった。

「……………」

グレモリー先輩は無言のまま立ち尽くす。

おそらく俺を参加させるかどうかを悩んでいるのだろう。

「……お嬢さま。

助っ人の参加は如何なさいますか？」

そんなグレモリー先輩にグレイフィア・ルキフグスはそう声をかける。

立会人としては早急に決めてもらいたいのだろう。

しばしの沈黙の後、

「……私は今回敗ける訳には行かないわ。

だから私は——」ことにするわ」

「……かしこまりました。

では、そのようにお伝えします」

グレイフィア・ルキフグスはそう言うのと魔法陣を展開し、消えて行った。

静まり返る部室内。

しかし、そこにいる全員から決して敗けないという気持ちがちにじみ出ていたのを俺は感じ取っていた。

く修行開始しましたく

どうも、兵藤士織だ。

ライザーとの話し合いが終わり、次の日。

俺と一誠、グレモリー眷属たちは大量の荷物を背負って登山をして  
いた。

グレモリー先輩の話によれば修行をするとの話だ。

「……随分と楽そうに登るわね」

「楽そうじゃなくて楽なんだよ」

グレモリー先輩の言葉にあくびをしながら返した俺は、自分の背  
負っている荷物を改めて視界に入れる。

俺の背中には巨大なリュックサック、両肩にはパンパンに膨れたボ  
ストンバッグが掛けられている。

「……こんな大量の荷物、何が入ってんだよグレモリー先輩？」

「土織が持っているのは殆ど食材ね」

「通りでゴツゴツしてて地味に痛い訳だ……」

ずり落ちて来たリュックサックを背負い直した俺は溜め息を漏ら  
して山道を登っていった。

登山の末にたどり着いた山頂には、木造の別荘が建っていた。

話を聞いた所この別荘はグレモリー家の所有物らしく、普段は魔力  
でその姿を風景に溶け込ませることで一般人には見つからないよう  
にしているらしい。

「ひとまず中に入りましょうか」

グレモリー先輩の言葉に続いて俺たちは別荘へと足を踏み入れた。

「ん〜……良い香りだ……」

木造独特の木の香りが俺の鼻を満たす。中々の物件のようだ。

「それじゃあ、私たちは2階で着替えて来るわね」

「ああ、分った」

「俺たちは此処に居ますから」

俺と一誠はそう返事をして、女性陣を見送った。

「じゃあ、僕も着替えてくるね」

木場はそう言うのと青色のジャージを持って一階にある浴室の方へ足を向けた。

「……覗かないでね?」

浴室への通路の壁からひよっこりと現れた木場は苦笑い気味にその口にする。

「覗かねえから安心しろ」

「右に同じく」

俺と一誠は即答でそう返事をする。

そもそも最近……いや、前からだが最近の木場×土織、一誠×土織、土織総受けという不本意な噂が飛び交っているのだ。

これ以上木場に関わって不本意な噂を広めるわけにはいかない……。

「取り敢えず俺たちも着替えるか……」

「だな」

俺は黒のジャージを持ってお手洗いへ、一誠は白のジャージを持ってキッチンへと向かった。

~~~~~

全員が着替え終わり、別荘の前に集合したのを見計らって、俺は口を開いた。

グレモリー先輩から頼まれたことを果たすために。

「んじや、俺は指導役つつうことで……大まかな予定は立ててきたんだが……」

そう、俺は助っ人として「レーティングゲーム」に参加するのではなく、参加するメンバーを鍛える側に回るようになったのだ。

「……正直、俺は皆のきちんとした実力を知らねえから本当に大まかなモノしか決めてねえんだわ。」



だから、ひとまずは俺と組み手してもらえるか？」  
俺がそう言うと、皆頷いてくれる。

「助かるぜ。」

んじや、まずは誰から……」

俺の言葉を聞いて、誰よりも早く手を挙げたのは――

「まずは僕から良いかな？ 兵藤さん」

――腰に木刀を携えた木場だった。

~~~~~

「君とは一度剣を交えてみたかったんだ」

木場はそう言うと、爽やかなスマイルを浮かべて木刀を中段に構える。

「俺が剣を使うとか言ったことあったか？」

「足運びが剣士のそれを匂わせていたからね……」

「へえ……しつかりと【騎士<sup>ナイト</sup>】やってるみたいだな」

俺は少しばかりの笑みを浮かばせ、木刀を手に持つ。

「……この際だから見せようか。」

俺が継いだ【不知火式】という剣を」

【不知火式】……？」

それが君の剣なのかい？」

「そういうことだよ。」

取り敢えず――かかって来い」

木刀の剣先は地面に触れるか触れないかと言った程までに下げて持つ。

「言われなくとも……行くよっ!!」

木場は地面をしつかりと踏み蹴り、動き出す。なるほど、このスピードは人間なら捉える事は出来ないだろう……。

「——けど遅い」

「なっ!!!?」

背後から斬りかかって来た木場の木刀を見ることなく身体をずらすことで躲す。

そして、木場の懐に潜り込むように反転してしやがむと木刀を引きその胸に向かって神速の刺突きを行う。

「不知火式 “一刀” 【二尽】」

「かふ……っ!!!?」

木場は苦しそうに息を吐き出すと、そのまま後ろへ吹き飛ばされた。

そしてそのまま地面を引きずられるように滑り、停止した。

「……………」

その場に静寂が広がる。

「ちよ、ちよつと土織!」

いくらなんでもやり過ぎよっ!!」

グレモリー先輩ははっとした表情になり、木場に駆け寄る。

俺は木刀を地面に突き刺すとふう、と息を吐き口を開いた。

「安心しなグレモリー先輩。」

さつき木場が飛んだのは木刀が当たったわけじゃなくて、剣圧で吹き飛んだだけだから。

証拠にほら、木場の胸ん所見てみな」

グレモリー先輩は俺の言葉に従って倒れている木場の胸のあたりに視線を移す。

そこには何の傷も無い綺麗なジャージがあった。

「……ぼ、僕もさっきは大袈裟に反応しましたが……今となっては何の問題もありません」

木場もゆらゆらと立ち上がり傍に居たグレモリー先輩に微笑みかける。

それを見たグレモリー先輩はほっとした表情を浮かべた。

「それにしても強いね兵藤さん。」

まさか僕の攻撃を見もしないで躲されるなんて……これは僕が自惚れてたってことかな？」

「いや、中々のスピードだったぞ？」

磨けば光る原石ってとこだな」

俺がそう言うと、木場は目を大きく開き、その後爽やかなスマイルをこちらに向けた。

「ありがとう兵ど」「土織で良いぞ」……えっ？」

「……これからは俺も祐斗って呼ぶからよ」

「分かったよ……土織……さん」

祐斗は若干俺の名前を言うのに詰まっただがしかし、きちんと呼んでくれる。

俺と祐斗は互いに歩み寄って握手を交わした。

「取り敢えずこれから鍛えていくから覚悟しろよ？」

「あはは……お手柔らかに頼むよ」

「……次は私の番です、土織先輩」

ハーフフィンガーグローブを装備した小猫は軽くストレッチをこなすとそう呟き、こちららへ視線を向けた。

「小猫は徒手空拳か？」

「……こっちの方が闘いやすいですから」

「なら、俺もそれに合わせるかな……」

俺は手をブラブラと振って準備運動をする。武器なしの肉弾戦なんて一誠としかやったことがないから良い経験になるだろう。

「……先輩はなんでも出来るんですね」

「ん〜……まあ、戦闘系は結構出来るよ」

そう言った俺は右手を小猫の方へと向けて指をクイツクイツと曲げる。

「来いよ小猫。遊んでやる」

「……舐めないで下さい……っ!!」

身軽なフットワークで左右に振りながら小さな肢体を効果的に使用する小猫。

俺に接近してきた瞬間細かなジャブを放ってくる。

「中々素早いけど軽いな小猫。」

まるでダメージが無いぞ?」

「……わかってます」

そう呟いた小猫は左足を前に出し、身体を捻りながら右拳を振るってきた。

決るように振るわれた拳は俺の中心線を的確に狙っている。

「……だから軽いんだよ、小猫」

「……ッ!?!」

俺はその拳を手のひらで受け止めるとそのまま一本背負いの要領で小猫を地面に叩きつける。

「……取り敢えずはここまでだな」

「……本当に士織先輩は人間ですか?」

「なんだその質問は……俺が人外にでも見えるか?」

「……悪魔よりも強い時点で人間を止めている気がします」

「まあ、ごもつともで」

俺は苦笑いを浮かべながら地面に倒れている小猫を立ち上げさせた。

「小猫は取り敢えず技を磨いていくか。」

一撃の威力を上げるってのはまた今度だな」

「……わかりました土織先輩」

俺は立ち上がった小猫の頭を撫でた。

「あらあら、連戦なんかして大丈夫ですか?」

「ああ……気にしないでくれ姫島先輩」

「そうですね?」

なら、遠慮なくいかせてもらいますわね」

そう言った姫島先輩は悪魔の翼を広げ、宙に舞った。

「姫島先輩は魔術師ウイザードタイプだったな……なら俺は【妖精の魔法】エンジエリック・スベルで行かせてもらおう」

俺がそう言うのと姫島先輩は目を輝かせた。

「あらあら、うふふ……私土織君の【妖精の魔法】にとっても興味がありましたの。」

それが今日体験できるなんてラッキーですわあ……」

恍惚とした表情でそう言う姫島先輩。

あれ?この人ってSじゃなかったか?俺の魔法を体験して……もしかしなくても喰らうことだよな?それなのにあんな表情をするって……実はMな人だったか?

「ともかく……いきますわよ?」

その言葉と共に俺に雷が降り注いだ。

降り注ぐ雷は中々の威力であるのには変わりないが……俺にとってはただの餌である。

「あらあら?やりすぎたかしら?」

姫島先輩の言葉が聞こえてくるがそれは油断というものだ。

何かをやり遂げた時、そこそがが一番隙だらけになる。それを姫島先輩は分かっているのだろうか?

「……なんだか不安ですわ……。」

もう一度攻撃しておきましょう……。」

あ、意外と容赦無く攻撃する人みたいだ。

それからの姫島先輩の動き出しは早かった。即座に雷を生み出し、それを俺に向けて放つ。

——しかし。

その雷が俺に当たることも、地面に当たることも無かった。

「な……っ!?!」

何故ならば、姫島先輩の放った雷は——

「か、雷を……食べてる……!?!」

——俺の口の中へと吸い込まれて行ったからである。

姫島先輩の雷を残さず食べてしまった俺は口元を軽く拭い、宙に浮かんでいる姫島先輩の方へと視線を移した。

「美味しい雷だったよ姫島先輩」

「お、お粗末様……です?」

「取り敢えず……そのお礼として雷の【妖精の魔法】を喰らわせてやるよ」

言って、俺の身体から雷が迸る。

「……鳴り響くは招雷の轟き……天より落ちて灰燼と化せ……【レイジングボルト】!!」

「きやあああああああつ!!?!」

指を鳴らしたのと同時に、姫島先輩の体が極太の雷に飲み込まれた。

ほんの少しの魔力しか込めていないため、見掛け倒しの威力しかないが……ビリビリするのはまぬがれない。

俺はレイジングボルトを喰らって落ちてきた姫島先輩を抱きとめるとゆっくりと立たせる。

「大丈夫か? 姫島先輩」

「え、ええ……かなりビリビリしましたがダメージはあまりないようですわ……」

そう言つてふらふらとおぼつかない足取りの姫島先輩。

「取り敢えずさっきのレイジングボルトなら姫島先輩でも真似できそうだろう?」

「そうですね……雷の収束と発生場所を自由自在に操るコントロール、それと放つスピード……この3つを同時にこなさないといけないようですわね……」

「まあ、そうなんだけど……今回はコントロールを集中して修行しようか。」

姫島先輩の攻撃は燃費が悪そうだ……」

俺が苦笑いを浮かべながらそう言うと、姫島先輩はわかりましたわ、といって頷いた。

「あ、そうだ……アーシア!」

「は、はひっ!」

なんでふか士織ひゃん!!」

俺と姫島先輩の組み手? を傍で見ていたアーシアをこちらに呼び寄せる。

それにしても噛み噛みだな……。

「魔力のコントロールについて姫島先輩と一緒に修行しな?」

修行内容は前に言ってたやつと……後で渡すモノをしてくれ」

「わ、わかりました！頑張ります!!」

俺はアーシアの頭を軽く撫でて姫島先輩の方へと向き直る。

「アーシアとの修行は良い刺激になると思いますよ?」

「あらあら、士織君がそういうのなら楽しみにしておきましょうかしらね?」

姫島先輩は頬に手を当てながらニコニコと笑みを浮かべた。

「チエック・メイト」

「うつ……」

【騎士<sup>ナイト</sup>】の駒を進めた俺はそう宣言してコーヒーを睨る。

3人との組み手の後、それぞれに修行内容を言い渡し、メモまで渡した俺は【王<sup>キング</sup>】であるグレモリー先輩とチエスで対戦していた。

「これで俺の十連勝……グレモリー先輩勝つ気あるか?」

「あ、あなたが強過ぎるのよ!!」

初めは駒を取れていたグレモリー先輩だったが4戦目辺りからだんだんと取れなくなっていく、7戦目ともなるとひとつも駒を取ることが出来ずに負け始めた。

「……グレモリー先輩……アンタはサクリファイスを嫌う傾向にあるな」

「……」

「嫌いなら嫌いでいいが……覚えておけ?」

時にはサクリファイスが必要な時が出てくるということ……

俺が真剣な眼差しを向けながらそう言うと、グレモリー先輩は悩まし気な顔で頷いた。



「……取り敢えずはもう一戦だグレモリー先輩」

「……えっ……!?!」

「取り敢えず俺から駒をひとつ取れるまで続けるぞ?」

「そ、そんな……っ!?!」

「そうだな……二十連敗したらペナルティーでも与えるか……」

「ちよ、ちよつと待ちなさ——」

「ひとまず二十連敗したらグレモリー先輩お尻ペンペンな?」

「いやああああああああああつ!!!」

グレモリー先輩の悲鳴が響きわたった。

これは完璧な余談だが、グレモリー先輩は二十連敗してしまったのでお尻ペンペンを俺から喰らうこととなった。

あの時の悲鳴は中々……おおっと……これ以上はグレモリー先輩のプライバシーに関わるので止めておこう……。

こうして修行の1日目が終わったのだった。

く試練与えましたく

どうも、兵藤士織だ。

初日にグレモリー眷属の中でも実力がよくわからなかった3人と組み手を行えたおかげで修行内容は修正することができた。

一応修行内容は伝えていたが、1日に1回、皆の下へ訪れている。今は祐斗の下へ訪れており、祐斗がギリギリついてこれるスピードで組み手を行っていた。

「——ほら、一瞬スピードが落ちたぞ祐斗」

「く……っ!!!」

背後を取られた祐斗。なんとか対処しようとするが……。

「背後を取られた後の反応が遅いな」

「うわあっ!!!」

俺は祐斗の肩を押し、軸となっている脚を払った。それによりバランスを崩し地面に倒れ込んだ。

「はあ……はあ……つく……!!!」

い、いくらなんでも速すぎないかな……!!」

「何言ってるんだよ祐斗。」

俺はお前が出せる最速と同じスピードで動いてるんだ。ついていけない道理は無いはずだぞ?」

地面に大の字で倒れている祐斗。

握られていた木刀も放り投げ荒い息を吐いていた。

俺は木刀を地面に突き刺してそれを眺めている。

「最速戦闘は今のところ持つて10分か……。」

最低でも30分は欲しいな……。」

「さ、30分!」

無理だよ!10分でも死にそうなのに……。」

祐斗は大の字に倒れたまま悲痛な声を上げた。体を起こして反応しない辺り本当に限界を迎えているのだろう。

「……仕方ねえな……。」

俺は倒れたままの祐斗に近づき、お腹に手を当てた。

「な、何をしているのかな土織さん!?」

「ん〜? まあ、静かにしてろって」

言って、俺は魔法を発動させた。

祐斗の身体が一瞬光に包まれるのを見て、魔法の発動を確認する。

「体の調子はどうだ? 祐斗」

「え、えつとね……不思議なこと……」

祐斗は倒れたまま引き攣った笑みを浮かべ――

「――凄く身体が重たいよ?!」

そう叫んだ。

「あはははは!!」

そりゃそうだろうな!」

「何これ全然動けない!?」

指すらも動かないんだけどなっ! 土織さん!」

祐斗は視線だけ俺の方を向いて訴えかける。

俺はそんな祐斗に微笑みながら言葉をかけた。

「今祐斗の身体には『重力増加』の魔法を掛けた。

今日からその身体で修行をこなしな?」

「そ、そんな……っ!」

祐斗は泣きそうな表情を浮かべる。

しかし、俺は立ち上がり歩み出す。

「まあ、頑張りな？祐斗」

その言葉を聞いたときの祐斗の顔はそれはもう絶望の色しかなかった。

「……当たって下さい」

「だから当たてみな？」

【重力増加】魔法により動けなくなった祐斗を放置した俺は小猫の所を訪れていた。

「……そこ……っ！」

「残念、それはわざと作った隙」

「うにやつ!？」

拳を振り抜いた小猫の額にデコピンを当てる俺。そしてすかさずバックステップで小猫の裏拳を躲す。

「……なんで目隠ししてるのに当たらないんですか……」

「ん〜……音だな。」

小猫の息遣いと動く時の風を切る音。

この2つさえ分かれば大体の距離と次の動作は予想出来るんだよ」

真つ暗な視界の中おそらく小猫が居るであろう方向を向いてそう話した。

「……廃スペック過ぎます士織先輩」

「小猫ならいざ出来ようになるだろうよ」

そう言った俺は手を振って軽いストレッチをする。

「……余裕そうですね」

「そうだなあ……今の小猫相手ならいくら数を揃えられても敗ける気はしねえな」

「……あまり舐めてないで下さい」

少しだけ怒気の孕んだ小猫の言葉。

その後直ぐに小猫が動いたのを感じ取った。

接近してきた小猫が行ったのはボクシングを応用した高速のラッシュ。

「ん〜……リズムも取れてきたな……」

「……当れ……っ!!」

俺は小猫のラッシュをバックステップで抜け出すとひとつ言葉を吐いた。

「来な?小猫」

「……言われなくとも……っ!!」

再び接近してきた小猫は今度は動きながらラッシュを繰り返してくる。

しかし、そのラッシュ中俺は――

「――ジャブ、ジャブ、右ストレート、ハイキック、左フック、右フック、ミドルキック、回し蹴り、左ボディー、右ボディー、右アッパー、膝蹴り、左アッパー」

――小猫の技を全て予測して口にしていった。

「回し蹴り、左フック、右アッパー、左ボディー、ローキック、右ストレート、ジャブ、ジャブ、ジャブ、左ボディー、回し蹴り、右ストレート、ハイキック……そろそろ飽きたな……」

俺はそう呟くと数回後に来た右ストレートを避けずに左腕で絡めとる。

「……えっ……う？」

そして小猫の前に進むという力を利用してそのまま地面に組み伏せた。

「……小猫はリズムが取りやすいな。」

「良くも悪くも素直過ぎる」

俺は組み伏せた小猫から離れて目隠しを取りながらそう言った。

「確かに小回りは効くようだが次の動作が予測しやすいんだよ」

「……土織先輩が規格外過ぎるのでは？」

「俺じゃなくても小猫の攻撃は予測されるだろうよ」

背伸びをして、小猫の言葉に返事を返す。

小猫は俺の言葉を聞きながら手を握ったり開いたりしていた。

「間に混ぜるフェイントも何処か不自然だな。」

「これはフェイントですよって教えてるようなもんだぞ？ありや」

「……練習します」

「うし、そのいきだけ小猫。」

「今晚は俺が飯作るから楽しみにしてな？」

「お腹を空かせます！」

小猫はそう言うと、何処かへ走り出して行った。

「……あいつ飯で釣ったらなんでもこなすんじゃないか……？」

俺は苦笑いを浮かべながらそう呟いた。

「調子はどうだ？」

「アーシア、姫島先輩」

「土織さん！」

「あらあら、土織君」

魔力のコントロールについて修行している姫島先輩とアーシア。

今更な話だがアーシアはグレモリー先輩の「ビョック僧侶」の駒で悪魔に転生している。

一誠が転生したのなら私も転生したいと言っていたところ、それを聞いたグレモリー先輩はこれは好機とアーシアにアタックを仕掛けたのだ。

アーシアはそれを受け入れ、めでたくグレモリー眷属となったのだった。

「見てください！土織さん！」

私、氷との相性が良いみたいです!!」

そう言ったアーシアは手に野球ボールサイズの魔力球を生み出し、それを氷へと変換させた。

「へえ……魔力コントロールも良く出来てるし属性変換まで……。」

今までの修行が報われたみたいだな」

「はいっ！」

これも土織さんのお陰ですっ！」

嬉しそうに語るアーシア。

以前から家で魔力コントロールを修行させてはいたが、今回の修行でそれがしつかりと実を結んでいるのが分かった。

「それにしても氷との相性が良いのか……。」

もしかしたら俺の【氷の造形魔法】を真似できるかもな」

「本当ですか！」

今度教えて下さいっ!!」

「そうだな……教えるのは吝かでないが……もつと魔力の扱いが上手くなってるからだな」

「わかりましたっ！」

私、頑張りますっ！」

そう言ったアーシアの頭を優しく撫でた。

「あらあら……私は仲間外れですか？」

そんな俺とアーシアを見ていた姫島先輩は冗談めかしくそう言う。  
「んな訳ねえだろ。」

で、どうだ？修行の方は」

「……やってみてはいるのですが……」

姫島先輩は困ったような表情を浮かべる。

そして、瞳を閉じると姫島先輩の周りにハンドボール大の魔力球が複数出現した。

「……10個か」

「はい。これが、今の私に、出来る……最大の数です」

区切り区切りに言葉を吐いた姫島先輩の顔は強ばっている。

この魔力球を生み出す修行は一見簡単そうに見えるがそんなことはない。生み出した魔力球の大きさは全て均等にしなければならず、少しでも気を抜けば大きさがバラバラになってしまうのだ。

「まあ、頑張ってるみたいだな。」

取り敢えず姫島先輩は修行終了までにその魔力球の大きさを変えることなく自由自在に操れるようになれ」

こんな風に……、と付け加えながら俺は周りに姫島先輩と同じ10個の魔力球を生み出す。そしてその魔力球を身動きひとつすることなく動かした。

10個の魔力球を円状に並べ替え高速回転させたり、10個全てを四方八方に散らせたりなどを行って見せる。

「……この止まった状態でもギリギリなのに更に動かせとおっしゃるんですか……?」

「そうだぜ?」

「……さ、流石にそれは……」

いつものようにニコニコと笑うのではなく引き攣った顔で笑う姫島先輩。

このままではモチベーション的にも達成することは不可能だろうと判断した俺はひとつの提案をした。

「もし、修行終了までに成功させれたら俺の【妖精の魔法】エンジエリック・スベルをひとつ伝授してやるよ」

「本当ですか!?!」

俺の提案を聞いた姫島先輩は途端に瞳を輝かせる。

「ああ………本当だ。」

まあ、伝授するのは仕組みだけだからそこから自分の技に昇華出来るかは姫島先輩次第だけだな」



「分かりましたわ！」

「やってみせましょう!!」

先程までとは打って変わって、姫島先輩はやる気に満ち溢れた表情を浮かべていた。

「士織君！約束ですからねっ!!」

そう言った姫島先輩はアジアを連れて何処かへと足早に向かつて行った。

「あく……飯の準備でもすっか……」

一人残された俺は頭を掻きながらキッチンへと向かった。

「小猫には期待させる」と言っちゃまったからなく……。

「まあ、適度に頑張るか……」

俺は何を作るか考えながらそう呟いた。

ただひとつ決まっていることといえば、それは――

――大量に作らないといけないということだ。

小猫の大食いを舐めたらいけない。

人生の教訓にでもしてしまおうか？

苦笑いを浮かべながらもそんなことを思った。



く休息しましたく

S i d e 三人称

「ほら、今日は中華で攻めてみたぞ。

かなりたくさん作ったから遠慮せずに食べ」

そう言った土織の前にあるテーブルには満漢全席とまではいかな  
いかなりの量の料理が所狭しと並んでいた。

その日の修行により疲れきった様子のリアス、朱乃、小猫、一誠は  
途端に目を輝かせる。しかし、誰一人として料理に手をつけようとは  
しない。

「どうした？食わねえのか？」

「祐斗がまだ来ていないから……」

そう言ったリアスに土織はなるほど、と納得した表情を浮かべた。  
他の3人もその通りだと頷いている。

「祐斗の奴ならまだ当分は戻って来ねえだろうから先に食つとけ」

「でも……」

「ウダウダ言ってねえでさっさと食べ。」

「そもそも祐斗が皆を待たせたと知ったら悲しむぞ？」

土織がそう言うのとリアスは渋々ながらも分かったわと呟く。そし  
て、手を合わせると、それに順じて朱乃、小猫、一誠も手を合わせた。  
『頂きます!!』

四人はそう言うのと、各々待ってましたと言わんばかりに大皿に盛ら  
れた料理を小皿に取り口へと運んだ。

「……美味しすぎる……」

「……自信がなくなりそうですわ……」

リアス、朱乃は土織の料理を食べると引き攣った笑みを浮かべてそ  
う呟く。しかし、その箸は止まらない。

「流石土織。いつも通り美味いぜ」

「美味しいです土織先輩っ」

一誠、小猫はパクパクと箸をすすめていく。その表情はとても穏や  
かで嬉しそうなモノが浮かんでいる。

「取り敢えず全部褒め言葉として受け取っておくわ」

土織は苦笑いを浮かべながらも自分の席に座った。その苦笑いには何処か暖かい感情がこもっていたのは見間違いではあるまい。

腰につけていたエプロンを外すと背伸びをしながら一息吐く土織。

「……そう……はむっ……言えは……もぐもぐ……何で……ごくん……祐斗先輩が……あむっ……此処に……はふはふ……来ないって……ごくん……分かるんですか?」

「……食べるか聞くかどっちかにしろ小猫」

「……もぐもぐもぐもぐもぐ……」

「食べる方に集中するのかよ!?!」

目にも止まらぬスピードで消えていく料理とまさか聞くという選択を破棄したということに驚いた土織は椅子から立ち上がり叫んだ。

「……美味すぎるので……っい」

3枚の大皿に盛り付けられた料理を殆ど一人で平らげた小猫は口元を拭きそう言った。

一応記しておくが、小猫が大皿3枚分の料理を食べたのはほんの一瞬の間である。

「小猫の行動はともかく、俺も気になるな。」

木場のやつなんで此処に居ないんだ?」

一誠は苦笑いを浮かべながら土織にそう言った。

すると、土織は満面の笑みで口を開く。

「それなら祐斗が修行に苦戦してるからだな。」

おそらく此処に来てないということは……動けてすらいないんだろうよ」

土織はそう言うと、小皿に取っていた春巻きを口に運んだ。もぐもぐ、と土織の咀嚼音だけがその場に流れる。

「……えっ……?」

っ、つまり此処に祐斗がないのはあなたのせいなの?」

啞然とした表情を浮かべながらリアスはそう問うた。若干の憤り

が混じったようなそんな声音。

「そうだなあ……。」

まあ、そうなるんじゃないかねえか？」

「……あなたねえ……。」

リアスは頭を抱えながらため息混じりに呟く。それを見た朱乃はニコニコと笑いながらも何処か困ったような感情を醸し出していた。

「うふふ……土織君、程々にしてあげて下さいね？」

「ん〜……まあ、考えとくわ」

「土織お前考える気ないだろ……。」

「……何か言ったか？一誠」

一誠の言葉にニコリと笑顔を浮かべて言葉を返す土織。いつもならその笑顔に恐怖を感じるはずのない一誠も声のトーンから顔が強ばる。本来笑顔とは攻撃的なものだと再確認する一誠なのであった。

「……何でもございませぬ……よ」

一誠の表情を強ばらせながらの一言。どことなく慣れたような返答だ。流石は兄弟と言うべきだろうそのやりとりには若干の微笑まじりささえ感じてしまう。

——その後土織たちは祐斗についてグチグチと言合いながらも楽しそうに食事を再開したのだった。

---

## Side 土織

皆が食事を終えたのを確認した俺は食器を片付け洗い物をしていった。

やはりというべきか、小猫の食欲には目を見張るものがある。まさか用意していた料理の半数以上を平らげてしまうとは……。

「まあ、気持ちのいい食いつぶりだったな」

洗い終えた食器からしつかりと水気を拭き取り、元あった場所へ片付けた俺は背伸びをする。窓から見える外の景色はもう暗く閉ざさ

れていた。

「士織く」

「ん？何だ一誠。俺に何か用か？」

「いや、俺たちは風呂に行くからって伝えに来たんだよ。

士織も一緒に入るか？」

そう言った一誠は人懐っこい笑みを浮かべ、着替えなのだろう浴衣を掲げて見せた。

「遠慮しとく。」

俺は後から入るから気にすんな」

「やっぱりそうか？」

「おう。ついでに祐斗も迎えに行くから心配すんなってグレモリー先輩達にも伝えておいてくれ」

「りよくかい」

一誠はサムズアップすると踵を返して風呂へと駆けていった。俺はその姿を眺めながら苦笑いを浮かべる。風呂に走っていく一誠の脚は浮き足立っているようにも見える。

「……取り敢えず祐斗を迎に行くとするか」

俺はそう呟くと服を一枚羽織り、用意しておいた水筒とタオル片手に祐斗が居るであろう場所へと向かった。

「祐斗く生きてるか〜?」

周囲を魔力球を使いながら照らし、祐斗の居場所を探す。

「し、土織……さん……」

掠れた声で俺の名が呼ばれる。

何処から聞こえたのかと辺りを照らし直すと少し離れているが俺の視界に入る距離に倒れている祐斗の姿を捉えた。

「おお、祐斗。」

その様子じゃ動けねえみたいだな。

連れて行ってやろうか?」

祐斗の傍へと移動した俺は意地悪な笑みを浮かばせそう口にする。

「……いや、大丈夫だよ……」。

丁度良い、タイミングで、来てくれた……」

祐斗は辛そうにそう言うのと深呼吸を始める。すると、祐斗の身体に魔力が纏われてゆく。

「……やっつと魔力が回復してね……」。

【身体強化】に回さないと動けないって分かったから取り敢えず必要最低限の魔力が回復するまで休んでいたんだ……」

ゆっくりと立ち上がり砂埃を払うとこちらを向いて爽やかなスマイルを浮かべる。

「へえ……急ぐしらの【身体強化】にしてはやるじゃねえか」

【身体強化】をしたとしてもまだ身体が重たいんだけどね……」

魔力消費が少し多い気がするがまあ、及第点は与えられるであろう【身体強化】。

祐斗はそういうが動いているだけでもなかなかのものである。

本来は立ち上がる事すら不可能だろうと思っていたのだが……少し見くびっていたようだ。

「取り敢えずほら、タオルと水分。」

汗拭いてこれでも飲め」

「おつと……ありがとう土織さん」

祐斗は感謝の言葉を述べると俺が渡したタオルで汗を拭った。やはりタオルを持ってきてきて正解だったようだ。

「今日のところは別荘に戻るぞ。」

他の奴らは風呂まで済ませてる」

「遅くなり過ぎたんだね……」

祐斗は苦笑いを浮かべながら俺の言葉に耳を傾ける。

と、そんな時。静かなその場にきゅっつという音が聞こえてきた。音の発生源を辿ってみると――

「……………っ!!」

――顔を赤く染めた祐斗の姿が。

「お前は乙女かつ!!」

「痛っ！ひ、酷いな土織さん！」

僕は紛れもなく――じゃなくて！

手刀を落とすなんて酷いじゃないか！」

「お前が変な反応するからだろうが！」

そうは言ったものの、祐斗の発言に何処か引つかかるところがあったのは気のせいだったのだろうか……。

俺はひとまずその考えを置いておいて、祐斗の方を向いた。

「……飯なら新しく作ってやるから早く帰るぞ」

「土織さんのご飯か！」

それはとても楽しみだ」

祐斗お馴染みのスマイルを浮かべながら俺と一緒に別荘の方へと歩み出した。俺は作るメニューを考えながら。



「ご馳走様でした」

「お粗末さん。」

思いの外食ったな」

「士織さんの料理が美味しすぎたからね」

祐斗は満足そうな表情を浮かべていた。

別荘に戻ってきた俺は多めに祐斗の夕食を作ったのだがそれを素早く完食してしまったのだ。どれだけお腹が空いていたのかがわかる。

俺は祐斗の姿を改めて見ながら口を開く。

「俺は洗い物をするから風呂に入れ。」

「身体中汚れてて気持ち悪いだろう？」

「そうだね……。」

「それじゃあ、お言葉に甘えて……。」

祐斗はそう言うのと立ち上がり、自分の部屋の方へと歩いて行く。

テーブルに置かれた空の食器を片付けていると、祐斗と入れ替わりに一誠が現れた。

「お疲れ様士織」

「ああ、一誠か。」

「どうした？寝なくていいのか？」

重ねた食器を手に持ちながら一誠の方を向く。早めに洗ってしまったのいだが……。

「そりゃ、寝るけど……それより」

一誠は俺の手から食器を奪い人懐っこい笑みを浮かべる。

「士織も疲れてるだろう？」

風呂行つてこいよ。洗い物位俺がするからよ」

「……つたく。」

サンキュ一誠。気い使わせて悪いな」

「気にすんなよ士織。兄弟だろう？」

それに、いつも士織ばかり仕事してるからな。これくらいやらせてくれよ」

そういった一誠は食器を持ったままキッチンへと向かって行った。  
「風呂でしつかり休めよっ!!」

キッチンの方から響いてくる一誠の声についつい笑みが溢れてしまふ。

俺は背伸びをすると着替えを取りに向かう事にした。

祐斗も風呂に入っているが……まあ、大丈夫だろう。

気が利く弟を持って俺は幸せだな……。

く預かりましたく

S i d e 三人称

広い、広い露天風呂。

そこには一人の少年の姿以外は何処にも見当たらなかった。

「ふう……」

背伸びをする少年——祐斗——はその日の疲れを癒すようにゆつたりとした動きだ。

祐斗の腹部には複雑な魔法陣が描かれており、それを視界に入れると苦笑いを浮かべる。

「……今日は本当に、疲れたなあ……」

1日の出来事を思い出したのか何処か困ったような表情の祐斗。

それもそうだろう。祐斗は土織に掛けられた【重力増加】の魔法により一日中地面に押しさえつけられていたと言っても過言ではないのだから。

今も祐斗は重たい身体を動かすために何よりも優先して【身体強化】を行っているのだ。残り少ない魔力を使いながら。

「ひとまず……明日に備えて疲れを取らないと……」

翌日から再開されるであろう修行のことを思いながら、湯船に浸かり直す祐斗。

身体の重い状態での修行はかなりの負担になるだろう。

「——へえ、結構広いな」

「……えっ?」

背後から聞こえてくる入口の開く音と聞き覚えのある声に、祐斗は間拔けな声を漏らしてしまう。

そして、ゆっくりと振り向くとそこには——

「よお祐斗。」

「悪いな俺も一緒に入らせてもらおうぜ？」

——美しき少女の姿があった。

否、外見は少女のようだが、彼は紛れもなく男だ、という事実が祐斗にはいまひとつ信じられないでいる。

「し、土織……さん？」

「おう。どうかしたのか？」

いつもは下ろしている土織の暗めながらも美しい青髪は現在、入浴するためかポニーテールにまとめためであるため、違った雰囲気を感じられる。

「いや、あの……」

「なんだ？何か言いたいことでもあるのか？」

土織はそう言いながら湯船へと入っていく。祐斗の横まで移動するとふう、と短く息を吐いた。

「……本当に男だったんだね」

「当たり前だろうが。」

つか、祐斗。お前は何処を見てそう判断した？ん？」

ジト目を祐斗に向けながら、土織はそう口にする。

「何処を……って……その……」

「だから頬を染めるんじゃないやねえよ気持ち悪い」

土織の問いに対して答えようとする祐斗の顔は赤く染まっていた。それが湯船に浸かっているからなのか、それとも恥ずかしがっているのかは分からない。……と言いたい所だがそれは見るに明らかだろう。

「そーいや……お前と2人でゆっくり話したこと無かったな」

土織は風呂に入ったことでリラックスしたのか、優しい声音でそう言った。

「そ、そーだね。」

僕としては土織さんとお喋りしたかったんだけど……」

「そうだったのか?」

士織は祐斗の方を向きながら意外だという表情を浮かべる。その表情を見た祐斗は苦笑いをしながらこくり、と首を縦に振った。

「……小猫とはよく話すんだが……」

「小猫ちゃんばかりずるいと思っていたんだよ?」

「そりや気付かなかったわ」

——これからは暇なときにも話し掛けてくれ。士織はそう言うのと優しい笑みを浮かべた。

「も、もももも、勿論だよ!!」

士織の方を見ていた祐斗はバツと顔を逸らしてそう口にする。

「……なあに挙動不審になっただよ」

「別に深い意味は無いよ?!」

「顔がまた赤くなってるが?」

「いやゝのぼせちゃったかな!!」

士織とほんの少ししか入浴時間は変わらないのにのぼせたかもという言い訳は苦しい。祐斗も冷静ならばそれに気付けたはずだが今は何故か冷静ではなかった。

「こっち見て話せよ」

「ちよ、ちよつと無理かなうなんて……」

「つたく……」

士織は溜息を吐くと立ち上がり、祐斗の前に回り込んだ。

「お喋りしたいんだろ?」

悪戯な笑みを浮かべた士織。慌てている祐斗で遊んでいるのだろう。

「……僕で遊んで楽しんでるね?」

祐斗はあわあわと忙しなく表情を変えていたが、笑いを堪えている士織の様子に冷静になったのか、そう言うときとジト目を浮かべながら顔を少しだけ湯船に沈めた。

「悪い悪い。」

祐斗の反応があまりにもおもしろいからな」

士織は笑いを堪えるのを止め、涙を浮かべながら口を開くと軽い口

調でそう言う。

「全く……土織さんは酷い……よ」

突然、祐斗の身体が光り始める。

土織はそれを訝しげに見ていると今度は祐斗が目に見えて焦り始めた。しかも、この慌て様は尋常ではない。

「ま、まずい——!?!」

湯船から急いで立ち上がった祐斗だったが、足を滑らし土織の方へと倒れてしまう。

2人は激しく水飛沫を散らせながら湯船の中に消えた。そして、一瞬、湯船の中が光で輝いた。

S i d e O u t

~~~~~

S i d e 土織

「ぶはあっ!!」

祐斗に押し倒されて湯船の中に沈んだ俺はなんとか倒れてきた祐斗ごと身体を起ここし湯船から顔を出す。

「危ねえだろうが!!!」

……つたく……お前は何を——」

しているんだ。その言葉は続けることが出来なかった。

何故なら、俺の目の前には——

——見たことのない少女の姿があったから。

腰に届く程の美しい金髪を湯によって濡らしその細身の肢体に貼り付けており、その細身の肢体に反して、たわわに実った2つの果実は俺の胸に当たり、潰れている。

清楚そうな雰囲気纏った、泣きボクロが特徴的な、そんな少女。

「だ、誰だお前!？」

俺はそんな少女を素早く引き剥がすと後退りする。

少女はハツとした表情で身体を隠すように自らの腕で抱きしめると、湯船に浸かり顔を真っ赤に染めた。

「——ぼ、僕だよ。木場祐斗だよ」

その名前が聞こえると、途端に俺の頭は冷静になった。それはまるで今までバラバラだった歯車が、噛み合った様に正確に。

—— 『僕は木場……祐斗。』

クラスは違うけど兵藤さん達と同じ2年生です。

えーつと……僕も悪魔です。  
宜しくね』

自分の名前を言うときに躊躇ったが何かあるのだろうか……？

——『お前は乙女かつ!!』

『痛っ！ひ、酷いな士織さん！

僕は紛れもなく——じゃなくて！

手刀を落とすなんて酷いじゃないか！』

『お前が変な反応するからだろうが！』

そうは言ったものの、祐斗の発言に何処か引つかかるところがあったのは気のせいだったのだろうか……。

「……………」

「……………」

互いに無言のまま、時間が過ぎていく。

俺は祐斗から顔を逸らしたまま口を開いた。

「……取り敢えず風呂からあがれ祐斗。

お前が祐斗だったのは信じてやるから。

……その格好は目に毒だ」

ちらりと祐斗の姿を見る。

唯一の布は腰に巻かれたタオルだけ。それも濡れてしまっていて巻いているのか張り付いているのかわからないほどだ。

「う、うん……。

そうさせて……もらうね」

「安心しろ。

きちんと目を瞑ってやるから……。

上がったら俺の部屋にいてくれ。俺は後から行く」

それだけを言うと、俺は目を閉じ祐斗とは真逆の方を向いた。

——ちやぷん……。

——うう……髪が……張り付いて……。

——タオルの意味もないよね……これって……。



……ああ……音だけつてのも耳に悪いな……。

俺は【遮断】の魔法を使い、しばらく聞こえてくる音を遮断した。

~~~~~

祐斗があがつて行って三十分程の間をあけてあがり、素早く着流しに着替えた俺は祐斗の待つ自室へと急いだ。

扉を開けて中に入るとベットに腰を下ろした祐斗の姿が目に入る。

「……待たせたな」

「ま、待つてなんかないよ」

俺は息を整えつつ祐斗の横に腰を下ろした。そしてまた、2人の間に沈黙が降りる。

「……説明、した方がいいよね……」

しばらくの後、祐斗が先に沈黙を破り、そう口にした。俯き気味の祐斗。俺はそれを見た時無意識のうちに手を伸ばしていた。

「……いいや。無理に説明しろとは言わねえよ。」

何時か、何時か教えてくれるのならそれは今じゃなくてもいい」

祐斗の頭を優しく撫でながら、そう口にしていた。

祐斗は驚いた様な表情で俺を見たが、頭の手を払う事はなく、ただ気持ちよさそうに受け入れてくれる。

—— 閑話休題。

「……ありがとう士織さん」

「気にすんな。」

人には言えない秘密の1つや2つあるもんだ」

しばらくして落ち着いた様子の祐斗。

今ではいつものようなスマイルを浮かべることでもできるようになってる。

「士織さんにも……あるの?」

「何がだ?」

「ほら……その……誰にも言えない秘密……とか」  
「無いこともないな」

俺はベットに寝転び、そう言う。

祐斗はそうなんだ……と言って秘密について聞こうとはしない。

「祐斗、1つ聞いていいか？」

「何かな？」

「お前の【身体変化】の魔法は自作か？」

「いや、違うよ。」

これは僕の剣の師匠に教えてもらったんだ。

でも、師匠も誰かに教えてもらったって言っていたような……」

祐斗は首を傾げながら俺の質問に答えてくれる。

それにしてもリミッター付きとは言え、俺にも気づけない程の高度な【身体変化】……誰が作ったのが気になってしまう。

「ねえ、士織さん」

「なんだ？祐斗」

「木場……祐奈」

祐斗は、ゆっくりとそう言った。

「ん？」

「男の時の僕の名前は『木場祐斗』。」

「だけど女の時の名前は『木場祐奈』っていうんだ」

「祐奈……それがお前の本当の名前か」

俺は祐斗の方を向きながら『祐奈』と言う名前を反復させる。

「いや、これは僕が部長の眷属になってから貰った名前。

僕の本当の名前は——あの時置いてきた」

そう言った祐斗の瞳には暗い炎が灯り、哀し気な雰囲気を纏わせ  
た。俺はそれが何なのか、すぐに分かった。分かってしまった。

「……復讐か？祐斗」

「……まあね。」

僕にとってそれは何よりも優先すべき大切な事だ。

例え何が立ちはだかったとしても……それを全て排除して、成し遂

げる」

——みんなのために。

祐斗はそう続けると瞳を閉じた。

そして、再び開かれた時、その瞳には暗い炎など見る影もなく無くなり、いつもどおりの祐斗のモノへとなっていた。

しかし、哀し気な雰囲気は消しきれてはいなかった。

「……なあ、祐斗」

「何かな？ 士織さん」

「復讐の先に何かがあるのかは分かっているか？」

「……………」

祐斗は答えない。何も答えない。

俺は溜息を1つ吐くとゆっくりと重たくなってしまった口を、開く。

「——【虚無】だ。」

復讐の後に残るのは【虚無】だけだ」

「……それでも、僕はっ!!!」

「だから!!!」

俺は祐斗の言葉を遮るように声を張った。

『『木場祐奈』その名を俺に預けろ』

「……………え……………」

祐斗はわからないと言ったような表情を浮かべ俺の方を見詰める。

「復讐が終わって、お前は【虚無】に囚われるだろう。自分の思っている存在意義を失ってしまうんだから。自分も、そんな時は俺のところへ来い。」

その時はこの名前をお前に返して——新しい『木場祐奈』に  
してやる」

言って、俺は祐斗に向けて笑みを浮かべた。

祐斗はしばらくぼかんとした表情をしていたが、一瞬顔を俯かせて

俺の方を向いた。

「……わかったよ。」

君に預ける。僕の名前も、この姿も、この声も。

そして——」

祐斗は満面の笑みを浮かべてこう言った。

「——女としての幸せも」

「おおっと……こりや、とんでもないものを預かっちゃまったな……」

「預かってくれるんでしょ？」

嫌だとは言わせないからね？」

そう言った祐斗の顔は小悪魔的な笑みが浮かんでいた。

その姿は——輝いて見えた。

---

Side 木場

「そ、それじゃあ、僕はもう戻るよ！」

明日からも修行宜しくお願いします」

僕は自分の言った言葉に恥ずかしくなり、ペこりと頭を垂れると急いで部屋から出ようとした。

「祐斗!!」

「……………」

僕を呼び止める土織さんの声。

振り向くことはせずにそのまま聞く。

「……お前がもし、復讐を終えて、俺でいいと思えたのなら……」

「……………」

「その時は、お前に——女としての幸せも返してやるよ。」

勿論嫌っていう程な?」

「……………!!」

僕は急いで扉を開けて廊下に出る。  
扉にもたれ掛かってさっきの土織さんのセリフについて考える。

「——そういう意味で受け取っても……良いんだよね……？」  
僕の顔が熱くなったのがよく分かった。

く修行終わりましたく

どうも、兵藤士織だ。

祐斗女の子事件を過ぎて気づけば修行も最終日。10日の修行でどこまでレベルを上げられたか……今日はそれを確かめるために全員を一人一人試験する予定だ。

「さて、やるか祐斗」

「うん！僕がどれくらい強くなったかその目で確かめて貰うよ!!」

祐斗は木刀を握り締めやる気満々と言った表情を浮かべる。ちなみに、祐斗に掛けていた【重力増加】の魔法は既に解いてある。

「行くよ……士織さん!!!」

声を張った祐斗は地面を蹴り出した。

そのスピードは【重力増加】を掛けた日とはまるで違う。

一閃された祐斗の木刀をガードしながら自然と浮かぶ笑みを隠せない。

「やるじゃねえか祐斗!!」

「あれだけ士織さんに扱かれて強くない訳には……行かないからねっ!!」

鏢迫り合いをしていたその時、祐斗はふと、姿を消した。

「おっと……こりゃびっくりした」

「……言ってる割にはあつさりガードするね……」

背後からの攻撃を木刀を滑らせガードした俺に祐斗は苦笑混じりにそう言い、距離を取る。

「いやいや、そうは言うが祐斗。

俺の視界から一瞬でも消えられたんだからそのスピード、自信を持ってもいいぞ?」

リミッター付きの状態だったとはいえ、まさか見失うとは思っても見なかった。

「でも……まだまだ士織さんには届きそうにないな……」

これは参った……。祐斗はそう言いながらも俺に一矢報いようという気迫が感じられる。

祐斗はふう、と息を一つ吐くと木刀を腰の位置に、まるで納刀するかのように構えた。

「へえ……。拔刀術か？」

「僕の剣は速さに特化してるからね……」

行き着く先はどうしても拔刀術になるんだ」

そう言った祐斗はその構えのまま前傾姿勢を取る。

「速く、翔く、瞬く……。土織さんに一撃当てるためにスピードを特化させたんだ……」

しばしの沈黙の後、祐斗は極端な程の前傾姿勢から地面を抉り飛び出したのだ。

「……っ!？」

祐斗の姿が一瞬ぶれる。

その一瞬が俺の反応を鈍らせた。

祐斗の抜刀はただ純粹に速さを求めたのだろう。

その一閃は——速かった。

木刀によるガードも既に間に合わない所まで祐斗の一閃は迫っている。

俺は木刀を手放し——

「合格」

「な……っ!!?!」

祐斗の一閃を素手で掴みとった。自信のある抜刀術を素手で防がれた為か、祐斗は俯き、震え、立ち尽くす。

流石に素手で掴むのはやり過ぎたか？そんな考えが頭に浮かぶ。

「流石、土織さん……。」

まだ、この未完成の技じゃ足りない……。」

そう言っつて、上げられた祐斗の顔にはまだ先へ行こうという向上心を感じた。そして何より、今の抜刀術を防がれるのを望んでいた。祐斗の瞳はそんな雰囲気孕んでいた。

どうやら、俺の行動はやり過ぎでは無かったようだ。

俺はそんな祐斗の頭を軽くポンポン、と叩き、口を開く。

「……良くやったな」

「土織さん……。」

自分でも、驚くほどに優しい声音だった。

祐斗も嬉しそうな表情を浮かべてくれる。

「……さて、他の奴らも見てくださいな……。」

掴んだままだった祐斗の木刀を返すと踵を返して歩み出す。最低ラインくらいはみんなにクリアしてもらわないと……。」

「土織！僕はまだ強くなるよ。」

また、相手をお願いするね！」

突然聞こえてきた祐斗の声。

しかも、俺のことを初めて呼び捨てで呼んだ……。」

「頑張れ、祐斗」

後ろ手に手を振りながら、呟くくらいの声でそういった。

~~~~~



「……行きます」

小猫の所を訪れ、真つ先に言われた言葉、それは『相手をして下さい』という小猫の自信に満ちた声だった。

「来いよ小猫。遊んでやる」

修行開始時にも言ったその言葉を小猫にかける。それに対して小猫は初めと同じ言葉を返すわけではなく、フェイントを混ぜながらのステップで近付いて来る。

驚くことに混ぜられるフェイントはレベルが大幅に上がっていた。

「イイねえ……」

眩く俺の声が聞こえたのか、小猫の口角が少しだけ動く。そして、一瞬の隙を作ってあげると――

「……流石に学びました」

それとは逆の方向から小猫は接近し、ラッシュを始めた。

攻撃の威力は勿論、フェイントの上手さが改めて感じられる。

あの時のフェイントの甘さはもう感じない。あるのはただ、本気で騙しにかかる小猫の技。

「……これだけで驚かないで下さい」

小猫は右腕を大きく振りかぶると……その拳の部分に魔力を纏わせ、俺に向かって放つ。俺は放たれた拳の部分を掌で滑らせ、地面へと誘導させる。

そしてそのままバックステップで距離を開けた。

「おお……中々の威力……」

「……当たって下さい」

そう言いながら、小猫は外してしまつた拳を再び構え直す。

小猫の拳が放たれた地面はまるで爆撃の後のように抉れ、散つていた。

「その威力の直撃は遠慮しとくわ」

「……遠慮は要りません。さあ……」

そう言つた小猫は両の拳に魔力を集め、ボクシンググローブのようにして見せる。

「……次は、これです」

「うつわあ……えげつないねえ……」

俺はそう言いながら、またも予想以上の成長を見せられ、自然と微笑んでしまう。

「……うん。合格だ小猫」

「……っ!!」

俺の呟きは聞こえなかつたのだろう、小猫はそのまま接近してラッシュを始めようとする。

「だから合格だ。小猫」

両の拳を受け止め、そのまま一本背負いの要領で地面に叩きつけた。

小猫は一瞬目を見開いたものの、むくり、と立ち上がり服についた土埃を払つて口を開く。

「……やっぱり廃スペック過ぎます」

「まあ、小猫も成長したじゃねえか」

「……まだまだです」

そう言つた小猫はまたも魔力を纏わせ始める。何事か、まだやるつもりかと思考したがそれは違ふのだと、小猫の表情から読み取ることができた。

「……本来、なら……これを両腕……に、やりた……かつた、です……っ!」

辛そうにそう言つた小猫の右腕には魔力でできた……【白虎】の顔があつた。

魔力の密度が濃い為か、その白虎は白く輝いている。

小猫は俺が見たのを確認したのか、腕の白虎を消し、荒い呼吸を取り始めた。

「……流石に……完成……しませんでした……」

額には玉のような汗を浮かべ、辛そうな小猫。どうやら相当無理しないと出来ない芸当らしい。

「いや、今のだけでも十二分に驚いた……」

まさかあんなモノを作っているとは……」

俺は素直にそう言うと、小猫の頭をこれでもかという程に撫でた。

「うにゃ〜……♪」

気持ち良さそうに擦り寄る小猫。

……やばい……小猫が猫みたい……。いや、小猫は猫だけでも

……っ!!

(次は……姫島先輩か……)

時間にはまだ余裕がある。

気持ち良さそうに目を細める小猫の姿を見ると何処か心が安らぐ気がする。

俺はそんな小猫をしばらく撫で続けた。

~~~~~

小猫を撫で終えた俺は姫島先輩が居るであろう場所へと向かっていった。

「……修行場所を変えなくても良いだろうに……」

森の中を歩みながらそう呟く。

アーシアと共に修行しているようだが……果たして結果が出ているのか？それが気になる所だ。

——と、俺が姫島先輩たちの姿を探していると、前方から複数個の魔力球が飛来して来るのが見えた。

その動きはまるで

——宇宙から流れる流星の如き力強さ。

——天を舞う星々の如き流麗さ。

2つを兼ね備えているかのようだ。

俺は飛来して来る魔力球を躲しながら、その場を駆け出す。

木々を使いながら複雑な道を辿るが、魔力球はそれをものともせず、時には躲し、時には木ごと粉碎し俺を追ってくる。

「……やるじゃねえか」

グレモリー眷属はどうしてこうもイイ意味で俺の予想を裏切ってくれるのだろうか……。

俺は背後から迫る魔力球に気を配りながら笑みをこぼす。

「取り敢えずそろそろ反撃と——っ!!」

魔力球を迎撃しようと反転し、跳躍しようとした矢先、足をつるりと滑べらせてしまった。

足下を見るとそこには何時の間にか広がる氷の地面。視線をずらせば地面に手を触れながらこちらへ微笑んでいるアシアの姿が見受けられる。

「やべ……っー!」

反転したことにより前方から迫ってくる魔力球。滑らせ、崩れた体勢から捉えられた魔力球の数は【10】……いや、【11】!?

俺はその事実を目を見開く。

このコントロールだけではなく操作数も増やしてくるとは……!!  
俺の言ったことをこうもこなして来られるとまだ上を見せてみたくなる。

「此処までやられるとは思わなかったぜ!!」

2人に届くほどの大声で叫ぶ。

そして、俺は崩れた体勢のまま大きく口を開き迎撃のための  
【妖精の魔法】エンジエリツク・スベルを発動する。

【火竜の咆哮】ツツ!!!」

口から吐き出すのは竜の焰、紅の業火。

その炎は魔力球を全て飲み込み、そして焼き尽くす。

俺はそのまま体勢を整えると着地と同時に口を開いた。

「お前らも合格だ」

アシアの方を改めて見てみると、そこには姫島先輩の姿もある。

どうやら移動してきたようだ。

「あらあら……折角奇襲しましたのに……残念ですわ」

「やっぱり士織さんは凄いですね！」

姫島先輩はニコニコしながら、アーシアは瞳を輝かせながらそう言った。

「流石にやられるわけにはいかねえからな……」

まあ、2人の作戦は中々のものだったぞ？」

「そういつて貰えると嬉しいですわ」

「朱乃お姉様のおかげですね！」

アーシアは姫島先輩のことを尊敬の眼差しで見つめ、満面の笑みを浮かべる。

「……【朱乃お姉様】って……」

「うふふ……アーシアちゃんに試しに呼んで貰ったら気に入ってしまいましたわ」

口元に手を当てながら笑う姫島先輩。

それにしても朱乃お姉様とは……まあ、アーシアも嫌がってはいないようなので何も文句は無いが……。

「そうだ、2人とも」

俺は思い出したかのように手を叩く。

2人は首を傾げながら俺の発言に耳を傾けているようだ。

「2人には約束通り、修行の結果の褒美をやらねえとな……？」

そう言うと、姫島先輩は一瞬で俺の元まで移動し、手を握った。その時の姫島先輩は子供のような笑顔を浮かべていた。

「私はそれを待ってましたわ！」

「お、おう……約束したからな……」

あまりの迫力に苦笑いを浮かべながらも俺は興奮冷めやらぬ姫島先輩をなだめ、アーシアも一緒に【妖精の魔法】をひとつずつ伝授した。

この【妖精の魔法】を2人が使いこなせるようになるのは何時になるか……それも楽しみである。

「……頑張れよアーシア、朱乃先輩」

~~~~~

夕食、入浴を終えての静かな一時。

俺は唯一試験をしていないグレモリー先輩の姿を探していた。

「あら？土織？」

「此処に居たかグレモリー先輩」

リビングにあるテーブルの所に腰掛けていた。ティーライトキャンドルの淡い灯がその場を包んでいる。

俺は持つてきていたチェス盤と駒を置き、グレモリー先輩の向かいに腰掛けた。

「へえ？眼鏡か……」

グレモリー先輩は目が悪かったのか？」

赤いネグリジェ姿のグレモリー先輩は紅の髪を一本に束ね、眼鏡をかけている。その姿が珍しかったもので、そう聞いてみる。

「あー、これ？気分的なものよ。

考え事をしている時に眼鏡をかけていると頭が回るの。

ふふふ……人間界の暮らしが長い証拠ね」

クスクスと小さく笑うグレモリー先輩。

気のせいだろうか、今のグレモリー先輩は何時もよりも集中力と冷静さが研ぎ澄まされているように見える。

ふと、テーブルの方へ視線を向けると、そこには無数の紙が広げられていた。その紙一枚一枚にはフォーメーション、地図、作戦と言ったものがびっしりと書き込まれている。

「……よく考えられてるじゃねえか」

俺はテーブルの上に置かれていた紙の中から一枚を手に取りそう口にする。

「それは……ついさっき書いたものね……」

——でもそれはあまり使いたくないわ。グレモリー先輩は苦笑いを浮かべながら呟いた。

「……そうだろうな。」

なんせこの作戦、成功させるには――」

「――アンタの嫌いな【犠牲】サクリフェイスが必要不可欠だ」  
「……………」

無言のグレモリー先輩。しかし、その表情を見るにもう迷いはないのだろう。

「…………私は【犠牲】は嫌い。  
可愛い眷属たちが傷付くのを見たくないの…………。  
――でも、それは私の我が儘…………」

ギユツと、ネグリジエの端を握る。  
「…………朱乃も、祐斗も、小猫も、アーシアもそしてイツセーも…………あの  
子たちは私の勝利を望んでくれる。勝利の為に戦ってくれる…………。  
それなのに、私は傷付いた姿を見たくないなんて言っただけの子たち  
の頑張りを無駄にしようとしていたわ…………」

「……………」

「最後まで足掻いて、藻掻いて……格好悪くとも、泥臭くとも——  
——勝つ。」

それが私の為に戦ってくれるあの子たちへの私なりの恩返し……」  
言つて、グレモリー先輩は微笑んだ。

俺は大量の紙を束ね、持ってきていたチェス盤をテーブルの上に乗  
せた。

「……取り敢えず1戦、やるぞ?」

「……まだ勝ててなかったわね……」

グレモリー先輩はかけている眼鏡のブリッジ部分をクイツと指で  
押し上げ、笑う。

綺麗に並べられた白と黒の駒達。なかまたち

「勝たしてもらおうわね」

「……負けねえよ」

俺は初手で白の【兵士】ポーンを2マス進めた。



——ゲーム開始からしばらく経った。

戦況は五分五分。グレモリー先輩の何時もより冷静なプレイングは容易に攻めさせてはくれない。

「チェック」

「……やるじゃねえか」

俺はグレモリー先輩の一手に思考する。

本当に冷静なプレイングだ……いくら揺さぶりを掛けても動じない。

俺は残っている駒を1つ動かしグレモリー先輩の駒の進路を塞ぐ。

すると、グレモリー先輩はクスリと笑い、俺を見た。

「土織、それは悪手よ?」

そう言っつて即断の一手、それも最高の一手を打った。

「——チェック」

「く……っ!!」

俺にやれることは【王<sup>キング</sup>】を逃がす事のみ。しかし、その一手の先には

「——チェック・メイト。」

私の勝ちだね?土織」

——グレモリー先輩の勝ちがあつた。

「あああ……等々負けちまつたか」

「とは言ってもこれが初勝利なのよ？」

グレモリー先輩は眼鏡を外しながら苦笑いを浮かべる。

「でも——勝ち勝ち、だろ？」

「……ええ、そうね」

俺の一言にグレモリー先輩は柔らかな微笑みを見せた。

俺は立ち上がりポケットに手を突っ込み部屋の方へと向かい始める。

「もう行くの？土織」

「ん？まあ、夜も遅い。」

人間の俺にはちっと辛いからな」

「そう。じゃあ、おやすみな——」 「ああ、そうだグレモリー先輩」

「……何かしら？」

グレモリー先輩の言葉に被せるように俺は立ち止まって言葉を挟む。

「気になっていたんだが……なんでライザー・フェニックスとの縁談を拒絶してるんだ？」

俺の言葉にグレモリー先輩は腕を組む。

そして、ゆっくりと口を開いた。

「……ライザーは私との結婚をいつも『仕方がない』『不本意ながら』『家のために』『純血が』『悪魔の未来の為に』……そうやって来るのよ」

「……確かにこの間も言っていたな……」

「……これは本当に我が儘なのだけれど、結婚するなら本当に私のことを好きな人としての……」

——私は本当に迷惑ばかり掛けているわね。グレモリー先輩は悲しげに言った。

「……まあ、我が儘って程じゃねえだろ。」

普通だ普通。気にすんな」

「……ありがとう、土織」

俺は後ろ手に手を振りながらそのグレモリー先輩の弦きを聞く。

そして、薄い笑みを浮かべながら言葉を述べる。

「んじや、お休みリアス先輩」

「?!?土織今私のこと——」

リアス先輩の言葉を残しながら足早に部屋へと向かった。  
明日はゲーム本番なんだ。頑張ってくれよ?リアス先輩。

——こうして、修行最終日は幕を閉じた。

くゲーム開始直前ですく

どうも、兵藤士織だ。

ライザーとのゲーム当日。

俺は指導役のためゲームには参加しないがグレモリー眷属全員からの希望によりゲーム開始まで一緒にいることとなった。

「……………うにやあく♪」

「随分とリラックスしてるな？小猫」

俺の膝枕に寝ている小猫の頭を撫でながらそう言う。

小猫の両手にはオープンフィンガーグローブがはめられている。服装は制服のようだがこれが小猫の戦闘スタイルなのだろう。

「随分と羨ましいことをしているみたいだね」

俺の隣にあるソファアに腰を下ろしている祐斗がそう言う。何処か皮肉の混じったような言葉だったが俺はわざと気が付かなかったふうに関口を開く。

「そうか？祐斗なら膝枕して欲しいって言う女子はたくさんいるだろう？」

「……………そういう意味じゃないよ」

思いのほか不機嫌になった祐斗。ムスツとした表情で腕を組み、そっぽを向いてしまった。どうやら少々言葉の選択をミスしてしまったようだ。

俺は小猫を膝枕したまま、隣の祐斗の耳元まで顔を近づけ、本当に小さな呟きを伝える。

「……………今度してやるから機嫌直せ」

「……………っ!!」

祐斗の頭を優しくポンポンと叩き元の姿勢に戻った。祐斗は先程とは一転し、顔を紅くしながら俯いている。簡単なご機嫌取りのつもりだったのだが祐斗があまりにもいい反応を見せてくれたため、俺はそれが微笑ましくて、ついクスクスと笑ってしまった。

「そーいや祐斗。」

「お前武器を変えたんだな」

「はえっ!？」

う、うん。まだ未完成とはいえ抜刀術を使うには『刀』の方が都合が良いからね」

祐斗は以前のような片手用の直剣ではなく、日本刀に限りなく近い刀を持っていた。

祐斗も制服姿だが防具を付けていない所を見ると行動の邪魔だと考えたのだろう。

修行編前と比べると随分と変わったものだ。

「お前はスピード特化のテクニクタイプだということを忘れるなよ？」

「それさえ忘れなければお前は確実に勝てる」

「ありがとう士織さん。」

肝に銘じておくよ」

爽やかなスマイルを浮かべる祐斗。

それにしても祐斗はグレモリー眷属の中で一番成長したと思う。そのスピードは並の悪魔では追いつけないだろう。

俺がそんなことを考えていると膝枕で寝ていた小猫が俺の服を引っ張ってくる。

「……祐斗先輩だけアドバイスはズルいです」

「なんだ？俺からのアドバイスが欲しいのか？」

俺が悪戯っぽい笑みを浮かべながら聞くとコクリと頷く小猫。

俺は素直に反応した小猫の頭を撫でながら思いついた事を伝える。

「そうだな……小猫は一撃で倒しに行こうとするな。」

お前は細かな連続攻撃で確実に仕留めにいくんだ」

「……ありがとうございます」

俺は小猫からの言葉に微笑みを返した。

「……そろそろ時間です。」

皆様、転移用の魔法陣の上へ……」

俺たちが個々リラックスしていると、控えていたグレイファイア・ルキフグスがそう言った。

俺はグレモリー眷属一人一人と少しばかり会話をすると、1人魔法陣の上には立たず、少し離れてグレモリー眷属たちが転移して行くのを見守った。

「勝つてこい、みんな」

俺の呟いたその言葉に、グレモリー眷属の皆は自信のある笑みを浮かべ、そして消えていった。

——全く……いい顔をするもんだ……。

俺が微笑みながらしばらくそのまましていると、グレイファイア・ルキフグスが俺の前に立ち、何処か畏まった態度を取り口を開いた。

「——兵藤士織様。」

魔王ルシファーさまからの提案なのですが、兵藤士織様も観覧席へいらつしやいませんか？

「観覧席？」

「今回のゲームを観覧するための特等席となっております。」

如何でしょうか？」

「そうだな……ありがたく行かせてもらおう事にしよう」

俺がそう言うと、グレイファイア・ルキフグスは魔法陣を広げた。

「こちらの魔法陣の上へお願い致します。」

此処から転移致します故に……」

「了解した」

俺はグレイファイア・ルキフグスの言葉に従い、魔法陣の上へと移動する。

魔法陣は光を発し始め、視界を閃光で染めた。

~~~~~

「へえ、今回のゲームのフィールドは学校のコピーなんだな」

転移が終了し、目を開いた一誠は辺りを確認するとそう呟いた。

オカルト研究部の部室。その風景は寸分の狂いもなく再現されており、アーシアは目を見開いて驚いている。

『皆様。この度グレモリー家、フェニックス家の「レーティングゲーム」の？<sup>アービター</sup>審判役？を担うこととなりました、グレモリー家の使用人グレイファイアでございます』

校内放送のチャイムの後に流れてきたのはグレイファイアの声。凜としたその声はよく通り、響いていく。

『我が主、サーゼクス・ルシファアの名のもと、ご両家の戦いを公平に見守らせて頂きます。どうぞ宜しくお願い致します。』

……早速ですが今戦いのフィールドについてのご説明をさせていただきます。

フィールドはライザーさま、リアスさまのご意見を参考にし、リアスさまが通う人間界の学び舎【駒王学園】のレプリカを異空間にご用意致しました』

窓の外に見える景色は駒王学園の敷地内そのもの。違う点といえば空が——白い。深夜であるにも関わらず、フィールドは明るく照らされているのだ。

『両陣営、転移された場所が【本陣】でございます。』

リアスさまの本陣が旧校舎のオカルト研究部の部室。ライザーさまの本陣は新校舎の生徒会室。【<sup>ポーン</sup>兵士】の方は【プロモーション】をすすめる際、相手の本陣の周囲まで赴いて下さい』

グレイファイアの放送で流れた【プロモーション】とは、チェスのルールと同様、【<sup>キング</sup>兵士】が相手陣地の最新部に駒を進めた時に発動できる特殊なものだ。【<sup>ナイト</sup>王】以外の駒である、【<sup>ナイト</sup>騎士】、【<sup>ビショップ</sup>僧侶】、【<sup>ルーク</sup>戦車】、【<sup>クイーン</sup>女王】のいずれかの駒の特性を得ることができる、言わば戦略の要となるもの。

一誠もそれがわかっているからこそ【プロモーション】の単語が聞

こえた後、表情を引き締めたのだろう。

「全員、この通信機器を耳につけてください」

朱乃はイヤホンマイクタイプの通信機器を配る。全員の目に緊張の色が浮かぶが、1人だけは静かに瞑目していた。

『開始の時間となりました。』

なお、今回のゲームの制限時間は人間界の夜明けまでとします。

それでは、ゲームスタートです』

——キンコンカンコーン。

一般的な学校のチャイム。

その音が途切れる頃には、皆がリアスの方を向いていた。

——祐斗は刀の柄に手を添え。

——小猫はグローブを直し。

——朱乃は真剣な表情を浮かべ。

——そして。

——一誠は静かに瞳を開いた。

「——皆、勝つわよ。絶対に」

その声への返事はゆっくりとした頷きだけだった。

今、「レーティングゲーム」の狼煙が上がる。

S i d e O u t

グレイファイア・ルキフグスの転移魔法陣により転移してきた俺は一人の男と向き合っていた。

周りからは殺気立った様な視線を感じるが気にするまでもない。今の俺は目の前の男にしか興味がない。



「……………初めまして、だな。【紅髪クリムソン・サタンの魔王】サーゼクス・ルシファー」

「こちらこそ初めまして。君が兵藤士織……君だね？」

紅髪の男——サーゼクス・ルシファーは『君くん』と言うのを少し躊躇った後、手を出し握手を求めてくる。

俺はその手を拒むことなく握り握手をした。

「リアス達を鍛えてくれたそうだね？」

お礼を言わせてくれ」

フレンドリーな笑顔を見せながらそう言うサーゼクス・ルシファー。

「いやいや、あの程度のことなら苦労はしない。

それに、俺がやりたくてやっただけだ」

「それでもだよ。

リアス達は随分と強くなったようだしね……」

モニターに視線を移したサーゼクス・ルシファーは優しい微笑みを見せる。ゲームが始まったばかりだというのにそれを感じ取るということは、流石は四人の魔王の1人だと言わべきだろうか。

——その後、俺はサーゼクス・ルシファーに勧められるがまま、隣の席に座った。

……それにしても先程から周りからの視線が鬱陶しい……。初めはサーゼクス・ルシファーへの興味でスルーしていたが流石にぼそぼそと聞こえるか聞こえないかといった声で陰口を叩かれると腹が立つというものだ。

「……魔王様」

「ははは、そんな堅い呼び方じゃなくても、サーゼクスと呼んでくれれ

ばいいよ」

「じゃあ、サーゼクス。」

——ちよつと黙らせても?」

「ふふふ……君に任せようじゃないか」

サーゼクスからの許可も得たため、俺は立ち上がりくりと後ろを向く。

そこにあるのは俺の方を見下すように見つめる数人の悪魔の姿。

……どいつもこいつも偉そうなだけで力は本当に弱そうだ。

俺は自身に掛けられたリミッターを全て外す。そしてふう、と一息付くと——魔力を少しだけ漏れ出させる。

少しだけ、とは言っても俺の持つ魔力は【無限】。その結果——

「——【黙れ】」

魔力の重圧に耐えかねたのか、俺の言葉の後には静寂だけが広がった。

俺はそのまま少しだけ前に進み出ると口を開く。

「さっきから黙っていればペラペラと……良くもまあ達人な口が減らねえなあ?」

その場にいる全員の顔に冷や汗が浮かんでいる。

……ふむ、魔王ですらこの量で冷や汗を流すのか……。

俺は指を一本立て、口の前まで持って行く。

「……口を閉じろ？」

言つて、笑みを浮かべる。意識したのは攻撃的な笑み。魔力の濃度をほんの少し濃くしてあげれば面白いように表情を歪め壊れたオモチャのように首を縦に振る悪魔たち。

俺はその姿を視界に収めると、サーゼクスの隣の席に戻り腰掛けた。

「……まったく、心強いね」

「ん？何がだ？」

リミッターを掛直しながら、隣のサーゼクスの言葉に耳を傾ける。

「君みたいな人間がリアス達の傍に居てくれるならこれ程心強いものはない」

「……俺は別に悪魔の味方じゃねえぞ？」

「それならそれで構わないさ」

——何故なら。サーゼクスはモニターに映るリアス先輩たちの方を見る。

「君は私と同じ香りがする」

「……へえ？」

サーゼクスの言葉につい声を出して反応してしまう。全く面白いことを言うものだ……。

「私はね、家族や仲間といった身の回りの親しい人に対して甘すぎると良く言われるんだ。」

もし、親しかつた者が敵になったとしてもおそろしく倒すのに……いや、言葉を濁すのは止めよう……殺すのに躊躇いが出ると思う」

「……自分の命に関わるとしてもか？」

「……そうだよ」

哀愁漂う雰囲気に含まれながら、サーゼクスは言葉を続ける。

「君からは私と同じような何かを感じた。」

この先、その優しきは命取りになる。  
これは少しでも長く生きている私からのアドバイスだ」  
「……ありがたく受け取っておく」  
無愛想気味な返事にサーゼクスはニコリと笑った。  
足を組み、ふう、と息を吐く。  
今はまだゲームは動かない。

——閑話休題。

「——時に土織君」  
「なんだ？サーゼクス」  
モニターを通して静かに観戦していたサーゼクスは唐突に口を開く

「このゲームどちらが勝つと思う？」  
「そんなのは決まっている。」

——というよりこのゲームは始まった時から既に詰んでるんだよ」

「ほう……？？？どういうことかな？」

サーゼクスは目を細めて聞き返す。俺はその問いにはあ、と溜息を吐いた。

「リアス先輩たちの勝ち。」

俺の弟——兵藤一誠が仲間のうちはその定義が崩れる事はない」

「そうか……それは楽しみだ」

「兄的には結婚に反対だったりするのかな？」

「ん？いや……それについてはノーコメントだよ。」

ただ言えることは——ライザー君は嫌いではないということだね」

サーゼクスは楽しそうに笑いモニターを改めて注目し始める。

『嫌いではない』……か。  
その言葉についつい頬が緩む。

(……サーゼクスは分かっているんだろう……)

——ライザーがどのような男なのかを。

「レーティングゲーム【序盤】」

オッス！兵藤一誠だ。

ようやく始まったライザーとのレーティングゲーム。

この日のために俺は10日間の修行を皆とは別で行っていた。

やっていたのは主に封印の解除と【赤龍帝の籠手】ブラスレット・ギアの調整。

幸いなことに封印に関しては8割程は解くことができ、【禁手】バランス・プレイカー

も問題なく使える。しかし、残念な事に【亜種禁手】は未だに調整中だ。

「さて、まずはライザーの【兵士】ポーンを撃破キヤプチャーしないといけないわね……。

8人全員が【女王】クイーンに【プロモーション】したら厄介だわ……」

リアス部長はソファに腰を下ろしながら言う。その姿はとても余裕なものだ。

さらに、朱乃先輩はお茶の用意まで始めてしまった……。

「随分と余裕な態度ですね？リアス部長」

「ふふふつ。やっぱりそう見えてしまうのかしら？」

でもね、イツセー。私は今とても頭が回るの。作戦が湧き水のように溢れてくるわ」

そう言ったリアス部長は笑みを浮かべる。

周りを見ると比較的皆落ち着いているようで、力が入り過ぎているということはないさそうだ。

……まあ、アーシアは別なのだが……。

「レーティングゲーム」は戦場を使い込んでこそ意義がある……。

まずは正確な地形把握からね。今回は私たちも良く知る学校が舞

台。———祐斗」

「はい」

リアス部長に促され、木場がテーブルに地図を広げた。

マスで仕切られ、縦と横に数字や英字などが書き込まれた———

———なるほどチェスのボードを意識して書かれているのか。

リアス部長は旧校舎、新校舎の端を赤ペンで丸をつけた。

……こうして丸を付けられると分かり易いものだ。

「私たちの本陣周辺には森があるわ。これは私たちの領土と思って構わない。」

逆に新校舎はライザーの領土……。入った瞬間相手の巢の中に飛び込んだも同然と考えて頂戴。

そして新校舎へのルートなのだけれど……」

「普通なら運動場の裏から、と行きたいところですけど……」

リアス部長の方へと視線を向ける。

俺の考えていることと同じだったのだろう。リアス部長は笑みを浮かべながら口を開いた。

「ええ。十中八九、そのルートはライザーも予想しているわ。」

そうね……【騎士<sup>ナイト</sup>】1名、【兵士<sup>ポーン</sup>】4名配置してくるんじゃないかしら？その配置なら運動場全域を把握できる」

「部長、旧校舎寄りの体育館。これを先に落としませんか？

此処を落とせば新校舎までのルートを確保することが出来ます。

体育館は新校舎とも旧校舎とも隣接していますし、相手への牽制にもなります」

木場は地図の体育館の場所を指さしながらそう言う。その意見に俺も首肯することで賛成するとリアス部長も頷いた。

「ええ、そうしましょう。」

体育館はキーポイントね」

「なら、体育館の占拠には俺が行きます」

俺はそう言いながらストレッチを始める。

リアス部長もそれについて反対はせず、寧ろ歓迎してくれてる感もある。

「……イッサー先輩私も一緒に行きます」

「小猫ちゃんも？分かったぜ。」

良いですよ？リアス部長」

「ええ。二人の方がもしイレギュラーが起きたときの対応が簡単になるからいいわよ」

リアス部長はニコリと笑みを向けながら柔らかな物腰で言った。そして、ソフアーから立ち上がると凜とした表情を浮かべて口を開いた。

「作戦開始の前に……祐斗と小猫は、まず森にトラップを仕掛けてきて頂戴。」

予備の地図も持って行って、トラップ設置場所に印をつけるように。後でそれをコピーして全員に配るわ」

「はい」

「……了解」

リアス部長の指示を受けるやいなや、木場と小猫ちゃんは地図と見るからに怪しいトラップグッズを手に持って部室を出ていった。

「朱乃は二人が戻って来たら森周辺、空も含めて霧と幻術を掛けておいてくれるかしら？ 勿論ライザーの眷属のみに反応する仕組みよ？」

「分かりました、部長」

朱乃先輩はリアス部長の言葉に了承すると何処かへ行ってしまう。

「イツセー」

「何ですか？ リアス部長」

ソフアーに座り直したリアス部長が俺の名前を呼ぶ。そして、自らの隣を叩きながら口を開く。

「こつちに来てくれないかしら？」

「わかりました」

俺は別に断る理由もなかったため、隣に腰をおろした。

すると、リアス部長は俺の頭を優しく撫で始める。

「今日はお願いな？」

「はい。貴女が俺の主である限り力を尽くしますよ」

「ふふふっ。心強いわね」

微笑みながらしばらく俺の頭を撫で続けたリアス部長であった。

……ちなみに後からアジアも撫で始めたのだが……まあ、気にするようなことではない。

~~~~~



「さて、行くか……」

俺は旧校舎の玄関に立ちそう呟いた。

隣には小猫が居り、静かにストレッチをしている。

「イツセー、小猫。体育館に入ったら戦闘は避けられないと考えなさい？」

あなたたちなら必ず勝てるわ」

玄関まで見送りに来ていたりアス部長。俺と小猫ちゃんはただ首を振ってその言葉を聞く。

俺は【兵士】<sup>ポーン</sup>のため【プロモーション】することが出来るが……恐らく今回は使わないため考えから外しておく。

「では、僕も動きます」

木場も帯刀し、出向く準備を進めていた。

「祐斗、例の作戦通りに動いて頂戴」

「了解しました」

刀の柄の場所を調節しながら祐斗は頷く。

「朱乃は頃合を見計らって、お願いね」

「はい、部長」

流石は【女王】<sup>クイーン</sup>の朱乃先輩。その落ち着いた物腰とは裏腹に激しい魔力の対流が見えた。

これはどう見ても土織が何かしたんだろうと苦笑いが浮かぶ。

「アーシアは私と待機よ。」

回復役であるあなたは絶対にやられては駄目よ」

「は、はいっ!!」

アーシアは緊張しているのにも関わらずみんなのために何かをしようという心意気を感じさせる声を上げた。

全員の確認を取ったリアス部長は一步前へ出る。

「さて、私の可愛い下僕たち。準備はいいかしら？」

敵は不死身のフェニックス家の中でも有望視されている才児ライザー・フェニックスよ。

さあ、消し飛ばして上げましょう!!」

「『はい!!』」

その返事を開始の合図に、全員が駆け出す。

俺と小猫ちゃんは体育館へと向かい、木場はトラップを仕掛けた森の中へ。朱乃先輩は空へと舞い上がる。

「イツセーさん! 皆さん! 頑張ってくださいっ!!」

アジアからの声援を背に駆ける。

後ろ手に手を振りながら俺は小猫ちゃんとともに体育館へと全力で駆けた。

「どうする? 小猫ちゃん。」

体育館への侵入だけど……正面突破でもしてみるか?」

「……相手も居るでしょうし……先手を打つのもありですね」

その言葉に笑みを浮かべ、俺は戦闘への準備へと移る。

(さあ、行こうぜ相棒!)

(俺たちの力を見せよう!!)

やる気に満ち溢れたドライグの咆哮が俺には聞こえる。俺は右腕に【赤龍帝の籠手】を出現させた。

そして、体育館につくやいなや。入口を蹴り飛ばして中に入っていく。

「まさか正面から来るとは思わなかったわ……。案外脳筋だらけなのかしら? グレモリーの下僕さんたちは」

中に居たのは四人の女性悪魔。

チャイナドレスを身に纏った娘と双子の娘、それと1度俺に突撃して来ようとした小柄で童顔な娘。

その顔を確認した俺はポツリと呟く。

「……【兵士】3、【戦車】1……か」

「……数で上回られただけです」

「そうだな。グレモリー眷属は量より質だ」

「……イツセー先輩は【兵士】をお願いします。私は【戦車】を」  
「承知した」

「……何をコソコソと話しているのかしら? 敵を前にして随分と余裕

ね？」

チャイナドレスを身に纏った娘——確か名前は雪蘭シュエランだったはず……——は何処か中国拳法を想像させる構えを取りながらそう言った。

「なあに、簡単な作戦会議だ。

気にしなくてもいいぞ？」

俺は笑顔を浮かべながらそういう。

「……ひとまず、勝負です」

そう言った小猫ちゃんは我先にと雪蘭の方へと駆けていった。

「ミラー・イル！ネル！あなたたちはそっちの赤龍帝の相手を！」

雪蘭はそれを言うと小猫ちゃんと格闘戦を始めた。

俺の前には3人の女性悪魔。

小柄で童顔な娘——ミラー——は武闘家が使うであろう長い棍

を構え、双子の娘——イルとネル——は小型のチェーンソーを二

コニコ笑顔で構えた。

……武器が些か物騒な気がするがそれは気にしたら駄目だろう。

「解体しまーす♪」

「台詞が物々しいな……オイ」

『Boost!!』という音声俺の籠手から響く。

「バラバラバラバラ！」

双子のイル、ネルはそんな言葉をシンクロさせながら言うと、チェーンソーを床に当てながら同時に直進してくる。

俺に肉薄したイル、ネルはタイミングをほんの少しだけずらして振り上げた。

「……つと……」

俺はそれを身体をずらして躲すと片方を裏拳で吹き飛ばした。

そして、右腕を立て、ガードの姿勢を取る。背後から近づいていたミラの棍での攻撃をそれで受け止めると回し蹴りで今度は武器を吹き飛ばし無力化を図る。

……此処で時間を掛ける理由はない。

俺は3人と少しだけ距離を取ると5度の倍加をした「赤龍帝の籠

手」の力を解放する。

『Explosion!!』

魔力を集め意識を集中させる。

俺は出現した小さい魔力球を右手で殴りつけた。

「喰らいな！新技【拡散する龍の息吹】ッ!!」

魔力球は炸裂し打ち上がると、まるで雨のように降り注いだ。

魔力の少ない俺の現在の状態で唯一の広範囲攻撃。

3人に降り注いだ魔力の雨は見事命中。

しかし、その威力は微々たるもので、あまりダメージは与えられないようだ。

つまり———— 作戦通り。

『イツセー！準備が整ったわ！』

さらに、ナイスなタイミングでリアス部長からの指令が入った。

俺は小猫ちゃんと視線で合図を送り合い、頷いた。

そして、俺たちはその場から走り出し離脱する。

「に、逃げる気なの!？」

此処は重要拠点なのにつ!!」

俺たちの行動に驚く4人。

まあ、普通ならその反応だろう。

だが、此処が重要だからこそ俺たちの行動に繋がるのだ。

中央口からいち早く飛び出した俺と小猫ちゃん。

一瞬の閃光。刹那————

——先程まで俺たちの居た体育館には、巨大な雷柱が降り注いだ。

雷柱がなくなったとき、目の前の体育館もまた、消えてなくなっていた。

「テイク撃破」

朱乃先輩の声が上から聞こえてくる。

視線を少し上げてみると、そこにはニコニコ顔の朱乃先輩が黒い翼を広げて空に浮いていた。右手を天にかざしており、電気が迸っている。

『ライザー・フェニックスさまの【兵士】3名、【戦車】1名、戦闘不能！』

審判役のグレイファイアさんの声がフィールド中に響く。

「中々の威力ですね朱乃先輩」

「あらあら、ありがとうございます」

朱乃先輩は嬉しそうな表情を浮かべてそういう。

体育館ごと消し去る威力というのは目を見張るモノがある。

「小猫ちゃんもお疲れ様」

「……そんなに疲れてないです」

小猫ちゃんは物足りなさそうに手首を回していた。

さて、此処までの作戦は思い通りに行っている。

「……次は祐斗先輩と合流です」

「そうだな。」

行こうか、小猫ちゃん、朱乃先輩」

木場が待っているのは運動場。

俺たちはそこを目指して駆け出す。

瞬間。

辺りを熱風と粉塵、爆碎音が包んだ。

撃破……

レーティングゲーム【中盤】

S i d e 三人称

撃破……」

宙に浮かんだ女性——ユーベルーナ——は淡々と呟いた。  
彼女の眼下には炎を使った爆破により土煙と黒煙の入り混じったモノが立ち上っている。

『倒したか?』

「……おそらく。」

私の最大火力を撃ち込みましたライザー様」

『……そうか。』

——よくやったなユーベルーナ」

ユーベルーナの持つ通信機器から聞こえてきたライザーの声は優しく、相手を労わっているのが良く分かる声。ユーベルーナはその声に嬉しそうに微笑みながら頬を染めていた。

『引き続き頼むぞ?俺の【女王】』

「分かりましたライザー様。」

「ご期待に答えられるよう、精進致します」

ユーベルーナはその場には居ないライザーに向かってか、頭を垂れた。

通信を終えた後、一瞬だけ下を見下ろしそのまま運動場の方へと向かう。

——しかしそれは、

——ユーベルーナの、

——油断に他ならなかった。

「——【雷竜の咆哮】っ!!!」

「な……っ!!!?」

ユーベルーナの下——地上から女性の声こゝろが響いたかと思うと、彼女の真横スレスレを金色の帯電する光柱が通り過ぎて行った。

「……な、何故……」

ユーベルーナは眼下に広がる現実を目を見開く。

……予想外。彼女の心情を月並みに言えばそれに尽きるだろう。

「——何故3人とも無傷なの!？」

ユーベルーナの悲痛な叫び。

そう、彼女が倒したと思いい込んでいた一誠、小猫、朱乃の3名は、全くの無傷で地に立っていたのだ。

「うふふ……私の障壁を舐めないで欲しいですわ」

ニコニコと笑う朱乃。

一誠と小猫を庇うように前に出た彼女はそう言って半透明に輝く障壁を解除した。

「ありがとうございます朱乃先輩。」

おかげで無駄な力を使わずに済みました」

「あらあら、お役に立てたようで嬉しいですわ」

一誠の言葉にそう返す朱乃。

小猫も朱乃に頭を下げてお礼を言っている。



「……さて、どうします？・朱乃先輩。」

相手はライザーの【女王】「みたいですけど……」

一誠がワザとらしく話を振ると、朱乃はニコニコ笑顔を崩さぬままに即答した。

「……私がお相手しますわ」

瞬間、朱乃の身体から雷が迸る。

まるで朱乃の意志に呼応するような激しい雷は遠目からでもかなりのものだと分かるだろう。

現に、ユーベルーナは顔を歪め冷や汗を垂らしている。

「うふふ……土織君に教えてもらった魔法……まだ完璧に使える訳じゃありませんので……練習に付き合っていただきますわよ？」

【爆弾王妃】ボム・クイーン「さん」

「……練習とはよく言います……」

それに、その二つ名はセンスが無くて好きではないのよ【雷の巫女】さん」

ユーベルーナは手に持った杖を朱乃に向けながら笑った。それは強者の余裕の笑みではなく、挑戦者のあわよくば喰らってしまおうという獰猛な笑みだ。

一誠は二人の姿を視界に収めると、小猫の方を叩き、口を開いた。

「此処は朱乃先輩に任せて俺たちは先を急ぐとしようぜ？」

「……分かりました」

「うふふ……そうしてくれると助かりますわ。」

なにせ本当に調整も出来ていませんの……巻き込んでしまったら大変ですわ」

苦笑い気味の表情を浮かべながら朱乃は一誠立ちの会話へ言葉を掛ける。

ユーベルーナは一誠たちを行かせたくはないのだろう。苦虫を噛み潰したような顔になっている。

「木場のやつも待ってるだろうしな……早く行こうぜ」

「……超特急です」

言って、一誠たちはその場を駆け出した。

二人の姿を見送るように静かに立つ朱乃とユーベルーナ。完全に姿が見えなくなった時――

――激しい爆裂音と雷鳴が轟いた。

戦いは序盤オープニングから中盤ミドルゲームへと確実に移ろって行く。

S i d e O u t

~~~~~

S i d e 一誠

『ライザー・フェニックスさまの【兵士】ポーン 3名、戦闘不能』  
運動場への移動中、校内アナウンスによるライザー眷属の戦闘不能のコール。

……なるほど、木場が倒したのか……。

俺は頬を緩めながら――

――背後から伸ばされてくる腕を掴んだ。

「……………木場……………気配がダダ漏れだぜ？」

俺が士織だったらしごかれてるぞ?」

「こ、怖いことを言わないで欲しいな……」

木場は苦笑いを浮かべながらそう言う。

俺は掴んでいた手を離し、木場が隠れていた体育倉庫の影に身を潜めた。

「……祐斗先輩現状は?」

「ここを仕切っているのは【騎士】、【戦車】、【僧侶】が1名ずつの計3名だよ」

「そりゃ、嚴重なことだな」

「それはそうだよ。」

何と言っても体育館を文字通り落としたからね……。

こちらからの侵入を警戒しているんだよ」

体育館というルートを潰したからにはもう片方の運動場というルートを警戒するのが道理……それもそうか。

俺は木場と小猫ちゃんとで同行動するかを相談しようと口を開くが、しかし。

「私はライザーさまに仕える【騎士】カーラマイン!

こそそこそと腹の探り合いをするのももう飽きた!

リアス・グレモリーの【騎士】よ、いざ尋常に剣を交えようではないか!!」

女性の声が響きわたる。

ちらりと運動場の方を覗いてみる。

野球部のグラウンド。その中心で甲冑を装備した女性が堂々と立っていた。

……うん。アホの娘なんだろうか?

あんなこと言っ出ていく奴がいるわけ……

「名乗られてしまったら、【騎士】として、剣士として、隠れているわけにもいかないよね」

そう呟き、体育倉庫の影から出ていってしまう木場。

「……グレモリー眷属にもアホがいたぞ……オイ……」

「……仕方ありません私たちも行きましょう」

小猫ちゃんは諦めたような表情で立ち上がると木場の後を追っていく。

俺も溜息を吐きながら立ち上がり歩み出した。

「僕はリアス・グレモリーの眷属、【騎士】木場祐斗」

「……同じく【戦車】塔城小猫です」

「あゝ……【兵士】の兵藤一誠だ」

木場、小猫ちゃん、俺の順番で甲冑姿の女性——カーラマイン——に名乗る。

カーラマインはそれを聞き嬉しそうに口の端を釣り上げた。

「リアス・グレモリーの眷属悪魔にお前たちのような戦士がいた事を嬉しく思うぞ。

堂々と真正面から出てくるなど、正気の沙汰ではないからな！」

……違います。その正気の沙汰じゃないことをしでかしたのは木場だけです。俺と小猫ちゃんを巻き込まないで下さい。

「だが……私はお前たちのような馬鹿が大好きだ!!!さて、やるか!」

剣を鞘から抜き放ち、構えるカーラマイン。木場もそれに応じるように抜刀した。

【騎士】同士の戦い——待ち望んでいたよ。

個人的には尋常じゃない斬り合いを演じたいものなのだけど……まずはすぐに斬られないようにして欲しいな」

生き生きとした笑みを浮かべながら木場は挑発するように言い放った。

「強気な物腰も嫌いではないぞ!!」

さあいくぞー!リアス・グレモリーの【騎士】よ!!!」

カーラマインは踊るように斬撃を繰り返し始める。

中々の速度だが——木場より遅い。

打ち合いを見ているだけならカーラマインが有利のようにも見えるが、しかし、木場の表情は余裕のものだ。

「……様子見でもしてるのかよ」

苦笑いを浮かべながら、俺は腕を組み傍観の体勢を取る。小猫ちゃんも誘おうかとも思ったがあちらはあちらで【戦士】同士話しているようだ。

「……まったく……頭の中まで剣、剣で塗り潰された者同士、泥臭くてたまりませんわ……。」

カーラマインったら、【兵士】<sup>ポーン</sup>を『犠牲』にするときも渋い顔をしていましたし、主である【王】<sup>キング</sup>の戦略がお嫌いなのかしら？

しかも、せつかくカワイイ子を見つけたと思ったら、そちらも剣バカだなんてついていませんわね……。」

何処ぞのお姫様のようなドレスを着込んだ女性。確か士織から聞いたところによるとこの娘、ライザーの【僧侶】であるのと同時に妹だったはずだ。確か名前はレイヴェル・フェニックス。

俺がそんなことを考えているとレイヴェル・フェニックスが俺の方を見つめてくる。

「この方が……。」

ぽけーつとした表情で頬を染めたレイヴェル・フェニックス。

「どうかしたのか？」

俺は首をかしげながらそう言う。

すると、レイヴェル・フェニックスははつとした顔になり手を振って焦ったように口を開いた。

「な、なんでもありませんわ！えええ！

別に格好いい殿方だなあなんて思っていますせんわ!!」

「そりやどうも。」

あんたも可愛いと思うぜ？」

「あ、ありがとうございます————って違いますわ!!わ、私が先ほど言ったことを忘れなさい!!」

「忘れるって何をだ？」

「そ、それはその……。」

「俺のことをいきなり口説いたアレか？」

「言わないで下さいましっ!!」

真っ赤になつた顔を両の手の平で覆いながら恥ずかしそうにそう

いったレイヴェル・フェニックス。

おつちよこちよいなんだろうか？この娘は。

「悪い悪い。からかいすぎたな。」

許してくれよ」

そう言つて、レイヴェル・フェニックスの頭を撫でる。

「あ、あなた何をして……はふうく……♪」

気持ちよさそうに受け入れるレイヴェル・フェニックスに俺からしたことなくながら苦笑いを浮かべてしまう。

今は戦闘中だということが分かっていないのだろうか？

と、俺とレイヴェル・フェニックスが戯れていると、木場とカーラマインの戦いの流れが変わったのを感じた。

「残念だが、私に貴様の【神セイクリッド・器ギア】は通用しない」

カーラマインの剣は炎を纏い、煌々と燃えている。なるほど……木場の闇を纏わせた刀は折られてしまったのか……。

「では、僕もこう返そうかな。」

——様子見は此処までだ」

「何？戯言を。」

グレモリーの【騎士】よ、見苦しさは剣士としての本質を曇らせて

——凍えよ」

低く唸るような木場の声の後、刀身を無くした刀に何かが集まってい  
いく。

辺りの気温が少し下がり、木場の周りには冷気が漂い始めた。

そして、木場の刀は凍っていき、氷が積み重なっていく。氷は刀身を形作り……。

——パリン……。

氷の割れる音とともに、木場の刀は氷の刃を作り出した。

【炎凍刀】フレイム・デライト ——この刀の前では、いかなる炎も消え失せる

……」

「ば、馬鹿な!？」

【神器】を二つも有するといふのか!」

木場に向かつて炎の剣を横薙ぎに放つカーラマイン。しかし、その表情には余裕などなく、ただあるのは焦りのみ。

「……言つたよね?この刀の前ではいかなる炎も消え失せる、つて」  
木場の眩きの後、カーラマインの剣は凍りついていき、儂い音を立てながら、崩れて消えてしまった。

しかし、武器を失つたにも関わらずカーラマインは攻撃の手を休めない。

碎けてしまった剣を早々に捨てると、腰に携えてあつた短剣を抜き、それを天にかざして叫んだ。

「我ら誇り高きフェニックス眷属は炎と風命を司る!!受けよ!炎の旋風をツ!!」

カーラマインと木場を中心にして、グラウンドに炎の渦が巻き起さる。熱風を撒き散らしながら巨大化する炎の渦に気持ちよさそうに目を細めていたレイヴェル・フェニックスもふと、我に帰り眉を顰めた。

……頬が赤いのは……熱いからではないだろう……。

「まったくカーラマインったら……。」

周りのことも考えて欲しいですわ……。」

「まあまあ、戦つてない俺たちが愚痴つても仕方ないだろ?」

「また撫でるなんてあなたは何を……はふう〜♪」

……ちよろいんだけどこの娘……。

頭を撫でるだけで無力化できるって何なのさ……。

とまあ、そんなことを考えながらだが、再び木場たちの方へと視線を戻した。

やはり氷の刀は熱に弱いらしく、その刀身は溶けだしていた。

「なるほど、熱波で僕らを蒸し焼きにするつもりか……。だけど、甘いね」

木場は刀身が溶けてしまった刀を前に突き出すと、力強い言葉を吐き出す。

「——止まれ」

その一言で、場の状態が一変した。

旋風は木場の刀の方へと流れて行き、遂には熱風は止み、グラウンドがしんと静まり返ってしまう。

「リップレッシュ・カム風 刃 刀」、一度の戦闘で2本以上も魔剣を出したのは久しぶりだよ」

そう言った木場の刀は特殊な形をしていた。剣先が円状になっており、円の中心には不可解な謎の渦が生まれている。

……なるほど……アレで風を吸い込ませたのか……。

「……複数の【神器】。神器所有者から獲物を奪い、自分のモノにして  
いる後天的な神器所有者か……?」

カーラマインの質問に木場は首を横に振る。

「僕は複数の【神器】を有してもいないし、後天的な神器所有者でもない。  
い。」

——創ったのさ」

「創る……だと……?」

「そう。僕の持っている【セイクリッド・ギア神器】は【ソード・パース魔剣創造】。

僕は任意的に魔剣を創り出せるんだよ」

木場が指を鳴らすと、木場を中心にグラウンドから剣、刀が勢い良く飛び出した。

形状も、刀身も、大きさも全てが違うあれが全て魔剣……。なんて  
応用が利く【神器】なのだろうか。

「そうか……魔剣使い……数奇なものだ。」

私は特殊な剣を使う剣士と戦い合う運命なのかもしれないな」

「へえ、僕以外に魔剣使いでも居たのかな?」

「いや、魔剣ではない。——聖剣だ」

「——っ!!!」

その一言を聞いた瞬間、木場の雰囲気ガラリと変わったのを此処  
に居る全員が認識した。

……士織が心配して気にかけてたのはこれか……。

俺はレイヴエル・フェニックスを撫でるのを止め、腕を組んだ。

「……あっ……」



……レイヴェルさんや……残念そうな声を上げないで欲しい……。俺は二つの意味で溜息を吐いた。

「その聖剣使いについて聞かせてもらおうか……?」  
聖剣への恨みを持つてみたいだな……。

俺は木場が行き過ぎた真似をしないように目を光らせる。

「ほう、あの剣士と貴様は因縁があるのか？」

だが、剣士同士、言葉で応じるのも無粋。剣にて応えよう!!」  
「……そうかい……。

すまないけど——手加減は出来そうにない」  
目を細めた木場は刀を創り直し、構えた。

なるほど、先程までの様子見は本当に可愛いものだと感じさせるほどの覇気を感じる。

俺はそんな木場から視線を外し、背後へと移す。そこにいたのは四人の女性。

「……眷属全員集合か……」

【兵士】2名、【僧侶】1名、【騎士】1名……木場や、小猫ちゃんの方に回したら少し苦しそうだ……。

俺は今戦っている二人をちらりと見ながらそんな思考をする。

「ねーねーその【兵士】くん」

「ん?なんだ?」

「ライザーさまがね、あなたの所のお姫様と一騎討ちするんですって。ほら、あそこ」

女の子の指さす方へと視線を移すと、新校舎の屋上で炎の翼を羽ばたかせる人影と黒い翼を羽ばたかせる人影が視界に入った。

……【王】<sup>キング</sup>が一騎討ちして……戦略的には駄目だろう……。

苦笑いしか出てこなかった。

「お兄さままつたら、リアスさまが意外に善戦するものだから高揚したのかしらね。

普通に戦えば私たちの勝利ですもの、情けを与えたのでしよう。

このままでは、対峙する前にやられてしまいそうですし?」

レイヴェル・フェニックスがほほほ、と口に手を当てて笑っている。



Boost !!』

「一撃で決めるッ!!」

『Explosion!!』

「これが全力の……【拡散する龍の息吹】デイスパーション・ブレス ツッ!!」

炸裂、そして、打ち上がる魔力球。降り注ぐ魔力の雨は先程体育館で使ったものとはレベルが違う。

先程の【拡散する龍の息吹】は相手の足止めが目的だったが……今回のものは敵を仕留めるために放ったのだ。

魔力の雨は一撃一撃が地を穿ち、そして——敵を確実に仕留める。

リイ、ニイ、美南風、シーリス、レイヴェルの5人全てを【拡散する龍の息吹】が捉え、悲鳴を上げる間もなく戦闘不能に追い込んだ。

『ライザー・フェニックスさまの【兵士】ボーン 2名、【僧侶】ビショップ 1名、【騎士】ナイト 1名、戦闘不能』

少しの間を空け、アナウンスが流れる。

……1人足りない……？

俺は先程まで5人の居た方へと目を凝らした。

「き、規格外……ですわ……っ!!」

「そうか、アンタもフェニックス家の娘だもんな……不死の属性持ちだよな」

「当然……ですわ!!」

気丈にそう言うが見たところ肩で息をしてる。俺の一撃は不死のフェニックスへのダメージとしてはかなり有効なようだ。

「……くう……っ」

ふらりと体勢が崩れたかと思えば、レイヴェル・フェニックスは前のめりに倒れ始める。俺は地を蹴り、彼女に接近すると優しく抱きとめた。

そして、彼女の頭を撫でながら口を開いた。

「……お疲れ様」

その言葉を聞いたのだろう彼女は少しだけ微笑むと光の粒子とな

り消えていった。

『ライザー・フェニックスさまの【僧侶】ビショップ 1名、戦闘不能』

そのアナウンスを聞いた俺は少しだけ振り向く。そして、出来るだけ大きな声で、

「木場！小猫ちゃん！ちよつと行つてくるわ！」

そう叫んだ。

二人はまだ戦っている最中だったが一瞬こちらへと視線を向けてくれた。

……イツセー先輩……頼みます。

——イツセー君、頼んだよ。

二人が、そう、言っているようだった。

俺はニヤつく顔を何とか引き締めながら新校舎の屋上へと飛び立つ。

ここからでも見える——紅い魔力と炎の魔力のぶつかり合い。

ライザーの方は無傷なのに対して、リアス部長の方は服が所々破け、心なしか息も上がっているように見える。

後少し、後少しでリアス部長のところに辿り着く。

Side Out

~~~~~

Side 三人称

「……もう終わりにしようリアス。

キミじゃ俺には勝てない」

ライザーはリアスとの間合いを取りながらそう言った。

ボロボロと言っても過言ではないリアスに対して思うところがあつたのだろう。

「いいえ、ライザー。私は諦めないわ。

せつかく皆が頑張つてあなたを追い詰めているのよ？」

【王】<sup>キング</sup> である私が諦められるわけが無いわ!!」

意志の固い、芯の通った光を宿したリアスの瞳。ライザーはそれを見てこれ以上言っても意味が無いのがわかったのか、口を開くのを止め、片手を上げた。

「……なら、この一撃で終わろう。」

倒れていった眷属たちの思いも背負った【王】の攻撃だ」

ライザーの上げられた片手の上に炎が渦巻き球体を作り出す。

ジリジリと皮膚を焼くような熱さにリアスも顔を歪めた。

「くっ……!!」

何とかしてそれに対応しようとするリアスだったが――魔  
力が足りない。

ライザーとの打ち合いで使い切ってしまったようだ。

「チェックメイトだ、リアス」

何もできないリアスは悔しそうにその言葉を聞く。そして、ライ  
ザーはそんなリアスに向けて、炎の球体を、放った。

――迫り来る絶望の炎球。

――対処不能の現状。

――奇跡を願うしかできない状態。

「――そのチェックメイト待った」

そんな、詰んだ状況で現れたのは、赤い鎧を身に纏った、一誠だった。

一誠は右腕を振りかぶり――

『Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost』

『Explosion!!』

――炎球を殴りつけた。

一誠の拳を中心に弾ける炎球。

リアスとライザーは目の前で行われた現象を目を見開いて見つめた。

一誠はそんなことを気にしないふうにはリアスの方へと歩み寄り、兜部分のマスクを収納させて微笑みかける。

リアスは一瞬戸惑ったような表情を浮かべたがすぐに嬉しそうな笑みへと変化した。

「……イツセー」

その眩きに一誠はこくりと頷き――

——リアスの両の頬を両手で摘んだ。

「い、いひやい！いひやいわよう！」

「アホなんですか部長？」

あなたが、【王】<sup>キング</sup>が倒されたら負けなんですよ？分かってますかそんなところ」

「わ、わかつひえるわよ！」

「だったらなんで一騎討ちなんかしてるんですか？やつぱりアホでしょ？馬鹿なんでしょ？」

一誠は微笑みを浮かべたままリアスの方を抓る。最早涙目のリアスの姿に置いてけぼりになっているライザーは絶句していた。

「しかもボロボロじゃないですか！」

魔力も空になってるし……本当にチェックメイト寸前ですよ!」

「わ、わかつひやから……もうはなひてえ……」

こんなに弱々しい表情の彼女が凜とした表情を浮かべるだなんて誰も想像できないだろう。そう言えるほどにの表情をリアスは浮かべていた。

「お、おい？」

そろそろ離してやったらどうだ？

敵側の俺が言うのもなんだがそれは酷くないか……？」

ライザーも流石に我に帰ったのか引き攣った表情でそう言った。

一誠はその一言を聞くと一瞬だけ考えるとリアスの頬を離れた。

「い、痛かったわ……」

そう言いながらリアスは頬を撫でる。

「だ、大丈夫か？リアス」

ライザーはそんなリアスを見ながら心配そうに口を開く。

一誠はそれを見ながら一言。

「……しまったグダグダだ」

登場はカッコイイものだった筈なのに、完璧に不意にしまった一誠の行動だった。



レーティングゲーム【終盤】

Side 三人称

「ちよつとしたアクシデントはあったが……お前を倒しに来たぜ？」

一誠は兜部分のマスクを収納させたまま、ライザーの方を向くと不敵な笑みを見せる。

「中々変わった登場だったな？」

一誠からの言葉に、苦笑いを浮かべながらライザーは腕を組む。

どうやらライザーは先程の一誠の行動を思い出しているようだ。

「ウチの【王】<sup>キング</sup>の頭がちつとばかしおかしかったからな」

「そう言っただけやな。」

リアスは中々やる女だぞ？」

「へえ？素直な物腰だな？」

「……お前、いや、お前たちは気付いているんだろう？」

ライザーは既に下へと降りて心配そうな表情を浮かべるリアスの方を見つめながらそう言った。その表情は何処か熱っぽい。

「アンタの態度見てりや大体分かるさ」

「……リアスたちには伝わらないんだがな……」

二人の思わせぶりな会話。

その会話はまだ、誰にも聞こえてはいない。

一誠は真面目な表情を浮かべると咳払いをし、口を開いた。

「種蒔き鳥……いや、ライザー」

「……なんだ」

「一丁殺るか？」

短な言葉をやりとると、ライザーは好戦的な笑みを浮かべる。

「はっ……」

ダラダラと話してるよりかはマシだな。

それに……」

その背後に炎の翼を大きく広げたライザー。そして、大きく息を吸い込むと割れんばかりの声で叫んだ。

「このゲーム……敗けるわけにはいかないからな!!!」

その言葉と共に、二人は足を動かした。

ライザーは後方へと飛びながら炎弾をばら蒔き、一誠はそこに迷うことなく飛び込む。

『Boost Boost Boost Boost Boost Boost  
!!』

「ちっ……い！地味に火力高いなっ！」

極力躲しながら進む一誠であったがしかし、全てを躲せているわけではない。

一誠の鎧に当たったライザーの炎弾は表面を焦がしていた。

『Explosion!!』

【龍の咆哮】ドラゴン・ショット ツツ!!!」

一誠が握り拳程の魔力球を殴りつけたかと思うと、それは炸裂せず、ただ巨大な魔力の柱となり未だにばら蒔かれる炎弾と共にライザーを飲み込まんとして襲いかかった。

「ぐおっ……!!?」

なんだその馬鹿げた威力は……!!?」

ライザーは苦悶の声、そして驚愕の表情を浮かべる。なんとか直撃は避けたものの、その左腕を魔力の柱に飲み込まれてしまったのだ。

ライザーの右腕は綺麗に削り取られていたが、流石はフェニックス。数秒と掛らずして修復してしまう。

「流石は『赤龍帝』……その能力は厄介極まりない……」

「アンタの不死性もチート級だろうが」

「違いない……!!!」

言葉とともに、ライザーは一誠に急接近すると今度は至近距離から炎弾をぶつけた。

一誠は短く呻いたが、ぶつけるために伸ばされたライザーの腕を掴む。

「近づいて来たのは愚策だぜ……!!ライザー!!!」

『Boost Boost Boost Boost Boost Boost  
Boost!!』

『Explosion!!』

「ぶっ飛びな……っ!!」【龍の剛腕】リゆうのこうわん「!!!」

—— 一撃炸裂。

一誠はライザーの腹部を抉るように殴りつけた。ライザーは身体をくの字に折り曲げ吹き飛び、校舎の壁へと激突することでようやく止まる。

「……手応えが……薄い……?」

一誠は壁に激突したライザーの方を見ながら拳を握ったり開いたりを繰り返す。

壁を崩しながら立ち上がるライザーは口端から垂れる血を拭いながら笑った。

—— 【陽炎】。ミラーージュ

お前が俺を殴る瞬間俺の姿を歪ませることで直撃を避けさせてもらった……」

「その割にはダメージ深いみたいだな?」

「……正直ぶっ倒れそうだ。」

全く……これだからパワー馬鹿は……」

自傷気味に笑うライザーであったがその瞳にはまだ光が灯っている。強い、意思の現れだろう。

一誠は兜部分のマスクを収納させて溜息を吐いた。

「なら、リタイアしたらどうだ?」

このゲームに敗けてもリアス部長っていうハーレム要員が1人居なくなるだけだろ?」

「……お前性格が悪いと言われないか?」

「さあ?何のことだろうな?」

半眼で睨むライザーに何のことだか分からない、という表情で肩を上げる一誠。

ライザーはしばらく考えるように腕を組み、チラリとリアスの方へと視線を移す。

「……ハア……逃げるのは俺らしくないな」

ライザーはそう呟くとしっかりと2本の足で立ち、決意の眼差しを向ける。

「俺はな、リアスが大好きなんだよツツ!!!!!!」

その声は空気を震わせ大きく木霊した。

勿論、リアス本人にも聞こえたはずだ。

ライザーは拳を握り、身体を震わせる。

「俺が女癖が悪い事なんざ百も承知だ！」

こんなだからリアスに嫌われ、拒絶される……。

周りからリアスをハーレムの一人としてしか見ていないという評価を貰うのも仕方がねえことだろうよ……」

ライザーは今まで告げなかったであろう本音を吐露し始め、それを静かに聞く一誠。

「だがな！俺はリアスと出会って変わった!!」

初めて会ったとき、これが一目惚れと言う奴か、とそう思った!!」

ライザーはリアスの方を横目で見ると心底幸せそうな表情を浮かべる。

「ハーレムなんていうくだらないものは必要ない……。俺はただ、リアス・グレモリーという一人の女が欲しい!!」

その為なら俺はどんな代償でも、対価でも払うさ!!!」

ライザーはそう叫ぶと、屋上の端に立ち、リアスの方へと指をさす。

「俺はリアス・グレモリーを愛しているツツ!!!!!!」

木霊するその言葉とライザーの荒い息。新校舎の屋上にはその音しか無かった。

しばしの間を開けて、息を整えたライザーは振り返り炎の翼を勢い

良く噴出させる。

「惚れた女の手前、このゲーム……敗けるわけには行かねえんだよオオオオツツ!!!」

感情に呼応する如く煌々と燃え上がるライザーの炎。

これこそフェニックスの【生命の炎】だろう。

——そして、ライザーの宣言の後、森の方で激しい閃光と共に爆裂音が鳴り響いた。

『ライザー・フェニックスさまの【女王】<sup>クイーン</sup> 1名、リアス・グレモリーさまの『女王』<sup>クイーン</sup> 1名、戦闘不能』

そのアナウンスは予想外のものだった。

Side Out

~~~~~

Side 一誠

「……ユーベルーナ」

「朱乃先輩……」

まさか朱乃先輩が負けるとは……。

俺は予想外の出来事に動揺を隠しきれなかった。

ライザーも【女王】の名前を呼び俯く。

「……相討ちに持って行ったんだな……」

慈愛に満ちたライザーの言葉。

視線は先程爆発の起こった森の方を向いている。

そして、ライザーは俺の方を睨むと雄叫びをあげた。

……気合の入り方が違うな……。

どうやら【女王】の戦闘不能が起爆剤になりライザーを奮い起たせたようだ。

「さあ……!!」

決着を付けるぞ兵藤一誠ツツ!!!」

ライザーはそう言うのと初めとは比べ物にならない量の炎弾を放った。

俺は何とか躲そうと身を捻るが、如何せん量が多過ぎた。かなりの量が俺の身体に直撃してしまう。

「ぐうう……っ!?!」

膝をつきながら着弾したところを押さええる。

……と、着弾部分の触り心地に違和感を感じた。視線をずらしてみると、何と、俺の鎧である【赤龍帝の鎧】ブリステッド・ギア・スケイルメイルが破壊されていたのだ。

『……相棒』

(何だ……?)

今どうするか悩んでる所なんだけど?)

『今の奴にならアレを見せてもいいのではないか?』

ドライグの言葉に俺は目を見開く。

(使えねえんじゃないのかよ?)

『なに、たった今調整が終わった。』

それで……どうする?』

(使えるっていうなら話は早い。)

……俺も今のライザーになら使ってもいいんじゃないかって思ってたところだ!)

ライザーの気合い。そして抱いている想いと覚悟。それは敬意に価する程だろう。

俺は立ち上がると深呼吸をし、口を開いた。

「——ライザー」

「なんだ兵藤一誠!

まさか降参などと吐かすわけじゃ無いだろうな!」

「そんなわけねえだろ」

「なら、何の用だ……?」

ライザーは俺の言葉に訝しげな表情を見せる。

俺は1度【禁手】バランス・ブレイカーを解除するとライザーをしっかりと視界に入れる。

「今から俺の本気を見せてやる」

「本気……だと……？」

眉を顰めるライザー。

今まで手を抜いていたのだと思われていそうだ……。

「訳あつて今まで使えなかつたが……俺の相棒が使えるようにしてくれたんだな。」

取り敢えず先に言わせてもらう。

——簡単に倒れないでくれよ？」

その言葉の後、静かに俺は眩く。

「……  
【バランス・ブレイク禁手化】」

『Welsh Dragon Balance Breakers  
econd edition  
!!!!!!』

赤いオーラ、そして【龍の力】が荒々しく俺の周りを包み込む。  
まるで意思を持ったかのように俺の体へとまとわり付いて、形作つて行く。

俺は装着が終わつたのだと感覚的に感じ取り、周りの俺を包んでいくモノを散らせるため腕で払った。

「……なんだ……それは……」

ライザーからの驚愕の表情と視線に晒され、俺は姿を表した。

ブリステッド・ギア・ステイルメイル  
【赤龍帝の鎧】よりもさらに赤さを増した美しき深紅の  
全身鎧。元からの鋭角なフォルムがさらに増している。

——まさに【龍】の体躯。

俺は身体から力を抜きただ仁王立ちする。

ブリステッド・ギア・プロモーションメイル  
【赫龍帝の四皇鎧】……………

「これが俺のもうひとつの【禁手】だ」

「もうひとつの……………【禁手】!?!」

「奥の手とまではいかないがこれは切り札の一つ……………初めは使う気な  
んてなかったんだけど……………ライザーの姿勢に敬意を評して使わせて  
もらったぜ?」

俺がそう言うのとライザーはふっ、と笑い構えた。

「切り札? いいじゃないか!」

それを破つてこそ俺は本当の勝利を手に入れることができる!!!」

俺とライザーは互いに睨み合い、笑みを浮かべると、

「行くぞッ! ライザーアアアアア!!!」

「行くぞッ! イッサーエエエエエ!!!」

互いに叫び合いながら戦闘を再開した。



レーティングゲーム【決着】

Side 一誠

真正面から激突した俺とライザー。

片や炎を纏った右拳。

片や籠手に包まれた右拳。

互いにぶつかり合い、そして仰け反る。

俺は鎧を纏っているために無傷。ライザーも再生することで外傷は見当たらない。

「燃やせ……い！ 【炎ノ海】 ツ!!」

言って、ライザーの放った炎球は俺の足元へと着弾し、一瞬にして燃え広がる。

鎧を纏っているのにも関わらず、ジリジリと焦がすような火力は侮れない証だろう。

俺は抜け出すために龍の翼を広げ飛び上がる。

『相棒!!』

先に行っておくが今回【換装】は2度しか使えないと考えておけ！  
まだ調整が完璧ではなかったようだ!』

(了解っ!!)

ドライグの言葉に短く返事を返した俺は急降下を始めた。

目標はライザー! ダイブアタックを決める!!

「焦がせ!! 【炎ノ柱】 ツ!!」

ライザーが腕を振り上げた瞬間、まるでライザーを囲むかのように巨大な炎の柱が噴出された。

俺はダイブアタックを急遽停止し、その炎の柱を回避する。

「討てッ! 【炎ノ槍】 ツ!!」

ほんの一瞬、ライザーに背を向けた時、その声が響き渡る。そして、その声から数秒も経たぬうちに、背後から無数の爆撃を受けたかのような衝撃が襲って来た。

「ぐう……っ!」

空中を錐揉み回転しながら吹き飛ぶも、何とか体制を立て直す。

『相棒……』

そんな時、ドライグから低い声を掛けられた。  
……しまった……ドライグを怒らせたか……。

『何時まで遊んでいるつもりだ……？』

不満げなドライグの声は嫌に響く。

俺は空中で静止しながら頭を掻き苦笑いを浮かべる。

「悪い悪い……ちよつとライザーの技が見たくてな……」

『ふん……早く決めてしまえ。』

お前はあの男に敬意を評してこの鎧を纏ったのだろうか？  
ならば遊んでいるのは些か礼儀がなっていないぞ？』

その正論にグウの音も出ない。

俺は悪いなど短く呟くと深呼吸をし、言葉を紡ぐ。

——勝利への一言を。

「——換装……」  
ウエルシュ・ドラグーン・ピシヨップ  
「赫 龍 魔 帝」

『Change!! Dragoon Bishopp  
!!!!!』

その音声と共に、俺の鎧は変化を始める。

左右の腰辺りに二丁のレールガンが装備され、両肩に出現するビーム砲。両腕には二丁のビームライフルを持ち、極めつけは背後に浮遊する四対八機のドラグーン。

形は剣の刀身部分に酷似している。

「行くぞ……相棒」

『直ぐに終わらせるぞ……相棒』

眩きざまに移動を始める。

視界に入るライザーからは驚愕と、それ以上の期待の視線を感じた。

薄く笑っているライザーに俺は遠慮などいらないことを悟る。

「本当に面白いぞイッサー!!!」

お前はまだ強くなるのか!!!」

そう言いながら炎の翼を羽ばたかせるライザー。そして、まるで弾幕の如く炎弾をばら撒く。

「ドラグーン起動ッ!!!」

『Starting Dragoon!!!』

背後に浮遊していたドラグーンが赤い粒子を撒きながら動き始める。

「向かい撃て……ドラグーン!!!」

『Boost Boost Boost Boost Boost』

!!』

『Explosion!!』

弾幕となった炎弾に向かつてドラグーンは赤いレーザーを放つ。

元々魔力の少ない俺が普通にドラグーンを使えば直ぐに空になつてしまう。そのため、俺は別の力に目をつけた。

それは——【龍の力】。

幸いにも俺の中には二天龍の片割れであるドライグがいるため殆

ど無尽蔵に引き出すことが出る。

つまり、今ドラグーンから放たれているのは【龍の力】。

威力は……言うまでもないだろう。

「焼き斬れッ！・【炎ノ剣】!!!」

爆煙に紛れて近付いて来ていたライザーがその手に炎を剣状にしたモノを持ち横薙ぎに振るってくる。

近接武器を持たない今の俺はただそれを避けるしかない。半身になりライザーからの攻撃を避けた俺は零距离でビームライフルを放つ。

「ガグウ……ッ!!?」

ライザーは苦悶の声を漏らすと、腹を貫かれた姿で後方へと吹き飛ばされる。しかし、今回は壁にぶつかることはなく、炎を吹き出すことで減速し、着弾した。

「くっ……いー【陽炎】ミラージュを使うよりも早いか……!!」

貫かれた腹を再生させるライザーだったが見るからに再生速度が遅くなっている。

俺はそんなライザーに向かって口を開く。

「ライザー……次で終わらせようぜ？」

!!  
俺は最大の攻撃を放つから……お前も最大の攻撃をぶつけて来い!!」

ライザーは一瞬目を見開くとニヤリと笑い俺を見上げてきた。

かなり好戦的な瞳だ……!!

「良いだろう……!!」

次で決着といこうじゃないか!!」

そう叫んだライザーは両腕を頭上に掲げると巨大な炎の球を作り始めた。

ライザーの行動に頬が緩むのが分かる。

俺は両足を肩幅に開くと最大火力をもつ攻撃を放つための準備へと移った。

「……全武装開放」

『Armament All Clear!!!』

腰辺りにある二丁のレールガンは可動し、前方へと向けられ、固定。

肩のビーム砲はスライドすることで開き、準備完了。

両腕のビームライフルは腕を締めることで固定し、ブレを無くす。

ドラグーンは俺の背後を円状に浮遊することで発射準備を整える。

『相棒……準備が完了した。』

後はエネルギーを装填するだけだ』

ドライグの言葉を受けた俺はライザーの方へと視線を移動させる。

「ぐっ……！」

やっと……やっと完成したか……!!』

炎球は最早——小さな太陽。

ライザーは顔を歪めながらもその炎球を支えていた。

「遅かったな？ライザー。」

「やっと完成したか??」

「はっ……！抜かせ……。」

貴様もつい先程準備が終わった癖によく言う……!!」

ライザーはそう言いながら笑う。

その姿は何処かボロボロで……しかし、自信に満ち溢れたものだ。

「なら……やるか?」

「ああ……良いだろう」

その短い呟きの後俺とライザーは動いた。

——最後の一撃を放つため。

「――尽きることなきこの炎は我らが魂ツツ!!」

滅せよ炎……【滅スル炎ノ星】ツツ!!!」

その叫びと共にライザーは頭上の炎球……いや炎星を放った。それと同時に、放ったライザーは膝をつき肩で息をする。

「過去……最高の……一撃……だ……っ!!」

見るからに疲労困憊のライザーはそう眩き、事の終りを見守る。

俺はそのライザーの姿に笑みを浮かべてしまう。

「俺も……最高の一撃で迎え撃とう!!」

その声に呼応してか、鎧に付いた宝玉が一層煌めく。

『BBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBust  
!!!!!!』

音声の間に合わないほどの瞬間倍加。

身体からミシミシ……という限界を告げる悲鳴が聞こえてくる。

『Explosion!!!』

力の開放に皮膚が裂けた音が耳へ届く。

しかし、不思議と痛みはない。

俺は開放した力を全て武装へと送る。

「これが……っ!」

最高の一撃だ、ライザーアアアアアアア!!!」

『FULL??BURST!!!』

そのドライグの声と俺の声を受けて、全ての武装から極太の光線が放たれる。

ライザーの一撃は一瞬拮抗したかとも思われたが直ぐに飲み込まれてしまう。

……これが力の暴力。

俺は自らの一撃にそんな感想を持った。

(……………どうだライザー……………これが俺の……………最高の一撃だ……………)

身体から力の抜けた俺は頭から地へと落ちてゆく。

偶然にも一瞬ライザーの姿が視界に入る。

腕の前に……………いや、俺の方へと突き出しクールに笑っていた。

その姿からは——

——お前の勝ちだ。

そんな意志を感じた。

『ライザー・フェニックスさま……戦闘不能。ゲーム終了となります。  
よって勝者はリアス・グレモリーさまとなります』



くエピソードですく

Side サージェクス・ルシファー

『ライザー・フェニックスさま……戦闘不能。ゲーム終了となります。よって勝者はリアス・グレモリーさまとなります』

私はグレイフィアのアナウンズが聞こえているのにも関わらず声を出すことが出来なかった。

何故ならば、壊れることなどまずないと言われていているフィールドに亀裂を入れる一撃を放った人物をこの目で見てしまったから。

「……これが……」

やっと出てきた言葉はそんな一言。

——これが今代の【赤龍帝】か……。

私は未だに自分の目を信じる事が出来なかった。

そんな時、私の隣に座る彼女……いや彼はクスリと笑った。

「……良い一撃じゃねえか」

神をも滅ぼしかねない一撃を見て『良い一撃』……??

そんな馬鹿な……彼はこれ以上の力を持つというのか……?

冷や汗が垂れるのを感じる。

「さてと……」

彼——兵藤士織——は徐ろに立ち上がると私の方を向いて口を開いた。

「サーゼクス、ちよつとライザーと一誠の所に行ってくるわ……」

流星にライザーの方は治療しねえとやべえだろうしな」

そう言われて私は改めて事実を認識し始める。

神をも滅ぼしかねない一撃をライザー君は生身で受けたのだ、いくらフェニックスであったとしても死にかねない!!

「安心しろよサーゼクス。」

ライザーのことなら任せとけ。

完璧に治しておいてやる」

私のそんな焦りを感じたのか、士織君は苦笑いを浮かべながらさも簡単なことだと言うふうにならう。そうだった。

「ほ、本当かね!？」

私の息子を救ってくれるのかね!!？」

「フェニックス卿……」

慌てた様子のフェニックス卿は士織君に詰め寄って心配そうな声で話す。

「今回は俺の弟のせいでピンチだし……。任せなよ」

士織君はそう言うとその場から消え去った。

……なんて無駄の無い転移魔法……。展開速度が段違いだ……。彼は魔術師タイプなのだろうか……？

いや、なんにせよ、少なくとも彼は……

「私よりも強いのだろうか……」

その眩きは無意識のうちに漏らしていた。

S i d e O u t

~~~~~

どうも、兵藤士織だ。

レーティングゲーム関係には無干渉を貫こうと思っていたのだが、流石に死人を出すわけにはいかないとため急遽動き出すことにした。

俺はライザーの居場所を探知するとすぐさま転移魔法を使い移動した。

「ライザーさまっ!!」

死なないで下さいませっ!!!」

「死なないでえ〜!!」

「ライザーさまあ〜っ!!」

「シールスっ!!」【フェニックスの涙】を用意できるだけ持つてきなさいっ!!」

「ぎよ、御意ッ!!」

「にやあ〜っ!!」

「にやにやあ〜っ!!」

自らの身体がボロボロ、瀕死なものにも関わらず、自分の事をそつちのけでライザーを助けようとする眷属の姿が視界に入る。

「……貴様何のようだ」

「ライザーさまに何かするようでしたら容赦致しません」

右からは剣が、左からは魔法陣を向けられ敵意と警戒心剥き出しの声を掛けられる。

……確かこの二人は剣を持っている方が【騎士<sup>ナイト</sup>】のイザベラ、魔法陣を展開している方が【僧侶<sup>ビショップ</sup>】の美南風だったはずだ。

俺は肩を竦めながら口を開く。

「ライザーを治療しに来た。」

流星に死なれると困るからな」

その言葉を吐くと、ライザーのそばで魔法陣を展開していた女性——ユーベルーナ——は俺の方へと駆け寄り涙をこぼしながら口を開く。

「ライザーさまを助けられるのですか……っ?!」

「当たり前だろ。」

出来ないなら来ねえよ」

素っ気なくそう言うと、ユーベルーナは俺の服を掴みながら何かに絶るかのごと言葉を漏らした。

「……ライザーさまを……っ……助けて……ください……っ!!!」

その言葉の後、その場にいたライザーの眷属たちは深く頭を下げる。

……いやあ〜……眷属に愛されてるねえ〜。

俺は無言でライザーの側へと歩み寄り状態を確認する。

フエニックスであるために再生するはずの傷が開いたままになり最早血だるま。辛うじて息をしているものこのままではいつ死んでも可笑しくない。

普通ならこの傷を治すのは不可能だ……。

「——まあ、俺は『普通』じゃねえから関係ねえけど」

言って、ライザーの方へ手を向ける。

正直【時間を戻す】方が楽なんだが……まだバレたくねえしな……。

ライザーの身体を全て覆うほどの多重魔方陣同時展開を行う。

全ての魔法陣から淡い緑の光が発せられた。

【多重回復魔法陣】

ライザーを照らす淡い緑の光は見る見るうちに傷を塞いでいく。

その傷を治していくスピードに周りの眷属たちは息を呑んで見守っていた。

「うし……傷も塞がったし内傷も治した……。

後は意識が戻るのを待つときな」

ライザーの治療を終えた俺はそれだけ告げると部屋から出ていくためにドアへ手を掛ける。

『ありがとうございましたっ!!』

背後から聞こえてくるライザー眷属たちのお礼の言葉に後ろで手を振るとそのまま出ていく。

廊下へと出た俺は背伸びをすると再び転移魔法を使用した。

さて……一誠の様子でも見に行くかな。

~~~~~

Side ライザー

——— 此処は何処だ……？

前を見ても後ろを見ても右を見ても左を見ても上を見ても下を見ても何処を見ても闇が広がっている。

——— 俺は一体……。

頭を悩ませ、そしてやつのことで思い出す。

——— そうだ俺はイツセーの一撃を受けたんだ……。

あのとてつもない威力……。

身体が、頭が、しっかりと憶えている。

再生する力も残ってない身体で受けたあの一撃……。

……死にしまったか……。

リタイアする手もあったが、何故かその手を取る気にはなれなかった。

あの一撃を……何故か真正面から受けてみたかったのだ。

あく……未練タラタラだな……。

死んでしまったと、そう思うと何故か冷静になった。

もつと慌ててしまうものかと思ったがどうやらそうでもないらしい。

『ライザー……』

ふと、俺の名を呼ぶ声が聞こえた気がした。

リアスの声を幻聴で聞くとか……俺どんだけだよ……。

『起きて……ライザー……』

今度はやけにはつきりと、リアスの声が聞こえてくる。

そして、右手が暖かい光で包まれた。

『ライザー……』

今度は悲しそうなリアスの声。

俺は暖かい光で包まれた右手を少しだけ握ってみる。すると、柔らかかな……そんな感覚を覚えた。

『……ライザー？』

はつきりと、此処には居ないのに耳元で俺の名を呼ぶリアスの声が聞こえる。

右手を包む暖かい光は大きく広がり辺りを照らす。

俺の意識は何処かへと引っ張られていき――

「……リアス……??」

――口が開き声が漏れ出た。

目を開けば心配そうな表情を浮かべるリアスの顔が視界を埋めて  
いる。

「ら、ライザー！」

意識を取り戻したのね！」

「……なんだ、死んだわけじゃ、無かったか……」

どうやら俺は意識を失った状態で夢のようなものを見ていたらしい。

リアスは俺の右手を両の手で握っていた。

「大丈夫？ライザー」

「……思ったよりか、楽だ」

そう言うのと体を起こしてみる。

包帯が巻かれていたが傷が開くといった感覚は全くなかった。

「さっきまでは眷属のみんながあなたを見守っていたのだけれど  
……」

「そうなのか？」

「ええ。」

無理を言っただけにしてもらったの」

リアスはそう言うときまずそうに笑う。

なるほど……先程までは皆がいたのか……通りで包帯にまぎれて猫のシールが貼ってあったり何故かチェンソーが置いてあったりしているのか……。

俺はついつい頬が緩むのを感じた。

「皆いい子たちね」

「……俺の自慢の眷属だ」

そう言っただけ、俺とリアスは口を閉ざしてしまい、広がる気まずい静寂。

「……ねえ、ライザー」

「な、なんだ？」

「私、あなたのことを誤解していたわ……」

「……仕方ないさ……」

俺は誤解されても仕方がない事をしてきたからな……」

思い返せば何故あんな馬鹿なことをしてきたのだろうと改めて思う。う。

そんな馬鹿なことをやめることが出来たのもリアスに会えたおかげだ。

「いいえ……私が知ろうとしなかったせいよ……本当にごめんなさい……」

「そ、そんなに謝らないでくれ！」

俺がいつもいつも素直に『好きだ』と言わなかったせいなんだから……」

「そんなことないわ！」

「私が悪いの……」

「いやいや、俺が悪いんだ！」

「いや、私よ……」

「いやいや俺が……」



2人して頭を下げあっていると、どちらからともなく笑い声が漏れた。

2人とも頭をペコペコと下げているのが面白かったからだろう。しばしの間部屋には笑い声が満ちた。

「ふふふっ……………」

……………ねえ、ライザー」

「ああ……………笑った。

なんだ？リアス」

「その……………恋人……………からじゃ駄目かしら……………？」

「……………えっ……………？」

り、リアスは今何と言った……………？『こいびと』……………？

こいびと……………コイビト……………恋人!!?

俺は目を見開いてリアスの方を向く。

「い、良いのか!？」

「ら、ライザーが……………嫌じゃないのなら……………その……………お願いします……………」

顔を真っ赤にしながらそういうリアス。

ペコリと頭を下げるその姿が小動物のようで……………愛らしい……………!!!

俺はにやける顔を必死に引き締めながら返事を返す。

「是非、頼む!!」

俺のその言葉に微笑みを返してくれるリアス。

なんだ負けたのにも関わらず感じるこの幸福感は……………!!!

なるほど……………!これが『試合に負けて勝負に勝つ』と言う奴か!!

俺が小さくガッツポーズをしているとリアスが立ち上がって口を開いた。

「ライザー。目を……………閉じてくれないかしら？」

「ん？あ、ああ。目を閉じれば良いんだな？」

リアスのいうがままに目を閉じる。

——ちゅっ。

「は……っ!!!?」

唇に感じた柔らかな感触に目を見開く。

目の前にいるのは顔を赤くしながらしかし凛とした表情で唇を触るリアス。

「これから宜しくね?・ライザー。

これはお詫び。私のファーストキスよ。日本では女の子がとても大切にするんだからね?」

そう言うと、リアスはドアの方へと心なしか速歩で向かっていく。

「俺からも宜しく頼む!!」

キスで放心していた俺がやっと絞りたせたのはそんな言葉だけ。

リアスは少しだけ振り返るとにこつと微笑みを見せてくれる。

「また後で会いましょう?・ライザー」

そしてドアをゆっくりと開くと——

『おめでとうございますーライザーさま!!!』

「うふふ……おめでとうございます部長」

「部長、おめでとうございます」

「……おめでとうございます」

「おめでとうございます、部長。」

ライザーとなら上手くいくと思いますよ」

「おめでとさん。」

まあ、こんな事になるだろうとは思ったけどな……」

——俺の眷属たちとリアスの眷属たち、それと兵藤士織の姿があつた。

皆が皆、暖かな瞳を向けている。

「あ、あなた……たち……」

「お、お前……たち……」

頬が引き攣るのを感じる。

リアスは後ろ姿しか見えないがその顔が引き攣っているだろうと容易に予想できた。

「……あなたたち……いつからいたの……?」

「あん？いつから居たか？」

「んなの一番最初っからに決まってるだろ？」

「なあ、皆？」

兵藤士織の言葉の後に全員が首を縦に振る。

「……最初からということは……。」

「お、お前たち——」

「~~~~~っっっっっっっっっっ!!!!」

俺が言葉を最後まで言う前に、リアスが声にならない悲鳴を上げる。そして、ドアを力強く閉めた。

肩で息をするリアス。

こちらの方を向くとまだ赤い顔のままニコリと微笑むと口を開いた。

「……まだ此処に居てもいいかしら？」

「……勿論だ。」

「互いにこれから大変そうだな……。」

「……そうかもしれないわね……。」

それから俺たちはたくさん会話をした。

昔のこと、今のこと、そしてこれからのことを……。

く月光校庭のエクスカリバーく  
く動き出しましたく

……どうも、兵藤士織……です。

突然だが皆さんは朝起きると不測の事態に陥っていた場合どうするだろうか……？

混乱して取り乱す？

ひとまず状況を把握して取り乱す？

いつそのこと現実逃避して取り乱す？

俺はというと――

「……すう……すう……」

……うん。混乱してたんだが取り乱す前に、一周回って冷静になれた。

というかなんで俺のベッドに――

「――オフィスが寝てんだよ……」

俺はベッドから上半身を起こすと、頭を掻きながら、丸まって眠っているオフィスの顔を覗き込んだ。

……何と言うか……まあ、可愛い寝顔だ。

「士織、私の顔を見て、面白い？」

「うおっ!？」

「オフィスお前起きてたのか?!」

突然目を開いたオフィスは無表情にそう言ったため、驚きのあまり飛び退いてしまう。

「起きてた……?」

我、最初から意識あった」

「……ならなんで寝たふりなんかしてたんだ？」

「それは土織の真似」

「……寝てる時の吐息は……」

「それも土織の真似」

「……丸まって寝てたのは……」

「勿論、土織の真似」

オーフィスは身体を振り子ののように振って起き上がると得意気な表情を浮かべてそう言った。

「そうだな……題名を付けるのなら『私はキメ顔でそういった。』ってところか？」

「いや、本当にキメ顔になってちゃ使えねえか??」

「さようですか……」

俺は苦笑いを浮かべながら、そんなオーフィスの頭……いや、頬を優しく撫でる。

目を細め、猫のように手に擦り寄るオーフィスに自然と頬が緩むのを感じた。

「やっぱりあったかい……」

「そうか？」

「土織……私の、【居場所】……」

だからこんなにあったかい？」

不思議なモノを見た、といったふうな表情で首を傾げるオーフィス。しかし、頬にある俺の手は離そうとはしない。

「どうだろうな？」

そういうのはこれから分かっていけば良いだろ。

……なあに、遅すぎるって事はねえよ」

「わかった。土織がそういうなら……そう」

そう言ったオーフィスは再び目を細めると幸せそうな雰囲気纏わせながら俺の手に擦り寄って来た。

「そう言えばオフィス。」

今日は突然どうしたんだ？」

「我、士織に会いたくなつた。だから来た」

迷惑？、心なしか悲しそうな表情でそう続けたオフィス。

俺は今度は頭を優しく撫でながらニコリと微笑む。

「そんなことねえよ。」

寧ろ嬉しいぜ？オフィス」

「ん……」

俺が頭から手を離そうとすると、オフィスはその手を押さえて頭に引っ付けさせる。

「我、これも好き。もっと」

「……りよーかいだ」

オフィスのサラサラの髪に指を通してながら優しく撫で続ける。

「そう言えばオフィス、お前が作った組織……」カオス・ブリケード「禍の団」だったか

？そつからは抜けられたのか？」

「……まだ。曹操たちがうるさい。」

……でも大丈夫。直ぐ抜ける」

そう言ったオフィスはもぞもぞと動き始め、俺の膝の上に収まった。

「此処、良い……。我の居場所？」

「まあ、俺はお前の【居場所】だからな。」

確かにそりや間違つてねえかもな」

「……ん」

俺の方へと背を預け、頭を撫でられるオフィス。

初めて会った時よりも表情が柔らかくなった気がするの俺の気のせいなのだろうか？

「おい士織くっ!!」

早く行かねえと遅刻すんぞく!」

「……っ!」

「士織、呼ばれてる?」

突然の一誠の声に今日が平日だったことを思い出す。

「オーフィスは首を傾げながら俺の方を向いた。

「ああ……そろそろ行かねえと駄目みたいだ……。

どうする? オーフィス。

「家にいるなら【遮断魔法】使ってやるけど……」

「士織が行くなら我は戻る」

言つて、少し名残惜しそうに立ち上がるオーフィス。

俺もベッドから降りて背伸びをする。

「早く士織のところに来れるように……頑張る」

「……そうか。」

まあ、たまには家に来いよ?

また頭撫でてやるぜ?」

「来る」

俺が頭を撫でるジェスチャーをすると即答でそう返すオーフィス。

余程頭を撫でられるのが気に入ったのだと見える……。

「んじゃ……またな、オーフィス」

「ん……」

小さく反応したオーフィスは俺の前から姿を消した。

「……さて、着替えるか……」

起きてそのままオーフィスを撫でたりしていたため、未だにパジャ

マ姿な俺はそう呟くと着替えを始める。



「おい土織っ!!」

本当に遅刻しちまう……ぞ……?」

「……」

突然開かれた部屋の扉。

そこには慌てた様子で俺を呼びに来たのであろう一誠の姿があった。

そして、その一誠の顔が俺と目を合わせた瞬間、一瞬で焦り、青い顔になる。

「すんませんでしたああああ!!」

ガチャンツ!!

余程慌てて閉めたんだろうな……と容易に予想できるほどの大きな音を立ててドアは閉められた。

「……今度からはノックしろ一誠」

「わ、わかった」

正直たかが男の着替えを見てそんなに慌てる必要もない気がするが……。

俺は部屋の姿見に視線を移す。

「……やっぱりこの見た目のせいだよな……」

どう見ても女にしか見えない自分の姿に溜め息を漏らす俺だった。

~~~~~

「で、こっちが小学生の時の一誠ちゃん!」

「あらあら、全裸で海に」

「これはその時の一誠ちゃんを見ていた土織ちゃんよ!!」

「……アホの子を見る目ですね」

「ちよっ?!母さん?!

変な写真を見せないでくれよ!!？」

時は飛びに飛び、放課後。

現在オカルト研究部のメンバーは俺たちの家に来ていた。

初めは部屋が使えないために家で会議をする、という名目で来ていた筈なのだが、母さんの登場により崩壊してしまった。

「そう言えば母さん。」

夕麻たち4人はどこ行っただ？」

「夕麻ちゃんたちなら賢夜さんと一緒に買い物に行ってくれてるわよ」  
♪

母さんはご機嫌にそう言うのと再びアルバムの写真の説明に戻っていった。

それにしても興味津々だな朱乃先輩と小猫は……。

「そう言えば土織の家には……」

「ああ、あの4人が居るぜ?」

リアス先輩は思い出したかのように口を開き俺の方を向く。

あの4人、とはレイナーレこと夕麻、ミッテルトこと美憧<sup>みと</sup>、ドーナシークこと絢奈<sup>とうな</sup>、カラワーナこと華那<sup>かな</sup>の墮天使4人のことを指している。

「1度買い物途中に出会ったけど……」

リアス先輩は顎に手を当て考えるように唸ると苦笑いを浮かべた。

「……ドーナシークはあれでいいのかしら?」

「……本人も気にしてねえらしいからいいんじゃないやねえか?」

どうやら女体化したことに対して言っているらしいリアス先輩。

俺の出した紅茶を優雅に一口飲むと、自然な流れでアルバムへと手を伸ばす。

「あら、この写真面白いわね」

そう言って1枚の写真を指さすリアス先輩。俺は首を伸ばしその写真に目を移した。

そこに写っていたのは――

——フリフリのドレスに身を包んだ……紛れもない俺の姿。  
「……………」

俺は無言でリアス先輩からアルバムを奪い取るとその写真だけを取り出し、一心不乱に破り捨てた。

「……し、士織……??」

「……何も——見テナイナ？」

「は、はいっ!!」

俺がちよつとだけ気を入れながらそう言うと、まるで壊れた玩具のように首を縦に振るリアス先輩。

酷いなあ……そんなに怯えなくてもいいのに……。

「……おい士織??」

殺気、殺気漏れてるから……。

リアス部長、もう顔真つ青だから……」

「ん?……ああ、なるほど。」

悪いなりアス先輩。なんかちよこつとだけ漏れちまってたわ」

一誠から掛けられた声によって気付いた俺は無意識のうちに漏れていた微妙な殺気を収める。

周りを見れば一誠を除く皆が顔を青くさせていて——

「——士織ちゃんが怒っちゃったわねえ」  
「……あれ??」

ニコニコと微笑みながら頬に手を当てる母さん。

怖がっている様子など皆無だ……。

「……葵泉さん、何とも無いんですか……?」

「ええ〜??」

だって士織ちゃんがちよこつと怒っただけじゃなくい」

——可愛いわね〜♪、母さんは頬を染めながらそう言った。  
その言葉に無言になるグレモリー眷属たち。

「……まあ、母さんだし」

「……そうだな……母さんだもんな」

俺と一誠は互いに苦笑いを浮かべ、そう言った。

——閑話休題。

「ねえ……士織さん……」

「ん?なんだよ祐斗」

祐斗は1冊のアルバムを持ち俺の方へと近寄って来る。

その瞳には暗い炎が灯っていた。

……やはり始まるのか。

「これ……」

祐斗が指さした写真。

そこに写っていたのは俺と一誠、そして一人の……少女とその親であらう男性。

しかし、祐斗が興味を示しているのは人物ではなく——1本の古ぼけた西洋剣。

「まさか……こんなところで見かけるなんて……」

憎々しそうに歯を食いしばる祐斗。

俺は何も言わず、祐斗の言葉を聞く。

「これは——聖剣だ」

パタン、とアルバムの閉じる音が嫌に静かに響いた。

——哀しみの罪歌。

それは彼女の歌う過去への思い。

——憎しみの狂歌。

それは彼の歌う聖なる剣への思い。

復讐のために人を止め、

復讐のために女であることを捨て、

復讐のために力を求めた。

聖なる剣と相対する魔なる剣を持ち——

——木場祐奈木場祐斗の物語が動き始める。

く紹介しましたく

どうも、兵藤士織だ。

現在俺と一誠は珍しく2人でオカルト研究部の部室へと向かって  
いた。

「アジアがお前と居ないなんて珍しいな？」

「ああ……アジアなら桐生に呼ばれてたからなあ。

遅くなるかもしれないので別々に行きましょう、って言われたんだ  
よ」

「……桐生か」

「そう……桐生なんだ……」

俺と一誠は互いに引き攣った表情でそう呟く。

俺たちの言う桐生とは、クラスメイトの1人だ。名を桐生藍華きりゆうあいかと言  
い、綺麗な橙色の髪を三つ編みにまとめ、眼鏡を掛けた古典的な『文  
学少女』や『委員長』を思わせるような風貌なのだが……。

「……アジアに変な事を吹き込むだよなあ……」

「そっぴやあの『アジア裸の付き合い事件』も桐生の仕業だったな」

「……アレは本当に焦った……」

一誠は遠い目をしながらそう言う。

何があったのか、それはまた次の機会に話すとしよう。

「……なあ士織。歩いて行くのが物凄くめんどくさくなっただけど  
……」

「……転移するか……」

別に転移する程度どうってことも無いため、俺は周りに人がいない  
ことを確認した上で、速やかに転移魔法を行使した。

「——到着つと……」

「なんだ部室前にしたのか」

転移を終了し、到着したのは部室の扉前。

一誠はどうやら中に転移すると思っていたようだが……。

「突然現れたら流石に驚かれるだろうが」

「いやリアス部長たちなら————ってそっか……それもそうだな」

一誠は思い出したかのようにそういうと扉に手を掛ける。

「行こうぜ？」

俺たちは待たせてる側なんだろう？」

「そうだな。」

早く行った方がいい」

俺がそういうと、一誠は扉を開き部室の中へ足を踏み入れた。俺はそれに続き中に入って行く。

全員が集めた部室の中。

「遅かったわねイツセー、士織」

ソフアーに腰掛けたままのリアス先輩は俺と一誠の方を向くとそう言った。

「すみません。」

ちよつと話してたら遅くなりました」

「悪いなリアス先輩。」

それと——」

一誠の言葉に続けるように謝罪する。そして、リアス先輩の対面のソフアーに座る人の方を向く。

「待たせて悪いな。」

——支取蒼那生徒会長」

「いえ、私たちも今来たところですから」

淡々と言い放った支取蒼那。

俺はその隣に立つ男子生徒の方にも視線を向ける。

何処か困惑したような表情を浮かべている男子生徒。

「な、なんで士織さんが此処に……？」

「俺もオカルト研究部に入ってるからだけど？」

「……いや、そうじゃなくて……」

言葉に詰まった様子の男子生徒に俺は溜息を吐きながら口を開く。

「俺も関係者って訳だ……察しろ」

俺は悪魔というわけではないが、関係者であることは事実。

というよりいちいち説明しないとわからないとは……面倒くさい奴だ……。

——閑話休題——

「ひとまず互いの紹介でもしましょう」



支取蒼那は咳払いをするとそう言い放つ。

そして、横に立っていた先ほどの男子生徒に目配せをした。

「さつきは取り乱してすみませんでした。」

俺の名前は匙元士郎。2年生で会長の【兵士】だ」

「おお、同学年で同じ【兵士】か。」

俺は兵藤一誠、リアス部長の【兵士】だ」

そう言っつて握手を求め一誠。

男子生徒——匙元士郎——はその手を固く、固く力一杯に握り締めた。

……おおく……随分と一誠を敵視してる様子だな。

「宜しく兵藤くん？」

本当にハーレム状態で羨ましい限りだねえ……死ねイケメン野郎!!!

「ハハハハハハ！」

そんなこと考えたこともなかったよ匙くん？」

一誠はそう言いながら満面の笑みで匙元士郎の手を握り返す。

「この際この場で殺つちやおうかなあ??」

ねえ、兵藤くううん??!!

こう見えても俺は駒4つ消費の【兵士】だけ?

最近悪魔になったばつかだが負ける気はしねえなあ!!!

一誠に向かって挑戦的な物言いをする匙元士郎だが、支取蒼那が鋭く睨んだ。

「サジ、お止めなさい」

「うっ……すみません……」

匙元士郎はその言葉を聞くとバツが悪そうな表情を浮かべ、一誠から離れると嫌々という雰囲気だったがぺこりと頭を下げた。

まさに鶴の一声だな……。

「今日此処に来たのは、この学園を根城にする上級悪魔同士、最近眷属にした悪魔を紹介し合うためです。」

いきなりそのような態度をとって私に恥をかかせないこと。

——それに、

支取蒼那は匙元士郎をそう叱ると一誠の方へと視線を移した。

「サジ、今のあなたでは兵藤くんには勝てません。フェニックス家の三男を倒したのは彼なのだから。」

——【兵士】の駒8つですら足りず、力を封印してまで転生させた彼の強さは未知数というわけです」

「駒8つでも足りない!?!しかもフェニックスをこいつが!?!」

あのライザーを倒したのがこいつだったなんて……。俺はてつきり木場か姫島先輩がリアス先輩を助けたものだ……。」

匙元士郎は目を引き攣らせながら、一誠のことを物珍しそうに見つめる。

一誠は苦笑しながらその視線に晒されていた。

支取蒼那は綺麗な姿勢で一誠に頭を下げる。

「ごめんなさい、兵藤一誠くん。」

うちの眷属はあなたのような実績がないので失礼な部分が多いのです。

宜しければ同じ新人の悪魔同士、仲良くしてあげてください」

薄い微笑み。氷の微笑とでもいうのだろうか、悪意的なものとは全く感じないところを見ると……。元来こういう笑い方しかできないのかもしれない……。」

「サジ」

「え、は、はいっ!宜しく!」

「はい、宜しくお願いします」

「俺も一応な」

アーシアが屈託なくニッコリとしながら挨拶を返し、俺はそのついでのような言葉を並べた。

「アーシアさんと土織さんなら大歓迎だよ!!」

「……一誠とは正反対の対応だな……」

あまりの正直さに苦笑いが浮かんでしまう。

匙元士郎——匙とでも呼ぼうか——はアーシアの手を取りながら頬を緩めていた。

く日常楽しみましたく

どうも、兵藤士織だ。

今日は駒王学園の球技大会の日。

周りの生徒たちは何処か浮かれているように見える。

『漫画研究部の塚本くん、橋岡先生が呼びびです。至急、職員室まで—

—』

校庭に設置されたテントのスピーカーも休み無しにアナウンスを  
発し続けている。

体操服のジャージに身を包んだ俺はオカルト研究部の部員たちが  
集まる校庭の一角へと来ていた。

「そーいやリアス先輩は何処行つたんだ？」

「あぁ……リアス部長なら部活対抗戦の種目確認に……つと……帰っ  
て来た」

テント方面から帰ってきたリアス先輩は不敵な笑みを浮かべてい  
る。

一誠と俺は顔を見合わせ苦笑いを浮かべてしまう。

「ふふふ……勝ったわよ、この勝負—」

「随分と強気な発言だが……一体種目はなんだつたんだ？」

俺の言葉にリアス先輩はピースサインをしながら口を開く。

「ドツヂボールよ—」

リアス先輩が強気な理由を、部員を見渡し……何となく察した。

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

部活対抗戦前に行われるクラス対抗戦。

俺はバスケットボールを選択していた。

チームは俺、一誠、元浜、松田、そして羽鳥というクラスメイト。

「士織—」

一誠の呼びかけに顔を向けることなく走るスピードをワンテンポ

速くする。

スリーポイントラインよりも内側まで走り、体を反転させるとまるで吸い込まれるかのようにボールが俺の手に収まった。

「行かせるかっ!!」

立ちはだかるのは相手クラスの男子生徒。確かバスケットボール部の生徒だったはずだ。

俺はわざと緩めのクロスオーバー用いて相手を自分に引き付ける。

「それくらいなら付いていけるぜ!!」

「いちいちうるさいな……」

俺は溜息を吐きながら……予定通りの行動を取る。

ボールを背面に移動させビハインドパス。

「なっ!!」

俺のプレーに驚愕の表情を見せる相手生徒。それを他所に俺からのパスを受け取った一誠はそのままドリブルで切り込んでゆく。

「よっ……と」

流れるような動作からのレイアップはゴールに吸い込まれていった。

「ナイッシュ」

「土織こそナイスパス」

俺と一誠はハイタッチを交わしながら自陣に戻りデフエンスを行う。

「マンツーマン!」

「「了解!」」

もとより運動神経の良いメンバーで固めたチームのため大体のこととはこなしてくれるため、指示が出しやすい。

俺はボールを持った相手生徒を担当する。

軽く圧を掛けてみれば慌てたようにボールを手放す。

「ちよ……っ!?ば、パス!!」

苦し紛れのようなパスだったが奇跡的にボールが回ってしまう。

「元浜!」

「!!」

俺の声に反応した元浜はそれだけで察したのか、パスを受けた相手生徒から少しだけ離れた。

すると、それをチャンスと思ったのか直ぐにシュートへと移行する。

しかし、焦って放たれたボールは飛距離が足りずにエアボール。

「一誠!」

「分かってる!」

一誠はいち早くボールを拾い、サイドへボールをパスした。攻守の入れ替わりのため全員が走り出す。

出来ればディフェンスが戻る前にシュートへ移りたかったが……まあ、良いだろう。

「松田! 回してくれ!」

「ほれ!」

一誠程の精度ではないがなかなかの位置にボールが放られた。

俺がボールを持てば次はダブルチームでディフェンスにつかれてしまう。

……ああ……今度は突破だな……。

俺はふう、と息を吐くと間合いを開け、ドリブルを始める。

—— ダムダムダムダム……ダム……ダム……ダム……ダム……ダム……ダム……

だんだんと遅くなるドリブルスピード。

目が慣れたであろうタイミングで——

—— 最速の低姿勢ドライブ!

「っ!!?」

一瞬の隙さえ出来てしまえば後は簡単、反応が遅れた二人を置き去りにしながら素早く抜いてゆく。

抜きさったが、リングから遠いため、そのままスクリープシュートへと繋がった。

「くっそおおっ!!」

無理矢理のブロックに飛んだ相手生徒だったが、ボールは嘲笑うかのように放物線を描き、ブロックなど無いものとしリングに吸い込まれていく。

「えげつないな〜……土織」

「まだマシだろ……スリー打ってないし」

「……それもそうか」

そう言いながら再びプレーに戻っていった。

……これは余談だが、球技大会のバスケットボールでは俺たちのクラスが余裕の優勝を果たした。

さて、次は部活対抗戦のドッチボールか……。

~~~~~

俺はバスケットで汗をかいてしまったため、予備のジャージに着替え、オカルト研究部のメンバーたちに合流した。

「……何故に女子勢は皆ブルマ……?」

タオル片手に俺はそう口にしてしまう。

リアス先輩、朱乃先輩、アーシア、小猫。

4人が4人とも何故かブルマ姿という……何ともリアクションしにくい格好である。

「あら、土織。

あなたは着ないのね……ブルマ」

「あらあら……土織君は着ないんですの?ブルマ」

「あれ?土織さんは着ないんですか??ブルマ」

「……土織先輩も着てください……ブルマ」

「いや着ねえよ」

「「「ええ〜……」」」

「残念そうにしてるんじゃないやねえよ!!」

何度も言うが俺は男なのだ……。  
何度目かわからない溜息を吐いてしまう。

「……土織先輩……」

「……おい、小猫。」

その手に持ったブルマは何だ……?」

にじり寄ってくる小猫に一抹の恐怖を覚えながら、後ずさりをする俺。

「……逃げないでください」

「……お前に捕まったら男としての威厳が無くなる気がするから無理だ……っ!」

最早戦闘態勢になっている俺と小猫。

「——ふふふっ。」

土織君捕まえましたわ」

「なっ!?!」

脇から腕を通されて動きを制限させられる。

小猫に警戒しすぎたために、朱乃先輩の接近に気が付かなかった!?!  
そんな馬鹿な……っ!?!

「……ナイスです」

「ちよ、ちよっと待て小猫!?!」

「……土織先輩……覚悟……っ!」

飛びかかってくる小猫、俺は朱乃先輩に捕まっているため逃げられ

ない……その結果は——

「やめろ小猫おおおおっ  
!!!!!!」

此処に男としての威厳を保つためのバトルが開始された。



く日常楽しめましたく

へど、どうも……兵藤士織……だ……。

度重なる妨害を受けながらも小猫とのバトルに何とか勝利した俺はジャージ姿のまま肩で息をしていた。

……無駄な事する時に限って実力以上の力を発揮しやがって……。

「……残念です」

「小猫……お前なあ……」

「ま、まあ士織。

そう怒んなって……」

苦笑い気味の一誠が俺にそう声をかける。

俺は溜息を吐きながらも頷きを返す。

「……後で覚えとけ」

「……っ!!」

意外と出た低い声音に小猫は身震いをしていた。

『それでは試合を開始しますのでオカルト研究部の皆さんと野球部の皆さんはグラウンドへお集まり下さい』

アナウンスでの呼び出しに俺たちは歩みを進めた。

……開始前に何故こんなに疲れなければならぬのか……。

……小猫許すまじ……。

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

『く……っ!!!』

ボールを持った野球部チーム。

しかし、ボールを投げるような気配が感じられない。

「ふふふ……完璧ね」

得意気な表情のリアス先輩。

俺は頭を掻きながら葛藤中の野球部チームへと視線を向けた。

「なんというか……可愛そうだな」

「そうだな……」

一誠の言葉に同意の言葉を返す。

そもそも、何故野球部チームはボールを投げて来ないのか、それは俺たちオカルト研究部チームのメンバーに関係する。

リアス先輩—— 駒王学園の二大お姉様の1人。大人気の学園アイドル。よって当てられない。

朱乃先輩—— リアス先輩と同じく二大お姉様の1人。学園のアイドル。よって当てられない。

アーシア—— 2年生ナンバー1の癒し系天然美少女。当てれば男女問わずに恨みを買う。よって当てられない。

小猫—— 学園のマスコットの口リ系少女。当てたら可哀想。

祐斗—— 男子生徒の敵ではあるが、当てれば女子に恨まれる。当てられない。

一誠—— 男女共に少なからず人気を得ている。そもそも当たった時の逆襲が恐ろしい。当てられない。

俺は—— まあ、うん……。

「士織が狙われないのは駒王学園ナンバー1の人気を誇るアイドルだからだな。

もし当てでもしたら学園全生徒からボコボコにされかねえよ。

……まあ、そもそもお前に当てようなんて考えが皆には浮かばねえだろうけどな」

「……一誠……?」

意味の分からない解釈をのたまってるんじゃないよ。

そして俺の思考を読むなんて荒唐何処で修得しやがった……?」

「いや、なんか……流れで?」

「……もういいわ……」

深い、深い溜息を吐いた。

肩を落としながら頭を抱える。

……最近俺の扱いが更に女子相手のそれになってきているような……。

「ちつくしよウ!!!」

恨みがなんじや!!くたばれイケメンめええええええつ!!!!」

俺が悩んでいれば野球部チームの生徒の一人が叫びながら祐斗の方へとボールを打ち出した。

……おお、何と言うやる気……。

どうやら恨まれる怖さにイケメンへの憎悪が打ち勝った様だ。

「——って、何棒立ちしてんだよ!!」

俺はボールが放たれたのにも関わらず動こうとしない祐斗を守るべく前が出る。

「……あ、土織さん……?」

気の抜けた祐斗の声に溜息を吐きたくなる。……が、それよりも先にボールの対処はしておかなければ……。

なかなかの勢いのボールは祐斗の前に立った俺に向かって直進してきた。

少しばかり無理な体勢ではあったが捕るぶんには何ら心配はない。

——はずだった。

今まで直進してきたいたボールが突然軌道を変えたのだ。

「フオーク……っ!?!」

そう、ボールは急降下したのである。

俺は何とかその変化に反応し、降下してくるボールに合わせるように片手を伸ばす。

(股間にボールが当たったらたまったもんじやねえ……っ!!!)

その考えのもと、俺は飛んできたボールの勢いに逆らうことなく、ただ軌道を変え、そのまま上へと投げ上げた。

真上に上がってゆくボールはやがて落下して行く。それを祐斗が動かぬままにキャッチする。

『……………』

刹那のうちに起きた俺のプレーに周りの人々が啞然とした表情を浮かべていた。

しかし、一瞬の間を空けて歓声が上がる。

『すげえな!』

何だあの動き!!』

『まさに神技を見たわ…………』

『流石は士織様…………』

『しおりんは何しても絵になる…………。』

『これぞ世の理か…………』

『しおりんペロペロ』

『しおりんクンカクンカ』

「おいこら!!後半の奴ら!!」

何意味不明なこと言ってるやがる!!

取り敢えず一発殴らせろツ!!!」

観客なった生徒の方へそう言い放つが返ってきたのは何故か黄色い歓声。

……………本当に意味が分からない…………。

「士織!」

反撃するわよ!!」

俺が頭を抱えていると、後ろからリアス先輩の声が掛けられた。振り返って見てみればその顔にはとても良い笑みが浮かんでおり、実に楽しそうだ。

俺はそんなリアス先輩に苦笑いを浮かべながらも頷きを返す。

2歩ほど下がり祐斗からボールを渡してもらおう。片手でボールを

弄びながら祐斗の方を叩く。

「……今は楽しめ。」

気を張ってばかりじゃ疲れるだろ？」

「……土織……さん……」

微笑みを向け、祐斗の纏う雰囲気霧散させてやる。

……最近の祐斗は色々危なっかしかつたからな……。

「……そうだね……。」

……うん、ありがとう土織さん」

そう言った祐斗の顔にはいつも通り……とまではいれないが、確かに笑顔が浮かんでいた。

俺は弄んでいたボールを両腕でしっかりと掴むとにやりと笑いなから野球部チームの方を向く。

「さてさて……やりますか……!!」

言って、ボールを放った。

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

球技大会も無事終了し、場所はオカルト研究部の部室へと移っていた。

外はすっかり雨模様。ザーツ……という雨音が響いてくる。

「祐斗、あなた最近変よ？」

一体何があつたの……?」

リアス先輩は心配そうに祐斗の方を向いて話しかけていた。

祐斗は申し訳なさそうな表情を浮かべながら口を開く。

「……すみません。」

ちよつと……いえ、かなり他のことに気を取られていたようです……。

土織さんに言われてなかったら……もつと迷惑を掛けてしまっていたと思います……」

「……そう……もう、大丈夫なのね……?」

「……いえ、まだです……」

祐斗は暗いオーラを身に纏い始める。  
鋭い目つきをした祐斗はリアス先輩に向かって頭を下げた。

「すみません部長。」

……やはり僕は——復讐を諦めきれない」

その言葉に重たい雰囲気部室を包む。

そんな中、祐斗は出口に向かって歩みだし、ドアの前で止まると振り向くことなく、

「……頭を冷やして来ます。」

それとしばらく休ませて下さい……。

このままじや僕は皆に迷惑しかかけない……」  
そう言つて部室を後にしていった。

「……土織」

「……なんだよ」

「木場の奴……」

「今は一人にしてやれ。」

あいつも考えなしに行動するやつじゃねえ」

俺がそう言えば一誠は納得行かないというような表情を浮かべたが、それ以上何を言うこともなかった。

——雨音が、響きわたる。

く冷静さ失いましたく

Side 木場 祐斗

土砂降りの雨の中、僕は傘もささずに歩いていた。  
傘をさすのも億劫で……冷たい雨が僕を打つ。  
……頭を冷やすのにはちょうどいい……。

——要らぬ迷惑をかけてしまった。

自分を救ってくれた主に、僕を慕ってくれる友に、そして……僕の好きな人に……。

呆れられただろうか……？

……そんなことはないと考えたい。

迷惑をかけるつもりなんて全く、これっぽっちもなかった……でも、最近の気持ちが悪く落ち着かない。静めようとしても、波打つ。

……そう、聖剣エクスカリバーへの復讐心が溢れて仕方が無いのだ。

ああ……制御できるようになった……そう思っていたのに……。

そもそも、今の僕は幸せすぎる。

仲間も、友も、生活も得て、素敵な名前を2つも与えられた。生き甲斐も貰った。

これ以上の幸せを願うのは悪いことだ。悪いことに決まっている。想いを果たすまで、同志たちの分を生きていいなんて思ったことなど——。

……ぴちゃ……。

雨音とは違う、水の音を僕の耳が捉える。

顔を上げれば、眼前には神父がいた。

十字架を胸につけ、憎き神の名のもとに聖を語る者。

僕の大嫌いなもののひとつだ。憎悪の対象とも言える。

エクソシストならば、此処で牽制しても構わないとさえ思った。

「ッ!？」

神父は腹部から血を滲ませ、口から血反吐を吐き出すと、苦しげな表情を浮かべその場に倒れ伏した。

誰かにやられた……？誰だ……？——敵？

「ツッ!!」

異常な気配、殺気を感じ取り、僕は瞬時に魔剣——今は魔刀か……——を創り出し、振り抜いた。

雨の中で銀光が走り、火花が散った。やはり斬りかかってきていたようだ。

殺気を感じた方へ距離を取りながら体を向ける。相手は眼前で死んだ聖職者と同じ格好——神父。ただ、こちらは明確なほどの強烈な殺気を飛ばし、しかし、冷静に立っていた。

「やつほ、おひさだね騎士<sup>ナイト</sup>くん」

そう言いながら乾いた笑みを浮かべるその少年神父を僕は知っていた。

白髪の少年神父——フリード・セルゼン。

先日の堕天使との一戦で僕たちとやり合った輩だ。

……なかなかの強さだったのを僕は忘れもしない。

「……まだこの町に潜伏していたようだね？」

今日は一体何の用かな？」

警戒の体勢をとりながらも、しかしそれを悟られないように……。そんな考えを巡らせながら言葉を紡ぐ。

「ん？別に騎士<sup>ナイト</sup>くんには用はなかったんだけど……まあ、いつか。

ド腐れ神父の皆様の掃除もちょうど終わったとこだし？」

ついでに悪魔狩りするつても……一興だよなあ……？」

膨れ上がる殺気と威圧感。

そして、それに伴うように、彼の振るう長剣が聖なるオーラを発し始める。

そして僕は——冷静さを無くした。

「その……剣……ツッ!!」



「おお、怖い怖い……。」

取り敢えず……殺りましようぜ？」

そう言った彼が構えたのは、僕の怨敵——聖剣エクスカリバーだった。

頭が、目が、手が、足が……体全てが。

【憎悪】で埋め尽くされる。

僕は——無意識に魔剣を構えた。

Side Out

~~~~~

Side 三人称

しばしの間睨み合い、先に行動を起こしたのは祐斗。

自慢のスピードを最大限利用しフリードへと一瞬で肉迫する。

「ふ……ッ!!」

——気合を入れた【一閃】。

祐斗はその手に持つ西洋剣を横薙ぎに振るった。

「おっとっと……」

しかし、その単調な攻撃はフリードに通用しない。足を一步下げただけで躲すのだ。

そして反撃の斬り下しを祐斗へと放つ。

「……くっ！」

祐斗はフリードの一撃をなんとか身を捻り、紙一重で躲したが掠り傷を負ってしまう。

悪魔にとつて聖剣というのはまさに天敵。斬られるのは勿論、掠ることすら避けたい存在である。

バックステップでフリードとの距離をとった祐斗は改めて西洋剣を構える。

互いにたった1度だけしか剣を振っていないのにも関わらず、フリードは何処かつまらなそうな表情を浮かべていた。

「ん〜……キレがないなあ〜キレが。

全くオモシロくないねえ〜……」

「うるさい。」

無駄な口を叩かずに早く掛かって来なよ……っ!」

憤怒の表情を浮かべた祐斗を冷めた目で見つめるフリード。

構えも何もない、最早ただ立っているだけ。

「来ないならこっちから——ツツ?!」

祐斗が、一步踏み出そうとしたその時、

「……全くダメ。」

騎士クン……キミってこんなに弱かったっけ?」

いつの間にか祐斗はフリードに間合いを詰められていた。それも、剣を使う者として致命的な間合いを。

「——【魔劍創造】<sup>ソード・パース</sup> ツツツ!!!」

しかし、流石は士織に鍛えられただけはある。

祐斗は咄嗟に【魔劍創造】を解放し、地面から数々の魔劍を全方位に向かって大量に出現させたのだ。

それにより、フリードは斬りかかるよりも先に回避へと行動を移さなければならなくなってしまった。

「……ちっ……ちよーつと斬られちった……」

愚痴をこぼすかのように言ったフリードは斬られた部分に舌を這わせ、ペろりと血を舐めとる。

「……掠り傷……」

「ん? そっすねえ〜……お揃いつてか?」

まあ、さっきのは流石に危なかったわ〜。

このエクスカリバーじゃないとやばかったやばかった……」  
フリードは危なかったと言いつつもその顔には寧猛な笑みが浮かんでいた。

「んじゃ、今度は……スピード勝負と行きましょーや……騎士クン？」  
——瞬間、エクスカリバーから放たれる聖なるオーラが増大する。

祐斗は目を見開き、冷汗を流した。

「俺のエクスカリバーは【天閃の聖剣】エクスカリバー・ラビッドリイ」。

スピード勝負には持つて来いのエクスカリバーっしょ？」

聖なるオーラをその身に纏わせながら語るフリード。

悪魔として当たり前の聖なるオーラに対する【恐怖心】。祐斗はそれを憎悪という感情で塗り潰し新たな剣を構える。

雨音が響く。

互いに睨み合い、そして——

——すぐに決着は着いた。

「……かは……っ?!」

倒れ込む人影。

雨に濡れた道に無様にうずくまる姿はまさに敗者のそれだ。

しかし、その身体に斬られた後は見当たらない。

見られたのは腹部に残る打撃後のみ。

「……何故……だ……っ!!」

苦痛に顔を歪めながら敗者は勝者を見上げる。

「今のキミは殺す価値もないよ——」

——騎士クン」

見下した視線で勝者<sup>フリード</sup>は敗者<sup>祐斗</sup>を見つめる。

「本当に……弱くなったわ」

「……ッ！」

その言葉は地に伏す祐斗へ遠慮なく突き刺さる。

フリードは溜息を吐くと踵を返して雨音の響く中に消えていった。

「……そ……くそ……くそッ……くそオオオオオオッ!!!」

祐斗は顔を歪め、叫び声を上げた。

雨に濡れた地面を何度も、何度も何度も何度も殴りつける。

血だらけになった拳。

祐斗はゆらりと立ち上がると、おぼつかない足取りで歩み始めた。

雨によってぐしよぐしよになったその顔には、明らかに雨以外のモノが混じっていた。

——この日、祐斗は屈辱的な完全敗北を味わった。

く訪れられました」

「どうも、兵藤士織だ。」

球技大会も終わった次の日、しばらく休ませて下さいと言う言葉通り、祐斗は部活はおろか学校にすら来ていないようだ。

そのためか、オカルト研究部のメンバーは何処か全員上の空だったような気がする。

1日の学業と表の部活——今日はただ暇を潰したただけだったが……——を終わらせた俺、一誠、アーシアは家路についていた。

「……木場の奴学校にすら来てなかったな……」

「大丈夫でしょうか……」

一誠とアーシアは不安そうな声音でそう呟く。

俺はそんな2人の肩を優しく叩き口を開いた。

「今は信じて待っててやるのが正解だと思うぞ？」

安心しろ、祐斗だって無茶はしないはずだ」

気休めのような言葉ではあったが2人には効いたらしい。

2人とも納得したように頷くと、先程までの暗い表情を解き、少しだけだが頬を緩めた。

「……まあ、それはそれとして……」

俺は咳払いを一つ挟み、一誠の方へ視線を向ける。

「……感じるか？」

「……まあ、なんとなくだけど背筋が冷える気配がするな……」

「どうやら一誠も感じていたようで、しかし背筋が冷えるか……やはリコレは予想通りのものなのだろう。」

「イツセーさんも士織さんも何の話をしているんですか……?？」

頭の上にハテナマークを浮かべ首を傾げるアーシア。

流石にアーシアが感じるにはまだ遠すぎたようだ。

「ちよつと家から俺だったり、アーシアだったりには害のありそうな気配がしてるんだよ」

「そ、そうなんですか……??」

一誠の言葉に不安げな表情を浮かべるアーシア。その手は一誠の制服を握っていた。

「……家から夕麻たちの気配が感じられない……。」

ひとまずは家に急ぐぞ」

「そうだな……。」

「はい……。」

そう言っつて、俺たち3人は早歩き気味に家へと急いだ。

急ぎ目に帰宅した俺たちは玄関の扉を開けて中に入る。

そして、リビングに直行した俺たち。そこには――

「でねでね?これが一誠ちゃんと土織ちゃんの小学生時代の写真なの!  
!

こっちはイツセーちゃんと土織ちゃんがプールに入ってるんだけど……土織ちゃんはどうしても女の子の水着を着ないと入れなくて不機嫌になってるのよ♪」

――見知らぬ女性2人と楽しそうに話す母さんの姿があった。

……しかもよりにもよって俺の黒歴史を会話に織り込んでいる……。

「か、母さん……??」

俺が引き攣った笑みを浮かべ声をかけると満面の笑みを浮かべた母さんが振り向いた。

「あら♪一誠ちゃん士織ちゃんアーシアちゃんお帰りなさい♪」  
そしていつものように、俺たち一人一人にハグをしていく。  
母さん曰く、俺たちの成長をハグで確かめているらしい……。  
「母さん……人前でもするんだな……」

一誠は疲弊したような声で呟く。

——が、その瞳は俺同様、ソファアに腰掛けている2人の少女に向けられていた。……最大の警戒を敷いたまま。

栗毛をツインテールに纏めた少女と緑色のメッシュを髪に入れている目つきの悪い少女。物腰を見るにまだまだ成長段階と言ったところか……。

2人とも白いローブのようなモノを着込み、首には十字架のネックレス。

——キリスト教会の関係者。

彼女らが誰なのか、俺は原作知識によって知っているが……。  
ちらりと一誠たちの方を見る。

そこには警戒心の見え隠れする一誠とおどおどしているアーシアの姿があった。

「兵藤一誠くん、兵藤士織ちゃんこんにちは。」

あ、もう、こんばんはかな?」

栗毛の少女は微笑みながらそう言う。

……兵藤士織『ちゃん』……??

自分の名前の呼ばれ方に一抹の不安を覚えながらも、ひとまずは視線を横——緑色のメッシュを髪に入れている少女の傍らへと移した。

そこにあるのは布に巻かれた長い得物。

(……なるほど……アレが……)

得物からはそこまで強大なオーラは感じられない……むしろ……。  
俺は緑色のメッシュを髪に入れている少女の方を見た。

「……………」

「……………」

偶然にも、少女と目が合う。

無言ではあったものの俺の技量を測っているように見えた。

「……確かにもう時間的にはこんばんはだな……それと、久しぶり」  
一誠はようやく相手が誰なのか分かったようで、警戒心が少しだけ緩んでいる。

「覚えててくれたんだ……」

嬉しそうに笑う栗毛の少女。

そして、今度は俺の方を見てきた。

「どうやら、俺にも覚えているのか確かめたいようだ。」

「……久しぶり。」

昔は男みたいだったのに今じゃすっかり女の子だな——イ  
リナ」

「うん！」

そういう土織ちゃんは相変わらず『俺』なんて使ってるんだね？」

栗毛の少女——紫藤<sup>しどう</sup> イリナ——は軽口を叩くかのように

そう言ってみせる。

「……それにしても、お互い、しばらく会わないうちに色々あったみたいだね。」

——本当、再会って何かあるか分からないものだわ……」

一誠へと視線を移してからの一言。

その意味深な言葉に一誠は何も返さない。

——彼女は一誠の正体に気が付いていた。



その後、イリナと緑色のメツシユを髪に入れている少女は談笑を30分ほどしてから帰っていった。

その帰り際、母さんがいない玄関でイリナは一言口にする。

『じゃあ、また明日』

緑色のメツシユを髪に入れている少女は目礼だけして、その言葉に否定をすることはなかった。

俺と一誠は互いに視線を交わし、明日は面倒な事が起きるのを覚悟し、アーシアを連れて家の中に戻ったのだった。

く対話しましたく

どうも、兵藤士織だ。

キリスト教会の関係者であるイリナと緑色のメッシュを髪に入れている少女の来訪から次の日の放課後。

俺はグレモリー眷属の皆と一緒に部室へと集められていた。その中には祐斗の姿もある。

部室のソファーにはリアス先輩と朱乃先輩。その対面に例の2人が座っていた。

俺たちは部室の片隅で4人のやり取りを静かに見守っていた。

——が、しかし。

そんな中でも祐斗は違った。

例の2人へまるで射殺さんばかりの怨恨の眼差しを向け睨みつけているのだ。

今にも突然斬りかかりそうな雰囲気、祐斗を俺は注意深く監視していた。

(……憎いのはわかるが……もっと冷静になってくれよ……)

内心呆れたような気持ちではあったが祐斗の過去を考えてみればまあ、仕方ないかと思えなくもない。

そんな、様々な思考の入り混じった重たい空気の中、最初に話を切り出したのは、教会側——イリナだった。

「先日、カトリック教会本部ヴァチカン及び、プロテスタント側、正教会側に保管、管理されていた聖剣【エクスカリバー】が奪われました」その言葉に疑問符を浮かべる一誠。

……こいつ昔教えたのに覚えてないな……。

「聖剣エクスカリバーそのものは現存していないわ」

そんな一誠の気配を察知したのか、リアス先輩はそんな言葉を口にする。

「ごめんなさいね。」

私の眷属に悪魔に成り立ての子がいるから……エクスカリバーの説明込みで話を進めてもいいかしら？」

リアス先輩の申し出にイリナは快く頷き、口を開く。

「イツセーくん、エクスカリバーは大昔の戦争で折れたの」

その言葉ではつとした表情を浮かべる一誠。

「どうやらやっと思いい出したらしい。」

「今はこのような姿さ」

緑色のメツシユを髪に入れている少女が傍らに置いていた、布に巻かれた長い得物を解き放つ。

現れたのは一本の長剣――。

「これがエクスカリバーだ――」

その姿に一誠も眉を動かす。

アーシアに至っては震えているようだ。

「大昔の戦争で四散したエクスカリバー。」

折れた刃の破片を拾い集め、錬金術によって新たな姿となったのさ。

その時、7本作られた。コレがそのうちの一つ」

――一拍置いて、少女は口を開く。

「破壊の聖剣」。

コレが私の持っているエクスカリバーだ。カトリックが管理している」

1度自分の得物を紹介した緑色のメツシユを髪に入れている少女は、再び布でエクスカリバーを覆った。

なるほど……完璧とまでは言わないがあ布でエクスカリバーを封印しているのか……。

布に書かれた呪術の文字にそういう解釈を得る。

イリナの方も長い紐のようなモノを懐から取り出す。

そして、次の瞬間、その紐がまるで意思を持ったかのように動きだし、形を変えた。

現れたのは一本の日本刀だ。

「私の方は『擬態の聖剣』。こんな風に形を自由自在に変化させる事が出来るからすつごく便利なんだから。」

このように、エクスカリバーにはそれぞれ特殊な力があるの。

「こちらはプロテスタント側が管理しているわ」

「自慢げに胸を張りそう言うイリナ。」

なるほど……2つとも気配が弱かったのは片や封印、片や使われていなかったからか……。

「イリナ……悪魔にわざわざエクスカリバーの能力を喋る必要もないだろう?」

「あら、ゼノヴィア。」

いくら悪魔だからと言っても信頼関係を築かなければ、この場ではしようがないでしょ?

……それに、私の剣の能力を知られたからと言って、この悪魔の皆さんに遅れを取るなんてことないわ」

「自信満々の様子でそう言うイリナ。」

……慢心にも程がある。

現に、この2人相手なら今のグレモリー眷属は誰も負けないだろう……そう、アジアであつても……だ。

「……ッ!」

祐斗の表情が憎しみに染まる。

……動いてくれるなよ? 祐斗……。

今この場で戦闘するのはメリットがない。むしろデメリットしかないのだから……。

「……それで、奪われたエクスカリバーがどうしてこんな極東の国にある地方都市に関係あるのかしら?」

リアス先輩はなんら変わることもなく自然な態度で話を進める。

祐斗もどうやら我慢したようだ……。

緑色のメッシュを髪に入れている少女——確かゼノヴィアと呼ばれていたな……——は話を続ける。

「カトリック教会の本部に残っているのは私を含めて2本だった。プロテスタントのもとに2本。正教会にも2本。残る1本は神、悪魔、墮天使の三つどもえ戦争の折に行方不明。」

そのうち、各陣営にあるエクスカリバーが1本ずつ奪われた。奪った連中は日本に逃れ、この地に持ち込んだって話なのさ」

ゼノヴィアの言葉にリアス先輩も額に手を当てて、深い溜息を吐いた。

「……私の縄張りは出来事が豊富ね……。」

それで、エクスカリバーを奪ったのは？」

「……奪ったのは『神の子を見張る者』だ」

……アザゼルのアホが総督をしている組織か……。

全く……面倒ごとを運んでくるとは……今度シエムハザさんと一緒に説教でもするべきか……？

「堕天使の組織に聖剣を奪われたの？」

……失態どころの話じゃないわね……。

でも、確かに奪うとしたら堕天使ぐらいのものかしら。上の悪魔にとつて聖剣は興味の薄いものだもの……。」

「奪った主な連中は把握している。」

グリゴリの幹部、コカビエルだ」

「コカビエル……。」

古の戦いから生き残る堕天使の幹部……。

聖書にも記された者の名前が出されるとはね……。」

リアス先輩も相手の名前に苦笑している。

まあ、確かに、コカビエル相手となると……まだちよつと心配な面があるな……。

「先日からこの町に神父——エクソシストを秘密裏に潜り込ませていたんだが……数人を除いてことごとく始末されている。」

始末されていない者たちも重傷を負っていた」

「……それで、何かしら？」

私たちにエクスカリバー奪還を手伝えと言いたいの？」

リアス先輩のストレートな言葉に、ゼノヴィアは——首を横に振った。

「むしろ逆だ。」

今回此処に来たのは協力の要請ではなく不干渉の注文をしに来たんだ。

——つまり、悪魔はこの件に首を突っ込むなど言いに来た」

随分な物言いだな……リアス先輩も眉を吊り上げている。

「随分な言い方ね。それは牽制かしら？」

もしかして、私たちがその墮天使と関わりを持つかもしれないと思っっているの？——手を組んで聖剣をどうにかすると」

「本部は可能性はゼロではないと思っっているのですね」

見下したようなゼノヴィアの視線と物言いに、リアス先輩は爆発寸前。

これだけ好き勝手言われたのだ、上級悪魔たるリアス先輩のプライドは黙ってはいないだろう……。

「上は悪魔と墮天使を信用していない。

聖剣を神側から取り払うことができれば、悪魔も万々歳だろう？墮天使どもと同様に利益がある。

それ故、手を組んでもおかしくない。

だから先に牽制球を放つ。

——墮天使コカビエルと手を組めば、我々はあなたたちを完全に消滅させる。

例え、そちらが魔王の妹でもだよ。——と、私たちの上司より」

「……私が魔王の妹だと知っっているということは、あなたたちも相当上に通じている者たちのようね……。

ならば、言わせてもらおうね。

——私は墮天使などと手を組まない。絶対によ。グレモリーの名にかけて、魔王の顔に泥を塗るような真似はしない!!」

互いに視線を混ぜ合わせ拮抗状態の両者。

だが、ゼノヴィアはフツと笑った。

「それが聞けただけでもいいさ。

一応、この町にコカビエルがエクスカリバーを3本持つて潜んでいることをそちらに伝えておかなければ何か起こった時に、私が、教会本部が様々な者に恨まれる。

まあ、協力は仰がない。そちらも神側と一時的にでも手を組んだら、三竦みの様子に影響を与えるだろう？特に魔王の妹ならば尚更だ

よ」

それと先程は失礼な物言いをしてすまなかった。

謝罪の言葉を続け軽く頭を下げるゼノヴィア。悪い娘ではないよ  
うだ……。

「……正教会からの派遣は？」

先程よりかは多少表情を緩和させたリアス先輩は口を開く。

「奴らは今回のこの話を保留した。」

仮に私とイリナが奪還に失敗した場合を想定して、最後に残った1  
本を死守するつもりなのだろうさ……」

「では、2人で……？」

2人だけで堕天使の幹部からエクスカリバーを奪還するの？

……無謀ね。死ぬつもり？」

呆れ声のリアス先輩だが、イリナとゼノヴィアは決意の眼差しを向  
けていた。

「そうよ」

「私もイリナと同意見だが、できるだけ死にたくはないな」

「——っ。」

……死ぬ覚悟でこの日本に来たというの？

相変わらず、あなたたちの信仰は常軌を逸しているのね」

「我々の信仰をバカにしないでちょうだい、リアス・グレモリー。ね、  
ゼノヴィア」

「まあね。」

それに教会は堕天使に利用されるぐらいなら、エクスカリバーが消  
滅しても構わないと決定した。

私たちの役目は最低でもエクスカリバーを堕天使の手から無くす  
ことだ。

そのためなら、私たちは死んでもいいのさ。エクスカリバーに対抗  
できるのはエクスカリバーだけなのだから」

その言葉には待ったをかけたいくらいなのだが……あまり興味が  
ないためスルーしておく。

それにしても確かにこの信仰は常軌を逸しているな……。苦笑い

が込み上げてくるのを感じる。

「2人だけでそれは可能なのかしら?」

「ああ、無論、ただで死ぬつもりはないよ」

ゼノヴィアは不敵にそう言ってみせた。

「自信満々ね。秘密兵器でもあるのかしら?」

「さてね。それは想像にお任せする」

「……………」

「……………」

そのやり取り以降、両者は見つめ合ったまま、会話も途絶した。互いに腹の中を探りあっているようだ。

そんな中、イリナとゼノヴィアが目で合図を交わすと、立ち上がる。

「……………それではそろそろおいとまさせてもらおうかな。イリナ、帰るぞ」

「そう、お茶は飲んでいかないの? お菓子くらい振舞わせてもらおうわ」  
「いない」

リアス先輩の誘いをゼノヴィアは手を振って断った。

「ごめんなさいね。それでは」

イリナも手でごめん、としながらまるで興味のないように断る。

そしてそのまま2人はその場を後に——しなかった。

2人の視線は俺の隣、一誠の横で縮こまっているアーシアへと向けられたのだ。

「兵藤家で出会った時、もしやと思ったが、【魔女】アーシア・アルジェントか?」

まさか、この地で会おうとは」

と、ゼノヴィアは口にする。

【魔女】と呼ばれ、ビクンと、アーシアは体を震わせた。その言葉はアーシアにとって辛いものだというのに……………」

(……………そのまま帰ればいいものを……………)

イリナもそれに気がついたのか、アーシアをまじまじと見てくる。

「あなたが一時期内部で噂になっていた【魔女】になった元【聖女】さん?」



悪魔や墮天使をも癒す能力を持っていたらしいわね？

追放されて何処かに流れたとは聞いていたけれど……まさか悪魔なんかになっっているとは思わなかったわ」

「……あ、あの……私は……」

2人に言い寄られ、対応に困っている様子のアーシア。

「大丈夫よ。ここで見たことは上には伝えないから安心して。」

【聖女】アーシアの周囲にいた方々に今のあなたの状況を話したら、ショックを受けるでしょうからね」

「……………」

イリナの言葉に複雑極まりない、そして泣き出しそうな表情を浮かべるアーシア。

「しかし、悪魔か……」

【聖女】と呼ばれていた者。墮ちるところまで墮ちたものだな。

まだ我らの神を信じているか？」

「ゼノヴィア。悪魔になった彼女が主を信仰しているはずが無いでしょう？」

呆れた様子でイリナは言う。

「いや、その子から信仰の匂い————香りがする。抽象的な言い方かもしれないが私はそういうのに敏感でね。」

背信行為をする輩でも罪の意識を感じながら、信仰心を忘れない者がいる。

それと同じものをその娘から感じられるんだよ」

ゼノヴィアが目を細めながらそう言うと、イリナが興味深そうにまじまじとアーシアを見る。

「そうなの？」

アーシアさんは悪魔になったその身でも主を信じているのかしら？」

その問いかけにアーシアは悲しそうな表情で言う。

「……捨てきれないだけです。ずっと信じてきたのですから……」

そして伝う一筋の涙。

しかし、それを見てもまだゼノヴィアはアーシアに向かって布に包

まれた聖剣を突き出す。

「そうか。ならば今すぐ私たちに斬られるといい。

今なら神の名の下に断罪しよう。

罪深くとも、我らの神ならば救いの手を差し伸べてくれるはずだ」  
なんて勝手な物言いか……俺は腹の中で例えようのない怒りが込み上げてくるのを感じる。

しかし、まだ俺は動かない。動くべきではない。

何故なら――

「――触れるな」

――アーシアには一誠がいるのだから。

「アーシアに近づいたら、俺が許さない。

アンタ、アーシアを【魔女】だと言ったな……？」

「そうだよ。

少なくとも今の彼女は【魔女】と呼ばれるだけの存在であると思うが？」

「ふざけたこと言ってるじゃねえよッ！

救いを求めているアーシアを誰一人として助けなかったんだらう!?

アーシアの優しさが理解できない連中にそんなこという資格はないはずだ!!

友達になってくれる奴すら居ないなんて、そんなの間違ってるだろうがッ!!!

【聖女】に友人が必要だと思うか？

大切なのは分け隔てない慈悲と慈愛だ。

他者に友情と愛情を求めたとき、【聖女】は終わる。  
彼女は神からの愛だけがあれば生きていけた筈なんだ。  
最初からアーシア・アルジエントに【聖女】の資格はなかったのだ  
ろう」

——ぷちり、と俺の中で何かが切れた。

Side Out

~~~~~

Side 一誠

俺はゼノヴィアのまるでそれが当然だと言う言葉に怒りが爆発寸  
前だった。

いや、今も怒りに震えている。

しかし、それでもまだ言い返す程度で抑えられてた。

「自分たちで勝手に【聖女】にしておいて——ツツ!!?」

俺が再び口を開いた時、その場に——

——濃密な死の気配が充満した。

冷や汗が止まらない。

こんな濃密な死の気配……出せるのは一人だけ……。

俺はちらりとその発生源たる人物へ視線を向けた。

「——面白いこと言うじゃねえか……この狂信者」

その発生源たる人物——我が兄、土織は無表情でそう呟い  
た。

その姿におそらく反射的な行動だろう、ゼノヴィアとイリナはエクスカリバーを構えた。

カタカタと震える剣先。

士織から放たれるその殺気をダイレクトに浴びているであろう2人は恐怖に襲われているのだろう。

……余波でさえこの濃密な死の気配……ダイレクトに浴びているであろうあの2人は一体どれほどの恐怖を感じているのか……想像することすらできない……。

「そんなに固くなるなよ……ほら、さつきみたいにゴミみたいな自己解釈を語ってくれよ？」

「……ッ!？」

ゼノヴィアは声も出せない様子でしかし、剣は下げなかった。イリナは既に剣を下げて膝をついている。

「【聖女】?なんだそのふざけた呼び名は。

アーシアが何をした？」

貴様らが求めている分け隔てない慈悲と慈愛を与えるために行動しただけだろう?」

士織から発せられる殺気が止み、残ったのは冷たい雰囲気。

しかし、それがまた——恐ろしかった。

「ほら、早く反論しろよ。」

せっかく喋れるようにしてやったんだから……」

冷たい士織の視線は刺すようにゼノヴィアとイリナに注がれる。

ゼノヴィアは震える体を無理矢理止め、口を開いた。

「あ、悪魔を……癒したんだ……それは異端なこと——」

「……くっだらねえ」

ゼノヴィアの言葉に被せるように言った士織の言葉にゼノヴィアは目を見開いて言葉を噤んだ。

「分け隔てない慈悲と慈愛って言う言葉は何処に行ったんだよ？」

悪魔を癒すのは異端?ふざけるな。

アーシアは悪魔をも癒す分け隔てない慈悲と慈愛を持っているん

だろうが」

まるで溜息を吐くかのように吐き出された土織言葉にゼノヴィアもイリナも反論することが出来ない。

「……結局その程度かよ……狂信者が……」

全く、話にならねえわ……」

土織は今までの雰囲気を霧散させ、くるりと背を向けた。

そしてそのまま扉に向かって歩みだす。

「……ま、待てッ!!」

土織を呼び止める声がゼノヴィアから上がる。

「あそこまで……コケにされて……黙ってはいられない……ッ!」

ゼノヴィアは震える剣先を土織に向かって突き出す。

「私と戦え!兵藤土織……ッ!!」

その言葉に立ち止まる土織。

そして、一瞬考えるように腕を組むと口を開いた。

「……俺と戦いたいならその祐斗に勝ってからしろ」

「……っ!?!」

し、土織さん……っ?!」

突然名指しにされた木場は驚愕の表情を浮かべる。

しかし、その表情の中に何処か嬉しそうなものが混じっているように見えた。

ゼノヴィアは木場の方を品定めするように見つめるとフツ、と笑う。

どうやら木場の事を弱いと思ったらしい。

「祐斗……戦うよな?」

土織の言葉に初めは戸惑っていた木場もこくりと頷き笑った……  
凜猛に……。

「うん。……僕が相手になろう」

特大の殺気を体から発して、木場は剣を携える。その殺気も先程の士織に比べれば赤子の遊びのようなもの。

しかし――

「キミで相手になるわけが無い……」

――それが弱いという訳ではない。

ただ、狂ってしまったのだ、士織の極大な殺気を浴びたせい……。

ゼノヴィアはまるで興味を示さずフツと、また笑った。

「そんなことはないさ……何せ僕は君たちの先輩なんだから。」

――失敗だったようだけどね」

瞬間、木場を囲むように無数の魔剣が出現していた。

く戦って取り戻しましたく

オツス、兵藤一誠だ。

先程までは確かに部室にいたのはずなのだが……

「……いやはや、どうしたもんかな……」

——俺は球技大会の練習をしていた場所に木場とともに立っていた。

顔を上げてみれば、少し離れた場所にイリナとゼノヴィアがやる気十分といった姿で立っている。

そんな俺たち4人の周辺を丸ごと囲むように紅い魔力の結界が発生していた。

「では始めようか」

イリナとゼノヴィアは白いローブを脱ぎ捨て、黒い戦闘服……って何だあれ……もはや全身タイツっぽいな……。

俺は苦笑いを浮かべながら二人の姿を観察する。

ゼノヴィアは得物の布を取り払い、エクスカリバーを解き放つと軽く振り回す。

イリナの方は紐のような姿をとっていたエクスカリバーを日本刀の形へと変えていた。

——さてさて、少し遅いが何故俺がこの場に立っているのかを説明しておこうと思う。

初めは木場とゼノヴィアの一騎討ちの予定だったのだが、イリナも参戦することになり、では相手は誰がする？という雰囲気になった。

そんな中、士織の視線が俺に突き刺さったのだ。

そして、なあなあの内<sup>に</sup>此処に立つ……という状況に陥ってしまった……。

「……まあ、やるからには勝たないと……」

内心愚痴を吐きながらも俺は、ブラステッド・ギア【赤龍帝の籠手】を発動させる。

いつも通りの赤い籠手が右腕に出現し、頭が冴えるような感覚が身

体を包む。

木場の方へも視線をのばせば既に神器を発動させており、自らの周りに魔剣を数本出現させているのが見え――

――【魔剣】……??

俺は（必要ないと思うが……）安全上、結界外で観戦している土織の方へと顔を向けた。

その顔には幾ばくかの怒りとしかし、それを上回るほどの呆れの色が見える。

額に手を当てながらも静かに戦いの始まりを待っているようだ。

「……笑っているのか？」

ゼノヴィアが不意に木場へと問いかけた。

木場は不気味なほどの笑みを浮かべており、何時もの爽やかフェイスの面影などひとつもなくなっている。

（……そこまで憎いのか……聖剣が……）

俺は木場の様子にその思いがどれほどのものなのかを少しだが感じた。

「うん。」

倒したくて、壊したくて仕方がなかったモノが目の前に現れたんだ……。それが凄く嬉しくてさ……。

……ふふふ、悪魔やドラゴンの傍に居ると力が集まるとは聞いていたんだけど……まさかこんな幸運を運んできてくれるなんて……ね……？」

木場の周りの地面が見えなくなるほどの魔剣が出現する。

その一本一本に禍々しい気配を感じた。

「……【魔剣創造】か。」

【魔剣創造】の所有者は頭の中で思い描いた魔剣を創り出すことが可能。

魔剣系神器の中でも特異なもの。

……『聖剣計画』の被験者で処分を免れた者がいるかもしれないと



は聞いていたが……それはキミか？」

その間に木場は答えない。その代わりに殺気を放ち威圧している。今にもゼノヴィアごと殺しそうな雰囲気だけど……まあ、士織もいることだし大丈夫だろう。

俺はそう自分に言い聞かせ、自分の相手であるイリナの方へ向き直った。

「兵藤一誠くん」

「おう。何だよイリナ」

昔は男の子のような見た目で、言動で、一時期は本当に男だと思っていた幼馴染。

今ではすっかり女の子らしくなって……うん、普通に可愛い。

「再会したら、懐かしの男の子は悪魔になっていた……。ショックだったわ」

「そう残念そうな顔すんなって。

悪魔でも別に不自由なんてしてないぜ？」

そう言った俺に対して、イリナは哀れむような視線を向ける。しかも頬を涙が一筋伝っていた……。

「可哀想な兵藤一誠くん……。ううん、昔のよしみでイツセーくんって呼ばせてもらおうわね。

そして、なんて運命のイタズラ！

聖剣の適性があって、イギリスに渡り、晴れて主のお役に立てる代行者となれたと思ったのに！

ああ……これも主の試練なんだわ！

久しぶりに帰って来た故郷の地！懐かしのお友達が悪魔になっていた過酷な運命！

時間の流れて残酷だわ！

でも、それを乗り越えることで私は一步また一步と真の信仰に進めるはずなのよ！

さあ、イツセーくん！私がこのエクスカリバーであなたの罪を裁いてあげるわ！アーメンっ!!!」

イリナは涙を浮かべつつも張り切った様子で聖剣の切っ先をこち

らへ向けてくる。

……あ、あれ？この娘、難易度の高い言葉をマシンガンのように飛ばして来るよ!?

おお?!瞳がお星様ののようにキラキラ輝いてやがるぞ!?

(信仰に酔っていやがりますか……)

『相棒、加減はしろよ?』

突然、ドライグが声をかけてくる。

……そんなに心配しなくても大丈夫だったの。

(分かってる……流石に殺しまう訳にはいかねえしな)

ひとまずは【禁手】は勿論倍加のし過ぎも厳禁……そうだな……多  
くても5回……か?

『それでも多いくらいはあるが……まあ良いだろう』

ドライグはそれだけを言い残すと言葉をかけるのをやめた。そして、その代わりに【赤龍帝の籠手】から『Boost!!』の音声が出た。

俺の神器からの音声を聞いたイリナとゼノヴィアが驚いたような表情を浮かべる。

「……【神滅具】」

「それって……【赤龍帝の籠手】?」

こんな極東の地でウエルシュ・ドラゴン赤い龍の帝王の力を宿した者に出会うなんて……」

どちらも顔をしかめ、俺の方を向いていた。

——と、その時、木場の方から殺気が溢れ出す。

「……イツセーくんにはばかり気を取られているとケガじゃ済まなくなるよ……?」

しかし、ゼノヴィアはその殺気に大した反応を見せる訳でなく、ただ不敵に笑った。

「【魔剣創造】に【赤龍帝の籠手】。さらにはアーシア・アルジェントの持つ【聖母の微笑】」

……我々にとって異端視されている神器ばかりだ。悪魔になるの

も必然と言えるかもしれないな……」

そう言い切るとエクスカリバーを構える。

木場もそれに対して魔剣を一本手に取ると、青眼に構えた。

「……僕の力は無念の中で殺されていった同志の恨みが生み出したモノでもある……」

この力でエクスカリバーを持つものを倒し……そのエクスカリバーを叩き折るツツ!!」

やはり、木場は復讐を誓っていたか……。

ゼノヴィアと木場。二人の剣士の斬り合いを片手間に見ながらそんな考えが頭に浮かんだ。

「こちらもいくよ、イツセーくん!」

「おつと……!」

流星にその剣に斬られるわけにはいかねえからな……」

俺は斬りかかってきたイリナの太刀筋を読み、最低限の動きで躲す。

そのまま幾度となく日本刀と化したエクスカリバーを振るってくるが、しかし遅い。

この程度の動きなら完全に見切る事が可能だ。

『Boost!!』

「おし……3回もありや十分か……」

【赤龍帝の籠手】から響く倍加の合図に反応し、バックステップでイリナから距離を取る。

「んじゃ……終わらせるか」

『Explosion!!』

その音声と共に、俺の体に力が溢れるのを感じた。

(この感じなら……いけそうだな)

俺は右手に魔力を集める。

イリナは俺の行動、そして急に上がった【力】に一瞬驚愕の表情を浮かべたが、このままでは不味いと感じたのだろう、エクスカリバーを構えて走り寄って来た。

『それは悪手だ小娘』

俺の中に響くドライグの声。

まあ、確かにその通りだけだな……。

俺は集めた魔力を握り締め、地面へと叩きつけた。しかし、地面が傷つくことはない。

「何をして——ツツ!？」

イリナは怪訝そうな表情を浮かべたがそれも一瞬。

何故なら、イリナの足元から魔力の纏った土の槍が飛び出したから。

「新技……ドラゴナー・オツツ【龍の鋭骨】」。

魔力の扱いがアホみたいに難しいけど……応用が利くんだぜ?」

土の槍はイリナの行動を阻害するように、しかし、直撃はさせずに飛び出していた。

なんとか抜け出そうとしているようだがしかし、それはかなわない。

「ほら、無駄に動くなつて。」

どうせこれで俺の勝ちだし?」

「そ、そんなのわからな——くないですごめんなさい!!」

俺の方を向いて否定しようとしたイリナだったが、俺の手に再び集められる魔力を見た途端謝罪の言葉を口にした。

「んじゃ、俺の勝ちだな?」

「……悔しいけど……私の負けみたい……」

イリナが負けを認めたので、俺は土の槍を纏っている魔力を消して、イリナを救出する。

地面にそのまま座り込み頬をふくらませ、俺を見つめるイリナ。

「そんなに強いなんて聞いてないわ!」

「聞いてないわって……それくらい言わなくてもわかれよ!」

俺はため息混じりにそう返すと、すぐに視線を別の場所へと移した。

横でギャーギャー何かを言っているようだったが俺はそれを聞き

流していた。

視線と意識は斬り合いを行っている木場とゼノヴィアの方へ向ける。

「…………この剣はもう駄目か…………」

【破壊の聖剣】相手によく持ったほうだ」

ボロボロの様子の木場の魔剣。

木場の魔剣も聖剣相手には分が悪いようだ。

「なら、気を取直して！

燃え尽きろ！そして凍り付け！フレア・ブランド【炎燃剣】！フリーズ・ミスト【氷空剣】！」

魔剣を投げ捨てたかと思えば、次の瞬間には2本の魔剣が木場の手には握られていた。片や業火を渦巻き、片や冷氣放ち、霧氷を発生させる。

【騎士<sup>ナイト</sup>】である木場の長所はスピード。2本の魔剣を巧みに操り、ゼノヴィアを攻め立てていた。

少々苦しそうな表情を浮かべるゼノヴィアであったが……

「ふッッ!!」

掛け声とともにエクスカリバーを一振り。

その一振りだけで、木場の魔剣は粉々になってしまう。

「…………ツッ?!」

たったの一撃により破壊された自分の魔剣を見て木場は絶句する。

「我が剣は破壊の権化。砕けぬモノなど存在しない」

ゼノヴィアは器用に長剣を回したかと思えば、天にかざし、地面へと振り下ろした。

————ドオオオオオオオオンツッ!!!

激しい地響きと砂埃が辺りを支配する。

俺は手で顔を覆って砂埃を防ぐ。

砂埃が収まり、目を開けば、そこに広がっていたのは————クレーター。

ゼノヴィアが聖剣を振り下ろした場所が大きく抉れ、クレーターを作り出していたのだ。

……アレが聖剣の力か……。

思いの外強力だった聖剣に俺は眉をひそめる。

破壊力的には俺の【禁手】バランス・ブレイカーと同じかそれより少し下つてところか……。

あれを相手するなら【亜種禁手】の方でしたいところだな……。

俺はそんな思考を巡らせながら、明らかに変わるであろう戦況を見逃さぬように集中することにした。

Side Out

~~~~~

Side 三人称

「……真のエクスカリバーでなくてもこの破壊力……。

七本全てを消滅させるのは修羅の道か」

そう呟いた祐斗は偶然にも視線を外に向けた。

今から行う破壊力比べに負けぬ魔剣を創り出すために気分を変えたかったのだ。

——しかし、そんな祐斗の視線はある人物と交わることとなる。

「……………」

「……………」

交わった視線は祐斗と土織。

互いに無言で見つめ合うと——祐斗は笑った。

「……どうした？気でもやったか？先輩」

祐斗の笑みにそんな挑発めいた言葉をかけるゼノヴィア。

どうやら祐斗の笑みを絶望的な力の差から出たものだと感じたよ  
うだ。

「いや、違う」

聞こえてきた祐斗の声は先程までの憎しみに支配されたような声ではなく、まるで自分に呆れたような声だった。

「僕はなんて馬鹿な事をしたんだろうって思っただけさ。何せ——」

——本気で戦ってなかったんだから。

「……何?」

祐斗の言葉に眉をひそめるゼノヴィア。

しかし、祐斗はそんなこと関係ないと言わんばかりに口を開いた。

「此処から仕切り直しだよ。」

……さっきまでの僕と同じだと思ったら——今度こそケガじゃ済まなくなるよ?」

言つて、祐斗はひと振りの刀を創り出す。

これといって特徴のないシンプルな日本刀を……。

「……へえ……?」

確かにさつきとは違う雰囲気だ」

ゼノヴィアは祐斗を見つめるとそう口にした。そして、「破壊の聖剣」を構えると駆け出す。

それに対して祐斗は姿勢を低く、足を開く。刀を腰の位置で固定すると柄を握り締めた。

——拔刀術の構えだ。

「はあああああああアツツ!!」

「おおおおおおおおおアツツ!!」

雄叫びを上げながら、2人は交差する。

——鳴り響く金属音。

——吹き飛ばす衝撃波。

——抉れる大地。

そして、立ち尽くす背を向けあった2人。

「……………」  
「……………」

無言で2人は動かない。

しばしの静寂の後——笑った。

そして、祐斗の日本刀は粉々に砕け散る。

「…………やるじゃないか先輩」

ゼノヴィアはそう言うのと腹部を押さえた。

見ればうつすらとだが血が滲んでいる。

だが、それは致命傷ではない。いうなら少々動きにくくなっただけだろう。

2人は振り返ると、ふつ、と笑いそれ以上のことは何もしなかった。

「イリナ!!」

「な、なに?」



ゼノヴィアはイリナの名を呼ぶと2つの白いローブを手に取ると、片方を羽織り、もう一方の白いローブをイリナに投げ渡す。

「帰るぞ」

「え……う？」

「しよ、勝負はもういいの?!」

ゼノヴィアの短い言葉にイリナはそう返事をする。

「ああ。」

「この勝負はもういい。」

それに、あちらも戦う気はないみたいだしな」

言いながら、ゼノヴィアはエクスカリバーに布を巻き付ける。

そして、一誠の方へ視線を移すと事務的な口調で言葉を放った。

「赤龍帝、ひとつだけ言っておく。」

バニシング・ドラゴン  
【白い龍】は既に目覚めているぞ」

その言葉を聞いた一誠は眉をひそめる。

しかし、返事は返さない。

その様子を見たゼノヴィアは再びふつ、と笑うとフードを被り、その場を後にした。

「え、えつと……今度は負けないからね！ イツセーくん!!」

「ちよつと待ってよゼノヴィア〜っ!!」

イリナも捨て台詞のようなモノを残して、スタスタと歩いていくゼノヴィアを追いかけて行った。

「イツセーくん」

「な、なんだ？」

2人の姿が消えた後、祐斗は一誠に声をかけた。

「ごめん、僕はもう少しだけここを離れる。」

だから、みんなに言っておいて欲しいんだ。

『僕はもう大丈夫』ってね」

「そんなの自分で言えば——」「頼んだよ」……ってオイ!!」

祐斗は一誠の言葉に被せるようにそれだけを言い残すと足早に去っていった。

一誠はため息を吐くと頭をガシガシと搔く。

そして、こちらへとやってくる皆の方へ歩み寄って行った。

祐斗の言葉を伝えるために。

く 搜索しましたく

オツス、兵藤一誠っス。

教会の関係者であるゼノヴィア、イリナとの衝突から次の日、俺は小猫ちゃんと会長眷属の【<sup>ポーン</sup>兵士】である匙を呼び出し、近場のカフェに訪れていた。

「あ〜……。で？俺を呼び出した理由は？」

気だるそうな匙。

今日は無理言って呼び出したために仕方がない態度だろう。

「……そうです。」

私まで呼び出して何の用事ですか？」

小猫ちゃんはチョコレートパフェをつつきながら無表情にそう言った。

「ああ……。」

休みの日に呼び出しちまって悪いな。

……実は折り入って頼みがあるんだわ」

「……頼みですか？」

「面倒事の予感が……」

小猫ちゃんは首をこてんと横に倒し、匙は引き攣った表情を浮かべる。

……匙はまあ、イイ勘をしているな。

俺は咳払いを挟みゆつくりと口を開いた。

「……………聖剣エクスカリバーの破壊許可を取るのを手伝ってくれ」

俺の言葉に匙どころか、小猫ちゃんまで目を丸くして驚愕の表情を作り出した。

「嫌だあああああつ!!俺は帰るんだあああああつ!!!」

悲鳴をあげて逃げようとしている匙。それを小猫ちゃんが掴んで離さないでいる。

少々……いや、普通に騒がしいがこれを見越して外の席にしといて良かった……。

俺がエクスカリバー破壊作戦を提案すると、小猫ちゃんのはしはしの間考え込んで『……私も協力します。祐斗先輩のことですよね?』と察してくれた。

匙の方は聞くなり青ざめて逃げようとしたのだが、それを小猫ちゃんに許さなかったと……。

「兵藤ーなんで俺なんだよ!!」

これはお前ら眷属の問題だろう!!俺はシトリー眷属だぞ!!

関係ねえ!関係ねえええええつ!!!」

匙は涙を流しながら訴える。

「まあ、そう言ってくれるなよ。

俺が知ってる悪魔で協力してくれそうなのはお前くらいだったからよ」

「ふざけんなあああつ!!!」

俺がテメエの協力なんかするわけねえええだろおおおつ!!!

殺されるっ!!俺は会長に殺されるうううっ!!!」

更に青ざめた表情を浮かべる匙。

随分と会長のことが怖いと見える……。

「お前んところのリアス先輩は厳しいながらも優しいだろうよ!!  
でもな!!俺ん所の会長はな!厳しくて恐ろしいんだぞ!!」

「そうか、それはお気の毒様。

……んじや、イリナたちを探しに行くか……。

小猫ちゃん、匙を連れてきてもらっていいか？」

「……わかりました」

「ちよつ!？」

俺の意思はどうなって——つて力強つ!？」

なんとか逃げようとする匙であったがしかし、小猫ちゃんに引きずられながら連行されていく。

「なあ、小猫ちゃん。

小猫ちゃんは木場が『聖剣計画』の犠牲者でエクスカリバーに恨みを持つているのは知ってるよね？」

俺の問いかけに小猫ちゃんは首を縦に振り、肯定の意をあらわす。

「イリナとゼノヴィアが俺たちのところへ来た時に2人は『教会は堕天使に利用されるぐらいなら、エクスカリバーが消滅しても構わない。』

私たちの役目は最低でもエクスカリバーを堕天使の手から無くすことだ』って言った。

つまり、2人は奪われたエクスカリバーを最悪破壊して回収するってことだろ？」

「……はい、そうですね」

「なら、その奪還作業を手伝わせてくれないかなって思ったんだよ。

勿論だけど木場を中心にして。

3本も奪われたんだから1本くらい俺らがやっちゃっても構わないだろ？」

「……祐斗先輩にそこでエクスカリバーに打ち勝ってもらい、想いを果たして欲しいと言うわけですね？」

「そくゆうこと」

俺は小猫ちゃんの言葉に笑顔で頷く。

木場自身はもう大丈夫だと言ったけどいつまた暴走するかわからない。

だったら、合法的にその想いを果たして貰えばいいというわけだ。  
「木場はエクスカリバーに勝って、自分と昔の仲間の復讐を果たしたい。」

ゼノヴィアたちは墮天使たちからエクスカリバーを破壊してでも奪いたい。

この2つの意見は一致してる。後は2人が俺ら【悪魔】の言葉に耳を傾けてくれるかが問題だな……」

「……それは難しそうですね……」

「ああ……やっぱり?」

小猫ちゃんもそう思う?」

やはり俺たちが【悪魔】だってことがマイナスだろう。可能性は高くない。しかも——。

「……部長やほかの部員には内緒」

そう。小猫ちゃんの言う通りだ。

この話、リアス部長や朱乃先輩の耳にいれるわけにはいかない。リアス部長は絶対に拒否するだろう。

『祐斗のためとはいえ、天使側の問題に首を突っ込むべきではないわ』  
——と。

上級悪魔だもんな、その辺厳しいはずだ。

「……その話し合いがうまく行ったとしても相手はかなりの手練れみたいだし……もしかしたら……というかほぼほぼ確実に危険な目に遭う……」

敵はコカビエルとかいう名の知れた墮天使らしいし、更にはエクスカリバーという悪魔の天敵を相手にしなければならぬ。

「だから、小猫ちゃんは降りてもいいよ。」

匙は……まあ、ギリギリまで踏ん張ってくれ」

「いや、降りさせるよ!」

それだけ脅しておいて俺だけ降りる選択肢がないとかどういう了見だ兵藤!!」

しかも、エクスカリバー破壊なんて勝手なことしたら会長に殺されちまう!絶対に拷問だあああああつ!!」

小猫ちゃんに連行されながらじたばたと体を動かしてなんとか逃げ出そうとする匙。

おお……男の号泣とか滅多に見られねえわ……。

「私は逃げません。仲間の為です」

「……そっか」

小猫ちゃんのはつきりとした物言いとその強い眼差しに俺は頬が緩むのを感じる。

小猫ちゃんってなんだかんだ熱い娘だな……。

と、ゴタゴタがありながらも町中を探すこと約20分。

やはり、ゼノヴィアたちは見つからない。

……それもそうか。極秘任務中である白いローブを着た女性2人組みなんてそう簡単に見つかるはずが――

「えー、迷える子羊にお恵みを」

「どうか、天の父に代わって哀れな私たちにお慈悲をおおおお!!!」

――簡単に見つかった……。

「……何やってんだ? あいつら」

「……怪しすぎます」

「……おい兵藤。あいつらが探してた奴らなのかよ?

……どう考えてもアホの子だらアレは……」

先程まで泣き喚いていた匙が突然真顔になったかと思うとそんな

ことを眩く。

俺たち3人は物陰に隠れて、そんな言われたい放題の2人を観察してみる事にした。

路頭で祈りを捧げる白いローブの女の子2人組み。……いや、目立つ目立つ。

何やら相当困っているようだ。通り過ぎて行く人々も奇異な視線を向けていた。

「……なんてことだ。これが超先進国であり経済大国日本の現実か……。」

これだから信仰の匂いもしない国は嫌なんだ  
「毒づかないでよゼノヴィア。」

路銀の尽きた私たちはこうやって、異教徒どもの慈悲なしでは食事を取ることもままならないのよ？

ああ……パンひとつさえ買えない私たち！

「ふん。もとはといえば、お前が詐欺まがいその変な絵画を購入するからだろう」

ゼノヴィアが指さす先には辛うじて人と認識できる物体が描かれた下手な絵画があった。

……何故買った？イリナ、お前は何故その変な絵を買っちゃったんだ……？

「何を言うの！この絵には聖なるお方が描かれているのよ！

展示会の関係者もそんなことを言っていたわ！」

「ほう？じゃあそれが誰かわかるのか？

私には誰一人として脳裏に浮かばないぞ？」

ゼノヴィアは腕を組みジトつとした視線をイリナに向ける。

「……私には変なオブジェクトにしか見えません」

「右に同じく」

「以下同文」

俺たち3人はそんなことを眩く。

「……多分……ペトロ……さま？」

「ふぎけるな。聖ペトロがこんな姿をしているわけ無いだろう」



ゼノヴィアの言う通りだと俺たち3人は合わせてもないのに同時に首を縦に振る。

「いいえ！こんな姿なのよ！」

私にはわかるもんっ!!」

「……ああ……どうしてこんなのが私のパートナーなんだ……。」

主よ……これも私に課された試練なのですか……?」

「ちよつと！頭を抱えないでよ！」

あなただって沈むときはとことん沈むわよね」

「うるさい！」

これだからプロテスタントは異教徒だと言うんだ！

我々カトリックと価値観が違う！聖人をもっと敬え！」

「何よ！古臭いしきたりに縛られてるカトリックの方がおかしいのよ!!」

「……なんだと？異教徒め」

「何よ！異教徒!!」

ついには頭をぶつけながら喧嘩を始めてしまう始末……。

—————  
ぐううううううう……。

しかし、離れたところで観察していた俺たちのもとにも届くほど大きな腹の虫。

腹がなるなり、2人は力なくその場に崩れ落ちる。

「……まずはどうにかして腹を満たそう。」

そうしなければエクスカリバー奪還どころではない……。」

「……そうね。それじゃあ、異教徒を脅してお金を貰う？」

主も異教徒相手なら許してくれそうなの……。」

「寺を襲撃するのか？それとも賽銭箱とやらを奪うか？どちらもやめておけ。」

此処は剣を使って大道芸でもしよう。

どの国でも通じるインターナショナルな娯楽だ」

「それは名案ね！エクスカリバーで果物でも斬れば路銀は溜まるはず

！」

お前たちはエクスカリバーをなんだと思っっているんだ……。

俺は2人の会話に頭を抱える。

すると、小猫ちゃんと匙がポン、と肩を叩いてくれた。

……2人も俺と同じ気持ちなのか……。

「まあ、その、果物が無い訳だが。

……仕方がない。その絵を斬るか」

「ダメっ！これはダメよ！」

そういいながら再び喧嘩を始めてしまう2人。

俺はそんな2人の様子に溜息をつきながらと、小猫ちゃんと匙に待っているよう伝える。そして、立ち上がるとゆっくりとアホの子2人組みに近づいていった。

「そこの御2人さん？」

俺が声をかければ今にも泣き出しそうな表情をしながらこちらに振り向くイリナとゼノヴィア。

「今から飯食いに行くんだけど……来る？」

「行くっ!!!」

瞳を輝かせ身体を乗り出しながら即答するイリナとゼノヴィアだった。

……何このちよろい2人組み……。

俺は苦笑いを浮かべながらも近くのファミレスに2人を案内した。

勿論だが、小猫ちゃんと匙も一緒だ。

く交渉しましたく

S i d e 一誠

「美味いっ！」

日本の食事は美味いぞっ!!」

「うんうんっ！これよ！これが故郷の味なのよ！」

ガツガツとファミレスで注文したメニューを腹に収めていくゼノヴィアとイリナ。

……圧巻の食べっぷりだな……こいつら本当にキリスト教本部からの刺客なのか……？

ファミレスに着くまでに小猫ちゃんがお金を出しましたよとか？と言ってくれたが流石に女の子に出してもらうのは俺のプライド的にダメだったため丁重にお断りした。

……が、ゼノヴィアとイリナの食べている量を見ると溜息が出てくる。

……ああ……俺の財布が……軽くなっていく……。

「ふうく……落ち着いた。」

キミたち悪魔に救われるとは、世も末だな」

「おいおい……遠慮なく食っておいでその言い草はないだろ」

ゼノヴィアの言葉に苦笑いが浮かぶ。

「はふうく……」馳走様でした。

ああ……主よ。心優しき悪魔たちにご慈悲を」

胸で十字を切るイリナ。

「「うっ！」」

その瞬間、俺の頭に鈍い痛みがはしる。

周りを見れば小猫ちゃんと匙も同じように頭へ手を当てていた。

どうやら目の前で十字を切られたため、俺ら悪魔は軽めであったがダメージを受けたようだ。

「あー、ぐめんなさい。」

つい十字を切ってしまったわ」

てへっと可愛らしく笑うイリナ。

……普通に見るぶんには可愛い女の子なんだけども……。昨日の姿を思い出すとやはり苦笑いに包まれる。

水を飲み、息をついたゼノヴィアは改めて俺たちに訊く。

「で、私たちに接触してきた理由はなんだ？」

「あく……やっぱり偶然じゃなかったって分かっちゃうか……」

まあ、確かにあの出会い方は偶然ではないとわかるだろう。

「単刀直入に言わせてもらう。」

——エクスカリバーの破壊に俺たちも参加させてくれ」

俺の言葉にゼノヴィアとイリナは目を丸くさせて驚いている様子だった。互いに顔を見合わせてもいた。

しばしの沈黙の後、ゼノヴィアが口を開く。

「……そうだな。1本くらい任せても良いだろう。……破壊できるのであればね。」

ただし、そちらの正体がバレないようにしてくれ。こちらこそこちらと関わりを持っているように上にも敵にも思われたくはない」

「……随分とすんなり許可してくれるんだな。」

話を持ちかけた俺が言うのもなんだが……良いのか？」

「そ、そうよ！ゼノヴィア、本当に良いの？」

相手はイツセーくんとはいえ、悪魔なのよ？」

俺の言葉に乗るようにして異を唱えるイリナ。まあ、普通の反応はそうだ。

「イリナ、正直言って私たちだけでは3本のエクスカリバーを回収するのとコカビエルとの戦闘は辛い」

「それはわかるわ！けれど！」

「最低でも私たちは3本のエクスカリバーを破壊して逃げ帰ってくればいい。」

私たちのエクスカリバーも奪われるくらいなら、自らの手で壊せばいいだろう。

……で、奥の手を使ったとしても任務を終えられる確率は高くても6割、無事帰れる確率にいたっては3割を切るだろう」

「それでも高い確率だと私たちは覚悟を決めてこの国に来たはずよ

「……？」

「そうだな、上にも任務遂行して来いと送り出された。

……これは自己犠牲に等しい」

「それこそ、私たち信徒の本懐じゃないの」

「気が変わったのさ。私の信仰は柔軟でね。いつでもベストなカタチで動き出す」

「あなたね！前々から思っていたけれど、信仰心が微妙におかしいわ！！」

「否定はしないよ。

……だが、任務を遂行して無事帰ることこそが、本当の信仰だと信じる。

生きて、これからも主のために戦う。——違う……？」

「……違うわい。……でも……」

「だからこそ、【悪魔】の力は借りない。

——その代わりに【ドラゴン】の力を借りる。上もドラゴンの力を借りるなどは言っていない」

そう言ったゼノヴィアの視線が俺に向けられる。

何と言う屁理屈……だが、俺たちにとってはその屁理屈が都合がいい。

「まさか、こんな極東の島国で【赤龍帝】に出会えるとは思わなかった。

先日の戦いを少しだが見せてもらったが……かなりの實力を持っていると見た。

キミほどの實力があればエクスカリバーを破壊することも可能だろうし、この出会いも主のお導きと見るべきだね」

嬉々とした表情を浮かべゼノヴィアはそう語る。

「た、確かにドラゴンの力を借りるなどは言ってこなかったけど……。いくらなんでも屁理屈が過ぎるわ！

やっぱりあなたの信仰心は変よ！」

「変で結構。しかし、イリナ。

彼はキミの古い馴染みだろうか？信じてみようじゃないか。彼の實力とドラゴンの力を」

ゼノヴィアの言葉にイリナも黙り、承知の空気を出していた。まあ、そこまで期待されると答えないわけにはいかないだろう。俺は頼んでおいたコーヒー口にし、笑う。

「OK。商談成立ってな。」

俺はドラゴンの力を貸す。

んじゃ、今回の俺のパートナーを呼ばせてもらうぜ？」

俺は懐のスマホに手を伸ばし、木場へ連絡を入れたのだった。



「話は分かったよ」

木場は真面目な表情を浮かべ、コーヒーに口をつけた。

「正直言うと、エクスカリバー使いに破壊を承認されるのは遺憾だけど……感謝するよ」

「へえ……？なんだか雰囲気が変わったみたいだね？先輩？」

「……少しだけ冷静になっただけさ。」

まだ憎いものは憎い。……けど憎しみにだけ目を向けては出来るものも出来なくなるからね」

木場の瞳に一瞬灯った憎しみの炎は以前より濃くなっているように見えた。しかし、それを補うような冷静な雰囲気が今の木場にはあった。

「ところで、今回の件に関しての情報は？」

「……今のところこれと言ったものはない」

ゼノヴィアは難しそうな表情を浮かべる。

が、その一瞬後に、何か思い出したかのように口を開く。

「……いや、今思い出したが……今回の件にあの『皆殺しの大司教』バルパー・ガリレイが関与している可能性がある」

「……バルパー・ガリレイ？」

木場はその名前に疑問符を浮かべ復唱する。そして、それに対してゼノヴィアが表情を変えることももったいぶる事もなく、口を開いた。

「『聖剣計画』の責任者だ」

「ツツ!？」

ゼノヴィアから告げられた言葉に、木場は動揺してか、慌てたように立ち上がる。

何か言いたそうな表情を浮かべたが、深呼吸すると、ゆっくりと座り、眩くような口調で口を開いた。

「……それが僕の……ターゲット目標」

木場の瞳には新たな決意のようなものが生まれていた。明確な目標ができただけでもその情報はありがたい物だろう。

「僕も情報を提供した方がいいみたいだね。」

先日、エクスカリバー——エクスカリバー・ラビッドライ確か「天閃の聖剣」と言ったかな？ それを持った者に襲撃されたよ」

「「「「「」」」」」

木場の話した内容にこの場にいた全員が驚きの表情を浮かべた。

——が、俺はそれだけでなく、一瞬だが浮かべられた木場の悔しそうな表情に意識を奪われた。

「相手の名はフリード・セルゼン。」

「この名前に覚えは？」

フリード・セルゼン……奴がまだこの町に潜伏してるのかよ……。

木場の言葉にゼノヴィアとイリナが目を細めた。

「なるほど、奴か……」

「フリード・セルゼン。」

元ヴァチカン法王庁直属のエースエクソシスト。年齢十三歳でエクソシストになったかと思えばその僅か1ヶ月後には最強の名を思うがままにした本物の天才……。悪魔や魔獣を次々と滅していく功績は大きかったわ」

「……だが、奴はあまりにも強すぎ、そしてやり過ぎた。同胞すらその手に掛けたのだからね。」

フリード・セルゼンには信仰心なんてものは最初からなかった。あつたのは人外、特に悪魔や堕天使への敵対意思と濃密な殺意。

そして、異常なまでの復讐心。

異端に掛けられるのも時間の問題だった」

「……復讐心？」

俺はその言葉に疑問を抱き、つい質問として言葉を発してしまう。

「……私はあまり知らないが……奴は『奴らは許さない……絶対に』繰り返すこと言っていたそうだ」

『奴らは許さない……絶対に』……か」

ゼノヴィアからの返答に、フリード・セルゼンには何か裏があるのではないかと、そう思ってしまった、気になって仕方がない。

「しかし……そうか……」

あのフリード・セルゼンが聖剣を持っているのか……これは一筋縄では行かないようだな……」

苦虫を噛み潰したような表情で重々しくそう呟くゼノヴィア。イリナもそれと同意見らしく、表情が曇っていた。

……それほどまでに強いのか、あの男は。

「まあいい。」

取り敢えず、エクスカリバー破壊の共同戦線といこう」

ゼノヴィアはペンを取り出すと、メモ用紙にペンを走らせ、連絡先をこちらへとよこした。

「何かあったらそこへ連絡をくれ」

「サンキュー。じゃあ、俺たちの方も——」

「イツセーくんの番号は葵泉さんから頂いてるわ」

「はい!？」

母さん何勝手なことしてるの!？」

イリナの言葉にその場にはいない母さんへの疑問を口に出してしまふ。

どうせ母さんのことだから軽い気持ちで「電話でもしてみたら？」と言う感じにわたしたのだろう……」

この分だと土織の番号も渡してるんだらうなあ……」

俺は頭が痛くなるのを感じ、溜息を吐いた。

「では、そういうことで。」

食事の礼、いつかかならず。赤龍帝の兵藤一誠」



「食事ありがとうね、イツセーくん！また奢ってね！」

悪魔だけど、イツセーくんの奢りならアリだと主も許してくれるはずだわ！ご飯ならOKなのよ！」

二人はそう言い残して席を立って行った。

見送りのも軽く済ませた俺たちは再び元の席に戻る。

「……イツセーくん。どうしてこんなことを？」

木場が静かに訊いてくる。

こいつにしてみれば自分の私的な恨み事をどうして手助けしてくれるのか不思議なんだろうな。

「ま、仲間だし、眷属だしな。」

それに、お前には助けられたことがあったし、別に借りを返すとかそんなじゃないけど、今回はお前の力になりたくてな」

「僕が勝手に動けば部長に迷惑がかかるから。———それもあるんだよね？」

「まあ、もう大丈夫だとか言われたけど……もしもってことがあるからな。」

それに、お前が『はぐれ』になるよりはどんなことと比べてもマシだろ？」

俺の言葉にどこか納得できていないような表情を浮かべる木場。

そこへ小猫ちゃんが口を開く。

「……祐斗先輩。私は、先輩がいなくなるのは……寂しいです」

少しだけ寂しげな小猫ちゃんの表情に俺と匙は衝撃を受け、固まった。

「……お手伝いします。……だから、いなくならないで」

小猫ちゃんの訴え。

前のもう大丈夫発言を伝えたことでいなくならないことは小猫ちゃんにもわかってはいるはずだが、しかし思うところがあったのだらう。

それよりも……あの小猫ちゃんの訴えはやばい。何がやばいつて

いつものギャップが可愛さを増して俺の理性にダイレクトアタックを仕掛けているから。

匙の方をチラリと見てみるが幸せそうな表情を浮かべていた。余波だけで匙をココまでするのは……おそるべし、小猫ちゃん。

……とまあ、そんな俺たちに対して、木場は優しく微笑みながら小猫ちゃんの頭を撫でた。

「小猫ちゃん……。流石にそんなこと言われたら僕も無茶はできないよ。」

わかった。今回は皆の好意に甘えさせてもらおうかな。

イツセーくんたちのおかげで真の敵もわかったしね。

でも、やるからには絶対にエクスカリバーを倒す」

木場の言葉に安堵したのか、小猫ちゃんは小さく微笑んだ。

「よしーんじや、話もまとまったことだし、これからエクスカリバー破壊に向けていっちょ頑張りますか!!」

パン！と拍手を打ち、俺はそう声を掛けた。

そうすれば、匙も木場も小猫ちゃんも、首を縦に振り拳を突き上げた。

此処にエクスカリバー破壊を目的としたチームが結成された。

く話しました」

Side 一誠

「……つか、さつきはノリで賛同しちまったけど……」。

結局、何がどうなつて木場とエクスカリバーが関係あるんだ？」

と、匙が何処か気恥ずかしそうにそう聞いてきた。ノリで賛同したと言うのが羞恥を煽つたのだろう。

「……少し、話をしようか」

コーヒーに口を付けた後、木場は自分の過去を語った。

曰く、カトリック協会が秘密裏に計画した『聖剣計画』。聖剣に対応した者を輩出するための実験が、とある施設で執り行われていた。

曰く、被験者は剣に関する才能と神器を有した少年少女たちだった。

曰く、被験者である少年少女たちは来る日も来る日も辛く非人道的な実験ばかりを繰り返されていた。

曰く、彼らは散々実験を繰り返され、自由を奪われ、人間として扱われる事などなく、生を……命を無視された。

曰く、彼らにも夢があった。

——生きていたかった。

——『人に』愛されたかった。

——『人を』愛したかった。

神に愛されていると信じ込まされ、ひたすら『その日』が来るのを待ち焦がれた。

自分たちが特別な存在になれると信じて——。

聖剣を使える者になれると信じて——。

365日、毎日毎日何度も何度も聖歌を口ずさみながら、過酷な実験に耐えたその結果が『処分』だった……。

——木場たちは聖剣に対応できなかったのだ。

「……皆、死んだ。殺された。神に、神に仕える者に。」

誰も……誰一人として救ってはくれなかった。

『聖剣に対応できなかった』、たった……それだけの理由で、少年少女たちは生きながら毒ガスを浴びたのさ。

彼らは『アーメン』と言いながら僕らに毒ガスを撒いた。

血反吐を吐きながら、床でもがき苦しみながら、僕たちはそれでも神に救いを求めた。奇跡が起こるのを願いながら、皆……皆……」

木場は静かに語る。俺たちはそれを無言で聞いていた。

「同志たちの無念を晴らしたい。」

いや、彼らの死を無駄にしたくない。

僕は彼らの分も生きて、エクスカリバーよりも強いと証明しなくてはいけないんだ」

木場から聞かされたその凄まじい過去に開いた口が塞がらない。

アーシアも悲しい過去を持っているが……木場はそれ以上に悲しく、辛い過去を持っていたのだから……。

「ううううう……」

沈痛な面持ちの俺たちの中からすすり泣く声が聞こえてくる。

——匙だ。

号泣している。ボロボロと涙を流して、大泣きしていた。鼻水まで垂らして……。

匙は木場の手を取り言う。

「木場！辛かっただろう！キツかっただろう！

……チクシヨウ……この世には神も仏もないのかよ……っ！！

俺は、今、非常にお前に同情している！ああ、酷い話しき！

その施設の指導者やエクスカリバーに恨みを持つ理由もわかる！

わかるぞ!!」

力強く頷く匙。

木場はそんな匙の姿を目を丸くしながら見ていた。

「俺はイケメンのお前が正直いけすかなかったが、そういう話なら別だ！」

俺もお前たちのエクスカリバー破壊に協力する！

ああ、やってやるさ！会長のシゴキを敢えて受けよう！

俺も頑張るからさ！お前も頑張って生きろよ！絶対にお前を救ってくれたリアス先輩を裏切るな！」

匙の言葉から熱意を感じる。

やはり、こいつはイイ奴だ。協力を仰いで良かった。俺はそう思えた。

「よっしー」

そうと決まれば作戦会議しようぜ！

俺、お前たちの事を何にも知らねえからさ！

まずは互いの実力の把握ぐらいしとこうぜ！」

そういう匙の顔はやる気に道溢れていた。

俺と小猫ちゃん、木場は顔を見合わせるとくすりと笑ってそんな匙と話を始めた。

——絶対にエクスカリバーを倒すんだ。

Side Out



——時は一誠たちがゼノヴィアたちを探している時ほどまで遡る。



Side 士織

朝起きた俺は家の中が嫌に静かなのを感じた。

……などと言ってみたがそれもその筈。時計を見てみれば既に10時を回っている。

「…………ふぁ…………。」

……昨日は遅く寝すぎたか……」

いくら休日とはいえこんな時間に起きてしまうとは不覚である。

ちよつとだけのつもりで俺の「神セイクリッド・ギア器」を調整していたのだが……集中し過ぎたのが原因か……。

俺は自分の部屋からリビングへと向かってみる。案の定、リビングのテーブルの上には4枚の書置きが残されていた。1枚ずつ上から手に取り、目を通す。

『木場の手助けをしてくる』

ふむ、これは一誠だな。

『美憧と一緒にシヨッピングしてくるわ』

これは……字的に夕麻か。

美憧と夕麻はシヨッピングに行ったようだな。

『華那と共に鍛錬を積み山へ向かう。』

捜さないでくれ』

……絢奈……ツツコミどころ満載の書置きを残さないでくれ……。

つつい苦笑いが漏れる。

『遊びに行ってくるわね〜♪』

……母さん……何故1番子供っぽい書置きが母さんの書置きなんだ……。

俺は4枚の書置きに全て目を通したあと、最後の母さんの書置きに頭を抱える。

幼さを忘れないというか……幼さを残したまま大人になったというか……。

我が母親ながら謎な部分が多々ある……。

「ああ……腹減ったし……飯でも作るか……」

俺はそんなことをつぶやきながらキッチンへと向かい、冷蔵庫を開く。

「ん……オムライスでいっか……」

冷蔵庫の中身的に作れるであろう物を考えると、材料である鶏肉、玉葱、卵を取り出す。

「ん……たんぽぽか……それともツチノコか……」

ちよつとしたことだが、卵を手にしながら考える。

「我はたんぽぽ」

「そうか、たんぽぽがいいか。」

なら、今日はたんぽぽオムライスに——!?

俺は隣から聞こえてきた居るはずのない人の声に驚愕し、そしてすぐにそちらへと顔を向けた。

「?士織、どうした?」

こてんと首を傾げる少女。

俺はその姿と居るといふ事実を目を見開きながら口を開いた。

「なんでここにいるんだよオーフィス!!」

「士織に会いに来た」

「あ、いや……うん、それはいいとしてだ、お前服真っ赤だぞ?!」

そう、俺が何故此処まで驚いているのか。

いつも通り突然現れるだけなら大して驚きはしなかったが、オーフィスの服が赤く染まっていたため、過剰に反応してしまったのだ。

「曹操がうるさかったから『えい』ってした」

オーフィスはそう言うてデコピンをして見せた。

「……それって曹操の返り血……?」

「多分そう」

「曹操死んじゃった?」

「多分そう」

「……マジで？」

俺が深刻そうな表情を浮かべながらオーフィスにたずねると、くすりと笑い口を開いた。

「冗談。」

曹操、多分死んでない」

「そ、そうか……」

オーフィスがいうとなんだか冗談に聞こえないため肝を冷やしたぜ……。

俺はふう、と息を一つ吐き、気持ちを落ち着かせる。

「……取り敢えず服、綺麗にしてやるよ」

俺はぱちん、と指を鳴らして幾つかの魔法を同時に発動させ、オーフィスの体、服を綺麗にする。

「士織、凄い」

キラキラとした瞳を俺に向けるオーフィス。自分を綺麗にした俺の魔法が珍しかったのだろう。

俺は頬を緩ませながら、オーフィスの頭を優しく撫でる。

「今から飯作るから、ちっとだけ待っててくれな？」

「わかった」

俺の手に擦り寄りながらオーフィスはそう言った。そして、リビングの方へとたとたと駆けていくとソファアに座った。

「我、待ってる。」

士織のご飯、楽しみ」

「おう。楽しみにしてな？」

最高に美味いやつ食わせてやるよ」

俺は追加の食材を取り出すと気合を入れるようにエプロンに袖を通した。



く進展しましたく

S i d e 土織

「美味しかった」

オーフィスはオムライスを完食すると満足そうに頬を緩め、そう口にした。

オーフィスには大きいかと思っただが……あの食べっぷりを見るに余裕だったみたいだな。

「我、これ気に入った」

「そうか？」

なら、また今度来た時に作ってやるよ」

「お願い」

即答で返事を返すオーフィス。

ここままで気に入ってもらえると作った俺としては嬉しい限りだ。

「んじゃ、ちよつと洗い物してくるから……」

そう言つて席を立つと、オーフィスはせかせかと動き始め、テーブルに乗っている皿を全て持って俺の方へと近寄ってきた。

「我も、土織手伝う」

「そつか……ならその食器持ったまんま俺についてきてくれ」

「わかった」

オーフィスはこくりと首を振り、まるでアヒルの子が親を追いかけるようにトコトコと可愛らしくついてくる。

「此処に置く？」

シンクを見つめながらそういうオーフィス。

「おう。」

さんきゆなオーフィス。洗い物は俺がすつからさ」

そう言つて微笑みながらオーフィスの頭を優しく撫でる。すると、オーフィスは頬を緩め、気持ちよさそうに目を細めた。

良く懐いた猫のような愛らしさに引き込まれてしまいそうだ。

「土織、手伝ったら撫でてくれる？」

洗い物という作業を忘れ、オーフィスを撫でているとそう言い出し

た。

「我、土織に撫でて欲しい。」

だから……手伝わたら撫でてくれる?」

「いや……別にそんなの関係なく撫でてやるよ。」

でも……そうだな……手伝わってくれたらその場でご褒美として撫でてやる」

「……! わかった」

オーフィスはそう言う嬉しように、笑った。

(つたく……何時もはほとんど無表情のくせに……たまに見せる笑顔が可愛いとか反則だろ……)」

オーフィスの笑顔に毎度毎度ドキツとさせられるのは慣れないものだ。

「土織、土織」

「ん?なんだ?」

オーフィスは俺の服の裾を引っ張りながら名前を呼んでくる。

「——我、笑うと可愛い?」

「……は?」

「土織、我の笑顔、可愛いって言った」

「んなっ!」

初めにキタのは驚愕、それに遅れて羞恥が俺の身体を走った。

どうやら声に出してしまったようだ……。何たる不覚……。

「我、可愛い?」

こてん、と小さく首を傾げながらそう言うオーフィス。

俺は熱くなった自分の頬を冷ますように手で仰ぎ口を開いた。

「——ああ。可愛いぜ?」

……我ながら上手く平然を装えたはずだ。

とは言っても顔が赤いのは気のせいではない筈なので見る人が見れば一発だろう。

「……そ、そう」

オーフィスは顔を俯かせながらそう言うと、足早にキッチンから出ていった。

顔を俯かせていたオーフィスだったが、俺は見た。

——紛れもなく顔を赤く染めたオーフィスの顔を。

(……表情豊かになってきたのはイイ事だな)

子を見守る親の心境とはこんなことをいうのか、いや、しかし、俺はそれ以上のモノを心の中に感じたのを忘れはしないだろう。

Side Out

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

Side 一誠

エクスカリバー破壊のための同盟を組んで、そして、土織が『ちよつと留守にする』という書置きを残して姿を消して早数日。

連日俺、木場、小猫ちゃん、匙の四人で夕方にエクスカリバーの捜索を行っているのだが、手掛かりすら掴めていなかった。

捜索時にはゼノヴィアたちから貰った魔の力を抑える神父の服を着ているため、神父狩りをしているのなら出会える筈なのだが……。

俺の心中は焦りに染まっていた。

タイムリミット——リアス部長たちにバレるのも近いだろう……。

「ふう……。今日も収穫なしかよ……」

気落ちするように匙が言う。

いつものように、表の部活動を終えた俺たちはエクスカリバーの捜索を行っていたのだ。

「簡単には見つからないもんだな……」

匙と同じく少々の気落ちを感じながらそう口にする。

——と、そんな時、先頭を歩いていた木場が足を止めた。

「……祐斗先輩」

小猫ちゃんも何かを感じたようで、俺もそれまでの散漫な警戒心を引き締める。

……これだけの接近を易々と許すとは……。

こんなことが士織に知られたらと考えると背筋が凍りそうだ。

「上だ！」

匙の叫び。

全員が上空を見上げたとき、長剣を構えた少年神父が降ってきた。

「……死ね」

殺気の塊のようなその声と共に振るわれる長剣。

木場が素早く魔刀を創り出し、少年神父——フリードの一撃を防いだ。

「フリード!!」

「っ……その声は赤龍帝クンかい？」

へえ……これはまた珍妙な再会で……。

悪魔の香りがすると思ったらまさかの悪魔そのものでしたかい……」

飛び退いたフリードは長剣——おそらくアレがエクスカリバーなのだろう——を構え直した。

俺たちは移動の障害にしかならない神父の服を脱ぎ捨て、各々の戦闘スタイルを取る。

「ドライブグー」

『Boost!!』

呼びかけに答えるように俺の力が膨れるのを感じた。

今回の俺の仕事は木場のサポート。

……まあ、ピンチになれば話は別だが……。

「伸びろ、ラインよ!!」

真つ先に動いたのは匙。

手元から黒く細い触手らしきモノがフリード目掛けて飛んでいく。手の甲には可愛らしくデフォルメ化されたトカゲの顔らしきものが装着されていた。

……つまり、あの触手はトカゲの舌か。

「うぜえ」

それを聖剣で薙ぎ払おうとするフリードだったが、トカゲの舌は軌道を変えて下へ落ちていく。

ピタリとフリードの右足に張り付き、そのままグルグルと巻き付いた。

「そいつはちよつとやそつとじゃ斬れないぜ。」

木場！これでそいつは逃げられねえ！存分にやっちまええ！」

匙はそう叫び、木場へと伝える。

——しかし、フリードはそう甘くは無かった。

「だからうぜえって」

吐き捨てるような台詞の後、フリードの持つ聖剣にオーラが集まる。そして、無造作に振るわれた。

フリードの聖剣による一撃は匙の拘束を斬り裂くだけでは飽き足らず、その下、地面をも抉った。

「んなバカな?!」

匙もまさかこんなにも簡単に拘束を解かれるとは思っていなかったようだ。

「……やっぱりキミに拘束なんて無意味だったみたいだね」

「おろろ?」

……雰囲気変わったみたいだねえ……?」

木場とフリードは向かい合い合いながら言葉を交わす。

「リベンジ……させてもらおうよ」

木場はそう呟くと、一振りの刀を創り出す。

無駄な装飾は全くない。

ただ、振るいやすいように創られたであろうその一振りの刀を木場は鞘から抜き放ち、構えた。

「……この刀はキミに敗けて創った新しいモノ。」

今までみたいな剣からの変換ではない、一から創り出した刀だ。

名前を付けるなら安易にこう付けよう——【下剋上】……と

「……いいねいいね！」

今の騎士クンなら殺す価値大だわ!!」

今まではやる気のなさそうに刀身を下げていたフリードだったが、木場の姿に獰猛な笑みを浮かべ構えをとった。

「……………」

無言の2人、そして、幾ばくかの間を空けて、2人の姿がブレた。斬り合いを重ねた2人は少し離れていたところで鏢迫り合いを行う。

「やるじゃん騎士クン。

この間とは大違いだねい……………」

流石の俺も斬られそうで冷や冷やモンだわ〜」

「…………その割には随分と余裕があるね」

「ありがたい？」

騎士クンにはそう見えちゃう？」

その通りなんだけど！と言葉を発したフリードは力業で木場との鏢迫り合いを終わらせ、一步後ろに下がる。

—————そこからの移動が異常だった。

瞬きの中に木場の背後へと回り込んでいたのだ。

「取り敢えずばいちゃ〜♪」

フリードは無慈悲にオーラを纏わせた聖剣を横薙ぎに振るった。

「—————【魔劍創造】ソッド・バース ツツツ!!!」

木場はフリードの一撃を見ること無く叫びを上げる。

すると、木場の背後をいくつもの魔劍、魔刀が組み合わさり防壁を一瞬で創り上げた。そして、フリードの一撃が当たった瞬間に、木場は前へと飛び、残った衝撃を緩和させる。

「……………く……………っ！」

魔劍、魔刀による防壁はほとんどが破壊されてしまったものの、木場の身にはその一撃が通ることは無かったようだ。

…………一瞬の判断であそこまでの行動を取るとは…………流石は士織に鍛えられただけのことはあるな……………」

「わぁお……まさか無傷とは……。

やるねえ……騎士クン」

そういったフリードの瞳には驚き、そして純粋な好奇心が見える。

木場は回避行動により付いた土埃を払い、刀を握り直しフリードの方を向く。

「……やった本人が一番驚いてるよ」

「くは〜♪」

面白すぎ！面白すぎるよ騎士クン!!!

いいね……いいねいいね!!!

もつと殺ろう！

キミは悪魔だけど……評価してやってもいいな!!!」

「……そりゃ光荣だね」

片や楽しそうに笑い、片や冷や汗を垂らす。

2人の状況は火を見るより明らかだろう。

「行くぜ！騎士クン！」

聖剣のオーラが長剣のみならず、フリードをも覆う。

「……来い」

木場は納刀し、独特の構えをとる。

今の木場の最高、抜刀術の構えだろう。

「……ほう、【魔剣創造】か？」

使い手の技量次第では無類の力を発揮する神器だ」

まさに2人が決着を付けるであろう場面に、第三者の声が届く。

そちらへ視線を送れば、神父の格好をした初老の男が立っていた。

「……バルパーの爺さんか」

フリードがいかにもしらけたといった表情を浮かべながらその男の名を呼んだ。

……アイツがバルパー・ガリレイか……。

「……バルパー・ガリレイッ！」

木場もその男の姿を捉え、憎々しげな視線を向けた。

「……おいおい……。

バルパーの爺さんよお……タイミング最悪だぜ全く……」

「ふん、そんなことは知らない。

もたもたしているから迎えに来てやったんだ。

さあ、帰るぞ、フリード」

「……へいへい……分かりましたよ」

渋々といった雰囲気ですりフリードはそう返事をする、木場の方をちらりと見て口を開いた。

「今日は邪魔が入ったし……また今度殺ろうぜ？騎士クン。

んじゃ、ばいちゃ♪」

捨て台詞のようというフリードだったが――。

「逃がさん！」

その声とともに俺の横を走り抜けていく影。

フリードの聖剣と真正面から打ち合い火花を散らす。

ゼノヴィアだ。

「やっほ。イツセーくん」

「やっほ、イリナ」

ゼノヴィアが居るのだからやはりイリナも居たか。

俺はひよつこりと顔を出すイリナに軽い挨拶を返した。



「フリード・セルゼン、バルパー・ガリレイ。

反逆の徒め。神の名のもと、断罪してくれる！」

「……ハッ！」

俺の前で神がどうだとか言ってるんじゃねえよ」

フリードはゼノヴィアをも力業で押し返すと、懐から見覚えのある球体を取り出した。

「ほら、帰ってやるよバルパーの爺さん。

「カビエルの旦那に報告すんだろ？」

「致し方あるまい」

「んじゃあな、糞教会と糞悪魔の連合諸君」

その言葉を最後に、フリードは球体を地面に叩きつけた。瞬間、閃光があたりを包み込む。

視力が戻ってきた頃にはフリードもバルパーも視界からは消えていた。

「追うぞ、イリナ」

「うん！」

2人は頷き合うとその場を駆け出す。

「……イツセーくん」

「行ってこいよ木場。」

後のことは俺らがなんとかしといてやる」

「！……ありがとう、イツセーくん」

そう言った木場は2人の後を追ってこの場を駆け出していった。

……さて、今回はサポートだとか静観だとかで大した出番がなかったけど――

俺は背後に現れた気配に反応し、身を反転させた。

「力の流れが不規則になっていると思ったら……」  
「これは、困ったものね」

——この場は俺がなんとかしねえとだよな……。  
そこには、一際険しい表情のリアス部長と、会長さまの姿があった。  
……おお……匙の顔が死んでる。

くまたメガネのせいでした」

Side 一誠

「……エクスカリバー破壊って……あなたたちね……」

額に手を当て、極めて機嫌の宜しくない表情を浮かべるリアス部長。

その後、俺と小猫ちゃん、匙の3人は近くの公園に連れていかれ、噴水の前で正座を命じられていた。

「サジ。あなたはこんなにも勝手なことをしていたのですね？本当に困った子です」

「す、すみません……会長……」

支取会長の方も冷たい表情で匙に詰め寄っていた。匙の顔色は危険なほどに青く見える。……よほど怖いんだろう。

「支取会長。匙のやつをそんなに責めないでください。」

今回のことは俺が協力させてただけっすから」

俺がそう言って、匙への助け船を出す。

そうすれば、支取会長は一瞬厳しい視線を俺に向けたが、ハア、と溜息を吐き軽く首を振った。

「……今回は兵藤くんに免じてお仕置きはなしにします。……が、次はありませんよ？サジ」

「はいっ!!以後気をつけます!!」

敬礼しながら気持ちがいい程の声を張り上げて匙は言う。

「……イツセー」。

なんでこんなに危険なことをしたの？

下手をすれば悪魔の世界にも影響を出しかねないことだったのよ？」

「……木場の奴を助けてやりたかったんです。

あいつの話の聞いたらいてもたつてもいられなくて……」

正直に、偽ることなくそう口にする。

見れば小猫ちゃんも俺の言葉に首を縦に振って同意の意を示していた。

リアス部長はそんな俺たちに微笑ましいものを見るかのような視線を向け、頬をなでた。

「……バカな子たちね……。」

本当に、心配ばかりかけて……。」

「以後気をつけます……。」

「……すみません」

……やはり、リアス部長の眷属になったのは間違いではなかった。こんなにも優しい【王】<sup>キング</sup>の元に居られるグレモリー<sup>俺</sup>眷属は幸せ者つてもんだろう。

「でも、今回のお仕置きはしないといけないわね。」

2人とも、おでこをだしなさい」

俺と小猫ちゃんは言われるがままに額を出す。すると、紅いオーラの纏った手で――

「……あう……?!」

「あ痛……っ?!」

――デコピンをしたのだった。

「使い魔を祐斗探索に出させたから発見しだい、部員全員で迎えに行きませう?」

それからのことはその時に決めるわ」

「はい」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

俺とリアス部長、小猫ちゃんが家に帰る頃には夕日も落ちて夜になりかけていた。

何故、リアス部長と小猫ちゃんまで家に来ているかというと、簡単に言えば夕食に誘ったのだ。

「ただいま」

「お邪魔いたします」

「……お邪魔します」

俺たちが玄関で靴を脱いで上へ上がろうとしたとき、台所の方から母さんが顔を覗かせて、ニヤニヤと笑っているのが視界に入った。

「……な、なんだよ母さん」

「ん〜??」

一誠ちゃんが女の子を3人もはべらせるようになったのがなんだから嬉しくって♪」

両の頬に手を当てテンション高めの母さん。

……3人はべらせるように……って……。

俺は苦笑いが浮かぶのを感じる。

そもそもリアス部長には婚約者ライザーがいるしな。

「あ、それよりそれより！」

一誠ちゃん！こっちに來て！イイもの見れるわよ♪」

母さんは満面の笑みで手招きをする。

俺は首を傾げながらも台所の方へと向かってみることにした。

そして、台所を覗くと――

「な、なななな、何やってんだよ!!!?」

――そう叫んでしまっていた。

台所に居たのは母さんを除いて5人。

アーシアと夕麻、美憧、華那、絢奈だった。

何の変哲もない何時も通りのメンバーだが……しかし、その姿が俺

の心を揺さぶり冷静さを奪ったのだ。

エプロン姿の5人。と、思ったが、ちよつと違う。肌の露出が必要以上に多いのだ。

つまりそれは——裸エプロン。

……ああ……クラつときた……。

「……く、クラスのお友達に聞いたんです……。日本のキッチンに立つときには、は、裸にエプロンだって……。

は、恥ずかしいですけど……。に、日本の文化に溶け込まないとダメですから……。っ！」

顔を真つ赤にして、もじもじしながらアジアは呟く。

「わ、私はその……。一誠くんが喜んでくれるかなあ……。っと思って……。」

恥ずかしがりながらもその姿を見せようとする夕麻。

「う、ウチはアジアがするっていったから……。仕方なくっす！」

必然的に丈の短くなるエプロンの裾を引っ張りながら頬を赤く染める美憧。

「私は葵泉さんに進められてだな……。やはり恥ずかしい……。」

そう言つて頬は染めつつもクールな印象を損なわない華那。

「私は勿論ノリだ！」

絢奈は胸を張り、恥ずかしがることなくそう言い放つた。

(……ちよつと待て……。家の天然娘アジアにピンク文化教えたアホは何処のどいつだ……。?)

しかも墮天使娘たちにまで広がって被害が拡大してんじやねえか!!!)

確かに絶景だけど！

永久保存レベルの絶景だけでも!!

「……一応聞いとくけど……。誰から聞いたんだ？アジア」

ふと、冷静になった俺は予想ができてはいるが……。一応の確認のためアジアに質問を投げ掛ける。

「は、はい、クラスのお友達で桐生さんから……。……。もちろん、下に下着は着けていません。スースーしますう……。あうう……。」

聞いてもないことまで話してくれるアーシア。……アカン、この娘、天然エロ娘の階段を下手したら二段飛ばしで上ってるよ……っ!!? 「また……またなのか……あのエロメガネ女あああああっ!!!」

風呂の件しかり、毎度毎度あのエロメガネ女——桐生!に頭を抱えさせられている気がする……。

「んふふ♪かわいいでしょ?」

お母さん、こういうの大賛成よ♪

んん♪若い頃を思い出すわあ……」

賢夜さんそこはダメよ♡と、母さんは体を抱きしめながら自分の世界へと旅立っていった。

……というか母さん、父さんとそんなことしてたんだな……。

「……私もしてみようかしら……」

「……ライザーにでもしてやってください。」

ライザーなら飛び上がって喜びますよ」

「そ、そうかしら?」

顔を赤く染めながらそう言うリアス部長。

ライザー、援護はしておいた後は撃墜されないように頑張れ……。

そんなことを心の中で祈ってみる俺だった。

「……まあ、何より……みんな似合ってるよ。」

昔の俺だったら襲いかかっちゃまいそうだわ」

正直今も封印した煩惱が炸裂しそうで大変です。

俺がそんな褒め言葉を述べるとアーシア、夕麻は顔を赤くし、美瞳は頬を緩め、華那はクールな微笑みを浮かべ、絢奈は誇らしげに胸を張った。

そんな、個々様々な反応に俺は微笑ましくなり、頬が勝手に緩んでしまう。

と、そんな時、俺の服を後ろから引く手。

「ん?どうしたんだ?小猫ちゃん」

「……し、士織先輩は……ああいうの好きなのか知ってますか……?」

顔を赤くしながらそう聞いてくる小猫ちゃん。

俺はくすりと笑うと頷きながら口を開いた。

「好きなんじゃないか？」

まあ、士織なら人の好意を嫌がりはしないと思うぜ？」

「……ありがとうございます」

「おう」

それにしても小猫ちゃんはわかりやすいなあ……。

俺はそんなことを考えながら、今は皆を見守ることにした。

……決して裸エプロンを記憶に焼き付けようという意図ではない。  
決してだ!!!

「そういえば父さんは？」

「それがまだ帰ってきてないのよ。」

一体何処で何をしてるのかしらねえ」

姿の見えない父さんのことを話題にすれば母さんが頬に手を当て、  
困ったようにそう言った。

「賢夜殿ならばまた夜回りでもしているのでは？」

そして何か人助けでもしておられるのだろう」

「ありそうで困るな」

絢奈の言葉にそう返した俺はまあ、心配する必要は無いだろうとい  
う結論を出す。

母さんも賢夜さんなら仕方が無いわねえと言って微笑みを浮かべ  
た。



く触れてしまいましたく

S i d e 一誠

リアス部長、小猫ちゃんを我が家に招いた日の夜。  
初めは確かに1人で寝ていたはずなのに、ベットには2つの人影があつた。

———アーシアと夕麻だ。

この2人、何時からか俺のベットに潜り込んでくるようになってしまつてた。

「……幸せそうに眠ってるな」

それが微笑ましくて、つい、頭を撫でてしまう。

———そんな時、外に何者かの気配が現れた。

それと同時に感じるプレッシャー。

今まで眠っていたアーシア、夕麻は飛び起きてしまう。

「い、イツセイさん……っ！」

「……これは……っ！」

アーシアは俺の腕にしがみつぎ、夕麻は起きたばかりというのに額に汗を浮かべていた。見れば2人とも体を震わせている。

「大丈夫か？」

2人を安心させるように頭を撫で、少しでも気を落ち着かせる。

「だ、大丈夫です」

「私も、問題ないわ」

少々の吃りがあるものの起きたすぐに比べれば余裕が出来ているだろう。

俺は立ち上がり、今の状況を確認するために玄関へと向かった。

「やつほー、赤龍帝クンにその他諸々の諸君。夜分遅くにすみませんねえ〜」

玄関でその日は泊まっていたリアス部長と合流し、家の外に出ると、ケラケラと笑いながらフリードが話しかけてきた。

「本当に夜遅くは迷惑だぜ？」

軽口に軽口で返すかのように俺は気楽にそんな言葉を返す。

……フリードがさっきのプレッシャーを……？いや、違う。今まで幾度となく戦ったことはあってもプレッシャーを感じたことはない。(……つうことは……)

俺は空を見上げた。

月をバツクに空で浮かんでいた者――。

漆黒の翼を生やした……男の墮天使だ。

黒い翼は十枚五対。無駄に凝った黒いローブを身に纏っている。

男の墮天使はリアス部長を捉えると、苦笑した。

「初めましてかな、グレモリー家の娘。紅髪が美しいものだ。」

――忌々しい兄君を思い出して反吐が出そうな程にな」

「ごきげんよう、墮ちた天使の幹部――コカビエル。」

それと、私の名前はリアス・グレモリーよ。お見尻おきを。

もうひとつ付け加えさせてもらうなら、グレモリー家と我らが魔王は最も近く、最も遠い存在。この場で政治的なやり取りに私との接触を求めるなら無駄だわ」

……やはり、アイツが墮天使の幹部、コカビエルか……。

通りでそこそこのプレッシャーを放ってる訳だ。

「おお、そうだ。」

これは土産だ。受け取れ」

コカビエルはそう言うと言をパチン、と鳴らし魔法陣を展開させる。すると、そこから2つの影が落下してきた。

「…………ぐ…………っ！」

片方の影が片方の影を抱きかかえて、うめき声を上げながら俺の前に着地する。

その影に目を凝らしてみると、そこには――

――ボロボロのイリナを抱えた血塗れの父さんの姿があった。

「と、父さん!?イリナっ!?!」

「…………い、一誠か…………。」

すまんな…………お前の友人を…………守りきれなかった…………」

父さんはそう言うと、糸が切れたマリオネットのように倒れ込んだ。

イリナの方は気絶しているだけのようにだが父さんの方は本格的にまずい!

「アーシア!!!!」

頼む、助けてくれ…………っ!!!」

俺はアーシアの名を呼び、父さんの治癒を頼む。アーシアは父さんの隣に来ると神器を迷いなく発動してくれた。淡い緑色の光がアーシアの身体から発せられ、父さんの体を包み込んだ。

「なんだ、その男はお前の父親か。」

俺たちの根城に来たその女どもを歓迎していたら突然現れてな。

嫌にしつこかったがやはり、たかが人間だったようだ。二匹逃がしたがまあ、いい」

コカビエルは嘲笑しながら言う。

…………たかが人間…………??

「先程の話だが…………魔王と交渉などというバカげたことはしない。そんなことはしても無駄だからな」

「……それで、私との接触は何が目的かしら？」  
「そんなもの簡単さ。」

——俺は戦争が望みさ!!!」

コカビエルは笑みを浮かべてそう叫んだ。

……戦争が望み……??

「お前の根城である駒王学園を中心にしてこの町で暴ればサーゼクスも出てくるだろう？」

エクスカリバーでも盗めばミカエルが戦争を仕掛けてくれるかと思っただが……寄越したのが雑魚ども……。興奮めにも程がある。

これではあまりにもつまらん……つまらんだろう!!!

だから今度は悪魔の、サーゼクスの妹の根城で暴れるんだ。

ほら——————楽しめそうだろう?」

……楽しめそうだろう……??

コカビエルのその言葉に俺はついに——————キレた。

「バランス・ブレイク禁手化」

Welsh Dragon Balance Breaker

!!!!

コカビエえええええルツツ!!!」

ブーステッド・ギア・スケイルメイル俺は【赤龍帝の鎧】を見に纏うと、雄叫びをあげ、地を蹴り、

コカビエルに向かって高速で肉薄する。

Boost Boost Boost Boost Boost

!!!!

Explosion !!」

「ぶっ飛びやがれツ!!」

コカビエルの懐まで潜り込んだ俺は、解放された力を全て右拳に込め、コカビエルを殴りつけた。

「ぬううううツツ!!!?」

両腕をクロスさせガードするコカビエル。

……流石は墮天使の幹部なだけはある。俺の拳を受け止めたのだから。

「……やるじゃねえか」

「当たり前だ。」

貴様のような奴と戦えるのが何より嬉しくてな！

だからこそ俺は戦争をやめられんだ！」

コカビエルは笑みを浮かべながらそう言う。鎧の胴の部分に蹴りつけ、俺から距離を取る。

「フリード！」

惜しいが此処は一時退却だ！

駒王学園に向かうぞ！！

「……………」

コカビエルの声に反応を返さないフリードだったが、退却という言葉は効いていたらしく、その懐から球体を取り出し、地面に叩きつけた。

見覚えのある閃光が辺りを包み、ほんの一瞬、視界を奪われてしまう。

「……………くそ……………っ！」

俺はまたこの閃光に引つかかってしまったことに苛立ちを覚えながらも、父さんのことが心配になり、コカビエルたちを追うのではなく、下に降りて行った。

バランス・ブレイカー  
「禁手」を解除し、未だに治療を続けているアーシアの元へと駆け寄る。

「アーシア、父さんは大丈夫そうか？」

「は、はい！」

もう傷はなくなりましたから……………後は意識が回復してくださいれば安心です！」

「……………そうか……………」

俺は胸をなで下ろし、立ち上がる。

リアス部長の方へ近づくと声をかけた。

「リアス部長」

「……………イツセー、学園に向かうわよ。」

他のみんなにはもう使い魔を通じて伝えたわ。

——コカビエルを止めるわよ」

「わかりました」

俺はその場で拳を握った。

……父さんとイリナを傷つけたんだ……コカビエル、お前は俺龍の逆鱗龍に触れたんだ。

——無事で済むと思うなよ……ツツ!!

## くコカビエル戦前ですく

S i d e 三人称

「リアス先輩。学園を大きな結界で覆ってます。

これで余程のことが無い限りは外に被害は出ません」

匙はその場の現状をリアスたちに報告する。

駒王学園を目と鼻の先にした公園で、グレモリー眷属とシトリー眷属が集合していた。——しかし、その場に木場の姿、そして、もう一人の姿も、やはり見当たらなかった。

匙からの結界の説明にリアスは耳を傾け、他の眷属たちは戦いに備え、準備を進める。

「これは最小限に抑えるためのものです。正直言って、コカビエルが本気を出せば、学園だけではなく、この地方都市そのものが崩壊するでしょう。

さらに言うなら、既にその準備に入っている模様なのです。校庭で力を解放しつつあるコカビエルの姿を私の眷属が捉えました」

ソーナの言葉に一誠までも眉をひそめた。

先程の戦闘から苦戦を強いられるであろうと考えていた一誠だったが、話を聞く限り、苦戦で済むか五分五分だという考えが浮かんだのだろう。

なにせ、一誠の【禁手】バランス・ブレイカーを纏った一撃を防いで見せたのだから。

「攻撃を少しでも抑えるために私と眷属はそれぞれの配置について、結果を張り続けます。

出来るだけ被害を最小に抑えたいものですから……。学園が傷つくのは耐え難いものですが、堕天使の幹部が動いた以上、堪えなければならぬでしょうね」

ソーナは目を細め、学園の方を憎々しげに見つめる。おそらくそれは学園にいるコカビエルへ向けたモノだろう。

「ありがとう、ソーナ。あとは私たちが何とかするわ」

「……リアス、相手は桁違いのバケモノですよ？いくら兵藤くんが、【赤龍帝】がいるからとはいえ負けてしまうでしょう。」

「今からでも遅くない、あなたのお兄さまへ——」  
ソーナの言葉を聞き終わる前にリアスは首を横に振る。

「あなただって、お姉さまを呼ばなかったじゃない」

「私のところは……。あなたのお兄さまはあなたを愛している。」

「サーゼクスさまなら必ず動いてくれます。だから——」

「既にサーゼクスさまに打診しましたわ」

2人の会話を遮るように前に出た朱乃はそう言った。

「朱乃！」

非難の色を含んだ声を上げるリアスだが、朱乃は珍しく怒った表情を浮かべていた。

「リアス、あなたがサーゼクスさまにご迷惑をおかけしたくないのは分かるわ。あなたの領土、あなたの根城で起こったことでもあるものね。しかも御家騒動の後だもの。」

——けれど、幹部が来てしまった以上、話は別よ。あなた個人で解決できるレベルを遥かに超えているわ。——魔王さまの力を借りましょう」

リアスへと詰め寄り言い聞かせる朱乃。

いつもは『部長』と呼んでいるが、プライベートモードだと『リアス』と呼び捨て、タメ口となるのだ。

リアスは何か言いたげな表情を浮かべていたが、大きな息を吐き、静かに頷いた。

それを確認した朱乃はいつも通りのニコニコとした顔になる。

「お話を理解してくれてありがとうございます、部長。」

ソーナさま、サーゼクスの加勢が到着するのは1時間後だそうですね」

「1時間……。わかりました、その間、私たち生徒会はシトリー眷属の名にかけて、結果を張り続けてみせます」

ソーナの決意を聞いたリアスは表情を引き締め直す。

「……1時間ね。さて、私の眷属悪魔たち。私たちはオフエンスよ。結界内の学園に飛び込んでコカビエルの注意を引くわ。」

これはゲームじゃなくて死戦よ！それでも死ぬことは許さない！



生きて帰ってあの学園に通うわよ、皆！」

「「はい！」」

皆の気合の入った声が響く。

「……リアス部長」

「何？イツセー」

「多分ですけど——結果、耐えられませんよ」

「……え……？」

一誠はそれだけ言うと入口へと向かった。

『相棒、さっきの言葉……』

「……ああ、感じるんだアイツの——」

一誠は歩みを止めて自宅の方を見つめた。

「——士織の怒りを」

『……そうか』

一誠の背筋に冷や汗が浮かぶ。

それは、今からあるコカビエルとの戦いへの恐怖ではない。

——遥か高みに存在する強者の怒りを目の当たりにするこ

とへの恐怖だ。

——士織はまだ現れない。

く迷いと後悔は捨てましたく

S i d e 一 誠

正門から堂々と入り込む俺たち。

未だに背筋を伝う冷や汗は止まらないが、これくらいならコカビエルを相手にしても大丈夫だろう。

「……なかなか悪趣味な空間になったな」

俺はその風景にそう呟いた。

校庭の中央に4本の剣が神々しい光を発しながら、宙に浮いている。それを中心に魔法陣が校庭全体に描かれていたのだ。

魔法陣の中央には初老の男——バルパー・ガリレイの姿があつた。

「……一体何をするつもりなんだ……？」

「4本のエクスカリバーをひとつにするのだよ」

俺の考えを読んだかのようなタイミングでバルパーはおかしそうに口を開いた。

「バルパー、後どれくらいでエクスカリバーは統合する？」

空中から聞こえてくるもう一人の男の声。

全員が空へと視線を向けた時、月光を浴びるコカビエルの姿が視界に入る。

宙で椅子に座り、こちらを見下ろしていた。……足を組んで余裕そうな表情だな……。全く滑稽っつかなんっつか……。――

「5分もいらんよ、コカビエル」

「そうか。では、頼むぞ」

コカビエルはバルパーからリアス部長に視線を移す。

「サーゼクスは来るのか？それともセラフォルか？」

「お兄さまとレヴィアタンさまの代わりに私たちが――」

——ヒュッ！

ドオオオオオオオオオオオンツツ!!!

突然の爆音。

それとともに辺り一帯に爆風が広がっていく。

爆風が発生した先にあるのは——いや、あつたのは体育館  
だった。

しかし、影もカタチもなく消し飛んでいた。  
「つまらん。まあ、いい。」

赤龍帝がいるのだ、余興にはもってこいだろう」

体育館のあつた場所には巨大な光の柱が斜めに突き刺さっていた。

……流石は墮天使の幹部ってところか……防御だけじゃなくて攻  
撃もかなりのもんだな……。

『相棒、アレを使うのか?』

(いや、ここは普通の「バランス・ブレイカー禁手」でいく。

流石に長丁場となると燃費が悪いアレを使うわけにはいかねえ)

『そうか、だが、負ける気はせんな!』

「当たり前だろ! ドライグ!」

俺は雄叫びを上げる。

そして、ブーステッド・ギア「赤龍帝の籠手」を出現させた。

「バランス・ブレイク禁手化!!!」

『Welsh Dragon Balance Breaker

!!!!』

その音声に呼応して、俺の身をブーステッド・ギア・スケイルメイ「赤龍帝の鎧」が包んだ。

「さて、まず始めに地獄から連れて来た俺のペットと遊んでもらおう  
かな」

コカビエルが指を鳴らす。すると、闇夜の奥から地を揺らしながら  
近づいてくるのが感じられた。

推定10メートルはあるであろう、黒い巨体。四足は一つ一つが太  
く、そこから生えている鋭い爪は人なんて簡単に引き裂けるだろう。

闇夜にキラキラと輝く血のような真紅の双眸。突き出た口から覗  
かせるのは凶悪な牙。3つの首を持つその生物の名は——

「——ケルベロスか……」

「地獄の番犬の異名を持つ有名な魔物……」。

本来は地獄——冥界へ続く門の周辺に生息しているのだけ  
れど、人間界に持ち込むなんて……ッ!!!」

リアス部長は眉を潜め、そう口にする。

「やるしかないわ！消し飛ばすわよ、皆!!」

「!!はい!!」

皆は戦闘態勢を整える。

俺もこのまま突っ込もうとしていたのだが、リアス部長が俺の肩に手を置いた。

「イツセー、此処はサポートに回って頂戴。あなたはコカビエルとの戦いのために力を温存しておいて?」

「……つまり、俺は極力動くなと?」

「……ええ、私たちではコカビエルは倒せない。でも、イツセー、あなたなら……」

リアス部長は真剣な眼差しでこちらを見つめる。

俺は兜部分のマスクを収納させて微笑んだ。

「わかりました。」

でも、ピンチになったら俺も動きます」

「ええ、頼んだわね」

リアス部長はそう言うと、俺以外の眷属を連れて前に出た。

リアス部長は紅い魔力を全身から迸らせる。

朱乃先輩は雷を纏わせ怪しく微笑む。

アーシアは冷気を体から漂わせる。

小猫ちゃんは両腕に魔力を纏わせてファイティングポーズを取る。

——ガールルルウルルルルツ!!

ケルベロスは威嚇するように低く唸ったかと思うと、突然遠吠えを始めた。

何事か、そんな考えは次の一瞬で消え去った。

——ケルベロスが2体、増えたのだ。

「仲間を呼んだのか……っ!」

これは流石に不味いと加勢に入ろうとした時、皆が首を振った。

「この程度どうってことないわ」

「私たちの力を見せてあげますわ」

「……楽勝です」

「頑張ります!!」

そういつた4人はそれぞれケルベロスに向かって行った。

背中から翼を出して空へと舞ったりリアス部長と朱乃先輩。

「朱乃!」

「わかってるわ!」

【雷竜の咆哮】ツ!!!

リアス部長の掛け声にコンマの間もなく、朱乃先輩は攻撃を仕掛けた。

金色の雷を纏った光柱が朱乃先輩の顔の前に展開された魔法陣から放たれる。

ケルベロスも負けじと炎のブレスを吐くが、威力に差がありすぎた。炎のブレスは金色の光柱に一瞬で飲み込まれ、そして直撃する。

ふらつくケルベロスに、トドメと言わんばかりの真っ黒な魔力球をリアス部長が放った。

——滅びの魔力。

それがリアス部長の魔力の特性。

だからこそ、計り知れない破壊力を持つのだ。

リアス部長の魔力球はケルベロスの首を削り取り、身体をも半分滅ぼしてしまう。

——一体撃破。

小猫ちゃんはケルベロスから繰り出される炎の球を軽々と躲しながら、接近していく。

そして、足元に来たかと思うと、突然腕の魔力を拳に集中させた。

「……1発……っ!」

そして、真上に跳躍し、ケルベロスの頭を殴り上げる。

これにはケルベロスも大勢を崩したが、残りの2つの首が落下中の小猫ちゃんを襲う。

「させません!」【アイスメイク……ウォール氷壁!】!!」

しかし、その攻撃を防ぐように、氷の壁が出現する。

どうやらアシアが小猫ちゃんを守ったようだ。

「……ありがとうございます……っ！」

小猫ちゃんは簡単なお礼を述べると、着地と同時に腹部の方へと潜り込んだ。

「……これで決めます」

小猫ちゃんはそう呟くと、両手に集めていた魔力を右腕にのみ、集中させ始めた。

小猫ちゃんの魔力は波打ち、収束されてゆき——ついには白い色を纏う。

「……まだ未完成ですけど……【びやっこはくだ白虎白打】ッ!!」

小猫ちゃんの拳には、その名の通り白い虎が現れ、当たった瞬間に炸裂する。

その威力、驚くなかれ、ケルベロスの身体を貫通させたのだ。

しかし、その後の小猫ちゃんは膝をつき、肩で息をしていた。

……あの技、相当燃費が悪いみたいだな……。

「……けど、かなり凄い」

アレで未完成というのだから、更に上があるのだろう。これは完成が楽しみになる。

—— 一体撃破。

最後一体のケルベロス。奴はここで、予想外……いや、ある意味妥当な行動をとった。

今のところ一番弱い、アシアを狙ったのだ。

「アシア!!」

「大丈夫です！ イッセーさん！」

アシアはそう言うのと、手のひらに手を当てて、魔力を練った。その間にもケルベロスが近づいてきている。

「行きます！ 【アイスメイク…… “スノードラゴン氷竜”!!」

その掛け声とともに、アシアの手から大量の冷気とともに魔力が射出された。冷気は魔力を伴い、カタチを作り上げ、そしてそこに誕生した。

——氷でできた美しい竜が。

「行ってくださいー！」

アーシアがひとたび命令すれば、その氷でできた竜は、ケルベロスを殲滅せんと向かってゆく。

ケルベロスと氷でできた竜は組みあい、戦う。しかし、氷でできた竜であるため、少しずつだがケルベロスの攻撃である炎に溶かされて行っている。

これでは時間の問題だと、俺が飛び出そうとしたその瞬間、ケルベロスの首がひとつ宙に舞った。

俺の視界に入ったのは長剣のエクスカリバーを振るう少女——

——ゼノヴィアだった。

「加勢に来たぞ」

ゼノヴィアが着地したかと思えば、残りの2つの首も宙を舞う。これもゼノヴィアが……？いや、違う、この気配は……！

「木場!!」

ゼノヴィアの横に、見覚えのあるイケメンが着地するのが見える。

「……ちよつと遅くなっちゃったみたいだね。」

でも、イイところは見せられたかな？イツセーくん」

木場はそう言うとその手に持った刀を斬り払い、納刀した。

首を全て斬られたケルベロスは地に沈み、その体を塵芥と化し、宙へと霧散していった。

「——完成だ」

不意に聞こえてくるバルパーの声。

それと同時に、校庭の中央にあった4本のエクスカリバーが眩い光を発し始めた。

空中で拍手を送るコカビエル。

「4本のエクスカリバーが1本になる」

バルパーはまるで狂ったかのような笑みを顔に貼り付け、エクスカリバーを見つめていた。

エクスカリバーから発される光に一瞬顔を手で覆う俺たち。

光が止んだかと思えば、校庭の中央にあった4本のエクスカリバーは姿を消し、青白いオーラを纏った1本の聖剣が浮かんでいた。

「エクスカリバーが1本になった光で、下の術式も完成した。」

あと二十分もしないうちにこの町は崩壊するだろう。解除するにはコカビエルを倒すしかないぞ!!!」

バルパーはそう言うのと、狂ったような笑い声を上げた。

「チッ!」

なんてもん起動させてるんだよ!」

俺は眉を潜め悪態をつく。

リアス部長たちも焦燥の表情を浮かべていた。

「フリード!」

「……はいな」

先程まで姿の見えなかったフリードが暗闇の向こうから歩いてくる。

しかし、フリードの返事は嫌悪のような雰囲気を孕んでいた。

「陣のエクスカリバーを覚え。」

最後の余興だ。4本の力を得たエクスカリバーで戦って見せろ」

「……りよーかい」

フリードは短くそう言うのと校庭のエクスカリバーを握った。

……やっぱり、使えるのか……。

木場の話では因子がないと使えないって聞いてただけど……フリードはそれを持っているのか……。

「リアス・グレモリーの【騎士<sup>ナイト</sup>】、共同戦線が生きているのならば、あのエクスカリバーをともに破壊しないか……?」

「……いいのかい?」

ゼノヴィアと木場はそんな会話を始める。

「最悪、私はあのエクスカリバーの核になっている【かけら】を回収できれば問題ない。」

……悔しいがあれほどの力を持つ剣をあのフリード・セルゼンが得てしまったんだ……。

私だけの場合の勝率はゼロに等しい……。」



ゼノヴィアは悔しそうに顔を歪めた。

そんなゼノヴィアと木場のやり取りを笑う者がいた。  
バルパーだ。

「バルパー・ガリレイ。僕は『聖剣計画』の生き残りだ。

……いや、正確にはあなたに殺された身だ。悪魔に転生したことで生き永らえている」

「ほう、あの計画の生き残りか。これは数奇なものだ。こんな極東の国で会うことになるうとは。縁を感じるな……ふふふ」

小馬鹿にしたような笑いで話すその姿に苛立ちめいたものが溜まるのを感じた。

「——私はな。聖剣が好きなのだよ。

それこそ、夢にまで見る程に。

幼少の頃、エクスカリバーの伝記に心を躍らせたからなのだろうな。

だからこそ、自分に聖剣使いの適性がないと知った時の絶望と言ったらなかった……」

突然、バルパーは語りだす。

「自分では使えないからこそ、使える者に憧れを抱いた。

その思いは高まり、聖剣を使える者を人工的に創り出す研究に没頭するようになったのだよ。

……そして—— 完成した。キミたちのおかげだ」

「……なに？ 完成？」

僕たちを『失敗作』だと断じて処分したじやないか！」

眉を吊り上げ、まるで噛み付くように叫ぶ木場。

だが、そんな木場の言葉とは裏腹にバルパーは首を横に振った。

「聖剣を使うのに必要な『因子』があることに気が付いた私は、その因子の数値で適性を調べた。

被験者の少年少女、ほぼ全員に因子はあるものの、どれもこれもエクスカリバーを扱える数値に満たなかったのだ。

そこで私は一つの結論に至った。ならば『因子だけを抽出し、集めることは出来ないか？』——と」

「……なるほど。読めたぞ。聖剣使いが祝福を受ける時、体に入られるのは——」

ゼノヴィアは事の真相に気づいたようで、忌々しそうに歯噛みしていた。

……俺もやつとわかった。

「そうだ、聖剣使いの少女よ。

持っている者たちから、聖なる因子を抜き取り、結晶を作ったのだ。こんな風にな」

バルパーはそう言うと、懐から光り輝く球体を取り出した。

遠目から見てもわかる、あれからは聖なるオーラを強く感じる……。

「これにより、聖剣使いの研究は飛躍的に向上した。

それなのに、教会の者共は私だけを異端として排除したのだ。研究資料だけは奪ってな！

貴殿を見るに、私の研究は誰かに引き継がれているようだ。

……ミカエルめ。あれだけ私を断罪しておいて、その結果がこれか。まあ、あの天使のことだ。被験者から因子を引き出すにしても殺すまではしていないか。

その分だけは私よりも人道的と言えるな。くくくくくくくく」

愉快そうにバルパーは笑う。

……犠牲を払ってまで聖剣使いを増やす意味はあるのだろうか……？

俺は眉を潜め、奥歯を噛んだ。

「——同志たちを殺して、聖剣適合の因子を抜いたのか？」

木場から静かな殺気が迸る。

「そうだ。この球体はその時のものだぞ？なにせ初めての実験だったからな、錬度が悪くてこれ一つ程度しかできなかったがね」

「……バルパー・ガリレイ……っ！

自分の研究、自分の欲望のために、どれだけの命を弄んだんだ……っ!!」

木場の手が震え、怒りに呼応するかのようには魔力のオーラが溢れ、

木場の全身を覆った。

「ふん。それだけ言うのならはこの因子の結晶を貴様にくれてやる。環境さえ整えば後で量産できる段階まで研究は来ている。」

まずはこの町をコカビエルと共に破壊しよう。

あとは世界の各地で保管されている伝説の聖剣をかき集めようか。そして聖剣使いを量産し、統合されたエクスカリバーを用いて、ミカエルとヴァチカンに戦争を仕掛けてくれる。

私を断罪した愚かな天使どもと信徒どもに私の研究を見せ付けてやるのだよ」

……それがバルパーがコカビエルと手を組んだ理由……。

どちらも天使を憎み、そして戦争を望んでいる。——最悪の

コンビとはまさにこのことか……。

バルパーは興味を無くしたかのように持っていた因子の結晶を放り投げた。コロコロと地面を転がり、木場の足元に行き着く。

木場は静かに屈み込んで、それを手に取った。

哀しそうに、愛しそうに、懐かしそうに、その結晶を優しく撫でていた。

「……皆……」

木場の頬を涙が伝っていく。

なんて綺麗で……悲しい涙なんだろう。

「木場……」

俺が声を掛けようとしたその時。木場の持つ結晶が淡い光を発し始める。

光は徐々に広がっていき、木場を中心に校庭を包み込むまでに拡大していった。

校庭の地面、その各所から光がポツポツと浮き上がり、形を成してゆく。

それはハッキリとしたモノに形成されてゆき——人のカタチとなった。

木場を囲むように現れたのは、青白く淡い光を放つ少年少女たちだった。

(……………そうか……………あれは……………)

——木場の守りたかった同志たちか。

Side Out

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

Side 木場 祐斗

僕を囲むように現れたのは、そう、見間違うはずが無い……………皆の姿だった。

「……………皆っ！僕は……………僕は……………っ！」

自然と溢れる涙があった。泣いているつもりは無いのに、皆の姿を見た瞬間、溢れたのだ。

「……………ずっと……………ずっと、思っていたんだ。

僕が、僕だけが生きていていいのかって……………。

僕よりも夢を持った子がいた。

僕よりも生きたかった子がいた。

僕よりも立派な子がいた。

……………なのに、なのに僕だけが……………平和な暮らしをしてもいいのか……………僕だけが楽しい日常を過ごしてもいいのかって……………!!」

僕は結晶をギュツと抱きしめて心中を吐露する。

『良いんだよ』

『だって私たちのことをずっと思ってくれた』

『ずっと忘れないでいてくれた』

『僕たちは知ってるよ?』

『イザイヤが誰よりも優しかったって』

「……………みんなあ……………」

僕の周りで笑いながらそう言ってくれる。

そして、皆がいつせいに歌を歌い始めた。

それは僕が……………僕たちが大好きだった歌。

聞いたことがあるのだろう、アーシアさんがそう呟く。

『さあ、一緒に歌おう?』

『イザイヤの歌を聞かせて?』

僕はその時絶対に自らの意思では解かなかった【身体変化】の魔法を自然と解いていた。男性だった僕の身体は本来の女性のモノへと変化する。

後ろでは皆の驚きの声が聞こえる。

でも、今は関係ない。

僕はみんなに続いて聖歌を口ずさんだ。

皆の笑顔が見える。

優しい笑み。

勇気づけてくれる笑み。

元気な笑み。

昔見た大好きな皆の笑顔だ。

僕もそれに吊られて微笑みを浮かべる。

本来、悪魔である僕は聖歌を歌えばダメージを受けてしまう。

だけど、今は、今この時は、僕に勇気と力を分けてくれる。

皆は青白い光を放ち、僕を取り囲む。

『僕らは一人じゃダメだった』

『だけど皆がいれば大丈夫』

『聖剣を受け入れよう』

『怖くなんてない』

『例え、神がいなくても』

『私たちが、そして今のイザイヤには仲間がいる』

『例え神が見守ってくれていなかったとしても』

『僕たちの心はいつだって——』

「——ひとつだ」

皆の魂が僕の中に入ってくるのがわかる。  
暖かな光とともに僕を包んでくれる。

「……いこう、皆。」

——僕はもう、迷わない」

……僕は流れる涙を拭いた。

く至りました」

S i d e 木場 祐斗

「バルパー・ガリレイ。

まだ全てが終わったわけじゃない。

あなたを滅ぼさない限り、第二、第三の僕たちが生まれてしまう」  
僕は迷いなく、バルパー・ガリレイを見据えた。

「ふん。研究には犠牲はつきものだと言っただけではないか。ただそれだけのことだぞ？」

それに、さっきまでボロボロと泣いていた奴がよく言う。

ただの幽霊どもと戦場のど真ん中で聖歌など歌いおって……。

私はな、聖歌というものが大嫌い——「黙れよクソ野郎」——

クハッ!!!」

「な……っ?!」

バルパーが喋っている時、背後から襲う影があった。——フ  
リード・セルゼンだ。

フリード・セルゼンはバルパーをエクスカリバーの柄で殴りつけると踏みつけた。

「あんたさあ……俺のほかにも実験してたんだな」

「ふ、フリード……っ!」

き、貴様どういうつもりだ……っ!!」

「どうもこうも……あんたが俺にした所業を胸に手を当てて考えてみるよ」

フリード・セルゼンは冷ややかな視線をバルパー・ガリレイに向けたかと思うと、その体を蹴り飛ばした。

そして、僕の方を向くとエクスカリバーを肩に担いだ。

「……さっきの言葉、どういう意味だい？」

「ん〜?何?知りたいの?」

フリード・セルゼンは首を軽く横に倒すとそういった。僕は無言のままフリード・セルゼンを見つめる。

すると、肩をすくめて口を開いた。

「可愛い女の子にそんなに見つめられたら話さざるおえないなあ。悪魔だけど。」

じゃ、ほんの少しだけ昔話をしよーじゃあくりませんか」

そう言ったフリード・セルゼンは顎に手を当てながら話を始めた。

「そうだなあ……まずは俺がなんでエクソシストになったか……つてところから話すかな」

「俺つてさ、元はただの一般家庭の生まれなわけ。」

父親と母親と妹2人と俺で幸せに暮らしてたんだよねえ」

「でもさくある日突然悪魔がやってきてねえ……」

「父親と母親は俺と妹2人を逃がした後に悪魔に殺されちゃった★」

「それから俺たち兄妹は行くあてもなく彷徨つてただけどさ……餓死しかけの時に一人のエクソシストに拾われたんだわ」

「んで、そこから金稼ぎと憎い悪魔を殺すためにエクソシストになったわけ。」

運良く俺には戦闘の才能があつたから困らなかつたんだよねい」

「エクソシストになってからはろくに家にも帰らず悪魔殺しの日々。」

たまに電話で妹たちの声を聞くぐらいだったのよ」

「で、ある時その爺さんが現れて『力が欲しくはないか?』つて言ってきたんだよねい」

「そんな時の俺はまだ餓鬼も餓鬼でさあ。」

力欲しさに爺さんにホイホイついて行つちまつたわ。笑えるだろ?」

「爺さんについて行ったら一つの結晶を渡された。」

それを身体に取り込んだら確かに力は手に入ったさ……それも飛びっきりのな」

「——けどな」

「俺は力と引き換えに大切なもんを失つてたのさ」



「……唯一の家族——2人の妹を……な……」

フリード・セルゼンは顔を少しだけ伏せるとそう言った。

「い、一体……どういう……」

「あん？」

なに、簡単なことさ。

俺の妹たちは——聖剣適合の因子を命ごと抜かれて死んだのさ★」

——それに気づいたのは爺さんから因子をもらってゴキゲンに帰った時だけだな、とフリード・セルゼンは自嘲気味な表情を浮かべて僕にそう言った。

「聞いたところによると俺の妹たちは他の奴らよりも聖剣適合の因子を多く持ってたみたいでなあ……」

フリード・セルゼンはゆっくりとバルパー・ガリレイに近づいていく。

「この爺さんは妹たちを攫って因子とさらに命まで抜いて、それを兄妹だから適合率が高いだろって理由で俺に渡したんだとツ!!」

「ぐふ……っ!!」

フリード・セルゼンはバルパー・ガリレイの腹部を思いっきり蹴り、地面を転がした。

「いやあくあん時は荒れたなあ……」

「なんとって関係者皆殺しにしたし★」

「まあ、逃げてた何人かは殺し損ねたけどお」

フリード・セルゼンは憤怒の表情を一瞬だけ浮かべると、直ぐにハラハラと笑う。

「……なら、何故バルパー・ガリレイに協力を……」

「君にとつては復讐の対象だろう？」

「協力？バカを言わないでくれたまえ」

「俺はコイツの全てを奪うために力を蓄えてたのさ！」

「だから、この爺さんの実験も素直に受け入れた！何せ力が手に入る」

んだからな!!」

フリード・セルゼンは瞳を黒く濁らせてそう言った。

……何という黒い感情なのだろうか……。

僕には到底予想できないほどのモノがそこにはあった。

「……とまあ、これが不肖私めの人生ですぜい」

フリード・セルゼンは濁らせた瞳を元に戻し、わざとらしく礼をした。

「……キミも辛い思いを……」

「あゝ……やめてくれやめてくれ。」

悪魔に憐れんでもらわないといけないほど俺も落ちぶれちやいねえよ」

フリード・セルゼンは手をひらひらとさせると迷惑そうな表情を浮かべた。

——閑話休題。

「さてさてさて……騎士<sup>ナイト</sup>クン改めて騎士<sup>ナイト</sup>チャン。

この前の続き……殺りましょーぜい」

そう言ったフリード・セルゼンはエクスカリバーを軽めに構えた。

「……わかった。」

やろうか——フリード」

僕は目を閉じて集中する。

すると、突然仲間の、部長たちの声が聞こえてきた。

「木場!!」

お前の覚悟見せつけてやれ!!!」

——イツセーくん。

「お前は、リアス・グレモリー眷属の『騎士』で、俺の仲間だ!俺のダチなんだよ!

それはお前が男だろうと女だろうと関係ねえ!!!」

キミは僕を助けてくれた。何も得がないのに、主に罰を受けるかもしれなかったのに――。

「祐斗……いえ、『祐奈』！」

あなたがその姿になるってことはもう迷わないのね……なら、行きなさい。あなたの信じるあなたの道を行きなさい！

私の『騎士』はエクスカリバーごときに負けはしないわ！」

「祐斗くん……いえ、祐奈ちゃん！信じてますわよ！」

部長、副部长……。リアス部長！朱乃さん！

「……ゆ、祐奈……先輩！」

小猫ちゃん。

「フアイトです！」

――皆。

自然と笑みがこぼれてくる。

僕にはこんなにも優しい仲間がいるんだ……。

僕は目を開けると魂に呼びかけ、決意を口にする。

「――僕は、剣になる」

一緒に超えよう――。

あの時、達せなかった想いを、願いを、今こそツツ!!!

「部長、仲間たちの剣となる！」

今こそ僕の思いに答えてくれッ！

――『魔剣創造』ツツ!!!  
ソード・ピース

僕の神セイクリッド・ギア器と同志たちの魂が混ざり合う。同調し、カタチを成してゆく。

魔なる力と聖なる力。相反する2つの力が反発することなく融合して行った。

――そう、この感覚。

僕の神器が、僕の同志たちが教えてくれる。これは『昇華』だと。神々しい青白光と禍々しいオーラは螺旋を描きながら僕の手元へと集まっていく。

そして、現れたのは鞘に納刀された一振りの日本刀。

――完成したよ、皆。

「―――フランス・ブレイカー【禁手】、ソード・オブ・ビトレイヤ『双覇の聖魔剣』。

【聖】と【魔】を有する剣―――今は日本刀だけどね―――の力、その身に受け止めるといいよ」

そう言つて、僕は日本刀を腰に差し、フリード目掛けて走り出した。『騎士』ナイトの僕の特性はスピード。士織さんと鍛えたこのスピードが僕の最大の力だ。

僕はフェイントを織り交ぜながらフリードに接近していく。

しかし、フリードはそのフェイントに反応し、目で追って来ていた。

「流石だねッ！」

「いや〜！」

これは本当に追うので精一杯だ！」

そう言つたフリードの表情には余裕は見当たらない。

そうはいうものの、これでは拉致があかない。

僕はフェイント無しにフリードに接近するのを最優先に動いた。

（まずは一撃……ッ！）

接近と同時に抜刀、そして斬る。

「ひゅ〜！」

今のは危なかつたわあ〜」

フリードはそういいながらエクスカリバーでガードしていた。その刀身は広がり、まるでシールドのようになっていた。

「……【擬態の聖剣】エクスカリバー・ミニッツクの能力で刀身を広げて、【天閃の聖剣】エクスカリバー・ラビッドリイの能力で防御を間に合わせたんだね……」

「ご名答〜★」

僕は一旦フリードとの距離を取り、再び納刀する。

「……もう1段階、上のステージに……」

僕は納刀した刀の性質を創り変える。何の能力も付与していないままの聖魔剣ではフリードには届かない。そう感じたから。

「……くっ！」

今までとは比べ物にならない程の扱いの難しさ。

——だが、僕は負けるわけにはいかない。

(聖魔剣……僕の魔力をありつたけ……喰らえ……っ!!)

魔力が枯渇する寸前まで聖魔剣に供給する。

思い描け……。

僕が今欲している聖魔剣の姿を——

っ!!!

——そして僕は、

「があああ……っっっ!!?!」

——極地に1つ近づいた。

僕の背後には斬つけられ膝をつくフリードの姿がある。

そして、僕は納刀し、柄に手を添える姿で静止していた。

「……名付けるとしたら【ろおうそうらい露往霜来】……スピードに特化した聖魔剣だ」

僕がやったのはフリードに近づき、抜刀術の要領で斬つけ、走り去り納刀しただけだ。

フリードは顔をひそめながらも立ち上がり、僕の方へと視線を移す。

「こりゃ……大化け……しやがったな」

苦しそうに言葉を紡ぐが、しかし、その体には斬傷が見当たらない。

「咄嗟に……【エクスカリバー・ナイトメア夢幻の聖剣】で……体の、位置を……間違っ  
て見せた……が……それでも、剣圧が……シャレになんねーよ……」

そう言っ  
て血を吐きだすフリード。口元を拭いエクスカリバーを再び構えた。

僕もそれに対して抜刀術の構えを取ろうとしたのだが、体に力が入

らず、膝をついてしまう。

「……ま、魔力が……っ！」

「あれ……？」

騎士チャン……満身創痍……？」

聖魔剣に魔力が枯渇する寸前まで与えたため、魔力枯渇による脱力が僕の体を襲っているのだ。

あの一撃で決めようと思っていた僕としてはかなりのピンチに陥っている。

「——では、私が引き継がせて貰おう」

そんなとき、先程まで静かだったゼノヴィアの声が響いた。

僕が膝をついている横まで歩いてくると勇ましく仁王立ちになる。

「私では力不足かな？」

ゼノヴィアの言葉にフリードが反応、そしてその姿をじっくりと見ると眉をひそめて口を開いた。

「ん……やっぱり、騎士チャンと……比べると、ねえ……」

「そうか……ならば……」

ゼノヴィアは左手に聖剣を持ち、右手を宙に広げた。

「——ペトロ、バシレイオス、ディオニシウス、そして聖母マリアよ。我が声に耳を傾けてくれ」

何かの言霊を発し始めている。彼女は一体何を……？

疑問に感じていた僕の視界で空間が歪む。そして、歪みの中にゼノヴィアが手を入れた。

無造作に探り、何かを掴むと次元の狭間から一気にソレを引き出す。

——そこにあつたのは1本の聖なるオーラを放つ剣。

「この刃に宿りしセイントの御名において、我は開放する。——」

——【デュランダル】——！

デュランダル!?

エクスカリバーに並ぶほど有名な伝説の聖剣じゃないか！確か斬れ味だけなら、最強だと聞いている。何故彼女が……？  
「イリナたち現存する人工聖剣使いと違って私は数少ない天然モノの1人でね。」

エクスカリバーの方は兼任していただけなのさ」

周りの視線に気がついてか、彼女はそう説明をした。

ゼノヴィアはフリードの方を見つめると再び口を開く。

「デュランダルは想像を遥かに超える暴君でね。触れたものは何でもかんでも切り刻んでしまう。」

所有者である私の命令でさえろくに聞かない。故に異空間へ閉じ込めておかないと危険極まりないのさ。使い手の私ですら手に余る剣だ。

——さて、フリード・セルゼン。

今の私でも……力不足と言うかな？」

そう言つて、左手の【破壊エクスカリバー・デストラクションの聖剣】右手の【デュランダル】を構え、聖なるオーラを放たせ始める。

「いいや——イイよイイね!!」

騎士チャンとまでは行かないけどキミとも戦いたいね!!」

フリードは楽しそうに笑いゼノヴィアをしつかりと見た。

ゼノヴィアは僕に視線だけ向けると、柔らかに笑う。

「……ここからは任せてくれ先輩」

僕にかろうじて聞こえるような声でそう言った。

「……じゃあ、頼んだよ後輩」

僕はそう言うのと聖魔剣を消した。体はもう動かない。フリードに勝てなかった。悔しい思いはあるけど……もう、いいかな……。

(復讐はもう、良いんだ……)

これから強くなつて、僕の、僕たちの【チカラ】を証明していこう……)

何処からか、みんなの声が、聞こえた。

く怒りに震えましたく

S i d e 三人称

「行くぞ……ッ!!」

ゼノヴィアの動きに迷いはなかった。エクスカリバー・デストラクション破壊の聖剣とデュランダル、2本の剣を持ち、フリードへと突撃する。

「わっかやすす!!でもイイツ!!」

フリードはゼノヴィアの行動に対してそのような言葉を述べ、笑う。そして、ゼノヴィア迎撃のためにエクスカリバーを構えた。

「ハアアアアッ!!」

左手に持つ破壊の聖剣による一閃をフリードは器用にも刀身を滑らせて受け流す。しかし、ゼノヴィアにはもう一本右手のデュランダルがあるのだ。

「喰らえッ!!」

「喰らいませんってなあ!!」

フリードはデュランダルによる一閃をもエクスカリバーで受け流す。さらに、フリードは防御に回るのではなく、そこから反撃をみせた。エクスカリバー・ミミック【擬態の聖剣】の能力を使い、刀身を伸ばし斬りかかったのだ。  
「く……っ?!」

流星は聖剣使いになっただけのことはある。ゼノヴィアはその攻撃を身を捻って躲す。

「まだまだアー!」

そんなゼノヴィアに追撃と言わんばかりにフリードはエクスカリバーを振るう。何本にも枝分かれしたエクスカリバーは恐ろしいスピードでゼノヴィアを襲った。

何とか2本の剣により防御は成功しているものの、これはどう見ても押されている。

「これ程か……ッ!」

ついつい悪態を吐くゼノヴィア。フリードの猛攻に守りに徹するしか手がなくなってしまうていた。しかも、攻撃している方のフリードには祐奈から受けた若干のダメージが見えるものその表情は余



裕そのもの。

「ほらほら！どつたの？青髪チャン！

さつきまでの威勢の良さは何処に置いてきちやったの？」

「く……ッ!!」

(これほど……これほどまでか……っ!?)

最強とまで言われたエクソシスト。ゼノヴィアは改めてフリードの強さを認識した。

そして、理解した。

——彼に勝つにはまだ自分は未熟なのだ。

「……それでも……ッ!!」

ゼノヴィアは二刀流からくる手数で多さで何とかフリードの猛攻をさばききる。

そして不意に、何故かフリードの猛攻が弱まった。

「……ちっ」

「……今しかない……ッ!!」

フリードの舌打ちの意味はなんなのかは分からないがゼノヴィアもこの隙を逃すことは出来ない。

破壊の聖剣を放り投げ、デュランダルの制御へ意識を絞った。

「デュランダルッッ!!」

荒々しい聖なるオーラはデュランダルとゼノヴィアを包み込む。

ゼノヴィアはデュランダルを大きく振りかぶると、兜割りの要領でフリードに振り下ろした。

「マジですかい……ッ!!」

フリードもその一撃には目を開き、対処を急いだ。エクスカリバーは聖なるオーラを纏い、デュランダルの一撃を防ぐ。

——途端、周囲に突風と砂埃が巻き起こる。

聖なるオーラを迸らせながら、デュランダルとエクスカリバーは火花を散らし、一進一退の攻防を見せていた。

「おおおおおおお……ッ!!」

ゼノヴィアはこの一撃が最後だと言わんばかりに力を込めている。

「……ッ!?!」

と、その時、フリードが表情を歪めて初めて焦りを見せた。

「ちい……っ!?!」

フリードは本意そうに舌打ちをするとゼノヴィアにローキックを放つ。

「くっ!?!」

ゼノヴィアはフリードによるその攻撃に反応することが出来ずに、体制を崩してしまう。

「おらあ……っ!?!」

フリードはすかさず体制を崩したために力が抜けたデュランダルを刀身を使って滑らせ、地面へとその一撃を流した。

デュランダルの一撃は、地面に炸裂。地面をデタラメに斬り裂き、破壊する。

フリードはその余波に巻き込まれないようにゼノヴィアから距離を取ると憎々しげにエクスカリバーを眺めた。

「エクスカリバーつっても所詮は折れた聖剣か……」

フリードの言葉を待っていたかのように、そのエクスカリバーは――ヒビを入れた。

「耐久力なさすぎだろ……まあ、あの爺さんが統合したモノにしちやマシな出来だったか……」

フリードはそう言うと、渾身の一撃をあろうことか逸らされ、膝をついているゼノヴィアに視線を向ける。

「オモシロかったぜ?青髪チャン。」

もちっと遊んでたかったけどこっちの得物が壊れちゃったし……今回は青髪チャンたちの勝ちでいーわ」

ケラケラと笑いながらそう言うフリード。ゼノヴィアは勝ちと言われながらも悔しそうに表情を歪めている。

「あ、そくいえば、そこに転がってる狸寝入りした爺さんだけど、もう興味無いし、好きにしていーぜ」

狸寝入りという言葉に、ビクンと反応するバルパー・ガリレイ。フリードは冷めきった視線を向けていた。

「さてさて……これ以上ここにいてもろくなことないし……俺は一足先に帰らせてもらおうわ。」

あ、騎士<sup>ナイト</sup>チャン……確か祐奈ちゃんだっけ？その娘に『また殺ろうぜライバルチャン』って言っついてね〜！

んじゃ、ばいちゃ♪」

フリードは言いたいことだけ言うと、エクスカリバーは放り捨て、懐から複数の閃光玉をばら撒き、逃げ出した。

視界が回復した頃には、その場には捨てられたエクスカリバーのみが残されていた。

「……くそ……ッ！」

ゼノヴィアは悔しそうに地面を殴った。

祐奈、ゼノヴィアの両者は意識はあるものの力を使いすぎて立つことも出来ない。対してフリードは得物が壊れたもののほとんど無傷で逃走。

——今回もまた、事実上フリードの圧勝であった。

~~~~~

「フリードのやつ……私の計画を引っかき回すだけでは飽き足らずエクスカリバーを傷物にするとは……。」

それよりも聖魔剣だ！

反発し合う2つの要素が混じり合うなんてあるはずがないのだ……。」

バルパー・ガレイはフリードが去った途端に立ち上がるとブツブツと呟き始める。

一誠はそれを見ながらも傷ついた仲間を救出し、一点に固まっていた。

「……そうか！わかったぞ！『聖』と『魔』、それらを司る存在のバランスが大きく崩れているとするならば説明はつく！」

つまり、魔王だけではなく、神も——」

何かに思考が達したかに見えたバルパー・ガリレイの胸部を、突然光の槍が貫いた。

「…………ふ…………っ?!」

バルパー・ガリレイは目を見開き、口から血の塊を吐き出すと、そのままグラウンドへ倒れ伏した。生死の確認などする間もなく、即死だろう。

「バルパー。お前は優秀だったよ。

そこに思考が至ったのも優れているがゆえだろうな。

——だが、俺はお前が居なくても別にいいんだ。最初から1人でやれる」

宙に浮かぶコカビエルが嘲笑っていた。

協力していたはずのバルパー・ガリレイをなんのためらいもなく殺したコカビエル。初めから、バルパー・ガリレイのことを使い勝手のいい駒程度にしか思っていなかったのだろう。

「ハハハハ！カーハッハッハハハハハッ！」

コカビエルは哄笑を上げ、地に降り立つ。

凄まじいまでの自信を身に纏い、流星は墮天使の幹部。オーラ量は膨大だ。

「…………さて…………赤龍帝！」

お前の全力、俺に見せてくれ!!」

獰猛な笑みを浮かべ、一誠を視界にとらえる。

「お前と戦うのが楽しみで楽しみで仕方がなかった！

血沸き肉踊るとはこのことかと言わんばかりだ!!」

拳を握り、猛った様子のコカビエル。しかし、そんなコカビエルに對して、一誠は全くの関心を見せなかった。

そして、あろうことか バランス・ブレイカー【禁手】を解除してしまう。

「悪いけど、俺が相手することはないと思うぜ？」

「…………何だと…………？」

一誠の言葉に不機嫌そうに表情を歪めるコカビエル。

「俺がぶちのめしたいところだけど…………あいつの邪魔したら俺が殺さ

れちまうよ」

肩をすくめながら一誠はそう言う。

コカビエルは怪訝そうな表情を浮かべる。

——その時、辺りを覆う結界が一瞬揺らめき、再構築された。

「……何処行つてたんだよ……」

溜息混じりの言葉を吐く一誠。

その視線は正門の方を向いていた。

——そこにいたのは1人の人間。

美少女とも取れるそんな風貌をした少年は、自然体でその場に立っていた。

「……潰しに来たぞ……コカビエル」

その言葉は辺りに重圧を生み出した。

コカビエルは少年を視界に入れるやいなや、その表情を驚愕に染める。

「……ほう……」

そして、短く唸ると、一誠を相手にした時以上に獰猛な笑みを浮かべ、コカビエルは一瞬で標的を少年に変更した。

「俺の家族に手え出したんだ……塵も残らないものと思いやがれ……ッ！」

憤怒の表情を浮かべる少年、いや、士織。

感じられるオーラと重圧はコカビエルがまるで赤ん坊の様に感じてしまえるほどだ。

——ここにきて、士織は姿を現した。

——怒りをその身に宿しながら。

く失言しましたく

S i d e 三人称

「凄まじいな……一体何者だ？」

コカビエルは土織をジツと見つめて口を開く。

「ただの人間だカラス野郎」

そう言って、オーラが吹き出す。土織の身体を中心に、オーラは渦を巻いた。

「ハハハハッ！」

赤龍帝よりも圧倒的なその力……実に高ぶるぞ!!!」

コカビエルは笑い声を上げ、さらなる強者の登場に心を躍らせる。しかし、その額には汗が吹き出していた。土織との力量差がわからない訳ではないらしい。

「年甲斐も無くはしゃいでしまいそうだぞ……人間!!!」

コカビエルは更なるオーラを滲み出させる。なるほど、先程までのものは手加減していたようだ。

「御託はイイから……掛かってこいよ」

土織は構えることなく、ただ棒立ちでそう言い放った。

コカビエルはそれを侮りとは取らない。土織と自分には月とすっぽん程の力の差があるのだと、そう理解しているから。

「どんな攻撃も一発だけ躲さないでいてやる……さあ、遠慮するな」

コカビエルに向けて手を伸ばすとクイツと曲げて掛かってこいという意思を見せた。

「……後悔するな……人間ツツ!!!」

コカビエルの咆哮と同時にその頭上で無数の光の槍が現れる。

「——行け、光の槍よツツ!!!」

怒涛の槍の雨が土織を襲う。

地を抉り、土埃が舞い、轟音が鳴り響く。

それを見たりアスたちは口に手を当て目を見開いた。

「……やったか……?」

コカビエルの眩きはやけに響く。

士織がいた場所、つまりは攻撃をした場所をじつと見つめ、事の行方を見守るコカビエル。

「……んなわけねえだろ」

土埃を切り裂いて現れたのは無傷の士織。

コカビエルはその姿に目を剥いた。

「つたく……脆すぎる槍だったな……」

頭が痛いと言うかのように顔を顰めながらそう呟く。そして、士織は顔を上げると、コカビエルを睨みつける。

「お前みたいな雑魚に家族を傷付けられたと考えると……まったく虫酸が走る」

「……言いたい放題言ってくれるじゃないか……所詮は人間のくせに……ツツ!!」

そう叫んだコカビエルはその手に光の槍を出現させると、士織に向かって突撃していく。

「……だから無駄だって……」

士織は迫り来るコカビエルの攻撃に全くの動揺を見せず、あろう事か手で払うだけで光の槍を破壊してしまう。

「な……っ!?!」

まさか払われるだけで破壊されるとは思っていなかったのだろう、コカビエルの顔に驚愕の表情が張り付いた。

「まさか……まで……ツ……」

急上昇することで士織と距離をとったコカビエルは舌打ちをする。先程からありえないことばかりを体験しているかのようで、コカビエルは相当参っているようだ。

チラリとリアスたちの方を見たコカビエルは不本意そうな表情を浮かべながらも口を開いた。

「……時に人間、ひとつ面白い話を聞かせてやろう」

「何のつもりだ……？」

怪訝そうな表情でココビエルを見つめる土織。ココビエルは口角を上げ、得意気な表情を浮かべていた。

「先の三つ巴戦争で四大魔王が死んだのは知っているだろうか？」

その言葉は土織へと向けられたというよりか、リアスたちの方へ、言うなら特定の人物たちへと向けられた言葉のようだった。

「これはお前達下々には語られていない真実なのだが……あの時、四大魔王だけではなく——神も死んだのさ」

まさにそれは——爆弾。

ココビエルは今まで隠されていた、隠さなくてはいけなかった事をここでばらしたのだ。

そしてそれは、土織ではなく、リアスたちの方を混乱に陥れた。

「フハハハハハハハハ！」

知らなくて当然だろう！神が死んだなどと、一体誰が言える？人間は神がいなくては心の均衡と定めた法も機能しない不完全な者の集まりだぞ？

我ら墮天使、悪魔でさえも下々にそれらを教えるわけにはいかなかった。何処から神が死んだと漏れるか分かったものじゃないからな。

三大勢力でもこの真相を知っているのは各陣営のトップと一部の者たちだけだ。

……まあ、先程バルパーが気づいた様だったがな……」

ココビエルの言葉に少し俯く土織。その姿に気を良くしたのか、ココビエルは更に饒舌に語り続ける。

「戦後残されたのは、神を失った天使、四大魔王全てと上級悪魔の大半を失った悪魔、幹部以外の殆どを失った墮天使。」



最早、疲弊状態どころの騒ぎでは無かった。何処の勢力も人間に頼らねば存続の危機に陥る程にまでなってしまったのだ。特に天使と墮天使は人間と交わらねば種を残せない。墮天使は天使が堕ちれば数は増えるが、純粋な天使は神を失った今では増えることなどできない。悪魔も純血種が希少だろう?」

「う、ウソだ……。そんなの……。ウソだ……」

耐え切れなくなったのだろう。ゼノヴィアが力が抜け、うなだれる。その表情は見ていられないほど、狼狽に包まれている。

現役の信仰者。神の下僕。神に従えることを使命として今まで生きてきたのだ……。それにも関わらず、今此処で神の存在を否定され、生き甲斐を失い……。そのシヨックは計り知れない。

——土織がピクリと動く。

「正直に言えば、もう大きな戦争など故意にでも起こさない限り、再び起きない。

それだけ、何処の勢力も先の戦争で泣きを見た。お互い争い合う大元である神と魔王が死んだ以上、戦争継続は無意味だと、そう判断したのだ。

アザゼルの奴も戦争で部下を大半亡くしてしまったせいか、『2度目の戦争はない』と宣言する始末だ! 全く持って耐え難い! 耐え難いんだよ!!! 一度振り上げた拳を収めるだど!?! ふぎけるな、ふぎけるなツ!!

あのまま継続すれば、俺たちが勝てたかもしれない……。いや勝てたのだ! それを奴はツ! 人間の神器所有者を招き入れなければ生きていけぬ墮天使どもなぞ何の価値がある!?!」

自らの持論を力強く語ったコカビエルはその表情を憤怒に染めていた。

『神の死亡』という事実には、アーシアは口元を手で押さえ、目を大きく見開いて、全身を震わせていた。

「……主がいないのですか……。? 主は……。死んでいる……。??」

「……では、私たちに与えられる『愛』は……」

「そうだ。」

神の守護、愛がなくても当然なんだよ。

神は既にいないのだからな。

そう考えるとミカエルの奴は良くやっている。神の代わりをして天使と人間をまとめているのだからな。

まあ、神が使用していた『システム』が機能していれば、神への祈りも祝福も悪霊<sup>エクソシスト</sup>祓いもある程度動作はする。

——ただ、神がいた頃に比べて切られる信徒の数が格段に増えたがな。

その小娘が【聖魔剣】を創り出せたのも神と魔王のバランスが崩れているからだ。

本来なら、【聖】と【魔】は混じり合わない。【聖】と【魔】のパワーバランスを司る神と魔王が死んでしまえば、様々なところで特異な現象も起こるといったものだ」

コカビエルの言葉を聞き、アーシアは——その場で崩れ落ちた。

「アーシアー・アーシアしつかりしろ!!」

一誠はアーシアを抱きかかえ、呼びかける。アーシアの目からは絶え間なく涙が流れていた。

倒れたアーシアに動揺を隠しきれない様子の一誠。

——土織が顔を上げた。

そんなもの関係ないと言わんばかりに、コカビエルは拳を天に掲げた。

「俺は戦争を始める、これを機に！お前たちの首を土産に!!」

俺だけでもあの時の続きをしてやる！

我ら墮天使こそが最強だとサーゼクスにも、ミカエルにも見せつけてやる!!!」

そう言つて高笑いするコカビエル。

「―――どうでもいいけど……何俺の家族泣かしてんだよ……クソカラス」

何時の間にか、土織はココビエルの目前に現れていた。目を見開くココビエル。なんとか距離を取ろうとするものの、遅い。

「―――墜ちろ」

「ぐはあ……っ!!?」

ココビエルの脳天に土織の踵落としが炸裂。まるで隕石のように地面へと落下していった。

土織もそれを追うように、重力に引かれて落ちていく。どうやら土織はただの跳躍でココビエルに接近したようだ。

「ぐう……っ!」

地面へと墜ちたココビエルはカオを歪めながら立ち上がり、翼を広げた。

ココビエルの前に立つ土織はその翼を見て眉をひそめる。

「まさに『カラスの羽』だな。薄汚い色をしてやがる。

……俺が唯一褒めたアザゼルの羽はもっと薄暗く、常闇のようだったのにな」

言つて、一歩前が出る。

「父さんを傷つけられたのだけでも俺は怒ってたのにさあ……」

また、一歩前が出る。

「アーシアまで泣かしやがって……」

また、一歩。

「拳句の果てに俺たちの首を土産に戦争……?」  
立ち止まり、コカビエルを睨み付ける。

「調子に乗ってんじゃねえぞクソカラスツツ!!」

途端、土織から、凄まじい聖なるオーラが吹き出した。

「ツツ!?き、貴様一体それは……ツ!?!」

コカビエルも土織から感じる聖なるオーラに驚きを隠せない。  
リアスたちですら、土織のそのオーラに目を見開き、驚く。鱗片だけだが、見たことのある一誠、アーシアですら、その光景に目を奪われていた。

「……コイツは知られると厄介だから……使うつもりはなかったんだけど……まあ、どうとでもなるだろう」

——何せ、家族の敵を潰すために使うんだから。後始末ぐらい安いもんだ。土織は笑顔でそう言い、吹き出す聖なるオーラを凝縮しながら、そして、その名を呼んだ。

「フェアリー・エンジェル【精霊天使】」

凝縮された聖なるオーラをその身に纏い、土織は口を開いた。

「……今日は特別だ……『この先』を見せてやる」

神器である【精霊天使】の能力を一つも見せる間もなく、土織は『この先』という言葉の口にする。

「バランス・ブレイク【禁手化】」

——瞬間、光が爆発した。

『神威靈装・神番』

士織の眩きと共に、聖なるオーラは質量を持つ物体へと変化を遂げる。

黒の袴に藍色の羽織。

二本の刀を腰に携え、首には漆黒の長布が巻かれ、たなびいていた。決して派手ではない。しかし、それは見るもの全てを魅了しうる――

——和装。

士織はそれに身を包むと、静かに地を踏み鳴らす。

「【ディセント・オブ・セフィロト現界せし天魔の奇跡】……これが俺の神器【精霊天使】の【禁手化】だ……」

士織の背後に光り輝く果実が11個浮かぶ。

「さあ、コカビエル……消える覚悟は出来たか？」

俺はもう既に――消す覚悟は出来てる」

士織は笑った。口を三日月状に開いて。

く白と出逢いましたく

S i d e 3人称

『ヤハウエ』……だと!?

……貴様……『人間』ではなかったのか……っ!?

笑う士織をコカビエルは眉をひそめて見つめると、慌てたように声を荒げる。

「俺は人間さ。」

初めに言っただろう?

それとも何か?お前はそれくらいも記憶出来ない程の鶏頭なのか?

カラスなのに鶏頭とは傑作じゃねえか」

「……貴様あ……っ!!」

コカビエルは殺気を振り撒きながら、士織を射殺さんばかりに睨む。しかし、当の士織はその視線をまるで微風だと言わんばかりに気にしない。

「さあて……さつきも言っただけど……消される覚悟は出来たよな?」

士織の問いにコカビエルは額から汗を垂らす。今この場を支配しているのはコカビエルの殺気ではない。

——士織のコカビエルに対する敵意だ。

「く……っ!」

コカビエルは構える。士織の一挙一動を見逃すことがないように。

重心は低く、咄嗟の判断もミスしない。そんな雰囲気を漂わせ、コカビエルは士織の行動を見守る。

「ふう……」

士織は小さく息を吐くと、手を動かす。

それを見たコカビエルは大袈裟に反応すると、その手に光の槍を作り出し、迎撃の体勢をとった。

そんなコカビエルを嘲笑うかのように、士織は背後の光り輝く果実に手を伸ばした。

「じゃあ……これ♪」

碧色に輝く果実を握り、口づけを落とす土織。  
そして、その果実を――噛じる。

「――おいで【ハーミット】」

瞬間、その場の気温が急激に下がった。

「な、何事だ……っ!?!」

コカビエルはその現象にキョロキョロと目を動かす。  
見れば土織の傍に大小2匹の碧色ウサギが飛び跳ねていた。

『やつほーしおりくーん♪』

よしのんを使ってくれるなんてうれしーなーこのこのー♪』

「っっ!!?!」

突然聞こえてくる声にコカビエルは反応する。その声は一体何処から聞こえてくるのか、コカビエルは発生源を探し、発見した。

その声は、土織の傍にいるウサギから聞こえてきていたのだ。

「おお、よしのん。

元気がいいなあ……何かイイことでもあったか?」

『もっちゃん♪』

よしのん的には土織くんに会えてすごくうれしいよー』

ぴよんぴよんと元気よく飛び跳ねる小ウサギ。土織はそれを笑って見ると、縮こまっている大ウサギの方へと視線を移した。

「四糸乃はご機嫌斜めか?」

『……っ!?!……そ、そんなこと……ない、です……!』

……わ、私も……土織さんに、会えて……その……嬉しい、です

……っ!」

慌てたようにふるふると首を振る大ウサギ。士織はそれを微笑ま  
しそうに見つめて、ニコリと笑った。

「それなら良かった。」

……さて、今回はちつとばっかし荒々しい事しないでだけど……  
力、貸してくれるか？」

『もちろんさー』

『も、もちろん……です……!』

大小のウサギは2匹とも飛び跳ねた。

士織はそんな2匹にありがとうと言うと、優しく撫でる。

「じゃあ……やろうか。」

——【氷結傀儡】サドキエル】

士織の呼びかけ。

【氷結傀儡】とそう言うと、2匹のウサギは今までで一番大きく飛び跳  
ねた。2匹は形を崩し、溶けるように交わると、士織の前で新たな形  
を成した。

それは笏しやく。

碧色の美しい笏はおおよそ二尺ほどの大きさ。淡い氷の結晶のよ  
うな模様が見え、芸術品のようだ。

士織はその笏を手にとると、コカビエルを見据える。

「……あんなに無防備に話してたのに攻撃の一つもしてこないとは  
……墮天使の幹部が聞いて呆れるな」

「ぐう……っ!!」

怒りの形相でコカビエルは歯軋りをする。

そう、士織とウサギたちの会話は無防備で、攻撃する隙などいくら  
でもあったのだ。

「まあいい……取り敢えず……速やかに退場願う。——この世  
からな」

そう言った士織は笏を横薙ぎに軽く振った。すると、その軌跡をな  
ぞるように氷の帯が現れ、そこから幾数もの氷の塊が打ち出され始め



た。

「そんなもの……っ!!」

コカビエルは魔法陣を広げ防御の体勢をとる。しかし、氷の塊はその魔法陣をまるで豆腐を崩すかのように破壊してしまう。

「んな……っ!!?」

コカビエルは目を見開きながらも、次の行動は早かった。魔法陣の破壊を認識した瞬間、翼を羽ばたかせ後退し、氷の塊を躲したのだ。

そして、間髪入れずに己の持っていた光の槍を投げつけ土織へと反撃を行った。

「アイス・テリトリ氷結領域」

土織がそう呟くと、土織を中心に半径3メートル程の場所が一瞬で凍りつく。コカビエルの槍もその範囲に入った途端、凍りつき、砕け散る。

「……通用せんか……」

コカビエルはその光景に驚くことはなく、予想通りと言ったふうにな得の表情を浮かべた。

「驚きなれちまったか?」

「……ふん。普通にやっても通用しなかった物が通用すると思うほど俺も馬鹿じゃないんでな」

そう言ったコカビエルはその手に新たな光の槍を作り出した。

「まあ、あんまり時間をかけるのも面倒だから……次で終わらせてやる」

土織がそう言うときコカビエルは槍を構えるがその穂先が震え始める。心なしかコカビエルの額の汗の量も増えたように思える。

それを見た土織はクスリと笑い、笏を天へと掲げた。

「舞え永久とわの氷花ひょうか」

土織の頭上に氷で出来た美しい花が咲き乱れる。

「散らせ刹那いのちの生命」

舞い散る花びらが地に落ち、そして凍りつく。

「凍てつく世界に、一輪……」

士織は掲げた笏を振り下ろし、コカビエルへと向けた。

瞬間、氷の花たちは舞い踊り、コカビエルへと襲いかかる。

コカビエルは花びらたちを迎撃するために槍を振るうが、しかし、花びらが槍に触れた途端凍りつき……そしてコカビエル自身の命すらも凍りつかせる。

コカビエルの命を土台に、氷の花たちは美しく舞い、姿を変える。

「咲け……ライフ・アイス・フラワー【生命の氷花】」

士織は目を閉じそう言う。

コカビエルのいた場所には巨大な花が一輪咲いていた。冷気を漂わせ咲くその花は美しく、目を奪われる。

「これは凄いな」

その時、今まで聞かなかった声がその場に響いた。

今まで士織の戦いに圧倒され無言だったリアスたち、そして士織が声の主の方へと顔を向ける。

闇の中で輝く、一切の曇りも陰りも見せない白きモノ。地面すれすれにそれは浮かんでいた。

白き全身プレートアーマー鎧。体の各所に宝石らしき物が埋め込まれ、顔まで鎧に包まれており、その者の表情は窺えない。

背中から生える八枚の光の翼は、闇夜を切り裂き、神々しいまでの輝きを発している。

一誠はその姿に目を細め、士織は無表情に見つめていた。

「……………何だ？…白龍皇。」

今頃現れて何か用かよ？」

士織の『白龍皇』という言葉に息を呑むリアスたち。

一方、白龍皇呼ばれた全身鎧の者は士織の言葉への返答を行う。

「へえ……………オレが白龍皇だつてことはバレてるんだ？」

……………まあ、アザゼルにココビエルを連れて帰るように言われてたんだが……………」

自らを白龍皇だと認めた全身鎧の者はちらりと氷の花となったココビエルへと視線を移す。

「……………少し遅かったようだね」

苦笑気味の声でそう言うのと士織の方へと改めて視線を向けた。

「で？」

ココビエルは連れていけないんだし……………後は帰るだけってか？」

「オレとしては君と一戦交えたいところなんだけど……………」

白龍皇から、威圧的なオーラが吹き出す。それはココビエルよりも濃く、猛々しい。

白龍皇という存在がココビエルよりも格上なのがよく分かるオーラだ。

しかし、そのオーラもすぐに止んでしまう。

「……………今回はココビエルの回収しか命じられてないし……………何よりオレが勝手したらアザゼルが怒るからな。

別に怖くないが……………説教が面倒だ……………」

肩をすくめてそう言う白龍皇。

士織は白龍皇の物言いに少々の苦笑を浮かべていた。

「残念だけど今回は大人しく引き下がるさ。ただ覚えておいてくれ……。」

——オレは君といつか死闘をする」  
それを言うのと満足したのか光の翼を展開し、空へ飛び立とうとした。

『無視か、白いの』

——しかし、それを止める声が響く。

その声の発生元は一誠の籠手、ブラステッド・ギア【赤龍帝の籠手】だ。

『起きていたか、赤いの』

白龍皇の鎧に付いている宝玉も白き輝きを発し、声を響かせる。

『せっかく出会ったのにこの状況ではな』

『いいさ、お前の宿主は俺以外に興味を持ったようだしな。それが士織というのなら仕方が無いというものだ。』

しかし、白いの。以前のような敵意が伝わってこないが？』

『赤いの、そちらも敵意が段違いに低い……いや、最早感じぬではないか』

『今代の宿主はちよつと変わっていてな。』

何、戦い以外への興味が深いのか』

『ふっ……。』

そういうことならこちらもしばらく独自に楽しませてもらうよ。

たまには悪くないだろう？

また会おう、ドライブ』

『それもまた一興。』

じゃあな、アルビオン』

赤龍帝ドライブと白龍皇アルビオンの会話。

互いが別れを告げると、白龍皇は空へと飛び上がり、口を開いた。

「君と戦うのは運命。」

——強くなれよ、いずれ戦うオレの宿敵くん」

「お前に負ける気なんて毛頭ないね。」

俺の目標はお前に負ける程度じゃ達成できねえんだよ」  
白龍皇の挑発とも取れる言葉に強気で返す一誠。白龍皇はふつ、と短く笑うと、白き閃光と化して、飛び去っていった。

——こうして、墮天使の幹部コカビエルとの戦いは幕を閉じた。

『女の幸せ』返しました

Side 一誠

士織によるコカビエルの蹂躪。

それが終わればまさかの俺のライバルである白龍皇の登場。色々と驚きはあったものの、これだけは言える。

—— やっと、終わったんだ。

俺はぐったりとしているアーシアを支えながら、失意のうちに呆然としているゼノヴィアへと近づいていく。

「……ゼノヴィア」

「……ああ……赤龍帝か……」

……はは……聞いたか？神が……神がないそうだ……」

そう言うゼノヴィアの顔は見えないほどに酷かった。

士織の姿を見て、少しは元気を取り戻すかと思っていたが……どうやら、その姿を見ることすら出来ないほどに狼狽し、周りのことが頭に入っていないかったようだ……」

アーシアもそうだったように、ゼノヴィアもまた精神的なダメージが大きいように見える。

「神がいなければ……私の……存在意義は……」

乾いた声で笑うゼノヴィア。

俺はそんなに彼女を見ていられず、ただ——抱き締めた。

「……せき……りゆうてい……？」

「神はいない……だけどな、ゼノヴィア。」

—— お前はお前だろうか？

お前は神がいるから生きてるんじゃない。

生きているからこそ、神を信仰するっていう一つの行動を取れたんだ。

それになあ……ゼノヴィア。俺は神様ってやつを信じてない。

だってそうだろ？神様ってやつは気まぐれすぎる。

無償の愛？そんなもの神がくれなくたって俺が、家族が、仲間が与えてくれる。

救済？そんなもん俺がなんとかしてやる。

もし何かに縋りたい時があるのなら、神じゃなくて、周りの、自分が一番信用できる奴に縋れ。

それが俺だつて言うなら、それもいいさ。

泣きたいならいくらでもこの胸を貸してやる。

疲れたなら一緒に休もうぜ？

助けて欲しいなら俺はこの力を使うのを迷わねえ。

俺が目指してるのは【最高の赤龍帝】。

仲間1人支えてやれないでなれるわけねえだろ？」

我ながら小っ恥ずかしいことばかりを言ってる気がする。……けど、これは俺の本心。

「……仲間……？」

「ああ……」。

ゼノヴィア、俺たちは力を合わせて戦ったんだ。もう、仲間だろ……？」

俺の言葉を聞いていたゼノヴィアの瞳にほんの少しだが、光が灯つた気がした。

「それと……アーシア。」

「アーシアは俺の大切な家族だ」

ゼノヴィアだけではなく、今度はアーシアも一緒に包み込み、抱き締める。

「神様はいないかもしれない。

だけどな？アーシア。

「アーシアにはその代わりに大切なものができたはずだ」

「……大切な……もの……」

「ああ。」

リアス部長たちや俺たち……それに学校の友達たち。

沢山の優しい人たちに、アーシアは今囲まれてる。

これから先、アーシアには沢山の友達が、仲間が増えるさ。俺が保

証してやる。

……だからさ、アーシア。

そんなに悲しまないでくれ……俺の大好きなアーシアはやっぱり、笑顔が一番だ」

そう言つて、俺はアーシアに微笑みかけた。

「……イツセイさん……」

そのつぶやきを境に、段々と光が宿り始めるアーシアの瞳はキラキラと輝いて見える。

俺はゼノヴィアを、アーシアを優しく抱き締めた。すると、今度は2人も抱きしめ返してくれた。

2人は瞳に涙を溜めていたが、それは悲しい涙ではないと、俺は断言できる。

何故つて……？それは――

「――こんなに綺麗な涙……悲しくてでるわけないだろ……」

俺は2人の頭を優しく撫で、泣き止むのを待った。

Side Out



Side 土織

「祐斗……いえ、祐奈。

よく、頑張ったわね……」

それにその姿……きちんと過去と決別出来たのね？」



リアス先輩は優しげな声で祐斗……いや、祐奈へと話しかけ始めた。

祐奈は感慨深そうに頷くと、表情を曇らせ、俯く。

「……部長、僕は……部員の皆に……。何よりも、一度命を救ってくれたあなたを危険に晒し、あまつさえ過度の心配をかけてしまいました……。」

……お詫びする言葉が……見つかりません……」

そう言う祐奈にリアス先輩は近寄り、優しく頬を撫でた。

「いいのよ祐奈……。」

私はあなたの悩みが消えてくれたのなら、この程度のこと気にしないわ。

それに「禁手」だなんて……あなたは私の誇りよ」

慈愛深い笑みを祐奈に向けながらそう言うリアス先輩。祐奈は今にも泣きそうになりながらも、肩膝をつき、跪く。

「部長……。僕はここに改めて誓います。」

僕、『木場祐奈』は主リアス・グレモリーの眷属——【騎士】<sup>ナイト</sup>として、あなたと仲間たちを終生お守りする、【最強の騎士】となることを「強い決意の籠った言葉。」

祐奈は揺らぎのない覇気を纏いながらそう宣言した。

……迷いがなくなるだけでここまで変わるとはな……。」

【最強の騎士】……大きく出たわね、祐奈」

リアス先輩は跪く祐奈をじっと見つめながらぼつりと呟く。

そして、一瞬瞳を閉ざすとふう、と息を吐き口を開いた。

「——言ったからにはなりなさい。あなたの師をも越え、【最強の騎士】に」

「はい……っ!!!」

リアス先輩の言葉に祐奈は大きな返事を返す。

そんな2人の表情は何処か満足気だったのをここに記そう。

「土織さん」

リアス先輩への宣言を終えて、祐奈は立ち上がると俺の方へと近づいてくる。

「おう、祐奈」

短く淡々としたそんな言葉を口にし、俺は祐奈の方を向き直す。

「その……ね……？」

全部終わったから……その……来たよ？」

もじもじとしながらそう言う祐奈は頬を赤く染めていた。

「んん？なんだ？褒めてもらいに来たのか？」

祐奈が何をしに来たのかは薄々分かつてはいたが、少し意地悪をしを試みることにする。

「えっ……っち、違うよ！

いや、確かにそれもして欲しいけど……。

もう！忘れちゃったの……？」

俺を見つめながらの不安げな表情と声。

……ふむ……これはこれでイイな。

「やあ……？」

何を言ってるのか分かんねえけど……祐奈が自分から言ってくれろと分かるかもな？」

「ぼ、僕から……っ?!」

面白いように慌て出す祐奈。どうやら俺から言ってくれると思っていたようで……ところがどっこいこれが現実ですってな。

「う、う~~~~~」

顔をさらに赤く染めながら唸るように声を出す祐奈に俺はにやにやとした笑みを向ける。すると、ようやく気がついたようで、ジトつとした目で俺を見始めた。

「……また僕で遊んで楽しんでるね……？」

「ははっ！気がつくのが遅えよ祐奈。

「だいたい俺が約束を忘れるわけねえだろ？」

「そう言っただけじゃ、祐奈はほっとしたような表情を浮かべる。

俺はそんな祐奈に自ら近づくと、優しく頭を撫でた。

「——俺でいいの？」

祐奈は俺の言葉に少しだけ目を開くと恥ずかしそうに顔を俯かせ、こくりと小さく首を振った。

「……そうか。」

「ならまあ……俺が教えてやるよ——『女の幸せ』ってやつをな」

「言っただけ、俺は祐奈を抱き締めた。すると、祐奈は俺の胸に顔を埋めた。」

ドクンドクン、と脈打つ鼓動が俺の方にまで伝わってくる。

「……どんだけ緊張してたんだよ」

「し、仕方ないよ……僕の……その……初恋なんだし……」

「へえ……？」

「なあ知ってるか？『初恋は実らない』ってやつ」

俺が意地悪にもそう言うのと祐奈は抱き締める俺の背に腕を回してぎゅつと力を入れた。

「……僕の場合は実ったから関係ないよ」

「ははっ！そりゃ違いねえな」

俺がからからと笑うと、祐奈は俺の胸から顔を上げて俺の顔を見つめる。

「ねえ、土織さん」

「ん？今度はなんだ？」

俺がそう返せば、祐奈はちらりと周りを見て、体を反転させ俺が後ろから抱きしめている形にする。そして、大きな声で言った。

「——誰にも負けないから。」

一番は……僕だよ！」

その声は俺に向けて言ったのか……はたまた、他の人に言ったのか……。

まあ、おそらくは後者なのだろうが……。

「つたく……可愛い奴め」

俺は祐奈の行動にそんな感想を漏らす。

周りを見ればいろんな反応を返す者が見えた。

暖かな微笑みを向けるリアス先輩と朱乃先輩。

ゼノヴィアとアーシアを抱き締めながら器用にもこちらににやにやとした笑みを向ける一誠。

そして……羨ましそうな表情を浮かべる小猫。

(……悪い……祐奈)

想いを伝えてくれた祐奈には悪いが、今後の自分を考えて心の中で先に謝っておく。

(……おそらく俺は最低な事をするだろう。

それでもイイって言うのなら……俺は……)

無意識のうちに抱き締める腕に力を入れる。

すると、祐奈は俺の手を胸に抱きながら、優しく呟いた。

「——良いよ。全部分かってたから」

「……っ!?!」

……祐奈……お前……」

そのタイミングで言われた祐奈の言葉に驚く。まるで心の中を透かされたようで。

「だけど……」

また体を反転させ、俺の方へと向き直る祐奈。頬をふくらませながら言う。

「あんまり多いと怒っちゃうからね！」

そして、俺の胸に顔を埋め、強く、強く抱き締めた。

俺はその言葉に間拔けな表情を浮かべていたと思う。だからこそ、直ぐに笑みへと表情を変え、抱きしめ返した。

「寛容過ぎやしませんかねえ……祐奈さんよ」

俺がうだうだと考えていたのが馬鹿馬鹿しくなるというもんだ……。

——その後、魔王の加勢が到着したのは全てに決着が着いた30分ほど経ってからだった。

その時に俺の【神器】の情報が渡ってしまったが……まあ、何とかなるだろう。

今後の事に少々の不安を抱きながらも、俺は苦笑いを浮かべ空を見上げた——。

くエピローグですく

オツス、兵藤 一誠だ。

コカビエルとの戦いから早数日――。

放課後の部室に1人遅れ気味で訪れてみれば、それはもう愉快的な風景が広がっていた。

「士織様っ!!」

我が兄を様付けで呼び、足に絡みつく、見覚えのある緑のメツシユを入れた女子がそこには居た。

「……いい加減離れろ――ゼノヴィア」

「嫌ですっ!!」

「……まったく……」

頭を抱えながら、士織はため息を吐く。

俺はその光景に苦笑いが浮かんでくるのを感じる。

「おお……一誠。遅かったじゃねえか」

足に頬擦りをするゼノヴィアを放置する方向で決めたのか、士織は俺の方へ視線を向けると口を開いた。

「ちよつと用事がな……」

つか、なかなか愉快的なことになってるな……?」

「……ゼノヴィアの信仰心が変に働いてな……」

初めは俺のことを『神いいいい!!』とか言つて突撃してきたんだぞ?」

まあ、撃墜したけど。士織は心底疲れたように言った。

どうやら士織の神器、それも【禁手】の情報がゼノヴィアにも伝わったようだ。

「そりゃ……お疲れ様」

「さんきゅ……」

俺は土織の疲労感を感じながらも未だ来ていない部員——  
小猫ちゃんと木場……いや祐奈——を待つために空いている  
ソファアに腰を下ろした。

「——いい加減離れろうとおしい」

「へぶん……っ!!?」

いよいよその行動に我慢できなくなった土織からの脳天直撃  
チョップを喰らったゼノヴィアは変な声を上げながら目を回して床  
に沈んで行った。

……本当に天国ヘブンに行ったりしてねえよな……?

——閑話休題。

「物凄い今更だけど何でゼノヴィアが居るんだ?」

小猫ちゃんと祐奈が揃ったところで、正気を取り戻したであろうゼ  
ノヴィアに向けてそんな言葉をかける。

「ん?ああ……神の不在を知ったのでな。破れかぶれで悪魔に転生し  
てみた。」

リアス・グレモリーから【騎士ナイト】の駒を頂いてな。で、眷属になる

のと同時にこの学園にも編入させてもらった。

今日から高校二年の同級生でオカルト研究部所属だそうだ。

よろしくね、イツセーくん♪」

背中から黒い翼を生やし、ゼノヴィアに似合わないような声を出す。

「……真顔で可愛い声を出すんじゃない」

「イリナの真似を試してみたのだが、うまくいかないものだな……」

「お前らしくないから止めとけ。」

それに、そんなことしなくてもゼノヴィアには良いところがあるんだし……な？」

俺が頭を優しくポンポンと叩き、そう言うと、頬をほんのり赤く染めて視線をそらすゼノヴィア。

「……そ、そうか」

……な、なんだろう……このラブコメ臭の凄い展開は……？俺は一体いつの間にフラグを……??

俺はそんな馬鹿げた考えを払うように、話を変えるべく口を開いた。

「そ、そういやイリナはどうしたんだ？」

「あ、ああ……イリナなら、私のエクスカリバーを合わせた5本とバルパーの遺体を持って本部に帰ったよ」

ゼノヴィアは真面目な顔をしながらそう説明してくれる。

……どうやら話をそらせたようだ……。

「エクスカリバーは流石に返したか……」

それよりも良かったのか？教会を裏切っちゃまって……」

「……まあ、良かったのかと聞かれると……良くはなかったのだが……」

神の不在を知ったことで異分子となった私が教会あそこに居られる道理はないのき……。教会は異分子を、異端を酷く嫌うからね……」

ゼノヴィアは自嘲した。暗い影を差す表情に俺は心が痛むのを感じる。

「イリナは運がいい。ケガをしたため、戦線離脱をしていたとはいえ、



あの場で、あの真実を知らずに済んだのだからね。

私以上に信仰の深かった彼女だ。神がないことを知れば、心の均衡はどうなっていたかわからない」

そう言うゼノヴィアの表情にはイリナを心配するような色が見える。自らは傷ついたのにも関わらず、仲間を、イリナを心配するとは、優しい女の子だ……。

「ただ、私が悪魔になったことをとても残念がっていた。

神の不在が理由だとは口が裂けても言えないしね。なんとも言えない別れだった。

……次に会うときは敵かな……?」

目を細めながらゼノヴィアは言った。

……イリナ、どんな気持ちで帰国したんだろうか……。

俺とゼノヴィアがそんな会話をしていれば、リアス部長が立ち上がり咳払いをした。そして、周りを見回すと話を始める。

「教会は今回のことで悪魔側——つまり、魔王に打診してきたそうよ。

『墮天使の動きが不透明で不誠実のため、遺憾ではあるが連絡を取り合いたい』——と。

それとバルパーの件についても過去逃したことにに関して自分たちにも非があると謝罪してきたわ」

俺とゼノヴィアは自然とソファアに腰掛けながら、リアス部長の話を静かに聞く。

「今回のことは、墮天使の総督アザゼルから、神側と悪魔側に真相が伝わってきたわ。

エクスカリバー強奪はコカビエルの単独行為。他の幹部は知らないことだった。三すくみの均衡を崩そうと画策し、再び戦争を起こそうとした罪により、『地獄の最下層』で永久冷凍の刑——のはずだったらしいけど、士織の氷が全く溶けなくて、墮天使領の一角で封印処置してるそうよ」

リアス部長は苦笑いを浮かべながら士織の方を見た。

当の士織は右サイドに小猫ちゃん、左サイドに祐奈という布陣でソファアーチを固めており2人の相手に忙しそうだ。

「近いうちに天使側の代表、悪魔側の代表、アザゼルが会談を開くらしいわ。」

何でもアザゼルから話したいことがあるみたいだから。

その時にコカビエルのことを謝罪するかもしれないなんて言われているけど……あのアザゼルが謝るかしら……」

肩をすくめながら、リアス部長が忌々しそうに言う。

アザゼルかあ……俺のイメージとしては悪戯好きな親戚の叔父さんみたいな感じなんだよなあ……」

「私たちもその場に招待されているわ。」

事件に関わってしまったから、そこで今回の報告をしなくてはならないの」

リアス部長の言葉に驚愕の表情を浮かべる俺と士織以外の部員たち。

「ああ……なんだかんだで魔王様たちの加勢が来る前に全部終わっちゃいましたしね……」

主犯であるコカビエルは士織によって冷凍。バルパーは殺され、フリードは逃走。俺たちがやったことと言えばケルベロスを倒したくらいだろうか？

コカビエルとの戦いを思い出すと同時に、俺はひとつの疑問が湧き上がった。

「そういえば……『白龍皇』は墮天使側って認識でも良いのか？」

「そうだ。アザゼルは【神滅具】ロンギヌスを持つ神器所有者を集めている。

何を考えているかは分からないが、ロクでも無いことをしようとしているのは確かだね。」

『白龍皇』はその中でもトップクラスの使い手。『神の子を見張る者』の幹部を含めた強者の中でも4番目か5番目に強いと聞く。

既に完全な【禁手】バランス・プレイヤー状態。現時点で言えばライバルのキミよりも強いかもしれない」

ゼノヴィアは俺の疑問に答えてくれると最後にそう締めくくった。

……今の俺よりも強い……か……。  
やはり魔力の総量が少なすぎるといなのがネックか……？

『確かにそれもあるかもしれない』

(ドライグ……)

『だが、相棒にはそれを補って余りある発想力がある。』

あの【亜種禁手】がいい例だろう』

(……サンキュな)

『なに、弱気な相棒はらしくないのさ』

ドライグはそう言い残すと再び神器の中に潜っていった。

俺がドライグと会話をしていれば、いつの間にかゼノヴィアがアジアに近づいていた。

『……そうだな。アーシア・アルジェントに謝らねばならないな。』

主がないのならば、救いも愛も無かったわけだからね。

——すまなかつた。アーシア・アルジェント。キミの気が済むのなら、殴ってくれても構わない。私はそれほどのことをしたのだから……」

ゼノヴィアは深く頭を下げてアーシアに謝罪の言葉を口にする。

『……そんな、私はそのようなことをするつもりはありません。』

ゼノヴィアさん。私は今の生活に満足しています。悪魔ですけど、大切な人に——大切な方々に出会えたのですから。

私はこの出会いと、今の環境だけで本当に幸せなんです」

聖母のような微笑みでアーシアはゼノヴィアを許した。

あの日、コカビエルとの戦いの日に俺の掛けた言葉がアーシアにとつては救いだったのだという。あんなに小っ恥ずかしい台詞を並べただけのような俺の言葉をそんなふうを受け取ってくれていたとは思いもしなかった……。

『……クリスチャンで神の不在を知ったのは私とキミだけか。』

もうキミを断罪するなんてことは言えやしないな。

異端視か。尊敬されるべき聖剣使いから、異端の徒。私を見る目の

変わった彼らの態度を生涯忘れることは出来ないよ……」

その時、ゼノヴィアの瞳に哀しみの影が移った。

「……さて、そろそろ私は失礼する。」

この学園に転校するにあたって、まだまだ知らねばならない事が多すぎるからね」

そう言いながら部室をあとにしようとするゼノヴィア。

「あ、あのっ……」

そのゼノヴィアを、アーシアが引き止めた。

「今度の休日、皆で遊びに行くんです。」

ゼノヴィアさんもご一緒にいかがですか？」

屈託のない笑顔で言うアーシア。ゼノヴィアはそんなアーシアの態度に驚くように目を見開くが、すぐに苦笑する。

「今度……機会があればね。」

今回は興が乗らないかな。

……ただ……」

「ただ？」

首をかしげるアーシアにゼノヴィアは柔らかな笑顔で問う。

「今度、私にこの学園を案内してくれるかい？」

「……はいっ!!」

アーシアもゼノヴィアの問いに笑顔で答える。

この2人、すぐに仲良くなれそうな気がするな……。

「我が聖剣デュランダルの名にかけて……」。

そちらの聖魔剣使いの先輩とも再び手合わせしたいものだね」

「いいよ。今度も僕の勝ちには譲らない」

「私こそ、次は負けないさ」

祐奈の言葉にゼノヴィアは気合十分と言った体で答える。そして、周りを確認すると、ゼノヴィアは部室を後にしていった。

「さて……」

ポン！とリアス部長が柏手を打つ。

「さ、全員が再び揃ったのだから、部活動も再開よ！」  
「「「はい（おう）！」「」」」

全員が元気よく返事をする。

その日、久しぶりに俺たちは部室で談笑した。

## 〈停止教室のヴァンパイア〉 第51話

どうも、兵藤 士織だ。

気がつけば季節も移ろい、蝉の鳴く夏へととなっていた。原作の開始が春だったのを考えると今の夏という季節は案外早く訪れたように感じるものだ。

「——ねえ、聞いている？士織くん」  
俺の名前が横から呼ばれる。

首をそちらに向けてみると、デニムのショートパンツに大きめのTシャツといったカジュアルな服装をした少女——祐奈がこちらをのぞき込むように見ている。

「ん？……ああ……昼は何を食べるかだったっけか？」  
「違うよっ!!」

もう……やっぱり聞いてなかったんだね……」

ジトツとした視線を向けながら頬をふくらませる祐奈。

……あらら……話聞いてなかったのがバレちゃったか。  
「悪い悪い。」

「んで？何の話だったっけ？」

「……この後僕の水着を選んで欲しいって話だよ」

仕方がないといったふうにならういって祐奈はそっぽを向く。

俺はそんな祐奈の頭を撫でることでご機嫌取りしようと近づいた。

「ほらほら、そんなに拗ねんなって」  
「す、拗ねてないよっ!」

うりうりとからかうように、しかし、髪が乱れないような絶妙な力加減で撫でれば、案の定祐奈は言葉では嫌がりながらも頬を緩ませ始める。

「取り敢えず……水着買いに行くなら早速行動に起こそうぜ？」

俺はそう言うとテーブルに置かれた伝票を回収してスムーズに精算へと向かう。

……ああ、言うのが遅くなったが俺と祐奈が今いるのは家からもそんなに遠くないカフェ。俗に言うデートつつうもんの最中だ。

「ま、待ってよー！」

祐奈も俺に続くようにテーブル席から立ち上がり、小走りに俺へと追いつく。

「僕もお金払うよ……って、ああつー！」

そう言つて財布に手を伸ばす祐奈だったがそれはいらぬ行動だ。何故ならもう既に俺が払い終えてる。

「気にすんな」

「で、でも僕。パフェとか頼んじやつてるのにー！」

「はいはい気にしない気にしない」

俺はそう言いながら未だに何か言い続ける祐奈の背を押し、カフェを後にしていった。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

所変わつてショッピングモール。

俺と祐奈は水着売り場へと一直線で訪れていた。

「水着か……そっういや俺、持ってたな……」

記憶を辿つてみても、小さな頃にプールに連れて行かれ女物の水着を身に着けた以外水着を着た覚えがない。

……とは言つても俺が実際に体験した記憶はどれだけ遡ろうと中学3年の時からしかないのだが……。

「土織くん水着持ってたの？」

祐奈は不思議そうにそう言った。

……俺が水着を持っていないのがそんなにも意外なのだろうか？俺が軽く頷いてやると、祐奈はにこつと微笑みながら口を開く。

「ならこの機会に土織くんも水着買ったらどうかな？」

「……そうだな。」

「面白いやオカルト研究部でプール開きするとか言ってたし……ついでに俺の水着も買っとくか」

この間生徒会からのお願いでプール掃除をしたが、その報酬がオカルト研究部が1番最初にプールを使用できるというものだったのを思い出す。

「祐奈が買いに来た水着ってその時に使うやつか？」

「もう……それもさつき言ったのに……。」

本当に話を聞いていなかったんだね……」

再び頬を膨らませる祐奈。

おっと……これは藪蛇だったな……。」

「悪かったって……ほら、せつかく来たんだし祐奈の水着選んじまおうぜ？」

女性用の水着の並んである場所を指さしながら祐奈の背を押す。

たくさんの水着が並ぶ中で立ち止まった祐奈はしなをつくりながら「こちらを振り向く。」

「ねえねえ土織くん」

「ん？どうした？祐奈」

「土織くんは僕にどんな水着着て欲しい？」

「祐奈にか？」

「そうそう♪」

それに今なら————どんな水着でも着てあげるよ……？」

上目使いに笑いそう言う祐奈。何処か小悪魔的な笑みに思えるのは気のせいではないだろう。

……ほう？これは俺をからかって遊ぶつもりか……？」

俺はニヤツと笑うと水着の方へ視線を移した。

そして、極端に面積の少ない青のマイクロビキニを手にとると祐奈に見せつけるように持ち上げる。



「こんなのがイイんじゃないか?」

「ふあっ!」

ちよ、ちよっと待って士織くんっ!

それは流石に……っ!!」

俺がこう返してくるとは思わなかったのか祐奈は慌てながら手をバタバタとしていた。

「んんん? どうした?

何でも着てくれるんだろ?」

「そ、それは……その……っ!」

「取り敢えず試着室はすぐそこだし……ちよっと着てこいよ」

「えっ……? ええっ!!」

俺の手にした水着を祐奈の手に持たせて試着室の方へと誘導していく。

「ま、待って待ってっ!!」

これは流石に着れな——」

「——あら? やっぱり士織に祐奈じゃない」

俺と祐奈が戯れていると、後ろから聞き覚えのある声が聞こえてきた。

振り返ってみればそこには、

「2人も面白い物かしら?」

明らかにプライベートの状態のリアス先輩の姿があった。

赤のフレアワンピースにブーツという出で立ちのリアス先輩。

「まあ、祐奈の奴が水着が欲しいって言ったからな。

後はついでに俺の水着も買おうって話も出てる」

「そうなの……それで祐奈はそんな水着を持っているのね」

リアス先輩はそう言つて、祐奈が持っている……正確には俺が持たせた水着を指さした。

「ち、違……っ！」

「あなたはもう少し大人しめの物を選ぶかと思つていただけれど……やっぱり恋で人は変わるのね」

分かっているわというような微笑みで祐奈を見つめるリアス先輩。そんな視線に祐奈は恥ずかしさいっぱいなのか顔を真っ赤にして縮こまつていた。

「——リアス！此処に居たか……」

と、そんな祐奈の姿を楽しんでいれば1人の男性が近づいて来る。赤いスーツを見事に気崩し、胸までシャツをワイルドに開いている姿はどこかで見たような……。

「……ああ、思い出した。ライザー・フェニックスか」

「そういう君は……確かイツセーの姉弟の兵藤士織だったか？」

ライザーは思い出すかのように顎に手を当てそう言った。

俺はリアス先輩をにやにやとしながら見る。

「なんだリアス先輩もデートかよ」

「え、ええ……」

「仲良く進展してるようで良かったじゃねえか」

恋人から始めたこの2人が仲良くデートしているのだ。

……こりや後日朱乃先輩たちに報告だな。

「と、とにかく！」

今日は私たちも水着を買いに来たのよ」

若干頬を染めながら強引に話を変更させるリアス先輩。俺はくすくすと笑いながらも話を元に戻す事はしなかった。

「リアス先輩はライザーに水着を選んでもらうのか？」

「ええ。ライザーの好みも知っておきたかったのよ。」

そういう土織は祐奈に水着を選んであげたの？」

「まあ、今祐奈の持つてるやつは流石に冗談だけだな。——本命はこつち」

そうやって顔を赤くし、呆然としていた祐奈から水着を回収すると密かに用意しておいたもう1着を祐奈に持たせる。

「え……う？」

「ほら、ちよつと着てこいよ。」

その水着は真面目に選んで祐奈に似合うだろうと思ったやつだからさ」

そうやって優しく頭を撫でてやれば祐奈は恥ずかしそうにコクリと頷き、試着室の方へと小走りで向かって行った。

「……また祐奈をからかって遊んでいたの？」

「まあな。」

祐奈の反応が良すぎてクセになっちまうんだよ」

「全く……程々にしておきなさい？」

「以後気をつけまーす」

カラカラと笑いながらリアス先輩の言葉に返事をすれば、リアス先輩は肩をすくめてくすりと笑った。

「それで？」

リアス先輩はライザーに水着を選んでもらわなくても良いのか？」

「ふふふ……私はもう選んでもらって買ってるのよ」

そうやってライザーの持つ袋を指さすリアス先輩。

「此処にはただあなたたちが見えたから来ただけなのよ」

「突然居なくなるから探したぞ？」

「あら、ごめんなさいライザー」

ライザーの言葉に素直に謝るリアス先輩。

それにしても俺たちが見えたから来たとは……デート中じゃないのか？」

俺はひとまずそんな思考は置いておき、祐奈が入っていった試着室から祐奈の声がかかるのを待つことにした。

「ああ……土織。」

祐奈を待つつもりなら先にあなたの水着を見てきたらどうかしら？」

「いや、着替えくらいすぐに終わるだろ？」

「ふふふ……祐奈のことだから恥ずかしがってなかなか出てこないと思うわよ？」

そう言ったリアス先輩は咳払いをすると試着室の方を向いて口を開く。

「祐奈！」

『は、はいつ?!』

若干裏返ったような声で返事を返す祐奈。

「土織の水着を見てきてもいいかしら？」

『い、いいですよ！』

ただ……その……着たところは土織くんに……』

「分かっているわ。」

一番初めに見せたいのね？

私が此処に残っているから声をかけてくれれば土織を呼ぶわ」

『は、はい……。』

あ、ありがとうございます部長……』

祐奈は消え入りそうな声でお礼を述べる。なかなかどうして恥ずかしがっているようだ。

リアス先輩は会話を終わるところこちらを向く。

「私は此処にいないといけないから……ライザー一緒に行ってあげて？」

「お、俺がか？」

突然の指名に驚くライザー。まさか自分が呼ばれるなんて思っていなかったのだろう。

「男性であるあなたの意見は必要なはずよ」

「ふむ……」

顎に手を当てたライザーは俺の方を見てくる。そして頷くと分かったと短く言った。

「じゃあ、お願いね？ライザー。」

ほら、土織も行ってきなさい」

「あく……わかったわかった。」

んじゃ、適当に買ってくるわ」

踵を返しながら、後ろ手に手を振り歩み出す。すると、後ろからライザーがついてくるのが気配でわかった。

「——それで兵藤土織」

唐突に声を掛けてくるライザーは隣に並ぶように立ち、周りを見回す。

「お前はどんな水着を穿おうと思ってるんだ？」

「ああ……シンプルなやつだな。」

それとライザー。フルネームはやめろ。俺のことは土織でいい」

フルネームで呼ばれ続けるというのもむず痒いからな。

「そうか。ならば土織と呼ばせてもらおう」

「そうしてくれ」

そんな、短い会話を交わすと俺も軽く周りを見回す。ライザーは俺に合いそうな水着を何着か見つけているようだが……期待はしない。

と、俺が周りをキョロキョロしているのがまるで水着選びに困っているようにでも見えたのかライザーが再び口を開く。

「なんだ水着選びに迷っているのか？」

何なら俺が見繕うが……どうする？」

案の定、予想通りの言葉を発するライザー。まあ、暇潰しにその案に乗るのも悪くは無いかもしれない。

そういうわけで、俺はその言葉に頷く。

「じゃあ、少し待っている何着か目は付けていたからな。そんなに時間は取らせん」

ライザーはそう言い残すと迷いなく歩みだし、合計3着の水着を持って俺の方へと戻ってきた。

「ほら、こんな風な物はどうだ？」

そう言つてライザーが見せてきたのはまず、白のビキニ。これは

至ってシンプルなもので、布が少ないとかそういったことはない。  
次に黒のリボンデザインホルターネックビキニ。どちらかといえ  
ばこれは白のビキニよりも布の面積がある。  
最後にこちらも黒のバンドウビキニ。チューブトップ型でフリル  
があしらっているのが特徴だろう。  
……ふむ……こういう水着を持ってきたか……。

「——却下。」

全部棚に戻してこいこのアホ雛鳥が  
「なっ!？」

「そ、そこまで言うか!？」

目を見開き俺からの暴言に驚くライザー。

「そもそも俺は水着選びに迷ってない」

「……そうなのか。」

「ならお前が選んだという水着は?」

明らかに不機嫌そうなライザー。

まあ、折角選んだものを頭から否定され、暴言まで吐かれれば誰し  
も不機嫌になるか……。

ひとまず俺の選んだ水着を取りに行く。

「ちよ、ちよっと待て土織っ！そっちは——」  
「何慌ててんだよ。」

「——ほら、これなんかシンプルでいいじゃねえか」

「そういうながら慌てだしたライザーに水着を見せる。」

俺が手に取った水着は、ライザーが選んだような『女性物』ではな  
く、列記とした『男性物』——黒のサーフパンツだった。

「お、お前……それは……」

「うん。やっぱりこれイイじゃねえか。

ちよつくら試着してくるわ」

そう言つて試着室に向かおうとするとライザーが俺の目の前に立ちほだかつた。

「ま、待て待て待てえツ!!」

百歩譲つてその水着は良しとしよう……だがお前上には何もつけない気がツ!?!」

「はあ? 何言つてんだよライザー。」

お前その程度もわかんねえのかよ」

「……そ、そうだよな?」

勿論パーカーくらい羽織つて——」

「んな邪魔クセえもんいらねえだろ」

「アウトおおお!!」

いきなりそう言うライザー。そして何処から取り出したのか、はたまた高速で取つてきたのか、ライザーの手には黒のパーカーが握られていた。

「せ、せめてこれくらい羽織れ……ツ!」

「嫌だよ。俺の水着程度で無駄な出費はいらん」

「よし分かつた! このパーカーは俺が買つてやろう! だから着てくれツ!!」

必死にそう言うライザー。

……さて、そろそろからかうのも止めるとするか……。

「——ライザー」

「っ! わ、わかつてくれたか!」

俺はスーツとライザーに近づくと、その手を掴み——俺の胸板に触れさせた。

「なツツ!!?!」

し、士織つ!?! お前は一体何をツツ?!?!」

面白いように狼狽するライザー。

……あれ? こいつなんか異常なまでに焦つてねえか? いくら俺が

男だつて言つてないから女だと勘違いしててもこの慌てようは一体……?」

まさかこいつ——原作より女慣れしてない……??

……やべえ……からかうの続行だわ。こりや面白そうだ。

「ん……っ。俺つて胸ないから別に良いだろ?」

「い、いやいやいやッ!!」

そんなこと関係ないだろ?!」

そう言つて慌てて手を離そうとするライザー。しかし、そんなことはさせない。何せ……ある気配が近づいてきているから。

「——ライザー?」

「……り、リアス……」

顔面蒼白。

その言葉が似合うような表情をライザーは浮かべていた。

「こ、これは違うんだ!…これは士織が勝手に俺の手を……!」

ライザーの言葉に俺の方を見るリアス先輩。

……流石にここまでだな。

俺はリアス先輩にニヤツとした笑みを向ける。

「……全く……」

ライザーをからかつて遊ぶのも止めてちょうだい? 士織。

それとライザー? そんなに慌てなくても大丈夫よ。

流石に私も——男の胸を触つていて怒りはしないわ」

「す、すまな——男……?」

顔面蒼白から一転、ライザーはキョトンとした表情を浮かべ、俺の顔を見、そして胸を見て、もう一度俺の顔を見た。

「……士織? お前は男……なのか?」

「ああ。俺は列記とした男だぜ?」

いつから俺が女だと勘違いしていた……?」



「う、嘘だろ……」

「本当よライザー。」

私も学校で名簿を見るまで女の子の子と思っていたのだけれど……」

苦笑い気味にそういったリアス先輩。ライザーもリアス先輩の言葉と俺本人からの言葉にそれが真実なのだと認識したようだ。

「……取り敢えず手を離してくれないか？」

「ん？ああ……からかうのに集中してて忘れてたわ」

ライザーからそう言われて掴んでいたライザーの腕手を話す。

そうすれば今度はリアス先輩が俺に声をかけてきた。

「そうそう、祐奈が着替え終わったそうよ？」

「おっけーおっけー。」

んじゃ、会計は後にして祐奈を見に行くかな」

俺はリアス先輩からの報告を受けて、水着の会計は後回しにすることを即座に決め、祐奈の着替える試着室へと足を向けた。

——その後、祐奈の水着姿を拝んだ俺は、その水着と自分の水着の会計を済ませ、リアス先輩とライザーと別れた。

ただひとつ、言いたいことがある。

—— 3人して俺にパーカーまで買わせるなツツ!!!

まさか男だとわかったのにも関わらず、ライザーまでもパーカーを買わせようとするとは……。

……まあ、いろいろとあったが、今回のデートかなり楽しめたと思う。

## 第52話

S i d e 土織

「冗談じゃないわ」

夜中の裏の部活——悪魔家業をするためにいつも通り部室に集まれば、紅髪の美少女さまはまゆを吊り上げて怒りを露にしていた。  
た。

俺はいつも通り……一つのソファァーに3人で座っている。祐奈は言わずもがな……俺を挟むようにして小猫も座っていたりする。

「確かに悪魔、天使、墮天使の三すくみのトップ会談がこの町で執り行われるとはいええ、突然墮天使の総督が私の縄張りに侵入し、営業妨害していたなんて……」

「いや〜……営業妨害というかむしろイイお客さんだったと言うか……」

一誠は怒りで震えるリアス先輩を見ながら苦笑気味にそう言った。  
……まあ、つまりはだ。一誠の契約相手として、アザゼルの阿呆が接触していたということか……。

「しかも私の大切な眷属であるイツセーにまで手を出そうなんて……万死に値するわ！」

アザゼルは神セイクリッド・ギア器に強い興味を持つと聞くわ。きつとイツセーがブーステッド・ギア【赤龍帝の籠手】を持っているから接触してきたのね……。

大丈夫よイツセー、私がイツセーを絶対に守ってあげる」

一誠の頭を撫でながらリアス先輩は言う。

……それにしても言われたい放題だなアザゼルのやつ。

まあ、リアス先輩は眷属を大切に可愛がるタイプだし、何より自分の所有物を他人に触れられたり、害されたりするのを酷く嫌う節があるからなあ……。

「土織くんは心配じゃないの?」

「ん?何がだ?」

唐突にかけられた祐奈の声に首をかしげて見せる。

「イツセーくんの神器が狙われるのがだよ」

「ああ……まあ、その辺の有象無象にやられるほど一誠は弱くねえし……それにアザゼルなら警戒しなくてもただの神器オタクだから大丈夫だろ」

まあ、今あいつが……というより各陣営が気になっているのは俺の【神器】だろうしな。

と、そんなことを考えていると小猫の座っている方の袖を引かれるのを感じた。

何事かと顔を向けてみると、

「……土織先輩……にやーん」

そう言いながら本日のお菓子であろうチョコレートケーキをフォークですくい、こちらへと向けている小猫の姿があった。

「あーん」

それを何のためらいもなく頂く。

うむ、甘すぎないのがポイント高いな！

「こ、小猫ちゃんズルイー！」

それを見た祐奈は慌てながらそう言う。小猫はと言うと頬を染めながら幸せそうな表情を浮かべている。

「土織くんは僕のか、彼氏なんだよっ！」

「……土織先輩は私の食べ歩き仲間です」

俺を挟んで火花を散らす祐奈と小猫。

なんとも可愛い戦いである。

「しかし、どうしたものかしら……」。

あちらの動きがわからない以上、こちらも動きにくいわ。

相手は墮天使の総督。下手に接することも出来ないわね」

祐奈と小猫の戦いをひとまず置いておくとして、リアス先輩の方へ耳を傾けるとそんなことを呟いていた。表情を見るにかなり悩んでいるように見える。

……お、その悩みの解決はすぐそこみたいだな。

俺は傍に感じる気配にそんなことを心の中で呟く。

「——アザゼルは昔から、ああいう男だよ、リアス」  
入口の方から、聞き覚えのある男の声が聞こえてくる。予想はついているが視線を移す。

——案の定、そこにいたのは紅髪の男。

朱乃先輩たち古参のグレモリー眷属は跪き、一誠、アーシアは遅れながらもゆつくりと跪く。ただ、新顔であるゼノヴィアだけは疑問符を浮かべながらアワアワとしていた。

「お、お兄さまっ?!」

そう、紅髪の男とは悪魔業界の現魔王『サーゼクス・ルシファー』だ。「先日のコカビエルのようなことはしないよ、アザゼルは。

今回みたいな悪戯はするだろうけどね。

しかし、総督殿は予定よりも早い来日だな」

サーゼクスはそういった。いつも通りなのだろうが、サーゼクスの後方には銀髪のメイドである、グレイフィア・ルキフグスがいるのが見える。

「くつろいでくれたまえ。今日はプライベートで来ている。

そうだね……その士織くんのようにね」

跪くグレモリー眷属を見たサーゼクスは変わりなくソファアに腰を下ろす俺へと視線を移しながら手をあげて、跪くのを止めるように促す。

「やあ、我が妹よ。

しかし、この部屋は殺風景だ。年頃の娘たちが集まるにしても魔方阵だらけというのはどうだろうか……?」

部屋を見渡しながら、サーゼクスは苦笑いを浮かべる。

……確かに変な部屋だが……慣れというのは怖いな。

「お兄さまど、どうして此処へ……？」

怪訝そうにリアス先輩が訊く。

すると、サーゼクスは一枚のプリント用紙を取り出した。

「何を言っているんだ。授業参観が近いのだろうか？私も参加しようと思っ

ていてね。

是非とも妹が勉学に励む姿を間近で見たいものだ」

……ああ……そういやもうすぐこの学園で授業参観があったな……。俺のところの父さんと母さんもノリノリで乗り込むと張り切っていた。

なんでも自分たちの子供の授業風景を見たいらしい。

しかも、墮天使組の3人も来るらしい。

「ぐ、グレイフィアね？お兄さまに伝えたのは……」

何処か困った様子のリアス先輩の問いにグレイフィア・ルキフグスは頷く。

「はい。学園からの報告はグレモリー眷属のスケジュールを任されている私のもとへ届きます。むろん、サーゼクスさまの【女王<sup>クイーン</sup>】でもありますので主への報告も致しました」

それを聞き、リアス先輩は嘆息する。

……まあ、原作を知ってる身とすればリアス先輩の乗り気じゃない雰囲気も察することができのだが……。

「報告を受けた私は魔王職が激務であろうと、休暇を入れてでも妹の授業参観に参加したかったのだよ。

安心しなさい。父上もちゃんとお越しになられる」

「そ、そうではありませんっ！」

お兄さまは魔王なのですよ？仕事をほっぽり出してくるなんて！

魔王がいち悪魔を特別視されてはいけませんわ！」

確かに魔王という立場から身内だからといって特別にしてもらうのは問題があるな……。まあ、今回は大丈夫だろうけど。

予想通り、サーゼクスはリアス先輩の言葉に首を横に振った。

「いやいや、これは仕事でもあるんだよ、リアス。」

実は三すくみの会談をこの学園で執り行おうと思っ  
ていてね。会場の下見にも来ているんだよ」

サーゼクスの言葉に俺以外の全員が驚きの表情を浮かべている。

「……つ!!此処で?本当に?」

「ああ。この学園とはどうやら何かしらの縁があるようだ。

私の妹であるお前と、伝説の赤龍帝、聖魔剣使い、聖剣デュランダル使い、魔王『セラフォル・レヴィアタン』の妹が所属し、コカビエルと白龍皇が襲来してきた。

更には……」

その後を濁して、意味深な視線を俺の方へと向けるサーゼクス。俺は肩をすくめて軽く返す。

「……何はともあれ、これは偶然で片付けられない事象だ。

様々な力が入り混じり、うねりとなっているのだろう。

そのうねりを加速度的に増しているのは恐らく——兵藤くんたちだと思うのだが」

目を細めながらそう締めるサーゼクスに一誠は苦笑する。

「……そこで、だ。」

士織くん、当日の会談に君も参加して欲しいんだが……」

俺は無言で首を縦に振り、了解の意思を伝える。サーゼクスはそれに満足そうに微笑んだ。

「あなたが魔王か。」

初めまして、ゼノヴィアという者だ」

そんな中、新たに話かけてきたのは緑色のメッシュを髪の毛に入れているポンコツ——いや、新人悪魔のゼノヴィアだ。

「ごきげんよう、ゼノヴィア。」

私はサーゼクス・ルシファー。リアスから報告を受けている。

聖剣デュランダルの使い手が悪魔に転生し、しかも我が妹の眷属となるとは……正直最初に聞いたときは耳を疑ったよ」

「私も悪魔に転生するとは思わなかったさ。」

今まで屠ってきた側に転生するなんて、我ながら大胆なことをしたとたまに後悔して……いや、そんなことは無いな。毎日楽しく生活させてもらっている」

柔らかな笑みを浮かべてそう言うゼノヴィア。一誠もそんなゼノヴィアを見て安心していうようだ。

「ハハハ、妹の眷属は楽しい者が多くていい。」

ゼノヴィア、転生したばかりで勝手がわからないかもしれないが、リアスの眷属としてグレモリーを支えて欲しい。

——宜しく頼むよ」

「聖書にも記されている伝説の魔王ルシファーにそこまで言われては私も後には引けない。」

どこまでやれるかわからないが、やれるところまではやらせてもらう」

ゼノヴィアの言葉を聞き、サーゼクスは微笑む。何処かリアス先輩に似たものを感じるのやはり兄妹だからだろうか。

「ありがとう」

サーゼクスのお礼を聞くと、ゼノヴィアは頭を下げて一誠の方へと近寄っていった。

「さて、これ以上難しい話をここでも仕方が無い。

うーむ、しかし、人間界に来たとはいえ、夜中だ。

こんな時間に宿泊施設は空いているのだろうか……?」

……予約を取ってるわけじゃなかったのか……。

俺は溜息をひとつ吐くと、口を開く。

「だったら家に来るか?サーゼクス」

「ちよつと士織!」

魔王さまにその口調は失礼よ!」

リアス先輩は慌てた様子でそう言うが、サーゼクスは笑いながらそれを制する。

「いいんだよりリアス。」

彼にいつも通り接して欲しいと言ったのは私なんだからね。

それで士織くん。君の家にと言うのは？」

「なあに、泊まるところがねえんだろ？」

「だったら家に来ればいい。」

「……ただし、家には引き取った墮天使4人が居るがそれを気にしないなら、だが」

含みを持ったようにわざとらしく聞くとサーゼクスはクスリと

笑って口を開いた。

「気にすることなんて何も無いよ。」

「じゃあ、お願いできるかな？」

「任せておけ」

そう言っただけで俺は家に電話を入れる。

「友人を今夜泊めてもいいか」と。



## 第53話

どうも、兵藤 士織だ。

俺たちは部室での悪魔家業終了後、約束通り、サーゼクスとグレイフィアを連れて兵藤家に向かっていた。

「ただいま〜」

「おかえりなさい♪士織ちゃんに一誠ちゃんにアーシアちゃん♪」

まず最初に玄関で出迎えたのは母さん。

客が来ると言ったのに、母さんは全くブレず俺たちを一人一人抱き

締めていく。こうして俺たちの存在と成長を確認しているらしい。

「ほら、お客さんがいるんだから離れて!」

「あ、ごめんなさいね!」

ついついいつもの癖が抜けなくて……」

恥ずかしがると一誠に肩をつかんで離された母さんは笑顔を活かべながらそう言った。

「いやいや、気にしないで。」

所でお母さんはいらつしやるかな?」

サーゼクスは微笑ましいものを見たという風に笑うと優しい声で訊ねた。

「えっと……」

その言葉に母さんは首をこてんと横に倒す。……どうやら母さん、サーゼクスが自分を母親だと認識されていないのに気が付いていないようだ。

……まあ、この見た目だと……」

「……サーゼクス。」

今目の前にいるのが俺たちの母さんだ」

「何冗談を……」—————「本当かい……?」

こちらを見て笑うサーゼクスに真顔で返すと、母さんの方を二度見した。

そして、咳払いをすると改めて笑みを浮かべて口を開く。

「これは失礼致しました。

お若く、可愛らしいので、てつきり妹さんかと思ってしまう。  
私はサーゼクス・グレモリーと申します」

「えへへ♪

そんなに褒めないでくださいよ♪

あ、士織ちゃんたちの母親の兵藤 葵泉です♪」

にへらと表情を緩め、自己紹介を返す母さん。――と、その背後から1人の男が現れた。

「――士織、一誠、アーシアお帰り。

そして……いらつしやい。

玄関で立ち話もなんだ、士織、リビングにお通ししろ」

母さんを守るように仁王立ちして凄む我らがお父様……。

……父さん……サーゼクスを威嚇するのはやめろ……。最早サーゼクスが苦笑いを浮かべてるから……。

「ふふっ♪

大丈夫よ賢夜さん♪」

そう言つて父さんの頬に口づけする母さん。それだけで父さんからの威嚇は消え、頬がほんの少しだけだが緩む。

……だから客の前では自重しろし……。

俺は溜息を吐き、ひとまずリビングへとサーゼクスとグレイファイアを案内することにした。

……ちなみにだが、母さんを褒めるサーゼクスを見て、いつもは無表情のグレイファイアが一瞬だけ表情を崩したが……これは言わぬが良しだろう。



リビングにおいてあるソファアに父さんと母さん、対面にサーゼクスが座り、その隣にグレイフィアが立つ構図となり、俺と一誠、アジア、そして何処からともなく現れた墮天使4人娘は少し離れた所から4人の様子を窺っていた。

「こんな夜分遅くに宿泊を許可していただきありがとうございます。」

奥さまには自己紹介しましたが、私はサーゼクス・グレモリーと申します」

「兵藤 賢夜だ。」

何、士織の友人だと聞いたなら断るわけにはいかんからな……。

で、その隣のメイドさんは……?」

簡単な自己紹介を交わした後に、父さんはグレイフィアの方に視線を移すとそう口にする。

「ええ、彼女はグレイフィアと言います。」

私の仕事の補佐をしているのですよ」

サーゼクスがそう返すと、グレイフィアは頭を下げる。

「ほう……会社か何かを経営で?」

「ええ、まあ、父の経営していた会社を継いだような形になりますが……。」

未だに若輩者故に、グレイフィアが居なければ仕事も思うように回せません」

サーゼクスは苦笑しながら隣のグレイフィアを見つめる。

そんなサーゼクスの様子を見た父さんは顎に手を当てながら口を開いた。

「随分と彼女を大切にしているようですね?」

父さんのその発言に一瞬驚いた様子のサーゼクスだったがクスリと笑い言葉を発する。

「それはもちろん。」

なにせ彼女は——私の愛する妻ですから」

サーゼクスは先程まで浮かべていた苦笑から、暖かな微笑みへと表情を変貌させて見るもの全てが彼は幸せなのだろうとわかるような表情を見せた。

「さ、サーゼクスっ！」

そんなサーゼクスの頬をグレイフィアは抓る。だが、頬を抓るグレイフィアはいつもの無表情から一転、恥ずかしそうな表情を浮かべていた。

「め、メイドのグレイフィアです。」

我が主がつまらない冗談を口にして申し訳ありません……っ」

「いたひ、いたひひよ、ぐれいふいあ」

頬を羞恥に染めるグレイフィアと涙目で朗らかに笑っているサーゼクス。

……こりや見てたら一目瞭然だな……。

2人の仲の良さがよく分かる一面を見たような気がする。

——閑話休題。

「御二人も授業参観に参加しに来たんですか？」

母さんがサーゼクスに話しかける。

先程まで立っていたグレイフィアも今ではサーゼクスの隣に腰掛けている。

「ええ、仕事が一段落しているので、この機会に1度妹の学舎を見つ、授業の風景も見学出来たらと思っていましたね。」

当日は父も顔を出す予定です」

「まあ、お父さんもいらっしやるんですか」

「父は駒王学園の建設などにも携わっております、私同様、良い機会だからと顔を出すようです。」

……まあ、本音はリアスの顔を見たいだけだと思いますが」  
「サーゼクスもそうでしょう？」

「ははは……これは痛いところをついてくるね」

グレイフィアからの言葉に笑いながら頬を搔くサーゼクス。

「グレモリーさん、お腹は空いていませんか？」

そんな2人の様子を微笑ましそうに見つめていた母さんが手をパ  
ン、と叩くとそう言った。

「えつと……お恥ずかしながら少し……」

「うふふ♪良かった♪」

ちようど料理を作ってたんです♪

どうですか？お食べになられますか？」

「本当ですか？」

では……お言葉に甘えて……」

「申し訳ありません……」

サーゼクスとグレイフィアは頭を下げながらそう言う。それを見  
た母さんは待つててください♪と言い、機嫌も良さそうにキツチンの  
方へと向かっていく。

「2人はお酒はいけるクチかな？」

ちようど日本の美味しい酒が手に入っていてね」

そう言った父さんは自分専用の酒部屋から数本の日本酒らしきも  
のを持ってきた。

「そ、それはー！」

「……ほう？コイツを知っているようで？」

父さんの持つてきた日本酒のラベルを見たサーゼクスが目を見開  
いて声を上げる。

「それは勿論！」

【悪魔殺し】に【冥界崩し】、それに【魔王の涙】じゃないですか！

そのような高級品を見たのは初めてです！」

目を輝かせながら興奮気味に喜ぶサーゼクス。

……なんだそのいかにも含みのある酒のチョイスは……。偶然か  
？偶然だよな??

俺は父さんの顔をついつい見てしまう。

「料理お待ちしました〜♪」

そんな時、キッチンからたくさんの料理を皿に盛り付けて持つてくる母さんの声が響く。

「――自慢の妻の手料理だ。」

酒を飲みながら一緒に味わおうではないか」

「ふふふ……い！」

それは素晴らしい！是非とも味わわせてください！」

父さんとサーゼクスはニヤリと笑い意気揚々と、コップを手に持った。

……こりや、この飲み会は長いな……。

俺は苦笑しながら、部屋へと戻ろうという旨の話をみんなにしたのだった。

――これは完全に余談だが、次の日の朝、遅くまで客間で仲良く眠るサーゼクスとグレイフィアの姿を見た。

どうやら2人して父さんに飲み負かされたようだ。

## 第54話

どうも、兵藤 士織だ。

サーゼクス来訪から数日。

もう既に家には泊まっていけないが、今は町の下見をしているようだ。

……ただ、1日だけ俺も一緒に下見とやらに行つたが……ほとんど遊んでいたイメージしかない。

ゲームセンターに行けば目を輝かせ、冥界に作りたいたのと言い、ハンバーガーショップに行けばメニュー全てを制覇し、冥界にもこの味を！とテンションを上げ、神社に行けばサーゼクスの持つ大量の魔力で神聖なパワーを吹き飛ばして力づくの御参りをする始末……。

……あの時は溜息の連発だったなあ……。

「……暑い……」

青い空に白い雲。肌を焼くような陽射しを浴びながら、俺は1人通学路を歩んでいた。

——しかし、今日は日曜日。

勿論学校は休みなのだが、件のオカルト研究部でのプール開きがあるため、俺は駒王学園に向かっているのだ。

何故、一誠やアーシアと一緒に来ていないかという点、楽しみすぎて2人して先に皆を呼びに行ったのだという。

……決して俺が寝坊したわけではない。

「……つかマジで暑いな……」

祐奈と一緒に買った水着を入れた袋を気怠げに持って、うんざりと  
呟く。

暑すぎるといふのも考えものだ……寒すぎるとも嫌だが……。

「……いやあ……本当に暑いね」

「……ツツ!!」

—— 刹那。

俺はその場から跳躍し逃げ出す。

(一体いつの間に俺に近寄ってきた……っ?!)

着地するやいなや、俺は先程まで自分の居た場所へと警戒の視線を  
向け、いつでも攻撃の出来る体勢へとシフトさせる。

「……久しぶりだね兵藤士織くん？」

だが、そこには、ニコニコと笑う少女が一人立っているだけ。

—— 否、彼女は……いや、彼は……。

「……こちらこそ久しぶり、夜鶴」

俺のことを転生させてくれた—— 【神様】が、初めて会った  
時同様、和服を着こなし、羽織を纏いそこに立っていた。  
当然、俺は警戒の体勢を崩していた。



「――それにしても神様が来ちまっても良いのかよ？」

俺は近くのコンビニで買った『ギヤリギヤリくん』なるソーダ味のアイスを座りながら齧り、夜鶴に言う。

「ん〜……俺としては観光みたいなものだしね……。」

誰かを殺したりして物語を歪めなければ大丈夫なんじゃないかな？」

夜鶴も俺の渡した『ギヤリギヤリくん』を齧りながら、ベンチに座って足をブラブラとしていた。

「それでどうかな？」

転生させた側としては第2の人生、楽しんでもらえてるか気になるところなんだけど？」

「そりゃ、楽しいさ。」

毎日が幸せで満ち満ちてる。

この後だって仲間とプールで遊ぶんだぜ？」

自然と浮かぶ笑みを隠すことなく、夜鶴に向ける。

「プールに行くのかい？」

「こんな暑い日には最高じゃないか」

「なんなら夜鶴も一緒に行くか？」

「ん〜……それもいいかもしれないねえ……。」

そう言いつつ再びアイスを齧る夜鶴。俺もそれに倣ってアイス咀嚼していく。

「でもいいのかい？」

俺は全く関係ないと思うんだけど……？」

「なあに、リアス先輩たちのことだし快く許可してくれるさ」

プールに入るんだし、人数は多くワイワイとした方が楽しいだろう。俺は笑みを浮かべて夜鶴にそう言った。

「……なら、お言葉に甘えようかな？」

クスクスと笑いながら夜鶴は俺の提案に乗ってくれる。

「——おっし!!」

俺は残ったアイスを一気に頬張ると、冷たさで眉をひそめながら振り子の如く立ち上がる。

「ならそろそろ行こーぜ！」

時間的にも今から行けば丁度いい筈だからよ！」

「ん……。了解したよ」

そう言った夜鶴は残ったアイスをシャリシャリと言わせながら食べ終わらせていた。



「遅いなあ……」

「遅えなあ……」

「遅いねえ……」

「遅いな……」

俺と一誠、夜鶴、そしてライザーは水着に着替えてプールサイドで陽射しに晒されていた。

どうも、このプール開き、オカルト研究部だけではなく、ただの仲のいい友人同士で遊ぼうという感じのものだったらしく、夜鶴の参加も快く認められたのだ。

……ライザーはリアス先輩とイチャつきにでも来たのだろう。

「というか、2人とも水着似合ってるな」

「さんきゅ、一誠。」

まあ、パーカーを着ないといけなの不満だけだな」

「仕方ないさ士織くん。」

俺たちみたいな人種ってというのはこういうのが運命なんだよ」

夜鶴はもう既に諦めているというような表情で俺の肩をぽん、と叩く。

……言わずもがな、俺と夜鶴はパーカー着用だ。

「リアスから聞いた士織はともかく……夜鶴、お前は本当に男か……？」

腕を組み、夜鶴を見ながらライザーは神妙な面持ちでそういった。

「これでも一応男なんだよね……」

苦笑しながら夜鶴は言う。

……やはり未だにライザーは男だと思えないらしい。

「ほら、俺っていう前例があるんだから信じろよライザー」

「……それもそうだな」

ライザーはふっ、と笑みを浮かべた。

そんなふうにして、俺たち4人は雑談を交えながら互いに交友を深めていた。

……しかしメンバーを改めて見ると凄いな。

【人間】、【赤龍帝】、【神様】、【不死鳥】……過剰戦力の塊みたいなもんだな……。

——そうこうしているうちに、女子更衣室の方から声と足音が聞こえて来る。

「——あら、4人とも早いのね」

初めに姿を現したのはリアス先輩。

流石と言うべきか、そのスタイルを際立たせる様に布の面積が少なめの赤いマイクロビキニを着こなし、自らの肢体の魅せ方を熟知しているようだ。

「うふふ、張り切ってますわね。」

ライザーさんがいるからかしら？」

口元に手を当ててお淑やかに笑う朱乃先輩。こちらにもマイクロビキニであったが、対極的な白。白い肌に合わさり、淡いながらそのスタイルで妖艶さが出ている。

「イツセーさん！わ、私の水着どうですかっ？」

先輩2人に続いてアーシアと小猫の登場。

タンキニを2人とも着ていたが、アーシアはボトムがスカートでライトグリーン、小猫はボトムがショートパンツで黒といった違いがあった。

「可愛いぞアーシア。よく似合ってる」

「えへへ♪」

イツセーさんにそう言われると嬉しいです」

にここにこと笑うアーシア。一誠もそれを見て微笑んでいる。

「……土織先輩……どうですか……？」

小猫は俺の方に近寄ってきて恥ずかしそうにそういった。俺は微笑みながら口を開く。

「小猫らしくて可愛いと思うぜ？」

「……ありがとうございます」

ぷいっとそっぽを向きながらも何処か嬉しそうだ。

「——し、土織くんっ！」

そんな中、俺の名を呼ぶ緊張した声が聞こえてくる。

発生源の方へと視線を送れば、そこにいたのは淡い空色のホルターネックビキニを身に纏い、薄いパレオを巻いた少女——祐奈。

「どう……かな？」

祐奈はゆっくりと俺の前まで来ると、上目遣いに言った。

「試着室で見た時より、外で着てる方が映えるな。——綺麗だぜ？」

「~~~~~」

俺の言葉に顔を赤く染めて悶える祐奈だったが、その頬は緩みに緩みきっていた。俺はそんな様子の祐奈の頭を優しく撫でる。

「ど、どうしたの?」

「ん? いや、可愛かったからついな」

「あう……」

湯気が吹き出てくるのではないかと心配になるほど祐奈の顔は更に赤く染まってしまう。

……全く……反応がわかりやすいやつだ。

「おい見てみるよライザー。」

士織の奴締まりのない顔してるぜ?」

「ああー誠俺も思ってた所だ。」

士織もあんな顔をするんだな」

「幸せそうで何よりだね」

傍から聞こえてくるのは一誠たちの言葉。ちらりとそちらを向けばニヤニヤとした笑みを浮かべているのがわかった。

どうやら反応がわかりやすいなどと思いつつも俺も祐奈のことは言えないらしい……。

「さて、それじゃあ皆!

私たちのプール開きを始めましょう!」

『おう! (はい!)』

リアス先輩の掛け声に、その場の皆は笑顔で声を上げた。

「そーいやゼノヴィアの奴はいねえのか？」

俺がふと、思ったことを口にする。

「ゼノヴィアなら『先に始めておいてくれ』って言ってたから後で来る  
と思うよ？」

「そうか。いないわけじゃないなら良いんだ」

俺と祐奈はそんな会話を交わして、プールを楽しむことにした。

## 第55話

side 3人称

「ほら、リズム良く脚を動かすんだ」

「はい、いち、に、いち、に……」

ぱしゃぱしゃぱしゃ——と、水音が鳴る。プールの中に見えるのは小猫の手を握り、バタ足の練習に付き合う土織、そしてその隣にはアーシアが一誠と共に小猫と同じバタ足の練習をしている姿だった。

——小猫とアーシア。

この2人、話を聞くところによると泳げないという。そんな2人に土織と一誠は泳ぎの練習を手伝っているのだ。

「2人とも頑張つて！」

プールサイドでは祐奈が一生懸命練習する2人へのエールが飛んでいた。

それに応えるように、小猫とアーシアは時折『ぷはあ』と息継ぎしでは懸命にバタバタと足を動かしている。

「ぷはあ……っつ。」

……土織先輩、付き合わせてしまつてゴメンなさい……」

小猫は申し訳なさそうにそう言った。

「ん？気にすんなよ。」

泳ぎの練習に付き合うつてのものなかなか面白い経験だしな。

それに、小猫に頼まれたんなら断れねえよ」

にかつと笑う土織に小猫は頬を緩ませる。その様子を見る祐奈は見るからに面白くなさそうだ。

「つと……端に着いたぜ」

25メートルをバタ足で泳ぎきった小猫は勢い余つて、土織にぶつかってしまう。偶然にもそれは抱きついているかのように見えた。

「……土織先輩は、やっぱり優しいですね。」

……だからこそ私は……」

頬をほんのりと赤く染めながら小猫は言葉の終いをごによごによ

と喋る。

「優しかねえよ。」

俺は俺の好きなように行動してるだけだしな。

どっちかという和我俣で自己中な男さ」

小猫の頭を撫でながら、土織は自傷気味に言う。

「い、いつまで抱き着いてるの!?!小猫ちゃんっ!」

土織くんは僕のなんだよっ!!」

そんな時、プールサイドで見ているだけだった祐奈が我慢しきれずに飛び込んで来る。

「……泳げないから捕まってただけです」

「ここは足がつくでしょっ!」

「……私、小さいですから」

「む、むうう!!」

小猫と祐奈は火花を散らしているかのように睨み合う。まさにキヤットフアイト寸前である。

「——ほら、2人とも仲良く遊べ」

「にやっ?!」

「あう?!」

そんな2人を止めたのは言わずもがな土織。額にデコピンを放つたのだ。

おでこを2人して押さえながら文句あり気な表情で土織を見つめる。

「取り敢えず……どうする?小猫。」

もう1周行つとくか?」

「……お願いします」

「こ、今度は僕も一緒に隣で泳ぐからねっ!」

「……祐奈先輩は思いっきり泳いでても良いですよ……?」

「僕も行くのっ!」

「ほらほら、ケンカしてねえで仲良くな?仲良く」

土織はそう言いつつ、2人へ微笑ましいものを見るような視線を送っていた。





「皆楽しんでんなあ……」

小猫との泳ぎの練習を終えた土織はプールサイドに用意していたビニールシートの上で祐奈、小猫に寄り掛かれながら周りを見渡していた。

「リアス、どうだ？」

「んっ……マツサージまでしてくれるなんて……流石ね、ライザー」  
うつ伏せに寝るリアスに、ライザーはオイルを塗りながらのマツサージ。

互いに話しながら自分たちの空気を作り出していた。

「朱乃先輩泳ぐの上手っすね」

「あらあら、うふふ。」

「ありがとうございますイッセーくん」

朱乃と一誠はプールで泳ぎを満喫している。アーシアもいるかと思いきや、泳ぎの練習で疲れたのだろう。プールサイドでコクリコクリと船をこいでいた。

「む……また負けたか……」

「……やるな夜鶴……」

「ふふふ……」

「ゼノヴィアちゃんもなかなかだよ」

後からきちんと現れたゼノヴィアは夜鶴と共にプールで競争をしていた。

今のところは夜鶴の全勝。負けず嫌いなゼノヴィアは何度も挑戦しているのだ。

「俺たちはどうする?」

士織は寄りかかっている小猫と祐奈に声をかける。

「……私は疲れたので少し休憩です」

そう言った小猫は何処からともなく取り出した饅頭を小さな口ではむはむと食べ始める。

「僕も休憩かな……」

あ、小猫ちゃん小猫ちゃん。

僕にもひとつくれない?」

「……どうぞ」

「ありがとう♪」

祐奈は小猫から饅頭を貰って幸せそうに食べる。士織はそんな人に寄り掛かれながら、このままゆっくりするのも乙か……と考え小さく笑った。

「小猫俺にも饅頭くれよ」

「どうぞ」

「さんきゅー」

明らかに返事の速度の違う小猫だったが、それに気が付き、あまつさえ言葉にするものなどこの場には居なかった。

Side Out



Side 一誠

「んん〜!今日は遊んだなあ……」

皆よりもひと足早く更衣を済ませた俺は校庭の方へ足を向けていた。

それにしても今日は楽しかった。こうやって皆で集まって思いつきり遊ぶというのもやっぱり良いものだ。

——そんなことを考えながら、校舎を出ようとした俺の視界に銀が映り込む。校門のところだ。

「……………」

無言で校舎を見上げる……美少年。グレイファイアさんの銀髪よりもダークカラーの長い銀髪を無造作に後ろで纏めたその姿はまるで1枚の絵画と勘違いしそうだ。

見た目から年齢を予想するに俺と同じ年か少し若いくらいだろう。ふと、その美少年が俺に気がついたのか視線をこちらに移した。引き込まれるほどに透き通った蒼い瞳。それがまるで芸術品のようだ。

「———やあ、いい学校だね」

「まあな。俺の大切なモノがたくさん詰まった場所だから」

この美少年の正体は薄々気がついている。

俺の中の神器が疼くんだ……まるで積年のライバルが現れたと言わんばかりに。

———そして、彼は口を開く。

「オレはヴァーリ。白龍皇———パニシング・ドラゴン【白い龍】だ」

「ああ……分かった。

ここで会うのは2度目だったよな？」

前は全身鎧だったから顔まではわかんなかったけど……そのオーラと声は覚えてる」

俺は不敵な笑みを浮かべて言った。

白龍皇———ヴァーリも俺の言葉に笑みを浮かべる。

「それで？今回は何の用だ？」

『赤』と『白』の決着でもつけに来たのか？」

龍のオーラを漏らしながらヴァーリに問う。

「これは……心地良い龍の波動だな……」

戦うつもりはなかったんだが……気が変わってしまったみたいそうだ」

そう言っつて、ヴァーリが俺の方に手を伸ばしてきた———その時。

「――何をするつもりかは知らないけど、冗談が過ぎるんじゃないかな？」

「――ここで赤龍帝との決戦を始めさせるわけにはいかないな、白龍皇」

2本の剣――祐奈の聖魔刀とゼノヴィアの聖剣がヴァーリの首に突きつけられていた。

祐奈とゼノヴィア、2人の剣は強烈なオーラを発している。

しかし、剣を向けられたヴァーリは全く動じることなく立っていた。

「止めておいた方がいい。」

キミたち程度じゃオレを害することなんてできないさ」

ヴァーリの涼しい表情にその言葉が伊達や酔狂で言ったものではないことが分かる。

祐奈とゼノヴィアも表情を強ばらせているのが見えた。

「誇つていい。相手との実力差が分かるのは、強い証拠だ」

それは俺も同意する。

士織にも初めに教えられた。相手の実力を見誤ることだけはするな、と……。

「兵藤一誠、キミはこの世界で自分が何番目に強いと思う？」

突然の問いかけ。

……俺の強さか……。

自分は決して弱くは無いと言える自身はあるが……しかし、自分が最強だと言えるほど俺も自惚れてはいない。

「先ほど感じた龍の波動から感じるに、【禁手】となったキミの強さは上から数えれば3桁に入ることもできるだろう」

一体何が言いたいのかがわからない俺は怪訝な表情を浮かべていたと思う。

「この世界は強いものが多い。」

【クリムゾン・サタン紅髪の魔王】と呼ばれるサーゼクス・ルシファーでさえトップ10内

に入らない。

……まあ、あの士織とかいう少女ならトップ5入りは夢ではないかもしれないけどね」

士織よりも強い奴がいる……その言葉に俺は驚く。

あの士織が負けるかもしれない相手がいるっていうのか……？

俺がそんなことを考えていると、ヴァーリが指を1本立てた。

「だが、1位は決まっている。——不動の存在が」

「不動の存在……か」

俺の呟きにヴァーリはくすりと笑う。

「いずれわかるだろう。ただ、オレじゃないことだけは確かだ」

「んなもん言われなくても分かってる」

どうやら、ヴァーリの奴が自惚れているということはないようだ。

それから一拍あけて、寧猛に笑うヴァーリ。

「なあ——自分よりも強い奴がいるって考えるとワクワクしないか？」

その笑みと言葉は俺ではない方に向けられていた。

「——しないな。というかどうかでもいい」

向けられていたのは俺の背後に来ていた士織。更にその後ろに他の皆も揃っていた。

「生憎と俺はお前と違って戦闘狂じゃないんでね」

「酷いな、オレだって戦闘狂じゃないさ。」

ただ、強者との戦いを楽しんでいるだけだ」

「それが戦闘狂っていうんだよ……」

淡々と交わされる会話に俺は口を挟まなかった……いや、挟めなかった。

士織の顔が無表情だったから……。

「取り敢えず帰れ、白龍皇。」

折角の楽しさがお前のせいで台無しだ」

「これはこれは……すまなかつた。」

じゃあ、言われた通り帰るとしよう。

——兵藤一誠、また会おう。君とも戦いたくなかった」  
肩をすくめながら、そういったヴァーリ。

そして、校門を出る寸前、何かを思い出したかのように振り返って  
口を開いた。

「————」  
【二天龍】と称されたドラゴン。『赤い龍』と  
ウエルシユ・ドラゴン  
『白い龍』。  
パニシグ・ドラゴン

過去、関わった者はろくな生き方をしていない。——キミた  
ちはどうなるんだろうな?」

そう言い残して、今度こそヴァーリは俺たちの前から姿を消して  
いった。

ヴァーリの残した言葉にその場の緊張感は晴れない。

## 第56話

どうも、兵藤士織だ。

白龍皇であるヴァーリの来訪からしばらくして、ある日の朝。

「士織ちゃん！一誠ちゃん！アジアちゃん！後で賢夜さんと一緒に絶対行くからねっ！」

朝からかなりの気合を入れた母さん。登校直前の玄関前でまでそんなことを言わなくてもいいんだが……。

つつい苦笑いが浮かぶ。

「はいっ！楽しみにしてます！」

母さんの言葉に満面の笑みを浮かべて嬉しそうなアジアの姿。

……一誠、アジアを微笑ましそうな表情で見るのはいいが母さんまでそんな表情で見るとは……。

「遅れてしまうぞ、3人とも。」

「ほら、葵泉も着替えなければいけないだろう？」

「あ、ゴメンなさい賢夜さんっ！」

それじゃあ、士織ちゃん、一誠ちゃん、アジアちゃん行ってらっしゃい♪」

そういった母さんはぱたと自分の服のある部屋へかけていった。

「全く……事故に遭わないように気をつけていくんだぞ？3人とも」  
父さんはそれだけ言い残すと母さんの向かった方に歩んでいく。

「……取り敢えず、行くか」

俺がそう呟くと、一誠とアジアは頷いた。そして、3人とも一切ズレることなく口を開いた。

『行つてきますー！』



——さて、朝の母さんが何故あんなにも気合が入っていたのかを説明しよう。

簡単に言えば、今日は駒王学園の授業参観の日——そのため、母さんは気合を入れ、父さんにいたっては有給休暇を取ってまで訪れる気満々というわけだ。

先ほど授業参観と言ったが駒王学園のものは正確には『公開授業』というものに当たる。

親御さんが来ているのは当然だが、中等部の学生が授業風景を見学してもいいことになっている。その中学生の保護者も同伴で見学することが可能という、結構……いや、かなりフリーダムなスタイルだ。自分の親御さんだけでなく、駒王学園中等部の後輩たちも見に来るとあって、意外と高等部の学生たちは無駄な緊張をしたりする。

……今も教室内の学生たちは変な緊張をしているように見えるしな……。

「なあなあ、イツセーんところは両親来るのか？」

一誠の席の周りに俺とアーシアが集まったのんびりしていれば、松田と元浜が近寄って来るなりそう言った。

「ああ……。朝から気合入りまくりだったわ」

「両親に愛されてるねえ……」

元浜がそう言つて、松田とともにニヤニヤし始める。

「母さんも父さんも優しいしな。」

「アーシアだって楽しみにしてるし」

「はいっ！」

私、こういうの初めてなんで、すごく楽しみですっ！」

一誠は松田と元浜のニヤニヤとした表情をスルーして、アーシアの方へと視線を移して和んでいた。

「やあ、おはようイツセーそして——おはようございます土織



様っ!」

「わかったから跪くな、祈るな、讃えるな……」

一誠への挨拶までは普通だったのになぜ俺の時だけ変わってしまったのか……解せん……。

「お、なんだなんだ?」

士織の信者になっちまったのか?」

「かーっ!ゼノヴィアちゃんも士織信者か!流石だな士織様(笑)」

「……取り敢えず松田と元浜は後で絞める」

無性にイラつく言動をした2人には私刑を与えると心に強く刻み、今は目の前で崇め始めたゼノヴィアの対処をすることにした。

「――天罰!」

「痛いっ?!?!」

……まあ、実力行使なんだけど。

俺はデコピンを喰らううざくまったゼノヴィアを放置して次は松田と元浜への私刑実行へと移る。

「お、おい士織さん?」

ゼノヴィアちゃん物凄く痛そうだけど大丈夫か……?」

「そしてなんでこっちににじり寄って来るんだ……?」

そう言いつつ少し後退していく松田と元浜。

俺はニヤリと笑みを浮かべて口を開く。

「もちろん……私刑実行のために決まってるだろ……?」

『に、逃げろおおおおお!!』

「逃がすわけねえだろ!」

いきなり走り出して逃げようとした2人の前に回り込み、頭を掴む。

「知らなかったのか?」——大魔王からは、逃げられない」  
無慈悲にそう言つて、俺はにつこりと笑い手に力を入れた。

『うぎやあああああつ!!!?』  
割るっ?!あたまがわれるううううっ?!?!?』

——その後2人の男子生徒が後輩たちに『絶叫先輩』と呼ばれるようになったという……。

——閑話休題。

朝は色々とおつたが、無事に授業の時間となる。開け放たれた教室後方の扉からクラスメイトの親御さん、そして俺の母さんと父さんも入ってくる。

授業は英語。いつもよりも気合の入った様子の男性教諭が何やら袋に包まれた長方形の物体を生徒に配っていく。

……ん?なんだあれは……英語であんなもの使ったことあったか……??

そんなことを思いつつ、俺の机にも長方形の物体が置かれる。

……えつと……これは……紙粘土……??

怪訝に思う俺へ……というより俺たちへ教師は嬉々に言う。

「いいですかー、今渡した紙粘土で好きな物を作ってみてください。

動物でもいい、人でもいい、家でもいい。

自分が今脳に思い描いたありのままの表現を形作ってください。

——そういう英会話もある!!」

「……いやいやねえよ」

教師の言葉に頭を抱えて呟く俺。一誠の方へ視線を移せば俺と同じく頭を抱えていた。

「Let's try!!」

イイ笑顔でサムズアップする教師。しかも無駄に……無駄にいつもよりも発音が良かった。

「む、難しいです……」

声の方へと視線を向ければアジアが紙粘土をこねて何かを作り始めているのが目に入る。

……アジアまずは人を疑う事を覚えよう……。

なんてことを考えながらなんとなく周りを見れば俺と一誠以外渋々ながら紙粘土をこねくりだしていた。

「……仕方ないか」

周りの様子に合わせるように俺も紙粘土に手を伸ばす。

作るものは何でもいいと言ったが……何を作ろうか……。

「……そうだ」

頭の中にふと思いついたものを作るために紙粘土を分割している。

紙粘土の量からそんなにたくさんは作れないため、3つに分割。そして意識を内側へと潜らせる。

（誰か起きてるか？）

（ど、どう……しましたか？土織……さん）

（おお！シオリ！）

今日はどうしたのだ？）

（どーしたんですかあー？だーりんっ！）

（ちようど3人だな……。

なに、ちよつと紙粘土で工作するからそのモデルを3人探してたんだよ）

（も、モデル……ですか……？）

（もでる？なんだそれは？美味しいのか？）

（きゃーっ♪だーりんからのモデルの指名だなんて感激ですう）

（あく……つつても動物形態の作品になるからな？

そしてモデルは食べ物じゃねえぞ？

……それで……3人ともモデルになってもらっても良いか？

(わ、私は……いい……ですよ……?)

(うむ！私ももでるになるぞ！)

(だーりんからのお願いなら何でも聞いちゃいますよー)

(ありがとな、3人とも)

「……ふう……」

3人との会話を終えた俺は意識を浮上させ、早速作業に取り掛かる。

まずは分割しておいたうちの1つを更に二つに分けて……よし！次はこつちの……むう……難しいな……でも形はできた……最後にこれを……こうして……つと。

「うしー完成だな」

そう呟いて俺は作業を終了する。

俺の机の上に並んだのは重なり合うようにした2匹のウサギ、のんびりと背伸びする柴犬とそれにもたれかかるようにする猫だった。

「うお！凄いな士織……今にも動き出しそうじゃん」

「そういう一誠のほうもスゲエじゃねえか。」

それは……ドライグか？」

俺に声をかけてきた一誠の机の方へ視線を移せば、臨場感あふれる1匹のドラゴンが出来上がっていた。

「まあな。」

頭に浮かんだのはやっぱり相棒だったからさ」

ニカツと笑う一誠。その人懐っこい笑みはつい微笑ましく感じてしまう。

「ドライグの奴喜んでるんじゃないか？」

「さつきから俺の中で泣いてるよ……」

そういう一誠は何処か照れ臭そうだった。

……ドライグとは良い関係を築けているらしいな……原作みたい

に可哀想な扱いを受ける可能性はほとんどない……だろう。

未だにない、と断言できないのは何故だろうか。

「す、素晴らしい……！」

2人にこんな才能があつただなんて！

やはりこの授業は正解だつた。

また2人、生徒の隠された才能を私は引き出したのです……」

いつの間にか側にいた教師は目元を濡らしながらそんなことを言う。

……大袈裟すぎる気がするのは俺だけじゃない……はずだ……。

「カツコイイドラゴンだな！ イッセー！」

「土織ちゃんこの動物たち可愛い！」

クラスメイトたちも近寄つてきて俺と一誠の作品を見る。そして、何処からともなく「5000！」と言った声上がる。

「イッセーのドラゴンなら6000出すぞ！」

「私は土織様の作品になら8000出します！」

紙粘土を用いた英語の授業は一転、俺と一誠の作品を巡ったオークション会場へと化してしまった。

## 第57話

side 土織

「あ〜……疲れた……」

教室で開催されたオークションをなんとか回避し、自分で作った紙粘土の作品を死守した俺たちは自販機の前まで来ていた。

「しっかし……みんな鬼気迫る表情だったな……」

「確かに……」

あそこまでされると怖いな……」

「皆さんそんなに欲しかったんでしょっか？」

一緒に来ていた一誠、アーシアは苦笑いを浮かべてそう言った。

「あら、土織たちも飲み物を買いに来たの？」

3人で話していれば、リアス先輩と朱乃先輩が近づいてくる。

「正確には教室から逃げ出すついでに喉を潤しに来たんだよ……」

「ちよつと授業がおかしな方に行っちゃったんですよ……」

俺と一誠はため息を吐くようにそう口にする。2人の表情を見たリアス先輩、朱乃先輩は何かを察したように苦笑いの表情を浮かべた。

「た、大変だったのね……」

「あらあら……お疲れですわね……」

「……取り敢えず飲み物でも買おうぜ？」

特別に奢ってやるから……何が飲みたい？」

俺はそう言つてズボンのポケットから財布を取り出す。皆は俺が奢ってやると言ったのを聞いて表情を緩めた。

「俺は炭酸ならなんでも」

「私はオレンジジュースがいいです！」

「私は紅茶をお願い」

「私はお茶がイイですわ」

4人のリクエスト通りの飲み物を買ひ、俺の分を買おうと硬貨を入れる。何を飲もうか考えていれば、横から人影が現れて自販機のボタンを押した。

「僕はりんごジュースで♪」

「いきなり現れるなよ……祐奈」

自販機からジュースのパックを取り出しながら笑顔を浮かべる祐奈に、頬が緩むのを感じる。

そんな俺と祐奈を一誠たちは飲み物を口にしながらニヤニヤと見ているのを視界の端で捉えた。

「……なんだよ」

「いや？ホントにラブラブだなあってな？」

一誠がそう言うと、他の3人も頷いて同意していた。

「あ、そう言えば士織くん知ってる？」

そんな中、4人からの視線なんて何でもないと叫んだ様子で祐奈がそう問う。

……随分と精神が強くなった……いや、そんなことないか……よく見りや顔赤いじゃねえか。

そんな祐奈についていついクスリと笑ってしまう。

「な、なんで笑ってるの……？」

「いや？笑ってないぜ？」

俺は口元を隠しながらそう言うと、頬を膨らませてジトつとした視線を向けてくる。

「ほら、そんなに拗ねた表情すんなって。

それより、さっきの話の続きは何なんだ？気になるじゃねえか」

祐奈の頭を優しく撫でてやれば、拗ねた表情から柔らかな表情に変化させる。

「あ、あのね？魔女っ子が撮影会をしてるんだって。

ちやうどその魔女っ子を見に行こうとしてたんだ」

そう言い終えた祐奈は頭を撫でる俺の手に擦り寄り、もっと撫でるとアピールしていた。俺はそんな祐奈を撫でながら耳元に顔を近づける。

「……可愛いな祐奈」

「ふあっ!!」

それには耐えきれなかったのか、祐奈の顔が爆発的に赤に染まった。



「お、アレじゃねえか?」

「人もいっぱい集まってるし、多分そうだよ」

祐奈からの話を聞きながら魔女っ子とやらを探していると、廊下の一角でカメラのフラッシュがたかかっているのが目に入った。

人垣をなんとかぐり抜けて、前の方に体を向ける。

そこにいたのは1人の少女だった。

(……なんだっけか? 確か……アニメのキャラだったはずだけど……)

その少女の正体はわかるものの、コスプレの内容だけは思い出せなかった。

俺に少し遅れて人垣を通り抜けてきたリアス先輩たちが俺の周りに到着し、前方でカメラ目線でポーズ決める少女を目にした途端、慌てふためく。

「なっ?!」

特にリアス先輩の狼狽ぶりには苦笑いが浮かんでしまいそうな程だ。

「オラオラ! 天下の往来で撮影会たぁーイイご身分だぜ!」

そんなことを言いながら、生徒会所属の匙が人だかりに飛び込んでいく。

「ほらほら、解散解散っ!」

今日は公開授業の日なんだぜ?



こんなところでいらない騒ぎを作るな！」

あれほどの人だからが蜘蛛の子を散らすようになくなっていく。撮影していたカメラ男子も渋々の様子だったが去っていった。

……匙もなかなかいい仕事をするじゃねえか。

その場に残っているのは俺たちと匙たち、コスプレ少女だけだ。

「アンタもそんな格好しないでくれ……って、もしかして……親御さん……ですか？」

……いや、そうだとしても場に合う衣装つてもものがあるでしょう？

そんな格好されてちゃ困りますよ」

「え、だって、これが私の正装だもん☆」

匙が注意を促すが、少女はポーズジグするだけで聞く耳を持たない。

その様子に奥歯をギリギリと鳴らす匙だが、リアス先輩を確認するなり頭を下げる。そして、少女をチラリと横目で見て、咳払いをした。

「——これはリアス先輩。ちようど良かった。」

今、先輩の親御様方をご案内していたところなんですよ」

匙が廊下の後方へ顔を向けると、支取先輩の先導で、紅髪の男性2人が近づいてくるのが見える。

「何事ですか？サジ、問題は簡潔に解決しなさいといつも言っ——」

厳しい表情を浮かべて匙に注意をしていた支取先輩はそこまで言いかけて、コスプレ少女を見るなり言葉を止めた。

「ソーナちゃん！やっと思つけた☆」

コスプレ少女は支取先輩を見つけると嬉しそうに抱きついていく。

その様子に匙も対応に困り出した表情を浮かべ始める。

そして、そんな中サーゼクスが構わずにコスプレ少女に声をかけた。

「ああ、セラフォルーか。」

キミもここへ来ていたんだな」

その言葉に空気が凍った。……主に一誠とアーシアの。眼を剥いてコスプレ少女改めセラフオル・レヴィアタンを見つめる2人。

一誠は引き攣った笑みを浮かべながらリアス先輩に質問する。

「……あ、あの……リアス部長？」

『セラフオル』ってまさか……」

「……ええ、そうよ。」

あの方は現四大魔王のお一人、「セラフオル・レヴィアタン」さま。そして、ソーナのお姉さまよ」

「ま、マジっすか……」

引き攣った笑みが苦笑いへと変化する一誠。

俺はふと、魔王の名前は教えたことはあつたが性格などを伝えた覚えがないのを思い出す。

「セラフオルさま、おひさしぶりです」

「あら、リアスちゃん☆おひさ☆」

元気にしてましたか??」

彼女が魔王だと言われても今の状態では納得できる者はいないのではないか?そんな風に思わせるセラフオル・レヴィアタンの口調にリアス先輩も困り顔だ。

「は、はい。おかげさまで。」

今日はソーナの授業参観に?」

「うん☆」

でもねでもね?ソーナちゃんったら酷いのよ??」

今日のこと黙ってたんだから!

もう!お姉ちゃん、シヨックで天界に攻め込んじやおうかと思っちゃった☆」

「冗談にしてもなかなか怖いことを言うんだな」

セラフオル・レヴィアタンの言葉に俺がそう返せば頭上に『??』を浮かべて俺の方を見てくる。

「初めまして、四大魔王の1人セラフオル・レヴィアタン。」

俺は兵藤士織。ただの人間だ」

そう言つて手を差し出せば、セラフオール・レヴィアタンは一瞬キョトンとした表情を見せたが次の瞬間にはにっこりと笑つてその手を取つた。つまりは『握手』だ。

「初めまして☆

もう知つてるみたいだけど私はセラフオール・レヴィアタンです☆  
気軽に『レヴィアタン』つて呼んでね☆」

握手していいない方の手を顔の前で横ピースにするセラフオール・レヴィアタン。なんとも軽い展開だ。

「ねえ、サーゼクスちゃん。

この子つてサーゼクスちゃんの言つてたあの子？」

「そう、彼がああ『兵藤士織』くん」

サーゼクスとセラフオール・レヴィアタンのいう【あの子】という単語が気になるが……まあ、次の機会にでも聞けば良いだろう。

「そうなんだ☆

じゃあ……もしかしてこつちの子は？」

俺との握手を何故か崩さないまま今度は一誠の方を向く。

「彼は兵藤一誠くん。

彼が『赤い龍』ウエルシユ・ドラゴンを宿す、今代の【赤龍帝】だよ」

「やっぱり！私の予想通り☆」

あいもかわらずテンションの高いセラフオール・レヴィアタン。

「……つうか、そろそろ手を離してくんねえか？」

俺が呆れ気味な声でそう言つと、セラフオール・レヴィアタンは口  
に手を当てて俺の手を離した。

「ごめんね？土織ちゃん☆

つつい可愛い可愛くてずつと握つちやつてた☆」

「あ……言つとくけど俺は男だぜ？」

「またまたあ☆

そんな冗談通じないぞ☆

ね？サーゼクスちゃん☆」

ニコニコと笑いながらサーゼクスの方を向くセラフオール・レヴィアタン。

しかし、その視線の先に居るサーゼクスは苦笑いを浮かべるだけでセラフオール・レヴィアタンの言葉に同意はしない。

「えっと……冗談じゃないの……??」

「まあね。」

士織くんは列記とした男の子だよ」

「うっそお!!」

わざとのような大きな身振りで驚きを表現するセラフオール・レヴィアタン。

そして、俺にいきなり接近してきたかと思うと俺の顔をジロジロと遠慮なく見始めた。一通り見て満足したのか、セラフオール・レヴィアタンは俺から離れていき、ふう、と一息つく。

「——これが【男の娘】ってやつなんだね☆」

セラフオール・レヴィアタンはサムズアップしながらイイ笑顔でそう言った。

……俺は今後の自分の扱いを考えてついついたため息が漏れてしま  
うのを感じた。

——閑話休題。

「それにしても、セラフオール殿。」

これはまた奇抜な衣装ですな。いささか魔王としてはどうかかと思  
いますが……」

グレモリー卿はセラフオールの服装を訝しげに見るとそう言った。

「あら、グレモリーのおじさま☆

「ご存知ないのですか？今この国ではこれが流行りですよ？」

くるりとその場で一回転してからポーズを決めるセラフオルー。

「ほう、そうなのですか。」

「これは失礼。私が無知だったようだ」

「ハハハハ、父上。信じてはなりませんよ」

サーゼクスは半分信じかけていたグレモリー卿に笑いながらそれは嘘だと伝える。

「……なあ、士織。」

俺の見間違いとかじゃなけりやセラフオルーさんのノリがすごく軽いんだけど？」

「あゝ……まあ、確かにな。」

そういうのはリアス先輩にでも聞いたらどうだ？」

俺がリアス先輩の方を向いてそう言えば額に手を当てながら口を開いた。

「……言うのを忘れていた——いえ、言いたくなかったのだけれど、現四大魔王さま方は、どなたもこんな感じなのよ。」

……つまり、プライベート時、軽いのよ、それは酷いくらいに……ね……？」

頭を抱えてため息を吐くリアス先輩。

それと似た状況か、支取先輩も顔を真っ赤にして羞恥を噛み締めていた。

まあ、支取先輩の場合は姉の言動への恥ずかしさだろうが……。そんな支取先輩の様子を見たセラフオルーはその顔を心配そうにのぞき込んだ。

「ソーナちゃん、どうしたの？」

お顔が真っ赤ですよ？せつかくお姉さまである私との再会なのだから、もっと喜んでくれてもいいと思うのよ？

具体的には『お姉さま！』『ソーたん！』って抱き合いながら百合百合な展開でもいいと思うのよ、お姉ちゃんは！」

支取先輩は遺憾そうな表情で口を開く。目元を引き攣らせながら。

「……お、お姉さま。ここは私の学舎であり、私はここの生徒会長を任  
されているのです……。」

いくら身内だとしてもお姉さまの行動は、あまりに……。」

そのような格好は容認できません」

「そんなソーナちゃん！」

ソーナちゃんにそんな事言われたら、お姉ちゃん悲しい！

お姉ちゃんが魔法少女に憧れているって、ソーナちゃんは知ってい  
るじゃない！

きらめくステイックで天使、墮天使をまとめて抹殺なんだから☆」

「お姉さま、ご自重ください。」

魔王のお姉さまがきらめかれたら小国が数分で滅びます」

「……だから会話内容が物騒だと言つとろーが……。」

誰にも聞こえないレベルでため息を吐くかのようにそう呟く。

「うう……もう耐えられせんっ！」

支取先輩は目元を潤ませながら、この場を走り去っていく。

「待って！ソーナちゃん！お姉ちゃんを置いて何処に行くの！」

魔法少女ならぬ魔王少女なセラフォルーがそれを追って走り出し  
た。

「ついてこないでください！」

「いやあああん！お姉ちゃんを見捨てないでええええええっ！ソー  
たあああん！！」

『たん』付けはお止めになってくださいとあれほど！！」

魔王姉妹の追いかけて……下手なことが起きなけりやいいのだ  
が……。」

俺は2人の走り去っていく様を暖かな目で見守った。

## 第58話

side 士織

「うむ。シトリー家は平和だ。

そう思うだろう？リーアたん」

「……お兄さま、私の愛称を『たん』付けで呼ばないでください……っ  
！」

サーゼクスの言葉にリアス先輩は嫌がるような言葉を返す。

「そんな……リーアたん。」

昔はお兄さまお兄さまといつも私の後ろを付いてきていたのに……。反抗期か……」

シヨックを受けたような様子のサーゼクス。しかし、その表情には少しばかりからかいも入っているように見える。

……全く……子供みたいな奴だ……」

「もう！お兄さま！どうして幼少時の私のことを——」

——パシヤツ！

怒っているリアス先輩を余所に突然カメラのフラッシュが焚かれる。

カメラを構えていたのはリアス先輩の父親であるグレモリー卿。その表情から読み取るに感無量の様子だ。

「良い顔だ、リアス。」

よくぞここまで立派に育って……。

此処に来られなかった妻の分まで私は今日張り切らせてもらおうか」

「お、お父さま！もうっ！」

怒るに怒れないと言った様子のリアス先輩。

そんな、平和な家族の姿を見てついつい微笑みが漏れる。

「魔王さまと、魔王さまの御家はおもしろい共通点があるのですよ」

朱乃先輩は心底愉快そうに微笑みながら口を開く。そうすれば、一

誠は首をかしげて朱乃先輩の方を向いた。

「共通点?」

「魔王さまは皆さまおもしろい方々ばかりなのです。

そして、そのご兄弟は例外なく真面目な方ばかり。

うふふ。きつとフリーダムなご兄弟が魔王さまになったせいで、真面目にならざるを得なかったのでしょうかね」

「……まあ、シトリー家がいい例だってことだな」

朱乃先輩の言葉に補助をつけるように俺はため息混じりに言う。

「——士織、一誠、アーシア此処に居たのか」

——と、そんな時。聞きなれた声が耳に届いてくる。

声の方へと視線を送ると、そこには学内を一通り見回ったのか、父さんと母さんの姿があった。

「兵藤一誠くん、お父さまかな?」

グレモリー卿が一誠に訊いているのが視界の端に見える。

「はい。」

「……と、いうより父さんだけじゃなくて母さんもいますよ?」

「……なんと、あの少女はお母さまなのかね?」

「えつと……まあ」

「……やっぱり母さんは親に見られないんだな……。」

あの若過ぎる容姿はメリットもあるだろうけどデメリットも存在するようだ。

「初めまして、リアスの父です」

グレモリー卿は父さんと母さんの前まで移動すると、握手を求めながら挨拶をしていた。

「……丁寧にどうも。」

士織たちの父親の兵藤賢夜という」



堂々とした様子だが、少しばかり厳しめの表情の父さんはグレモリー卿からの握手を受ける。

「先日は私の息子たちがお世話になったそうで……。」

日頃から娘たちとも仲良くして下さっていると聞いて、ご挨拶に伺おうと思っていたのですが、なにぶん私もサーゼクスも多忙な身でして、なかなか機会を作れませんでした。

この度、幸運に恵まれたようです。今日はお会いできて光栄です」「リアスちゃんたちみんな良い子たちですから当たり前ですよ♪」

母さんは優しく微笑みながらそういうと父さんにも微笑みに向けた。

その微笑みが効いたのだろう。父さんの表情は少し、柔らかくなり角が取れたように見える。

「うむ。落ち着いた場所でゆっくりとお話したいものです。」

此処はどうしても目立つ。何よりお互いの子供たちが恥ずかしいでしょう」

グレモリー卿は周りを見渡し、集まっている視線を感じていたのだろう。そう提案した。そして、祐奈の方へ手をあげる。

「木場くん」

「はい」

「すまないが、落ち着ける場所まで案内してくれないだろうか？」

「……はい。それでは、ご案内します」

一瞬、俺の方を見て詰まった祐奈だったが、すぐに持ち直してそう口にする。

「ふふふ……気にせずとも、案内してくれればすぐにでも彼女……いや、彼に合流してもらって構わないよ」

祐奈の様子に気がついたのだろう。グレモリー卿は祐奈に微笑みかけた。

当の祐奈本人は顔を赤くしてわたわたとしている。

「それでは私は少しお話してくる。」

サーゼクス、あとは頼めるかな?」

「はい、父上」

なるほど、サーゼクスは残るのか。

この間挨拶を済ませたばかりだしな。今回は互いの親だけの話と  
いうことだろう。

「士織ちゃん、一誠ちゃん、アーシアちゃん、私たちはちよこつとお話  
してくるね?。」

「いつてらっしやい。」

変なことは話さないでくれよ?

もちろん、父さんも。くれぐれも威嚇なんてしないように!。」

「……善処しよう」

俺が父さんを指さしながらジト目でそう言うと、間を開けてそう口  
にした。

……本当に大丈夫かは定かではないが、父さんと母さん、グレモ  
リー卿は祐奈の先導のもとこの場を後にして行った。

「——リアス」

4人を見送った後、サーゼクスはくるりと向きを変えてリアス先輩  
の名を呼ぶ。

「なんでしよう、お兄さま」

「ちよつと、いいだろうか。」

すまないね、士織くん、イツセーくん。

妹を少し借りるよ。朱乃くんも一緒に来てくれるかな?。」

「はい」

朱乃先輩もサーゼクスの言葉に応じる。

「俺たちのことは気にせずに行つてこい、サーゼクス。」

聞いた感じだと結構重要なお知らせ話みたいだしな」

「分かってくれて嬉しいよ」

にこりとサーゼクスは笑みを俺に向けてそう言った。そして、サー  
ゼクスはリアス先輩、朱乃先輩を連れて、いずこかへ消えていく。

その場に残されたのはアーシアと一誠、そして俺。

「……取り敢えず教室に戻るか」

「そうだな」

「はーっ！」

こうして、俺たち3人は1度教室へと戻ることにしたのだった。



「うふふ♪アーシアちゃん、よく映ってるわ♪」

テレビに映し出されたアーシアの姿を見て、にこにここと笑う母さん。

「ハハハハ！やはり娘の晴れ姿を視聴するのは親のつとめです！」

父さんの用意した日本酒を飲みながら、豪快に笑うグレモリー卿。酒を飲むと人が変わったように陽気になったのだ。

兵藤家の夕食後、リビングではお酒を飲みながらの今日あった授業参観映像の鑑賞会が行われていた。

参加者は父さん母さん、グレモリー卿とサーゼクス、グレイファイアである。

酒をあおりながら、ビデオで撮影したものを交互に見比べていた。

一誠とリアス先輩は顔を赤くしながら「早く終われ早く終われ早く終われ！」と念じているのが視界の端に見える。

「これは……かつてないほどの地獄だわ……」

顔を最大に紅潮させたリアス先輩は全身をぶるぶると震わせてさうつぶやく。

「見てください！うちのリーアたんが先生にさされて答えるのです！」

サーゼクスはアルコールが入っているためか、いつもよりもハイテンションでリアス先輩の晴れ姿を解説し始めた。

「た、耐えられないわっ！お兄さまのおたんこなすっ！」

リアス先輩は我慢の限界なのか、そう叫ぶとこの場を走り去っていく。一誠も今が機会かとリアス先輩を追って逃げ出した。

「リーアたんが……」

……仕方がない……」

サーゼクスはため息をつきながらふところを探り始める。  
そして、1冊の本を取り出す。

「っ!?!き、サーゼクスそれは——」

その本を見た途端、グレイファイアが慌て始める。

「ここは——嫁自慢でもいかがですか?」

ニヤリ、と笑いながらサーゼクスは言った。

## 第59話

S i d e 三人称

「ほう……嫁自慢か」

兵藤家野大黒柱である兵藤賢夜はサーゼクスの言葉に興味を持ったのか、視線を向ける。

「ええ。」

私の……いえ、我々の自慢の嫁を自慢し合うというのはいかかでしょう?」

「ハハハハハ!それはイイ!

サーゼクスもなかなか面白いことを言うようになったな!

ジオテイクス・グレモリーは自らの子の成長を楽しむかのようにその口にした。

「さ、サーゼクスっ!!

巫山戯るのもいいかげんに——「土織」「はいはい…… 그레이ファイアはこつちなー」な、なにをつ?!

土織は賢夜からの指示で騒ぎ出した 그레이ファイアを引きずってアーシアやいつの間にかやって来ていた美憧、絢奈、華那の座っている場所まで連れていく。

「し、土織様っ!」

私はあの巫山戯の過ぎる阿呆を止めなければならぬのですっ!

「はいはい……恥ずかしいだろうけど大人しくしてよくな〜」

そう言いつつ椅子に 그레이ファイアを座らせる土織。淡々としたその行動に抵抗は無駄だと理解したのか 그레이ファイアはため息を吐きつつ大人しくなった。

「……リアスの気持ちがあつた気がするわ……」

口調が崩れ、プライベートモードになる 그레이ファイア。土織はそんな 그레이ファイアの様子をケラケラと可笑しそうに笑う。

「大変そうだな?」

「サーゼクスのせいです」

「おいおい、即答かよ」

そう言った土織は1度キッチンの方へと向かっていく。

そしてしばらくの後、お盆に人数分のコップを乗せて戻ってきた。

「ほら、コーヒーを淹れてきた。」

父さんたちの嫁自慢つつーことはどえらい惚気を聞くことになるんだからコレで何とかしろ」

「ありがとつす♪」

丁度ウチ、コーヒーが欲しかったんすよ♪」

美憧は嬉しそうに土織の用意したコーヒーを受け取る。

「すまないな土織。」

というよりも、私に言ってくれれば私が淹れたのだが……」

「気にするな華那。」

コーヒーを淹れるのが上手い土織に任せるのが安牌だろう」

申し訳なさそうな華那を他所に、絢奈はカラカラと笑ってそんなことを言った。

「つたく……絢奈は少しは気にしろっての……。」

……ほら、グレイファイアもカップを取ってくれ」

「あ、ありがとうございます」

「あく……その余所余所しいのはむず痒いから止めてくれや。」

それに様付けなんてしなくていいからな？」

土織はそう言って残ったカップをアーシアの前と自分の座る席に置く。

「……では、土織さんと」

「おう。それでいいぜ」

——グレイファイアと土織がそのようなやり取りをしている時、サーゼクスたちの方では嫁自慢が始まろうとしていた。

~~~~~

賢夜、サーゼクス、ジオティクスはそれぞれアルバムを用意して二

ヤリと笑う。

初めにアルバムを開いたのはサーゼクス。

「まずは軽めに……グレイフィアのウエディング姿です！」

どうですか！このキリツとした瞳にしかし、嬉しきで口元がほんのりと緩んでいる表情！

——愛しいですよ!!」

「ふっ……。」

なら私も葵泉のウエディングドレス姿を見せてやろう。

どうだ、この幼さを感じさせる柔らかな微笑み。

もう20年ほど昔のものだが今もほとんど容姿の変わらない可愛らしさだ」

「はははははー！」

私の妻も容姿の変わらない美しさだ！

リーアさんと姉妹に間違われるほどですぞ？

リーアさんとは違うあの亜麻色の髪的美しさと言ったら……まさか私の妻は宝だ！」

「2人ともやりますね……しかしっ！」

この——湯上りグレイフィアに勝てますかなっ?!」

そう言つて、サーゼクスはアルバムをめくり、1枚の写真を掲げた。そこに写っていたのはしつとりと濡れた髪に湯上り特有の赤みを帯びた柔らかな微笑みを浮かべる浴衣姿のグレイフィア。

士織たちの方からは「いつの間撮ったんですかサーゼクスっ?!」と言う叫びが聞こえてきているが何のその。得意げな表情を浮かべるサーゼクスは何処か自慢げだ。

「まだまだだな……サーゼクス殿。」

私の妻の——寝惚け葵泉の前にはそのようなものはお遊戯に過ぎぬよ」

賢夜はニヤリと笑いながらアルバムではなく、懐からラミネート加工された写真を取り出した。寝惚けと名のつく所から分かる通り、その写真にはまだ眠そうに目を擦る葵泉の姿があった。その目の擦り方はまるで猫のようだったのをここに記す。

「いやいや！」

私の妻の——甘えん坊モードに比べれば2人のものなどとてもとても……」

ジオテイクスは自然な流れで魔法陣から1枚の額縁に入った写真をドヤ顔で取り出す。

魔法陣を見たにも関わらず、一般人であるはずの賢夜は反応しない——というより写真しか見ていなかった。

ジオテイクスの持つ額縁に入っていたのは頬を紅く染めて両手をこちらに伸ばす何処か艶やかな雰囲気を感じさせる写真。

「父上がそのような写真を出すのであれば私はこの裸エプロングレイフィアを——」

「ならば私は裸ワイシャツ葵泉を——」

「まだまだ！」

ならばこの手ブラジーンズ姿の——」

だんだんとアダルトテイーな雰囲気の写真を公開していく3人。

グレイフィアは顔をこれでもかと紅く染めて悶絶。葵泉も恥ずかしそうにクツションに顔を埋めている。

士織はそんな大人組の様子に頭を抱えながら、アジアと美憧の視界と聴覚を遮断魔法で隠すのだった。

「……………これは流石に……………教育に悪い……………」



——結果、この暴走が顔を真っ赤にし、羞恥心の極地に追いやられたグレイフィアと葵泉によって終止符を打たれたのは語るまでもないだろう……。

## 第60話

どうも、兵藤士織だ。

サーゼクスたちの暴走から次の日の放課後。俺は旧校舎1階の『開かずの教室』とされていた部屋の前に立っていた。

勿論だが、オカルト研究部の部員全員が集まっている。

この教室の中にいるのもう1人の『僧侶』ビショップ。

原作と変わっていないければ女装少年ダンボールくんがいるはずだが……。

「……さて、扉を開けるわ」

俺が思考している間に、もう扉を開けるまで話が進んでいたらしい。

呪術的な刻印の刻まれていた扉からその刻印が消え去り、その扉をリアス先輩がゆっくりと開く――。

「イヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツツ  
!!!!」

――大絶叫。

扉が開かれた途端に俺たちを襲ったのはそれだった。

しかし、そんな中リアス先輩、朱乃先輩はため息を吐きながら中に入っていく。

『ごきげんよう。』

元氣そうでよかつたわ』

『な、な、何事なんですかあああああ?』

酷く狼狽した、中性的な声。

声だけ聞くとやはり男なのか女なのかの判断は付かないな。

『あらあら。』

封印が解けたのですよ? もうお外に出られるのです。

「さあ、私たちと一緒に出ましょう?」

相手をいたわるような、優しい声音で朱乃先輩は『僧侶』を連れ出そうとしている。

『やですううううう!!』

ココがいいですうううううう!

お外に行きたくないっ!人に会いたくありませんえええんっ!!!』

「……おい、こりや重症じゃねえか」

「ま、まあ……ね」

「……ヘタレですから」

事情を知っているであろう祐奈と小猫は苦笑を浮かべてそういった。

「取り敢えず入ってみようぜ?」

一誠はそう言つて扉に手をかける。

開かれた扉の奥に広がるのはカーテンで締め切られた薄暗い部屋。

内装はその薄暗さに反して可愛らしく装飾されており、ただ一つ棺桶だけが異様な雰囲気を出していた。

完全に部屋の中に入ると、リアス先輩たちの前に1つ人影が見える。

——金髪と赤い双眸をした西洋人形のように端正な顔立ちをした少女……いや、違うか……。

床にヘタリ込み、ブルブルと震え、力なく座り込んでいた。

見るからにリアス先輩と朱乃先輩から逃げようとしているのが分かる。

「えつと……この子がリアス先輩のもう1人の僧侶っつゝ事で良いのか?」

「ええ。そうよ。」

それと言つておくけどこの子は……「男なんだろ?」っ?!わ、分かるの?士織」

俺の間に被せるように言った言葉にリアス先輩は驚きの表情を浮かべる。

「当たり前前だろ。」

俺もこんなナリだからな。そういう事には敏感なんだよ」

そう言つて新しい僧侶の方へ視線をずらすと、ふと目が合った。

「っ!!」

……まあ、ビクンと身体を震わせて凄じ勢いで目を逸らされたが。

「と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と……その……この方たちは誰ですか……?」

「そうね、紹介するわ」

そういったリアス先輩は一誠、ゼノヴィア、アーシア、俺の順番で指しながら紹介を始める。

「あなたが此処にいる間に増えた眷属と協力者よ。

『<sup>ポイン</sup>兵士』の兵藤一誠、『<sup>ナイト</sup>騎士』のゼノヴィア、あなたと同じ『<sup>ベシヨッフ</sup>僧侶』のアーシア、そして協力者の兵藤士織よ」

「ビィィィィ!」

ひ、人がいっぱい増えてるううう!!」

「……引きこもりで対人恐怖症か……なかなかレベル高い眷属だな？」

「ご、ご、ごめんなさいいい!!」

俺の言葉に泣き目になりながら謝る僧侶くん。

「もう、イジメないで頂戴？」

——— お願いだから、外に出ましよう? ね?

もうあなたは封印されなくていいのよ?」

リアス先輩は優しくそういったのだが、僧侶くんは未だに怯えた様子で震える。

「嫌ですううううう!!」

僕に外の世界なんて無理なんだあああああつ!

怖いつ!! お外怖いつ!!

どうせ、僕が出ていっても迷惑をかけるだけだよおおおおつ!!

……難易度の高い僧侶だな……。

事前に知識として知ってはいたが……ここまでか……。

などと思っていると、僧侶くんの前にゼノヴィアが痺れを切らしたかのように飛び出す。

「ええい！軟弱者め！」

外に出ろと言ったのだから行くぞ！」

腕を掴み引つ張って行こうとした、その時だった。

「ヒイヒイっ!!!」

僧侶くんの絶叫と共に――

――時が停まった。

S i d e      O u t

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆  
S i d e      ???

「ま、また……やっちゃった……」

僕は誰もが停まった世界でそう呟く。

あの……ぜ、ゼノヴィア？とかいう人に怒鳴られて、腕を掴まれた

のが怖くて、また無意識に発動してしまった……。

僕の視界に入ったモノの時を停めてしまうこの

フォービトウン・パロール・ビュウ  
【停止世界の邪眼】の能力を……。

本当は誰も停めたくないのに……。

こんな……こんな【セイクリッド・ギア神器】欲しくなかったのに……。

「……また、怖がられちゃう……」

新しく眷属になったという人たちもこんな時を停める力を持った僕を怖がらないわけがない……。

そんな思考をすればするほど、憂鬱な気持ち広がって――

「こりやスゲエな」

「皆停まってるなあ」

聞こえるはずのない、僕以外の声が聞こえてきた。

――心臓がバクバクとなっている。

――そんなはずない。

――僕以外は皆停まってるはず。

僕は恐る恐る声の聞こえた方へと視線を移した。

「やつほー僧侶くん。

ちよつと俺たちとオハナシしよーぜ？」

「そうそう！」

こんな機会だしオハナシしよーぜ！」

「ヒイイイっ?!?!」

な、な、な?!?! な、なんで……停まってないんです

かああああああああつっ?!?!?!」

2人の男の人たちは笑顔で僕に近づいてきた。

## 第61話

S i d e 士織

「な、な、なんで、とととと、停まってないんですか……っ?!」  
僧侶くんは俺と一誠を驚愕の表情で見つめていた。

「そりゃ、力の差だな。」

その【セイクリッド・ギア神器】だって格上の奴を停めることは出来ないっつーわけだ」

そう言つて、僧侶くんに近づいていく。

「ヒィヒィ!!」

しかし、悲鳴を上げて立ち上がった僧侶くんは俺たちから逃げるように走り出し、後方に置かれていた棺桶——ではなく段ボール箱の中にスッポリと入ってしまった。

俺はその様子に苦笑いを浮かべて一誠の方を見る。一誠の方も困つたような表情を浮かべていたが、それもすぐに消し、僧侶くんに歩み寄つて行く。

「どうも僧侶くん。」

俺の名前は兵藤一誠。そっちは？」

僧侶くんの入った段ボール箱の前でしゃがむと人懐っこい笑顔でそう言った。

すると、段ボール箱が少しだけ開いて頭が恐る恐るといった風に出てくる。

「……ギヤスパー・ウラデイですう」

「ギヤスパーって言うのか。」

これから宜しくな!」

手を差し出して握手を要求する一誠。

僧侶くん——ギヤスパーはその手を不思議そうに見つめた。

「……そ、その……」

「ん?どーしたんだ?」

「……ぼ、僕が……怖くないんですか……?」

その質問にきよとんとした顔になる一誠。そしてすぐに笑い出し



た。

「な、なんで笑うんですかっ!」

「いや、悪い悪い。」

そんな時間を停めるぐらいじゃ怖くねえよ。

なんなら土織の方が怖えよ」

「……なんか言ったか?一誠」

「……ほらな?」

ウインクしながらギヤスパーにそう言うと、そんな一誠を目を大きくして見つめるギヤスパー。

俺も一誠の横まで行ってしゃがむと、ギヤスパーに話しかける。

「時間停止っつーのは確かに強力な力だ。」

見たところコントロール出来てないみたいだし、そりゃ怖いよなギヤスパー。

——でも、怖がってばっかじゃ前に進めねえぞ?」

段ボール箱からちよこんと飛び出ているギヤスパーの頭を優しく撫でる。

それと同時に、ギヤスパーの停止の能力が解除され、リアス先輩たちも動き始めた。

「あれ?イツセーさんたちがいつの間にかあんな所に……」

「……何かされたのは確かだね」

アーシアとゼノヴィアは不思議な現象に首を傾げていた。

「……予想はしていたけど2人には効かないのね」

リアス先輩は俺たちの方を見ながらそう呟く。

そして、何のことかわかっていない様子のアーシアとゼノヴィアに向かつて説明するように口を開いた。

「その子は興奮すると、視界に映した全ての物体の時間を停止するところが出る【セイクリッド・ギア神器】を持っているのよ」

アーシアとゼノヴィアはその説明に目を見開いていた。



あの後、みんなでギヤスパーについての説明を聞いた。

——曰く、吸血鬼の中でも特殊なデイウオーカーと呼ばれる日中に活動出来る吸血鬼の血を引いている。

——曰く、類稀な才能を持ち、無意識のうちに【神器】の力を高め、将来的には「バランス・プレイヤー禁手」へ至る可能性を秘めている。

——曰く、強くなる力をコントロールすることが出来ず、暴走してしまうため今まで封じられていた。

終始段ボール箱の中に入っていたギヤスパーだったが、側面に開いた2つの穴からこちらを……と言うより俺と一誠を見つめていたのはどういう意味だろうか……？

——閑話休題。

何にせよ、あ後の話し合いで決まったのは——

「ほら、走れ。」

「デイウォーカーなら日中でも走り回れるだろう?」

「ヒイヒイイツ?」

「デュランダルを振り回しながら追いかけてこないでえええええつ!!」

「ほ、滅ぼされるううううつ!!」

—— 『特訓』……の筈なんだが……イジメられてるようにか見えねえな……。

夕方に差しかかった時間帯、旧校舎近くで男の娘な吸血鬼が聖劍使いに全力で追いかけていた。

傍から見たら完全に吸血鬼狩りです、ありがとうございます……つてか?」

「ゼノヴィアー程々にしとけよ?」

「はいっ!!」

「分かっていきます土織様っ!!」

そんなきらきらした目でこちらを見るんじゃない……様をつけるんじゃない……。

「頭が痛くなるのを感じる……。」

「……ギャーくん、ニンニク食べれば健康になれる」

「気がつけば小猫までもがニンニクを持ってゼノヴィアと共にギヤスパーを追いかけていた。」

「いやあああああん!」

「小猫ちゃんが僕をいじめるうううう!!」

「助けてえええええ! 土織せんぱああああいいいい!! イツセーせんぱああああいいいい!!」

「本当に危なくなったら助けてやるから頑張れギヤスパー」

「今がその時ですううううつ!!」

最早泣きべそをかきながら逃げ惑うギヤスパー。

……アイツ引きこもってた割には動けるんだな。

「おーおー、やってるやってる」

と、そこへ生徒会メンバーである匙が現れた。

「おっ、匙じゃねえか」

一誠はやって来た匙に向かって手を上げた。

「よー、兵藤。」

解禁された引きこもり眷属がいるとかって聞いてちよつと見に来たぜ」

「ああ、それならあそこだ。」

ゼノヴィアと小猫ちゃんに追いかけて回されてる子がそうだぜ」

「オイオイ……ゼノヴィア嬢、伝説の聖剣豪快に振り回してるぞ？良  
いのか、あれ……。」

……おっ！てか女の子か！しかも金髪美少女！

そう言っただけ嬉しそうに興奮する匙。そしてそれを可笑しそうに見る一誠。

「残念、だが男だ」

その一言を聞いた瞬間、匙のテンションがガタ落ちするのが目に見えた。ガツクリしてるし……。」

「そりゃ詐欺だろ……。」

てか、女装って誰かに見せたいためにするものじゃねえのか？

それで引きこもりって、矛盾が過ぎるだろ……難易度高いなあ

……」

「まあ、そう言っただけやるなよ。」

そういうのは本人の自由だろ？

それに似合ってるんだから別にいいじゃねえか。

ところで匙は何してんだよ？」

一誠の言葉に続いて俺は匙の格好を確認する。

上下をジャージに身を包み、軍手と花壇用の小さなシャベルを持っていた。

「見ての通りだぜ？」

学園の花壇の手入れをしてんだ。

1週間前から会長からの命令でな。

ほら、ここ最近学園の行事が多かっただろう？

それに今度魔王さま方も此処へいらっしやるし、学園を綺麗に見せないとな」

にかつと笑いながら匙は得意げに胸を張った。

「——へえ。魔王眷属の悪魔さん方は此処で集まってお遊戯してる訳か」

聞き覚えのある声が響く。

正直な所気配は掴んでいたため此処に来るだろうとは思っていたが……実際来られると面倒だという気持ち湧き出てくる。

「一体何のようだよ——アザゼル」

渋めの浴衣に袖を通した少々悪そうな雰囲気纏った男性——

——アザゼルに怠そうな声でそう言った。

「よー士織くアイツらは元気か？」

カラカラと笑うアザゼルに対して、俺と一誠以外が警戒の体制を取った。

ゼノヴィアはデュランダルを青眼に構え、アーシアが一誠の後ろに隠れる。小猫はファイティングポーズを取り、匙は右の手の甲にデフォルメされたトカゲの頭のようなものを出現させる。恐らくあれが匙の【セイクリッド・ギア神器】だな。

そしてギヤスパーだが……何処からともなく取り出した段ボール箱に入り込み俺の後ろに位置取っていた。

「し、士織さん、アザゼルって……」

「ああ……コイツのことだぜ？」

あの墮天使の総督のアザゼルだ」

俺の言葉はすぐに信用するらしく、匙は表情を引き締めて、戦闘の構えを取った。

アザゼルは皆の姿勢に苦笑いを浮かべて手を振った。

「やる気はねえよ。」

ほら、構えを解きな、下級悪魔くんたち。

此処に居る連中じゃ俺には「ああ？」……土織以外じゃ「土織……？」……土織さん以外には!! ってか土織! 俺をおちよくって遊びすぎだぞ!?

俺はこれでも墮天使の総督だぞ、そ・う・と・く!!」

声を荒らげて俺に怒鳴るアザゼル。

俺はそれを笑いながら「悪い悪い」と言っただけ受け流す。

「……まったく! 話がズレたじゃねえか。」

とにかく、今日此処に来たのは散歩がてら悪魔さんの所の見学だ。

聖魔剣使いはいるか? ちよつと見に来たんだが……」

「祐奈なら居ないぞ残念だったな無駄足だ帰れ」

「……おい土織、なんか俺への当たりが辛辣じゃねえか?」

「つい最近何処ぞの墮天使の幹部から家族に手を出されたからな」

「あく……その件に関しては本当に申し訳ない。俺の管理不届きだ……」

そう言っただけで頭を下げるアザゼル。

……まあ、アザゼルが全て悪いってわけじゃねえし、謝罪も貰ったことだから許すとするか……。

「頭を上げろよアザゼル。」

別にそこまで怒ってるわけじゃねえし、謝罪してくれるならそれで十分だ」

「そう言っただけで貰えると助かる。」

お前とことを構えるなんて死んでもゴメンだからな。

俺としちや友好的な関係を築いて行きたい所だ」

アザゼルはそう言い、笑いながら頭を上げた。

まったく……切り替えが早いというか、軽いというか……。

ついついため息がこぼれる。

「それにしてもヴァンパイアの特訓か？」

確か【停止世界の邪眼】持ちだったな」  
フォービトウン・パロールビュ

アザゼルはギヤスパアの入っている段ボール箱を見つめ、顎に手を当てながらそう言った。

「ああ。」

一応特訓方法の候補としてはその匙が持つてる【黒い龍脈】アフソープション・ラインを使って【神器】の余分な力を吸い取ってもらいながらコントロールを覚えるってのがひとつだ。

後は一誠——赤龍帝の血を飲ませるってのが手っ取り早い方法だな」

「へえ？」

土織、お前神器そっち関係もいけるクチか？」

アザゼルが嬉しそうに俺の方へ寄ってくる。

肩を組もうとしていたのだろうアザゼルの腕を叩き落として腕を組む。

「少しはな。」

ただアザゼルほどマニアじゃねえよ」

「ちえ……面白くねえな……。」

せつかくこの手の話ができるやつを見つけたと思ったのによ」

明らかに残念そうな表情を浮かべて肩をすくめるアザゼル。

「……今度少しだけ付き合ってやるから他の奴に付きまとうなよ？」

俺が溜息を吐きながら渋々そう言うと、アザゼルはニヤリと笑った。

「言ったな？ 言いやがったな？」

絶対だぞ？ もし破ったらストーカーもびっくりなほど絡みに行つてやるからな？」

「ああもう！」

分かったから帰れよアザゼル！

お前の目的は終わったんだろ?!

「ああ、むしろ今日は得しかしてねえな!

あく今日は気分がいい! シェムハザでも誘って酒でも飲むか!!」  
アザゼルは御機嫌に、スキップしながら帰っていった。

「……あく……なんて言うかお疲れ様?」

「……さんきゆな一誠。」

今日は嫌に疲れちまったよ……」

今日何度目か分からない溜息を吐き出す。

「と、取り敢えず特訓手伝いましょうか? 士織さん」

「ああ……そうしてもらえると助かる。」

今度お礼に花壇の仕事手伝うから……」

「い、いや、いいですよ!」

これは俺の善意っすから!」

テンパリ気味の匙だったが、もうこの際どうでも良かった。

——この後、匙の【黒い龍脈】を使ってギヤスパーの特訓を再開させたのであった。



## 第62話

どうも、兵藤士織だ。

ギヤスパーとの特訓が開始されて次の日の夜。

その日は一誠とギヤスパーが悪魔稼業をしに行くということでのしの時間を潰して旧校舎の方へ向かうと、ギヤスパーの部屋の前でおろおろしている一誠と、謝っているリアス先輩の姿が視界に入った。

「ギヤスパー、出てきてちょうだい。」

無理してイツセーに連れて行かせた私が悪かったわ……。

イツセーとならあなたも安心して仕事が出来るのではないかと  
思ったのだけれど……」

『ふええええええええええんっつ！』

ギヤスパーの部屋からは大音量の泣き声が響く。

「何事だ？リアス先輩。」

ギヤスパーに何かあったみたいだけど」

「士織……。」

その……仕事で停めてしまったようなのよ……」

「……なるほど」

俺はふと、リアス先輩から聞いた話を思い出した。

ギヤスパーは名門の吸血鬼を父に持つが、母が人間で妾だったため、純血ではなかった。

純血主義者の多い悪魔以上に純血ではない者を軽視し、侮蔑する  
という吸血鬼たちは、例え親兄弟であったとしても扱い方は差別的な  
だという。

ギヤスパーは腹違いの兄弟たちに子供の頃からいじめられ、それか  
ら逃げるために行った人間界でもバケモノとして扱われて居場所が  
なかったらしい。

しかし、ギヤスパーは類稀なる吸血鬼としての才能と、人間として  
の恩恵——特殊な【セイクリッド・ギア神器】を両方兼ね備えて生まれてきてし

まったため、望まなくともその力は歳を取るにつれて大きくなってし  
まった……。

誰かと仲良くしようとしても、ちよつとした拍子で【神器】が発動してしまい、相手を停めてしまう。

「……ねえ、イツセー、士織。」

もし時を止められたら、どんな気分？」

リアス先輩は表情に影を落としつつそう言う。

「俺は何ともないさ」

「右に同じくです」

「……っ!？」

……怖くはないの……?」

俺と一誠の言葉に目を見開くリアス先輩。

「……まあ、相手によるがな。」

ただ……ギヤスパーのような優しい奴ならいくら時間を止められようとも思わねえんだよ」

「そうですよ。」

ギヤスパーだつて悪気があつてやってるんじゃない。

それなのに怖いだなんて——思うはずありません」

俺と一誠はこう考えるが……ギヤスパーに止められた連中は『怖い』と思つてしまつただろう。

不信が1度でも心に生まれてしまえば、付き合うのはほぼ不可能。そしてギヤスパーを恐怖するようになってしまう。

ギヤスパーはそれを永遠と体験し、孤独を味わつただろう……。

それではあまりに……悲惨である。

これが【神器】を得る人間が味わう不幸なのだろうか……。

『ぼ、僕は……こんな神器いらない……っ!』

だ、だつて、皆停まつちゃうんだ!

怖がつて嫌がつて気味がられて!

僕だつて嫌なのに!!

と、友達を、な、仲間を停めたくないのに……っ!

大切な人が停まった顔を見るのは……1人しかいない停まった世界は……もう嫌だ……』

悲痛なギヤスパアの叫び。

家からも追い出され、人も吸血鬼もどちらの世界でも生きられないギヤスパアは路頭に迷い、そして——ヴァンパイアハンターに狙われて命を落とした。そこをリアス先輩に拾われたらしい。

しかし、強力な力を有するギヤスパアを当時のリアス先輩では使いこなすことが出来ず、上から封印を命じられていた。

——が、今のリアス先輩なら使いこなせると判断され、封印を解除し現在に至る。

「困ったわ……」。

この子をまた引きこもらせてしまうなんて……。

……『王』<sup>キング</sup>失格ね……」

落ち込むリアス先輩。

俺はそんなリアス先輩の姿にため息を吐いて口を開いた。

「リアス先輩、この後サーゼクスたちとの打ち合わせがあるんだろ？」

「……ええ。」

でももう少しだけ時間を延ばしてもらおうわ。

先にギヤスパアを——」

「ギヤスパアの事は俺と一誠に任せろ。」

——可愛い後輩のために一肌脱いでやるよ」

「……土織……」

リアス先輩は俺の申し出に異を唱えずにただ名前を呟く。

俺はそんなリアス先輩の肩を優しく叩いて言葉をかける。

「心配すんな。」

俺と一誠が男同士の会話で立ち直らせるから」

「……わかったわ。」

土織、イツセー、お願いできるかしら？」

「任せとけ」

「はいー」

リアス先輩は微笑みを浮かべて頷いた。

そして、名残惜しそうに、心配そうに、ギヤスパアの部屋の扉を一瞥し、この場を後にしていく。

見送りを終えた後、俺と一誠はアイコンタクトを交わすと扉の前にゆっくりと座り込んだ。

「……なあ、ギヤスパア。」

怖いかな？ 【神器】と……俺たちが」

一誠は早速扉越しに話しかける。

『……違ってます。』

先輩たちが怖いんじゃないんです』

ぽつりぽつりとギヤスパアは口を開き始めた。

「なら何が怖いんだ？」

俺の問いかけにしばしの沈黙の後に深呼吸をするのがわかった。

『僕は……暴走して誰かを傷付けるのが……怖いです……』

「そうか……」

『大切な友達で……先輩で……仲間で……』

今まで1人だった僕に居場所をくれた……そんな皆だから……。

もし、傷つけちゃったら……皆また離れていっちゃう……。

……独りは嫌なんです……』

すすり泣く声が聞こえてくる。

……いつも1人でいて、外に出たがらなかったのはそういうこと

だったのか……。

「なあ、ギヤスパア。」

俺はお前のことを嫌わないぞ。

先輩としてずっと面倒見てやる。

……まあ、悪魔としてはお前の方が先輩だろうけどさ。でも、実生

活なら俺の方が先輩だから、任せろ」

「俺もだぜ？ ギヤスパア。」

一誠に比べればお前なんか可愛いもんだ。

時間を停める？——だからどうした。

むしろ俺を停められるようになったら褒めてやるよ」

一誠と俺の言葉を聞いたギヤスパア。

そして、今まで閉ざされていた扉が鈍い音を立てながら少しだけ開かれた。

「……そんな風に言ってくれたのは先輩たちが初めてです……」

泣き腫らした目をしながらギヤスパーが顔を出す。

「なあ、ギヤスパー。」

俺の血、飲んでみるか？

士織が言ってたし……もしかしたら【神器】をコントロールできるようになるかもしれないだろ？」

一誠の言葉に、しかしギヤスパーは首を横に振る。

「……怖いんです。」

生きた者から直接血を吸うのが。

ただでさえ、自分の力に振り回されてるのに……これ以上何かが高まったりしたら……僕は……僕は……」

俺はその場から立ち上がり、少しだけ出てきているギヤスパーの頭を撫でた。

「怖いなら怖いでいい。」

お前の力はそれくらい認識でいいんだよ。

ただ——怖いからと言って向き合えないのは駄目だ」

「……先輩……でも……僕は……」

俯き口籠るギヤスパー。

俺はそんなギヤスパーに優しく言葉を投げかける。

「自信がないんだらう？」

「……はい」

小さい、しかしはつきりとした言葉。

「安心しろギヤスパー。」

お前はお前が考えているよりも——強い」

「えっ……？」

目を見開いて顔を上げるギヤスパー。

俺の言葉が信じられないという表情を浮かべていた。

「お前の幼い頃の話はリアス先輩から聞いた。

……普通ならあんな環境で育ったのなら性格が歪んじまうだろう

ぜ？

「だけど、お前は——『優しさ』を忘れなかった。

「芯の通った真つ直ぐなその『優しさ』……俺は強いと思うぞ？」

「ほんぽん、と優しくギヤスパアの頭を叩く。すると、ギヤスパアの瞳が1粒、また1粒と涙が伝い始める。

「お、おい土織?!

「ギヤスパア泣いちゃったぞ?!」

「ギヤスパアの涙に慌て出す一誠。

「俺はそれを一睨みすることで黙らせ、再びギヤスパアへと視線を向けた。

「辛かったよな……苦しかったよな……誰も——自分のことを評価してくれないってのは」

「うう……っ……うう……うう……っ」

「『1人』と『独り』は違う。

「……お前は長い間『1人』を味わったからこそ、本当の意味での『独り』を怖がってんだよな……」

「ふうう……っ……うう……うう……っ」

「安心しろギヤスパア。

「お前にはもう絶対に離れていかない——【仲間】俺たちがいるぞ」

「うわあああああん……っ!!」

「遂に声を上げて泣き始めたギヤスパア。

「俺に抱きつき、憑き物が落ちたかのように大泣きする。

「そんなギヤスパアの頭を何度も、何度も、優しく撫でた。

「なあ……土織」

「ん？」

「俺の強くなる理由……増えたかもしんない」

「……甘ちゃんだな」

「土織に言われたくねーよ」

「俺たちは微笑みあった。



しばらくの間泣いていたギヤスパーだったが、今となっては恥ずかしそうにダンボールの中に入っていた。

「……落ち着いたか？ギヤスパー」

「は、はい……お見苦しい姿を見せてしまってすみません……」

頭をひよっこりと出してそういうギヤスパーの姿は違和感どころか似合ってさえいる。

「気にすんな。」

泣くのは悪いことじゃねえしな」

「そうだぞギヤスパー」

俺と一誠が微笑みながら言えば、ギヤスパーは照れたように視線を泳がせた。

「んじやまあ……時間もある事だし、ボーイズトークでもするか！」

「い、いいですね！」

僕、その……友達と話すのは初めてです……っ！」

ギヤスパーは嬉しそうにそう言うと、器用にもダンボールに入ったままこちらに近づいてくる。

「ボーイズトーク……?？」

絵面的にはガールズトークしてる中に男が一人混ざってる感じが……」

「……なんか言ったか？一誠」

「めっそーもございませーん!!」

余計なことを言おうとした一誠に圧力を掛けてやればまるで壊れた人形のように首を横に振る。

そして、苦笑いを浮かべたままの一誠は俺とギヤスパーの方へ来ると、3人で円を作るように座った。

「んで？何について話すんだ？」

「決めなくていいだろ。」

自由に話して互いを知るって大事だぜ？」  
「じゃ、じゃあ可愛いお洋服のお話を……！」

———そうやって、俺たち3人は夜通しいろんな話をしたの  
だった……。



## 第63話

どうも、兵藤士織だ。

ギヤスパーと語り明かした日から数日経った休日。

俺は目的もなく街をぶらついていた。

初めは一誠でも誘って組手でもしようとしていたのだが、今日は朱乃先輩に呼び出されていたらしく断られてしまった。

仕方無しに街に出てきたものの、如何せんやる事が無い。

何か退屈を紛らわす事が無いものかと周りを見渡していると――

「士織見つけた」

――何故か俺よりも少し高い位置に顔があるオフィスと目が合う。

俺は冷静に視線をほんの少しだけ下に向けると、そこにあっただのは見間違えるまでもなく、見知った少女の顔だった。

「……何してんの？夜鶴」

俺がそう言えば、ヤハハと苦笑混じりに笑う夜鶴。

「ちよつと食べ歩きしてたらこの娘に話しかけられちゃつてね？」

『空腹……土織探す。手伝つて？』つていきなり言われた時はキョトンとなつてしまつたよ……」

「へえ……良く夜鶴が俺のこと知つてゐるつて分かつたな？」

夜鶴に肩車された状態のオーフィスの頭を優しく撫でながらそう言つと、オーフィスは気持ちよさそうに目を細めて口を開いた。

「夜鶴、土織と似てる」

「そゝか？」

全く似てないと思うんだが……ああ、女顔つてのは似てるな」  
「違つう。」

オーラが、似てる」

オーフィスの言葉に夜鶴がぴくりと反応する。

「流石は【無限の龍神】ウロボロス・ドラゴンと言つたところかな？」

まあ確かにそう言われれば俺と土織くんは似てるよ」

「そうなのか？」

俺が首を傾げれば、夜鶴はにこりと笑つて口を開く。

「此処で話すのもなんだから何処か落ち着けるところに行こうか？」

「それもそうだな……」

「土織、我空腹」

夜鶴の肩から俺の肩に飛び移つてきたオーフィスは俺の髪を引っ張りながらさういう。

「わかつたわかつた！

だから髪を引っ張るのは止めてくれオーフィス！

……オーフィスはお腹が空いてるみたいだし、近くの公園にでも行かねえか？」

ちようど美味しいホットドッグを売つてる所があるんだ」

「ふふふ……土織くんに任せるとよ」

微笑んだ夜鶴はさう言つて、俺とオーフィスを暖かい目で見ていた。

「なら……早速行くか」

「れつづー」

上機嫌なオフィスの掛け声とともに俺達は公園を目指した。



公園に到着した俺達はまず初めにホットドッグを買うことにした。後回しにしたら空腹のオフィスの頭に食べられてしまいそうだったからである。

「お、いらっしやい嬢ちゃん。」

今日はお友達と一緒にかい？」

ホットドッグを売る車の中から俺を見つけたのか、店主である筋肉隆々のスキンヘッドな男性が顔を出す。

「どーもオツサン。元気そうだな。」

それと、俺は嬢ちゃんじゃないって言ってるだろ？」

「ガハハハハ！」

悪い悪い！

今日もサービスすつから許してくれや嬢ちゃん」

「……わざとだな？わざとなんだろ？」

いつになったらその嬢ちゃんっての止めんだよオツサン」

「そうだな……そのオツサン呼びを止めたらだな」

「そうだな……じゃあ——」

俺は一瞬悩んだ後に、咳払いをした。

「――オジサマ♪」

柔らかな笑みを浮かべて明るいトーンでそう言ってあげた。

「おいこら止めろ。」

限りなく似合ってるが止めろ。

俺がアレな人みたいに聞こえるだろうが」

スキンヘッドの頭をぼりぼりと掻きながら、なんとも言えないような表情を浮かべる。

「えつと……注文してもいいですか?」

俺とオツサンがふざけあっていると、夜鶴は苦笑いを浮かべながら話しかけた。

「おお、悪いな。」

嬢ちゃん達の友達ってならサービスするぜ?

ウチのお得意様だからな!」

にかつと笑うオツサン。

夜鶴もそんなオツサンの人柄の良さが分かったのか柔らかな笑みを浮かべていた。

「オススメってなんですか?」

「ウチはなんでもオススメだぜ?」

「えつと……」

オツサンの答えに困ったような表情を浮かべる夜鶴。

なんでもオススメと言われると、オススメを聞いた方からすれば困ってしまう。

「そんなの悩むに決まってるんだろ!」

あく……俺はいつもので夜鶴は……まあ、初回だしスタンダードなヤツで。

んで、オーフィスは……」

「コレがいい」

そう言ってオーフィスが指を指すメニューはこの店でも最大のボリュームを誇るホットドッグだ。

1 m程もの大きさのパンに千切りのキャベツと自家製の長大ソー

セージを挟み、ケチャップではなく特性の甘辛いソースを掛けたそれは空腹のオーフィスには輝いて見えたのだろう。

「……んじやコレをひとつ」

「……いいのか？ 嬢ちゃん。」

こりや食べ盛りの男やらが喰う用に作ったヤツだぞ？

そのちつこい嬢ちゃんが喰うにはデカすぎると思うんだが……」

流石のオツサンも真顔で止めにかかるがオーフィスなら大丈夫だろうと俺はそれを否定する。

「大丈夫大丈夫。」

最悪残ったら俺が喰うし」

「……まあ、無理にとは言わねえ、喰えなかつたら俺んここに持つてきな。」

分割して持ち帰れるようにしてやるからよ」

そう言ったオツサンは俺達の注文した品を作り始める。

「ほら、そのベンチにでも座つときな。」

出来上がったら持つてやるからよ」

「サンキューオツサン。」

お代は此処に置いとくぜー」

お代用のトレイにお金を置いた俺たちはオツサンの言うようにベンチに向かった。

「あの人優しい人みたいだね」

「優しいというかフレンドリーというか……悪い人じゃねえってのは確かだ。」

……まあ、オツサンの前では言わねえけどな」

そう言つて笑えば、夜鶴も釣られたようにクスクスと笑い出す。

オーフィスは俺の膝の上に座つて御機嫌の様子だ。

「……————そんで？」

本題に入ろうぜ？ 夜鶴」

俺と夜鶴が似ている、オーラ云々の話を聞こうと俺は切り出す。

「そうだね……簡単に言ってしまうば——俺も元は転生者なんだ」

「なっ?!」

サラツとそういった夜鶴だったが、しかし内容が内容。

俺はオーフィスが膝に乗っているのも忘れて立ち上がってしまう。

「か、神様が元転生者?!」

何の冗談だよそりや……!」

「ふふふ……驚くのも無理はないね……」。

まあ、何はともあれ、君と俺が似ているというのはそういう訳さ。

1度死を経験した魂が再びリセットされること無く新たな輪廻の輪に乗った……その過程で特殊なカタチに変化するんだよ。

……オーフィスちゃんはその変化した魂から発せられる特殊なオーラを見たんだろうね」

「あく……どっから突っ込むべきか……」。

……いや、深く考えるだけ無駄か。

まあ、要するにだ、俺と夜鶴の魂のカタチが似てるってことと、夜鶴は転生者だけど神様になったってことだよな?」

「おそろしく簡単に纏めたね……」。

だけど……うん、その考えは的を射てるよ」

簡潔に纏められた言葉に夜鶴は頷きそう言う。

俺はどきりとベンチに腰を下ろして溜息を吐く。

「あく……にしても夜鶴はすげえな。

一般人から転生して更には神様にジヨブチェンジ?

なんつーサクセスストーリーだよ」

「確かに文字に起こしてみたらとんでもない話だね……」

俺と夜鶴は顔を見合わせて笑った。

別に深く考える必要は無い。

俺は俺で、夜鶴は夜鶴。

元がどうであれ、今の関係を築けたのだし、驚くことはあるにせよ拒絶することなどない。

俺が何となくスッキリした気分で背伸びをしていると、突然何か

飛び付いてきた衝撃の後に俺の頭に鈍い痛みが走った。

「つてえ?!」

「な、なんだなんだ?!」

「……土織、我、頭打った。痛い」

見てみればオーフェイスがジトーつとした目を俺に向けながら手刀を落としたのがわかる。

「ああ……俺がいきなり立ったから落ちちまったのか……悪いなオーフェイス」

ぶつけたであろう部分を優しく撫でてそう言う。撫でられているオーフェイスは目を細めて気持ちよさそうだ。

「……ん。」

「もつと、撫でて……」

撫でる手に擦り寄るオーフェイス。

俺はそんなオーフェイスに愛しさを感じながら優しく撫で続ける。

「——待たせたなあ!」

注文の品が出来たぜ、嬢ちゃん」

オーフェイスを撫で続けてしばらく経っただろう頃に、オッサンの元気な声が響く。

その手には俺達の注文した品があった。

「ほら、嬢ちゃんはいつものでそっちの娘にはスタンダードな。

そんでちっこい嬢ちゃんは……これだよな」

俺の手に渡されたのはやや大ぶりのホットドッグ。

レタスやトマトなどの野菜と太めのソーセージが挟まれ、ピリ辛ソースのかかったものだ。

夜鶴に手渡されたのは俺のパンよりもやや小ぶりなパンにレタスとソーセージが挟まれ、マスタードとケチャップのかかった、いたっ

てシンプルなもの。

そして、オーフィス渡されたのは下手をすれば身の丈サイズのホットドッグ……。

目をキラキラさせながらそのホットドッグを見つめていた。

「ほら、コイツはサービスだ。」

嬢ちゃんはいつも通りコーラでいいよな？

そっちの娘には勝手なイメージだがコーヒーを、ちっこい嬢ちゃんにはオレンジジュースを用意したが……良かったか？」

「いつも悪いなオッサン」

「ありがとうございます。」

俺はコーヒーが好きですから有難いです」

「我、感謝」

「がハハハハ！」

先行投資だ先行投資！

これからも鼻肩にしてくれよ？」

んじや、ゆつくり喰ってくれと言ったオッサンは戻って行った。

「取り敢えず腹ごしらえしようぜ？」

温かいうちに喰った方が美味しいな」

「そうだね。」

それじゃあ……頂きます」

「頂きます」

夜鶴とオーフィスは行儀良く手を合わせて、ホットドッグを口に運んだ。

「これは……美味しいね」

1口齧って咀嚼した夜鶴は驚いたようにそう口にする。

「だろ？」

此処なら俺も安心してオススメできるからな」

行儀が少々悪いが、手早く頂きますと呟いた俺はいつものようにホットドッグにかぶりついた。

ジューシーなソーセージと新鮮な野菜、そしてそれを纏めるピリ辛のソースが美味しい。



オーフィスの方を見てみれば口いっぱい頬張って幸せそうな表情を浮かべているのが見えた。

「オーフィス、そんなに慌てて食べなくてもいいんだぞ?」

俺の言葉に反応して、オーフィスはコクコクと首を縦に振るが、食べる速度は遅くならない。

「喉につまらせるなよ?」

そう言いつつ、頬が緩むのを感じた。



「さて、俺はそろそろ行くよ」

ホットドッグを食べ終えて、公園でのんびりと雑談をしていると、夜鶴がそう言い出す。

「帰るのか?」

「ん〜……いや、街を少し散歩して帰るとするよ」

「今日は悪かったな……オーフィスに付き合わせちまって」

「ふふふ……気にしなくていいよ?」

結果、楽しい1日だったしね?」

柔らかな笑みを浮かべる夜鶴はお腹がいっぱいになって寝てしまったオーフィスの頭を優しく撫でた。

「それじゃあ……また会おう、土織くん」

ベンチから立ち上がり、夜鶴はそう言うのと歩んでいく。

——が、何かを思い出したかのように立ち止まると、こちらを振り返った。

「おっと……危ない危ない……伝え忘れるところだったよ……」

「ん?何かあったのか?」

「君に伝えておこうと思ってたことがあったんだ。

実はね?土織くん」

夜鶴は満面の笑みで口を開く。

「———この世界にもう一人、転生させたからね？」

## 第64話

S i d e 土織

「さて、行くわよ」  
オカルト研究部の部室に集まるいつものメンバー。リアス先輩の言葉に頷いた。

周りを見れば少々緊張気味の面々。

そう、今日は3大勢力の会談の日である。

会場となるのは、駒王学園新校舎にある職員会議室らしく、既に各陣営のトップたちは新校舎の休憩室で待機しているようだ。

そして、この学園全体に強固な結界がはられ、誰も中へ入れない状態となっていた。

つまり、この会談が終わるまで外にも出られない。

俺はリアス先輩たちが続いて部室を後にしようとする。

「ぶ、部長！み、皆さああああん！」

部室に置かれた段ボール。そこにすっぽりとはまっているギヤスパアの弱々しい声が響く。

「ギヤスパア、今日の会談は大事なものだから、時間停止の神器をまだ使いこなせていないあなたは参加できないの……ごめんなさいね……？」

リアス先輩は柔らかな声音で告げる。

残念ながら、未だギヤスパアは神器を使いこなすまでには至らなかったのだ。

俺はギヤスパアの側まで行くと、頭を優しく撫でる。

「ギヤスパア、大人しく待ってるよ？」

「は、はい、土織先輩……」

「部室には一誠が自分のゲームを持ってきてくれるからそれで遊んでもいいし、俺が作ったお菓子もあるから食べていい。

リラックスして待ってろ」

「はい……わかりましたあ……」

既にリラックスしているのか、表情が柔らかなギヤスパアは俺の言

葉にそう言っただけ。

「……むう……羨ましい……」

祐奈はギヤスパーを見ながらそう呟く。

俺はそんな祐奈に微笑まじさを感じながら立ち上がると、祐奈に近づき頭を撫でる。

「ふえっ?!」

し、士織くんっ!?

いきなりどうしたのっ!?

「祐奈がギヤスパーを見て羨ましいなんて言ってたからな。

撫でて欲しかったんだろ?」

「き、聞こえてたの……?」

顔を赤くしながら恥ずかしそうにうつむく祐奈。しかし、撫でてい  
る手は拒否せず、むしろ自分から手の方へと擦り寄ってきていた。

「いちやついてるとこ悪いけど……置いてかれるぞ?」

そんな俺と祐奈に、一誠は苦笑混じりにそう言ってくる。

確かに今はこんなことをしてる場合ではない。

「おお、悪いな一誠。

んじや、行くか祐奈」

「う、うん」

若干残念そうな表情の祐奈であったが、それもすぐに無くなる。

やはり緊張しているのだろう。

「行ってくるぜ、ギヤスパー」

「はい………いつてらっしやいですう………」

ギヤスパーのそんな言葉に送り出され、俺たちはリアス先輩たちの  
あとを追った。



会議室の扉前に立ち、深呼吸をするリアス先輩。ふう、とひとつ息

を吐くと扉をノックした。

「失礼します」

中に入っていくリアス先輩たちに行き中に入ると、そこには――

特別に用意させたという豪華絢爛なテーブル。そこを囲むように見知った人物たちが全員、真剣な面持ちで腰を下ろしていた。静寂な空間の中、ピリピリとした空気が充ちている。

――悪魔側。

サーゼクス・ルシファー、セラフオール・レヴィアタン。

そして給仕係としてグレイフィア・ルキフグスの姿。

――天使側。

金色の翼の女性と白い翼の少女。  
おそらく金色の翼を持つ女性が一誠から聞いたミカエルだろう。

――墮天使側。

6対12枚の黒い翼を生やしたアザゼル、【白龍皇】ヴァーリ。

3大勢力のお偉いさんが揃いぶみしていた。

「私の妹と、その眷属たち、そして……土織くんだ」

サーゼクスが他の陣営にリアス先輩、眷属、俺を紹介する。

「先日のコカビエル襲撃での活躍した面々だよ」

「報告は受けています。改めてお礼を申し上げます。

それと――」

ミカエルはリアス先輩に礼を言うと、俺の方へ視線を向けた。

「あなたが土織様――ごほん、土織さんですね？」

初めまして、私はミカエル。天使の長をしています」

頭を深く下げて自己紹介をするミカエル。

一瞬間き間違えたか俺の名前に『様』とついた気がしたが……気のせいだろう。

「俺は兵藤士織だどうぞよろしく」

簡単な言葉を並べ、会釈を返す。

「あく……俺のところのゴカビエルが迷惑かけちまったみたいですねんかったな」

あまり悪びれたような様子は感じさせないものの、謝罪の言葉は述べるアザゼル。

「その席に座りなさい。」

士織くんはすまないがそちらの席に……」

サーゼクスの指示を受け、グレイフィアがリアス先輩たち、そして俺を席に促す。

俺だけ1人で座ることとなったが、それは気にしないこととし、全員が席についたのを合図にサーゼクスが口を開いた。

「全員が揃ったところで、この会談の前提条件をひとつ……。」

——此処にいる者たちは、最重要禁則事項である『神の不在』を認知している」

『……………』

しんとしたその場の空気は変わらず。つまりは全員が『神の不在』を認知しているということだろう。

「……では、それを認知しているとして、話を進める」  
こうして3大勢力の会談が始まった——。

「……………さて、リアス。」

そろそろ、先日的事件について話してもらおうかな」

悪魔、天使、墮天使、それぞれの簡単な話し合いは順調に進み、次はあのコカビエルとの戦いについての話に切り替わるらしい。

指名されたリアス先輩は勿論のこと、支取蒼那、朱乃先輩が立ち上がり、コカビエル戦の一部始終を話し始める。

緊張気味のリアス先輩だったがリアス先輩は冷静に淡々と自分の体験した事件の概要を伝えていく。

報告を受けている各陣営のトップは溜息を吐くものもいれば、顔を顰める者、笑う者など、個々違った反応を見せていた。

「——以上が、私、リアス・グレモリーと、その眷属悪魔、そして兵藤士織が関与した事件の報告です」

全てを語り終えたりアス先輩はサーゼクスの「ご苦労、座つてくれたまえ」という言葉で着席し、胸をなで下ろした。

「ありがとう、リアスちゃん☆」

セラフオールもリアス先輩にウインクを送っている。

「さて、アザゼル。」

この報告を受けて、墮天使総督の意見を聞きたい」

サーゼクスの問いに全員の視線がアザゼルへと集中する。

アザゼルはそんな視線どうってことないと言わんばかりに不敵な笑みを浮かべて口を開き始めた。

「先日の事件は我が墮天使中枢組織『神の子を見張る者』の幹部コカビエルが、他の幹部及び総督の俺に黙って、単独で起こしたものだ。

奴の処理はうちの『白龍皇』が行う予定だったが……兵藤士織の奴がやつちまった上に、全く溶けない氷で閉じ込めちまったからな。今は墮天使領の一角で封印処置して監視も付けてる。

まあ、その辺の説明はこの間転送した資料に詳しく書いていただろう？それが全部だよ」

ミカエルは嘆息しながら言う。

「説明としては最低の部類ですが——あなた個人が我々と大きな事を起こしたくないという話は知っています。

それに関しては本当なのでしょう？」

「ああ……。」

俺は戦争なんて興味はねえ。

コカビエルも俺のことをこきおろしていたと、そっちの報告でもあつたじゃねえか」

アザゼルはそう言つて瞳を閉じた。

戦争に消極的で、神器にしか興味の無い者————的を射た評価だと俺は思う。

今度はサーゼクスがアザゼルに問い掛ける。

「アザゼル、ひとつ訊きたいのだが、どうしてここ数十年、セイクリッド・ギア 神器の所有者をかき集めている？」

最初は人間たちを集めて戦力増強を凶っているのかと思つていた。天界か我々に戦争を仕掛けるのではないかとも危惧していたのだが……」

「そう、いつまで経つてもあなたは戦争を仕掛けてなど来なかつた。

『パニング・ドラゴン 白い龍』を手に入れたと聞いた時には、強い警戒心を抱いたものです」

ミカエルの意見もサーゼクスと同様の様子だった。

2人の意見を聞いて、アザゼルは苦笑する。

「セイクリッド・ギア 神器 研究のためさ。」

なんなら、一部研究資料もお前たちに送つてやろうか？

……何より研究してるからつてそれで戦争なんざ仕掛けねえよ。戦に今更興味なんてないからな。

俺は今の戦をしていない世界に十分過ぎるくらいに満足している。

部下に『人間の政治にまで手を出すな』と強く言い渡しているぐら  
いだぜ？

宗教に介入するつもりはねえし、悪魔の業界にも影響を及ぼすつもりもねえ。

————つたく、俺の信用は三すくみの中でも最低かよ……」

「それはそうだ」

「そうですね」

「その通りね☆」



「当たり前だろ」

サーゼクス、ミカエル、セラフォル、俺の音が揃って、アザゼルに向けられた。

アザゼルはそれを聞き、面白くなさそうに耳をかつぽじっていた。  
「チツ……」

神や先代ルシファーよりもマシかと思ってたが、お前らもお前らで面倒臭い奴らだ。

こここそ研究するのもこれ以上性に合わねえか。

あー……わかったよ。

——なら、和平を結ぼうぜ。

元々そのつもりもあったんだろ？ 天使も悪魔もよ」

アザゼルから発せられた『和平』という言葉に各陣営は少しの間、驚きに包まれていた。

表情から読み取るに、まさかアザゼルから提示されるとは思っていなかったようだ……。

しばしの後、アザゼルの言葉に驚きを見せていたミカエルが微笑む。

「ええ、私も悪魔側とグリゴりに和平を持ちかける予定でした。

このままこれ以上三すくみの関係が続けていても今の世界の害にしかありません。

天使の長の私が言うのも何ですが————戦争の大本である『神』と『魔王』は消滅したのですから」

アザゼルはミカエルの言葉に噴き出して笑う。

「ハッ！あの堅物ミカエルさまが言うようになったじゃねえか。

あれほど『神、神、神、神、神！』とか言ってたのによ」

「……失ったモノは大きい。

けれど、いないものをいつまでも求めても仕方ありません。  
人間たちを導くのが、我らの使命。

神の子らをこれからも見守り、先導していくのが一番大事なことだと私たちセラフのメンバーの意見も一致しています」

「……おいおい、今の発言は『堕ちる』ぜ？———と思ったが、『シ

ステム』はお前らが受け継いだんだったな。

いい世界になったもんだ。

俺らが『堕ちた』頃とはまるで違う」

アザゼルとミカエルの言い合いに、サーゼクスも同意見を口に出す。

「我らも同じだ。

魔王がなくなるとも種を存続するため、悪魔も先に進まねばならない。戦争は我らも望むべきものではない。

それに——次また戦争をすれば、悪魔は滅ぶ」

サーゼクスの言葉にアザゼルも頷く。

「そう。

次の戦争をすれば、三すくみは今度こそ共倒れだ。

そして、人間界にも影響を大きく及ぼし、世界は終わる。

俺らはもう、戦争なんて起こせない」

先程までふざけた様子だったアザゼルが一転して真剣な面持ちとなる。

「神がいなく世界は間違いだと思っただか？」

神がいなく世界は衰退すると思っただか？」

……残念ながらそうじゃなかった。

俺もお前たちも今こうやって元気に生きている」

アザゼルは腕を広げながら、言った。

「——神がいなくても世界は回るのさ」

その言葉はこの場にいる者の心に大きく、強く刻まれた。

その後、会談は今後の戦力云々の話へと移っていき、現在の兵力、各陣営との対応、これからの勢力図などと話し合っている。

初めに此処へ来た時の様なピリピリとした空気はなくなり、若干の心の余裕ができた様な雰囲気を感じる。

「——と、こんなところだろうか？」

サーゼクスの一言で、各陣営のトップたちは大きく息を吐いた。どうやら一通りの重要な話が終わったようだ。

おおよそ、会談が始まって1時間程。

俺はやることもなくただ無言でこの場にいたためか長く感じ、暇を持て余すこととなってしまった。

ただ、白龍皇であるヴァーリがずっとこちらを見てくるのは、面倒以外の何者でもなかったのは確かだろう。

「さて、そろそろ俺たち以外に、世界に影響を及ぼしそうな奴らへ意見を訊こうか。」

無敵の二天龍さまたちによ。

まずはヴァーリ、お前は世界をどうしたい？」

アザゼルの問い掛けに白龍皇ヴァーリは笑む。

「オレは強い奴と戦えればそれでイイ」

何とも『らしい』答えだが……強い奴という言葉の時にこちらを見つめるのはやめて欲しい。

「じゃあ、赤龍帝、お前はどうか？」

一誠はそう言われると息を吐いて答えた。

「俺は俺の目標を達成したいです」

「目標？なんなんだそれは？」

「それは……」

一瞬、こちらを見て言葉に詰まる一誠。

しかし、何かを思いついたかのように表情を変えたと口を開く。

「俺の目標、それは——最高の赤龍帝になることです。」

才能も無い、馬鹿な俺だけ……そんな俺でも相棒となら強くなれる。

そして、俺には大切な人たちがいます。

それを護れるように強くなって、皆で笑って過ごさす。

それが俺の望みです」

一誠は覚悟を決めた表情でそう言い切った。

そんな一誠にアザゼルはにやりと笑い、頷いた。

「イイじゃねえか！」

おいサーゼクス。

お前、こいつが自分の陣営にいて良かったじゃねえか。

こりやかなりの逸材だぜ？」

「ああ。」

彼は私も注目している人物のひとりさ」

サーゼクスも暖かな目をして、そう言った。当の一誠は何処か恥ずかしそうに視線を泳がせていた。

「んじや、二天龍の意見も聞いたことだし——もうひとつの本题にでも入ろうぜ？」

アザゼルは柏手を打つとそう言い出す。

先程息を吐いたばかりの各陣営のトップたちは再び表情を引き締めめた。

「ゴカビエル戦での兵藤士織の【神器】セイクリッド・ギアについての話だ」

そうして、俺の方に視線が集まる。

やはり、そのことについてを此処で語らないといけないのか……。

……まあ、全てを語るつもりは毛頭ないが……。

「確か……神器の名称は【精霊天使】。

フェアリー・エンジェル  
フエアリー・エンジェル

そしてその禁手【現界せし天魔の奇跡】。

バランス・ブレイカー  
デイセント・オブ・セファイロト

更にそこからの派生であろう『神威霊装・神番』……。

ヤハウエ・エロヒム  
ヤハウエ・エロヒム

……単刀直入に聞く。

士織、こりや一体なんだ？」

アザゼルは与えられた情報を羅列し、神妙な表情で俺にそう言った。

「ただの【神器】さ。

セイクリッド・ギア  
セイクリッド・ギア

ただ、他のとはちよつと違う特別製だけだな」

「で、では、『ヤハウエ』という名を持つ意味は?!」

俺の言葉のすぐ後に、ミカエルは身を乗り出してそう言った。  
やっぱりそこが一番気になるのか……。

「さあ?なんでだろうな?」

案外、神の意識でも封印されてるんじやねえか?」

俺がにやりと笑ってやれば、ミカエルは何とも言えない表情を浮かべて俺を見つめた。

「……何にせよこりや最早【神滅具】ロンギヌスに分類するべき神器だぞ……。

あの溶けない氷だけじゃねえだろ？その神器の能力は」  
鋭い眼光でこちらを見つめる。

流星はアザゼルと言ったところだろうか、俺の神器を直接見た訳では無いのにそこまで見抜くとは……。

「へえ……よくわかったなアザゼル。」

まあ、少なくともアザゼルが思ってる数は能力があるぜ？」

「マジかよ……規格外にも程があんだろ……！」

言葉では悩ましげにそう言いつつも、アザゼルの瞳は輝いていた。神器オタクの面が顔を出してきたな……。

「……ひとつはつきりさせておきたいことがあるんだが……良いかな？士織くん」

俺がぼやかしながら質問に答えていた時、サーゼクスが口を開いた。

「君は今後どうするんだい？」

「どうする……ねえ？」

「此処には各陣営のトップが揃っている。

君の今後によつて各々の行動が変わってくるんだ。

だから、此処ではつきりさせてくれないかい？」

何処か掴ませないそんな笑みを浮かべてそういうサーゼクス。

何とも回りくどく、わかりにくい言い回しである。

「そんなわかりにくく言うんじゃないやなくてさ。もつとわかりやすく行こうぜ？サーゼクス。」

——俺がどの陣営につくかが知りたいんだろ？」

「……君にはかなわないね……。」

そうだよ。私たちはそれを知りたい」

その言葉に、アザゼルもミカエルも真剣な表情を浮かべる。

3人とも、やはりそれが知りたかったようだ。

確かに、これだけの力を持つ【神器】を宿した俺が何処の陣営につ

くのかによつてはパワーバランスが大きく傾いてしまう。

そのため、俺のついた陣営は他の陣営にその分何かを対価として渡さなければならぬ。和平を結ぼうとしているのだからそういうことだろう。

しかし、俺はそれについては前々から決めていた。

「俺は――」

意見を言うために口を開いた途端いつか感じたあの感覚が襲ってくる。

――時間が、停まったのだ。

## 第65話

S i d e 土織

「これは……」

「……チッ！やっぱり来やがったか」

アザゼルは忌々しそうに悪態を吐く。

「動ける奴は返事をしろ。」

「現状を確認しときたい」

そういつて周りを見回すアザゼル。

俺も誰が動けるのかを確認していった。

各陣営のトップは言わずもがな、停止しておらず、オカルト研究部のメンバーではリアス先輩、祐奈、ゼノヴィア、そして一誠か……。

「眷属で動けるのは私とイツセー、祐奈にゼノヴィアだけよ」

アザゼルの言葉にいち早く反応したのはリアス先輩。

冷静な判断が出来ているようだ。

「イツセーは赤龍帝、祐奈は禁<sup>バランス・ブレイカー</sup>手に至り、イレギュラーな聖魔剣を持つているから無事なのかしら……」

ゼノヴィアは直前でデュランダルを発動させたのね？」

リアス先輩の言うように、ゼノヴィアは聖なるオーラを放ち続けるデュランダルを持っていた。

ちようど、しまうところだったらしく、空間の歪みに聖剣を戻している。

「時間停止の感覚はなんとなく体で覚えた。」

——停止させられる寸前にデュランダルの力を盾に使えば防げると思ったのだが……正解だったな」

にやりと笑ってそういうゼノヴィアは何処か得意気であった。

「おい、アザゼル。」

「これはやっぱり……」

俺が呼べば、アザゼルは頷き、口を開く。

「ああ……こりやテロだ。」

外見でみる……面倒だったらありやしねえ……」

職員会議室の窓の方を顎で示し頭を搔く。

それと同時に、窓の外で閃光が広がり、建物も微妙な揺れが襲う。「攻撃を受けているのさ。」

何時の時代も勢力と勢力が和平を結ぼうとすると、それを何処ぞの集まりが嫌がって邪魔しようとするのさ……」

窓の外に視線を移せば、そこには無数の人影があった。

黒いローブを着込んだ魔術師のような連中がこちらへ魔力弾を撃ち込んでいるのだ。

「一体誰ですか？あいつら」

一誠が眉をひそめながらアザゼルに問う。

アザゼルは不敵な笑みを浮かべながら一誠に近づくと、肩を組んで口を開く。

「ありや所謂『魔法使い』って連中だな。」

悪魔の魔力体系を伝説の魔術師『マーリン・アンブロジウス』が独自に解釈して再構築したのが【魔術】・【魔法】の類だ。

……放たれてる魔術の威力から察するに一人一人が中級悪魔クラスの魔力を持つてやがりそうだ。

……まあ、今は俺とサーゼクスとミカエルで強力無比な防壁結界を展開してるからどうってことはねえけどな？」

一誠の肩をパンパンと叩きながら笑うアザゼル。一誠の表情は何とも言えないものになっている。

「あく……じゃあ、さっきの時間停止は？」

「それは力を譲渡できる神器か魔術かでギヤスパアの神器を強制的に禁手状態にしたんだろうよ……。」

……つたく……イラつかせるのが上手い奴らだ」

俺がアザゼルに代わって言えば、一誠も表情に怒りを浮かばせる。

「ギヤスパアは旧校舎でテロリストの武器にされている……。」

何処で私の眷属の情報を得たのかしら……。」

しかも、大事な会談をつけ狙う戦力にされるなんて……ッ！

これ程、侮辱される行為はないわっ！、」

リアス先輩は紅いオーラをほとばしらせながら怒りを主張してい



た。

「ちなみにこの校舎を外で取り囲んでいた墮天使、天使、悪魔の軍勢も全員停止させられてるようだぜ？」

まったく……リアス・グレモリーの眷属は末恐ろしい奴らばかりだな」

アザゼルがリアス先輩の肩に手をポンと置くが、リアス先輩は容赦なくその手を払い除ける。

払い除けられたアザゼルは肩をすくめながらその手を窓へ向ける。すると、外の空に無数の光の槍が現れ、アザゼルが何でもないように手を下ろせば、その光の槍が雨となって地上の魔術師たちに降り注いだ。

防御障壁を展開していたものの、そんなものなどなんなく貫き、魔術師たちを一掃するアザゼルの光の槍。

「うわ……すげえ……」

その光景に一誠は声を上げる。

しかし、アザゼルにとってこんなことは朝飯前よりも楽な仕事だろう。

「この学園は結界に囲われている。

それにも関わらず、こいつらは結界内に出現してきた。

つまり、この敷地内に外の転移用魔法陣とゲートを繋げている奴がいるってことだ。

フォービトウン・バロール・ヒュー

どちらにしても【停止世界の邪眼】の効果をこれ以上高められると、俺たちも誰か1人ぐらい停止させられるかもしんねえ。

この猛攻撃で此処に俺達を留まらせて、時間を停めた瞬間校舎ごと屠るつもりだろう。

あちらは相当な兵力を割いてきているようだしな……」

アザゼルの視線の先、校庭の各所で魔法陣が出現し、怪しく輝き始める。

魔法陣から現れるのは先程アザゼルにやられた魔術師集団と同じ格好の者たち。

塵芥のように性懲りもなく現れるとは……。

頭が痛くなるのを感じた。

「さつきからこれの繰り返しだ……」

俺たちが倒しても倒しても次の奴らが現れる。

しかし、タイミングといい、テロの方法といい、こちらの内情に詳しい奴がいるのかもしれない。

案外此処に裏切り者がいるのかもな？」

呆れるようにアザゼルは息を吐く。

しかし、アザゼルの言い方からは大方予想がついているように聞こえる。

「取り敢えず、この結界を解いちまえば人間界に被害を出すかもしれないし、俺は相手の親玉が出てくるのを待ってんだ。

しばらくここで籠城でもしてりや痺れを切らして顔出すかもしれないえだろ？」

早く黒幕の顔を拝みたいもんだぜ……」

余裕の表情を浮かべてそう語るアザゼル。

「……というように、我々首脳陣は下調べ中で動けない。

だが、まずはテロリストの活動拠点となっている旧校舎からギヤスパークンを奪い返すのが目的となるね」

サーゼクスはこれからのことを口にする。

つまりは現状一番危険なものを先に返してもらおうということか。

「お兄さま、私が行きますわ。

ギヤスパークンは私の眷属です。

私が責任を持って奪い返してきます！」

強い意志を瞳に乗せてリアス先輩が進言する。その様子にサーゼクスはふっと笑う。

「言うと思っていたよ。

妹の性格ぐらい把握している。

——しかし、旧校舎までどう行く？」

この新校舎の外は魔術師だらけだ。

勿論、通常の転移も魔法に阻まれる」

「旧校舎————根城の部室に未使用で残りの駒である【戦車】<sup>ルーク</sup>を保

管していますわ」

「なるほど『キヤスリング』か。」

普通に奪い返しに行くのは彼らも予想しているだろうから、これは相手の虚をつける。何手か先んじえるね」

『キヤスリング』———確か【王】<sup>キング</sup>と【戦車】<sup>ルーク</sup>の位置を瞬間的に入れ替わらせる技だったはず。

なるほど、リアス先輩はそれを利用して旧校舎に行こうという考えか。

「よし。」

だが、1人で行くのは無謀だね。

———グレイファイア、『キヤスリング』を私の魔力方式で複数人転移可能にできるかな？」

「そうですね、此処では簡易術式でしか展開できそうにありませんが、お嬢さまともうひとりなら転移可能かと」

「リアスと誰かか……」

サーゼクスはもう1人を誰にするか悩んでいるようだった。

「サーゼクス。」

もう1人なら一誠を連れていけ。

———「良いな？一誠」

俺がそう言つて、一誠の方を向く。

一誠は一瞬驚いた表情を浮かべたが、直ぐににやりと笑つて頷く。「勿論だ！」

俺が行きます！ギヤスパーは俺の大切な後輩ですから！」

その言葉を聞いたサーゼクスは満足気に頷くとアザゼルに視線を向けた。

「アザゼル、噂では神器の力を一定時間自由に扱える研究をしていたね？」

「ああ、そうだが、それがどうした？」

「ギヤスパークんの力を抑えられるだろうか？」

「……………」

サーゼクスの問いにアザゼルは黙り込んだ。

しかし、アザゼルは懐を探り出すと一誠に向けて何かを投げた。「おっと……」

「そいつは神器をある程度抑える力を持つ腕輪だ。例のハーフヴァンパイアを見つけたらそいつを付けてやれ。多少なりとも力の制御に役立つだろう」

「オツケーです！」

ギヤスパーに会ったら直ぐに渡しますす！」

にかつと無邪気に笑う一誠。

にやりと不敵な笑みを浮かべるアザゼル。

……こいつら案外相性もいいのかもな……。

「アザゼル、神器の研究は何処までいっているのでしょうか？」

ミカエルが嘆息しながらアザゼルに訊くが、アザゼルは笑ったまま詳しくは語らない。

「イイじゃねえか。」

神器を作り出した神がいらないんだぜ？

少しでも神器を解明できる奴が居た方がいいだろ？

お前だつてしらないことだらけだと耳にしたぜ？」

「研究しているのがあなただというのが問題だとは思いますが……」

額に手を当てて頭を横に振るミカエル。

その様子を見てケラケラと笑うアザゼルはまるで悪戯っ子のようにだった。

「お嬢さま、しばしお待ちください」

「急いでね、グレイファイア」

ふと、視線を向ければ、リアス先輩はグレイファイアに特殊な術式とやらを額から受けているのが見える。

「おい、ヴァーリ」

「なんだ？アザゼル」

「お前は外で敵の目を引け。」

白龍皇が前に出てくれば、野郎どもの作戦も多少は乱せるだろうさ。

それに何か動くかもしれない」

「……オレが此処にいることはあつちも承知なんじゃないかな？」

「だとしても『キャスリング』で赤龍帝が中央に転移してくるとまでは予想していいだろう。」

注意を引きつけるのは多少なりとも効果はあるさ」

「ハア……。」

旧校舎のテロリストごと、その問題になっているハーフヴァンパイアを吹き飛ばした方が早いんじゃないかな？」

ヴァーリは何処か面倒くさそうに言うが、アザゼルは苦笑いを浮かべて首を横に振る。

「和平を結ぼうって時にそれはやめろ。」

最悪の場合、それにするかもしれないが、魔王の身内を助けられるのなら、助けた方がこれからのためになるのさ」

「了解」

アザゼルの意見にヴァーリは息を吐きながらも同意する。

そして、ヴァーリはその背から光の翼を展開した。

あれが【白龍皇の光翼】か……。

「バランス・ブレイク【禁手化】」

『V a n i s h i n g D r a g o n B a l a n c e B r e a k  
e r  
!!!』

音声 that 響いた後、ヴァーリの体を真っ白なオーラが覆う。

光が止んだ時、ヴァーリの体は白い輝きを放つ全身鎧プレート・アーマーに包まれていた。

ヴァーリはこちらを一瞥した後、にやりと笑い、マスクが顔を覆う。そして、職員会議室の窓を開き、空へ飛び出していった。

——刹那。

激しい爆音と爆風が巻き起こる。

見れば、魔術師の群れが白い鎧を着込んだヴァーリに蹂躪されていた。

夜の空に光の軌跡を描きながら舞うように蹴散らし、一騎当千の様相を見せていた。

ちらりと一誠の方を見てみれば、その様子を真剣な表情をして見つめている。

自分のライバルの様子を焼き付けようとしているようだ。

「アザゼル。先程の話の続きだ」

不意に、サーゼクスの声が響く。

「あー……なんだ？」

「神器を集めて、何をしようとした？」

【神滅具<sup>ロンギヌス</sup>】の所有者も何名か集めたそうだね？

神もないのに『神殺し』でもするつもりだったのかな？

アザゼルはその問いに首を横に振った。

「——備えていたのさ」

「備えていた？」

……戦争を否定したばかりで不安を煽る物言いです」

ミカエルはアザゼルの物言いに呆れるように言う。

「言ったろ？」

お前ら相手に戦争はしない。

こちらからも戦争を仕掛けない。

——ただ、自衛の手段は必要だ。

何回も言うがお前らの攻撃に備えているわけじゃねえぞ？」

「では？」

アザゼルは突然真面目な表情になり、呟く。

「カオス・ブリゲード  
【禍の団】」

「カオス、ブリゲード……？」

サーゼクスもその存在を知らなかったらしく、眉根を寄せていた。

「組織名と背景が判明したのはつい最近だが、それ以前からうちの

副総督シエムハザが不審な行為をする集団に目をつけていたのさ。

そいつらは3大勢力の危険分子を集めているそうだと……。

中には【禁手】に至った神器持ちの人間も含まれている。

……最悪なことに【神滅具】ロンギヌス持ちも数人確認してる……」

「その者たちの……目的は……?」

「破壊と混乱。単純だろう?」

この世界の『平和』が気に入らないのさ。

——テロリストだ。

しかも最大級にタチが悪い……」

「……【神滅具】ロンギヌス持ちがいる時点で最悪ですね……」

ミカエルは忌々しそうに呟く。

神をも滅ぼす神器……それを持った者が複数人いるという事実には、

サーゼクスも頭を抱える。

「しかもだ、組織の頭は『赤い龍』と『白い龍』の他に強大で凶

悪なドラゴンだ……」

『——ッ!?!』

アザゼルの言葉に俺以外の全員が絶句していた。……いや、一誠は

若干わかっていないようだ。

「……そうか、彼が動いたのか。」

ウロボロス・ドラゴン【無限の龍神】オーフィス——。

……神が恐れたドラゴン。

この世界が出来上がった時から最強の座に君臨し続けている者

……」

サーゼクスは険しい表情を浮かべてそう言い、この場にいる他の皆

は表情を曇らせていた。

俺は内情について触り程度だが知っており、その『強大で凶悪なド

ラゴン』と接点もあるため、何とも言えず、ただ苦笑いを浮かべる。

「あく……サーゼクス?」

その件についてだが——」

俺が口を開こうとした瞬間、職員会議室の床に魔法陣が浮かび上がった。

『……そう！』

あのオーフェイスが【禍の団】カオス・ブリゲードのトップなのです！』  
何処からともなく響く声にサーゼクスは舌打ちをして眉をひそめる。

「そうか。そう来るわけか！

今回の黒幕は……ッ！

グレイファイア！

リアスとイツセーくんを早く飛ばせ！」

「はいっ！」

グレイファイアはリアス先輩と一誠を職員会議室の隅に行くよう急かせると、小さな魔法陣を床に展開させた。

「お嬢さま、ご武運を」

「ちよ、ちよつとグレイファイアっ?!お兄さま！」

転送の光が広がり始めまさに転送直前、一誠がこちらを真っ直ぐ見つめてくる。

「士織！

こっちは任せとけ！」

俺は何を言うわけでもなく、一誠に背を向けて後ろ手を振った。

「……まあ、頑張れや」

俺の眩きが一誠に聞こえたかは分からない。

——しかし、後ろで一誠が笑ったような、そんな気配を感じた。



## 第66話

S i d e 土織

リアス先輩と一誠が転移してすぐ、俺は溜息を吐く。  
職員会議室の床に現れた魔法陣。

それを見て、3大勢力のトップの面々は驚愕の表情を浮かべていた。

——いや、アザゼルは笑い、サーゼクスは苦虫を噛み潰したような表情だ。

「——レヴィアタンの魔法陣」

サーゼクスの呟きにゼノヴィアが反応する。

「ヴァチカンの書物で見たことがあるぞ……」

——アレは『旧魔王レヴィアタン』の魔法陣だ……」

魔法陣から現れたのは1人の女性。

胸元が大きく開き、深いスリットの入った何とも露出の多いドレスに身を包む、さながら痴女のようなだ。

「ごきげんよう、現魔王のサーゼクス殿？」

不敵な物言い、サーゼクスへの挨拶を口にする痴女。

「先代レヴィアタンの血を引く者……カテレア・レヴィアタン。

これは一体どういうことだ？」

痴女——カテレア・レヴィアタンは挑戦的な笑みを浮かべて言う。

「旧魔王派の者達はほとんどが『禍カオス・ブリゲードの団』に協力する事に決めました」

「……新旧魔王サイドの確執が本格的になったわけか……」

あらら……悪魔も大変なこった……」

アザゼルは他人事のように笑い頭を搔く。

「カテレア……それは……言葉通りと受け取っていいのだな……？」

悲しそうな表情を浮かべて言葉を吐き出すサーゼクス。

しかし、そんなサーゼクスをよそにカテレア・レヴィアタンは誇らしげに口を開く。

「サーゼクス、その通りです。」

今回のこの攻撃も我々が受け持っております」

「——クーデターか」

『現魔王派』に対する『旧魔王派』の反乱。

それをこの和平を願う会談出るところを見ると余程『現魔王派』が気に入らないらしい。

「……カテレア、何故なんだ……？」

「サーゼクス、それは簡単なことです。」

今日この会談のまさに逆の考えに至っただけなのですよ。

神と先代魔王がいないのならば、この世界を変革すべきだと、私たちはそう結論付けました」

至った思考は真逆の、『戦乱』を望むもの。サーゼクスの顔は更に曇る。

「オーフィスの野郎はそこまで未来を見ているのか？

……到底そうとは思えないんだがな……」

アザゼルの問いかけにカテレア・レヴィアタンは溜息を吐く。

「そんなはずがないでしょう？」

オーフィスには、力の象徴として力を集結する為の役を担って貰っているだけ。

言わばお飾りのトップです。

彼の力を借り、一度世界を滅ぼし、もう一度構築します。

——新世界を私たちが取り仕切るのです」

そう言って、高笑いを始めるカテレア・レヴィアタン。

—— 嗚呼、五月蠅い。

—— 嗚呼、煩わしい。

—— 嗚呼、なんて——

「――馬鹿馬鹿しいんだ」

俺の眩きを境に、その場に静寂が広がる。

先程まで高笑いをしていたカテレア・レヴィアタンですら、口をつぐんでいた。

「……お前ら……こぞつて世界の変革の真似事か？」

カテレア・レヴィアタンは見下した視線を向けてイラついた様子で口を開く。

「……ふん！」

たかが人間が……。

そうです。それが一番正しいのですよ！

だいたいこの世界は――」

「腐敗している？人間が愚か？地球が減ぶ？

――おいおいおい……今時そんなの流行らねえよ」

俺は吐き捨てるように言う。

カテレア・レヴィアタンは目元を引き攣らせていた。

「そもそも、オーフィスがお前たちに力を貸した理由を覚えていねえのか？」

「ふん！そんなもの――」

『静寂を得るためグレートレッドを倒すのを手伝って欲しい』

「な……ッ?!」

な、何故それを人間ごときが!？」

『――ッ?!』

カテレア・レヴィアタンを含め、その場の全員が俺の言葉に驚愕の表情を浮かべる。

「士織くん……君は……」

「別に俺は『禍の団』の一員じゃねえから安心してろサーゼクス」

その一言で、サーゼクスたちはほっとした表情になる。

「……お前まで『禍の団』所属とか言い出したらもうどうしようもねえところだったわ……」

アザゼルはそう言いつつ、冷や汗を浮かべていた。

周りをちらりと見たところ皆その言葉に賛同しているのを見る限り俺の認識はそのようなものらしい。

俺は溜息を吐きながら、再びカテレア・レヴィアタンの方へ視線を向けた。

「……お前らみたいな奴らに利用されるなんて……オフィスが可哀想だ……」

憐れむような視線でそう言えば、カテレア・レヴィアタンは激怒し、全身から魔力を迸らせる。

「黙って聞いていれば……ッ！」

たかが人間ごときが調子に乗るなッ!!」

「……サーゼクス、ミカエル、アザゼル。」

お前らは手を出すなよ？

俺は今——怒ってんだ」

後輩を悪用されたのには勿論怒っている。

しかし、それよりも何より許し難いのは——オフィスをこんなことのために利用したということだ。

「……カテレア、降るつもりは……ないんだね……？」

「何を当然のことを。」

此処までしておいて投降など……有り得ません」

「……そうか。残念だ」

そういったサーゼクスは目を伏せた。

以前聞いた『甘すぎる』という言葉。

今ここでその実例を見たような気がした。

俺は窓際に手を向けて、ただ魔力を放出した。

それだけで窓際全域は吹き飛び、風穴が開く。

「来いよ旧魔王レヴィアタンの末裔、カテレア・レヴィアタン。」

お前は俺の逆鱗に触れた——万死に値する」

「ふん！」

良いでしょう。

格の違いというものを見せてあげます」

そうして、俺とカテレア・レヴィアタンは外へと飛び出した。

Side Out



Side 三人称

外へと飛び出した土織とカテレア。

カテレアは空を飛び、土織は構えることもなく地上でカテレアを見据えていた。

「空も飛べないとは、やはり人間は劣等種ですね！」

「うつせえなあ……いいから来いよ」

土織の言葉に嘲笑を止め、明らかにイラついた表情を浮かべたカテレアは魔力弾を放つ。

流石は旧魔王レヴィアタンの末裔というべきだろうか。その数は多く、土織の視界を埋めていた。

「……はあ……」

しかし、土織はそれを見つめて溜息を吐く。

「……これならコカビエルの方が良かったかもな」

そう呟きながら、顔の前に魔法陣を出現させる。

「散れ……【炎神の怒号】」

——溢れるは黒き焰。

全てを飲み込み全てを焼き尽くす神の焰はカテレアの魔力弾と拮抗することなどなく、ただ一直線にカテレアへと向かった。

「な……ッ?!」

驚愕の表情のカテレア。

慌てて防御障壁を展開するがそれも意味をなさない。

一瞬の拮抗すら許さず、神をも焼き尽くす黒き焔はカテレア・レ  
ヴィアタンという存在ごと消し去ってしまった。

「……………」

なんとも味気なく、恐ろしく早い決着。

土織は冷めた目をしていた。

「はぁ……………」

吐き出すのは溜息。

周りを軽く探るが敵の気配はない。

土織はアザゼルたちのいる校舎の方へ方向を変えて歩き始める。

「……………うわぁ〜強そ〜なヒトお〜」

「……………ツツ?!」

何処か間延びしたその声は、突然、土織の背後から聞こえた。

その時の土織の表情は――過去最高の驚愕の色を浮かべ、狼狽しているように見えた――。

Side Out



Side 一誠

気がついた時、そこは既に部室だった。

あのドタバタの中、転送は成功したようだ。

……ただし――。

「――ッ！」

まさか、此处に転移してくるとは！

「悪魔めッ！」

部室内は悪趣味なローブを着た魔術師の集団で占拠されていた。

まさに敵地のど真ん中に放り出された。

「ぶ、ぶちよー！っせーせんぱい！」

ギヤスパーの声が聞こえる。

そちらへ視線を向ければ、ベソをかきながら椅子に縄でくくりつけられているギヤスパーの姿が視界に入った。

一応の無事を確認し、リアス部長もほっとした表情を浮かべる。

「ギヤスパー！」

良かったわ……無事だったのね……」

「ごめん……なさい……」。

ぼく、またみなさんに……めいわくを……っ！」

ぼろぼろと涙をこぼすギヤスパー。

利用されたことを悔いているのだろう。

「気にするなギヤスパー！」

お前が悪いんじゃない。

だから泣くな！

向き合うって、決めただろ！」

俺がそういつて励ますと、ギヤスパーは涙をこぼしながら無理矢理笑った。

そんなギヤスパーについて微笑んでしまう。

——が、次の瞬間、俺の目の前でギヤスパーが女の魔術師に殴られた。

「愚かね、あなたたち。

こんな危なっかしいハーフヴァンパイアを普通に使うなんて。

旧魔王派の言う通りね。

グレモリー一族は情愛が深くて力に溢れている割には頭が悪いって」

魔術師はリアス部長を侮蔑的な視線で見ている。

「さつきとこんなヴァンパイア、洗脳して道具として有効活用すればいいのに……。」

敵対している堕天使の領域にこの子を放り込んで神器を暴走させれば幹部の1人でも退けたかもしれないわ。

それをしないのは何？もしかして、仲良しこよしで下僕を扱う気なの？」

ギヤスパーが殴られ、【王】<sup>キング</sup>を侮蔑され、憤怒の感情が溢れかけるが、止まる。

今ここで俺がなすべきは怒るだけではないのだから。

——私は自分の眷属を大切にするわ」

リアス部長の冷静な言葉。

それが気に入らなかったのか、魔術師が小さな魔力弾をリアス部長目掛けて放つ。

俺はそれを【赤龍帝の籠手】を出現させて防ぐ。

「チッ！」



……生意気な口ね。

それに悪魔のくせに美しいのも気に入らないわグレモリーの娘」嫉妬にまみれたどうしようもない言葉に失笑が浮かぶのを止められない。

魔術師はギヤスパアの首元に刃を突きつける。

「……動くところの子が死ぬわちよつと遊びましょう？」

———そのボウヤ。

もし勝手に動いたら……分かってるわね？」

脅しのつもりか、殺気を向けてくるがそれは貧相なものだった。

「まずはその綺麗な顔……ボコボコにしてあげる」

そういつて、魔力弾を連続して放つ魔術師。

リアス部長は躲す素振りもなくただその攻撃を受けた。

「ぶちよーっ!!」

ギヤスパアの叫びが反響する。

「あははははー！

いい気味ね！グレモリーの娘え!!」

リアス部長の顔は魔力弾の直撃により血にまみれている———  
———はずだった。

リアス部長の顔の前には俺が出現させたアスカロン。

魔力弾はこれに当たっていたのだ。

「———もう、そろそろうるさいわ」

『Explosion!!』

俺は倍加3回分の力を解放する。

そして魔力を握り締め、床へと叩きつけた。

そうすれば、ギヤスパアの近くにいた魔術師に向けて地面から鋭く尖った木材が飛び出す。

「なっ?!」

魔術師はその現象に驚いたのか、ギヤスパアから離れて躲す。

俺はその隙にギヤスパアに近づき、自らの人差し指の皮膚を噛み

切った。

「ギヤスパーもう、逃げないよな」

「いつせー、せんぱい……」

指からは俺の血が滴る。

俺はギヤスパーが拘束されている縄を切り、口を開く。

「――飲めよ。」

最強のドラゴンを宿してる俺の血だ。

これからはお前も一緒に戦うんだろ？」

ギヤスパーは強い眼差しでその言葉に頷くと、俺の人差し指を咥えた。

その瞬間、この部室内の空気が一気に変化する。

悪寒とも言い得るそれはしかし敵意によるものではなかった。

『ふふ……ふふふ……ふふふふ……』

何処か艶やかな笑い声。

それとともに不気味な鳴き声が聞こえてくる。天井近くを無数の赤い瞳をしたコウモリが、飛んでいたのだ。

コウモリたちは一斉に魔術師たちに襲いかかる。

魔術師たちはそれを迎撃しようとするが、いきなり大きく大勢を崩して不発に終わってしまった。

――魔術師たちの影から黒い手がいくつも伸びていたのだ。

「吸血鬼の能力か！」

「くらえ……っ！」

影へ魔力弾を撃ち出すが、影の手は何事もなく霧散し、そして再び形を作る。

その間にもコウモリは魔術師の体を包み込んで、各部位へと噛み付いた。

「血を吸うつもりか?！」

「いや、私たちの魔力も吸い出しているぞー！」

明らかに苦戦する魔術師たち。

もう、俺の出番はなさそうだ。

リアス部長もその様子に何処か嬉しげである。

「くう……ッ！」

ならば……こうするだけよー！」

魔術師たちは影を相手にするのを諦め、こちらに魔力弾を放つてきた。

全て直撃コースであるが、しかし、俺とリアス部長は動かない。なにせ魔力弾は——空中で停止してしまったのだから。

『無駄ですよお。』

あなた達の動き、攻撃、すべては僕がみてるんですからあ……」  
部室内に響き渡るギヤスパーの声。

その声に恐怖する魔術師たち。

『次はあ……あなた達自身を停めますよお……』

無数のコウモリたちが赤い瞳を光らせる。

すると、全ての魔術師たちはぴくりとも動かなくなる。

——つまり、『停止』したのだ。

無数のコウモリたちが集まり、形を作ると、それはギヤスパーへと変化する。

「お疲れ様、ギヤスパー。」

よく頑張っ——」

俺の言葉を言うよりも早く、ギヤスパーが俺に体当たりを食らわせる。

あまりにも不意打ち過ぎて俺は尻餅をついてしまった。

「せんぱあい……」

ギヤスパーから聞こえたのは甘えるような声。ギヤスパーの様子がえらくおかしい。

擦り寄るように、ギヤスパーは俺と密着する。

「ど、どうした？ギヤスパー」

「せんぱあい……」

せんぱいの血、美味しすぎますよお……」

語尾にハートマークが付いていそうなほどに甘ったるい声を上げるギヤスパー。

どことなく体が柔らかく感じるのは気のせいだろうか。

「知ってますかあ？せんぱあい……。」

吸血鬼が吸血した時に満たされるのはあ……『食欲』だけじゃないってことお……。」

ギヤスパーは舌舐りしながらさういう。

「ごく稀になんですけどお……『性欲』が刺激されることがあ……あるんですう……。」

「性欲?!」

俺はつい、ギヤスパーの言葉で声を上げてしまう。

「ふふふ……せんぱあい……。」

俺の首筋に近づくと、ギヤスパーは口を開く。血を吸われるかと思っただが、次の瞬間感じた感覚はぬるりとしたものだった。

「お、おいギヤスパー！舐めるな!!」

「慌てるせんぱいもお……イイですう……。」

「だあーっ!!」

俺は男色の気はねえって!」

ギヤスパーの肩を掴んで俺から引き離させる。

ギヤスパーは一瞬きよとした表情を浮かべたが、その表情は直ぐに怪しげな笑みに変わった。

「大丈夫ですよお……だつてえ……今は女の子ですからあ……。」

「……は?」

今度は俺がきよとした表情を浮かべただろう。

ギヤスパーは俺の手を掴むと自分の胸へと誘導する。

「……んっ……。」

小さいけどお……ある、でしょお……?」

手のひらに伝わるのは柔らかな感触。

俺は手を直ぐにギヤスパーから離れた。

「お、お前……男……女……あれ……??」

「ふふふ……僕はあ……半端者なんですよお……。」

純粹なあ……吸血鬼でも、人間でも、悪魔でもなくてえ……男で

もお……女でもないんですう……」

俺にはそれが悲しげな眩きに聞こえた。

ギヤスパーは一瞬影の差した表情を浮かべていたように見えたが、それが気のせいだと感じてしまう程に、再び表情を艶やかに緩める。

「せんぱあいいい……」

再び首元に近づいてきたギヤスパーは今度は甘噛みしてくる。

歯は当たっているものの、皮膚を破る程の強さではない。

「……きもちいいいこと……しましように……？」

淫靡なギヤスパーの眩き。

頭が真っ白になる感覚が俺を襲う。

俺はギヤスパーの眩きに答えるように、口を開く。

「——正気に戻れボケナス」

「きゃん……っ?!」

ギヤスパーの首筋へ手刀を落として一瞬で意識を刈り取る。

ぐったりとするギヤスパーを抱えて、部室のソファーに寝かせた。

「あつぶねえ……なんだ今の……一瞬……」

——このままギヤスパーの言葉通りにしてもいいかも、などと考えてしまった。

『相棒、それは吸血鬼の【魅了】の力だ』

突然、ドライブグから声が上がる。

「魅了」？」

『ああ。』

全ての吸血鬼が扱える訳では無いが、一応強者に分類されるであろう相棒を「魅了」させたところを見ると、このヴァンパイアの……娘？はかなりの力を有してるのだろうよ』

「そうか……」

『全く……俺が「魅了」を打ち消さなければ今頃相棒はあのヴァンパイアの娘と生殖行為をおこなっていたかもしれないのだぞ？』

ドライブグは溜息を吐くようにそう言った。

「ま、マジか……すまんドライブグ。」

助かった……凄く助かった……」

俺は驚きの事実に関心臓がバクバクとなる。

自らを落ち着かせるために深呼吸を行う。

「あら？なんでギヤスパーが寝ているのかしら？」

その時、リアス部長の声が聞こえた。

それはまるで、今までのことがわからないかのような言葉だった。

「あれ……？」

リアス部長、見てたんじゃないんですか？」

「何のことかしら？」

イツセーがギヤスパーに血を飲ませたところまでは覚えているのだけれど……」

頭の上にハテナマークを浮かべるリアス部長。

つまり、リアス部長はギヤスパーに停止させられていたということになる。

「まあいいわ。」

何より……ギヤスパーが無事ならそれで……」

気絶しているギヤスパーに近づくと、愛おしそうに頭を撫でるリアス部長。

……それにしてもギヤスパーは何故リアス部長まで停めたのだろ  
うか……。

『邪魔されなくなかったのだろう。』

相棒との生殖行為をな』

(……生々しいこと言うなよ。)

もしかしたら間違えて停めたのかもしれないねえだろ？)

そうだ。

間違えてリアス部長まで停めてしまったのだ。それしかありえな  
い。

俺が自分に言い聞かせるように心の中でそう言っている——

——突然、窓際ごと吹き飛ばし、何かが飛び込んできた。

俺はその姿に驚愕する。

「——土織ッ?!」

何せそれは、あの、土織だったから——。

## 第67話

S i d e 三人称

「ど、どうしたんだよ土織っ！」

一誠は割れたガラス片などを叩き落としながら立ち上がる土織に言う。

「おお、一誠。」

ギヤスパーは助けられたみたいだな」

しかし、慌てる様子の一誠とはうってかわり、呆気からんとした朗らかな雰囲気、土織は笑った。

「そ、そうだけど……。」

いや、なんでお前が吹き飛ばされてんだよ?!

「そう興奮するな。」

何、俺と同類の奴に一撃貰っただけだ。

大したダメージは入ってないから気にすんな」

そういう土織に何とも言えない表情を浮かべる一誠。

土織程の強者が一撃を貰ったのだと言うならば、それは一体如何程の強さなのか。

一誠は己の額から汗が一筋流れるのを感じた。

「あく……取り敢えず付いてこい一誠。」

外でいろいろと厄介なことが起きてる。

……リアス先輩、ギヤスパーを頼む」

土織はそれだけ言うと、一誠の返事も待たずにその手を引いて、たったいま飛び込んできた方向へと走り出し、跳躍して行く。

その場に残されたリアスはあまりに素早く進んでいく話についていけず、ぽかんとした表情を浮かべていた。





校庭に着地した土織と一誠は、上空を睨むアザゼルの姿を見つけた。

視線の先にいるのは——白龍皇ヴァーリ。

そして、ダボツとした和服を身に纏い、腰に刀らしき物を差す綺麗な黒髪をした女性。

「……まさかとは思っていたが……。」

この状況下で反旗か！ヴァーリ!!」

「そうだよ、アザゼル」

眩い光を放ちながら、ヴァーリはアザゼルたちの前に舞い降りる。和服の女性もヴァーリに続くように地面へと降り立った。

和服の女性は土織の姿を捉えると笑顔を浮かべて手を振る。

「あ、土織くんやつほ〜♪」

さつきぶりだねえ〜」

「まさか初対面で蹴り飛ばされるとは思わなかったけどな」

「ほら、挨拶的なあ??」

ケラケラと笑う和服の女性。

一誠、そしてアザゼルは土織の蹴り飛ばされたという発言を聞き、その女性に注目する。

「それにわざと飛んでいったくせにい〜」

「威力を殺そうとしたら思いの外お前の蹴りが強かったんだよ」

軽い雑談のように交わされる言葉。

しかし、それは土織の実力を知るものからすれば驚愕に値するものだったに違いない。

「……まったく、俺もヤキが回ったもんだ……。」

せつかくの身内がこんなだとはな……。」

先程までの会話に驚いたが、ヴァーリを視界に入れるとそう言つて自嘲するアザゼル。

ヴァーリはマスクを兜に収納させて顔を出した。

「いつからだ?」

いつから、そういうことになった?」

「コカビエルを本部に輸送する途中でオフアーを受けたんだ。悪いね、アザゼル。」

「こちらの方がオレにとっては面白そうなんだ」

「ヴァーリ、『白バニシング・ドラゴンい龍』がオーフィスに降るのか？」

「いや、違うよ。」

俺をスカウトしてきたのはオーフィスじゃなかった。

だが、魅力的なオフアーをされてね。

『アースガルズと戦ってみないか？』———こんなことを言われ  
たら、自分の力を試してみたいオレでは断れない。

アザゼルはヴァルハラ———アース神族と戦うことを嫌がる  
だろう？

戦争自体が嫌いなものな」

「……俺はお前に『強くなれ』とは言ったが、同時に『世界を滅ぼす要  
因だけは作るな』とも言ったはずだぞ？」

「それは済まなかった、アザゼル。」

でも、オレの性格上、無理なのは分かっていただろう？」

「……そうかよ。」

確かに、俺は心の何処かで遅かれ早かれお前が手元から離れて行く  
のを予想はしていたさ。

———お前は出会った時から今日までずっと、強者との戦いを  
求めていたもんな」

そう言って苦笑を浮かべるアザゼル。

そんなアザゼルの尻目にヴァーリは自身の胸に手を当て、土織たち  
の方に向かっていう。

「———オレの本名は『ヴァーリ・ルシファー』だ」

いつの間にか静かになっていた校庭にはその名前が響き渡る。

「死んだ先代の魔王ルシファーの血を引く者なんだ。」

けど、オレは旧魔王の孫である父と人間の母の間に生まれた混血  
児。

——『パニシング・ドラゴン白い龍』の神器は半分人間だから手に入れたものだ。まあ、偶然だけだな。

でも、ルシファアの真の血縁者でもあり『パニシング・ドラゴン白い龍』でもあるオレが誕生した。

『運命』『奇跡』というものがあるなら、オレのことかもしれない。――

——なんてな

そういうヴァーリの背中から光の翼の他にも悪魔の翼が幾重にも生え出す。

「……もし、冗談のような存在がいるとしたら、こいつの事に違いねえ……。」

俺が知ってる中でも過去現在、おそらく未来永劫においても最強の【白龍皇】になる……。」

アザゼルはそう言ったあと、その隣にいる和服の女性に視線を送る。

「……それよりもだ、お前は何者だ……?」

あの土織を蹴り飛ばしたとかいう話を聞くに、もしそんな実力を持っているなら有名になっていそうなもんだが……。」

「あ、私??」

ん〜……私はねえ〜」

口元に指を当て考える様子の女性。

ふと、土織の方に視線を向けた女性は微笑み、そしてアザゼルの方を向き直した。

「私の名前は【たまずさ玉梓】。」

ん〜……楽しいこと大好きな半妖の自由気ままな野良狐だコーン

——なんちって♪」

そう言った女性は頭に狐耳を、お尻の辺りから九本の尾を出した。

「なっ?! 九本の尾に玉梓だと!?!」

まさかあの【玉梓の前】に関係があるって言うのか……っ?!」

アザゼルは驚愕の表情を浮かべて声をあげる。

それに対して玉梓と名乗った女性はニヤリと笑って口を開いた。

「……まったく関係ないよ！」

豊かな胸を張ってそう言う玉梓。

「紛らわしい言い回しすんなよ！」

土織のツツコミが炸裂。

アザゼルはなんとも言えない表情を浮かべていた。

「いや〜ごめんごめん！」

こうした方が面白いかなーって！」

テヘペロと言わんばかりに舌を出す玉梓。

アザゼルは頭をガシガシと搔くと何処か緊張の解けたような雰囲気  
気で口を開く。

「……まあいい。」

お前も【禍カオス・ブリゲードの団】の一員だな？」

「え？違う違う。」

私はヴァーリちゃんに付いてきただけ。

流石にテロリストになるつもりはないです」

ケラケラと笑いながらそう言う玉梓に呆気にとられるアザゼル。

「……それで？」

どうするんだ？ヴァーリ。

お前の性格上このまま大人しく捕まってくれる気はないんだろ？」

鋭い視線をヴァーリに向けたアザゼルは覇気を纏わせて言う。  
ヴァーリは寧猛な笑みを浮かべていた。

「その言い方だとオレが捕まるのは前提条件みたいだなアザゼル」  
「当たり前だろうが。」

——— 説教タイムだ」

6対12枚の漆黒の翼を展開させたアザゼルはヴァーリに向かって突進していく。

「おっととっ！

おじさんは私と遊ぼうか！

ヴァーリちゃんは赤龍帝くんに興味があるらしいから〜  
しかし、アザゼルはその突進を玉梓に止められた。

ニコニコと笑いながら尾を振る玉梓。

アザゼルは舌打ちをしながら玉梓から少し距離を取る。

「しゃあねえ……おい、一誠！

ヴァーリのこと頼んだぞ！

俺はこのボイン狐と戯れてくる」

「ヴァーリちゃん！

あなたのお父さんすっごくヘンタイ！

なんだか邪な視線を感じる！

主に私の胸に向かって!!」

胸を尻尾で覆い隠しながらも玉梓は頬も染めずに言った。

アザゼルはその懐から1本の短剣らしきものを取り出して構える。

「お前さんが土織クラスってなら俺も瞬殺されちゃうが……まあ、墮天使の総督としては負けねえわな」

「ふっふっふ……私としては土織くんと戦いたかったんだけど……おじさんと遊ぶのも楽しそうだし良いよね☆」

アザゼルと玉梓は此処では戦いにくいと判断したのか、何処かへと移動していった。

「——— さて、兵藤一誠」

ヴァーリの視線が今は士織ではなく、一誠に向けられる。

「此処で【赤】と【白】の戦いをしてみるのも良いと思わないか？」

「……拒否権は？」

「ないさ。」

君が拒否するっていうなら、その気にさせるまでのこと。

そうだな——手始めに君の想い人を殺そう」

ぴくりと一誠の体が揺れる。

「君のことは少し調べた。」

確か君の家には堕天使の3人がいたね？

その中の1人と君はかなり親しい仲だったはずだ。

——だからそいつを殺そう」

一誠は顔を上げ、ヴァーリを睨みつける。

その様子にヴァーリは満足気に表情を変えた。

「……戦ってやるよヴァーリ」

「いいね……！」

あの時に感じた龍の波動よりも更に濃密になっている……ッ!!」

ヴァーリはマスクで顔を覆うと構える。

戦闘態勢は万全のようだ。

「……士織、手えだすなよ……」

「そんな無粋なこととはしねえよ。」

——だから存分にやってこい、一誠」

士織はそれだけ言うと、離れるように跳躍して行った。

どうやら完全に傍観者となるようだ。

一誠は手のひらを握ったり開いたりを数回繰り返すと、息をひとつ

吐き出した。

「バランス・ブレイク【禁手化】」

「Welsh Dragon Balance Breaker  
!!!」

一誠が纏ったのは赤い龍を模した全身鎧。プレートアーマー

ヴァーリの鎧【白龍皇の鎧】と対となる  
【赤龍帝の鎧】だ。

「……行くぞ」

一誠の低く小さな呟きにヴァーリは興奮した様子を見せる。

「ああ！来い兵藤一誠——」

しかし、その言葉は最後まで紡がれることは無かった。

何故なら、ヴァーリは一瞬で接近してきた一誠のボディブローを受けたのだから。

「かふ……っ?!?!」

地面を擦るように吹き飛ばされたヴァーリは体勢を立て直し立ち上がる。

見ればヴァーリが攻撃を受けた部分、腹部の鎧にヒビが入っていた。

一誠は冷ややかな視線をヴァーリに向けていた。

「倍加無しでこの威力か……!」

想像以上だ！兵藤一誠ツ!!」

「ああ……忘れてた。」

取り敢えず1発ぶん殴らないと気がすまなかったから……発動させるの忘れてた」

そう言つて、一誠は悪魔の翼を、ヴァーリは光翼を広げ空中で——  
衝突する。

——『Divide!!』

一方は相手の力を半減し、糧とする。

——『Boost!!』

一方は己の力を倍加し、力を高める。

『相棒！』

半分にされた力は俺の力で元に戻るが——『白ハニシング・ドラゴンい龍』の他

の能力が厄介だ！』

「どういうことだ?!」

一誠はヴァーリと殴り合いをしながら叫ぶように聞く。

『奴は相手の力を半分にするだけでなく、減らした分の力を自分に加算するのさー!』

「なら、半分にされる前にぶん殴りや関係ねえ!!」

『Boost!!』『Divide!!』という音声が幾度となく流れる。

『なんとも相棒らしい脳筋な考えだが……それもありだろう!』

ドライグの心底楽しそうな声に一誠も笑いながら向かっていく。

「これならどうだ!」

ヴァーリは接近してくる一誠に向けて無数の魔力弾をばら撒き、確実にダメージを与えようとする。

「しやらくせえ!!」

しかし、ヴァーリの避けるであろうという考えとはまったく真逆の行動を見せる一誠。

無数の魔力弾へと突っ込んでいくのだ。

その行動にはヴァーリも驚きを隠せない。

一誠はボロボロになりながらも前進をやめない。

「くたばれボケえええッ!!」

叫びながら拳を振りかぶる。

『Boost Boost Boost Boost Boost

!!』

『Explosion!!』

【龍の剛腕】ツツツ!!」

「ぐがあ……っ!!??」

ヴァーリは防壁を張りはしたものの、一誠の拳はそれすらやすやすと貫き、ヴァーリの腹部を抉った。

地面へと落下していくヴァーリ。

衝突するかと思いきや、ヴァーリは光翼をはためかせて地面をすれすれで上昇する。

「くっ……!」



半減が間に合ってなかったら今のは危なかった……！」  
素晴らしいながらも、壊れた兜から見えるヴァーリの顔は心底嬉しうに笑っていた。

互いに鎧もボロボロになり、血を流していたが、戦意はむしろ向上しているように見える。

「ああ、楽しいな！兵藤一誠！」

「別に楽しくねえよ！」

「素晴らしいながらも気がついていないか？」

——君も笑っているぞ！」

ヴァーリ同様に壊れた兜から見える一誠の顔には笑みが浮かんでいた。

「やはり、ドラゴン同士の戦いはこうでなくては！」

そう言ったヴァーリは壊れた鎧に自らの魔力を送り込み修復する。

「チッ！」

修復機能とか勘弁してくれよ……！」

『相棒にも魔力さえあれば修復できるが……相棒は不自然なまでに魔力の絶対量が少ないからな……』

「ないものねだりなんてしても意味ねえだろ、相棒！」

俺には魔力はないけど、相棒ドライグがいる！

それだけで十分だツ!!」

『ふっ……嬉しいことを言ってくれる。』

——しかし、どうする相棒。

このままではジリ貧だぞ？」

『ブーステッド・ギア・プロモーションメール【赫龍帝の四皇鎧】ならどうだ？』

『なることは可能だろう。』

しかし、今の相棒の残り魔力では【換装】は行えないぞ』

「チッ！」

……最初から使つとくべきだったか……」

一誠は悔しそうに顔を歪める。

その体に残る最早雀の涙程もない魔力では、本来の性能を発揮することはできないとドライグは言っているのだ。

——そんな時、一誠の視界にあるものが映り込んだ。

そして閃く——奇策。

一誠は獰猛な笑みを浮かべて口を開いた。

「なあ、ドライグ。」

セイクリッド・ギア

神器 器 ったのは思いに応じて進化するよな……」

『ああ、そのおかげで相棒は今までにない進化を遂げてきたではないか』

ブラス・テッド・ギア・プロモーションメイル  
【赫龍帝の四皇鎧】。

それこそが良い例だろう。

一誠は己の視界に映り込んだモノ——『白い龍』の宝玉を拾い上げた。

『ま、まさか?! 正気か相棒?!』

その行動で一誠が何をしようとしているのかを悟ったドライグは慌てた様子で言う。

ヴァーリはその様子を興味深そうに眺めるだけで、攻撃をしようという素振りは見えなかった。

「当たり前だろうが!」

——無理を通して、道理を蹴つ飛ばす。

それが俺とお前の真骨頂だろ?」

『……ふっ。それもそうだな』

一誠はヴァーリの方を向くと、にやりと笑った。

『『白い龍』アルビオン! ヴァーリ!』

——貫うぜ、お前たちの力を!!」

言って、一誠は右手の甲に存在する赤龍帝の宝玉を叩き割り、そこへ先程拾った『白い龍』の宝玉をねじ込んだ。

すると、一誠の右手から白銀のオーラが漏れ出し始め、そのまま右半身を覆ってしまう。

「うがあああああああああああツツ!!!」

苦悶の声を上げ、激痛に表情を歪める一誠。呼吸は荒くなり、体をガクガクと震わせる。

「まさか……オレの力を取り込むつもりなのか？」

一誠のやろうとしてしていることに気がついたのか、ヴァーリは驚愕の表情を浮かべた。

『無謀なことを……』

ドライグよ、我らは【魔】と【聖】、【邪】と【善】のように相反する存在だ。

それを混ぜ合わせようなど……自滅行為にほかならない。

———こんなことでお前は消滅するつもりなのか?』

『ぐおおおおおおおつ!!』

ドライグもまた、一誠のように苦悶を漏らしていた。

だが、ドライグは悲鳴を出しながらも、笑いを含ませる。

『アルビオンよ!』

お前は相変わらず頭が固いものだ!

我らは長きに亘り、人に宿り、争い続けてきた!

毎回毎回同じことの繰り返しだった!』

『そうだ、ドライグ。』

それが我らの運命。

お互いの宿主が違ったとしても、戦い方だけは同じだ。

お前が力を上げ、私が奪う。

神器をうまく使いこなした方がトドメをさして終わりとなる。

……今までも、そしてこれからもな!』

アルビオンの言葉にドライグは不敵な笑いを向ける。

『俺はこの宿主———兵藤一誠と出会っていいことを知った。』

———無理を通して、道理を蹴つ飛ばす! そうすれば新しい世界を見れるのだと!!』

「俺の想いに応えろオオオオオツツ!!!」

一誠は絶叫しながら、己の右手を天に掲げた。

『Vanishing Dragon Power is taken !!』

その音声と共に、一誠の右手は眩い白光に包まれる。そして現れたのは、白銀のオーラを発する白き籠手。

「——【白龍皇パニシング・ギアの籠手】ってところか？」

『有り得ん！こんなことは有り得ない！』

アルビオンの声は驚愕で染まっていた。

「いや、可能性はあったんだよ。」

俺の仲間が【聖】と【魔】の力を融合させて、【聖魔剣】なんてものを創り出した。

神がいらないから崩れたバランスのせいで現れたシステムバグ的なものを利用したのさ」

『……【神セイクリッド・ギア器プログラム】の不備について、実現させたというのか？

……いや、しかし、こんなことは……。

思いついたとしても実現に行うのは愚かだ……。

相反する力の融合は何が起こるかわからない。

それがドラゴンの関わるものだとしたら、死ぬかも知れなかったのだぞ？否、死ぬほうが自然だ』

未だ信じられない様子のアルビオン。

一誠はあつけらんかんとして朗らかに笑った。

「ああ、確かに無謀だった。失敗するかもしれない。死ぬかもしれない。死ねなかった。死ねなかった。」

——だが、俺は生きている」

そんな一誠の言葉に嘆息するドライブ。

『だが、確実に寿命を縮ませたぞ？』

いくら悪魔に転生し、永遠に近い時間を生きるとしても――

――

「二万年も生きるつもりなんて無いさ。」

俺は自分の大切な人たちの寿命より、1秒でも長く生きれたらそれでいい」

一誠は優しい微笑みを浮かべた。

## 第68話

Side 三人称

「面白い。」

オレの知っている中でも君の意外性はピカイチだ！」

一誠に向けて拍手を送るヴァーリ。

その視線には熱っぽいモノが混じっているようにも見えた。

「ひとつ、賭けをしよう兵藤一誠」

「……賭けだと？」

怪訝そうな表情を浮かべてヴァーリを見つめる一誠。

「オレが勝ったら君の全てと君の周りにある全ても白龍皇の力で半分にしてみせよう！」

ヴァーリが空中を漂い、腕を大きく広げる。背にある光の翼もその大きさを増して行く。

「半分？」

俺の力ならともかく、俺の周囲を半分にするってどういうことだ……？」

一誠の問いかけにヴァーリは哄笑をあげる。

「無知は怖いな！」

「知らずに死ぬのも悪くないだろうが……今回は教えてあげよう！」

『Half Dimension !!』

宝玉から響く音声と共に眩いオーラに包まれたヴァーリが眼下に広がる木々へ手を向ける。

「は……？」

漏れたのは間拔けな声。

一誠はその光景に開いた口が閉じなかった。



特大の殺気を乗せた一誠の視線がヴァーリを射抜く。

「……イイ……イイなあ！」

その殺気、その視線！

まさに狩られる寸前のこの獲物の気持ちツツ!!」

そんな視線に射抜かれながらも、恍惚の表情を浮かべて一誠を見つめるヴァーリ。

「さあー殺ろう！」

君のその力をオレにぶつけてくれ！

オレはそれを——上回ろう!!!」

「言われなくても……殺ってやるよ！」

『Explosion!!』

その音声と共に一誠のオーラが莫大に増長された。

先に仕掛けたのはヴァーリ。

その身を光速で動かし、一誠へと接近する。

「——土織より、遅い」

しかし、一誠はその姿をしつかりと捉えていたらしく、逆にヴァーリの体へボディブローをカウンターで叩き込む。

「がふっ?!」

吐瀉物を口から吐き出すヴァーリ。

一誠は今が好機と思ったのか、吹き飛んで行こうとするヴァーリの腕を乱暴に掴み自分へと引き寄せた。

『Divide!!』

同時に、移植したばかりの白龍皇の力までも発動し、ヴァーリを包むオーラは激減する。

「——墜ちろツツ!!!」

一誠は右足を振り上げると、踵落としの要領でヴァーリの頭を蹴りおろした。

「~~~~~ツツ?!」

声にならない声を上げ、ヴァーリは地面に叩きつけられる。

ヴァーリの鎧はボロボロに砕け、ヒビが入り、まさに満身創痍の状態となり、当の本人は血反吐を吐き出しながらヨロヨロと立ち上がった。



た。

「あ、圧倒……的……だな……」

しかし、その表情は満足げであり、楽しげである。

一誠はそんなヴァーリの様子に舌打ちをする。

「……まだ倒れねえのかよ……」

「ああ……こんなところで倒れてしまつては、勿体無いだろう……?」

『ヴァーリ、奴の半減の力に対する解析は済んだ。』

「こちらの力の制御方法と照らし合わせれば対処できる」

「……そうか……なら、もうアレは怖くないな」

ヴァーリは口から血の塊を吐き出すと深呼吸をした。

ボロボロの鎧は修復されることはなく、しかしヴァーリは俄然やる気である。

「アルビオン、彼ならばジャガーノート・ドライヴ「覇 龍」を見せるだけの価値があるんじゃないか?」

【覇龍】という言葉に一誠は眉をひそめる。

『ヴァーリ、この場でそれは良い選択ではない。』

無闇に【覇龍】となればドライヴの呪縛が解けるかもしれないのだ』

「願ったり叶ったりだ、アルビオン。」

—— 『我、目覚めるは、覇の理に——』

『自重しろヴァーリッ!!!』

我が力に翻弄されるのがお前の本懐か?!』

怒りの色を含ませて声を上げるアルビオン。

一誠はヴァーリが何かを唱えようとした瞬間、接近し、攻撃を与えようとしていた。

「させるか……ッ!!」

ただ拳を握り、ヴァーリに放つ一誠。

—— しかし。

一誠の攻撃はヴァーリをとらえることはなかった。

「ヴァーリ、迎えに来たぜい」

一誠の拳は突然現れた三国志の武将が着ているような鎧を身に纏った男性に止められていたのだから。

一誠はバックステップでその男性から離れると、鋭く睨みつける。

「美候か……」

何をしに来た？」

「それは酷いんだぜい？」

相方がピンチだつーから遠路はるばるこの島国まで来たつてのによろ？」

他の奴らが本部で騒いでるぜい？

北の田舎<sup>アース</sup>神族と一戦交えるから任務に失敗したのならさっさと逃げ帰って来いってよ？

カテレアの奴、暗殺に失敗したんだろう？

なら監察役のお前の役目も終わりだ。

俺つちと一緒に帰ろうや」

「……そうか、もう時間か」

明らかに残念そうな表情を浮かべるヴァーリ。対して突然現れた男性はカラカラと笑っていた。

「なんだ、お前は？」

一誠の問いに男性は笑いながら答える。

「俺つちか？」

俺つちの名前は美候。

闘戦勝仏の末裔さあ」

突然現れた男性——美候は手元に棍を出現させるとクルクルと器用に回して遊んでいた。

「闘戦勝仏……？」

「……ああ！孫悟空か!!!」

「おおー」

ビンゴだぜい、赤龍帝。

ただ、俺つちは仏になった初代とは違うんだぜい？

自由気ままに生きるのさく。

まあ、何はともあれよろしくなあ〜」

毒気も抜けるような気楽さでそう言う美候。

「あ、お猿さん来てたんだ!」

そんな時、一誠の背後から女性の声が響く。

一誠はその声にびくりと身体を震わせると、直ぐにその場から離れた。

「おお、ちちやつね乳狐!

お前こんなどころにいたのかい!」

乳狐と呼ばれた女性——玉梓は美候の言葉に頬を膨らませる。

「もお〜!

その名前は止めてよお猿さん!

セクハラだよお〜!

それに猫さんの方が私よりおつきいでしょ!」

「んならアイツは乳猫だな!」

「そういう問題じゃないでしょー!!」

玉梓は美候に近づいていくとまるで絵文字の『>』<』のような表情を浮かべて抗議するが、美候は笑うだけで真剣に聞こうとはしない。

「あ、ヴァーリちゃん!

あなたのお父さん、あつちに寝かせてるから!

安心して!怪我はないから!」

玉梓はそういいながら満身創痍のヴァーリに抱きつく。

「……止めろ玉梓」

「ええ〜!

いーじやんいーじやん!

治療してあげるんだしく♪」

玉梓がそういつた瞬間、ヴァーリの体がオレンジ色の暖かそうな光に包まれた。

「なっ……?!」

今まで黙っていた一誠もその光景に声を上げる。

——ヴァーリの傷が全て治って行くのだ。

「……別に抱き着かなくても良いだろう?」

「役得役得♪」

玉梓はにこにここと笑ってそう言う。ヴァーリは今にもため息を吐きそうな表情を浮かべていた。

「ヴァーリの治療も済んだことだし、帰ろーぜい?」

「——帰らせると思うか?」

——その場の誰の声でもないものが響いた。

声の発生源、そこにいたのは——土織だった。

「ありやく……バケモン出てきちった……」

土織の姿を確認すると同時に引き攣った笑みを浮かべる美候。

「オーラの量がわかんねえや……」

あれか?次元が違うってやつ……」

「まだお猿さんには早かったんだよ……」

戦慄する美候の肩をポンポンと優しく叩く玉梓。が、その表情は笑いをこらえているようだ。

「ねーねー土織くん!」

お土産あげるから此処は見逃してくれないかなあ??」

「寝ぼけてんのか?」

土産なら俺の目の前に3人いるんだが?」

土織はそう言うと言指の骨をポキポキと鳴らす。

「そ〜いわずに!」

——ほら!ふれぜんとふおーゆー!」

玉梓はそういいながらいつの間にか取り出したラッピングされた大きな箱を土織に投げつける。

土織はその箱を破壊しようと拳を振り上げたが、次の瞬間眉をひそめてその箱を受け止めた。

「気に入って貰えた??」

曹操くんにはバレないように用意するの大変だったんだよ??」

「……………」

「敵意も無くなつたし、ありがたく帰らせてもらうね？」

ほら、お猿さん！帰るよっ！」

玉梓はそう言つて美候のお尻をひっぱたいた。

「痛あつ?!」

て、手加減しやがれい!」

美候は若干涙目になりながらも、手に持つ棍を地面に突き立てる。

刹那、地面に黒い闇が広がり、ヴァーリ、美候、玉梓の3人を捉えると、ズブズブと沈ませていく。

「————兵藤一誠!!」

ヴァーリの声が響く。

一誠はヴァーリの方を向くと睨みつけた。

「オレは君を気に入った。

その俺をも超える強さ……実に惹かれる」

「…………だからなんだよ」

不機嫌そうに吐き捨てる一誠。

それに対してヴァーリは不敵に笑っていた。

「オレは決めたぞ。

—— 君をオレの伴侶にする！」

—— 瞬間、場の空気が凍った。

一誠は一瞬何を言われたかわからなかった様だが、しばしの間を開けて顔を真っ青に変化させる。

「や、やめろッ!？」

お、俺はノーマルなんだ！

男色の気なんてねえんだよおおおお!!!」

士織の影に隠れるようにすると体を震わせる一誠。

「……何を言っているんだ？」

オレはお————」

ヴァーリの言葉は最後まで紡がれることなく闇の中へ消えていった。

## 第69話

S i d e 土織

「……良かったのかよ土織」

ヴァーリたちが逃げていった後、一誠がぼつりと呟いた。

「何がだ？」

「ヴァーリたちを逃がして良かったのかって聞いてるんだよ」

「今回だけだ。」

今回は——こいつを連れてきてくれたからな」

俺は箱を優しく地面に下ろしてそう言う。

「こいつ……??」

一誠は俺の言葉に不思議そうに首を傾げると、俺の視線の先である箱を見つめた。

下ろした箱の包装を外し、ゆっくりと蓋を開ける。

「——我、空腹」

そこにいたのは案の定、俺の思った通りの人物。

体操座りをして、こちらを見つめるの姿はまさしく——

「お前はいつも腹が減ってんだなオフィス」

ウロボロス・ドラゴン

【無限の龍神】オフィス——つまり【禍の団】カオス・ブリゲードの頂点に立つ

存在だった。

俺は自然と微笑んでいた——。



俺はオーフィスを肩車し、一誠と共にサーゼクスたちの居るであろう場所へと向かう。

先程から戦闘後の処理、つまり倒した魔術師の死体を運んだりする者の姿が見られた。

少し歩いていけば、そこにはサーゼクス、セラフォル、ミカエルの3人がそれぞれの部下に指示を出している姿が目に入る。

目を凝らせばアザゼルも座り込んではいるのがわかった。

サーゼクスたちもこちらに気がついた様で、口を開こうとし——止まる。

その表情は驚愕で染められ、視線は俺の顔より少し上、つまりオーフィスに向かっていた。

「し、土織……そいつは……」

アザゼルは引き攣った表情でオーフィスを指さす。

「アザゼル。久しい」

「おいおい……こりやどういこうこつた？」

【禍の団】カオス・ブリゲード トップの龍神様がなんで土織に肩車されてる……?」

ヨロヨロと立ち上がるアザゼル。

オーフィスはその様子を見ながら口を開いた。

「違う。我、【禍の団】カオス・ブリゲード 辞めた」

オーフィスの口から出た言葉にアザゼルたちは目を丸くする。

「や、辞めた……?」

「そう。我、静寂もういらぬ。

土織、我の居場所——暖かい」

俺の頭を抱き締めるオーフィス。

穏やかな息遣いで頬ずりしていた。

その様子にアザゼルは笑い始める。



「おいおいおい！マジかよ！」

士織、お前はとことん俺たちの予想の上を行くな！

無限の龍神様を手なずけるとか予想外にも程があんぜ全くよお!!」  
どさりと座り込みながらアザゼルはふう、と息を吐く。

「取り敢えずオーフィス。」

お前は俺たちの味方になったっていう認識でいいんだな？」

「……違う。我は士織の味方。」

士織、傷つけるなら——滅ぼす」

オーフィスは俺の頭から飛び降りると俺を護るように立ちはだかり、アザゼルたちに殺気を向けた。

アザゼルは冷や汗を流しながらも手を上げて口を開く。

「……わ、わかった。」

そのへんのこと肝に銘じとくぜ……」

アザゼルの言葉にサーゼクス、セラフォル、ミカエルの3人も頷き、同意の意を示した。

「……ところで士織くん」

「なんだよサーゼクス」

真剣な表情を浮かべるサーゼクス。

「オーフィスが仲間になった今、君は一体どうするつもりだい？」

会談で聞きそびれたそれはオーフィスが俺の仲間になるという予想外の結果を経て再び問われる事となる。

「わかってんだろ？サーゼクス。」

オーフィスと俺っていう過剰な力を持つ者は何処に行っても戦争の火種にしかならねえ。

——だから俺は、どの勢力にもつかない」

「……つまり、君は……」

サーゼクスも薄々感づいてはいたのだろう。さして驚くこともなくこちらを見つめていた。

「ああ。お前の思ってる通りだサーゼクス。

俺は3大勢力や既存の勢力の何処にもつく気は無い。

——つまり、俺は新たに『第4の勢力』を作ろうと思ってる」  
その言葉に対する反応は様々。

サーゼクスやアザゼルたちのような各陣営のトップたちは納得したような表情を浮かべ、その他の者たちは驚きの表情を浮かべていた。

「これなら何処かの勢力だけ強くなるっていうパワーバランスの崩壊もないし、オフィスの扱いに困ることもない。

勿論、何かあれば力は貸す。

……どうだ？これが最善の手だと思うが？」

俺の問いかけにいち早く反応したのはアザゼル。

「いいと思うぜ？」

ただ、今はお前とオフィスしかいねえから『中立チーム』ってところで落ち着いとけ」

「それが良いだろうね。」

『第4の勢力』として活動するとしたらもう少しメンバーが欲しいところだよ」

「士織ちゃんなら1人でどんな作業でもこなしちやいそうだけどね☆」

「異論はありません」

4人の言葉を聞いた俺はゆっくりと頷く。

「ああ、なら今後は『中立チーム』として活動させてもらう。

——よろしく頼むぜ？」

俺はニヤリと笑った。



「———そういえば一誠。」

お前、うちのヴァーリに求婚されたんだって?」

アザゼルは一誠と肩を組むとニヤニヤと笑いながらそう言う。

俺は再びオーフィスを肩車しながらそれを眺めていた。

「そ、そうなんですよ!」

俺は男色の気はないのに……どうにかありませんかね……」

ため息を吐きながらそう言うと、アザゼルは笑い声を上げる。

「笑い事じゃないんですよ?!」

「いや……悪い悪い。」

だがな、一誠。お前さん勘違いしてるぞ?」

「勘違い……??」

一誠は眉をひそめてアザゼルの言葉を聞く。

「ヴァーリはああ見えて———女だぜ?」

「はあああああああつ!!!」

一誠の驚愕の声が響き渡る!

その後、1人百面相を披露しながら、一誠は頭の上にハテナマークを浮かべた。

「ヴ、ヴァーリが……女……??」

え、ちよ、ま……はあ?!」

「おお、おお。」

激しく混乱してるなあ。

ヴァーリの奴、俺がいくら言っても言葉どころか一人称すら直さなかつたからなあ……ま、勘違いすんのもしかたねえか」

愉快そうに笑うアザゼル。

どことなく嬉しそうな雰囲気醸し出している。

「おい一誠。」

俺のことを『お義父さん』って呼んでもいいんだぜ?」

「……勘弁してください」

なんとも言えない表情を浮かべて一誠はため息を吐くように言っ

た。

「さて、色々と一段落ついたようなので、私は1度天界に帰ります。」

直ぐに戻ってきますので、その時正式な和平協定を結びましょう。それと土織さん、お暇な時にでもいいので天界へお越しく下さい。色々とお話をいたしましょう?」

後半、ミカエルは俺に向かって微笑みながら言っつて、この場を後にしようとする。

「気が向いたらな?」

それと、帰るのは少し待っつてくれ」

「?なんですか?土織さん」

「俺の弟が言いたいことがあるらしいんでな。聞いてもらえるか?」

俺はそう言っつて、一誠の方へ視線を向ける。先程までは何処か疲弊した様子の一誠だったが、俺の言葉を聞いて真剣な表情を浮かべた。

「はい。」

時間があまりありませんが、それくらいならば」

そう言っつて、ミカエルは一誠の方に視線を移動させる。

一誠は1度咳払いすると口を開いた。

「ひとつ、お願いがあります。」

——アーシアとゼノヴィアが祈りを捧げる時のダメージを無しにできませんか?」

「——っ!」

その願いにミカエルは驚きの表情を見せる。

いつの間にやら合流していたアーシア、ゼノヴィアの2人も一誠の願いに驚いているようだ。

「……わかりました。」

2人分ぐらいならシステムに干渉することでなんとかなるかもしれません。

——アーシア、ゼノヴィア、問います。

神は既にいません。それでも祈りを捧げますか?」

ミカエルの問いに2人は直ぐに頷き、にこりと笑った。

「はい、主がおられなくとも私は祈りを捧げたいです」

「同じく。」

主への感謝と——ミカエルさまへの感謝を込めて」

2人の答えにミカエルは優しく微笑むと、2人に歩み寄り頭を優しく1度だけ撫でる。

「わかりました。」

本部に戻ったら、早速そうしましょう。

……あなたたちのような優しい者にあのような酷いことをしてしまい、本当に申し訳ありません……」

「いえ、ミカエルさま、謝らないでください。」

多少、後悔も致しましたが、教会に仕えていた頃にはできなかったこと、封じられていたことが現在、私の日常を華やかに彩ってくれています。

……こんなことを言ったら、他の信徒に怒られるかもしれませんが……。

——それでも、今の私はこの生活に満足しているのです。」  
柔らかに微笑むゼノヴィアは瞳を閉じて思い出すかのように言った。

それに続いてアーシアも手を組みながら言う。

「ミカエルさま、私も今が幸せだと感じております。」

大切な人たちがたくさん出来ましたから……。

それに、憧れのミカエルさまにお会いしてお話、そして頭を撫でただけるなんて光栄ですっ！」

ミカエルはゼノヴィアとアーシアの言葉に安堵の表情を見せる。

「すみません……。」

あなたたちの寛大な心に感謝します。

デユランダルについてはゼノヴィアにおまかせします。

あなたなら安心して任せることが出来ますから……。」

「ありがとうございます」

ゼノヴィアは恭しく頭を下げた。

「ミカエルさま、例の件もお願いします」

そんな中、ミカエルに近づいて行ってそう言ったのは祐奈。

アーシアたちとの会話も終えたミカエルは祐奈に向き直ると真面目な表情で口を開いた。

「あなたから進言のあった聖剣研究のことも今後犠牲者を出さぬようにすると、あなたからいただいた聖魔剣に誓いましょう。」

大切な信徒をこれ以上無下にすることは大きな過ちですからね」  
なるほど、祐奈はいつの間にかそのことについてミカエルと話をしていたらしい。

「やったな！祐奈！」

「うん、ありがとう、イツセーくん」

そんな2人のやり取りを微笑ましく見ていたミカエルに、アザゼルが言う。

「ミカエル、『ヴァルハラ』の連中への説明はお前がしておけよ？

ヘタにオーデインに動かれても困るからな。」

あと、須弥山にも今回のことを伝えておかないとうるさそうだ……」

「ええ、墮天使の総督と魔王が説明しても説得力がないでしょうから、私が伝えておきます。」

『神』への報告は慣れてますから……」

それだけを言い残すと、ミカエルは大勢の部下を連れて、天へと飛んでいった。

その後、アザゼルは再び立ち上がると、墮天使の軍勢を前に言い放つ。

「俺は和平を選ぶ。」

墮天使は今後一切天使と悪魔とは争わない。

不服な奴は去ってもいい。

だが、次に会うときは遠慮なく殺す。

——— ついてきたい者だけ俺についてこい！」

『我らが命、滅びのその時までアザゼル総督のためにツツ!!』

怒号となった部下たちの忠誠。

アザゼルはそれを見て何処か嬉しそうにふっ、と笑うと「ありがとう」と小さく礼を言った。

カリスマという点で言えば、アザゼルは3大勢力中で1番だろう。アザゼルが自分の軍勢に指示を出すと、魔方陣を展開させて墮天使たちが帰っていく。

悪魔の軍勢も同様に魔方陣から転移していくようだ。

先程までかなりの人数がいた校庭も、転移し終わった後では寂しくなり、ついには俺たちを合わせた極小数の人員だけとなっていた。

墮天使で唯一残ったアザゼルは、大きく息を吐くとしつかりとした足取りで校門の方へ去っていく。

「後始末は、サーゼクスに任せる。

俺は疲れちまった……帰るぞ」

あくびを隠そうともせず、手を振って帰ろうとするが、一度だけ立ち止まり、振り向いた。

「そうだ、一誠。

当分此処に滞在する予定だからそっちのヴァンパイアの特訓を手伝ってやるよ。

お前の血を飲ませたんだろ？

下手な結果にならねえようにしないと。

制御出来ないレア神器を見るのはムカつく」

「えっと……ありがとうございます?」

一誠はアザゼルの言葉に疑問符を浮かべながら頭を少し下げた。

「赤は仲間を、白は力を。

——— どちらも驚くほどに純粹で単純なもんだ」

アザゼルはそれだけという、口笛を吹きながら去っていった。

「アザゼル、ゴキゲン？」

オーフィスはペチペチと俺の頭を叩きながらそう言う。

「そうかもな。」

……それとオーフィス、叩くな痛い」

俺がそう言うのとオーフィスは叩く手を止め、地面に滑り降りていく。

そして、身長差からこちらを見上げると手を広げて口を開いた。

「士織、抱っこ」

「……はいはい」

俺はその姿に微笑ましきを感じながらオーフィスを抱き抱えるのだった。

S i d e      O u t



西暦      20??年7月——。

天界代表 『天使長ミカエル』

墮天使中枢組織神の子を見張る者 『総督アザゼル』

冥界代表 『魔王サーゼクス・ルシファー』

3大勢力各代表のもと、和平協定調印。

以降、3大勢力の争いは禁則事項とし、協調体制へ——。

『兵藤士織』、『無限の龍神オフィス』、両名による『中立チーム』創設。

後に『第4の勢力』となる予定——。



今回結ばれた和平協定は舞台となった学園から名前を採り、【駒王協定】と称することとする——。

## 第70話

どうも、兵藤士織だ。

3大勢力の会談、そして【禍の団】カオス・ブリゲードの襲撃を乗り越えてから早数日。

いつも通りに放課後、オカルト研究部の部室に俺たちは集まっていた。

そう、集まっていたのだが……

「——てなわけで、今日からこのオカルト研究部の顧問になることになった。」

『アザゼル先生』と呼べ。

あ、一誠は『お義父さん』でもいいぞ?」

そこには着崩したスーツ姿のアザゼルが何故かいた。

「……どうして、あなたがここに?」

額に手を当て、困惑している様子の子のリアス先輩。

「ハッ!セラフオールの妹に頼んだらこの役職だ!

まあ、俺は知的でチョーイケメンだからな。

女生徒と先生でも喰いまくってやるさ!」

「んなことしたら俺が去勢するぞ色ボケ総督」

俺が指を鳴らしながらニッコリと笑ってそう言ってやればアザゼ

ルは引き攣った表情を浮かべて冷や汗をかく。

「じよ、冗談だぜ？土織」

「ならいいんだけどな？」

そう言つて、俺はソファアに座る祐奈の隣に腰を下ろした。

「あく……取り敢えず、俺がこの学園に滞在できる条件はグレモリー眷属の悪魔が持つ未成熟な神器を正しく成長させること。

まあ、土織がいりや十分だが、土織でもわからない専門的なことは俺が教えてやる。

【禍の団】カオス・ブリゲードつてつけたいな組織もあることだし、将来的な抑止力のひとつとしてお前らの名前が挙がったのさ。

いや、どちらかといえば対『白バニシング・ドラゴンい龍』専門だな。

仕入れた情報では、ヴァーリは独立した自分のチームを持つているつて話だ。

そいつらを仮に『白龍皇眷属』と呼ぶとして、判明しているのは今のところヴァーリと孫悟空、玉梓を合わせて数名だ」

「強いんですか？」

一誠の質問にアザゼルは頷く。

「当たり前だ。

ヴァーリはアレが全力じゃねえ。

……そうだな……今はお前さんの方が強いが、時期に追いつかれるだろうよ。

それよりも厄介なのが——玉梓だ。

俺は直接戦ったから言えるが……アイツはバケモンだぞ……？」

アザゼルは神妙な面持ちで語る。

「……俺は全力で戦った。

持てる策を全て使つたのにも関わらずアイツは終始遊んでいる様子だった……。

俺が唯一見れた武器は最後に俺の意識を刈り取っていきやがった巨大な鉄の扇だ……」

その言葉に俺は眉をひそめる。

『転生者』『九尾狐』『回復能力』『鉄の扇』……このキーワードだけで

絞りこめる訳では無いが、あの玉梓という転生者がどのような能力を持つのか考えやすくはなる。

「何はともあれ、『白龍皇眷属』のメンバーは確実に今のお前達より強い。」

士織は例外として一番実力があるだろう一誠でもまだ足りない」

アザゼルの言葉にリアス先輩たちは表情を曇らせた。

「——なあに暗い表情してやがる。」

お前らにはまだ伸びしろつてもんがあるんだよ。

力不足なら鍛えるまでだ。

——夏休みなんてないものと思えよ？」

そう言つてニヤリと笑つたアザゼルはいつもはリアス先輩が座っている椅子の方へ移動すると、怠そうに腰を下ろしたのだった。

——閑話休題。

「そうだ、忘れるとこだった……。」

——ほら、士織。サーゼクスの奴からだ」

アザゼルはそう言つて少し大きめの箱を俺に投げ渡してくる。

眉をひそめてそれを開けてみれば、中に入っていたのは——

【イ・ザ・イル・ピース悪魔の駒】。

「おいアザゼル。」

これは一体どういう意味なんだ？」

俺はどの勢力につくつもりもないと言つたはずだ。

それなのに何故この駒を渡すのだろうか……？

「サーゼクスが言うには『レーティングゲームに参加してみないか？』だだよ。」

その駒の使い道はお前に任せるらしいぞ」

「……使ったら悪魔になっちゃまうだろうが……」

「なら使っても悪魔にならねえように改造したらどうだ？」

「お前ならできるだろ？」

「アザゼル、お前は俺をなんだと思ってるんだ……」

流石の俺もそんな改造を施せる力を持つてはいない。

「ハハハハハ！」

冗談だジョーダン。

その駒は特別製らしくてな。

なんでもアジュカが新しく創り出したモンで、悪魔化はしないが寿命は伸び、駒の特性は使えるようになるらしい。

——アジュカ曰く、『【悪魔の駒】を創るより簡単だった』だとよ

からからと笑うアザゼル。

まさかサーゼクスがこんなモノを創らせるとは思ってもみなかった。

「土織、なんだかんだ言ってもお前は人間だ。

俺たちみたいに永遠に近い時間を生きることができねえ。

だからこそ、サーゼクスアイツはそれを創らせたんだろうよ」

椅子から立ち上がったアザゼルは俺に近づき、箱の中からひとつの駒を摘まみ出す。

「——コイツは普通の【悪魔の駒】にはねえ、カイザー【帝王】の駒だ。

お前でも使えるようにかなりの調整を加えた正真正銘お前のためだけに創られた駒なんだとよ」

俺はその駒をアザゼルから受け取り手の内で転がす。

「そいつには寿命を伸ばす効果しかないらしいが……十分だろうか？」

「……まあな」

「ただ、そいつを使っちゃまうと確実に人間ではなくなる。

悪魔になるわけでもないが、人間でもない——そんな存在に」

アザゼルの言葉を聞いた俺は思考する。

もしこれを使った場合のことをだ。

メリットは寿命が伸びること。  
デメリットはこれを使えば人間でも悪魔でもないものになること。  
俺はふっ、と小さく笑い駒を握りしめた。

「メリットしかねえじゃねえか」  
そういつて、駒を受け入れた。

S i d e      O u t



駒王学園      一学期      終業

駒王学園高等部      オカルト研究部

顧問教諭／アザゼル（墮天使総督）

部長／リアス・グレモリー（王）<sup>キング</sup> 3年生

副部长／姫島朱乃（女王）<sup>クイーン</sup> 3年生

部員／塔城小猫（戦車）<sup>ルック</sup> 1年生

木場祐奈（騎士）<sup>ナイト</sup> 2年生

ゼノヴィア（騎士）<sup>ナイト</sup> 2年生

アーシア・アルジェント（僧侶）<sup>ビショップ</sup> 2年生

ギヤスパーク・ヴラディ（僧侶）<sup>ビショップ</sup> 1年生

兵藤一誠（兵士）<sup>ポーン</sup> 2年生

兵藤士織（帝王）<sup>カイザー</sup> 2年生



Side 三人称

誰もいない駒王学園の屋上。

夕焼けでオレンジに染まるそこでアザゼルは耳にスマートフォンを当てていた。

「——ああ、電話で悪いな、シエムハザ。

ちよいと野暮用でしばらくここにいるからよ」

『了解しました。』

……しかし、アザゼル。

今回の和平であなたを快く思わない部下も——』

「いいさ。別にいい。」

俺のことなんかよりもお前だ。

——ガキ、産まれるんだろ?」

そういうアザゼルの表情はとても、とても優しいものだった。

『……アザゼル。私は……私はッ!!』

「……大事にしるよ? 悪魔の嫁さんをよ。

イイ女じゃねえか。

謀殺されるかもしれないねえのにここまでお前についてきたんだからよ。

子供は悪魔と堕天使の架け橋になるぜ?」

『私が……私が恨まれたら良かったのです……ッ!』

あ、あなたに……このような……ッ!!』

「泣くなよ、戦友。」

恨まれるのは慣れてる。

朱乃の件も俺に任せとけ。

——この黒い12枚の翼と共に全部背負ってやるからさ、イイから黙って俺についてこい、シエムハザ!!」

『……………ッ!!』

—— イエス、マイマスター!!!』

涙で声が震えるシエムハザ。

アザゼルは優しく笑っていた。

「今日はゆつくり休め、シエムハザ。

俺がいらないんだ、忙しくなるぞ?」

いたわるような言葉を口にするアザゼルに電話先のシエムハザは笑い声をあげる。

『ふ、ふふふ……冗談を。』

あなたはほとんど仕事をしなかったでしょう?』

「かーっ!」

痛いところついてくるなあ……シエムハザよお……」

『あなたが戻ってくる頃にはやる事がなくなっているでしょうね』

「おいおい、俺を干すつもりかよ」

『それもいいかもしれませんね。』

—— あなたは今まで頑張ってきたんですから、そろそろ休んだらどうです?』

「……馬鹿野郎。」

お前らが頑張るってのに休んでられるかよ」

空を見上げてアザゼルは言った。

「……また掛けるぜシエムハザ」

『ええ……どうかご無事で』

その言葉を最後に電話を切ったアザゼル。

ふう、とひとつ息を吐き出すと背伸びをした。

「……忙しくなりそうだ」

夕日に照らされてアザゼルはそう呟いた。



## 冥界合宿のヘルキヤツト

### 第71話

どうも、兵藤士織だ。

夏という季節は意外と長いもので、やっと夏休みという長期休暇に入った今日この頃。

しかも、リアス先輩の眷属全員が兵藤家に下宿することとなり父さん、母さんの説得が大変だったのもそう古くはない記憶だ。

いくらなんでも16人という大所帯が、初めは4人で過ごしていた家に居るのは狭すぎるということで、リアス先輩の発案で改築するということになっていたのだが――

「……一晩で豪邸が出来上がってらあ……」

朝起き、異変を感じ、何故か俺のベッドで寝ていたオフィスを背負いながら外に出た俺は一言そう呟く。

――夢でないなら8階建て相当の豪邸が眼前に広がっていた。



「ふむ、現代では寝ている間にリフォームが終わっているのだな。  
流石の私も驚いた……」

朝食の席。

以前の5倍は広くなった食卓で父さんがお茶を啜りながら言った。  
食卓にはこの家に住む全員が集合しており、俺の右隣には祐奈、左隣には小猫、膝の上にはオーフィスが陣取り、他は好きなように座っている。

同じように5倍以上広がったキッチンの方からは母さん、夕麻、美憧、絢奈、華那が朝食のメニューを運んでくる。

「リアスちゃんのお父さまがね、建築関連のお仕事もされてるそうで、モデルハウスの一環でここを無料でリフォームしてくれたそうなの♪」

ここまでの豪邸へのリフォームが無料だなんて話を信じる母さん。  
……普通なら正気を疑うレベルなのだが……俺の母さんなら仕方がないというしかない……。

そもそもリフォームどころか、敷地面積自体が広がっているようだが……。

「そういえばお隣の鈴木さんや田村さんはお引越したらしいの。」

なんでも急に好条件の土地が入手出来たって話してね？そっちに移り住んだんだって〜

母さんはなんとなしにそう言ったが、俺は苦笑気味にリアス先輩の方を見た。

「大丈夫よ。」

以前よりも好条件の土地、物件を紹介したの。  
平和な解決だったわ。皆、幸せになれたのよ」

俺にしか聞こえないであろう絶妙な声の大きさでそう告げたりリア先輩。

そういうことならば俺がグチグチということではない。

そして今度は、家の凶面らしきものを持ってトタトタとかけてくる  
母さん。

「1階は客間とリビング、キッチン、和室。

2階は一誠ちゃんとアーシアちゃん、夕麻ちゃん、ギヤスパーちゃんのお部屋ね♪

3階は私と賢夜さんのお部屋と、書斎、物置♪

4階は士織ちゃんとオフィスちゃん、祐奈ちゃん、小猫ちゃんのお部屋で♪

5階はリアスちゃん、朱乃ちゃん、絢奈ちゃん、華那ちゃん、のお部屋よ♪

6階はゼノヴィアちゃんと美憧ちゃんのお部屋と2部屋のあまりね♪

7階と8階は誰も使っていないから客間かしら♪」  
ウキウキした様子の母さんは楽しそうにそう言っていく。

「屋上には空中庭園があるらしくてな。

野菜でも育ててみようかと思っている」

父さんは瞳を閉じ、腕を組んで満足げに頷いている。

「頑丈に建ててありますので、戦争になっても崩れませんか」

「ほう……それはまた良い建築だ」

全くの疑問を持たずに父さんはそういう。

これが当たり前なのだろうか……？

「地下もある……そうだね」

ゼノヴィアは箸に苦戦しながらも言う。

「ち、地下まであるのか……」

「ええ、地下3階まであるわ」

「……………」

最早声すら出なかった。

リアス先輩は追加の凶面を取り出して説明を始める。

「地下1階は広いスペースのお部屋。

トレーニングルームにもできるし、映画鑑賞会もできます。

ちなみに大浴場もありますから、汗を流すのにも困りません。

地下2階は丸々室内プールです。温水も可能ですわ。

地下3階には書庫と倉庫を作っています。

エレベーターも完備していますので、地上8階から地下3階までスムーズに乗り降りできます」

トレーニングルームと聞いて父さん、絢奈、華那の3人の目が輝いていた。

今までは山などに行きトレーニングをしていたようなので、家でできるのが嬉しいのだろう。

食事を終えた後、俺はそのまま椅子に深く腰掛けていた。

「ああ……なんか疲れたわ……」

「士織、疲れた？」

俺の呟きに膝に座るオフィスが反応する。

小首を傾げているオフィスの様子に微笑みが漏れるのを感じた。

「いや、大丈夫だ。

心配してくれてありがとな、オフィス」

頭を優しく撫でてオフィスを愛でる。

「んん……」

幸せそうな表情を浮かべるオフィス。

俺に擦り寄ってくるその姿が可愛く、癒される。

「……しーおーりーくーん？」

そんな時、隣に座っていた祐奈の声がかかる。

隣を見てみれば頬をぱんぱんに膨らませた祐奈の姿。

「オフィスちゃんばっかりじゃなくて僕にも構って欲しいな……」

そういう祐奈の瞳は潤んでおり、小動物的な可愛さを感じた。

俺は微笑みながらオフィスを撫でる手とは別の手で祐奈の頭を優しく撫でる。

「ごめんな祐奈」

「……これからはもつと構ってくれないと許さないよ……?」

僕は士織くんの彼女なんだから！」

「ああ……わかってる」

祐奈の美しい金髪に手を通し、頬を撫でる。

くすぐったそうに目を細める祐奈の姿がこれまた愛しくて抱きしめてしまいたいそうだ。

……家族もいることだし実行はしないが。

「後で買い物にでも行くか」

「買い物？」

何か買わないといけないの？」

「オーフィスの私物が全く無いからな。」

ベッドだったりリアス先輩……というかサーゼクスが揃えてくれたみたいなんだが、服がないんだよ」

オーフィスに視線を落としてそういう。

今のオーフィスは俺のジャージをぶかぶかの状態で着ているというより巻いているだけなのだ。

「あ……やっぱり洋服ないんだね……」

祐奈もオーフィスの姿に薄々感じていたのか苦笑いを浮かべながらそういう。

「??？」

祐奈の視線に首を傾げるオーフィス。

彼女にとつて服というものはあってもなくてもいいという認識らしい。

「……うん。」

そうだね、オーフィスちゃんの洋服を買いに行こう！」

「なら、取り敢えず着替えて玄関に集合だな」

「わかったよ！」

なるべく早く来るから待っててね？」

「急がなくていいぞ？」

俺の言葉を聞いた祐奈は慌てた様子で自室に向けて走って行った。

「俺たちも準備しないとな」

オーフィスの頭を優しくぽんぽん、と叩いて肩車をすると、俺も自室に向かって歩き出したのだった。

## 第72話

どうも、兵藤士織だ。

着替え終わった俺、祐奈、オーフィスの3人は、先に言ったようにオーフィスの為の買い物をするためにショッピングモールを訪れていた。

「さて……まずは何を何処で買うかな……」

俺はオーフィスを肩車したまま辺りを見回して言う。

ちなみにオーフィスの今の格好だが、ちょうど小猫の服がサイズの1番近かったために借りて着ている状態だ。

「まずは見てまわろうよ、士織くん」

白地に水色の水玉模様のあしらわれたサマーワンピースに身を包んだ祐奈は俺の左手を握りながらニコニコと笑っていた。

「それもそうだな……」

急いでるわけでもなし……見て回るのも悪くねえか！

俺はそう言っ、祐奈に握られた手を優しく握り返す。

「オーフィス。」

何処か興味があるところあるか？

軍資金なら3大勢力のトップたちから使いきれないだろうってくらい貰ってるから気にしなくていいぞ」

今の自分の使える資金の量に若干の苦笑を隠せずに言った。

3大勢力のトップたちから援助という形で俺は資金を貰っている。サーゼクスも、アザゼルも、ミカエルも、善意でという話だったはずなのだが……3者ともにちゃっかり俺たちへの依頼を3回分対価なしにしてくれないだろうかと頼んでくる辺り3大勢力を引っ張っている者の強かさを感じたのを覚えている。

「我、あそこ行きたい」

オーフィスは俺に肩車されながら指を指した。俺が指の先を辿っ  
ていけば——そこにあつたのはフードコート。

「……美味しそう」

じゅるり、と涎を啜るような音が俺の頭上で聞こえてくる。  
そんなオフィスの様子に、隣では祐奈も苦笑い気味だ。

「……うちの龍神さまはなんでこんな腹ペコキャラになっちゃったかねえ……」

俺自身、身に覚えがないためそういうしかなかった。



「……うまうま」

無表情ながら嬉しそうな雰囲気振りまくオフィス。

彼女の目の前にはそれはそれは大量の食べ物が置かれていた。

「……す、すごいね……」

「……ああ……こいつは胃袋まで無限なんだろうよ……」

俺と祐奈はコーヒーを飲みながら、幸せそうに食べるオフィスの様子を眺めて休んでいる。

オフィスは自分の顔ほどはありそうな肉まんを口いっぱい頬張りながら咀嚼する。

「ほらオフィス。」

頬に食べ残しが付いてるぞ」

「??？」

俺の言葉に首を傾げるオフィス。

その仕草に微笑みながら俺は頬に付いた食べ残しを取り、口に放り込む。

「そんなに急いで食べなくていいぞ？」

誰も取りやしねえよ」

オフィスの頭をぽんぽんと撫でて言った。

「なんだか士織くんお父さんみたいだね」

そんな俺とオフィスの様子を見ていた祐奈がクスクスと笑いながらそんなことを言う。

「ならお母さんはお前か？祐奈」

「なっ……?!」

俺からの返答に顔を真っ赤に染めた祐奈。

しかし、その表情は嫌がるというものではなく、満更でもないようなものだ。

「も、もう！」

からかわないでよ士織くんっ！」

「からかってねえんだけどな」

そう言つて、コーヒーを一口飲む。

オーフィスもいつの間にか食事を終え、満足気にお腹を撫でていた。

「我、満足。美味しかった」

「も、もう食べちゃったの……?」

祐奈はオーフィスが食事を終えたという事実を目を丸くしている。それもそうだろう、一瞬目を離れた隙にあの大量の食べ物が消えていたのだから。

オーフィスは椅子から降りると何処かにトコトコと歩いていき、何をするわけでもなく戻ってくる。

「——消化完了」

「早すぎるよっ?!」

サムズアップするオーフィスに祐奈は声を上げてツツコム。

そんな2人の様子を何となしに見つめ、俺は頬が緩むのを感じた。

「オーフィスもこう言ってることだし、本題の服を買いに行くか」  
立ち上がりながら呟く。

俺の行動を見たオーフィスは立ち上がりきつた俺をよじ登り、肩車の形に落ち着く。

祐奈はそれに対抗するように俺の腕を抱き締めるように密着した。

「……行くか」

動きにくいがそれを言ったところで変わらないだろう。それに、嫌なわけでもないので俺はこのままゆっくり歩き始めた。





「結構買ったな……」

買い物を終えた俺たち3人はのんびりと帰路についていた。

俺の手にはオフィスのために悩みながら買った服が入った紙袋が複数個さげられている。

「服を一式揃えないといけなかったからね。

でもね？土織くん。

女の子の服を揃えるならまだ少ない方だよ？」

祐奈はそういうが、どちらかといえば着の身着のままとまでは言わないが適当な服しか着ない俺や、もともとオシヤレなどに興味の薄いオフィスは首を捻り唸る。

「今度は土織くんの洋服も買いに行こうね？」

今日はオフィスをちゃんの服しか買えなかったから……。

僕がコーデイナートしてあげるよ！」

腕を胸の前まで上げてガッツポーズをすることでやる気を滲み出させる祐奈。

俺はそんな祐奈の頭を優しく撫でた。

「楽しみにしてるぞ？」

「うんっ！」

えへへくと表情をだらしなく緩める祐奈は愛らしく、自分の表情も自然と柔らかくなってしまふ。

「我も土織の服選ぶ」

肩車状態のオフィスが俺の頭をペチペチと叩きながらそういつた。

「さんきゆなオフィス。

……だけど叩くのだけはやめてくれ。普通に痛い」

苦笑混じりに言うと、オフィスは叩くのをやめてくれる。

その代わりに俺の顔がある場所に向けさせた。

「……たこ焼き屋か？」

そこにあつたのは『たこ焼き』と書かれた暖簾のかかったお店。

「我、アレ食べたい」

「……お前本当に食いしん坊だな……」

「褒め言葉」

顔は見えないが、オーフィスがドヤ顔をしているのが気配でわかる。

俺はふう、とため息混じりに言葉を吐き出した。

「……みんなの土産に買っていくか」

「そうだね。」

オーフィスちゃんの希望も叶うし、みんなも喜ぶと思うよ？」

隣で祐奈がクスクスと笑う。

俺はそんな祐奈も引き連れて、オーフィスが強請つたたこ焼き屋に足を向けた。

「すみませーん。」

たこ焼きを持ち帰りたいんですけどー」

——ソースの香りを嗅ぎながら、何気ない日常の幸せを感じた。

## 第73話

S i d e 土織

「冥界に帰る?」

朝食を終え、リラックスモードの俺たちにリアス先輩は言う。

場所は地下の書庫。オカルト研究部に所属するメンバー、墮天使4人娘、そしてオーフィスがその場にはいた。

「夏休みだし、故郷へ帰るの。」

毎年のことなのよ。

突然で申し訳ないのだけれど、長期旅行の準備をしておいてちょうだいね?」

リアス先輩の言葉にその場の全員が頷く。

個々にしていることはあったが、その話だけは静かに聞いていたのだ。

「——俺も冥界に行くぜ」

『ツ!』

突然響いた声に俺と、辛うじて一誠の2人以外が驚愕の表情を浮かべる。

声の発生源の方へ視線を向ければ、案の定予想通りの人物——

—アザゼルが書庫の一角から歩んで来ていた。

「ど、何処から、入ってきたの?」

リアス先輩が目をパチクリさせながらアザゼルに訊く。

「うん?」

普通に玄関から入ってからここまで来たぜ?」

「……気配すら感じませんでした……」

背伸びの格好のまま、祐奈はそう呟く。

日頃の鍛錬により力を伸ばした祐奈ですら気づけないところを見るとやはりアザゼルも実力者なのだとわかる。

「そりやまだまだ修行不足だな。」

俺は気配を消すわけでもなくただ普通に来ただけだ。

それよりも冥界に帰るんだろう？

なら俺も行くぜ。

なにせ俺はお前たちの『先生』だからな」

アザゼルは得意気に言う。

——そう、アザゼルは豊富な神器の知識を使って、俺とともにオカルト研究の部員、つまりリアス先輩の眷属を鍛えているのだ。俺と違ったアプローチをするので、いつもとは違ったきっかけを掴んだ奴も多い。

懐からメモ帳を取り出すと、おもむろに開いて読み上げ始めた。

「冥界でのスケジュールは……リアスの里帰りと、現当主に眷属悪魔の紹介、例の新鋭若手悪魔たちの会合にお前達の修行か。

俺は主に修行に付き合うわけだが……。

お前らがグレモリー家にいる間、俺はサーゼクスたちと会合か。

……つたく、面倒くさいもんだ……」

嘆息するアザゼル。

果てしなく面倒くさいのが伝わってくる表情だ。

【神の子<sup>グ</sup>を見張る者<sup>ゴ</sup>】の総督であるのにも関わらずいい加減な態度なのはどうかとは思うが……そのカリスマ性により部下からの支持は凄いのだという。

それがよくわかるのが、最近家を訪ねてくる墮天使たちだろう。

「秘書にしてください！」、「人間界にいる間、身の回りの世話を！」、

「身辺警護は絶対に必要です！」。

訪れる墮天使皆がアザゼルの身を案じているようだ。

ただ、そのすべてを「いいから帰れ。命令だ」という言葉で送り返していた。

「ではアザゼル……先生はあちらまでは同行するのね？

行きの予約をこちらでしておいていいかしら？」

リアス先輩は呼びにくそうにアザゼルのことを先生と呼びそう尋ねる。

「ああ。よろしく頼む。

悪魔のルートで冥界入りするのは初めてだ。楽しみだぜ。いつもは当たり前だが墮天使側のルートだからな」カラカラと笑うアザゼル。

そして、思い出したかのように笑いを止めると俺の方を向いて口を開いた。

「士織、今回の冥界への里帰りだが、お前も来てもらうぜ？」

新鋭若手悪魔の会合の時に前をお前を紹介するらしい。

早いところ眷属を見つけておけよ？

レーティングゲームはお前もやらないといけないんだからな」

「……やっぱり俺も行かないといけないのか」

よりにもよって紹介されるために行かないといけないとは、つくづく気分が乗らない。

「しつかり準備しておけよ？」

どうせお前も修行するつもりで予定なんか入れてねえだろ？」

アザゼルの言葉に俺は言い返せなくなる。……凶星だったからだ。

「んじゃあ、いろいろ頼んどくぜ。」

俺はこの後ちよつくら飲みに行ってくるからよ」

ウキウキした様子でアザゼルは言う。

朝っぱらから酒を飲みに行くダメな大人が目の前にいた。



———  
旅立ちの日。

俺たちがまず向かったのは最寄りの駅。

今回は墮天使4人娘、オーフィスの姿もあった。

ちなみにオーフィスだが、俺が【封印魔法】、【認識阻害魔法】を全力でかけているため彼女がオーフィスだとバレることはないだろう。

リアス先輩、朱乃先輩は迷いなく駅に設置されているエレベーター

の方へ向かっていた。

少し狭いエレベーターに2人が入ると言う。

「じゃあ、まずはイツセーとアーシアと土織が乗ってちょうだい。先に降りるわ」

「降りる……?」

此処って上にしか行けなかったはずじゃ……」

リアス先輩の言葉に怪訝そうな表情を浮かべる一誠。

「良いから入ってちょうだい?」

苦笑混じりに手招きをするリアス先輩。

俺たちはそれに応じて素直にエレベーターに乗り込む。

「慣れている祐奈たちは他の皆もつれて来てちょうだいね?」

「わかりました部長」

祐奈は微笑んで答える。

それと同時にエレベーターの扉は閉まった。

階層表示はやはり「1」と「2」しかないわけだが、リアス先輩はスカートのポケットからカードらしきものを取り出し、電子パネルに向ける。

すると、ピツという何かしらの電子音が響き、カードに反応した。

「うおっ?!」

一誠の驚いたような声。

それもそうだろう。

上にしか行かないと思っていたエレベーターが下へと降り始めたのだから。

「……なるほど。」

所謂悪魔専用の秘密の経路があったのか」

「流石は土織ね……」

ええ。その通りよ。

「この駅の地下に秘密の階層があるのよ」

「そうなんですか?」

……知らなかったなあ……俺、この町で育ちましたけど気づきませんでした」

「それはそうよ。」

士織の言う通り悪魔専用のルートだもの。

普通の人間は一生辿り着けないわ。

こんなふうはこの町には悪魔専用の領域が結構隠れているのよ?」

クスクスと笑って、リアス先輩は一誠に説明した。

今まで何故か訪れた場所で少々の違和感を感じていたのはおそらくその経路のせいだったのだろう。

エレベーターに乗り込み、降りていくこと一分程。ようやくエレベーターは停止した。

開かれた扉をくぐって出た俺の視界に映ったのは————だ  
だっ広い人工的な空間。

何処か駅のホームをイメージさせる造りだがなどと考えながら見渡すと、案の定線路を見つめる。

俺たちは少し待って全員が揃うのを待つ。

「————全員揃ったみたいね。」

それじゃあ、3番ホームまで歩くわよ」

リアス先輩と朱乃先輩の先導のもと、俺たちは歩き出す。

「……士織」

「ん?どうしたんだ? 絢奈」

いつの間にか俺の隣にやってきていた絢奈。その表情は何処か真剣で、何かを言いたそうだった。

しばしの間無言だったが、絢奈は覚悟を決めたように口を開く。

「士織。眷属を持つんだろう?」

「まあな。」

サーゼクスからの依頼っつーことだし早めに眷属を作らないとなとは思ってる」

「ならば————私を眷属にしてみないか?」

俺の歩みが止まる。

絢奈の顔を見つめてその言葉を頭の中で反復させた。  
まさか絢奈がそんなことを言うとは全く考えていなかった。

「……なんでだ?」

俺は今怪訝そうな表情を浮かべているだろう。絢奈を正面に見据えて言った。

「なに、深い意味は無いさ。」

しいて言うのなら……土織といれば楽しそうなことがたくさんありそうな香りがする。

それに強くなれそうだ」

にやりと笑う絢奈の姿に俺はクスリと笑ってしまう。

——変して、真面目な表情を向けた。

「俺の眷属になるってことは面倒ごとが増えるぞ?」

面倒臭がりなお前にそれが耐えられるか?」

「ふん、私は実はマメだぞ?」

——絢奈は笑う。

「中途半端は許さない。」

最低でも一誠と互角に戦える強さになってもらうぞ?」

「望むところだ」

——絢奈は満足気な表情を浮かべる。

「……後の人生を不意にするかもしれないぞ?」

「それこそありえないだろう?」

土織ならば嫌でも愉快な事を引き連れてきそうだ」

——絢奈が微笑む。

俺は絢奈の即答の数々に言葉をなくす。

そして、バツクを乱暴にだが漁ってひとつのモノを掴み出すと、絢奈に向けてそれを放った。



「――【兵士】だ。」

よろしく頼むぜ？ 絢奈」

絢奈は俺が放ったモノ――【兵士】の駒をキャッチすると、目を丸くしてこちらを見つめてくる。

「な、なんで……」

「なんで？」

お前が俺の眷属になりたいたいって言ったんだろ？」

「そ、それはそうだが……」

……こんな簡単に決めてしまってもいいのか……？」

しおらしい態度で絢奈は言う。

その姿はどうも違和感を覚える。

元は男だったくせに、最近では精神が身体に引っ張られているようだ。

「良いんだよ。」

それに、お前にならその駒を預けても良さそうだ」

俺はそれだけ告げると随分と置いていかれてしまったりアス先輩たちの後を追っていった。

「――ありがとう、士織」



リアス先輩たちに追いついた俺の前にあったのは列車らしきもの。『らしき』と俺が言ったのは、普通にある列車よりもフォルムが独特だったからである。

鋭角で、悪魔を表す紋様がこれでもかと刻まれている。その中には、グレモリーの、そしてサーゼクスの紋様もあった。

「グレモリー家所有の列車よ」

俺の考えたことを先読みしたかのようにリアス先輩がいう。

「さあ、乗りましよう？」

リアス先輩の言葉に合わせるかのように、列車のドアが自動で開かれた。初めに乗り込んだリアス先輩に続いて俺たちも列車の中へ足を踏み入れる。

—— 冥界への旅路はどうかやら列車のようだ。

## 第74話

S i d e 土織

——リイイイイイイイイイイイ。

発車の汽笛が鳴らされ、俺たちを乗せた列車は動き出す。

座っているのは列車の中央。リアス先輩は列車の1番前の車両にいるのだが、何でも眷属などは中央から後ろの車両に乗らないといかないらしい。

俺としてはどうでもいいのだが、細かいしきたりは面倒である。

「あ〜！

絢奈、土織から【悪魔の駒】貫ったんすか?!」

俺の対面席に座っている美憧がその隣に座っている絢奈が持つ【悪魔の駒】を見て声を上げた。

「ふっ。

「どうだ？羨ましいだろう?」

見せびらかすように絢奈は【兵士】の駒を手置き、指先で弄んでいる。

「土織くん、僕にはくれないの?」

隣に座っていた祐奈は俺の顔を覗き込みながら言う。

俺はそんな祐奈の頭を優しく撫でて口を開いた。

「既にリアス先輩の眷属なんだから横取りするのは悪いだろう?」

「……それもそうだけど……」

「そう拗ねんなって。」

別に眷属にならなくてもずっと一緒だろう?」

「……ん……」

手を少し滑らせて、祐奈の頬を撫でてやれば気持ちよさそうな声を出す。まるで猫のようでこのままずっと愛でてられそうさ。

「土織っ!」

ウチも【悪魔の駒】欲しいっす!

絢奈が貰えたならウチもイイっすよね?!」

体を乗り出してそう言った美憧。

俺はその行動に目を丸くしてしまう。

「これから美憧。」

士織を困らせるな。

士織の眷属になりたいならそれなりの——」

「ああ、良いぞ。」

【兵士】の駒で良いならだけどな」

「モチロンっす!!」

士織の眷属になれるなら何でもイイっすよ!!」

キラキラとした瞳で嬉しそうに言う美憧。

それと対照的に、絢奈は何故?という表情を浮かべていた。

「な、何故だ?!

私の時はもつとシリアスだっただろう!?!」

少々の涙を目尻に浮かべて絢奈は勢いよく立ち上がる。

「お前は日頃の自分のことを考えてみる。

飽き性で面倒くさがり屋のお前にすんなり駒を渡せるわけがないだろ?」

「う、うぐぐ……そ、それはそうだが……」

「士織!・士織!・

そんなことはどうでもいいっすからウチにも早く駒をちよーだ  
いっす!」

ニコニコとした表情で美憧は俺の手を掴む。

俺はバツクを手に取ると、中を漁って駒を1つ取り出し、美憧に差し出した。

「美憧、絢奈にも言ったが俺の眷属になるのなら中途半端は許さない。

最低でも一誠と互角に戦えるくらいにはなってもらうからな?」

「望むところっす!」

美憧は気合い十分にそう言うと、【兵士】の駒を受け取った。

「これでウチも士織の眷属っす♪

絢奈だけ抜けがけはさせないっすよ?」

「……ふん!」

抜けがけなんてつもりは全くなかったさ」

「ホントっすかねえ〜?」

それからは絢奈と美憧の2人でこれからのことを話し始め、2人の世界に入っっていつていた。

——閑話休題。

「そういえばどれくらいで着くんですか?」

俺とは別の席に座っていた一誠が言う。

「一時間程で着きますわ。」

この列車は次元の壁を正式な方法で通過して冥界にたどり着けるようになっていますから」

その問いかけに答えたのは朱乃先輩。

一誠の対面席に座っているため、朱乃先輩も俺とは別の席である。「俺、てつきり魔法陣での転移で冥界入だとおもってたんですけど……」

「通常はそれでもいいのですけれど、イツセーくんたち新眷属の悪魔は正式なルートで1度は入国しないと違法入国として罰せられてしまうのです。」

だから今回はこうやって正式なルートでいつているのですわ」  
「へえ……。」

そういうことだったんですか」

色々面倒な決まりがあるようで俺はついついあくびがでてしまう。

「——みんなリラックス出来てるみたいね」

おそらく1番前の車両から来たのであろうリアス先輩の声が聞こえてくる。

そちらの方へ視線を向けるとリアス先輩と初老の男性の姿が見え

た。

「ホツホツホツ。」

リアス姫の眷属の皆さんは良い者ばかりのようですね」

初老の男性は楽しそうな笑い声を上げてこちらを見てくる。

「初めまして、姫の新たな眷属悪魔の皆さん。」

私はこのグレモリー専用車両の車掌をしているレイナルドと申します。

——以後、お見知りおきを」

丁寧な挨拶と一礼。

俺たちはそれに返すように立ち上がると一礼を返した。

「こちらこそ初めまして。」

リアス・グレモリー眷属、【兵士】の兵藤一誠です。

どうぞよろしくお願いします」

「アーシア・アルジエントです！」

【僧侶】です！

よろしくお願いします！」

「ゼノヴィアです。」

【騎士】、今後どうぞよろしくお願いします」

「兵藤士織。」

リアス先輩とは……協力関係といったところだな。

一応【帝王】<sup>カイザー</sup>の駒を持つ中立チームのトップだ」

ひとまず俺たち4人だけがこの場では自己紹介をしておく。

こういった挨拶を終えると、車掌のレイナルドは何やら特殊な機器を取り出し、モニターらしきもので一誠たちを捉え始めた。

「え、えつと……っ？」

一誠、アーシア、ゼノヴィアは困ったような表情を浮かべていたが、それに気がついたレイナルドが口を開く。

「これはあなた方を確認、照合する悪魔世界の機械です。」

この列車は正式に冥界へ入国する重要かつ嚴重を要する移動手段です。

もし、偽りがあつた場合、大変なことになりますもので。

今のご時世、列車を占拠されたら大変なのです」

「あなたたちの登録は駒を与え、転生した時冥界にデータとして記載されたわ。」

だからそれをその機械で照合させるのよ。

問題ないわ。みんな本物だから」

リアス先輩は微笑みながら告げる。

一誠たちが終わると次は俺たちの方へも向けられて、簡単にスキヤンされていった。

「姫、これで照合と同時にニューフェイスの皆さんの入国手続きも済みました。」

あとは到着予定の駅までごゆるりとお休みできますぞ。

寝台車両やお食事を取れるところもありますので目的地までご利用ください」

レイナルドはニッコリと微笑む。

入国手続き自体は簡単なものだったため、俺としては楽でよかったとしか言いようがない。

「ありがとう、レイナルド。」

あとは……アザゼルね」

リアス先輩はアザゼルがいる席の方へ視線を向けるが——  
アザゼルはぐつすりとお眠りこけていた。

「……よくもまあ、ついこの間まで敵対していた種族の移動列車で眠れるものね……」

リアス先輩は呆れ顔ではあったが、少し笑っていた。

「ホッホッホッ。」

墮天使の総督さまは平和ですな」

レイナルドも愉快そうに笑っている。

アザゼルは寝たままであったが照合も済ませ、全員無事入国手続きを済ませたのだった。

## 第75話

S i d e 土織

俺たちの乗る列車は何事もなく進んでいく。窓の外には紫色の空が広がり、広大な土地が広がっていた。しばらく前に次元の壁を突破するというアナウンスも入り、一誠たちは興味深そうに窓の外へ視線を向けている。

『間もなくグレモリー本邸前。間もなくグレモリー本邸前。』

皆さま、長時間のご乗車お疲れ様でした』

「着いたか……」

俺はアナウンスを聞き終わると背伸びをする。

列車はほとんど揺れを感じさせないほどに停止し、俺たちは降車しようとして立ち上がった。

「あれ？先生は降りないんですか？」

一誠が未だに座ったままのアザゼルに向けて言う。

「ああ、俺はこのままグレモリー領を抜けて、魔王領の方への行く予定だ。」

サーゼクスたちと会談があるからな。

……所謂『お呼ばれ』だ。

終わったら俺もグレモリーの本邸に向かうから先に行って挨拶でも済ませてこい」

アザゼルは手を振ってそう説明すると席に座り直し、欠伸を噛み殺していた。

「俺も行くべきか？」

「いや、土織もあいつらと一緒に行ってこい。」

何、まだ面倒なことはしなくていいんだよ」

からからと笑うアザゼルは俺を急かすように手を振る。

「……そうか。」

じゃあ、また後で」



それだけ言い残すと改めてアザゼルを除いたメンバーで駅のホームに降りた。

——瞬間。

『リアスお嬢さま、おかえりなさいませっ!!』

怒号のような声、そして花火の音、銃の空砲、楽隊の音楽といった様々な音が響く。

突然のことに一誠たちは顔を引き攣らせている。祐奈たちにとってはなれたことのようなのだが、初見の者にとっては驚くしかない状況だ。

「ヒイヒイ……」

ひ、人が、いっぱい……」

ギヤスパーは瞳に涙を溜めて一誠の腕にしがみついていた。

『リアスお嬢さま、おかえりなさいませ』

執事、メイドといった人たちが改めてリアス先輩に向けて頭を下げている。

「ありがとう、皆。」

「ただいま。今帰ってきたわ」

満面の笑みを浮かべて、リアス先輩は言う。

そこへ見知った顔の女性——銀髪のメイド、グレイフィアが1歩出てきた。

「お嬢さま、おかえりなさいませ。お早いお着きでしたね。道中ご無事で何よりです。」

そして、兵藤士織さま、ようこそおいでくださりました。長旅ご苦労さまです。

さあ、皆さま馬車へお乗りください。

本邸までコレで移動しますので」

グレイフィアに誘導されて、豪華絢爛そうな馬車のもとへと向かう。

「私は眷族たちと行くわ。」

イツセーやアーシアは初めてで不安そうだから  
「わかりました。」

何台かご用意いたしましたので、皆さまもご自由にお乗りください  
「い」

俺たちはその言葉に頷くと軽く話し合いをして馬車に乗り込んで  
行く。

俺が乗った馬車にはオーフィス、緋奈、美憧、祐奈が同乗していた。  
全員が乗り込むと、馬車は蹄の音を鳴らしながら進み出す。

外の風景をちらりと見ると、舗装された道と綺麗に剪定された  
木々。

なんとなしに道の先を見れば、巨大な建造物が視界に飛び込んでき  
た。

「……………うわ……………でか……………」

「ああ、あれは部長のお家のひとつだよ士織くん」

「ひとつってことはまだ他にも?」

「えつと……………まあね?」

苦笑混じりの表情で祐奈が答える。

「流石だな……………」

魔王を排出した家ともなるとそれ相応の位にいるのだろう。

ふと、外を見れば美しい花々が咲き誇り、見事な造形の噴水、その  
周りを色彩様々な鳥が飛び回っていた。

「……………着いたみたいだな」

馬車の揺れも止まり、ドアも開かれる。

執事らしき者が俺たちに会釈すると外へと促していた。

俺たちはそれに従い馬車から降りていく。

両脇にメイドと執事が整列しており、道を作っていた。赤いカー  
ペットが巨大な建造物の方へと伸びており、城門が鈍い音をたてて開  
かれていく。

なんとも盛大な出迎えだ……………

「お嬢さま、眷族の皆さま、兵藤士織さま、そしてお連れの皆さま。  
どうぞ、お進みくださいませ」

グレイファイアが会釈して、俺たちを促してくれる。

「さあ、行くわよ」

リアス先輩がカーペットの上を歩きだそうとしたその時だった。

綺麗に整列したメイドの列から小さな人影が飛び出し、リアス先輩に抱きついたので。

「リアスお姉さま！おかえりなさい！」

揺れるのはサーゼクスを彷彿とさせる紅髪。まだ幼い少年だった。

「——ミリキヤス！ただいま。」

大きくなつたわね」

リアス先輩もその少年を愛おしそうに抱きしめていた。

何処と無く、リアス先輩にサーゼクスと似た気配を感じる。

「えつと……リアス部長。」

「この子は一体……？」

一誠は目を丸くしながらその様子を眺め、口を開いた。

「この子はミリキヤス。ミリキヤス・グレモリー。」

お兄さま——サーゼクス・ルシファーさまの子供なの。

つまり……私の甥ということになるわね」

その説明に俺は納得する。

あの紅髪はサーゼクス譲りということだろう。

「ほら、ミリキヤス。挨拶をして？」

「この子は私の新しい眷族なの。」

それにまだあなたを知らない子たちがいるわ」

「はい。」

ミリキヤス・グレモリーです。初めまして」

丁寧な物言い、緊張もしていないところを見るとこれくらい場面は慣れているのだろう。

「どうも初めまして。」

リアス・グレモリーさまの眷族、【兵士】<sup>ポーン</sup>の兵藤一誠です」

会釈を返した一誠は少年——ミリキヤスに人懐っこい笑みを向けた。

「魔王の名は継承した本人のみしか名乗れないから、この子はお兄さ

まの子でも『グレモリー』なの。

私の次の当主候補でもあるのよ?」

ミリキヤスの頭を優しく撫でながらリアス先輩は言う。

「さあ、屋敷へ入りましょう?」

リアス先輩はミリキヤスと手を繋いで門の方へ進み出す。俺たちもそれについて行くように歩みだした。

巨大な城門を潜り、中を進む。城門の奥にはまだいくつかの門があり、次々と開門されて行き、そこを潜っていく。

ついに玄関のホールらしきところへ辿り着いた。

玄関のホールにしては広く、そこは舞踏会でも開かれるのではないかと言わんばかりの絢爛さである。

「お嬢さま、早速皆さまをお部屋へお通ししたいと思いますのですが」

グレイフィアが手を上げると、俺たち1人につき1人のメイドが傍にやって来る。

……俺の所だけ3人いるのはどういうことだろうか?

「そうね、私もお父さまとお母さまに帰国の挨拶をしないといけないし」

「旦那さまは現在外出中です。」

夕刻までお戻りにならないと聞いております。

夕餉の席で皆さまと会食をしながら、お顔合わせされたいとおっしゃっております」

「そう、わかったわ、グレイフィア。」

それじゃあ、皆にはそれぞれ自分の部屋で休んでもらおうかしら。荷物は既に運んでいるわね?」

「はい。」

お部屋の方は今すぐにもお使いになれるよう準備しております」グレイフィアの言葉に俺の周りにいた美憧や絢奈などからは息を吐くのがわかった。

どうやらここまでの道のりに緊張して疲れていたようだ。

見れば一誠の近くでもギヤスパーやアーシアが疲れているようだ。

「——あら、リアス。帰ってきてたのね」

その時、2階の方から女性の声が聞こえてくる。

前方の階段から下りてきたのはドレスを身に纏った女性、と言うよりは少女。

リアス先輩よりも少し歳が上だろうという見た目であった。

——亜麻色の髪に少々目つきがキツめの女性。

それは何処かで見覚えのある姿。

「お母さま。ただ今帰りました」

そう、以前嫁自慢という話の時に見えた、グレモリー卿の嫁——

——つまりリアス先輩のお母さんである。確か名前をヴェネラナ・グレモリーだったはずだ。

「お母さん……家の母さんとどっこいどっこいだな……」

まるでリアス部長のお姉さんみたいだ……」

「あら、そんなに若く見えるかしら？」

嬉しいことをおっしゃいますのね」

一誠の眩きにヴェネラナ・グレモリーは頬に手をやり微笑む。

「悪魔は歳を経れば魔力で見た目を自由に出来るのよ。」

お母さまはいつも今の私くらいの年齢好な姿で過ごされているの」

「便利なんですね……」

一誠は顎に手を当てて呟いた。

確かにその一言につきるだろう。

ヴェネラナ・グレモリーはクスクスと小さく笑うと、こちらを見据えて口を開く。

「初めまして、私はリアスの母、ヴェネラナ・グレモリーですわ。」

皆さん此処を我が家だと思ってゆったりしていつてくださいますか？」



—— 玄関ホールから各々の部屋へ向かって数時間。

現在俺たちはダイニングルームにて、夕食の席についていた。

席についているのは今回、冥界に来たメンバー全員と、リアス先輩の母親であるヴェネラナ・グレモリー、父親であるグレモリー卿——

—— ジオテイクス・グレモリー、そしてミリキヤスである。

「遠慮せずに楽しんでくれたまえ」

どう考えても普通なら食べ切ることとは不可能な程の料理が長大なテーブルに並べられ、ジオテイクス・グレモリーの言葉で会食が始まった。

こういう場の食べ方は本の知識でしか持っていないが、一応様にはなっているはず。

俺が教えた一誠もなんだかんだ綺麗に食べれているのだから。

—— ふと、視線を対面の席に向けてみると、表情を曇らせた

小猫の姿があった。

料理にも全く手をつけず、様子がおかしい。

小猫と目が合ったため、少し微笑んでみるが—— 無表情のまま視線を外されてしまう。

「うむ。

本日遠方から足を運んでくれた諸君、此処を我が家と思ってくれるといい。

冥界に来たばかりで勝手がわからないだろう。

欲しい物があつたら、遠慮なくメイドや執事に言ってくれたまえ。

直ぐに用意させよう」

朗らかに言うジオテイクス・グレモリー。

「ところで兵藤一誠くん」

「はい？なんででしょうか？」

ジオテイクス・グレモリーは一誠に顔を向けると口を開く。

「ご両親はお変わりないかな？」

「ええ。」

2人とも元気すぎるほどですよ。

リアス部長の故郷に行ってくると言ったらお土産を期待するほどに。

あんなに家を立派な物にしていた上でそんなことを言うとはどうもわがままな親で……」

一誠は冗談も交えつつ、当たり障りのない会話をしていた。

「ふむ、お土産か……なるほど」

ジオテイクス・グレモリーは手元にある鈴を1度軽く鳴らす。

すると直ぐに執事らしき人が傍に寄っていく。

何かお土産に料理でも持たせるつもりなのだろうか？

「旦那さま、御用でしょうか？」

「うむ。」

兵藤さん御夫婦宛に城をひとつ用意しろ」

訂正しよう。

——スケールが違いすぎる。

俺はジオテイクス・グレモリーの言葉に啞然とした表情を浮かべてしまう。

見れば、一誠も目を点にしていた。

「はっ。」

西洋式でしょうか？それとも和式でしょうか？」

「悩むところだな……。」

いつそのこと両方でも良いのでは……。」

「ちよ、ちよつと待ってください！」

それはいくら何でもお土産の中に入らないかと思うんですが……。」

一誠は焦り気味の態度でそういう。

確かにそれも仕方が無い会話だったと思うが。

「あなた、日本は領土が狭いのですから、城なんてものを渡しても困ってしまわれませう」

「なんと。確かにそうだったな。」

ふーむ……城が駄目ならば何が良いのだろうか……」

「お父さま。」

あまりそういう気遣いは逆にあちらへ迷惑をかけますわ。

イツセーと士織のご両親は物欲の強い方ではありませんし」

リアス先輩のフォローも入り、お土産が城になることはほとんどなくなつただろう。

ジオテイクス・グレモリーは「なるほど」と深く頷いていた。

「——兵藤士織くん」

お土産の話も終わり、ゆつくりと食事を進めていると、今度は俺に向かつてジオテイクス・グレモリーは口を開いた。

「何か？」

「いや何、ちよつとした質問をね……」

真剣な表情を浮かべたジオテイクス・グレモリー。

この場で話すべき重要な話かと意識をそちらへと移す。

「——リアスとライザーくんの関係に進展はないか知らないかね？」



「……は……?」

一瞬、何を言われたのかがわからなかった。

「リアスは話したがらなくてね。」

それならば近しい者に話を聞くのが良いと思って聞かせてもらっただんだ」

「あら、それは私も気になるわ。」

士織くん……だったわね?」

私にも聞かせてちょうだい?」

気がつけばヴェネラナ・グレモリーもこちらを見ていて、興味深そうな表情を浮かべていた。

「お父さまーお母さまー」

そ、そんな話を聞かないでくださいっ!」

顔を真っ赤に染めて、リアス先輩が立ち上がる。

「あら、少しくらいいいじゃないの。」

あなたが話してくれないから私もジオも気になっているのよ?」

「む、娘の恋路に興味津々にならないでください!」

「娘の恋路だから気になるのよ?」

クスクスと笑うヴェネラナ・グレモリー。ジオティクス・グレモリーもその様子を微笑ましそうに見ていた。

「それで、どうなのかしら?士織くん」

「あく……リアス先輩が話してくれないならライザーに直接聞いてみたらどうです?」

「まあ!それはいい考えね。」

2人つきりでオハナシしましょう」

口に手を当てて今気がついたというような反応を見せるヴェネラナ・グレモリー。

「だ、駄目ですからね?!お母さま!」

「あらあら?何故かしら?」

「そ、それは……」

リアス先輩はヴェネラナ・グレモリーの姿をしっかりと見直してから、頭を振った。

「と、とにかく！」

ライザーと2人つきりで話すなんて駄目ですからね！」

「ふふふ……変なリアスね」

可笑しそうに笑うヴェネラナ・グレモリーだったが、その表情にはリアス先輩をからかっているような色が見えた。

——その後も、賑やかな食事が続いていった。

## 第76話

どうも、兵藤士織だ。

冥界にあるリアス先輩の自宅に着いた次の日。

俺たちは早速別の場所へと向かっていた。

冥界へとやってくる時に使った列車に再び乗車し、3時間ほどの道のりを終えた先にあつたのは——かなり大きな都市。

近代的なデザインを見せるその風景は此処がそれだけ発展しているのを理解するには十分だ。

「此処は魔王領の都市ルシファード。

旧ルシファアーさまがおられたと言われる冥界の旧都市なんだよ?」

祐奈は俺の隣を位置取り、説明するような口調で言った。

「このまま地下鉄に乗り換えるよ?」

表から行くと騒ぎになっちゃうから……」

苦笑いを浮かべる祐奈。

周りの一誠たち新眷属以外こリアス先輩の眷属たちはその言葉に頷いていた。

「——————キャーッ!」

リアス姫さまあああああつ!!」

突然、黄色い歓声が耳を襲ってくる。

見ればホームにいた悪魔たちがリアス先輩を見て憧れの眼差しを向けていた。

「部長は魔王の妹。

しかも美しいのですから、下級、中級悪魔から憧れの的なのですよ?」

微笑みを浮かべる朱乃先輩が言う。

なるほど、確かに容姿端麗ならば人気があってもおかしくはないだろう。

「ヒイヒイヒイ……」

あ、あくまがいつぱいいい……」

ギヤスパーは一誠の背中に張り付いて悪魔の多さと声に反応して慌てふためいていた。

「困ったわね……」

これ以上騒ぎになる前に急いで列車に乗りましょう？

専用の列車は用意してあるのよね？」

リアス先輩は連れ添いの黒服男性の1人に聞く。

どうやら俺たちへのボディガードらしいのだが……正直道案内程度にしかならないと俺は思っている。

「はい。ついてきてください」

こうして俺たちはボディガードに連れられて地下鉄の列車へと移動したのだった。

「リアスさまあああああつ!!」

女性だけではなく男性にもやはり人気らしく、リアス先輩は苦笑しながらも男性の群れに手を振っていた。



地下鉄からさらさらに乗り換え、5分程。

着いたのは——都市で1番大きい建物の地下にあるというホームだった。

若手悪魔、旧家、上級悪魔のお偉いさん方が集まるといいう会場がこの建物にあるのだという。

俺たちはリアス先輩を先頭に地下からエレベーターに乗り込む。随分と広いエレベーターだ。

「——皆、もう1度確認するわ。」

何があっても平常心、何を言われても手を出さない。

常に冷静でいつもの自分をイメージしなさい？

——上にいるのは将来の私たちのライバルたちよ。無様な姿は見せられない」

気合の入ったリアス先輩の言葉に眷属たちは表情を引き締めていた。

「士織からは何かないのか？」

「そうっすよ！」

ウチたちに言うことはないんすか？」

絢奈、美憧の2人は俺の方を向いて期待の眼差しを向けてくる。

俺は一瞬苦笑いを浮かべ、口を開いた。

——肩の力を抜け。

自然体で、リラックスしろ。

堂々とした態度で背を伸ばせ。

……それさえできれば恥ずかしくない。

後はその胸に挫けることのないプライドを持って。

——それでお前たちは『最強』だ」

言い終えて、軽く頭を撫でてやる。

そして、エレベーターが停止して扉が開いた。

「さて、行くか」

俺はそう呟いて、エレベーターから足を踏み出した。もちろん、リアス先輩たちも一緒にだ。

「——ようこそ、グレモリーさま。そして兵藤さま。  
こちらへどうぞ」

広いホール。そこには使用人らしき者が居て、俺たちに会釈をしてきた。

使用人の後続く俺たち。

通路を進んで行くと、一角に複数の人影が——。

「サイラオーグ！」

リアス先輩はその人影の一人を知っている様子だった。あちらもリアス先輩を確認すると近づいてくる。大体俺たちと同じ年程の男性。

黒髪の短髪で野性的なイメージを持たせる。活動的な格好をしていて、露出されている肉体は引き締まり、筋肉質だ。

そして、感じるオーラの質からかなりの強者というのが分かる。

「久しぶりだな、リアス」

リアス先輩とにこやかに握手をかわすサイラオーグと呼ばれた男性。

「ええ、懐かしいわ。」

変わりないようで何よりよ。

初めての者もいるわね……。

彼はサイラオーグ。私の母方の従兄弟でもあるのよ？」

「俺はサイラオーグ・バアル。」

バアル家の次期当主だ」

堂々としたその姿に落ち着いた様子はまさしく強者のそれ。

彼が若手悪魔だというのならその強さは群を抜いてるだろう。

「それで、こんな通路で何をしていたの？」

「……ああ、くだらんから出てきただけだ」

「……くだらない？他のメンバーも来ているの？」

『アガレス』も『アスタロト』も既に来ている。

拳句『ゼファードル』だ。

着いた早々にゼファードルとアガレスがやり合い始めてな」

心底嫌そうな表情を浮かべる男性——サイラオーグ。

やり合い始めたということはそういうことだろう。

俺が溜息を吐いていると建物が揺れ、巨大な破砕音が響いた。

リアス先輩はそれが気になったのか、躊躇いもなく音のした方向——

——大きな扉へ向かった。

「まったく……だから開始前の会合などいらないと進言したんだ……」

サイラオーグは嘆息しながらも自分の眷属らしき者たちとリアス先輩の後に続く。

俺もその後を追いかけるように足を進めた。

開かれた大きな扉の向こうには——破壊され尽くした大広間。

テーブルから装飾品にいたる全てが見るも無残に破壊されている。その中央には両陣営に分かれた悪魔たちが睨み合っていた。

その手には武器が握られ一触即発の様相だ。

一方は邪悪そうな格好の魔物や悪魔たち。

もう一方は比較的普通そうな悪魔たち。

ただ、両方共に殺意の混じったオーラを放っていた。

まだ、リアス先輩たちよりも少し上にいる。

俺の目測だがそう感じられた。

「ゼファードル、こんなところで戦いを始めても仕方なくてはなくて？馬鹿なの？死ぬの？死にたいの？殺しても上に咎められないかしら？」

睨み合う二陣営の片方。比較的普通そうな悪魔たちの1人、女性の悪魔が息継ぎも無しにまくし立てるように言う。

「ハッー言ってるよクソアマッー！」

俺がせっかくそっちの個室で1発仕込んでやるって言ってやってんのによ！

アガレスのお姉さんはガードが堅くて嫌だね！

へっ、だから未だに男も寄ってこずに処女やってんだろ？！

……つたく、魔王眷属の女共はどいつもこいつも処女臭くて敵わねえわ！

だからこそこの俺が開通式をしてやろうって言ってるのによお！」  
えらく下品な言動の男性。

顔に魔術的なタトゥーを入れており、緑色の髪を逆立てている姿は

何処かチンピラじみていた。

「此処は時間が来るまで待機する広間だったんだがな……。

もつと言うなら、若手が集まって軽い挨拶を交わすところでもあった。

ところが若手同士で挨拶したらこの始末だ……。

血の気の多い連中を集めるんだ、問題のひとつも出てくる。

それも良しとする旧家や上級悪魔の古き悪魔たちはどうしようもない。

——無駄なモノに関わりたくはなかったのだが……流石に目に余る」

首をコキコキツ、と鳴らすとサイラオーグは睨み合う二陣営の方へと歩を進めた。

「一誠」

「……何だよ士織」

「アイツを見ておけ。」

少なくとも——今のお前じゃ敵わない」

「……んなことわかってるよ」

俺の言葉を最後に俺たちは黙り込んでサイラオーグの姿を目で追った。

「アガレス家の姫シーグヴァイラ、グラシヤボス家の凶兇ゼファードル。」

これ以上やるなら俺が相手をしよう。

いいか？いきなりだがこれは『最後通告』だ。

次の言動次第で俺は拳を容赦なく放つ」

サイラオーグの身体からはその身に収まりきれないオーラを感じる。

チンピラ悪魔はサイラオーグの言動が気に入らなかったのか、青筋を立てて、怒りの色を濃くする。

「バアル家の無能がチョーシのって——」

しかし、その言葉は最後まで紡がれることはなかった。

響いたのは激しい打撃音。



チンピラ悪魔はサイラオーグの一撃で広間の壁に叩きつけられたのだ。

壁が崩れるのと同時にチンピラ悪魔も落ちる。

既に気を失っているようで、立ち上がる気配はない。

「——言っただはずだ。『最後通告』だと」

リアス先輩たちよりも上にいるであろう若手悪魔を一撃……。

俺がふと、一誠の方を見ればその表情は獰猛な笑みに変わっていた。

サイラオーグの強者のそれに刺激されたようだ。

「……土織」

「なんだ？」

「俺を……鍛えてくれ。」

アイツに……サイラオーグ・バアルと互角にやりあってみたい……っ!!」

——迸る赤いオーラ。

感情に呼応して、一誠の中で赤い龍の帝王が叫びをあげているようにも見えた。

サイラオーグにもそれは感じられたようで、一誠の方を向いて口角を少しだけ、上げていた。

## 第77話

S i d e 土織

サイラオーグがチンピラ悪魔を殴り倒した後、一時はチンピラ悪魔の眷属たちが襲いかからんばかりの雰囲気だったが、サイラオーグの「主を介抱するのが先ではないのか？」という言葉でその場は収まりを見せた。

そして、シーグヴァイラと呼ばれた女性を化粧直しに向かわせ、傍にいたスタッフたちにその場の掃除を命じるという行動をしたサイラオーグは面倒ごとをやっと終えたと言わんばかりに息をひとつ吐き出した。

——騒ぎからしばらくして、化粧直しを終えたシーグヴァイラと呼ばれた女性、そして支取先輩が合流するとその場では若手悪魔たちが挨拶を交わしていた。

その席には一応俺もまざっている。

「私はシーグヴァイラ・アガレス。」

大公、アガレス家の次期当主です」

涼しい顔をして初めに言葉を発したのは彼女。

「ごきげんよう、私はリアス・グレモリー。」

グレモリー家の次期当主です」

「私はソーナ・シトリー。」

シトリー家の次期当主です」

そして、それに続くようにリアス先輩、支取先輩が挨拶をする。

主たちが席に着き、眷属はその後方で待機していた。

「俺はサイラオーグ・バアル。」

大王、バアル家の次期当主だ」

堂々とした自己紹介をするサイラオーグ。  
威風堂々とした態度に舌をまいてしまう。

そして、先ほどの騒ぎの中で優雅にお茶を飲んでいた優しげな雰囲気  
の少年も口を開く。

「僕はディオドラ・アスタロト。

アスタロト家の次期当主です。

皆さんどうぞ宜しく」

虫も殺せなさそうな雰囲気。

——しかし、その中にはきな臭いモノを感じた。

俺が目を細めていると、サイラオーグが口を開く。

「グラシャボス家は先日、御家騒動があったらしくてな。

次期当主とされていた者が不慮の事故死を遂げたばかりだ。

先程のゼファードルは新たな次期当主の候補ということになる。

……ところで、先程から無言で座ってるが、自己紹介はないのか？」

サイラオーグは俺を見てそう言う。

確かに此処に座っておきながら何も言わないというのはおかしい  
か……。

「俺は兵藤士織。

まだ知らない者の方が多いと思うが『中立チーム』のトップだ。

今回はサーゼクス・ルシファーからの依頼で此処にいる。

……レーティングゲームにも出る予定だ」

「なるほど……噂では聞いていたが本当だったとは……。

つまり、今日が正式な発表というわけだな？」

俺の言葉の意味を冷静に理解したサイラオーグは言う。

「おそろくだけどな。

俺はサーゼクス・ルシファーに呼ばれただけだ。

詳しいことは聞かされていないのさ」

俺が肩をすくめながら答えれば、サイラオーグは少々の笑みを浮か  
べた。

「何にせよ、戦うのが楽しみだ」

「そ〜というのは俺の弟とやってくれ」

親指を立てて、一誠が待機している方を指しながら、サイラオーグの言葉を躲す。

「皆さま、大変長らくお待たせいたしました。」

皆さまがお待ちでございます」

扉が開かれ、使用人が入ってきたかと思えばそう言っ、俺たちを誘導しようとしていた。

——ついに、行事とやらが始まるようだ。



俺たちが案内されたのは異様な雰囲気漂う場所だった。

かなり高いところに席が置かれており、そこに偉そうにふんぞり返る悪魔が座り、更にその上の段にも悪魔の姿。

そしてもうひとつ上の段には見知った顔——サーゼクス、その隣にはコスプレをしていないセラフォル——。

他にも若い男性が2人。

何処か怪しげな雰囲気のあるを醸し出す男性と恐ろしく気だるげな表情の男性。

おそらく『アジュカ・ベルゼブ』と『ファルビウム・アスモデウス』なのだろう。

——あれが、冥界のトップ『四大魔王』。

いずれにせよ、俺たちは今、お偉いさん方に高い位置から見下ろされている状態だ。

明らかに見下した視線に苛立ちを感じる。

若手悪魔、そして俺は1歩前に出て、言葉を待った。

「よく、集まってくれた。」

次世代を担う貴殿らの顔を改めて確認するため、集まってもらっ

た。

そして、はるばるご苦労、中立チームとやらのリーダー殿。

この度は我々のレーティングゲームに試験的に参加するとの話……怪我には十二分にお気をつけください」

初老の男性悪魔がにやついた表情で俺の方を見ていた。周りの悪魔たちもクスクスと笑っている。

俺を見下して蔑んでいるのが丸わかりだ。

「君たち6人は家柄、実力共に申し分のない次世代の悪魔だ。

だからこそ、デビュー前にお互い競い合い、力を高めてもらおうと思う。

そして、中立チームのリーダーである兵藤士織くんのレーティングゲーム参加が今後の新たな取り組みに良い影響を与えてくれることを願っている」

その場の空気を断ち切るようにサーゼクスは立ち上がって言った。

「我々もいずれ『禍カオス・ブリゲードの団いぐさ』との戦いくさに投入されるのですね？」

サイラオーグはサーゼクスに向かって直球に訊く。

「それはまだわからない。

だが、出来るだけ若い悪魔たちは投入したくないと思っている」

サーゼクスの答えに納得出来ない様子のサイラオーグは眉を上げ上げた。

「何故です？」

若いとはいえ、我らとて悪魔の一端を担います。

この歳になるまで先人の方々からご厚意を受け、なお何も出来ないとなれ——」

「サイラオーグ、その勇氣は認めよう。

しかし、それはまだ無謀というもの。

何より未だ成長途中の君たちを戦場に送るのは避けたい。

それに次世代の悪魔を失うというのはあまりに大きいのだよ。

理解して欲しい。君たちは君たちが思っている以上に我々にとって宝なのだよ。

だからこそ、大事に、段階を踏んで大きく成長して欲しいと思っ  
ている」

気持ちの籠ったサーゼクスの言葉にサイラオーグも一応の納得を  
したようだが、その表情にはまだ不満が見て取れた。

——そしてその後は、お偉いさん方のどうでもいい話や、  
レーティングゲームについての詳しい説明。

俺という存在の立ち位置などの話が進められていったのであった。

## 第78話

S i d e 土織

「さて、長い話に付き合わせてしまつて申し訳なかつた。なに、私たちは若い君たちに私たちなりの夢や希望を見ているのだよ。」

それだけは理解して欲しい。

君たちは——冥界の宝なのだ」

サーゼクスの言葉に嘘偽りの色は見えない。

愚直なまでに優しい、甘過ぎるといえばそれまでだが、そこがサーゼクスの持ち味なのだろうか？

「最後にそれぞれの今後の目標を聞かせてもらえないだろうか？」

サーゼクスの問いかけにいち早く答えたのはサイラオーグだった。

「俺は魔王になるのが夢です」

『ほう……』

数人のお偉いさん方は、正面から迷いもなく言い切つたサイラオーグの目標に感嘆の声を漏らしていた。

「大王家から魔王が出るとしたら前代未聞だな」

「俺が魔王になるしかない」と冥界の民が感じれば、そうなるでしょう。再び、顔を逸らすことなく、自信満々に言い切るサイラオーグ。

その精神面の強さも己を強者たらしめるものだろう。

そして次はリアス先輩が言う。

「私はグレモリーの次期当主として生き、そしてレーティングゲームの各大会で優勝することが近い将来の目的ですわ」

堅実な、しかしリアス先輩らしい目標。

その後も若手悪魔たちが夢、目標を、口にしていき、最後に残つたのは支取先輩だった。

「——冥界にレーティングゲームの学校を建てることです」

「……レーティングゲームを学ぶところならば、既にあるはずだが？」  
眉根を寄せていたお偉いさんは確認するように支取先輩に訊く。

それに対して表情を変えることなく、支取先輩は淡々と答える。  
「それは上級悪魔と一部の特権階級の悪魔のみしか行くことが許されていない学校のことです。」

私が建てたいのは下級悪魔、転生悪魔も通える分け隔てのない学舎です」

差別のない学校。

支取先輩の夢に俺は自然と頬が緩むのがわかった。

これからの冥界には良い場所になるだろう。

——そう、思ったのに。

『ハハハハハハハハハハハハハハハハッ!!』

お偉いさん方の笑い声が会場を支配する。

「それは無理だ!」

「これは傑作だ!」

「なるほど!」

所謂、夢見る乙女と言うわけですな!」

「若いと言うのは良い!しかし、シトリー家の次期当主ともあろう者がその様な夢を語るとは。」

此処がデビュー前の顔合わせの場で良かったというものだ」

見下し、馬鹿にするような言い草。

そんな中でも支取先輩は真つ直ぐに言う。

「——私は本気です」

セラフオルーも力強く頷き、その表情は満足げである。

しかし、お偉いさんは嘲笑うかのように口を開く。

「ソーナ・シトリー殿。」



下級悪魔、転生悪魔は上級悪魔たる主に仕え、才能を見出だされるのが常。

その様な養成施設を作っては伝統と誇りを重んじる旧家の顔を潰す事となりますぞ？

いくら悪魔の世界が変革の時期に入っていると云っても変えて良いものと思いませんか？

——全く関係の無い、たかが下級悪魔に教えるなど……」

そして、我慢出来なくなったのは——匙だった。

「黙って聞いてれば、なんでそんなに会長の——ソーナさまの夢をバカにするんスか!？」

こんなのおかしいッスよ!!

叶えられないなんて決まったことじゃないじゃないですか！

俺たちは本気なんスよッ!!」

「口を慎め、転生悪魔の若者よ。

……ソーナ殿、下僕の躰がなってませんか」

「……申し訳ありま——」

謝罪の言葉を口にしようとした支取先輩——いや、蒼那先輩を手で制する。

俺の行動に驚いたような視線を向ける蒼那先輩。

「……何のつもりかな？」

中立チームのリーダー殿？」

苛立った様子で低い声を出すお偉いさん。

しかし、俺はそれに無視を決め込み、サーゼクスの方へ視線を向けた。

「——おい、サーゼクス。

立派な人の夢を笑う畜生共がいるぞ？

老害の教育がなってないんじゃないかねえか？」

俺の言葉にサーゼクスは目を丸くする。

他の四大魔王も面食らった様な表情を浮かべていた。

「き、貴様アアアッ!!!」

こちらが下手に出ていればつけあがりおつてッ!

たかが人間風情が——」

顔を真つ赤にさせたお偉いさんの一人が立ち上がり怒声を撒き散らす。

あまりに鬱陶しい声に俺はちらりと視線を向ける。

「——『黙れ?』」

「——『ツツツ!!!?』」

少し殺気を込めてやれば、脂汗を浮かべて何も言えなくなつてしまふお偉いさん。

他のお偉いさん方も同様で、ガタガタ震える者すらもいる。

その姿にデジャヴを感じないでもないが……今は関係ない。

「……サーゼクス。」

お前が目標を聞かせろつて言つたんだ。

——それを笑う奴がこの場にいるつてことはどういうことだ?」

俺の指摘に苦い表情を浮かべるサーゼクス。

「夢を叶えることを目標に努力を重ねてる奴もいる————そこの匙が良い例だろうよ。」

「……配慮が足りてねえんじやねえか?」

「……確かに、その通りだ……。」

すまなかつた士織くん————いや、謝るべき相手はソーナだね。

本当にすまなかつた。

私の落ち度だ、どうか許して欲しい」

根本的な間違いに自分で気がついたサーゼクスは蒼那先輩の方を向いて頭を下げていた。

「あ、頭を上げてくださいサーゼクスさま!

私は気にしていませんから!」

慌て気味にそういった蒼那先輩。

サーゼクスもその言葉を聞いて頭を下げるのをやめる。

「もうーおじさまたちはうちのソーナちゃんをよつてたかっていじめ  
るんだもの！」

私だって我慢の限界があるのよ！

今日は士織ちゃんがしてくれたけど、今度は私がおじさまたちをい  
じめちゃうんだからっ！」

セラフオルーは涙目になりつつ、お偉いさん方に物申していた。

もちろん、俺からの殺気は止んでいる。

「ちようどいい。」

では、ゲームをしよう。若手同士のだ」

サーゼクスの一言にその場の空気がふたたび変化する。

「……リアス、ソーナ、戦ってみないか？」

リアス先輩、蒼那先輩の2人を見つめて、サーゼクスは提案した。

「……………」

「……………」

その提案に顔を見合わせ、驚きの表情を浮かべる2人。

かまわずにサーゼクスは話を続ける。

「もともと、近日中にリアスのゲームをする予定だった。

アザゼルが各勢力のレーティングゲームファンを集めてデビュー

前の若手の試合を観戦させる名目もあったものだからね。

——だからこそ、ちようどいい。

リアスとソーナで1ゲーム執り行ってみようではないか」

リアス先輩は一度息を吐くと、挑戦的な笑みを浮かべて蒼那先輩に  
向ける。

対して蒼那先輩は冷笑を浮かべ、やる気も十分の様だ。

「公式ではないとはいえ、私にとつての初のレーティングゲームの相  
手があなただなんて運命を感じてしまうわね、リアス」

「そうね、ソーナ。」

競う以上は負けないわ」

部長VS生徒会長。

オカルト研究部VS生徒会。

グレモリー家VSシトリー家。

様々なプライドを持つ2人が全力で戦おうという意味を見せていた。

「リアスちゃんとソーナちゃんの試合！」

うーん☆燃えてきたかも！」

セラフオールも大興奮だ。

「対戦の日取りは、人間界の時間で8月20日。

それまでは各自好きに時間を割り振ってくれて構わない。

詳細は改めて後日送信する」

サーゼクスはそう締めくくり、リアス先輩と蒼那先輩のレーティンゲームが行われることが決定した――。



「――そうか、シトリー家と対決とはな」

グレモリーの本邸に帰ってきた俺たち。

そこで迎えに出てきたのはアザゼルだった。

広いリビングに集合し、先の話を書ればアザゼルは何やら計算を始める。

「……人間界の時間で現在7月28日。

対戦日まで約20日か……」

「修行か？アザゼル」

俺がソファアに腰を埋めつつ訊けば、アザゼルは頷く。

「ああ、当然だ。

明日から開始予定ってところだな。

既に各自のトレーニングメニューは考えてある」

にやりと不敵に笑うアザゼル。

「へえ……？」

随分と手際がいいな？アザゼル」

「こいつらの修行は随分前から考えてたからな。

それがちよつとばかり早くなっただけだ」

懐から『オカルト研究部メンバー』と書かれたくたびれたノートを取り出したアザゼル。

「まあいい。

明日の朝、庭に集合だ。

そこで各自の修行方法を教える。

——覚悟しろ？短期間で強くなるんだ、生半可な覚悟なら死ぬぞ？」

『はい!!!』

リアス先輩を筆頭に、眷属は皆言葉を重ねて返事をした。

——と、そこへグレイファイアが現れる。

「皆さま、温泉のご用意ができました」

どうやら息抜きの時間がやってきたようだ。

## 第79話

オツス！兵藤一誠だ！

リアス部長の家にある庭の一角。

そこにはポツツリと純和風の温泉が存在していた。

俺は早速アザゼル先生と共に浸かって、疲れを癒している。

「——旅いゆけばあゝ♪」

温泉に浸かりながら鼻歌混じりな墮天使総督さま。

その背には黒い6対12枚の翼も全開にしていた。

「ハハハハ、やっぱり冥界——地獄といえば温泉だよな。」

しかも冥界でも屈指の名家グレモリーの私有温泉とくれば銘泉も銘泉だろう」

なんとも温泉に慣れている総督さまだなあ……。

そういえば初めて会った時も依頼で会ったときも浴衣を着ていたよな……もしかして日本文化好き？

「ふいい〜……」

何はともあれ、俺は頭にタオルを乗せ直し、まったりと湯に浸かっていた。

「ん？そっぴいや士織とギヤスパーの奴はどうした？」

「確かにいませんね……まだ来てないんじゃないですか？」

辺りをキョロキョロと見渡し、アザゼル先生に言う。

——と、そんな時、入口付近でウロウロしている人影と、それを連れ出そうとする人影とが見え隠れしているのが俺の視界に入った。

「ほら、折角の温泉なんだから入らねえと意味ねえだろ？」

なんなら今からでも女湯の方に行くか？」

「そ、それは……いい、イツセー先輩と入りたいのでお断りしますううう！」

ウロウロしていた人影——ギヤスパーが、意を決したかのよ

うな表情でこちらに走ってくる。

——しかし、此処は温泉。

濡れている床をそんな風に走ればどうなるか。

「——きゃっ?!」

そう、滑って転んでしまうのだ。

ギヤスパーは可愛らしく悲鳴をあげて顔から倒れ込みそうになる。

俺が急いで助けようとしたがこの湯船に浸かっている状態では間に合わない。

これは万事休すか……そう思った時、もうひとつの人影がギヤスパーを抱きとめ、床との接触を回避させた。

「まったく……気をつけろよ? ギヤスパー」

「あ、ありがとうございます……土織先輩い……」

涙目のギヤスパーは受け止めてくれた土織に感謝を述べてペタンと座り込んだ。

「ほら、取り敢えず身体を流すぞギヤスパー。」

温泉に入る前のマナーだ」

「わ、わかりました」

土織の言葉に頷いたギヤスパーは軽く身体を流した後に俺とアザゼル先生が浸かる湯の方へと向かってくる。

「……あ、あの……あんまり、見ないでください……」

タオルを胸の位置で巻いたギヤスパーは頬を赤く染め、恥ずかしそうに言う。

「お、お前な! そんなに恥ずかしいなら女湯の方に行けばいいだろ?!」

というか、結局お前は男と女、どっちとして扱えばいいんだよ!」

「い、イツセー先輩には女の子として扱って欲しいかもです……」

そう言ったギヤスパーは素早い動きで温泉に入ると、俺の傍へと近寄り、腕に絡みつく。

「……っ?!?!」

ぎゃ、ギヤスパー! お前、性別変化させただろ?!」

「そ、そんなことしてないですよお〜」

「な、ならなんでこんなにや、柔らかか……っ!」

腕に感じる確かな柔らかさ……これはどう考えても男の身体の感触なんかじゃない。

「い、イツセー先輩のえっちい……」

「んな……っ!」

口ではそう言っているものの、ギヤスパーは更に俺の方へと身体を寄せてくる。

こいつ、こんなに積極的な奴だったか?!

(お、俺の腕に柔らかい、それでいて張りのあるモノがああああッ!!

あ?!い、今なんかコリッて!コリッてしたあああッ?!

く、くそっ!!

さ、去れ、去れえええええ!!

——— 煩・悩・退・散ッッッ!!!

「——— おい見ろよ士織。」

お前の弟おもしろえ事になってるぜ?」

「案外初心な奴だろ?」

聞こえてくるのは笑い合う2人の——— 士織とアザゼル先生  
のからかうような言葉。

「ありや女への耐性皆無だな。」



ハニートラップとか喰らったらイチコロじゃねえか？」

「それなら安心しろ。」

悪意には敏感になってるからハニートラップくらいなら気づくさ。  
今回は仲間のギヤスパーからの純粋な好意だから無碍にもできない  
くなってるんだろ」

「はっ！」

士織が言うならそうなんだろうな」

「そ、そこお!!」

士織もアザゼル先生もニヤついた顔をやめろくださいっ?!」

未だ身体を寄せてくるギヤスパーに思考が沸騰しかけながらも2  
人に向かって叫ぶ。

「はいはい、お楽しみください」

肩をすくめてやれやれと言わんばかりの表情の2人はまるで打ち  
合わせでもしたかのように同時に言い放った。

「ハモるなああああ!!!」

—— 閑話休題。

—— Side 士織

「ふいい〜……」

日頃の疲れを落とすように温泉に浸かっていると、アザゼルの視線  
が俺に向けられているのに気がつく。

「……なんだよアザゼル」

「お前ってちゃんと男だったんだな」

「くだらねえこと言ってるんじゃないよ……」

ついついため息をもらしてしまう。

今までも言われ続けてきた言葉ではあるが、その言葉にはなれるこ  
とのない、何とも言えない感覚がある。

「そういえば士織。」

「お前、木場と付き合ってるんだってなあ？」

「……そのニヤついた表情を止めろアザゼル」

「はっはっは！」

「やっぱりそんなナリしても女に興味があるんだな」

「俺の肩に腕を回し、楽しそうに笑うアザゼル。」

「その姿は何処と無く酔っ払った親戚の叔父さんを彷彿させるものだった。」

「しかし、次の瞬間には真顔になり顎に手を当てる仕草を見せる。」

「……お前、本当に男だよな……？」

「今まで俺が抱いてきた女よりも格別に女らしい身体付きだぞ……？」

「……アザゼル、お前、ぶち殺すぞ……？」

「冗談の余地すら残さないアザゼルの真面目な声に、俺は拳を握りしめて睨みつける。」

「いや、だけだよ！」

「これで貧乳の女だって言ったら誰もが信じるレベルだぞ?!」

「オンナ遊びのプロの俺が言うんだから間違いないねえ！」

「……俺から離れるアザゼル。」

「——身の危険を感じるからな」

「肩に回された腕から逃げ出し、アザゼルから一定の距離を取る。」

「アザゼル先生っ！」

「土織くんに手を出したら許しませんよ!!」

「……ぶっ飛ばします」

「アザゼル殺す……」

「女湯の方からは祐奈、小猫、オーフィスの声が聞こえてくる。」

「どうやらこちらの会話は向こうに丸聞こえだったようだ。」

「冗談だジョーダン！」

「お前も本気にしてんじゃねえよ！」

「そう叫んだアザゼルは肩をすくめて、ため息を吐き出した。」

「そして、いきなりニヤリとイタズラを思いついた少年のような表情」

を浮かべて再び俺の方へと近づいてきた。

「……なんだよアザゼル。」

俺に近づくなつて言っただろうがぶつ殺すぞ」

「おいおい、そう邪険になるなよ土織。」

ちよつとばかりイイコトしてやろうつてのによ?。」

「悪い予感しかしねえからパスな」

本当に悪い予感しかない。

アザゼルがこういう顔をする時はろくなことがないのだから。

「まあまあ、遠慮すんな——よつ!!」

俺の腕を掴んだアザゼルは、力任せに俺を投げ飛ばした。

「あ、アザゼルコノヤロオオオオツツ!!」

——宙を舞う俺。

そして——祐奈と目が合った。

つまり、俺は女湯の方へと投げ飛ばされたのだ。

「……地味に痛てえ……」

背中から湯に着水した俺は立ち上がって口を開いた。

視界に入つて来たのは————当たり前だがリアス先輩を初めとする女子組たちの裸。

タオルの1枚でも巻いていればいいものの、全員もれなく全裸だ。

「あら、土織。」

アザゼルに飛ばされてきたのね?」

何も変な事はされなかった?」

「あらあら、うふふ……本当に女の子みたいですね」

「……あゝ……隠すくらいしたらどうだ?」

俺が女湯に飛ばされてきたというのに、誰1人として身体を隠そうとはしないという実態に苦笑いを隠しきれない。

「隠さないといけないほど自信の無い身体はしていないつもりよ?」

逆に胸を張るリアス先輩。

「私も土織くんにならいいですわ、うふふ……」



「——そんな事言わずに一緒に入りましょう?」

「うおっ?!」

背後から朱乃先輩に抱きつかれたことによりバランスを崩してお湯にダイブしてしまう俺。

「そうね、あまりあなたとはスキンシップが取れていないから……この際皆で土織の身体を洗ってあげましょう♪」

リアス先輩の提案に俺は顔が引き攣った。

「ちよ、ちよつと待て!」

そういうのは一誠の役割だろ!?

そもそもリアス先輩はライザーに怒られるぞ!!」

「あら、大丈夫よ。」

「私はしないから♪」

「なるほどそれなら大丈夫——じゃねえよ?!」

「……土織先輩大人しくしてください」

「そ、そうだよ土織くん!」

大人しく僕たちに洗われるんだ!」

「うふふ……髪の毛の手入れ教えてあげますわ」

背中に朱乃先輩、右腕に祐奈、左腕に小猫が引っ付き、俺を逃がさないようにと拘束する。

「お前ら離れろ——って強っ?!」

いつの間にそんな力を……っ?!」

「……火事場の馬鹿力です」

「こんな時に発揮してんじゃねえよ!!!」

じたばたともがくものの、何故か逃げ出すことができない。  
必死に逃げ出そうとしていると、視界が何か柔らかかなもので塞がれた。

「我も手伝う」

「オーフィス!?!」

どうやらこれはオフィスのお腹だったようだ。

「楽しそうね、土織」

俺には見えないがきつと満面の笑みを浮かべているであろうリアス先輩の声が聞こえてくる。

「——アザゼル覚悟してろよオオオオツツ!!!」

この状況の元凶に復讐を誓い、俺は再びもがくのだった。

## 第80話

どうも、兵藤士織だ。

温泉での騒動から次の日。

俺とアザゼル、リアス先輩の眷属はグレモリー家の広い庭の一角に集まっていた。

服装は全員動きやすさ重視のジャージ。

庭に置かれているテーブルと椅子に座って修行開始前のミーティングを行っている。

資料やデータらしきものを手にしたアザゼルが口を開く。

「先に言っておく。

今から俺が言うメニューは将来的なものを見据えてのトレーニングメニューだ。

直ぐに効果が出る者も居るが、長期的に見なければならぬ者もある。

ただ、お前らは成長中の若手だ。

方向性さえ見誤らなければいい成長をするだろう。

——さて、まずはリアス、お前だ」

アザゼルが最初に呼んだのはリアス先輩。

「お前は最初から才能、身体能力、魔力全てが高スペックの悪魔だ。

それに加えて極短期間だが士織との修行で戦術面も補われている。

このまま普通に暮らしてもそれらは高まり、大人になる頃には最上級悪魔の候補となっているだろう。

——だが、将来よりも今強くなりたい、それがお前の望みだな?」

「ええ。

眷属たちよりも圧倒的に弱いというのは示しがないわ。

それに、絶対に負けたくないもの」

力強く頷くりアス先輩の瞳には決意の炎が灯っていた。

「なら、この紙に記してあるトレーニング通り、決戦直前までこなせ」

アザゼルから渡された紙を見てリアス先輩は首を傾げる。

「……これって別段凄いトレーニングとは思えないのだけれど？」

「そりゃそうだ。」

基本的なトレーニング方法だからな。

お前はそれでいいんだ。全てが総合的に纏まっている。

1番心配な戦術面も強化されたお前はその基本的なメニューをこなすだけで力が高められる。

……そうだな、後は1日に1回以上、俺か士織とチェスをしろ。

決戦当日までに俺か士織に一勝しなけりや……そうだな、サーゼクスにでもお前の黒歴史聞いてばらまいてやる」

「わ、わかったわ!!!」

鬼気迫る表情とはこのことだろうか。

リアス先輩の真剣な表情には焦りも色濃く出ていた。

「次に朱乃」

「……はい」

アザゼルから呼ばれるものの、朱乃先輩は何処か不機嫌そうだ。

朱乃先輩はどうにもアザゼルのことを苦手、もしくは嫌っている節がある。

それはやはり父親絡みでなのだろうか？

「お前は自分の中に流れる血を受け入れろ」

「——ッ!!!」

「フェニックス家との1戦、記録映像で見せてもらったぜ。」

なんだありや……土織に習ったつつう魔法がなけりや負けてたのは確実。

本来のお前のスペックなら敵の『女王』<sup>クイーン</sup>を苦もなく打倒できた筈だ。

——何故、墮天使の力を振るわなかった？

雷だけでは限界がある。

光を雷に乗せ、『雷光』にしなければお前の本当の力は発揮できない」

アザゼルの言葉は的を射ている。

俺が教えたあの魔法にもし、光を乗せることが出来るのなら、威力



は数倍、数十倍にまで膨れ上がり、それこそ『必殺技』と呼べるものになるだろう。

「……私は、あのような力に頼らなくても……」  
「否定するな。」

自分を認めないでどうする？

最後に頼れるのは己の体だけだぞ？

否定がお前を弱くしている。

……辛くとも苦しくとも自分を全て受け入れろ。

自分自身を受け入れることができない奴に強さを求める資格はない。  
い。

決戦日までそれを乗り越えてみせろ。

じゃなければ、お前は今後の戦場で邪魔になるだけだ。

——『雷の巫女』から『雷光の巫女』になってみせろよ」

「……………」

アザゼルの言葉に朱乃先輩は応えなかった。

しかし、やらなければいけないという事は朱乃先輩自身がよくわかってはいるはずだ。

「次は木場だ」

「はい」

「まずは『禁手』バランス・ブレイカーを解放している状態で1日保たせてみる。

それになれたら実践形式の中で1日保たせる。

それ続けていき、状態維持を少しでも長く出来るようにしていくのがお前の目標だ。

後はリアスのように基本トレーニングをしていけば十分に強くなれるだろうさ。

セイクリッド・ギア 神器の扱い方は後でマンツーマンで教えてやる。

「……剣術の方はお前の師匠にもう1度習うんだったな？」  
「ええ。」

僕の剣が抜刀術、つまりスピードに特化したものになったと言うと、それは嬉しそうに1から教えてあげると言われました」

祐奈に剣の師匠がいたのは聞いていたが誰なのかまでは聞いてい

なかったのを思い出す。

抜刀術を使うようになった祐奈がさらに強くなるかはその師匠にかかっているな……。

「次、ゼノヴィア。」

お前は『デュランダル』を今以上に使いこなせるようにすることと  
——もう1本の聖剣になれてもらうことにある」

「もう1本の聖剣?」

「ああ、お前は元々二刀流の剣士だろ?」

特別な剣だが、使いこなせばお前の強さは跳ね上がるだろうよ」  
首を傾げているゼノヴィアにアザゼルはにやけ顔で言った。

そして、直ぐにその笑みを止めたかと思えば、一誠にくつつくギヤスパーに視線を向ける。

「次にギヤスパー」

「は、はいいいいい!」

一誠に尚一層強く引つつくギヤスパーだったが、隠れる事はなく、アザゼルの方を向いていた。

「そうビビるな。」

お前の最大の壁はその恐怖心だ。

何に対しても恐怖するその心身を一から鍛えなきやならん。

一誠の血を飲んだ時のお前の積極性を飲んでいない状態でも出せるようになるのが今後の目標だな。

安心しろ、お前専用の『目指せ!一誠攻略計画!』なる積極性が増すプログラムを組んだからな」

「は、はいいいいい!!」

全身全霊、当たって砕けろの精神で頑張りますううう!!」

「——つて!」

その計画なんですかアザゼル先生?!

今まで黙って聞いていた一誠が叫ぶ。

「あん?」

ギヤスパーのやる気を出させるためのメニューだ気にするな。  
それともなにか?

せつかくやる気になったギヤスパーにこの計画はなしだつて言うのか? ん?」

「……わ、わかりましたよ……なんでもないです……」

渋々といった様子の一誠。

アザゼルは悪い笑みを浮かべていた。

「さて、どんどん行くぞ。」

次はアーシア」

「は、はい!」

アーシアも気合が入っているようで、やる気満々の表情を浮かべている。

「お前も基本的なトレーニングで、身体と魔力の向上。」

ついでに土織に教えてもらったっていう魔法にも慣れておけ。

あれが完璧に使えるのと使えないのじやかなりの差があるからな。

だけど、今回のメインは———神器の強化だ」

「アーシアの神器は最高ですよ?」

触れるだけで……あ……」

一誠は自分で喋っていて気がついたのだろう。アーシアの神器の決定的な弱点に。

「気がついたみたいだな。」

そう、アーシアの神器の回復能力の速度は大したもんだ。

だがな、味方が怪我しているのにわざわざ至近距離まで行かないといけないってのは不便だ。

回復役つてのは何時の時代も狙われやすく、真つ先に落とされるんだよ」

自己防衛が可能つてなら話は別だが———アザゼルはそう呟く。

「つ、つまり私は離れたところから皆さんを回復できるようになればいいんですか……?」

アーシアは何かを飛ばす様なジェスチャーを交えて言う。

それに対してアザゼルは満足気に頷いて口を開く。

「ああ、直接飛ばす感じだな。」

それさえ出来れば活躍の場が格段に増えるぞ？

そして、グレモリー眷属としての戦略の幅が格段に増す」

「は、はいっ！

がんばりますっ!!」

皆からの期待を受けるのが嬉しいのだろう。アーシアは更に気合を入れ替えていた。

「次は小猫」

「……はい」

小猫は妙に張り切っていた。

その表情からは焦りを感じる。

「お前は申し分ないほど、オフセンス、ディフェンス、『戦車』<sup>ルック</sup>としての素養を持っている。身体能力も何の問題もない。

——だが、リアスの眷属には『戦車』<sup>ルック</sup>のお前よりもオフセンスが上の奴らばかりだ」

「……わかっていきます」

アザゼルのハッキリとした物言いに小猫は心底悔しそうな表情で俯く。

「リアスの眷属でトップのオフセンスは一誠、そしてその次に木場とゼノヴィアだ。

赤龍帝としての力を使いこなして新たな進化を果たした一誠、

バランス・ブレイカー

禁手<sup>の</sup>の聖魔刀、聖剣デュランダル、どれも一級品だ。

……小猫、お前も他の連中同様、基礎の向上をしておけ。

その上でお前が自ら封じているものを晒けだせ。

朱乃と同じだ。自分を受け入れなければ大きな成長なんて出来やしねえのさ」

「……」

アザゼルの言葉に小猫は何も答えなかった。

小猫の抱えているソレは俺がどうこう言うものではない。

俺は小猫の頭を撫でようとして払いのけられる。

険しい表情で俺を睨みつけているようだ。

「……慰めなんて——」

「何をそんなに焦ってんだ？小猫」

小猫にそう言つてやれば顔を逸らして俯く。溜息を一つ吐き出した俺は腕を組んで口を開いた。

「焦ったところで何も変わりやしねえよ。

落ち着いて、考えろ小猫。

——お前に出来ることは何かを」

「……………はい」

それだけ消え入るような声で呟いた小猫の表情は未だに険しいものだった。

「……………さて、最後はイツセー。」

お前は…………ちよつと待つてろ。遅れてるみたいだからな。

他の奴らは早速修行メニユーをこなせ。

時間は待つてくれないぞ？無駄に過ぎすも過ぎさないもお前達次第だ」

「……………はい！……………」

数名を除いた気合の入った声の後、各々メニユーをこなすためにこの場を後にしていった。

「……………それで、俺の修行つて何なんですか？」

この場に残ったのは俺と一誠とアザゼルのみ。

一誠は気になっていたのであろう事柄について質問する。

「それなら……………よし、来たぞ」

空を見上げるアザゼル。

一誠と俺はアザゼルと同じように空を見上げた。

視界に映ったのは何か巨大な影。

こちらへ猛スピードで向かってきている。

それは地響きと共に目の前に飛来してくる。

土煙が舞い上がり、それが収まった後にいたのは——巨大なドラゴン。

「ど、ドラゴン！」

「そうだイツセー。こいつはドラゴンだ」

アザゼルは満足気に頷き、一誠は瞳をキラキラと輝かせていた。

「——アザゼル、良くもまあ悪魔の領土に堂々と入れたものだな」

ドラゴンは口を端を釣り上げて言う。

「ハッ！ちゃんと魔王さま直々の許可を貰って堂々と入国したぜ？」

文句でもあんのか？——タンニーン」

「ふん。まあいい。」

サーゼクスの頼みだというから特別に来てやったんだ。その辺を忘れるなよ、堕天使の総督殿」

「へいへい、感謝しとりますよー。」

——てなわけで、イツセー。

こいつがお前の修行相手だ」

「このドラゴンが……俺の修行相手……」

一誠がタンニーンと呼ばれたドラゴンをじっくり観察していると語りかけるように口を開いた。

「久しいな、ドライグ。」

聞こえるのだろう？」

すると、一誠の左腕にブリステッド・ギア赤龍帝の籠手が出現する。

『ああ、懐かしいな、タンニーン』

「知り合いなのか？ドライグ」

辺りに響いたドライグの声に一誠は質問を投げかけた。

『ああ。こいつは元龍王の一角だ。』

【五大龍王】のことは以前話しただろうか？

こいつ——タンニーンは【六大龍王】だった頃の龍王の1匹

だ。

聖書に記された龍をタンニーンというのだがこいつをさしている』  
ドライグの説明にああ、あの話の時かと納得するように頷く一誠。  
「どうやらきちんとドライグと対話して色々な知識を取り入れているようだ。」

「タンニーンが悪魔になって『六大龍王』から『五大龍王』になったんだったな。」

「今じゃ、転生悪魔の中でも最強クラス。最上級悪魔だ」

「最上級悪魔という言葉に反応する一誠。」

ドラゴンで悪魔、その上最上級の地位にいと聞けばどれほどの実力なのかは分かるだろう。

『フレイズ・ミーティア・ドラゴン魔 龍 聖』タンニーン。

その火の息は隕石の衝撃に匹敵するとさえ言われている。

未だ現役で活動している数少ない伝説のドラゴンだよ。

悪いがタンニーン、この赤龍帝であるイツセーの修行に付き合ってくれ。

既にドラゴンの力を使っているからその精度をあげてやって欲しい。

「どうもこいつは燃費が悪くていけねえ」

「アザゼルはタンニーンにそう頼み込む。」

確かに一誠はちよつとばかり脳筋の気があるからテクニクを磨くのも悪くは無いだらう。

「タンニーンは嘆息して言う。」

「俺がしなくてもドライグが直接教えればいいのではないか？」

「それはもう限界値まで行ってる。」

「そこから実力をつけるのであればやはり——」

「なるほど、元来からドラゴンの修行と言えば実戦方式。」

「俺はこの少年をいじめ抜けば良いのだな？」

「ふふふ……ドライグを宿す者を鍛えるのは初めてだ」

「タンニーンは目を細めながら楽しげに言った。対する一誠もウズウズしている様子だ。」

『手加減などするなよ？タンニーン。』

今代の宿主……いや、相棒は今までの誰よりも才能は無いがそれを努力と発想で越えてきた男だ。

俺が保証してやる——相棒は過去から未来、全てを通してみたとしても最高の赤龍帝だ』

ドライグから発せられたその言葉に一誠は目を見開いて照れくさそうに頬をか搔いた。

「……ほう？ドライグにそこまで言わせるか少年……。」

——面白くなりそうだ」

一方、その話を聞かされたタンニーンは目を細めて一誠を視界の中央に収めている。

そんな様子のタンニーンにアザゼルが腕を組んで話しかけた。

「ヒートアップしてるとこ悪いがタンニーン。期間は人間界の時間で20日間ほど。

それまで存分にやってくれ。

イツセー、さらに強くなりたなら死ぬ気でやれ。

——ヴァーリは身内鼻肩を無しに見ても天才だ。

のんびりしていると直ぐに追い抜かれるぞ？」

「言われなくても」

アザゼルの焚き付けるような言葉に一誠は笑いながら答えた。

ヴァーリ程とまでは行かなくとも一誠も強者との戦いに胸を躍らせているんだろう。

「アザゼル。」

あそこに見える山でやってもいいか？」

タンニーンは遙か先に見える山を指して言う。

「お前ならそういうだろうと思って許可は取ってるぜ？」

「用意のいい奴め。」

——さて、行くとするか少年」

「おうーこれから宜しくお願いしますー！」

そう言い合った後、一誠はタンニーンの背に乗って修行場所となる山へ飛び立って行った。



「……俺も行くとするか……」

「何だ？何か用事でもあるのか？」

俺の呟きに興味を持ったのかアザゼルが反応する。

「俺もレーティングゲームに参加しないとイケないからな。」

——ただの眷属という名前の仲間探しだ」

未だに『<sup>ポーン</sup>兵士』の2枠しか埋まっていないのだから少しは探さないと行けないだろう。

美懂と絢奈には修行メニューは渡しているからたまに様子を見る来ただけでいいはず。

「へえ……お前の眷属か……」

「今回は1人、『<sup>ビショップ</sup>僧侶』候補が居るからそいつのスカウトだ」

実力などは噂に聞いただけだから本当に眷属にするかどうかは分からないが直接会ってみる価値はある。

「士織がスカウトするほどのやり手か……何て名前なんだ？」

興味津々の様子のアザゼル。

俺はニヤリと笑ってその名前を伝える。

——『シオン・エリファス・レヴィ』って知ってるか？」